1986

大井城跡
（黒岩城跡）

昭和61年３月

長野県佐久市教育委員会

円満寺
石並城
龍雲寺
王城
下小平
黒岩城
湯川

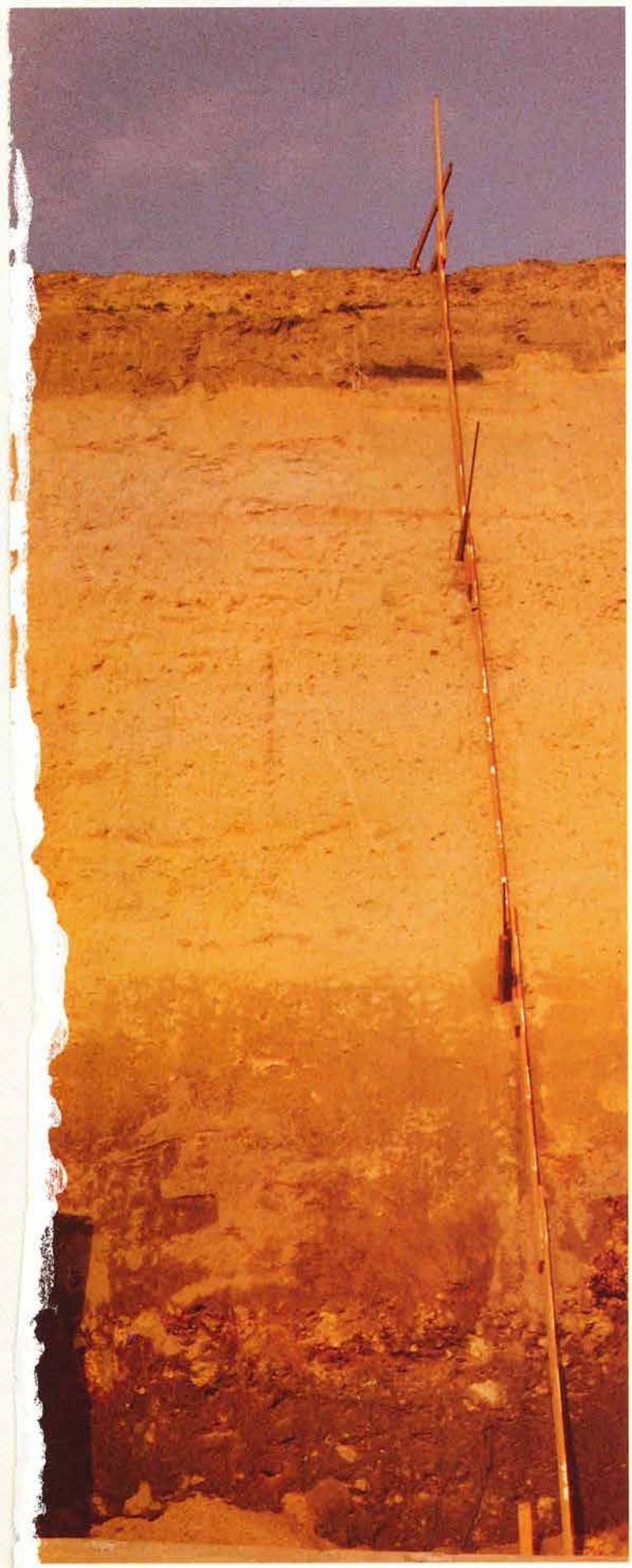
大井城跡（黒岩城跡）遺構空影

（株式会社協同測量社撮影）

大井城跡（石並城・王城・黒岩城）周辺空影

中央を蛇行する湯川は、王城の東で県道豊昇・草越・佐久線と交差し南流する。湯川がもっとも左方に寄った断崖上が石並城で堀割を挟んで王城、さらに、県道の下方が黒岩城である。

（株式会社協同測量社撮影）



大井城跡（黒岩城跡）地層断面
城郭の調査区域北端が重機によって削平され、新しく露頭した本文中第３図の軽石火砕流の地層断面写真である。

大井城跡（黒岩城跡）付近地層断面
黒岩城跡城郭の南側断崖下の本文中第１図のＢトレンチ断面写真。本文中第３図の不整合面つまり湯川層の上部から下方の地層状況である。上部から砂層、砂礫互層、礫砂層、砂層、火山灰・砂層、最下位に凝灰岩（含黒色泥炭）がみえる。

例　　言

1　本報告書は、長野県佐久市（民生部同和対策課）を事業主体者として建設省の国庫補助金により実施している大和町小集落地区改良事業に伴い、佐久市教育委員会が主体となり行なった大井城跡（黒岩城跡）発掘調査報告書である。

2　本調査は、建設省及び文化庁の国庫補助金事業として実施した。

3　昭和59年度は、５月～12月まで発掘調査を、出土遺物・図面等の一部の整理を１月～３月まで行なった。整理・報告書作成は昭和60年度に実施した。

発掘調査対象地は、次のとおりである。

●第Ⅰ地区（城郭）　長野県佐久市大字岩村田3444－１、3446、3447、3448－１。面積3,605㎡

●第Ⅱ地区　長野県佐久市大字岩村田3401－２、3402－１、3403、3418－２。面積7,375㎡

4　本報告書は調査関係者が分担して執筆し、文責を文末に記した。

5　遺構のトレースは大井和子・市川香里・橘詰信子が、遺物の実測・トレースは佐々木宗昭・小山岳夫・三石宗一・羽毛田伸博・森泉かよ子・臼田利恵・井出百合子・堺　益子・大井和子・樹沢壮一・小平武典・羽毛田卓也が担当した。

6　遺構写真撮影は、小山岳夫・島田恵子・佐々木宗昭・林幸彦が担当し、遺物写真撮影は畠山俊彦氏を煩した。

7　航空写真及び遺構全体測量図は、株式会社協同測量へ委託し佐久市教育委員会が一部改変した。

8　調査・整理期間中、次の諸氏から御教示・御協力を得た。記して感謝したい。

赤羽　一郎、浅野　晴樹、石野　博信、井上　喜久男、垣田　修次、川島　雅人、木内　捷、木下　亘、木村　鐵雄、児玉　卓文、昆野　靖、桜田　隆、佐藤　信之、田熊　清彦、坪井　清足、仁科　章、服部　充喜、畠山　俊彦、花岡　弘、前原　豊、宮崎　重雄、矢島　宏雄、山崎嘉津美、大和町区、荒宿区。

調査組織

事業主体者　長野県佐久市

事務局　佐久市民生部

民生部長	飯島　綏昌
	西沢　正己
同和対策課長	小林　三樹夫
〃　係長	戸塚　満
〃　係	高橋　好範
	飯島　雅則
	伊藤　明博
	土屋　俊重
	大井　清子

調査主体　佐久市教育委員会

教育長	大井　昭二
教育次長	森泉　郁太郎（昭和60年３月退任）
	柳沢　昇一（昭和60年４月就任）
社会教育課長	並木　進（昭和60年３月退職）
	茂木　多喜男（昭和60年４月就任）
社会教育係長	相沢　幸男（昭和60年３月退任）
	関本　功（昭和60年４月就任）
社会教育係	関本　功（昭和60年３月退任）
	白石　賢次（昭和60年４月就任）
	高橋　和敬（昭和60年４月就任）
	細萱　健一（昭和60年３月退任）
	林　幸彦
社会教育指導員	森泉　かよ子

調査会

会　長　　神津　武士（佐久市市長）

副会長　　前島　宗之（佐久市助役）

大井　昭二（佐久市教育長）

本沢　慎輔（岩手県平泉町教育委員会）　白倉　盛男（佐久市文化財保護審議委員）

由井　茂也（佐久考古学会会長）　小須田　盛凰（佐久市文化財保護審議委員）

井出　正義（小海町文化財保護審議会）　友野　一　（佐久市文化財保護審議委員）

平林　富三（佐久市文化財保護審議会会長）　木内　寛　（佐久市文化財保護審議委員）

小林　甚三郎（佐久市文化財保護審議会副会長）藤沢　平治（佐久市文化財保護審議委員）

大井　隆男（佐久市文化財保護審議委員）　臼田　都雄（佐久市文化財保護審議委員）

調査団

団　長　　大井　隆男

副団長　　藤沢　平治

担当者　　本沢　慎輔、井出　正義、木内　寛、林　幸彦

主　任　　森泉　かよ子、小山　岳夫（佐久埋蔵文化財調査センター）、佐々木　宗昭（60年度）

調査員　　井上　行雄、大井　今朝太、佐々木　宗昭、島田　恵子、三石　延雄　（以上、佐久考古学会会員）、三石　宗一（佐久埋蔵文化財調査センター）、高村　博文（佐久市教育委員会、佐久埋蔵文化財調査センター）、堤　隆（御代田町教育委員会）

調査補助員　堺　益子

発掘調査参加者

赤城幸子　赤城たま子　浅沼陽二　市川かおり　井出百合子　上原あや子　上原幸二　臼田悦子　臼田充文　浦野隆子　遠藤しづか　遠藤みつ子　遠藤幸弘　大井和子　小田川栄子　小田川良子　柏木三宏　金森茂敏　神部妙子　木内亜友美　木内和枝　木内政彦　工藤勇　工藤安彦　黒沢はる子　黒沢文子　小井土節子　小林清彦　小林俊介　小松信男　駒村英明　小山いづみ　小山栄次　桜井修二　佐々木春蔵　佐々木正博　佐藤桂子　佐藤正幸　里見一幸　清水亮　清水祐子　須藤久米子　高橋純子　武内広恵　田中夏江　土屋早苗　土屋岳史　塚田真雪　伴野剛　中沢美春　中島たか子　中島とよ子　中島文子　中島ひで子　中条しげ子　長坂美樹　並木ことみ　並木亮　橋詰勝子　橋詰けさよ　橋詰信子　花里好美　早川俊彦　原文子　藤田為敏　野田敏彦　星野あい　前島弘子　丸山勝子　御園孝子　溝尾俊雄　宮浦きよ子　桃井澄人　桃井毅　森田博美　森泉泰和　柳沢祥子　山崎かな江　山崎喜一　山崎きよい　山崎幸一　山崎せつ子　山崎徳次郎　山崎としの　山崎トミ子　山崎直　由井かつ江　由井整　依田洋一　長沼隆年　堺　益子

遺物整理・報告書作成参加者

浅沼陽二　浅沼ノブ江　井出百合子　臼田利恵　大井和子　大塚大作　神部妙子　金森茂敏　木内亜友美　木内和枝　木内一徳　木内政彦　棚沢壮一　小平武典　小林利鴨　小山いづみ　堺益子　桜井修二　桜井俊文　関口浩美　高木久江　高橋かおり　高橋純子　千葉博之　中山健児　長沼隆年　野田敏彦　橋詰勝子　橋詰信子　羽毛田卓也　林良一　細萱ミスズ　水沢教子　市川香里

凡　　例

1　本書では、遺構について次のように略号によって表示した。

H→古墳時代住居址、Ta→竪穴遺構、F→掘立柱建物址、D→土坑、M→溝状遺構、I→井戸址

2　遺構・遺物の縮尺は次のとおりであり．スケールを付した。

1）遺構　住居址・掘立柱建物址・溝状遺構→1/60、竪穴遺構1/40、竪穴遺構(一部)・土坑→1/60、カマド→1/30

2）遺物　中世陶磁器・土師質土器・金属製品・石製品・自然遺物→1/2、中世陶磁器の大形品・臼・擂鉢・凹石・古墳時代土師器・須恵器→1/4、銭貨・玉類→1/1。

3　挿図中におけるスクリーントーンは下記のものをあらわす。他は、図中に明示した。

1）遺構

→焼土分布範囲・カマド、 →炭化物分布範囲、 →灰分布範囲

2）遺物

→有機質付着範囲、 →土師器内面黒色研磨、 →須恵器断面、 →施釉範囲

→煤範囲

4　遺構の海抜標高は、各遺構ごとに水糸ラインの上に水糸標高を明記した。

5　重複遺構については上端のみを、遺構内における攪乱についても上端のみを細い実線で表示した。

6　写真図版の遺物の縮尺は、挿図縮尺と同一にした。

7　写真図版中の番号は、挿図番号と対応する。遺物番号は簡略化し、例えば、第10図1は10—1とした。

8　各一覧表の数値について、不明は—、現存値は〈　〉、推定値は（　）とした。

9　遺物の実測は第三角法を用いたが、適宜第三角法の応用で作図したものもある。

本 文 目 次

例言……

凡例……

第Ⅰ章　調査の経過…… 1

　第１節　本調査の経過…… 1

　第２節　遺物整理の経過…… 2

第Ⅱ章　大井城跡の概観…… 5

第Ⅲ章　層序…… 18

第Ⅳ章　第Ⅰ地区（城郭）の遺構と遺物…… 19

　第１節　中世の遺構…… 19

　　1　竪穴遺構…… 20

　　2　掘立柱建物址…… 73

　　3　土坑…… 76

　　4　溝状遺構…… 134

　第２節　中世の遺物…… 135

　　1　土師質土器…… 135

　　2　内耳土器…… 138

　　3　陶磁器…… 154

　　4　瓦器…… 155

　　5　石臼…… 163

　　6　石擂鉢・搗き臼…… 173

　　7　石製品…… 239

　　8　金属製品…… 263

　　9　坩堝・羽口・鉄滓…… 272

　　10　銭貨…… 279

　　11　その他…… 293

　第３節　弥生・古墳時代の遺構と遺物…… 296

　　1　D203号土坑…… 296

　　2　Ｈ１号住居址…… 297

　　3　Ｈ２号住居址…… 299

　　4　Ｈ３号住居址…… 310

　　5　Ｈ４号住居址…… 314

　　6　Ｈ５号住居址…… 317

　　7　Ｈ６号住居址…… 319

　　8　Ｈ７号住居址…… 320

　　9　Ｈ８号住居址…… 321

　　10　Ｈ９号住居址…… 324

　　11　H10号住居址…… 329

12　H11号住居址…… 331
13　H12号住居址…… 337
14　H13号住居址…… 339
15　H14号住居址…… 342
16　H15号住居址…… 343

第Ｉ章　調査の経過

第１節　本調査の経過

大井城跡総合調査は、昭和58年度に大井城跡及び大井氏関係文献史料集刊行、昭和59年度に黒岩城跡の城郭部分3,605㎡と東側断崖下の湯川に続く低地7.375㎡についての発掘調査および、大井城跡(石並城、王城、黒岩城)とその周辺地形２㎢の航空測量を実施した。さらに、昭和61・62年度は大井城と総称される３城の周辺を対象として遺構・範囲の確認を行なう。

昭和58年度

昭和59年２月より佐久市志編纂室と佐久市埋蔵文化財資料室において『四隣譚簸』・『千曲の真砂』等の文献より大井城跡及び大井氏関係の記事を拾うと共に古絵図等を複写し、順次編集し、印刷所へ送った。３月はゲラ刷りの校正と本調査へ向けての準備を行なった。３月31日『大井城―大井城関係文献史料集―』が刊行。

第１表　本調査経過表

地区名	第Ｉ地区（城郭）							第Ⅱ地区				
遺構名 / 年月日	杭打ち発掘準備	耕作土除去	遺構プラン確認	住居址（古墳時代）	竪穴状遺構	土坑	溝掘立柱建物址	トレンチ	掘削	井戸	水田址状遺構	土坑
昭和59年（1984年）5												
6												
7												
8												
9												
10												
11												
12												

昭和59年度

黒岩城跡の城郭南部3,605㎡とこの東側断崖下の低地7,375㎡を本調査の対象とした。城郭の調査区は、東から西へ０～14、北から南へあ～せとして、５ｍグリッドを設定した。

調査の方法については、下記のとおりである。

1　遺構確認面を可能な限り上層に求め耕作土層より手掘りで進めた。

2　プラン確認

3　遺構の掘り下げは、直交するベルトを残し、土層観察を行ないながら進めた。遺物は出土状態により分布図を作成した。

4　遺構の実測図は原則として縮尺1/20、付属施設等は縮尺1/10とし、簡易遣り方で測量した。

５月12日～16日、器材の点検・準備及び運般を行なった。

５月13日～16日、トレンチを設定し、城郭の土層を確認した。耕作土の深さにバラつきが認められた。

６月10日～20日、草刈りを全面的に行ない仮グリッドを設定した。トレンチ掘り下げも続行した。

６月21日～９月14日、各グリッドの耕作土の除去を行なう。８月下旬までほぼ全域を15cmほど掘り下げて、耕作土は除去できたが、褐色土層上でのプラン確認は不可能なため黄褐色土層上で確認した。この層より下層は極めて滞水性に乏しく、散水をしながらの作業でたいへん難行した。７月下旬より作業員の数が増して、ベルトコンベアの廃土運搬も急ピッチとなり置場に苦慮した。

10月からは古墳時代の住居址も随時掘り下げた。とりわけＨ２号住居址は炭化材の遺存状態が良好であったため多くの資料が得られた。

12月になると降雪があり、まず雪掻きを行なわなければならず、大きな障害となった。また、凍結にもたいへん悩まされシートの被覆作業もウェートを占めることになった。ようやく、全遺構の記録が終了したのは、12月28日であった。第II調査地区は、現況が水田のため重機によって掘削することとした。地層確認トレンチより現水田下に鉄分凝集層が認められたため全面を調査することとした。

第２節　遺物整理の経過

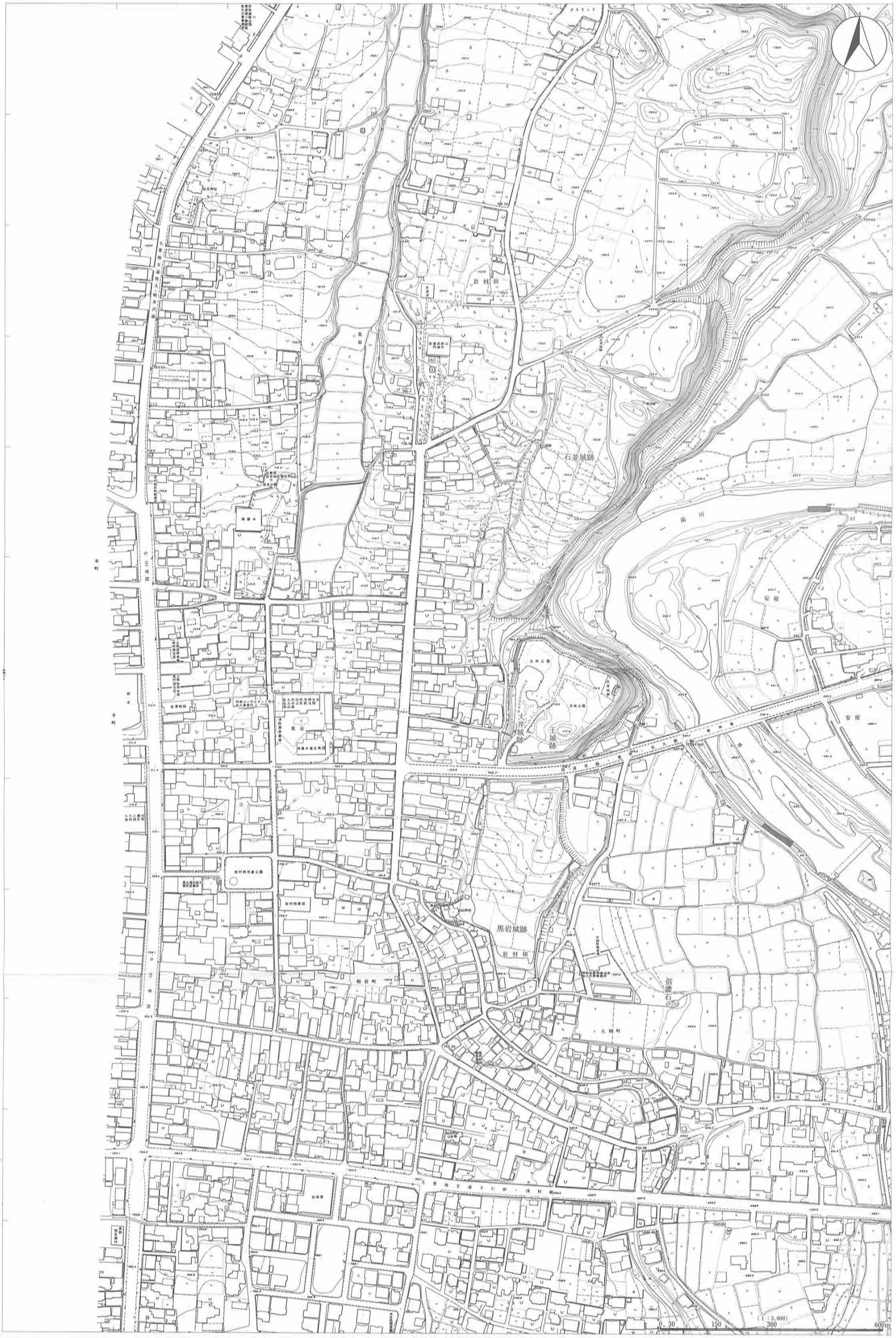
昭和59年度

調査が進むにつれ遺構数が並々ならぬ状況となり次年度の整理の困難が予想されたので、現場での作業と併行してできうる限り遺物の水洗いを行なうこととした。６・８月～11月に水洗いし、同時に註記も実施した。２月には、遺構図面修正と遺物復原も実施した。

昭和60年度

遺物整理については、水洗い・註記が前年度にほとんど済んでいたので、復原・実測作業を４月早々開始した。中世遺物では特に内耳土器に多くの接合がみられた。石臼や茶臼にも接合する個体があった。遺構図面修正は、350を越す遺構数なので多くの日数を費し、４月７日から６月10日の長きに渡った。下図作成もほぼ６月に終了した。遺物の実測は、５月４日から古墳時代の遺物より始め６月15日まで行なった。以後６月いっぱいは、中世の遺物実測を主として進めた。土師質土器小皿・陶磁器は100個体を越し、石臼・茶臼・擂鉢・凹石は、150余個体を数え、特に臼については、数面を表示したため予定よりかなり多くの日数を費した。７月になると他の遺跡調査で手不足となり、室内整理メンバーも全員動員されることになって９月まで一時中断した。再開した10月は、中世遺物実測等を継続し、年明けの１月は遺構図トレース、各種表作成を行なった。２月は遺構トレース、割付け、原稿執筆を行ない印刷所へ入稿した。３月は、原図の整理・収納、遺物の補修復原・収納作業を行なった。

（事務局）

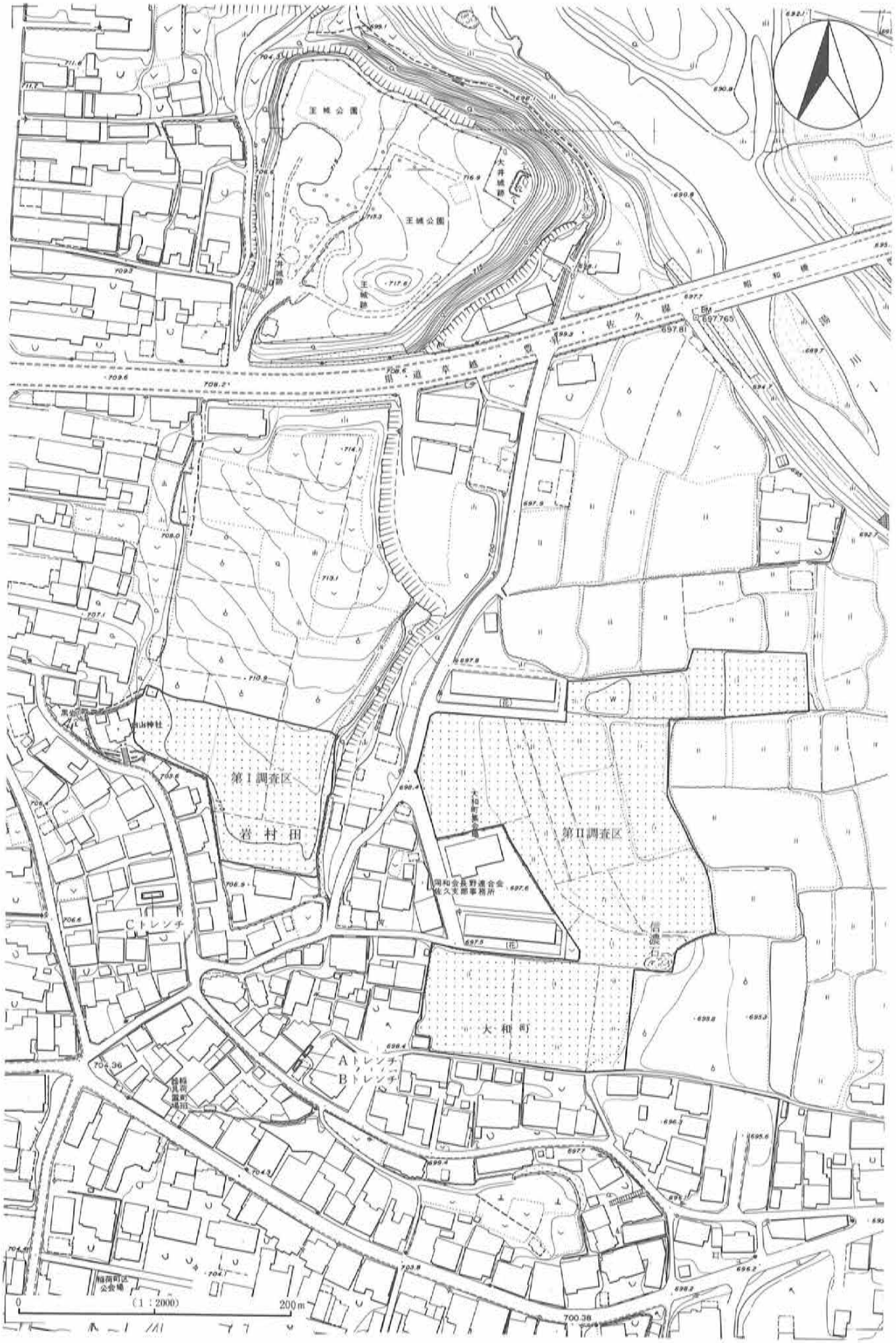


第6図　大井城跡周辺地形図（1：3,000）

第5図　佐久市内中世城館跡と中世遺物を出土する遺跡（1：50,000）

第2表　遺物整理経過表

作業工程 / 年月日	遺物水洗	遺物註記	遺物接合・復原	遺物実測図作成	図面修正下図作成	遺物トレース図版作成	遺構図トレース図版作成	写真図版作成	遺物写真撮影	原稿・表作成校正
昭和59年度（1984年）6										
8										
9										
10										
11										
12										
（1985年）										
3										
昭和60年度（1985年）4										
5										
6										
10										
（1986年）1										
2										
3										

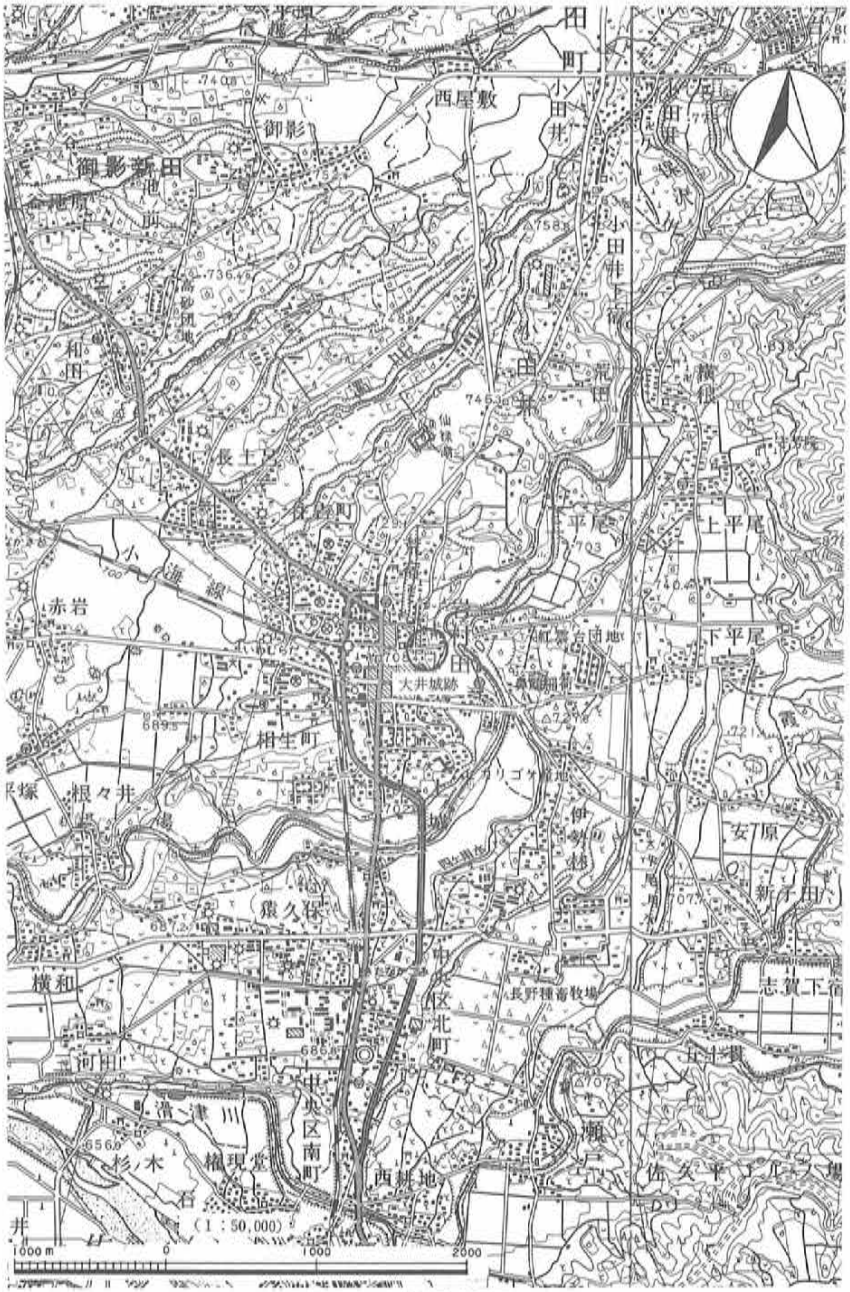


第１図　大井城跡発掘調査対象地

第II章　大井城跡の概観

大井城跡（黒岩城跡）の自然環境（主として地形、地質）

佐久平は千曲川最上流部にある高原性盆地で、標高では小諸市布引附近で550m、千曲川をさかのぼって南佐久郡佐久町附近の河床で750m、平均高度約700m、南北距離20km、東西幅は佐久市中央部で最大東西10kmの南北に長いほぼ菱形の高原平地で、その真中を南から北に向う対角線状上に千曲川が流れ下っている。左岸には片貝川・鹿曲川が、右岸には抜井川・雨川・内山川・志賀川・湯川の支流が流入して平地面全面を潤している。佐久平の四周は北は活火山浅間山（2560m）を南端とした上信越高原国立公園、東は妙義山（1104m）荒船山（1422m）を主峰とする妙義荒船佐久高原国定公園、南は金峰山（2595m）甲武信ヶ岳（2468m）を中心とした高山地帯の秩父多摩国立公園、西はフォッサマグナ（日本中部地溝帯）中心部に隆起噴出した赤岳（2899m）硫黄岳（2742m）蓼科山（2530m）霧ヶ峰・美ヶ森台地と続く八ヶ岳蓼科山火山列の八ヶ岳中信高原国定公園と国立27・国定52公園の中の四つの自然公園に囲まれた風致自然景観に恵まれた地域である。従って佐久平は僅かに北西偶の上田小県方面に続く部分のみ平担地続きで他の各方面は何れも山地に囲まれ他地域への交通は全て峠越しをしなければならなかった。現在はあまり利用されていないが古代から通行した伝承記録のある峠道を詳しく数えて見ると群馬県側18、埼玉県側２、山梨県側６、諏訪方面７、上小方面２計35にのぼっている。



第２図　大井城跡位置図

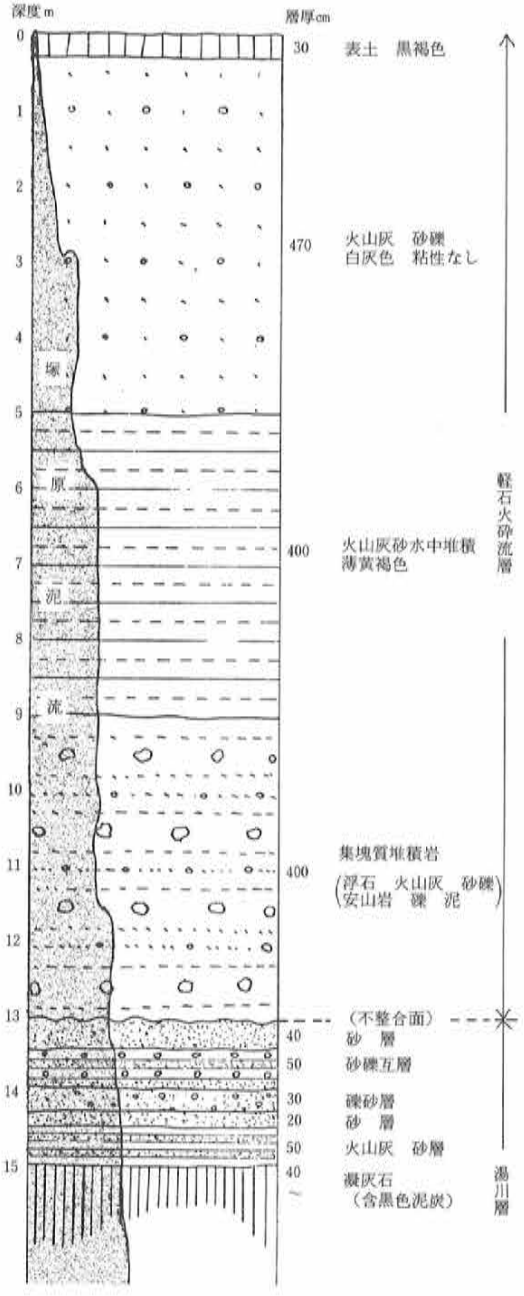
高原盆地佐久平は、年平均気温Ｃ10度内外・降水量年計1,000㎜内外で高燥な大陸性気候に恵まれ一年中晴天日が多く、日照時間・紫外線量も多く、牧畜・稲作の実績は古くから目覚しいものがあった事は次の記録が実証している。

奈良・平安時代から信濃勅使牧16の中の望月牧・塩野牧・長倉牧が佐久平周辺におかれ、とくに望

月牧は信濃産貢馬毎年80頭中20頭を出す最大の牧であった。以来、佐久産良馬は中世源平・戦国時代の歴史の中にみられ、明治以後大正・昭和の現代に至っても多くの軍馬供給地でもあった。養蚕・山羊・羊・家兎・アンゴラ兎の飼育が盛んであった事も、その風土が牧蓄適地の実証でもある。

弥生時代遺跡が佐久平全面に分布し、後期箱清水式土器の多い事は佐久の気象条件と千曲川本支流の水の安定と適温とが稲作を早く普及した事を物語っており、現在でも佐久平では連年冷害や旱害のないことと良質米の産地を自任し面積当り収量が全国最高水準を維持している事は、毎年秋の農林省発表全国稲作収量統計が明示している。これに関連する地域産業として佐久高原では水田における稲田養鯉業が江戸時代中期から成果を挙げ佐久鯉として内外に知られている。さらに、水と米に恵まれた佐久の千曲川流域では、古くから醸酒業が発達し、現在も15社の酒蔵が造石高の⅔を他地方に移出していることが風土性を表現している。

大井城跡（黒岩城跡）は、この佐久平中央部以北千曲川右岸の佐久市岩村田町内（旧中仙道岩村田宿）の千曲川支流の湯川沿い台地標高700mの景勝要害堅固な場所に立地している。鎌倉時代初期から佐久郡東半部の大井庄地頭職として栄えた大井氏の宗家が居城とした所で自然地形を利用した平山城で北から石並城・王城・黒岩城と堀切によって区画され、直北に直線上に配列されている。



第３図　大井城跡（黒岩城跡）附近地層断面図

大井城遺跡の立つこの岩村田の台地は佐久平東北部・千曲川右岸の活火山浅間山の南斜面末端の緩傾斜面から平坦面となった標高700m内外の古くから開拓された地域で浅間山麓の湧泉に源流を持つ湯川・湧玉川の用水にささえられた米作適地でもある。とくに湯川は浅間山の東裾から流出して南流、南軽井沢地域からの泥川と合流して西に向きを換え、御代田・岩村田地域では地殻変動の隆起運動の影響から下刻作用顕著な河岸段丘を二段に亘って形成し、しかも至る所で極端な蛇行曲流の河川となっている。大井城近傍では蛇行の川幅も広く、沖積期に入って地殻運動の沈降期の氾濫沈澱現象の結果による沖積層の数層の沈澱層が今回の発掘によって確認された。黒岩城東崖下水田面で中世までさかのぼると思われる水田址状遺構が確認された事は以上の地殻運動の隆起沈降を実証するものと考えられる。

旧南北郡境を流れる内山川と志賀川の合流した滑津川の北岸が15～20mの断崖をなしていることと浅間山南麓の御代田町――小諸市附近に美事に発達している「田切り」地形の成因はこの地殻運動と若い火山噴出物の地層の水蝕に対して抵抗の弱さを如実に示しているものである。

大井城跡は湯川の浸蝕差（高さ約15m）と浅い田切りに挟まれた台地で今回の発掘調査と基盤整備のためのボーリングによって地質構成も明らかとなった。その断

面図を示すと第３図のようである。この附近の地層は全て浅間火山の噴出物によって構成され、基盤の最下底部が第一次黒斑火山の大爆発による山体破壊の大熱泥流（塚原泥流）が骨格をなし黒色集塊岩の頂上部がここにも姿を残し黒岩城の命名の基にもなっている。その上部に黒斑火山の発達過程に噴出した多量な火山灰砂礫火山弾などの湖成堆積物が火山活動の盛衰を明示するように水平互層を繰返す湯川層が一部に黒色泥炭層・褐鉄鉱層を挟んで重なっている。それより上部には第二次前掛火山の噴出物の降下軽石・スコリヤ・火砕流が大別して三回厚く不整合に被って地表面を形成している。大井城の立つ佐久平北東部は全面的に洪積期以後現在も火山活動を続けているわが国で最も若い火山浅間山の噴出堆積物分布地帯である。

（白倉　盛男）

大井城跡（黒岩城跡）の歴史環境

千曲川の上流にあたる佐久地方には、小諸市・佐久市の２市、軽井沢・臼田町など７町、北御牧村・八千穂村など７村、計16市町村が含まれる。これらの市町村行政区画は、千曲川沿いに東西に細長い形状をもっていて、千曲川と平行して南北に佐久地方を縦断する佐久甲州街道（国道141号線）によって相通じている。東と南を関東山地、西を八ヶ岳・蓼科山に囲まれ、北関東及び松本・諏訪・伊那・甲府地方とは、幾つもの峠越えで結ばれる。古くは古東山道、東山道、新しくは中山道が、東国と東海・畿内を継ぐ政治・経済・文化上重要路線であって、佐久平の北部を東西に横断している。佐久地方から北関東地方への峠越えは、入山峠・香坂峠・矢川峠・内山峠・田口峠・余地峠等があり、南の甲府盆地へは川上村の信州峠や野辺山高原平沢峠越えで、上小地方や善光寺平へは千曲川の流路に沿って通じる。この地方南端甲武信岳から発する千曲川の両岸には、２～３段の河岸段丘がみられ下流するにつれその規模は大きくなる。さらに、千曲川に東西方向から流れ入る中小河川は、狭長の河岸段丘を形成している。このような佐久地方には、原始・古代から中世にかけて実に多くの遺跡が存在し、わが国の原始・古代史を解明するにあたって学史に名高いものも数多くある。

旧石器時代、縄文時代早期・前期の遺跡は、標高800mから1,300mの千曲川上流部や八ヶ岳・蓼科山麓、浅間山南麓、関東山地西麓に多く分布[註1]し、縄文時代中期から後期の遺跡は千曲川に注ぐ中小河川の750m～850m以上を測かる河岸段丘上や台地上に顕著な分布を示している[註2]。その後、弥生時代になって水稲耕作が生産の主体となるにつれ、冷涼ということに起因するのだろうか標高800m以上の地域の遺跡の存在は希になり[註3]、この傾向は古墳・奈良時代と続く[註4]。ここに再び多くの遺跡が認められるようになるのは、平安時代になってからである[註5]。佐久地方の南部と北東部のこのような状況は、水稲耕作を生産主体とする時代にあっては、当然のことであろう。そして散発的に採集される土器や磨製石鏃、１～２棟の住居址は、低標高の地帯に形成された集落址の人々とは異った生産形態（狩猟など）等を営んでいた人々の存在が想定できよう。

弥生・古墳時代の遺跡は、佐久地方の南部では千曲川の流域が拡がりをみせ、東から抜井川、西から北沢川が千曲川に合流する佐久町より下流に、北部では浅間山南麓に放射状に展開する「田切り地形」の850m以下の地域により濃く分布する。このような遺跡の南北のあり様は、佐久地方の古墳の所在南北限[註6]と一致する。現在の水稲栽培のでき具合もほぼこのあたりを境としており、低所の野沢平が冷害気味の時、南北の850m以上は、重い冷害となる。

野沢平には千曲川と平行して北流する片貝川があって、両河川に挟まれる地帯には、南北に長い帯状微高地が存在する。この微高地上には古墳・奈良・平安時代の集落遺跡が検出されている。９遺跡が調査されているが、

縄文時代及び弥生時代の住居址はいまだに１棟も認められていない。近年まで佐久地方の弥生時代の代表的な埋蔵地と考えられていたのであるが、以外な結果である。弥生時代の集落は、片貝川流域の低湿地に臨んだ野沢平の西部に位置する河岸段丘上や舌状台地上に存在する。発掘調査された小宮山の後沢遺跡(註7)、根岸の舞台場遺跡(註8)と西裏遺跡群西裏・竹田峯遺跡(註9)からは、中期末～後期の集落が検出されている。この他にも、既出遺物や詳細分布調査(註10)の成果から佐久市内の千曲川川西には38箇所の弥生時代の遺跡が知られているが、いづれも規模が小さい。西裏・北裏遺跡群は、弥生時代中期末から後期、古墳時代の継続的集落で、面的な拡がりと遺構の密集度からも片貝川流域の中心的遺跡である。古墳時代になって野沢平の帯状微高地上に集落が形成されるが、４・５世紀代の集落はまだ検出されず、微高地上の西端で和泉期の土器の出土(註11)、市道遺跡で１棟の住居址他が知られているだけ(註12)である。６世紀の鬼高期になると現在の三塚・桜井・跡部・下県を中心に集落が形成され、奈良・平安時代もほぼ同様なあり方である。古墳～平安時代の片貝川流域以西は、弥生時代の遺跡分布に似るが、平安時代中期以後は谷の奥地や高所にも数が増える(註13)。

従来考えられてきた水田可耕地としての片貝川流域の低湿地は、弥生時代中期末から古墳時代前期においてはごく一部が利用されたにとどまり、可耕地としてより拡大するのは古墳時代鬼高期以降である。鬼高期には、さらに、微高地上の低地部も可耕地として考えられるが、集落の数や規模からは飛躍的な面積の増加は考えられない。ただ、片貝川以西でみられた平安時代の遺跡の小規模・数の増加という現象は、この微高地上でも認められる。平安時代になってより上流にあたる儘田遺跡や白拍子遺跡群、下町屋遺跡がみられる。

この野沢平および片貝川以西の地区の古墳は、蓼科山塊が沖積平坦地に突き出す尾根の先端やその山腹などに

第４図　大井城跡周辺遺跡分布図

第3表　大井城跡（黒岩城跡）周辺遺跡一覧表

No.	種別	遺跡名	所在地	時代	備考
1a	城郭	石並城	岩村田字石並他	弥生～中世	
1b	〃	王城	〃　字古城	〃	昭和54年度公園化に伴い一部調査
1c	〃	黒岩城	〃　〃	〃	昭和55年度県道拡幅分調査
2	集落址	周防畑遺跡群	長土呂字周防畑・渋右衛門他	弥生～平安	昭和54・55年度一部調査
3	〃	長土呂遺跡群	〃　字長土呂隠し・上聖原他	〃	
4	館跡	長土呂館跡	〃　字城	〃	
5	城郭	曽根新城跡	岩村田字下穴虫	古墳～中世	
6	集落址	枇杷坂遺跡群	〃　字枇杷坂・久保田頭他	弥生～平安	昭和53・55・58・60年度一部調査
7	散布地	中久保田遺跡	〃　字中久保田・下久保田他	〃	
8	集落址	岩村田遺跡群	〃　字六供後・六供・新町他	弥生～中世	昭和59・60年度一部調査
9	包蔵地	西赤座遺跡	〃　字西赤座	弥生～平安	
10	集落址	栗毛坂遺跡群	小田井字前藤部・岩村田字柳田他	〃	昭和58・60年度一部調査
11	包蔵地	跡坂遺跡	〃　字下金井・横根字島原他	〃	
12	〃	濵石遺跡	上平尾字濵石・中川原他	〃	
13	〃	東大久保遺跡群	〃　字東大久保・塚畑他	縄文～平安	
14	集落址	円正坊遺跡群	岩村田字円正坊・清水田他	〃	昭和59年度一部調査
15	〃	下小平遺跡	〃　字下小平	弥生～平安	昭和55年度一部調査
16	包蔵地	上小平遺跡	〃　字上小平	平安	
17	〃	桟敷遺跡	安原字桟敷	〃	
18	〃	西大久保遺跡群	上平尾字西大久保・下平尾字六間他	縄文～平安	
19	集落址	北西久保遺跡	岩村田字北西久保	弥生～中世	昭和44・45・54・57・60年度調査
20	〃	一本柳遺跡群	〃　字東一本柳・下福王寺他	〃	昭和43・47年度一部調査
21	〃	上の城遺跡群	〃　字丹過・上の城他	縄文～平安	昭和48・54・58年度一部調査
22	〃	蛇塚A遺跡群	安原字蛇塚・西大久保他	平安	
23	包蔵地	戸屋敷遺跡群	〃　字戸屋敷・猫久保他	〃	
24	〃	東村遺跡群	下平尾字東村・東前原他	縄文～平安	
25	集落址	蛇塚B遺跡群	新子田字蛇塚・野馬久保他	平安	昭和54・58年度一部調査
26	〃	筒畑遺跡群	安原字筒畑・池畑・下池他	縄文・平安	昭和60年度一部調査
27	城郭	燕城跡	〃 字城山・城裏	中世	
28	包蔵地	筏室遺跡群	〃 字筏室・城前・城山・城裏	古墳～平安	

表中のNoは、第4図の遺跡No.と一致している。

第3表・第4表は、『長野県の中世城館跡分布調査報告書』(1983　長野県教育委員会)、『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』(1983　佐久市教育委員会)による。

第4表　佐久市内中世城館跡と中世遺物が出土する遺跡

No.	名称	所在地	立地	形状	存続期間（推定伝承）	備考　（推定伝承）
1	大井城	岩村田字古城他	台地	複郭	（鎌倉～戦国）	石並・王城・黒岩城を総称。県史跡。大井氏
2	鷲林城	常田字鷲林	平地	連郭	～（戦国）	田切りの台地上。（下曽根氏）
3	長土呂館	長土呂字城	平地	単郭	（鎌倉～室町）	大井氏庶子の館と伝える。別称一陣城。（大井氏）
4	岩村田遺跡群	岩村田字六供他	平地	—	—	六供後遺跡、菅田遺跡。土師質土器
5	曽根新城	〃　字下穴虫	台地	連郭	～（戦国）	田切りの台地上。諏訪氏・松平氏
6	曽根城	小田井字穴沢他	平地	単郭	～（戦国）	田切りの台地上。（神津氏）
7	金井城	小田井字南金井	台地	複郭	～（戦国）	田切りの台地上。
8	延寿城	横根字延寿城	台地	単郭	（鎌倉）～	館跡と思われる。（小笠原氏）
9	白岩城	上平尾字古城跡	台地	単郭	（室町）～（戦国）	別称一里古城。（平尾氏）
10	下小平	岩村田字下小平	台地	—	—	溝状遺構。土師質土器
11	平尾城	上平尾字秋葉山	山頂	連郭	（室町）～（戦国）	別称一山古城。白岩城と一連のもの。（平尾氏）
12	落合神明館	鳴瀬字神明	台地	単郭	（鎌倉）～	

No.	名　称	所　在　地	立地	形状	存続期間（推定伝承）	備　考　（推定伝承）
13	鳴瀬神明	鳴瀬字神明	平地	—	—	土師質土器、内耳土器
14	北道見	〃 字北道見他	台地	—	—	〃
15	根々井館	根々井字亀田他	平地	単郭	（平安）～	現正法寺、県史跡（根々井氏）
16	根々井東原館	〃 字東原	台地	単郭	（平安）	別称一道本城。（根々井氏）
17	松の木	岩村田字松の木	平地	—	—	土師質土器、内耳土器
18	宮の西	〃 字宮の西	平地	—	—	〃
19	北西久保	〃 字北西久保	台地	—	—	五輪塔
20	一本柳遺跡群	〃 字一本柳他	台地	—	—	土師質土器、内耳土器
21	宮の後	〃 字宮の後	平地	—	—	〃
22	上の城	〃 字上の城他	台地	—	—	〃
23	藤ヶ城	〃 字南上の城	台地	—	～近世	中世大井氏の詰城とされる。近世内藤氏。
24	岩尾城	鳴瀬字城跡他	台地	連郭	室町～戦国	県史跡。大井氏
25	鳴瀬中屋敷	〃 字中屋敷	平地	—	—	土師質土器、内耳土器
26	鍛治田	横和字鍛治田	台地	—	—	〃
27	寄塚遺跡群	〃 字寄塚	台地	—	—	〃
28	今井城	今井字城・前田	台地	複郭	（平安）～	（今井氏）
29	今井宮の前	〃 字宮の前・面	台地	—	—	土師質土器、内耳土器
30	北久保	横和字北久保	台地	—	—	〃
31	中原遺跡群	今井字大塚・荒子				
32	深堀城	瀬戸字深堀	台地	—	～（戦国）	（上原氏）
33	深堀遺跡群	〃 字狐塚・西原	台地	—	—	土師質土器、内耳土器
34	東千石平	〃 字東千石平	平地	—	—	〃
35	八反田城	〃 字八反田	台地	複郭	—	
36	鳥坂城	新子田字戸坂	台地	単郭	～（戦国）	昭和59年度一部調査。（上原氏）
37	浅井城	〃 字丑ヶ久保	台地	単郭？	—	伝承地。
38	燕城	安原字城山・城裏	山頂	単郭	（南北朝）～（室町）	（安原氏）
39	池端城	新子田字池端	台地	単郭	—	
40	翼城	香坂字青木	山頂	単郭	—	別称一つばくろ城。
41	閼伽流山城	香坂字閼伽流山	山頂	単郭	—	山麓に、平安時代草創と伝わる明泉寺がある。
42	祢ぶた城	香坂字西祢ぶた	山頂	—	—	
43	志賀城	志賀字上小倉他	山頂	連郭	～（戦国）	戦国期の山城の形態がよく残る。（笠原氏）
44	高棚城	志賀字高棚他	山頂	連郭	～（戦国）	別称一天狗岩。（志賀氏）
45	笠原城	志賀字ミマタギ	山頂	連郭	～（戦国）	笠原氏
46	石附	根岸字石附	丘陵	—	—	内耳土器、土師質土器
47	向ヶ原	伴野字向ヶ原他	台地	—	—	〃
48	小金平	根岸字小金平	台地	—	—	内耳土器、古銭、常滑、鉄滓、羽口、土坑、掘立柱。
49	舞台場	〃 字反り田他	台地	—	—	掘立柱建物址。
50	堀の内	〃 字堀の内	台地	—	—	内耳土器他。
51	日向城	〃 字三年替戸	丘陵	連郭	～安土桃山	番手城か？（長坂氏）
52	虚空蔵山狼火台	〃 字比良・宮脇	山頂	—	—	狼火台と伝わる。
53	西裏	伴野字西裏	台地	—	—	内耳土器他。
54	室生寺山砦	〃 字涌石	—	—		
55	町の後	前山字町の後	平地	—	—	内耳土器他。
56	前山城	小宮山字城山	山頂	連郭	室町～安土桃山	伴野氏築城と伝わる。別称一伴野城。（伴野氏）
57	荒城	前山字鷲林	山頂	単郭	—	別称一新山城。（伴野氏）
58	地家	大沢字地家	平地	—	—	内耳土器、板碑他。
59	荒山城	〃 字城山	山頂	連郭	（室町）～（戦国）	前山城支城という。（伴野氏、市川氏）
60	下町屋	〃 字下町屋	平地	—	—	
61	泉屋敷	桜井字平馬塚	平地	単郭	（鎌倉）～	（泉氏）
62	野沢館跡	野沢字居屋敷	平地	複郭	（鎌倉）～近世	伴野氏
63	川原田	平賀字荒家	平地	—	—	
64	寄山遺跡群	志賀字寄山他	台地	—	—	内耳土器他。
65	内堀城	平賀字月崎	山頂	単郭	～（戦国）	
66	内山城	内山字寺澤他	山頂	連郭	～戦国	平賀氏、大井氏、上原氏
67	五本松城	〃 字日向他	山頂	連郭	～（戦国）	（笠原氏、内山氏）
68	内山古城	志賀字多々良浪	山頂	—	—	見張りの城か。
69	滝	平賀字滝	平地	—	—	内耳土器他。
70	城平	〃 字城平・筒井	丘陵	—	—	〃
71	平賀城	〃 字荻元・滝他	山頂	複郭	（平安）～（戦国）	（平賀氏）

築造されている。現在11基が確認されているが、径10～15mの円墳でいづれも小規模である。6世紀末から7世紀代の年代があたえられている。(註14)

千曲川の右岸は関東山地から発する河川によって東西に峡谷が形成されているが、平賀・瀬戸に至って大きく開く。この扇状地端部での河川との比高は8～10mを測り、東千石平遺跡・樋村遺跡・平賀中屋敷遺跡群が存在し、弥生時代の遺跡は小規模で数も少なく大規模な集落が形成されるのは、古墳時代の鬼高期で樋村遺跡(註15)はその代表的なものである。古墳群は群集し、長峯・大間・月崎・東姥石古墳群が内山川の両岸の山腹に存在する。この千曲川右岸も左岸と同様に平安時代になると集落址の面的規模は縮少し、数が増加する。しかも、山間部の奥深い、狭い平坦地や台地上にも1棟ないしは2～3棟の住居址が検出されている。(註16)

滑津川以北には、千曲川両岸の平坦地より、もっとも標高差の低い所で30mを測る一段高い平坦地が浅間山麓より形成されており、随所に「田切地形」がみられる。この「田切地形」の台地上縁辺には多くの遺跡が存在する。

従来、佐久地方に水稲栽培が定着した弥生時代中期の遺跡は、冷涼な気候や水田可耕地の少なさから数は限られると共に大集落の存在も考えてこられなかった。しかし、詳細分布調査と幾多の緊急発掘調査の結果から「田切地形」の台地上上縁辺や「田切地形」が消滅し微高地が形成されている一帯には、大きな集落が存在していることが判明した。(註17)それは、小諸市境から濁川、湯川、滑津川の流域である。これらの遺跡群からは、中期と重複し後期の集落址も検出されている。古墳・奈良・平安時代の集落もこれらの弥生時代の遺跡群と重複ないしは、近接して存在している。さらには、この地域では奈良・平安時代の大きな集落が標高750m以上の高所にも存在している特徴がある。佐久市・小諸市・御代田町にまたがる小田井の鋳師屋遺跡群で昭和59年・60年と発掘調査され、61年・62年と継続調査が予定されている。(註18)検出された住居址165棟、掘立柱建物址127棟、他の主な遺構としては馬5頭を埋葬した特殊な遺構、遺物は円面硯や巡方および多数の鉄器が多量の須恵器や土師器とともに出土している。この付近は「長倉駅家」があったと想定されている地(註19)であり、北方の浅間山麓には御牧の「塩野牧」が展開していたともされ、この遺跡群との関連が注目されている。(註20)御牧はこの他にも「長倉牧」と「望月牧」が佐久地方には存在しており、野火付遺跡の埋葬馬などとともにたいへん馬に縁の深い地方であるといえる。

このような原始・古代の歴史環境の中で平安時代の末には、ここ佐久の地においても多くの武士団が形成された。牧の経営などで有力な豪族として滋野一族があったが、その一系である根々井氏は木曽義仲の四天王となるほどの勢力をもっていた。第5図の15・16がその居館址といわれている。その他佐久地方のおもな豪族には、楯氏、八島氏、落合氏、志賀氏、桜井氏、石突氏、野沢氏、平原氏、小室氏、平賀氏があった。この頃、佐久には大井荘と伴野荘の二つの荘園があったことが知られている。大井荘は岩村田を中心とした大井郷、伴野荘は千曲川西の野沢平を中心とした刑部郷を中心に成立した荘園といわれている。このほか、平賀・田口など青沼郷を中心とした平賀郷があった。平安時代末から鎌倉時代の承久の乱に至る間の平氏と源氏、さらには官方と幕府との政権争いという大きな日本史の流れの中で、これらの佐久武士団は大きく関与し、一族の盛衰を体験したのである。承久の乱（1221年）後佐久には、小笠原氏が新興勢力をはる。時長は伴野氏を称して野沢平を中心とする佐久の南部に、その弟朝光は大井氏を称して岩村田を中心とする佐久の北部にそれぞれ勢力をふるった。伴野氏に関する城郭跡としては、前山の前山城や原の伴野氏館跡があげられる。(註21)大井氏一族では大井城跡のほかに長土呂・耳取・森山・平原・岩尾・上の城・燕城があげられ、承久の乱以後佐久において着々とその勢力を拡大したことがうかがえる。中先代の乱（1335年）では、大井氏は同族の小笠原貞宗や村上信貞らと共に北朝方に属し、信濃の旧勢力である南朝方の諏訪氏や佐久・小県の滋野一党と対した。一時大井城は落城したが、桔梗ヶ原の戦い（1355年）で南朝方が敗北してからは、望月氏ら滋野一党にかわって大井氏の勢力がのびた。さらに、信濃守護小笠原長秀と信濃の国人の盟主村上満信との大塔合戦（1400年）では、大井光矩が仲裁に入ったり、1436年には川西の芦田氏と争い家臣に組みこんでいる。鎌倉府の足利持氏と京都の室町幕府との争い永享の乱（1437年）では、持

氏の末子永寿王丸を安原の安養寺にかくまった。ついで起った結城合戦（1440年）の際にも大井持光は、永寿王丸を支持し反幕の姿勢を示した。文安４年（1447年）に永寿王丸（足利成氏）は許されて関東管領に補せられ、鎌倉公房足利成氏として復職させた大井持光は佐久において大きな勢力をもった。このころから文明16年（1484年）に村上氏に大井城を焼かれるまでが、大井氏の全盛であった。これより前同族である大井・伴野の両氏は抗争を続けついには文明11年（1479年）の大井殿が伴野氏に捕われるという争いにまで達し、佐久郡内は大いに乱れ村上氏をはじめ甲斐武田氏の佐久侵攻のきっかけをつくることになった。文明16年の戦いに敗れ、以後大井氏は衰退する。この頃佐久郡内には、大井氏・伴野氏はじめ、数多くの小豪族が割拠し、多数の山城を構えていた。第５図の分布図は佐久市内に限っているが、佐久郡内ではその数100余を数えることができる。(註22)

さて、大井氏が承久年間より260余年間佐久平にその勢力をふるったが、大井宗家とその一族が拠った大井城跡は、現在の岩村田中心街の東部にあって湯川に臨んでいる。城郭の東側は、約10～25mの断崖となっている。東西100m、南北700mの細長い一帯は西方に堀状の低地で画される台地となっており、この台地は東西の切通しによって三分されている。北から石並城跡、王城跡、黒岩城跡とよばれておりこの３城を合せて大井城跡または岩村田館跡という。王城跡では、昭和55年３月の調査(註23)により地表下50～70cmの深さに多量の焼土を含んだ炭化物層が検出され年代は明確にし得ないが、王城跡が猛火にさらされたことを物語っている。黒岩城跡は、昭和55年７月に県道拡幅に伴ない北側の一角が調査され(註24)竪穴遺構２基、土坑10基が検出され、土師質土器や陶磁器が出土している。この３城の西側は、現在ほとんど平坦となっていて、往時の堀跡が明確でない状況であるが、わずかに凹地が南北に連続しているところがある。そういった場所は、来年度以降試掘を行う予定である。この南北の堀跡に直交する堀跡が昭和55年５月に行なわれた六供後遺跡(註25)で検出された。幅1.8m～2.2m、深さ1.0m～1.3mを測り、断面形はほぼ「V」字をなす。この堀跡の北側へ約10mを測る地点には、幅約15mの凹地が平行して存在し、大規模な堀跡が想定される。大井城跡の対岸下小平遺跡(註26)があるが、土師質土器が出土した溝状遺構１基が検出されている。江戸時代の文献で吉沢好兼が著した『四隣譚藪』によれば各所に大井城跡の関連遺構がうかがえる。しかし、大規模な工場団地造成や宅地造成、さらには、高速道建設に伴なう関連開発が大井城跡の周辺に及んでおり今後とも県指定史跡である本城跡の保護・保存は片時も目を離せない状況にあるといえよう。

註１　旧石器時代では、1949年の群馬県岩宿遺跡発見以来、高まりを見せた旧石器文化研究の先駆的調査となった川上村馬場平遺跡・柏垂遺跡、南牧村矢出川遺跡があってナイフ形石器文化層や細石器文化層が確認されている。縄文時代早期は、北相木村栃原岩陰遺跡が全国的に著名で、人骨・動物の骨・植物などの自然遺物とともに多量の土器・石器が出土している。また、佐久市小宮山後沢遺跡は、県下において数少ない集落の営まれた台地全域の発掘調査が行われて、縄文時代前期の集落址が検出されている。

芹沢長介　1955　「長野県馬場平遺跡略報」　『石器時代』１
芹沢長介・柳沢和明　1982　「柏垂遺跡」　『長野県史　考古資料編　主要遺跡（北・東信）』
芹沢長介・柳沢和明　1982　「矢出川遺跡」　『長野県史　考古資料編　主要遺跡（北・東信）』
西沢寿晃　1982　「栃原岩陰遺跡」　『長野県史　考古資料編　主要遺跡（北・東信）』
佐久市教育委員会　1978　『後沢遺跡発掘調査概報』
林　幸彦　1982　「後沢遺跡」　『長野県史　考古資料編　主要遺跡（北・東信）』

註２　川上村大深山遺跡、佐久町川西小学校遺跡、佐久市大字香坂曲尾遺跡、大字新子田戸坂遺跡、和田上遺跡、大字長土呂西近津遺跡群、軽井沢町茂沢南石堂遺跡、御代田町宮平遺跡、小諸市久保田遺跡・郷土遺跡、望月町下吹上遺跡・後沖遺跡などがあげられる。

八幡一郎　1976　『信濃大深山遺跡』　川上村教育委員会
八幡一郎　1928　『南佐久郡の考古学的調査』　佐久教育会
佐久市教育委員会　1984　『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』
上野佳也　1982　「茂沢南石堂石遺跡」　『長野県史　考古資料編　主要遺跡（北・東信）』
前原　豊・川島雅人　1975　「北佐久郡御代田町宮平遺跡の後期縄文式土器」　『信濃』III・27―4
花岡　弘　1984　『久保田』　小諸市教育委員会
八幡一郎　1982　「郷土遺跡」　『長野県史　考古資料編　主要遺跡（北・東信）』
福島邦男　1978　『下吹上』　『長野県考古学会研究報告書11』　望月町教育委員会　長野県考古学会
福島邦男　1982　「下吹上遺跡」　『長野県史　考古資料編　主要遺跡（北・東信）』
福島邦男　1983　『後沖遺跡』　望月町教育委員会

註３　条痕文が施された甕形土器が出土している標高1330mを測る高冷地の南牧村野辺山の三沢遺跡、赤色塗彩の高坏形土器が知られている北

相木の祝平遺跡などは海抜高度が高く、気候も冷涼ということで注目される。標高800m以上の遺跡の分布は、八千穂村3遺跡、小海町6遺跡、南相木村2遺跡、北相木村2遺跡、南牧村6遺跡が現在わかっている。これらの遺跡は、住居址などの遺構は検出されていない。出土している遺物は、弥生時代後期の土器が主体を占めている。しかし、野辺山高原や佐久町中原遺跡のように佐久地方では、最も古い時期（中期前半）の土器群が知られていることは、佐久地方への弥生文化伝播を考える上で貴重である。また、前述の遺跡で磨製石鏃が多くみられる（野辺山高原だけで10点を数える）ことも特筆される内容である。

浅間山南麓についてもほぼ同じような状況で、佐久市・小諸市・御代田町境の小田井より高い標高の地域では、弥生時代の遺跡はたいへん少ない。750m以下の地帯での数の多さ、密集に比べ極端な現象である。弥生時代後期では、軽井沢町3遺跡、御代田町6遺跡が知られているが、いづれも、僅かな土器と石器が出土している。ただ、軽井沢町の県遺跡からは、住居址が2棟検出されている。

由井茂也　1970　「野辺山高原の弥生式遺物について」　『長野県考古学会誌』9

京都女子大学考古学研究会　1976　『野辺山原遺跡分布調査—昭和49・50年度報告書』

京都女子大学考古学研究会　1976　『野辺山原遺跡分布調査—昭和51年度報告書』

京都女子大学考古学研究会　1980　『野辺山原遺跡分布調査—1979年度概報』

渡辺重義・森嶋　稔　1979　「北佐久郡軽井沢町県遺跡の調査」　『長野県考古学会誌』34

野辺山高原、南・北相木村、小海町、八千穂村など各町村の遺跡分布状況や内容について、由井　明氏・由井茂也氏・井出正義氏から多大の御教授を得た。

註4　古墳時代は、抜井川と北沢川が千曲川に合流する一帯（高野町・海瀬）までは遺跡が知られている。それ以南の地域では、ごく希な存在である。また、佐久地方の北部においても、標高800m以上の地域では遺跡の数は限定されてくる。

註5　小海町の雨堤遺跡、川上村の横尾遺跡、佐久市大字香坂兵士山遺跡などは、発掘調査された山間部で高地に存在する平安時代の遺跡として知られている。雨堤遺跡は多数の墨書土器や鉄器、横尾遺跡は住居の構造を解明するに豊富な資料が検出されている。また、いづれの遺跡も古道沿いや峠の近くにあって、立地的にも注目される。これらの遺跡の他にも実にたくさんの数の存在が、山深い狭い僅かな台地や平坦地に知られている。時期的には灰釉陶器が当地に多く供給された10世紀から11世紀代に比較的多いように思われる。

井出正義他　1986　『雨堤遺跡』　小海町教育委員会

由井茂也・高村博文他　『横尾』　川上村教育委員会

註6　南限の古墳として佐久町の高野町城陰の塚畑古墳と曽原の入沢20号古墳、北東限の古墳として御代田町塩野のめがね塚古墳が知られている。

註7　弥生時代中期後半の住居址3棟、後期の住居址32棟と方形周溝墓3基が検出された。

佐久市教育委員会　1977　『後沢遺跡発掘調査概報』

註8　弥生時代後期の住居址13棟が検出された。

佐久市教育委員会　1981　『舞台場』

註9　僅かな道幅の農道と集会所敷地合わせて2,000㎡足らずの発掘調査であったが、21棟の弥生時代中期後半から後期の住居址が西裏遺跡群竹田峯遺跡・西裏遺跡から検出された。道路をへだてて隣接する北裏遺跡も古くから土器をはじめ石包丁や石斧が表面採集されていて、大規模な集落址の存在が予想されている。

佐久埋蔵文化財調査センター・佐久市教育委員会　1986　『西裏遺跡群西裏・竹田峯』

註10　佐久市教育委員会　1984　『長野県佐久市遺跡詳細分布調査報告書』

註11　昭和39年佐久市立泉小学校の校庭工事中に和泉期の甕形土器や手捏土器が採集されている。この手捏土器と類似するものとして、片貝川対岸の大門下遺跡出土のものがあげられる。

註12　佐久市教育委員会　1976　『市道』

註13　註10に同じ。

註14　土屋長久　1975　「信州佐久平の後期古墳群について」　『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』

註15　佐久市の平賀地区長野県営圃場整備事業に伴ない、約40,000㎡が発掘調査された。住居址は、弥生時代中期5棟、後期17棟、古墳時代後期273棟、奈良時代7棟、平安時代7棟が検出された。

佐久市教育委員会　1985　『樋村遺跡　遺構編』

註16　佐久市教育委員会により昭和54年に調査された香坂の兵士山遺跡では住居址が1棟検出され、昭和58年の調査でも内山の御所平遺跡で1棟検出されている。この他にも、多数の遺跡が山間部に存在している。

註17　北方から近津・西近津・周防畑・芝宮・長土呂・枇杷坂・岩村田・一本柳・寄塚・和田上などの遺跡群があげられる。

註18　御代田町教育委員会　1985　『野火付遺跡』

小諸市教育委員会　1982　『野火付古墳』

佐久市教育委員会　1985　『鋳師屋遺跡』

註19　菊地清人　1980　『佐久の交通史』

註20　堤　隆　1985　「Ⅴ総括」　『野火付遺跡』

註21　前山城は佐久市の指定史跡に、伴野氏館跡は長野県指定史跡にそれぞれ指定されている。

註22　長野県教育委員会　1983　『長野県の中世城館跡　分布調査報告書』

註23　昭和54年度に佐久市教育委員会により、県道拡幅工事と王城公園設置に関係する調査が行なわれている。

註24　工藤かよ子　1981　『大井城跡』　佐久市教育委員会

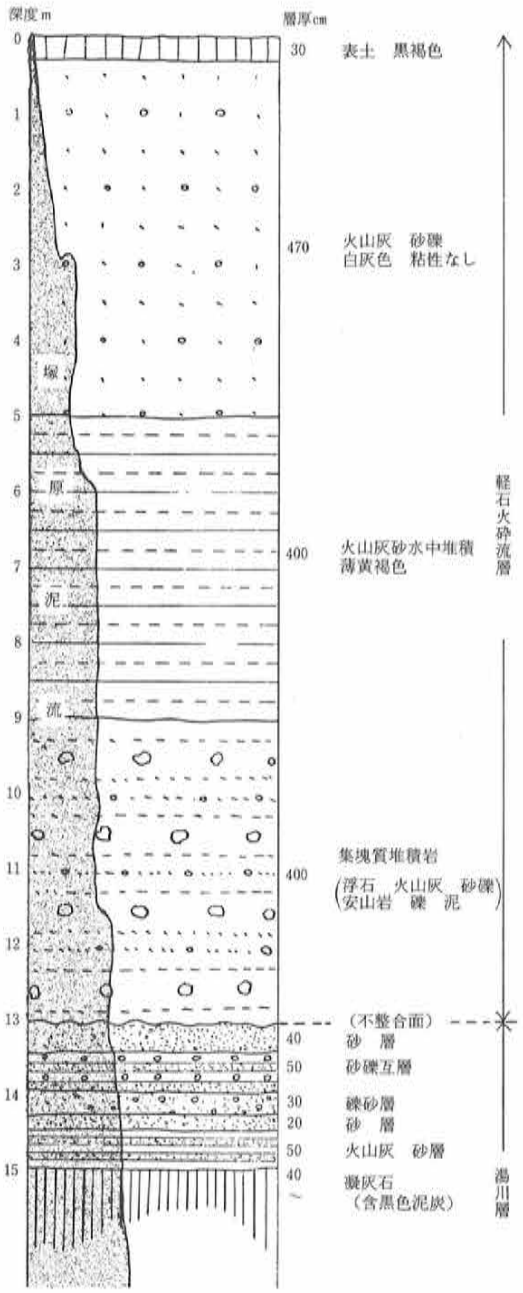
註25　佐久市教育委員会　1981　『六供後遺跡』

註26　佐久市教育委員会　1981　『下小平遺跡』

第Ⅲ章　層　序

大井城跡は、第Ⅱ章で述べているように浅間火山の噴出物によって構成されている地層が湯川等の浸蝕によって形成された台地の縁辺に築造されている。今回の調査は、塚原泥流の黒色集塊岩が一部に露頭し、黒岩城と呼ばれるにいたった大井城跡を構成する３城のうちもっとも南端の城郭についてなされた。

全体層序の第Ⅰ層は、黒褐色を呈する耕作土であって層厚は20cm～60cmを測る。この層は城郭の南・西部で厚く、北・東部では比較的薄くなる。農作業時の深耕のため層中には、土器・石器等を多く含んでいる。特に石臼や五輪塔は、作業の支障になるためであろうか、畑境に石垣状に積み重ねられていたものが数多くあった。また長年の耕作のせいで深さ10cm～15cmのところでたいへん堅い面がみられた。調査開始時には、この面を城郭使用時の生活面と誤った判断をしたほどである。



第７図　大井城跡（黒岩城跡）層序模式図

第Ⅰ層の直下が第Ⅱ層となる。第Ⅱ層は火山灰と砂礫を主体とした黄褐色土層で粘性はない。層厚は南側の断崖で確認したところ約4.5m～4.8mを測る。色調は、黄褐色を主とするものの、灰白色や黄橙色・淡橙色も部分的にみられた。竪穴遺構や土坑内の土層に多くみられ、一見してこの第Ⅱ層であることがわかった。この層の上部はたいへんもろく、各遺構の壁際、特に古墳時代の住居址には壁の崩壊がみられた。

城郭直下の南部（現在宅地となっているところ）にも、堀跡等城郭に関する遺構の存在を想定し、家屋移転等が行われた場所（第１図のＡ・Ｂ・Ｃトレンチ）を精査したが、後世の撹乱層直下が第７図の地層不整合面下の砂層ないしは砂礫層となりまったく遺構は確認されなかった。

城郭東側直下の現水田地帯は、地層不整合面下の凝灰岩または、火山灰・砂層の上面にあたる。この地層不整合面あたりの地層からは湧水がみられる。

第Ⅳ章　第Ⅰ地区（城郭）の遺構と遺物

第１節　中世の遺構

黒岩城跡の南部3,605㎡に５ｍ×５ｍのグリッドを北方よりあ～せ、東方より０～14と設けて、平面発掘を行なった。表土である耕作土が浅く、遺構に達するのが早いと思われたため、また、破壊を防止するために重機による削平はさけて、手掘りとした。当初表土下10cm～15cmでほぼ全域に比較的堅い面が認められたため、ジョレンから移植ごてに切り替えて精査を行なった。しかし、柱穴等落ち込みが認められないため、数箇所を試掘したところ下部よりビニール袋等が出土し、まだ耕作土の一部であると判断した。城郭の東・南・西部は、土留めのためのコンクリート壁があり、その崩壊防止のため約１ｍほど内側で調査区は設定されている。

城郭の東側、お～け－１グリッド及びこ～せ－２グリッド内には、比高差約１ｍほどの段が検出された。これは、調査区外の東側にみられる段曲輪の最上段と思われる。この段の内側１ｍには南北に伸びる幅約２ｍ、長さ約23ｍを計測する溝状遺構が検出された。この反対の西側白山神社寄りは、い～お－13・14グリッド付近から西に向けて傾斜するが、これは自然地形の傾斜と思われる。調査前は約1.5ｍの土盛りをし、整地されていた。

遺構は、激しく重複しほぼ全面におよんで検出された。その数と内容は調査前の予想をはるかに上回るものであった。竪穴住居址、竪穴遺構、土坑、掘立柱建物址、溝状遺構が検出された。

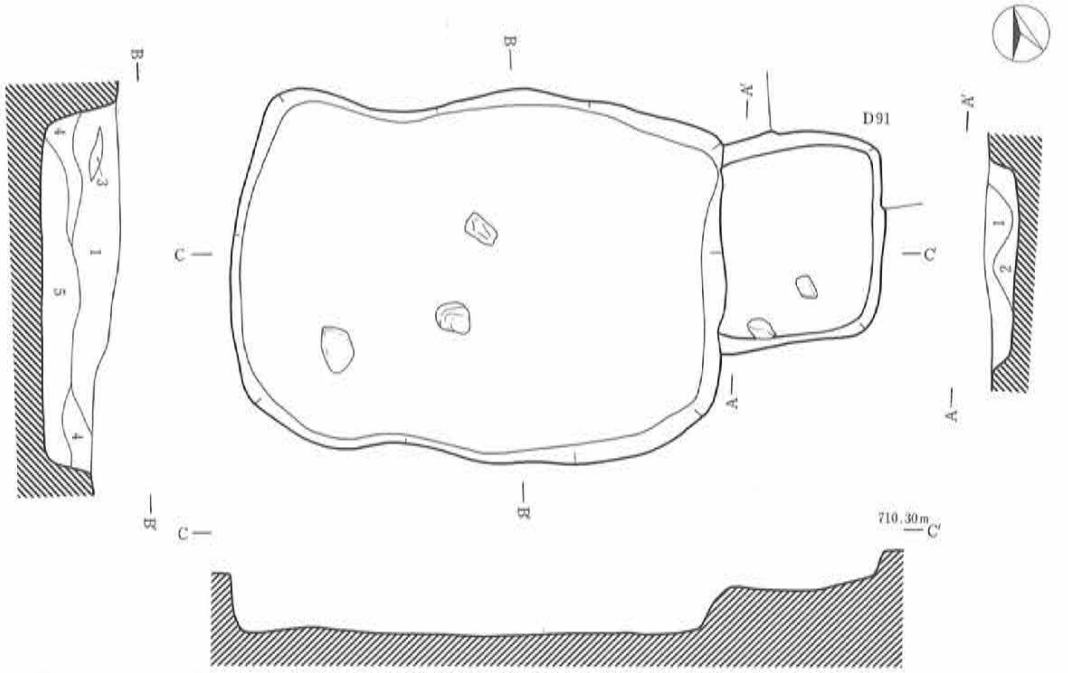
竪穴住居址――古墳時代後期	15棟
竪穴遺構――中世（15・16世紀と思われる）	54基
土　　坑――弥生時代後期　１基、中世（15・16世紀と思われる）	285基
掘立柱建物址―中世（15・16世紀と思われる）	３棟
溝状遺構――中世（15・16世紀と思われる）	２基

以上の遺構は古墳時代の竪穴住居址が、城郭東側より15ｍの範囲に１棟と存在せず中央より西側に偏在し、土坑はほぼ全域に、掘立柱建物址はほぼ中央に同様な間隔をもって存在し、竪穴遺構はこの掘立柱建物址と幾つかは重複関係があるものの他は周辺をとり囲むように配されている傾向があるといえよう。

これらの遺構からは、実に多量の遺物が出土した。古墳時代の竪穴住居址からは、土師器の甕・壺・高坏・坏・甑・小型甕形土器、須恵器の坏・蓋、石製模造品・玉類が出土した。中世の本城郭に伴う施設と考えられる竪穴遺構からは、石臼類、擂鉢類、鉄滓、金属製品、石製品、内耳土器、土師質土器、国産陶磁器、舶載青白磁器などが出土した。これらの他にも、獣骨・炭化種子などの自然遺物も多く出土した。

1　竪穴遺構（第８図～第63図、第５表～第６表、図版４～図版26）

大井城跡（黒岩城跡）の城郭平担部より一覧表にまとめたように総数54基の竪穴遺構が検出された。分布は、調査区域内のほぼ全域に及んでいる。54基の内14基に張り出し部が認められた。出土遺物には、次のものがある。舶載陶器（染付・青磁・白磁・青白磁）、国産陶磁器（常滑、中津川、美濃鉄釉、美濃灰釉、備前）内耳土器、土師質土器、石臼（粉播臼・茶臼）、石擂鉢、砥石、磨石、砥石台、硯、凹石、小柄、鉄釘、銅製品、坩堝、羽口、鉄滓、銭貨などが出土した。時期的には、13世紀～16世紀に比定されるが、15世紀～16世紀に属するものが大半を占めている。



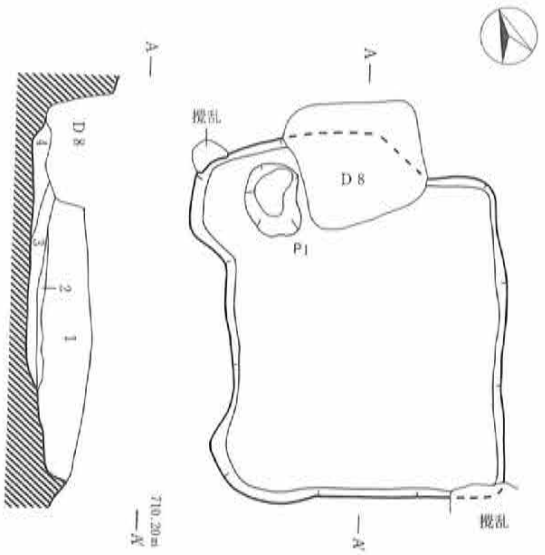
1層　褐色土　極小砂粒とパミスを含む。
2層　褐色土　ローム粒子を主体とする。
3層　黒褐色土　腐触性あり。
4層　褐色土　1層よりきめの粗い砂粒を含む。
5層　褐色土　1層より極小砂粒の量が少ない。

0　（1：40）　1 m

第８図　Ta１号竪穴遺構実測図

第５表　Ta１号竪穴遺構計測・説明表

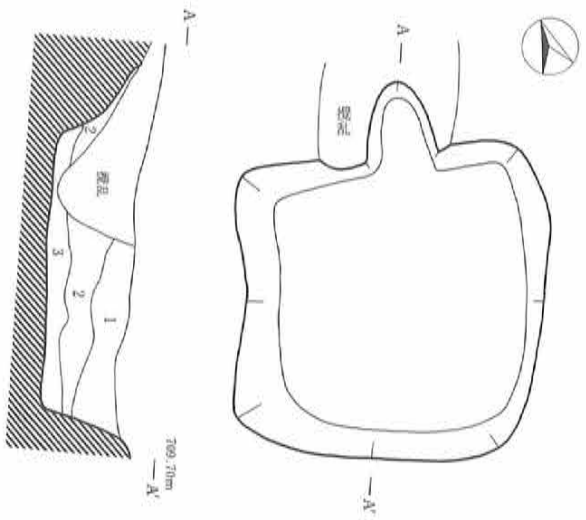
図版番号	4－2			検出区	き－4・5グリット						
重複状態	D91に破壊され、D30を破壊する。								平面形態	不整長方形	
	北壁側		東壁側		南壁側		西壁側		面積		長軸方向
壁長	257cm		187cm		268cm		191cm		4.0m²（1.2坪）		N-68°-W
壁高	41.5～43.0cm		31.5cm		19.0～30.0cm		30.5～36.5cm				
張り出し部	位置	東壁北寄り	形状	方形状	覆土	5層　ローム粒の混入が認められるが、褐色土主体である。					
	長さ	84cm	幅	160cm	深さ	20.5cm					
柱穴	——										
出土遺物	染付、白磁、青磁、内耳土器、粉播臼、石擂鉢										
備考	床面は地山ローム層をそのまま利用し、平坦である。特に堅固とは言えない。										



1層　褐色土　炭化物と焼けた粘土塊を含む。色調はやや暗い。
2層　褐色土　白色ローム粒が多量に混って堅くしまる。上層部に板状の炭化物の帯がみられる。
3層　褐色土　1層と似る。

0　(1:40)　1m

第9図　Ta2号竪穴遺構実測図



1層　褐色土　白色ローム粒子を少量とパミスを含む。きめは粗い。
2層　褐色土　白色ローム粒子を多量に含む。きめは粗い。
3層　褐色土　白色ローム粒子を少量、炭化粒を若干含む。きめは細かい。

0　(1:40)　1m

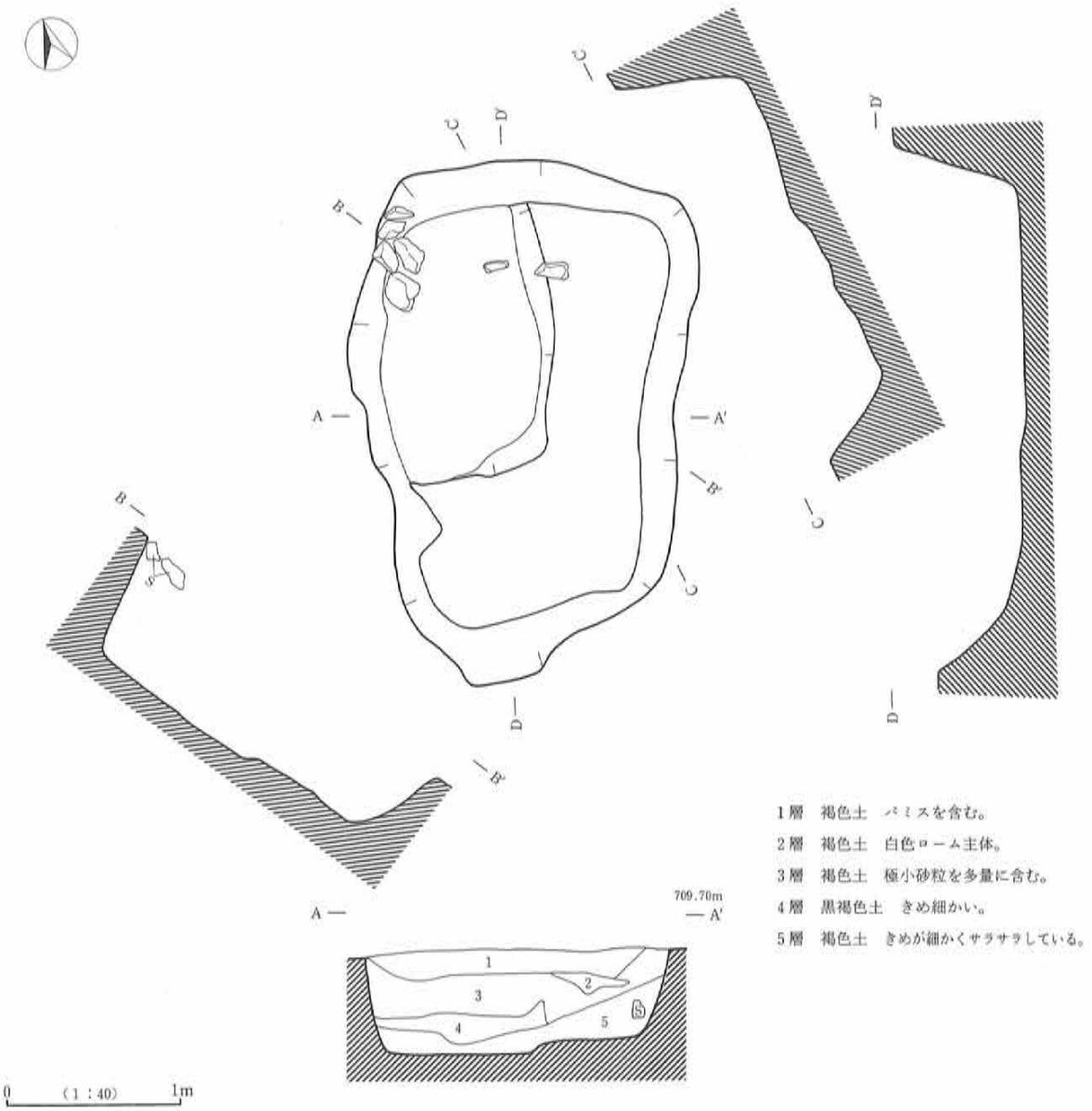
第10図　Ta3号竪穴遺構実測図

第6表　Ta2号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	——	検出区	け-4・5グリット				
重複状態	D8に破壊され、Ta13・14を破壊する。					平面形態	不整長方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	163cm	168cm	154cm	186cm		2.4m²(0.7坪)	N-16°-E
壁高	16.0～27.0cm	15.0～26.0cm	6.0～15.0cm	9.0～27.0cm			
張り出し部	位置 ——	形状 ——	覆土	4層　褐色土主体。			
	長さ —	幅 —	深さ —				
柱穴	北東コーナーより1個検出。						
出土遺物	内耳土器、土師質土器、茶臼						
備考	床面は中央部が凹み、堅固とは言い難い。						

第7表　Ta3号竪穴遺構計測・説明表

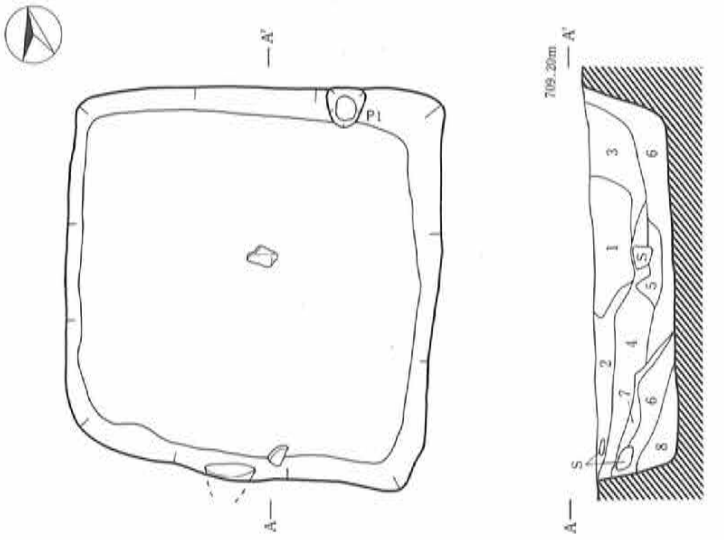
図版番号	4-2	検出区	か-1・2、き-1・2グリット				
重複状態	Ta31を破壊する。					平面形態	方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	175cm	180cm	152cm	148cm		1.7m²(0.5坪)	N-22°-E
壁高	18.0cm	19.0～23.5cm	36.5～53.0cm	32.5～39.0cm			
張り出し部	位置 北壁中央	形状 楕円状	覆土	3層　褐色土主体だが白色ロームの混入がみられる。			
	長さ 38cm	幅 30cm	深さ 25.0cm				
柱穴	——						
出土遺物	——						
備考	床面は平坦であるが、堅固とは言い難い。						



第11図　Ta4号竪穴遺構実測図

第8表　Ta4号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	5-3・4	検出区	さ-4・5グリット			
重複状態	H4を破壊する。				平面形態	不整長方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積	長軸方向
壁長	198cm	242cm	150cm	300cm	3.2m² (1.0坪)	N-18.5°-E
壁高	45.5～68.0cm	47.5～55.0cm	38.5～45.5cm	38.5～62.5cm		
張り出し部	位置 ― 形状 ―		覆土	5層　褐色土が主体であるが、白色ロームが大きく割り込む。		
	長さ ― 幅 ― 深さ ―					
柱穴	―					
出土遺物	内耳土器、土師質土器、銭貨（差97枚、永楽通宝・宣徳通宝他）					
備考	床面は東半分と南半分が高く、柔かい。北西部は長方形状に凹む。					



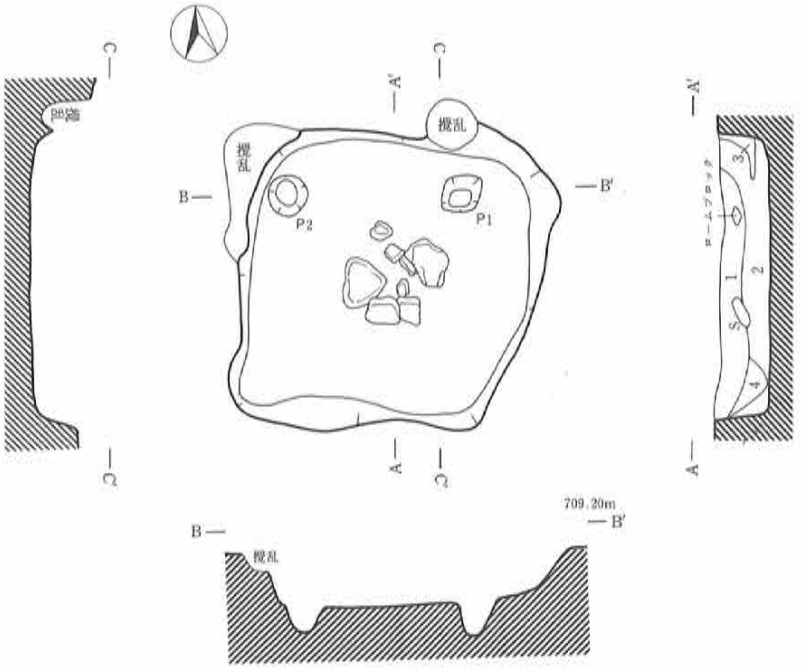
1層　褐色土　黄色ロームブロックが多量に混じる。
2層　褐色土　黄色ローム少量含む。
3層　褐色土　パミスを少量含む。炭化物も含む。
4層　黄褐色土　黄色ロームブロック主体。褐色土が混じる。
5層　黒褐色土　きめ細かくしまりがある。
6層　褐色土　白色ロームが混じる。
7層　淡褐色土　小パミスを含む。
8層　褐色土　きめ細かくサラサラしている。

0　(1：40)　1m

第12図　Ta5号竪穴遺構実測図

第9表　Ta5号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	4-3、5-1			
検出区	す-6グリット			
重複状態	単独			
平面形態	方形			
	壁長		壁高	
北壁側	190cm		37.5～40.5cm	
東壁側	190cm		34.0～37.5cm	
南壁側	197cm		37.5～45.5cm	
西壁側	210cm		40.5～44.5cm	
面積	3.0㎡(0.9坪)	長軸方向	N-15°-E	
張り出し部	位置	――	形状	――
	長さ	― 幅	― 深さ	―
覆土	8層　褐色土とロームが相互に入り組む。			
柱穴	北壁より1箇検出。			
出土遺物	瀬戸灰釉、内耳土器、鉄釘			
備考	床面は極平坦であるが、堅固とは言い難い。			



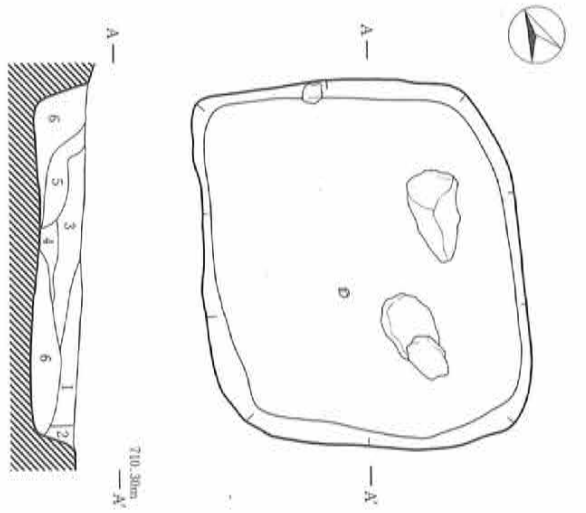
1層　褐色土　パミスを含む。
2層　褐色土　ロームブロックを多量に含む。
3層　褐色土　きめ細かく純度が高い。
4層　黒褐色土　ローム粒を多量に含む。

0　(1：40)　1m

第13図　Ta6号竪穴遺構実測図

第10表　Ta６号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	4－3、5－2	検出区	す－6グリット				
重複状態	単独					平面形態	不整方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積		長軸方向
壁長	132cm	130cm	172cm	151cm	1.9㎡（0.6坪）		N-21°-E
壁高	19.0～26.5cm	24.5～29.5cm	24.0～29.0cm	21.0～25.0cm			
張り出し部	位置 —— 形状 ——		覆土	4層　褐色土主体で、下層にはロームブロックが多量に混入する。			
	長さ — 幅 — 深さ —						
柱穴	北東、北西コーナーに各１個ずつある。						
出土遺物	美濃灰釉						
備考	床面は極平坦である。						



1層　淡橙褐色土　ロームを主体とする。
2層　黒褐色土　堅くしまる。
3層　淡橙褐色土　1層に黒褐色土がブロック状に混じる。
4層　褐色土　黄色ロームと褐色土が入り混じる。
5層　黄褐色土　黄色ローム主体で黒色土がブロック状に混じる。
6層　褐色土　黄色ロームとパミスを含む。

0　（1：40）　1m

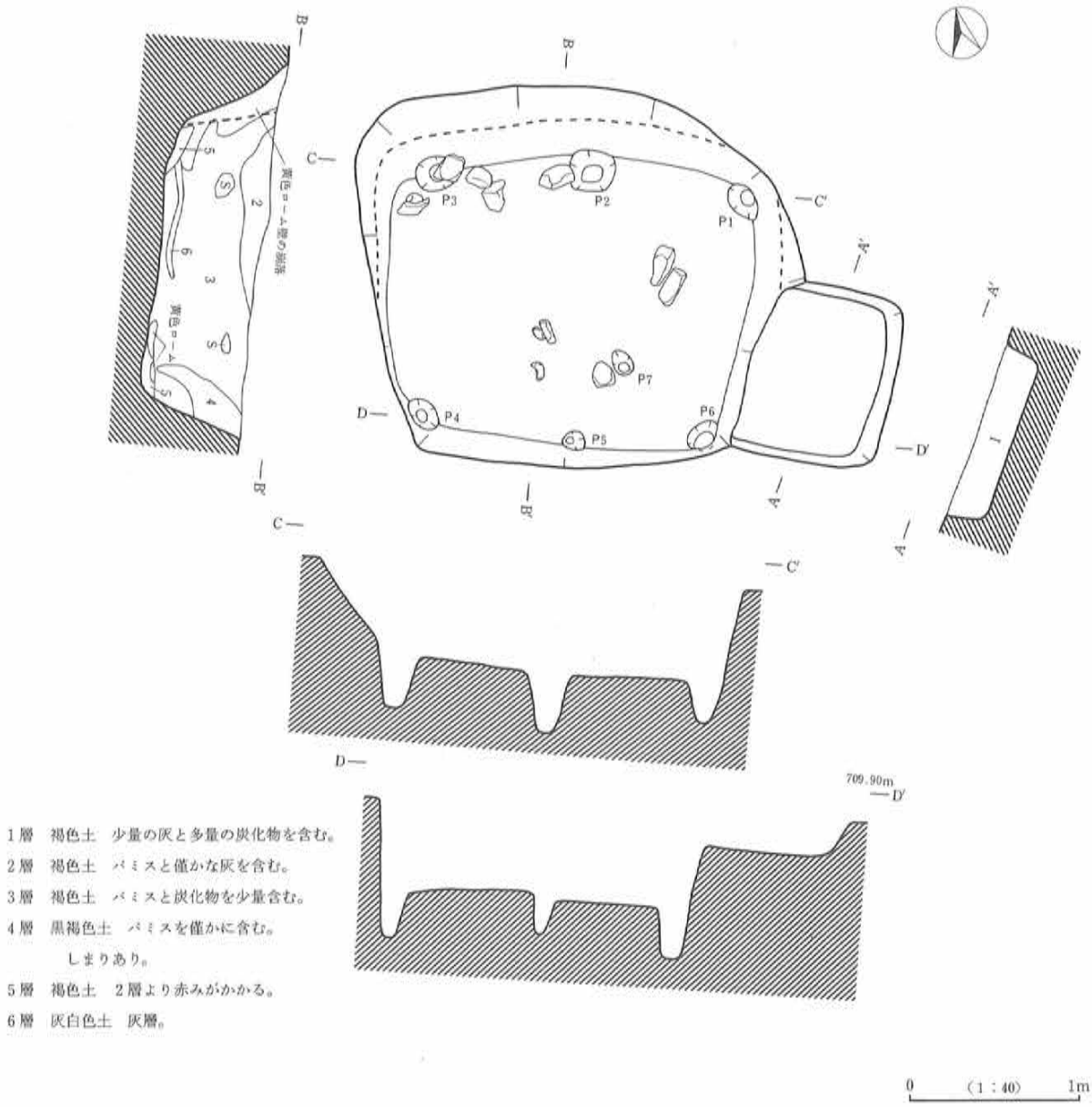
第14図　Ta７号竪穴遺構実測図

第11表　Ta７号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	6－1			
検出区	か－5・6グリット			
重複状態	H17、F３を破壊する。			
平面形態	長方形			
	壁長	壁高		
北壁側	166cm	36.0～39.0cm		
東壁側	186cm	22.0～34.0cm		
南壁側	169cm	23.0～27.0cm		
西壁側	189cm	30.0～32.0cm		
面積	2.5㎡(0.8坪)	長軸方向	N-17°-E	
張り出し部	位置 ——	形状 ——		
	長さ —	幅 —	深さ —	
覆土	6層　ローム・褐色土・黒褐色土が入り組んだ状況を呈する。			
柱穴	——			
出土遺物	内耳土器、鉄釘、永楽通宝			
備考	床面中央が、ややふくらむがおおむね平坦である。			

第12表　Ta８号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	6－2・3・4	検出区	く－6・7グリット				
重複状態	H15、Ta52、D42を破壊する。					平面形態	長方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積		長軸方向
壁長	290cm	221cm	213cm	231cm	3.2㎡（1.0坪）		N-77°-W
壁高	52.0～65.0cm	29.0～57.0cm	47.0～56.0cm	50.5～63.5cm			
張り出し部	位置 東壁南寄り	形状 方形状	覆土	6層　褐色土主体で、灰・炭化物の混入が著しい。最下層に帯状の灰の堆積が認められる。			
	長さ 86cm 幅 104cm	深さ 28.5cm					
柱穴	遺構四隅の壁直下に各１個、南・北壁の中央直下に各１個、計６個認められる。						
出土遺物	常滑、内耳土器、土師質土器、粉播臼、茶臼、鉄釘、坩堝						
備考	床面はおおむね平坦である。						

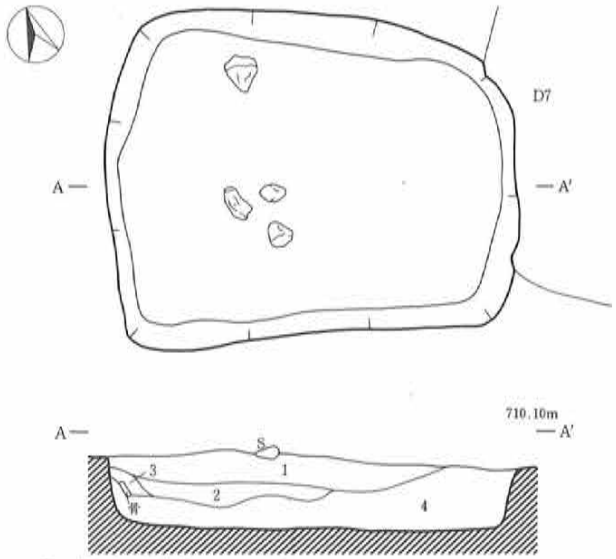


1層　褐色土　少量の灰と多量の炭化物を含む。
2層　褐色土　パミスと僅かな灰を含む。
3層　褐色土　パミスと炭化物を少量含む。
4層　黒褐色土　パミスを僅かに含む。
　　しまりあり。
5層　褐色土　2層より赤みがかかる。
6層　灰白色土　灰層。

第15図　Ta 8 号竪穴遺構実測図

第13表　Ta 9 号竪穴遺構計測・説明表

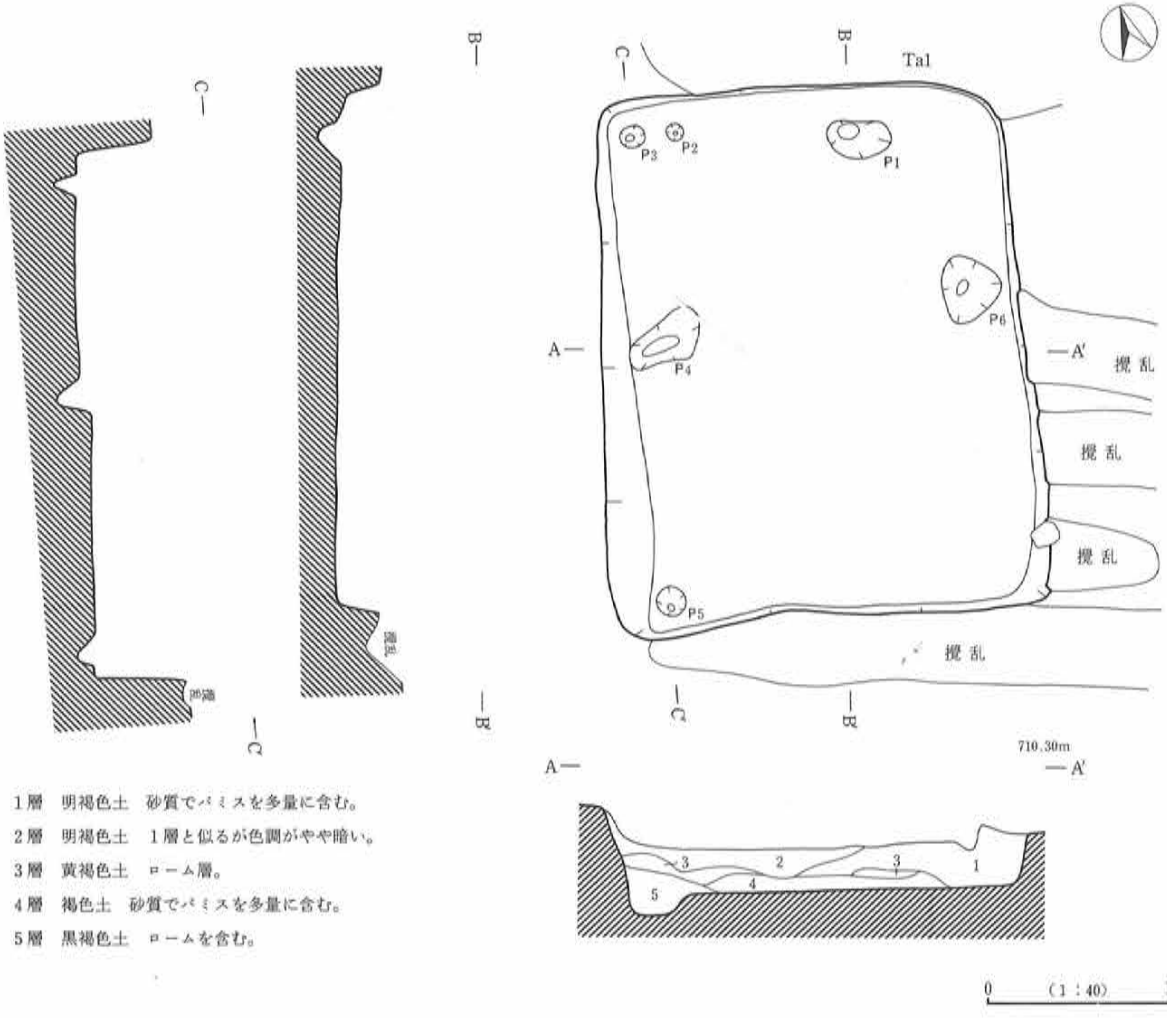
図版番号	7－1	検出区	き－6グリット				
重複状態	H 3、D 7を破壊する。					平面形態	不整長方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	205cm	155cm	208cm	185cm		2.6m² (0.8坪)	N-72°-W
壁高	35.0～41.0cm	30.0～35.0cm	27.0～36.0cm	30.0～34.0cm			
張り出し部	位置 ——	形状 ——	覆土	4層　褐色土が主体だが、炭化物が混入し、ロームがブロック状にはいる。			
	長さ —	幅 —	深さ —				
柱穴	——						
出土遺物	内耳土器、土師質土器、永楽通宝						
備考	床面はおおむね平坦である。						



1層　褐色土　炭化物、パミスを含む。
2層　褐色土　1層より炭化物が少ない。
3層　黄褐色土　黄色ローム。
4層　褐色土　黄色の極小砂粒とパミスが混じる。

0　(1：40)　1m

第16図　Ta9号竪穴遺構実測図



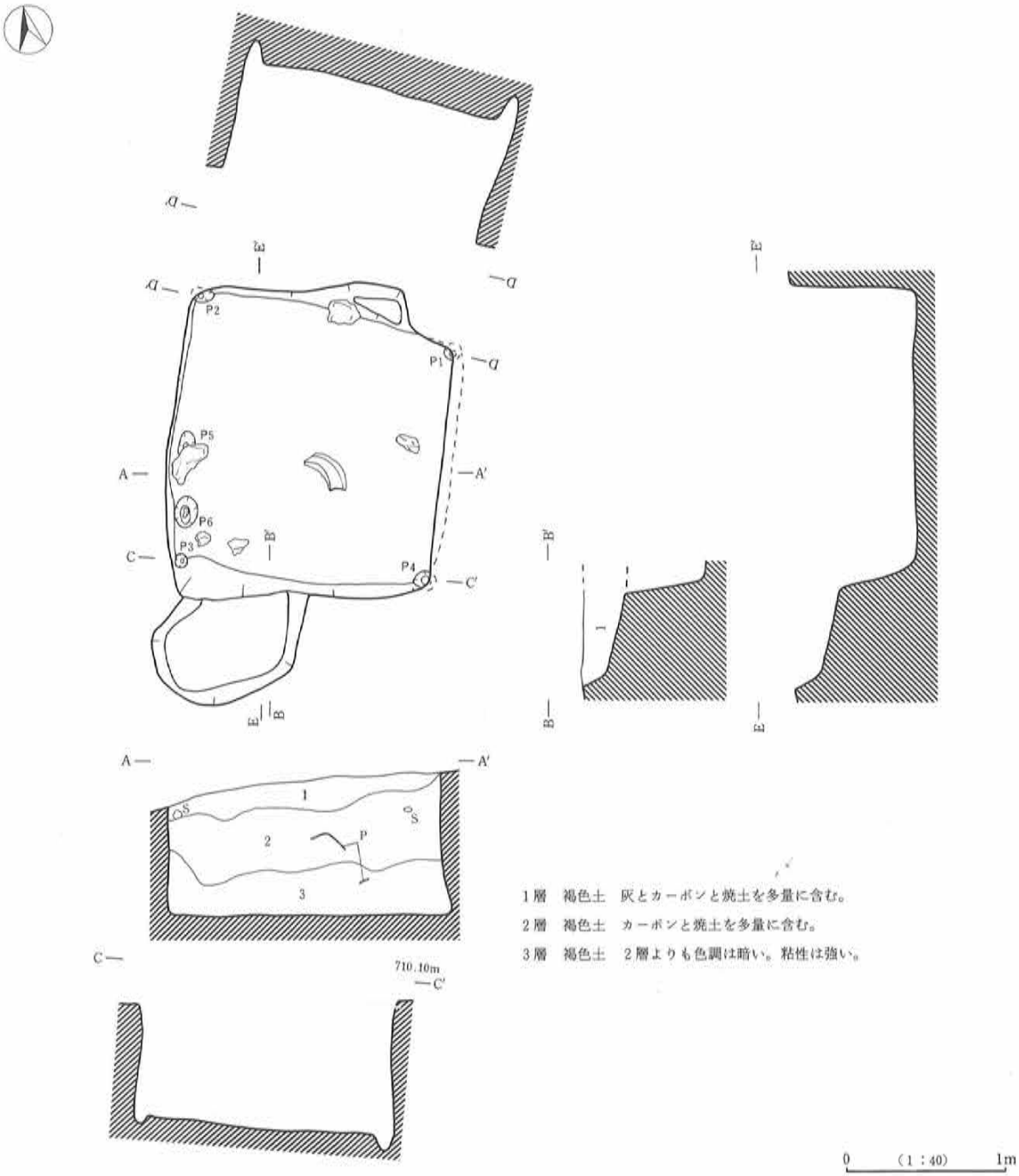
1層　明褐色土　砂質でパミスを多量に含む。
2層　明褐色土　1層と似るが色調がやや暗い。
3層　黄褐色土　ローム層。
4層　褐色土　砂質でパミスを多量に含む。
5層　黒褐色土　ロームを含む。

0　(1：40)　1m

第17図　Ta10号竪穴遺構実測図

第14表　Ta10号竪穴遺構計測・説明表

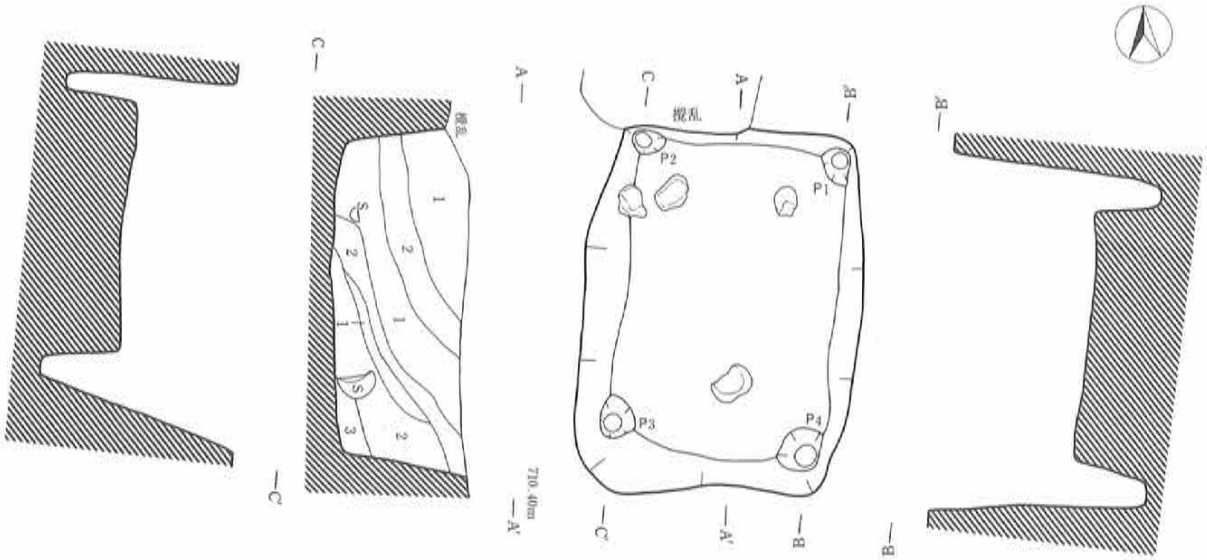
図版番号	7-2・3	検出区	き-5グリット				
重複状態	H3、D287を破壊し、Ta1、D157に破壊される。					平面形態	長方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	217cm	276cm	241cm	291cm		5.5m²（1.7坪）	N-15°-E
壁高	20.0～44.0cm	37.0～41.0cm	21.0～47.0cm	43.0～51.0cm			
張り出し部	位置 ——	形状 ——	覆土	5層　砂質の明褐色土と褐色土が主で、ローム層が入り込む。			
	長さ —	幅 —	深さ —				
柱穴	北西コーナー直下に2個、南西コーナー下に1個、東・西壁の中央下に各1個、北壁下中央東寄りに1個、計6個検出。						
出土遺物	内耳土器、土師質土器						
備考	床面はおおむねフラットである。						



第18図　Ta11号竪穴遺構実測図

第15表　Ta11号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	8-1・2	検出区	く-5グリット				
重複状態	H5、D44・126を破壊する。					平面形態	方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	175cm	177cm	174cm	195cm		2.8㎡（0.8坪）	N-19°-E
壁高	76.0～79.0cm	83.0～89.0cm	64.0～80.0cm	68.0～70.0cm			
張り出し部	位置 南壁西寄り	形状 円形状	覆土	3層　褐色土主体で、灰・カーボン・焼土を多量に含む。			
	長さ 68cm	幅 83cm	深さ 13.0cm				
柱穴	四隅に各1個ずつ整然と並ぶ。						
出土遺物	白磁、中津川、瓦器、内耳土器、土師質土器、粉播臼、磨石、砥石、鉄製品						
備考	床面はおおむね平坦である。						



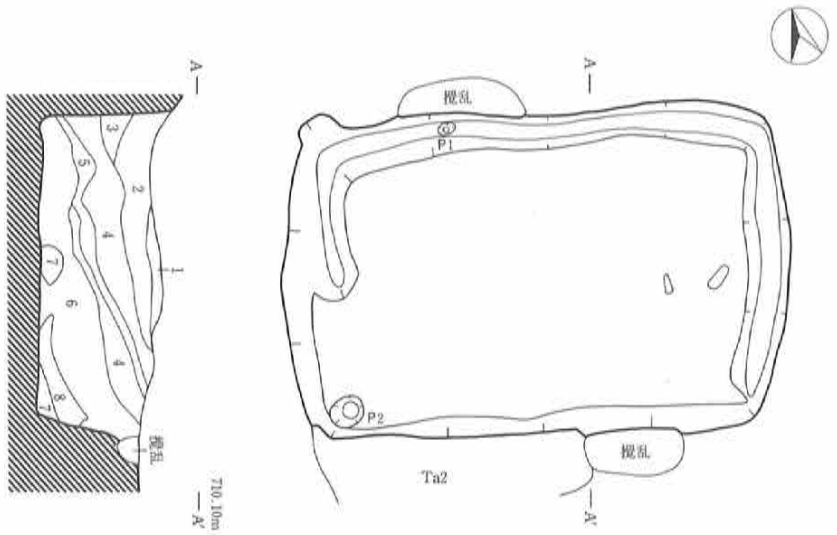
1層　褐色土　ローム粒子、炭化物、灰を多量に含む。
2層　灰褐色土　灰と炭化物を含む。
3層　褐色土　きめ細かく、カーボンを含む。

0　（1：40）　1m

第19図　Ta12号竪穴遺構実測図

第16表　Ta12号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	——	検出区	お-6、か-5・6グリット				
重複状態	単独					平面形態	長方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	127cm	191cm	127cm	201cm		1.8㎡（0.5坪）	N-6°-E
壁高	53.0～78.0cm	74.0～85.0cm	66.0～70.0cm	60.0～72.0cm			
張り出し部	位置 ——	形状 ——	覆土	3層　褐色土と灰がサンドイッチ状に入り組む。南から北へレベルを低下させる一方向からの堆積状況がみられる。			
	長さ —	幅 —	深さ —				
柱穴	遺構の四隅に各1個、整然と並ぶ。						
出土遺物	美濃鉄釉、土師質土器、粉播臼、石擂鉢						
備考	床面はおおむね平坦である。						



1層　褐色土　焼土と炭化物を含む。
2層　明褐色土　淡橙色のローム層。1層が混じる。
3層　褐色土　ローム粒子と炭化物を含む。
4層　明褐色土　淡橙色のロームを主体とする。
炭化物と焼土を含む。
5層　黒灰色土　灰層。
6層　明褐色土　淡橙色のローム層。
7層　褐色土　焼土を含み、堅くしまる。
8層　黒褐色土　有機質。堅くしまる。

0　(1：40)　1m

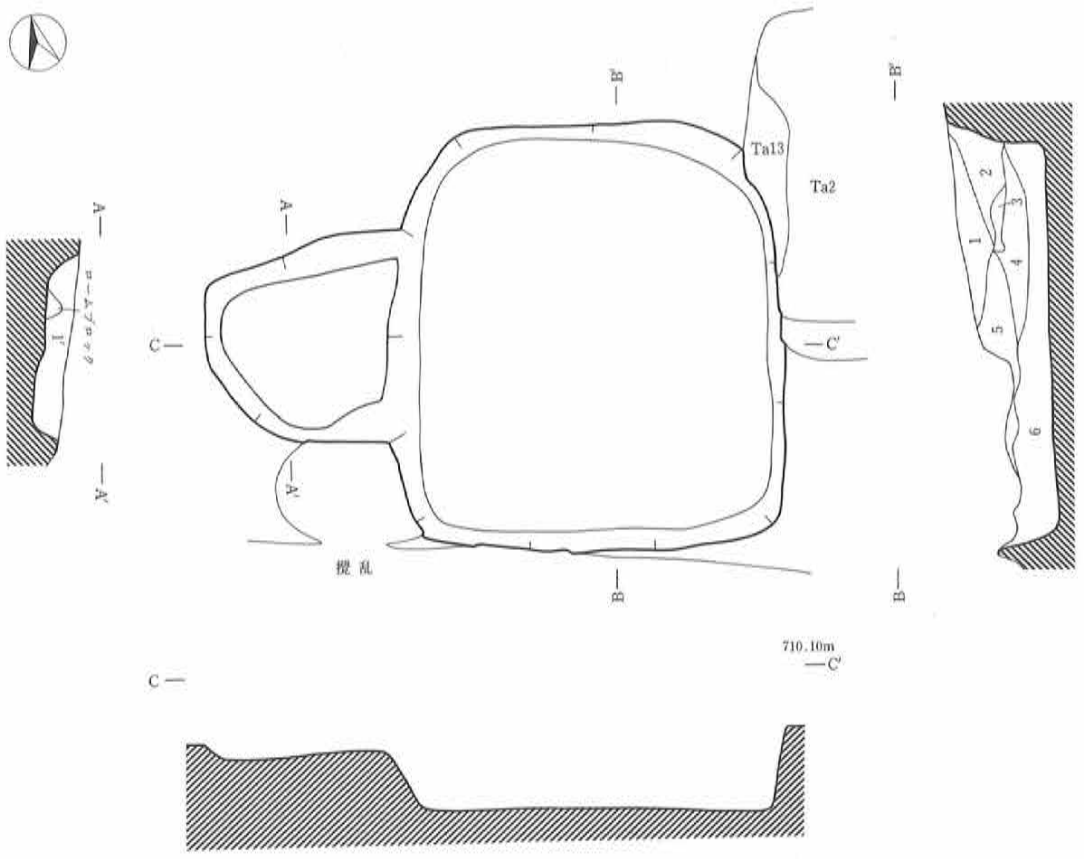
第20図　Ta13号竪穴遺構実測図

第17表　Ta13号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	8-3、9-1	検出区	さ-3・4、し-3・4グリット				
重複状態	Ta2、D18に破壊され、Ta14を破壊する。					平面形態	長方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	250cm	170cm	242cm	170cm		2.5m² (0.8坪)	N-76°-W
壁高	67.0～70.0cm	61.0～64.0cm	40.0～57.0cm	55.0～69.0cm			
張り出し部	位置 ——	形状 ——	覆土	8層　褐色土・ローム・灰・黒褐色土がサンドイッチ状に堆積し、南から北へレベルを下げ一方向からの流れ込みがみられる。			
	長さ —	幅 —	深さ —				
柱穴	北壁、南西コーナーに1個ずつある。						
出土遺物	常滑、内耳土器、土師質土器						
備考	北・東壁下及び、西壁下の北側まで周溝がある。						

第18表　Ta14号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	——	検出区	け-5グリット				
重複状態	Ta2・13によって破壊される。					平面形態	方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	200cm	226cm	204cm	224cm		3.6m² (1.1坪)	N-74°-W
壁高	45.5～53.5cm	20.5～43.0cm	17.0～30.5cm	25.0～49.5cm			
張り出し部	位置 西壁中央	形状 楕円状	覆土	6層　褐色土とローム層が含まれる土が入り組んでいる。			
	長さ 98cm	幅 108cm	深さ 28.0cm				
柱穴	——						
出土遺物	中津川、内耳土器、土師質土器、茶臼						
備考	床面は極平坦である。						



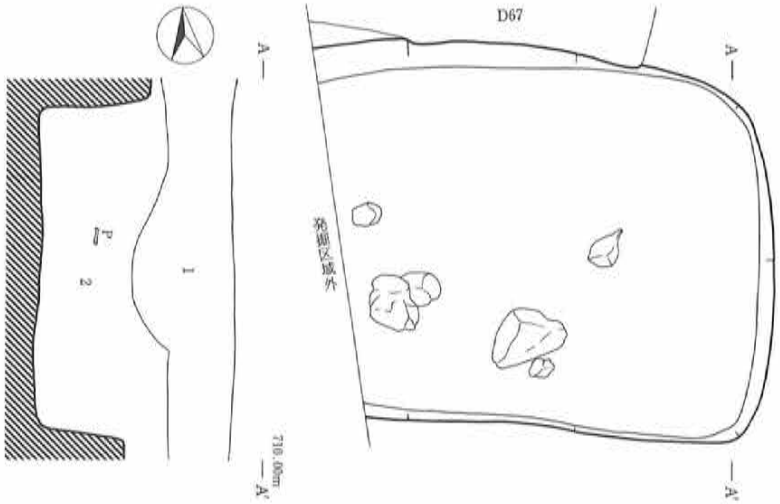
1層　褐色土　炭化粒子、焼土、ローム粒子を多量に含む。
1'層　褐色土　炭化粒子、焼土、灰を多量に含む。
2層　褐色土　1層よりロームを多量に含む。
3層　黒褐色土　炭化物を含んで、しまりがやや強い。
4層　褐色土　1層よりロームが少ない。
5層　褐色土　炭化物を多量に含む。ローム粒子をごく僅か含む。
6層　褐色土　白色ローム粒子を主体とする。炭化物を含む。

0　（1：40）　1m

第21図　Ta14号竪穴遺構実測図

第19表　Ta15号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	——	検出区	く-10、け-10グリット				
重複状態	D67に破壊され、H2を破壊する。					平面形態	長方形？
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	〈240〉cm	190cm	〈200〉cm	—		——	N-97°-E
壁高	36.0～59.0cm	22.0～46.0cm	41.0～46.0cm	—			
張り出し部	位置 ——	形状 ——	覆土	1層　黄色のロームと褐色土が混ざっている。			
	長さ —	幅 —	深さ —				
柱穴	——						
出土遺物	内耳土器、土師質土器						
備考	床面はおおむね平坦である。						

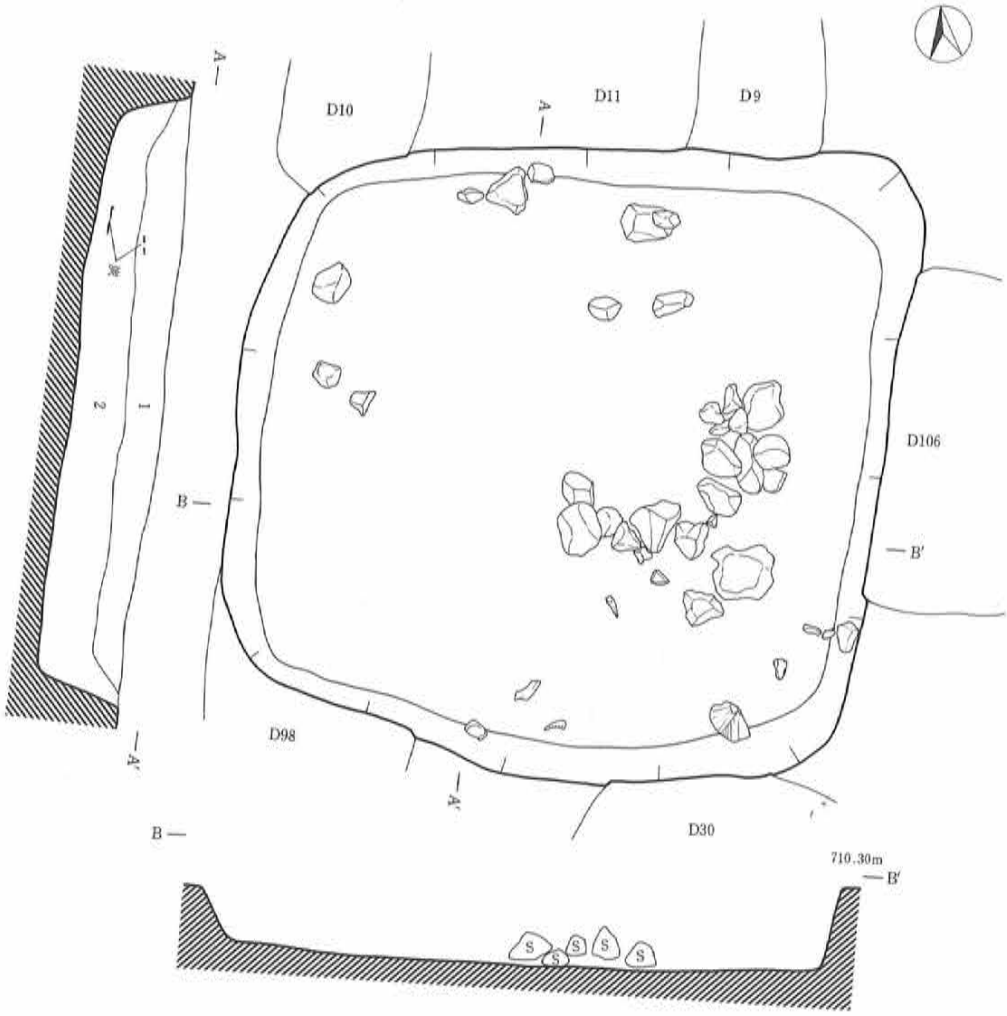


1層　耕作土　基本層序Ⅰ。

2層　黄褐色土　黄色ローム粒と褐色土が混じっている。

0　(1：40)　1m

第22図　Ta15号竪穴遺構実測図



1層　褐色土　炭化粒子および直径5～10㎜大のパミスを少量含む。粒子は粗く粘性は弱い。淡橙色のロームを含み、パサパサしている。

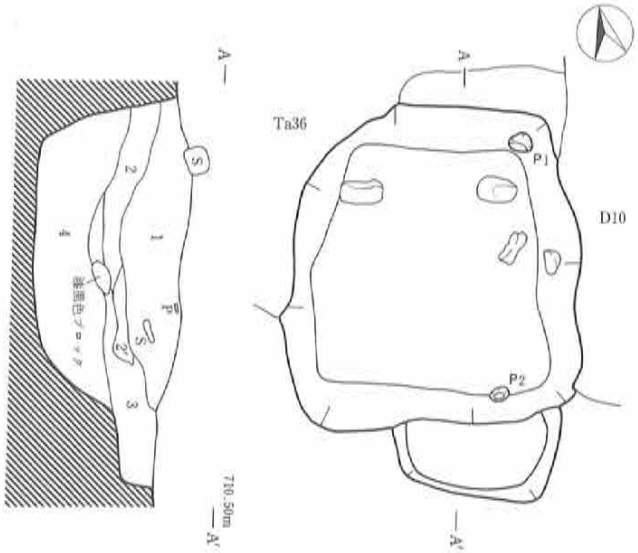
2層　明褐色土　炭化粒子を少量含む。粒子は粗く粘性は弱い。淡橙色のロームを含み、パサパサしている。

0　(1：40)　1m

第23図　Ta16号竪穴遺構実測図

第20表　Ta16号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	9-2・3	検出区	か-4・5、き-4・5グリット				
重複状態	D9・10・11・30・98・106・108・184に破壊されD287を破壊する。					平面形態	方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積	長軸方向	
壁長	363cm	353cm	332cm	318cm	8.6m²（2.6坪）	N-83°-W	
壁高	27.5～60.0cm	37.0～53.5cm	3.5～53.5cm	37.0～45.5cm			
張り出し部	位置 —— 形状 ——		覆土	2層　褐色土を基調としてロームが含まれる。			
	長さ — 幅 — 深さ —						
柱穴	——						
出土遺物	内耳土器、土師質土器、粉播臼、茶臼						
備考	床面はおおむね平坦。						



1層　黒褐色土　灰を少量、炭化粒子を多量に含む。粒子の粗い淡橙色ローム、焼土が1～2cmの斑点状に混入する。粒子が細かくしまりがない。

2層　黄褐色土　炭化粒子を微量含み、黄色ローム主体で褐色が混じる。粒子は細かく粘性は弱い。

2'層　黄褐色土　炭化粒子を微量に含み、黄色ローム主体。粒子は細かく粘性は弱い。

3層　褐色土　黄色ロームを少量、炭化粒子を少量含む。粒子は細かく粘性は弱い。しまりあり。

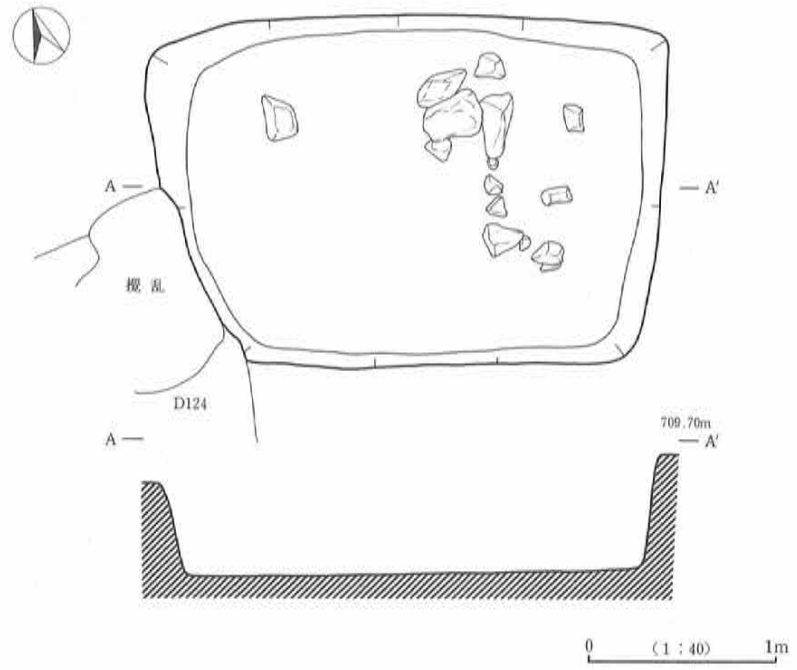
4層　褐色土　炭化粒子、少量の黄色ロームを含む。直径1～2cmのパミスおよび灰を少量含む。焼土が5mm大の斑点状に混入する。

0　（1：40）　1m

第24図　Ta17号竪穴遺構実測図

第21表　Ta17号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	10-1	検出区	か-5グリット				
重複状態	Ta36、D10に破壊される。					平面形態	方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積	長軸方向	
壁長	160cm	162cm	151cm	180cm	1.4m²（0.4坪）	N-14°-E	
壁高	22.0～73.0cm	26.0～53.0cm	29.0～61.0cm	27.0～63.0cm			
張り出し部	位置 南壁東寄り 形状 方形状		覆土	4層　褐色土とロームが入り組んだ状態である。			
	長さ 39cm 幅 84cm 深さ 40.0cm						
柱穴	北・南壁に各1個ずつある。						
出土遺物	内耳土器、土師質土器、茶臼						
備考	床面は壁の立ち上がりが他にくらべて緩く、床面も中央に向って凹み気味である。						



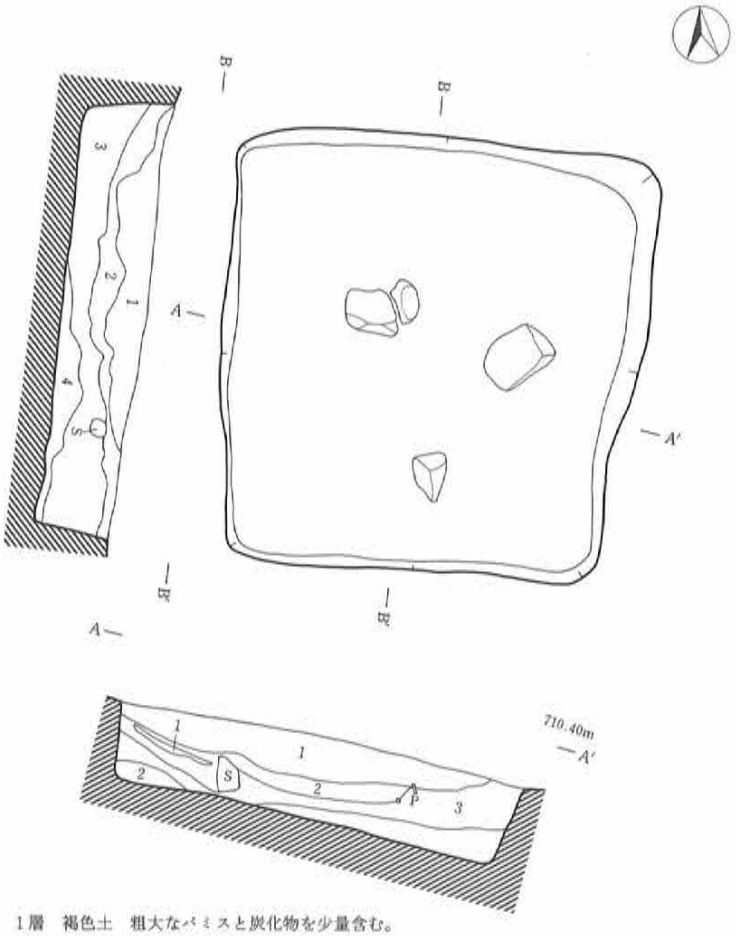
第25図　Ta18号竪穴遺構実測図

第22表　Ta18号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	10-2	検出区	く-8・9グリット				
重複状態	D124に破壊される。					平面形態	長方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積	長軸方向	
壁長	292cm	186cm	240cm	182cm	3.7㎡ (1.1坪)	N-72°-W	
壁高	61.0～63.0cm	55.0～58.0cm	44.0～52.0cm	4.0～55.0cm			
張り出し部	位置 ―	形状 ―	覆土 ―				
	長さ ―	幅 ―	深さ ―				
柱穴	―						
出土遺物	美濃鉄釉、美濃灰釉、内耳土器、土師質土器						
備考	床面はおおむね平坦である。						

第23表　Ta19号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	11-1	検出区	き-2、く-2グリット				
重複状態	Ta21を破壊する。					平面形態	方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積	長軸方向	
壁長	232cm	228cm	219cm	236cm	4.3㎡ (1.3坪)	N-4°-E	
壁高	46.5～49.0cm	37.5～42.0cm	36.5～42.0cm	30.0cm			
張り出し部	位置 ―	形状 ―	覆土 4層　褐色土とロームがサンドイッチ状に堆積している。				
	長さ ―	幅 ―	深さ ―				
柱穴	―						
出土遺物	白磁、内耳土器、土師質土器						
備考	床面はおおむね平坦である。						

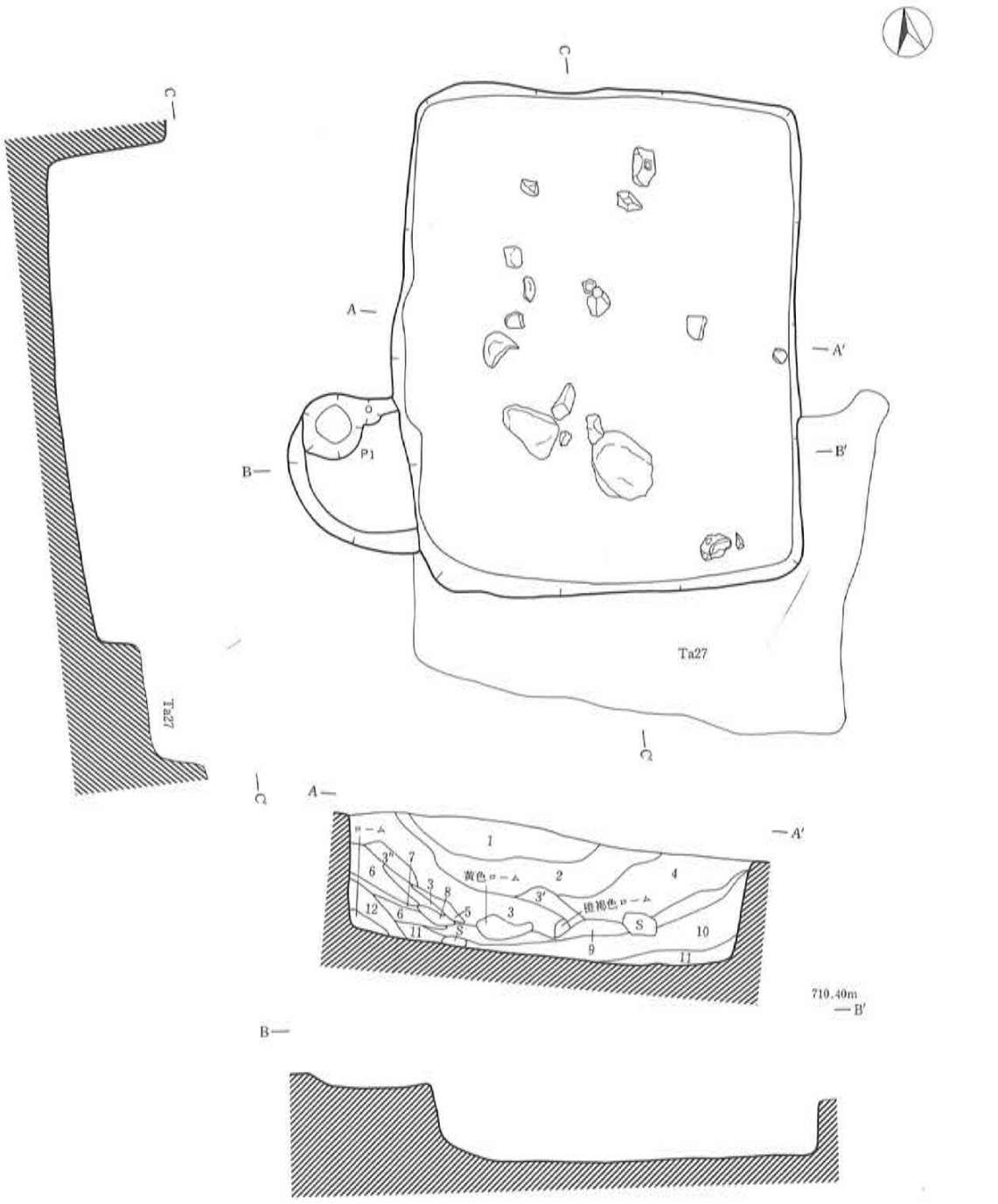


1層　褐色土　粗大なパミスと炭化物を少量含む。
2層　黄褐色土　ローム主体とする。
3層　褐色土　1層よりも色調が暗く、きめ細かい。
4層　淡黄褐色土　2層と3層の混じり。

第26図　Ta19号竪穴遺構実測図

第24表　Ta20号竪穴遺構計測・説明表

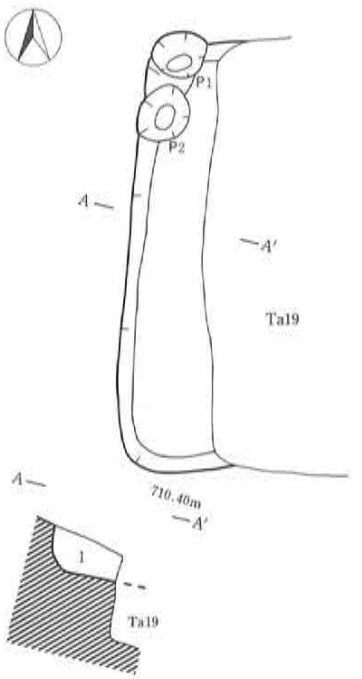
図版番号	11-2・3			検出区	き-3・4グリット						
重複状態	Ta27に破壊されている。								平面形態	長方形	
	北壁側		東壁側		南壁側		西壁側		面積		長軸方向
壁長	239cm		298cm		237cm		312cm		6.5m² (2.0坪)		N-7°-E
壁高	73.0～79.0cm		24.0～76.0cm		23.0～28.0cm		65.0～71.0cm				
張り出し部	位置	西壁南	形状	楕円状	覆土	11層　褐色土・黒褐色土・ロームが細かく入り組み、サンドイッチ状に堆積している。					
	長さ	75cm	幅	96cm	深さ	6.0cm					
柱穴	——										
出土遺物	美濃鉄釉、備前、内耳土器、土師質土器、茶臼										
備考	床面はおおむね平坦である。										



1層　淡橙色土　ロームを主体とする。
2層　褐色土　小砂粒とパミスを少量含む。
3層　褐色土　炭化物と小パミスを含む。
3′層　褐色土　炭化物は含まず、砂粒の量が2層より少ない。
3″層　褐色土　ローム粒を少量含む。
4層　褐色土　小砂粒を主体とする。
5層　黄褐色土　黄色ロームの流れ込み。
6層　褐色土　橙色ロームを多量に含む。
7層　黄褐色土　砂質の黄色粒を主体とする。
8層　淡橙色土　ローム層。
9層　黒褐色土　堅くしまる。
10層　淡褐色土　砂質ロームの流れ込み。
11層　黒褐色土　9層より更に堅くしまる。
12層　黒褐色土　柔らかくきめ細かい。

0　(1：40)　1m

第27図　Ta20号竪穴遺構実測図



1層　黄褐色土　純粋なローム層。

0　（1：40）　1m

第28図　Ta21号竪穴遺構実測図

第25表　Ta21号竪穴遺構計測・説明表

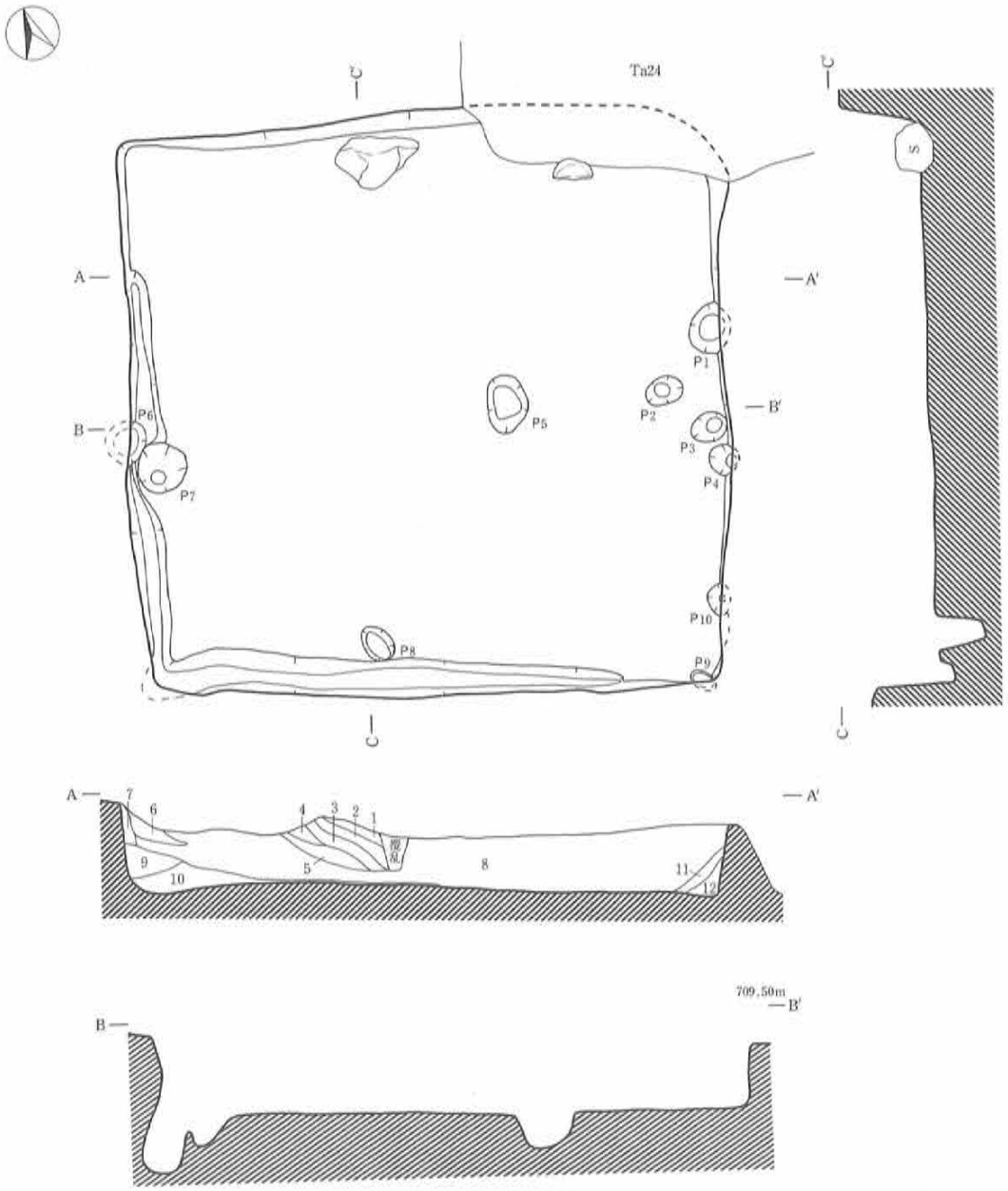
図版番号	11-1				
検出区	き-2、く-2グリット				
重複状態	Ta19に破壊されている。				
平面形態	——				
	壁長		壁高		
北壁側	——		17.0cm		
東壁側	——		——		
南壁側	——		16.0cm		
西壁側	232cm		19.5～25.5cm		
面積	—	長軸方向	N-5°-E		
張り出し部	位置	——	形状	——	
	長さ	—	幅	—	深さ	—
覆土	1層　ロームのみ。				
柱穴	北西コーナーに2個認められる。				
出土遺物	土師質土器				
備考	床面は平坦と考えられる。				

第26表　Ta22号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	12-1	検出区	き-2グリット				
重複状態	Ta24に破壊される。					平面形態	方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積	長軸方向	
壁長	348cm	334cm	334cm	310cm	9.1m²（2.8坪）	N-72.5°-W	
壁高	35.5～46.0cm	32.0～57.5cm	15.5～30.0cm	35.5～57.5cm			
張り出し部	位置	——	形状	——	覆土	12層　おおむねロームを含んだ褐色土であるが、純粋なロームが入り込んでいる。	
	長さ	—	幅	—	深さ	—	
柱穴	南東コーナーから東壁にかけて6個、南壁中央下に1個、西壁中央下で2個、床面中央東寄りで1個、計10個検出されている。						
出土遺物	美濃鉄釉、内耳土器、土師質土器						
備考	床面はおおむね平坦である。						

第27表　Ta23号竪穴遺構計測・説明表

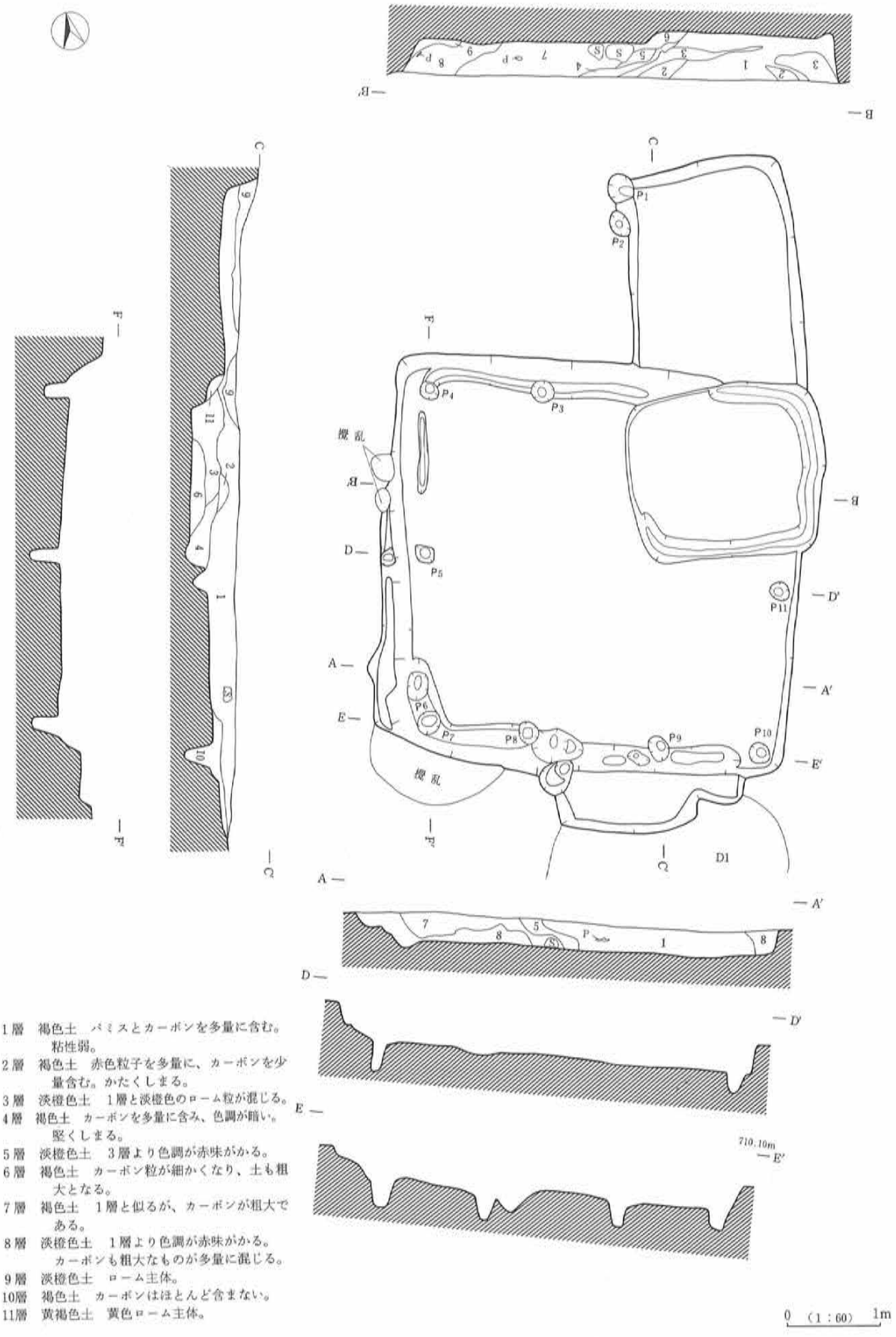
図版番号	12-2・3・4、13-1	検出区	け-3・4、こ-3・4グリット				
重複状態	D1に破壊され、D96・188を破壊している。					平面形態	方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積	長軸方向	
壁長	450cm	427cm	436cm	424cm	16.2m²（4.9坪）	N-82°-W	
壁高	30.0～39.0cm	18.0～47.0cm	14.0～32.0cm	27.0～40.0cm			
張り出し部	位置	北壁東側	形状	長方形状	覆土	11層　褐色土主体だが、白色ロームを含む層が多い。	
	長さ	239cm	幅	178cm	深さ	33cm	
柱穴	北東を除く三隅に各1個ずつ、東・西壁下中央に各1個、他に北壁下に1個、西壁下に1個、南壁下に2個、計11個、比較的規則性をもって配されている。						
出土遺物	常滑、中津川、内耳土器、土師質土器、茶臼、硯、砥石台、石器、鉄釘、刀子、石器、銅製品、元祐通宝						
備考	床面は北東コーナー部に一辺2m前後の方形の凹みがあり、周溝を有して、底面はフラットである。他の床面もおおむね平坦である。周溝は、北・西・南壁下より検出されている。他、南壁東寄りも不整形の張り出し部と考えられる。						



1層　褐色土　白黄色ローム粒を少量含む。細かい。
2層　褐色土　白黄色ローム粒を主体として、茶褐色土のブロックが少量混じる。
3層　褐色土　白黄色ローム粒を主体として、茶褐色土のブロックが多量に混じる。
4層　褐色土　白黄色ローム粒主体。
5層　褐色土　白黄色ローム粒主体。黒褐色土のブロックを少量含む。
6層　褐色土　黒色土ブロックが多量に含まれる。
7層　褐色土　6層より明るい。
8層　褐色土　白黄色ローム粒を主体として、小石（直径5～10mmが5㎠に10個位、炭化粒20㎠に2個位が混じる。
9層　褐色土　黄色砂粒を含む。
10層　褐色土　黒色土が厚さ1㎝で帯状にみられる。
11層　黄褐色土　黄色砂質が主体。
12層　褐色土　黒色土ブロックを多量に含む。

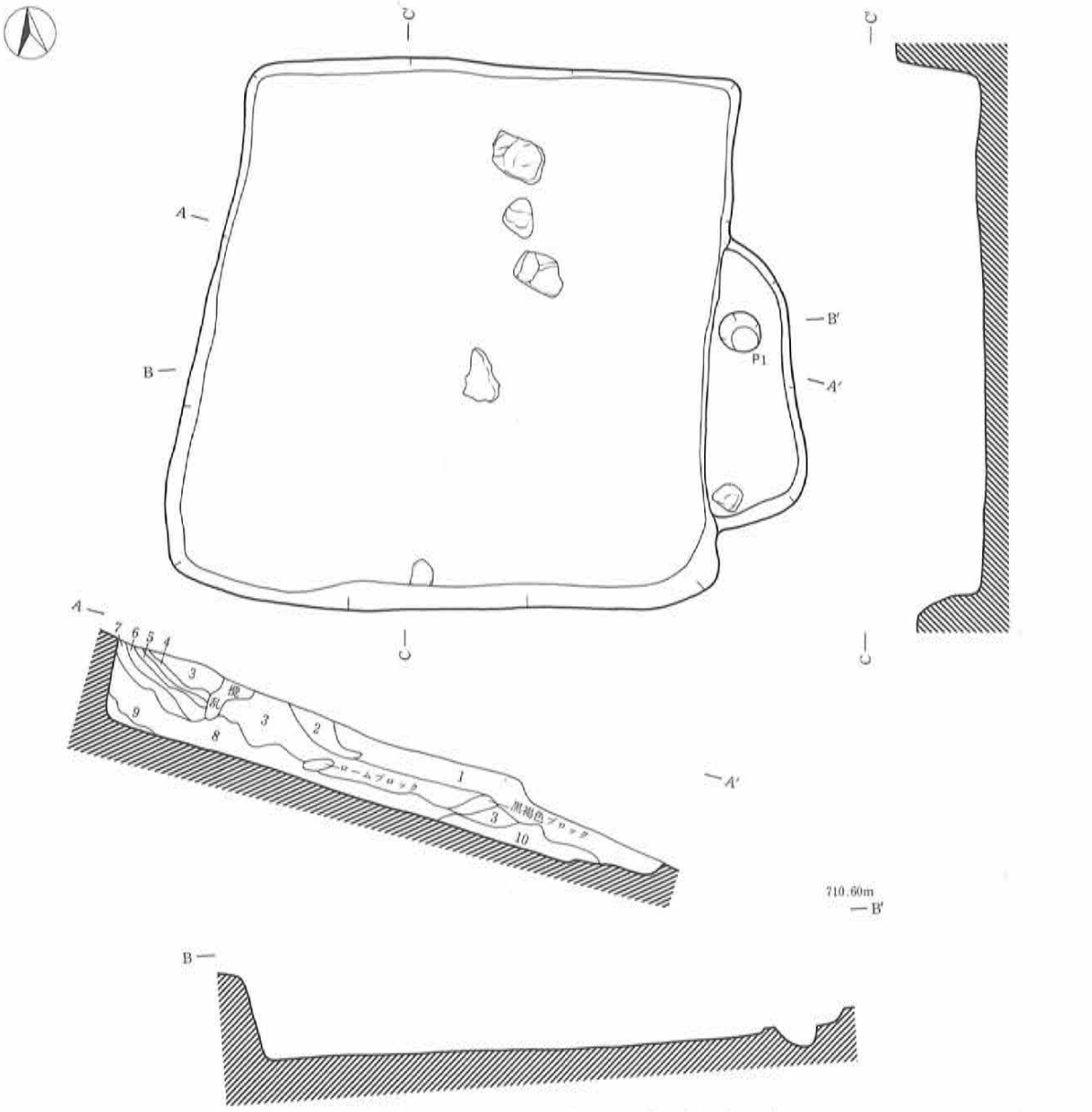
0　（1：40）　1m

第29図　Ta22号竪穴遺構実測図



1層　褐色土　パミスとカーボンを多量に含む。粘性弱。
2層　褐色土　赤色粒子を多量に、カーボンを少量含む。かたくしまる。
3層　淡橙色土　1層と淡橙色のローム粒が混じる。
4層　褐色土　カーボンを多量に含み、色調が暗い。堅くしまる。
5層　淡橙色土　3層より色調が赤味がかる。
6層　褐色土　カーボン粒が細かくなり、土も粗大となる。
7層　褐色土　1層と似るが、カーボンが粗大である。
8層　淡橙色土　1層より色調が赤味がかる。カーボンも粗大なものが多量に混じる。
9層　淡橙色土　ローム主体。
10層　褐色土　カーボンはほとんど含まない。
11層　黄褐色土　黄色ローム主体。

第30図　Ta23号竪穴遺構実測図

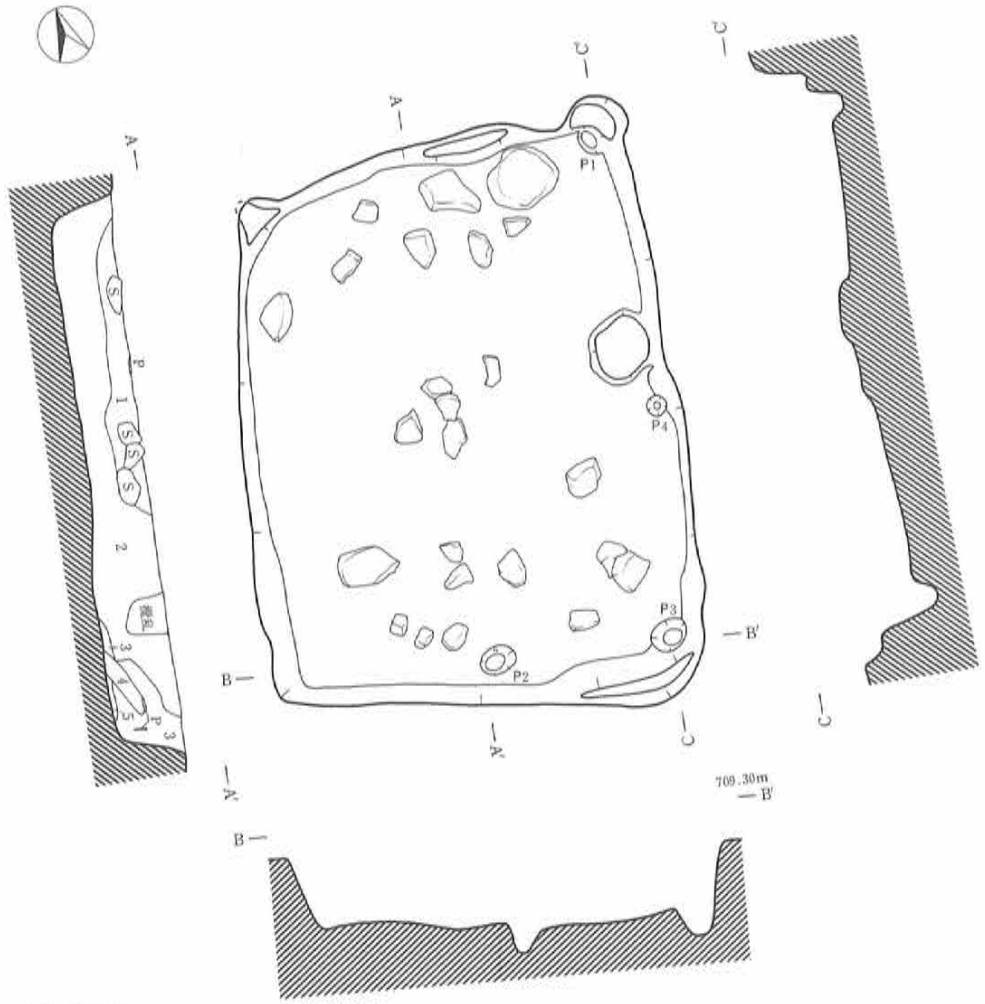


1層　褐色土　直径2～3mの白色ローム塊、炭化粒を多量に含む。灰がブロック状に混入する。
2層　褐色土　白色ローム粒を少量、黄色ローム粒を多量に含む。きめは粗い。
3層　褐色土　白色ローム粒と炭化粒を含む。きめは粗い。
4層　褐色土　白色ローム粒と黒色土を含む。きめは粗い。
5層　褐色土　白色ローム粒を含む。きめは粗い。
6層　褐色土　白色ローム粒と黒色土を含む。きめは粗い。
7層　褐色土　白色ローム粒を含み、炭化粒を若干含む。
8層　黒褐色土　パミスを少量含む。きめ細かく粘性あり。
9層　褐色土　黄色ローム粒を含む。きめは粗い。
10層　褐色土　白色ローム粒を含む。

第31図　Ta24号竪穴遺構実測図

第28表　Ta24号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	13-2			検出区	か-1・2、き-1・2グリット				
重複状態	Ta37・D33に破壊され、Ta22を破壊する。							平面形態	不整方形
	北壁側		東壁側		南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	286cm		310cm		336cm	325cm		8.4m² (2.5坪)	N-13°-W
壁高	37.0～46.0cm		9.0～18.0cm		18.0～37.0cm	34.5～46.5cm			
張り出し部	位置	東壁南寄り	形状	不整半楕円状	覆土	10層　褐色土主体で、各層ほとんどに白色ローム粒が含まれる。			
	長さ	54cm	幅	154cm	深さ	14.0cm			
柱穴	張り出し部に1個みられる。								
出土遺物	内耳土器、土師質土器								
備考	床面はおおむね平坦である。								



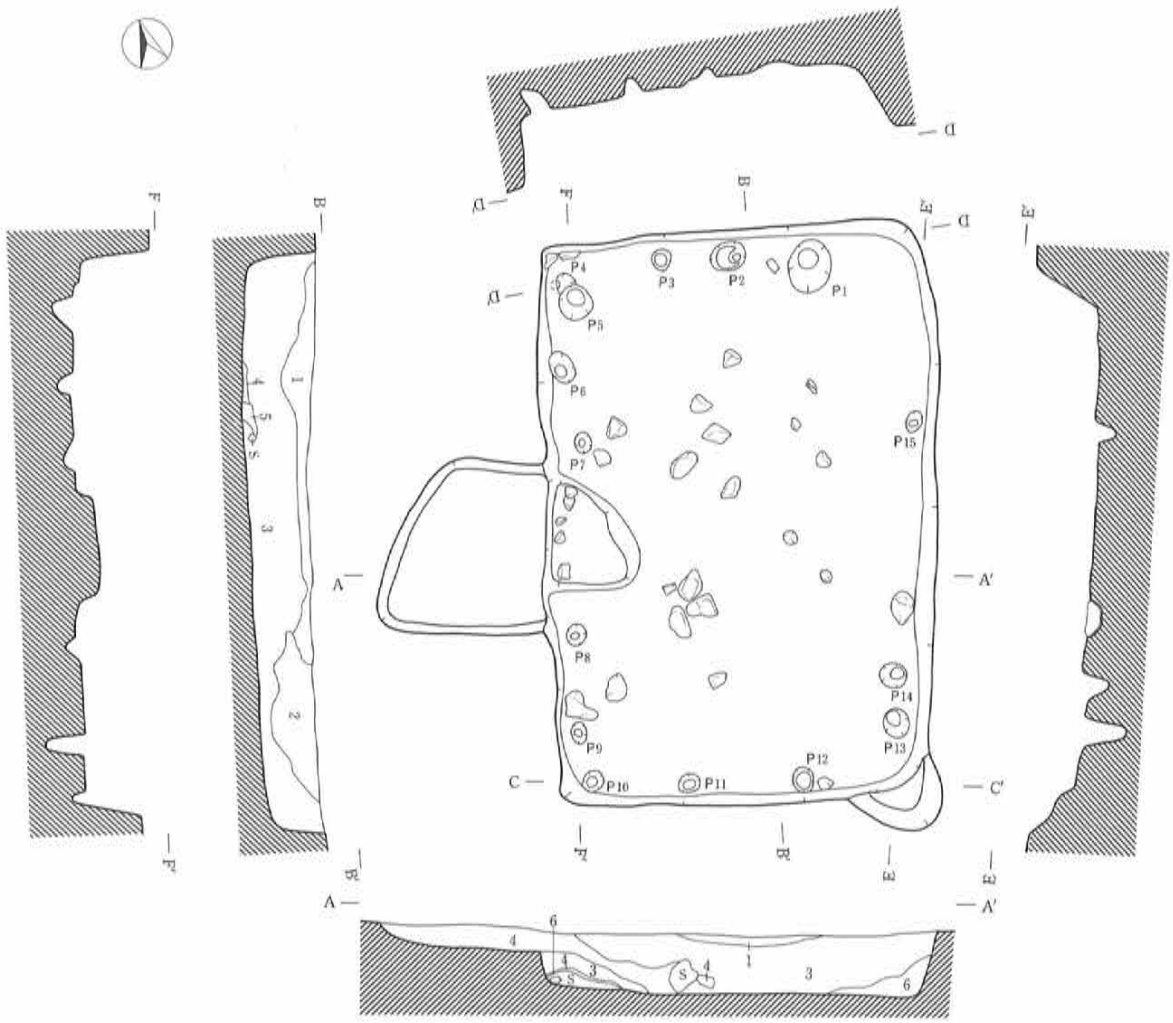
1層　別遺構。
2層　褐色土　ロームを多量に含む。
3層　黒褐色土　きめ細かく柔らかい。
4層　黄褐色土　ロームを主体とする。
5層　褐色土　きめ細かくもろい。

0　（1：40）　1m

第32図　Ta25号竪穴遺構実測図

第29表　Ta25号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	14-1・2	検出区	す-4、せ-4グリット				
重複状態	D6に破壊され、D4・5を破壊している。					平面形態	長方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積	長軸方向	
壁長	216cm	337cm	247cm	273cm	5.6m²（1.7坪）	N-15°-E	
壁高	31.0～45.0cm	17.0～35.0cm	31.5～41.0cm	37.0～43.0cm			
張り出し部	位置	―	形状	―	覆土	5層　褐色土が主体であるが、ロームが入り込む。	
	長さ	―	幅	―	深さ	―	
柱穴	北東・南東隅に各1個、東・南壁の中央下に各1個みられる。						
出土遺物	内耳土器、土師質土器、鞴羽口、土板、粉播臼						
備考	床面はやや凹凸がみられる。						



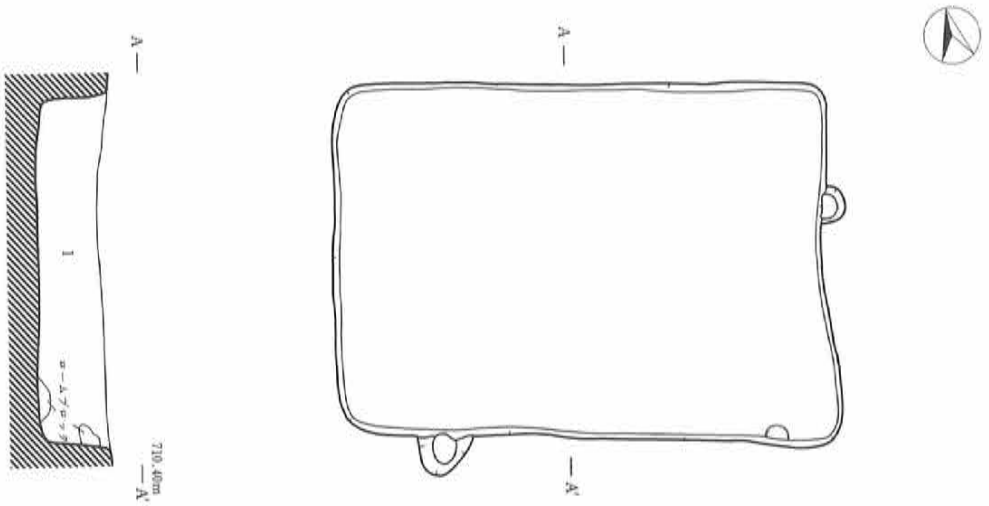
1層　褐色土　ローム粒と直径5㎜前後のパミスを含む。粘性弱。
2層　褐色土　粗大な黄色ローム主体。ガリガリしている。
3層　褐色土　炭化物と粗大なパミスを含む。粘性やや弱い。
4層　黒色土　炭化物、炭、ローム粒を含み、堅くしまる。
5層　黄褐色土　ローム粒主体。
6層　黄褐色土　粗大な黄色ローム主体。

0　(1：60)　1m

第33図　Ta26号竪穴遺構実測図

第30表　Ta26号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	15-1			検出区	さ-4グリット						
重複状態	D24に破壊されている。								平面形態	長方形	
	北壁側		東壁側		南壁側		西壁側		面積		長軸方向
壁長	318cm		460cm		292cm		442cm		12.7㎡ (3.8坪)		N-20.5°-E
壁高	51.0～57.5cm		44.0～52.0cm		34.0～50.5cm		46.0～58.0cm				
張り出し部	位置	西壁中央	形状	方形状	覆土	6層　褐色土主体であるが、ローム層が入り込んでいる。					
	長さ	123cm	幅	134cm	深さ	22.0cm					
柱穴	壁下をほぼ全周するように計15個検出されている。 張り出し部下のP7・8は一対となり、入り口に関連すると考えられる。										
出土遺物	美濃鉄釉、常滑、内耳土器、土師質土器、鉄釘、熙寧元宝、永楽通宝、元豊通宝										
備考	床面はほぼ平坦である。張り出し部下の床面上には、径80cm厚さ10～15cm程の堅い堆積がみられ、踏みかためられた様な状況を示している。										



1層　褐色土　直径10㎜前後のパミスと炭化物を含む。粘性弱。

0　(1：40)　1m

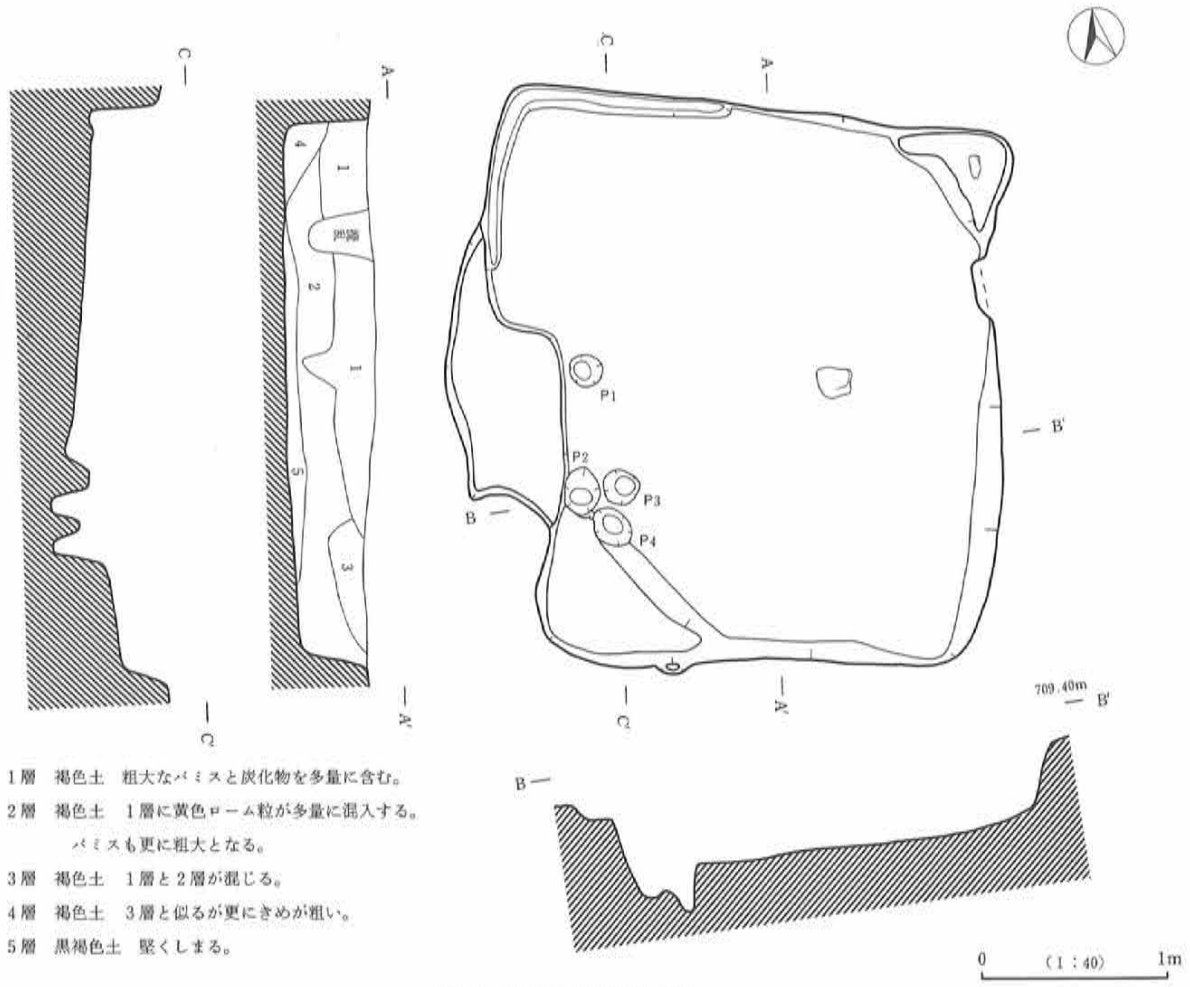
第34図　Ta27号竪穴遺構実測図

第31表　Ta27号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	15-2	検出区	き-3グリット				
重複状態	Ta20を破壊する。					平面形態	長方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	266cm	195cm	265cm	187cm		4.6㎡（1.4坪）	N-75°-W
壁高	34.0～38.0cm	24.0～37.0cm	22.0～37.0cm	20.0～35.0cm			
張り出し部	位置 ——	形状 ——	覆土	1層　褐色土のみで構成される。			
	長さ —	幅 —	深さ —				
柱穴	——						
出土遺物	美濃鉄釉、内耳土器、土師質土器						
備考	床面はほぼ平坦。						

第32表　Ta28号竪穴遺構計測・説明表

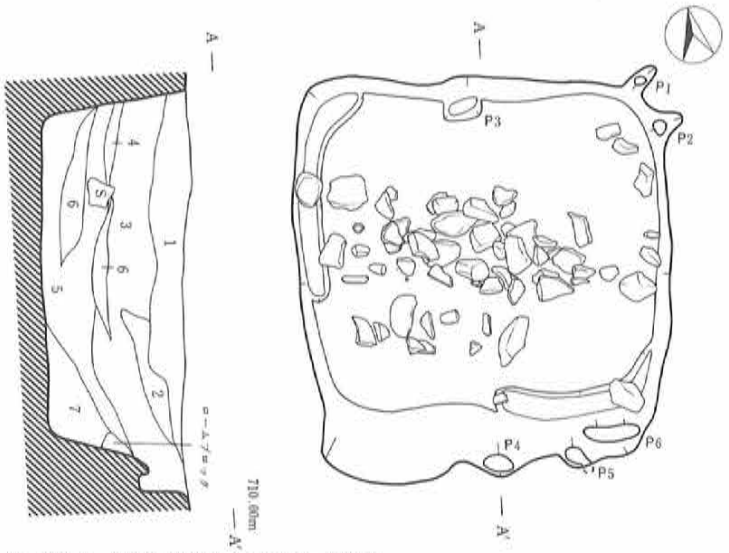
図版番号	16-1	検出区	し-5・6、す-5・6グリット				
重複状態	単独					平面形態	不整形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	298cm	285cm	302cm	317cm		5.9㎡（1.8坪）	N-11°-E
壁高	32.5～48.5cm	25.0～42.5cm	13.0～41.0cm	10.5～40.0cm			
張り出し部	位置 ——	形状 ——	覆土	5層　褐色土主体。			
	長さ —	幅 —	深さ —				
柱穴	西壁下に4個ある。						
出土遺物	白磁、内耳土器、土師質土器、刀子、熙寧元宝、祥符元宝						
備考	床面はおおむね平坦である。						



第35図　Ta28号竪穴遺構実測図

第33表　Ta29号竪穴遺構計測・説明表

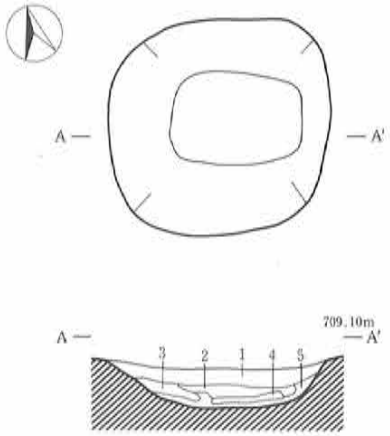
図版番号	16-2・3			検出区	こ-4グリット						
重複状態	D168を破壊する。								平面形態	方形	
	北壁側		東壁側		南壁側		西壁側		面積		長軸方向
壁長	192cm		194cm		190cm		208cm		2.9m² (0.9坪)		N-11°-E
壁高	77cm		73cm		75cm		75cm				
張り出し部	位置	—	形状	—	覆土	7層　褐色土・ローム・灰がサンドイッチ状に堆積する。					
	長さ	—	幅	—	深さ	—					
柱穴	北東コーナーに2個、南東コーナーに2個、北・南壁中央に各1個ずつ計6個みられる。										
出土遺物	常滑、内耳土器、土師質土器、土板、紡錘車、鉄釘、鉄棍、熙寧元宝、坩堝										
備考	床面はおおむね平坦である。										



1層　褐色土　炭化物と極小パミスを含む。粘性弱。
2層　黒灰色土　灰層。
3層　褐色土　多量の炭化物とパミスおよび少量のロームを含む。
4層　黄褐色土　ローム層。
5層　褐色土　3層より色調が暗く、きめが細かい。ロームを含まない。
6層　淡橙色土　ローム層。
7層　褐色土　粗大なパミスと礫を含む。

0　(1：40)　1m

第36図　Ta29号竪穴遺構実測図



1層　褐色土　灰を含む。
2層　漆黒色土　炭化粒の単一層。
3層　褐色土　灰と炭化粒を含む。
4層　灰白色土　灰の単一層。
5層　黒褐色土　多量の炭化粒と灰を含む。

0　(1：20)　0.5m

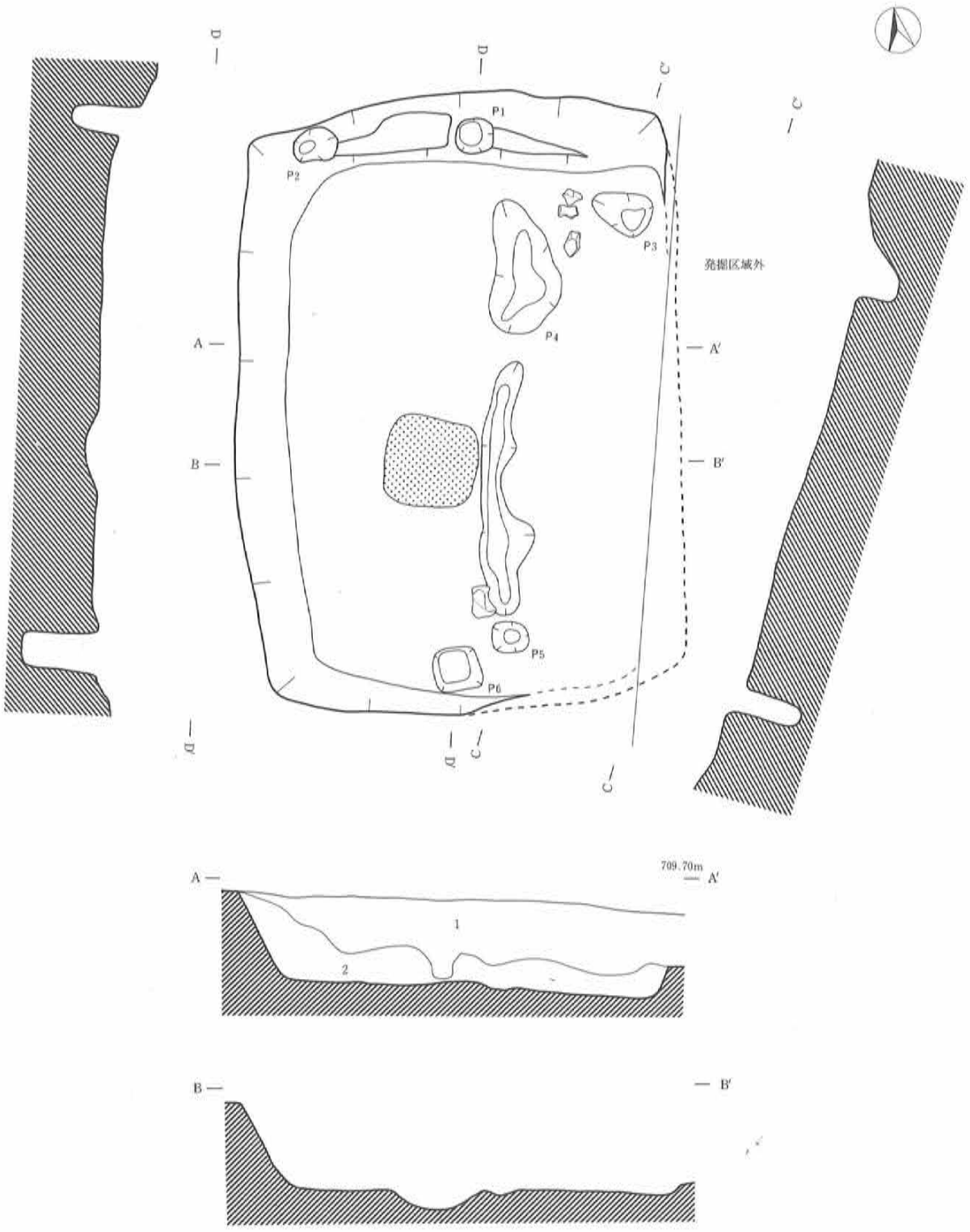
第37図　Ta30号竪穴遺構炉址実測図

第34表　Ta30号竪穴遺構炉址計測・説明表

平面形態	方形	断面形状	鍋底形		
長軸	134cm	短軸	131cm	深さ	13cm
覆土	5層，何れも灰、炭を多量に含む。				

第35表　Ta30号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	17-1				
検出区	く-1、け-1グリット				
重複状態	単独				
平面形態	長方形				
	壁長		壁高		
北壁側	396cm		24.0～44.0cm		
東壁側	(405cm)		4.5～8.5cm		
南壁側	(265cm)		9.5～52.5cm		
西壁側	384cm		52.5～58.5cm		
面積	8.2m²(2.5坪)	長軸方向	N-12°-E		
張り出し部	位置	―	形状	―	
	長さ	―	幅	―	深さ ―
覆土	1層　白色ロームを含む褐色土。				
柱穴	南・北壁中央に各1個、北東・北西コーナーに各1個、南壁下中央に2個認められる。				
出土遺物	内耳土器、土師質土器、粉播臼、坩堝				
備考	床面は平坦である。 中央南西寄りに方形の炉が存在する。 また、近接して溝が掘り込まれている。				

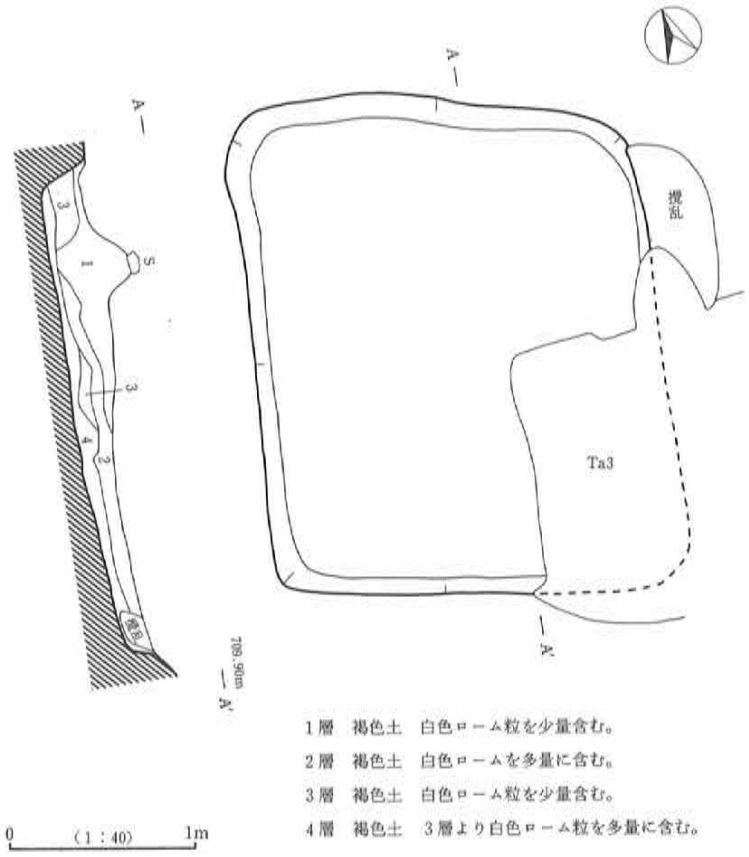


1層　耕作土　基本層序Ⅰ。

2層　褐色土　白色ローム粒を多量、炭化粒子を僅かに含む。

0　(1：40)　1m

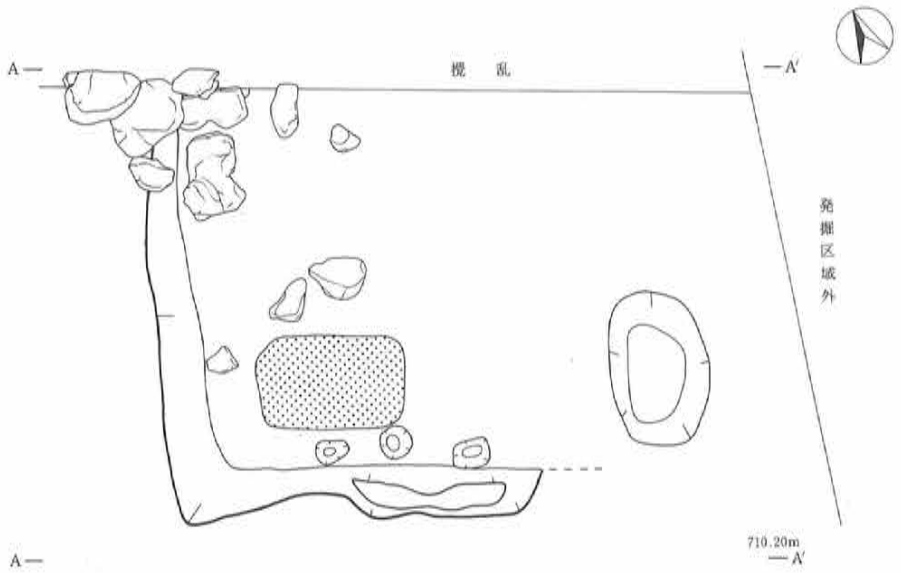
第38図　Ta30号竪穴遺構実測図



第39図　Ta31号竪穴遺構実測図

第36表　Ta31号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	4－2	検出区	か－0・1、き－1グリット				
重複状態	Ta3に破壊される。					平面形態	方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	218cm	――	――	268cm		4.7m²（1.4坪）	N-19°-E
壁高	15.0～53.0cm	1.5～6.5cm	20.0～28.0cm	9.5～53.5cm			
張り出し部	位置 ――	形状 ――	覆土	4層　褐色土を基調とし、白色ロームを含む。			
	長さ ―	幅 ―	深さ ―				
柱穴	――						
出土遺物	粉播臼						
備考	床面はおおむね平坦である。						



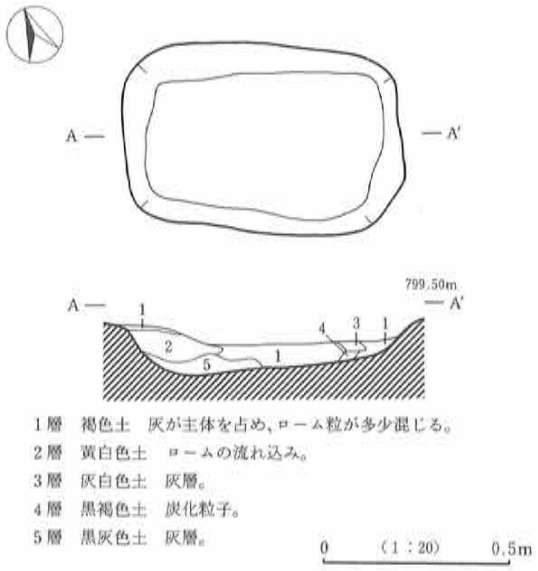
1～3層　耕作土　基本層序Ⅰ。
4層　橙白色土　白色ロームブロック。
5層　黒褐色土　しまりあり。
6層　褐色土　白色ロームを多量に含む。
7層　橙白色土　ロームを主体とする。
8層　褐色土　ロームを少量含む。
9層　褐色土　白色ロームを多量に含む。

0　（1：40）　1m

第40図　Ta32号竪穴遺構実測図

第37表　Ta32号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	17-4			検出区	お-0、か-0・1グリット						
重複状態	単独								平面形態	方形	
	北壁側		東壁側		南壁側		西壁側		面積		長軸方向
壁長	——		——		——		——		——		——
壁高	——		——		7.5～32.0cm		57.0～63.0cm				
張り出し部	位置	——	形状	——	覆土	3層　褐色土とローム層が入り組んでいる。					
	長さ	—	幅	—	深さ	—					
柱穴	南壁下に3個、南壁下東寄りに1個検出されている。										
出土遺物	土師質土器、鉄釘、刀子、洪武通宝										
備考	床面はほぼ平坦である。南西コーナーに方形の炉をもつ。										



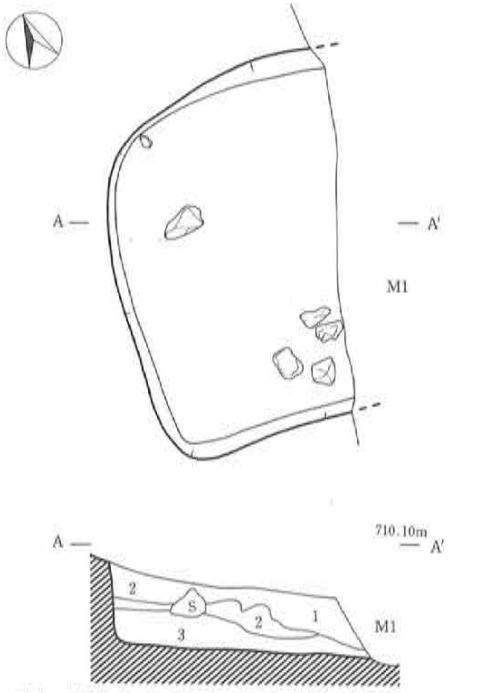
1層　褐色土　灰が主体を占め、ローム粒が多少混じる。
2層　黄白色土　ロームの流れ込み。
3層　灰白色土　灰層。
4層　黒褐色土　炭化粒子。
5層　黒灰色土　灰層。

0　（1：20）　0.5m

第41図　Ta32号竪穴遺構炉址実測図

第38表　Ta32号竪穴遺構炉址計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	鍋底形
長軸	75cm	短軸	50cm	深さ	12cm
覆土	5層，灰主体で1部に炭化粒子が濃くみられる。		



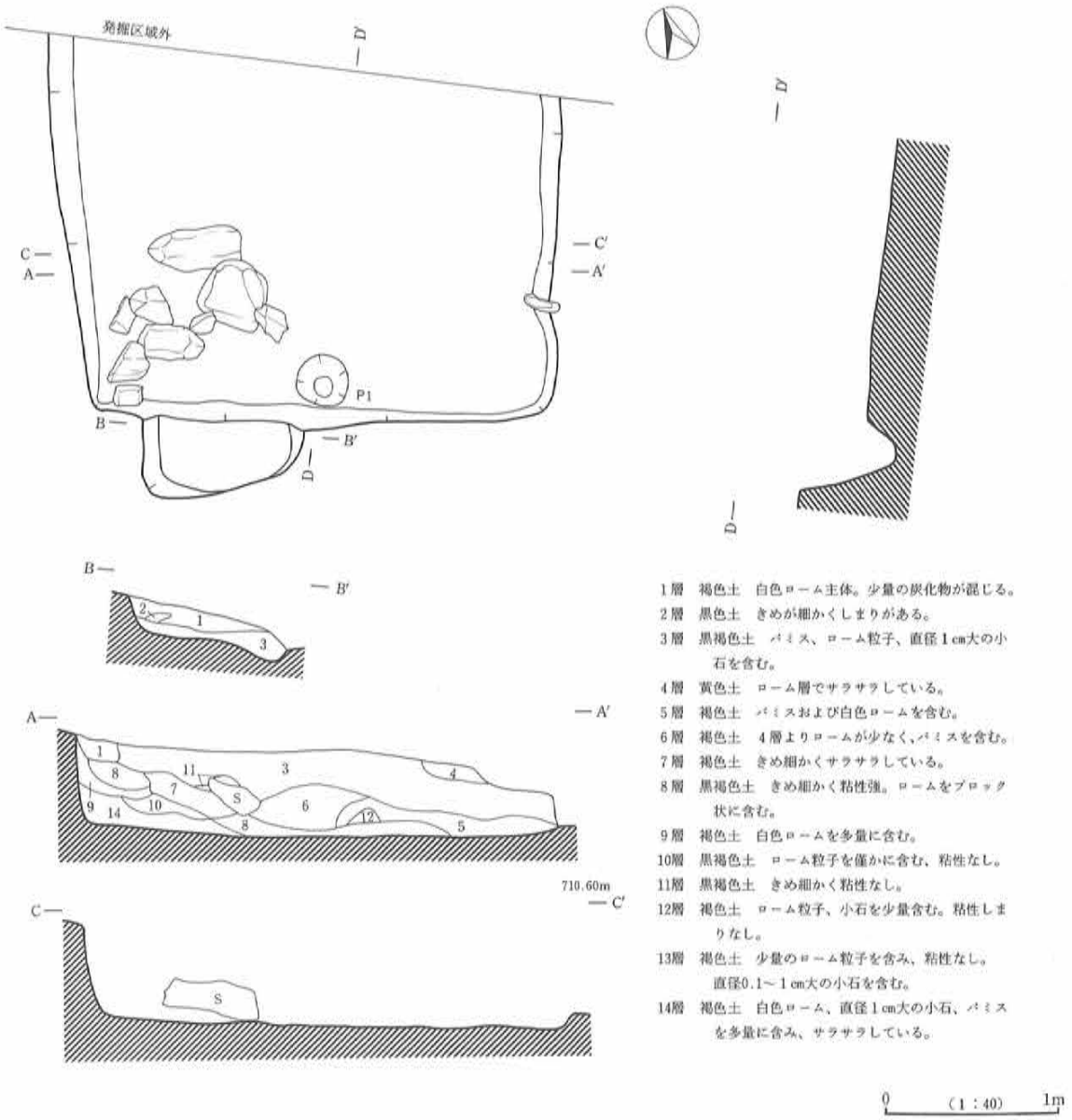
1層　白褐色土　白色ローム粒が主体。
2層　褐色土　白色ローム粒とパミスが僅かに混じる。
　　堅くしまる。
3層　褐色土　1層と似るが褐色土が多く混じる。

0　（1：40）　1m

第42図　Ta33号竪穴遺構実測図

第39表　Ta33号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	——	検出区	く-2グリット				
重複状態	M1に破壊される。					平面形態	——
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積	長軸方向	
壁長	——	——	——	177cm	——	——	
壁高	37.0～46.0cm	——	22.0～46.0cm	22.0～24.0cm			
張り出し部	位置 ——	形状 ——	覆土	3層　褐色土と白色ロームが入り組む。			
	長さ —	幅 —	深さ —				
柱穴	——						
出土遺物	——						
備考	床面はほぼ平坦。						

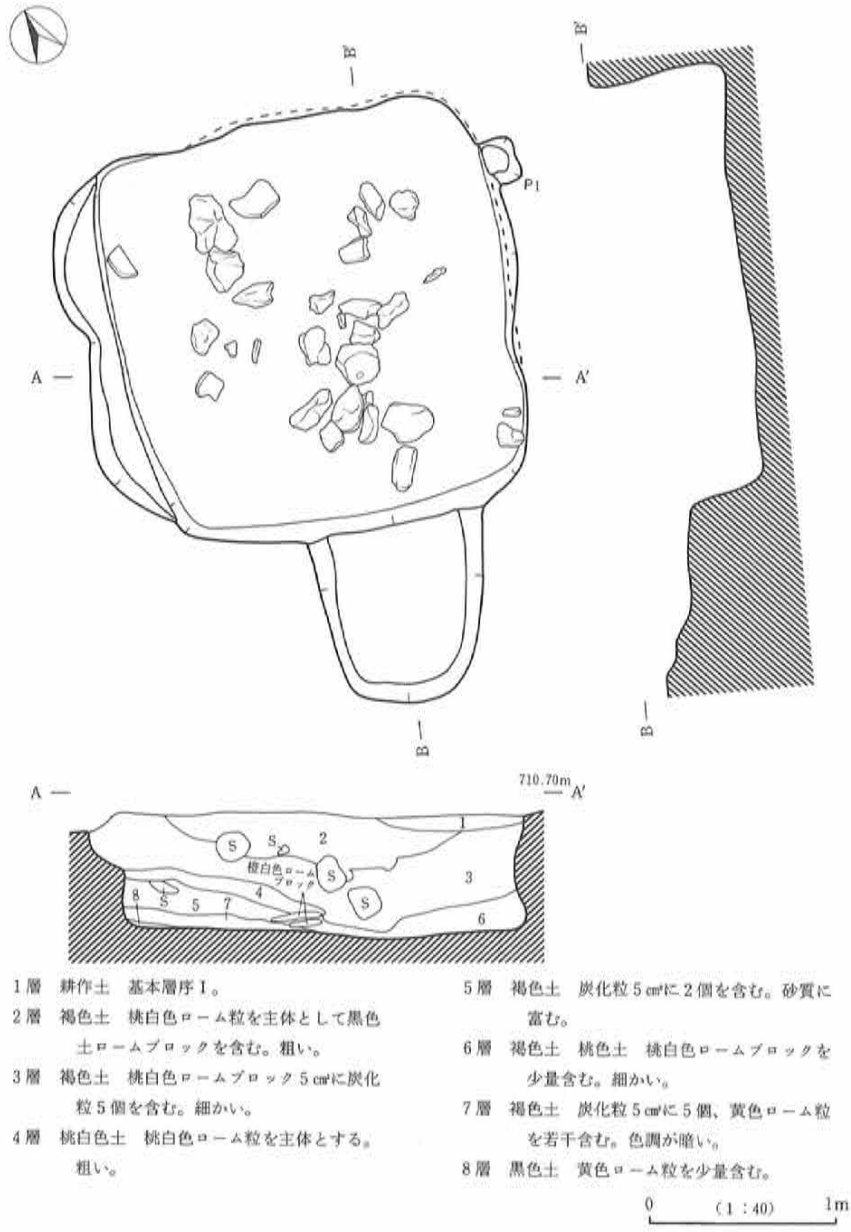


1層　褐色土　白色ローム主体。少量の炭化物が混じる。
2層　黒色土　きめが細かくしまりがある。
3層　黒褐色土　パミス、ローム粒子、直径1cm大の小石を含む。
4層　黄色土　ローム層でサラサラしている。
5層　褐色土　パミスおよび白色ロームを含む。
6層　褐色土　4層よりロームが少なく、パミスを含む。
7層　褐色土　きめ細かくサラサラしている。
8層　黒褐色土　きめ細かく粘性強。ロームをブロック状に含む。
9層　褐色土　白色ロームを多量に含む。
10層　黒褐色土　ローム粒子を僅かに含む、粘性なし。
11層　黒褐色土　きめ細かく粘性なし。
12層　褐色土　ローム粒子、小石を少量含む。粘性しまりなし。
13層　褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性なし。直径0.1～1cm大の小石を含む。
14層　褐色土　白色ローム、直径1cm大の小石、パミスを多量に含み、サラサラしている。

第43図　Ta34号竪穴遺構実測図

第40表　Ta34号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	18-1			検出区	お-1グリット						
重複状態	M1を破壊する。								平面形態	——	
	北壁側		東壁側		南壁側		西壁側		面積		長軸方向
壁長	——		——		270cm		——		——		——
壁高	——		5.5～7.5cm		5.5～50.5cm		50.0～54.5cm				
張り出し部	位置	南壁西寄り	形状	半円状	覆土	14層　黒褐色土・褐色土・ロームが複雑に入り組んだ堆積状況を示す。					
	長さ	45cm	幅	92cm	深さ	14cm					
柱穴	南壁中央に1個検出されている。										
出土遺物	青磁、内耳土器、土師質土器										
備考	床面はほぼ平坦である。										



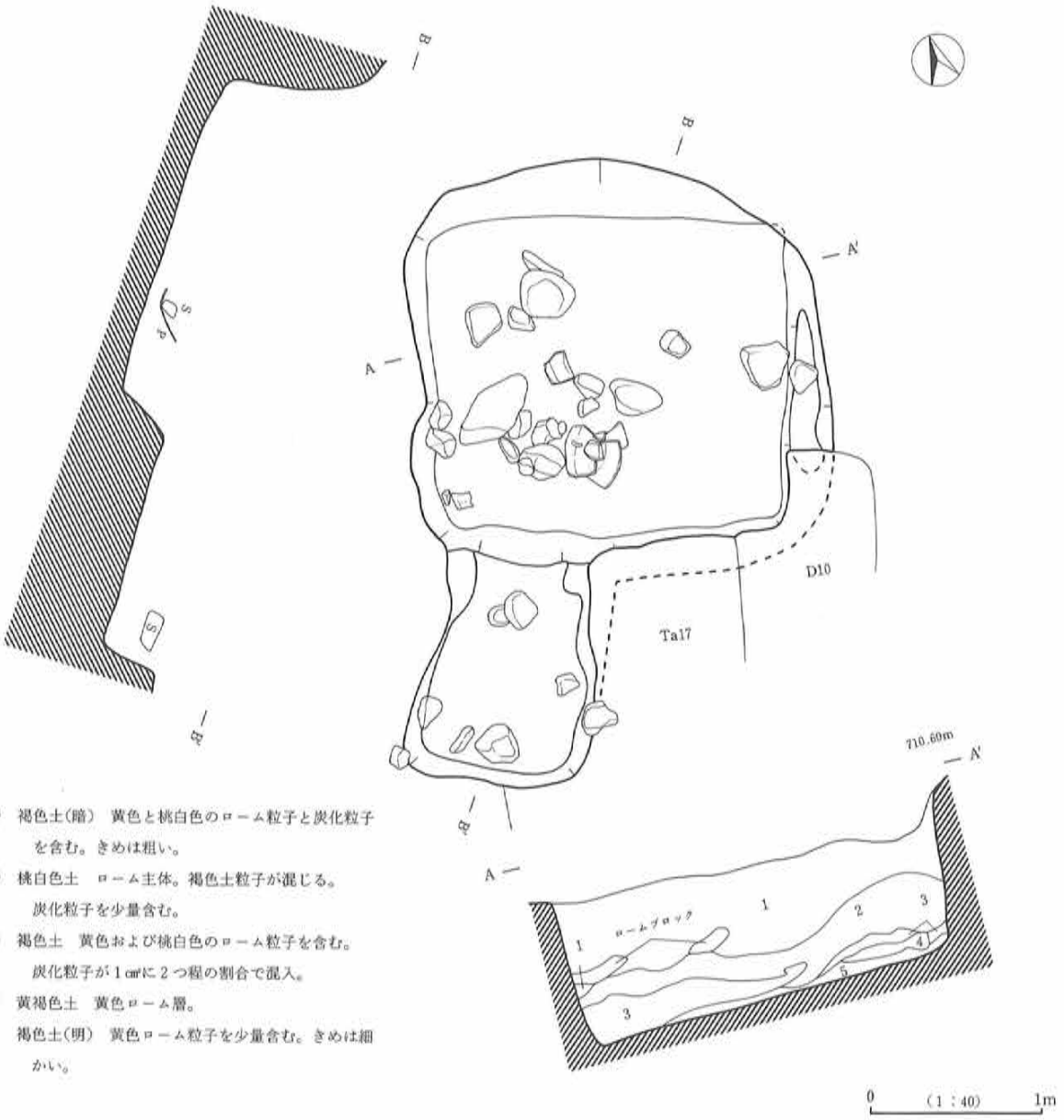
1層　耕作土　基本層序Ⅰ。
2層　褐色土　桃白色ローム粒を主体として黒色土ロームブロックを含む。粗い。
3層　褐色土　桃白色ロームブロック5㎝に炭化粒5個を含む。細かい。
4層　桃白色土　桃白色ローム粒を主体とする。粗い。
5層　褐色土　炭化粒5㎝に2個を含む。砂質に富む。
6層　褐色土　桃色土　桃白色ロームブロックを少量含む。細かい。
7層　褐色土　炭化粒5㎝に5個、黄色ローム粒を若干含む。色調が暗い。
8層　黒色土　黄色ローム粒を少量含む。

0　（1：40）　1m

第44図　Ta35号竪穴遺構実測図

第41表　Ta35号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	18-2・3			検出区	お-3グリット						
重複状態	D21・196を破壊する。								平面形態	方形	
	北壁側		東壁側		南壁側		西壁側		面積		長軸方向
壁長	232cm		220cm		214cm		222cm		4.2㎡（1.3坪）		N-73°-W
壁高	61.5～73.0cm		58.5～73.0cm		55.0～58.5cm		50.5～61.5cm				
張り出し部	位置	南壁	形状	長方形状	覆土	8層　褐色土とロームが、サンドイッチ状に堆積している。					
	長さ	90cm	幅	83cm	深さ	23.0cm					
柱穴	——										
出土遺物	内耳土器、土師質土器、硯、石器										
備考	床面はほぼ平坦である。										

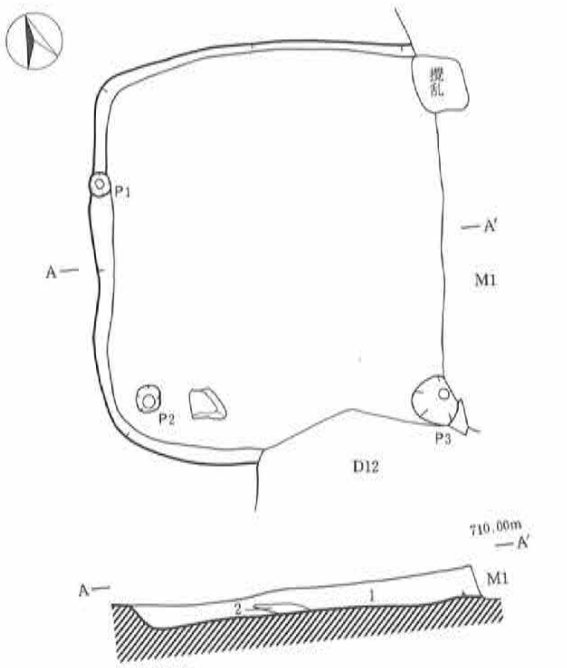


1層　褐色土(暗)　黄色と桃白色のローム粒子と炭化粒子を含む。きめは粗い。
2層　桃白色土　ローム主体。褐色土粒子が混じる。炭化粒子を少量含む。
3層　褐色土　黄色および桃白色のローム粒子を含む。炭化粒子が1㎠に2つ程の割合で混入。
4層　黄褐色土　黄色ローム層。
5層　褐色土(明)　黄色ローム粒子を少量含む。きめは細かい。

第45図　Ta36号竪穴遺構実測図

第42表　Ta36号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	19-1・2、20-1・2			検出区	お-4・5、か-5グリット						
重複状態	D10に破壊され、D17、Ta51を破壊する。								平面形態	方形	
	北壁側		東壁側		南壁側		西壁側		面積		長軸方向
壁長	224cm		220cm		254cm		231cm		3.6㎡(1.1坪)		N-16.5°-E
壁高	71.5～87.0cm		94.0～98.0cm		48.0～76.5cm		76.5～84.5cm				
張り出し部	位置	南壁西寄り	形状	長方形状			覆土	5層　ロームを含む褐色土と純粋なロームがサンドイッチ状に入り組んでいる。			
	長さ	140cm	幅	95cm	深さ	53.5cm					
柱穴	——										
出土遺物	白磁、内耳土器、土師質土器、粉播臼、刀子										
備考	床面はほぼ平坦である。										



1層　褐色土　橙色と白色ロームが混じる。

2層　褐色土

0　（1：40）　1m

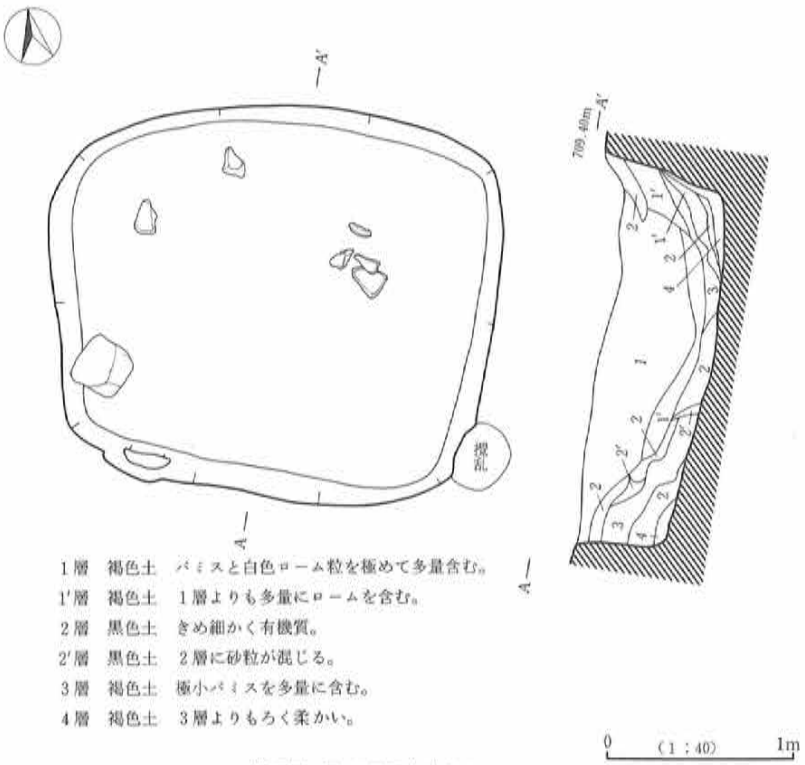
第46図　Ta37号竪穴遺構実測図

第43表　Ta37号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	——	検出区	か-1・2、き-1・2グリット				
重複状態	Ta24、D33、M1に破壊される。					平面形態	——
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	——	——	——	212cm		——	——
壁高	7.0～13.0cm	——	13.0～15.5cm	7.0～12.0cm			
張り出し部	位置 ——	形状 ——	覆土	2層　褐色土主体であるが、ロームが混ざっている。			
	長さ —	幅 —	深さ —				
柱穴	西壁北寄り、南西隅、南壁に各1個ずつ検出されている。						
出土遺物	——						
備考	床面はおおむね平坦である。						

第44表　Ta38号竪穴遺構計測・説明表

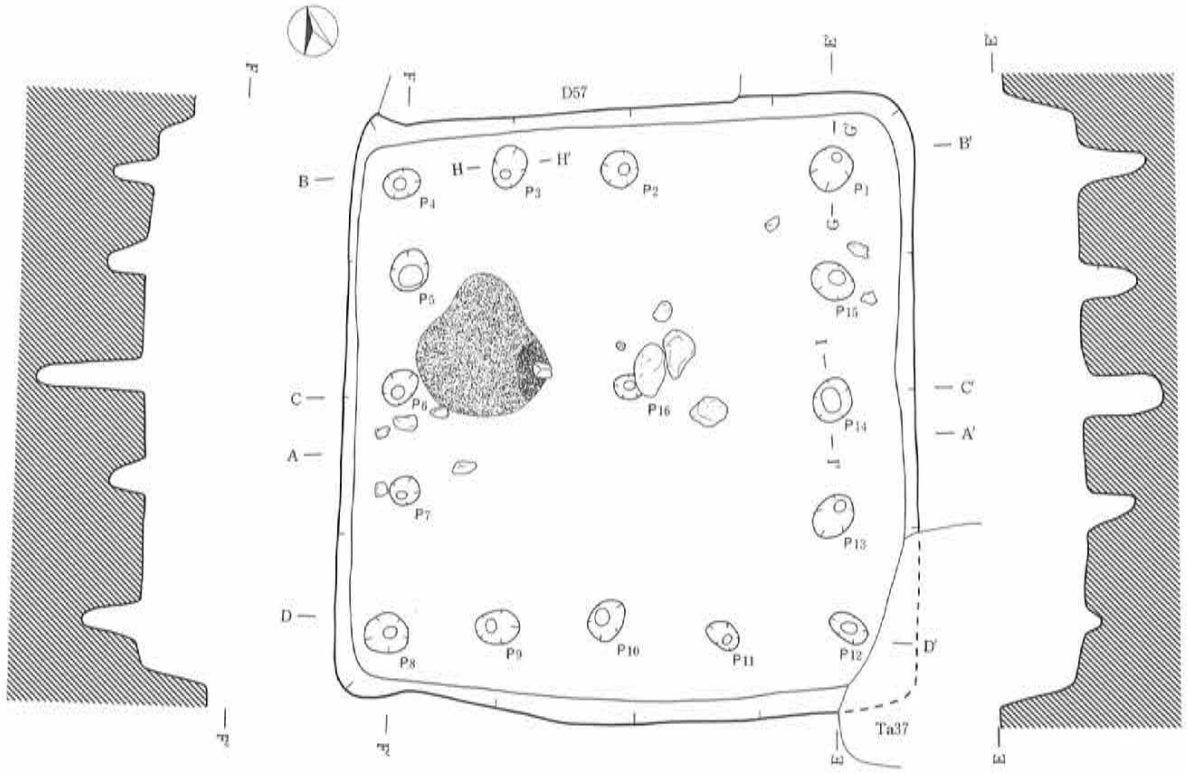
図版番号	21-1・2・3、22-1	検出区	え-10・11、お-10・11グリット				
重複状態	Ta39、H13を破壊する。					平面形態	方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	242cm	200cm	214cm	174cm		3.6㎡（1.1坪）	N-75°-W
壁高	33.0～58.0cm	63.0～65.0cm	54.0～73.0cm	41.0～49.0cm			
張り出し部	位置 ——	形状 ——	覆土	6層　褐色ロームを含む褐色土、ロームが細かく入り組んだ堆積状況を示す。			
	長さ —	幅 —	深さ —				
柱穴	——						
出土遺物	内耳土器						
備考	床面はほぼ平坦であるが、中央部が僅かに凹む。						

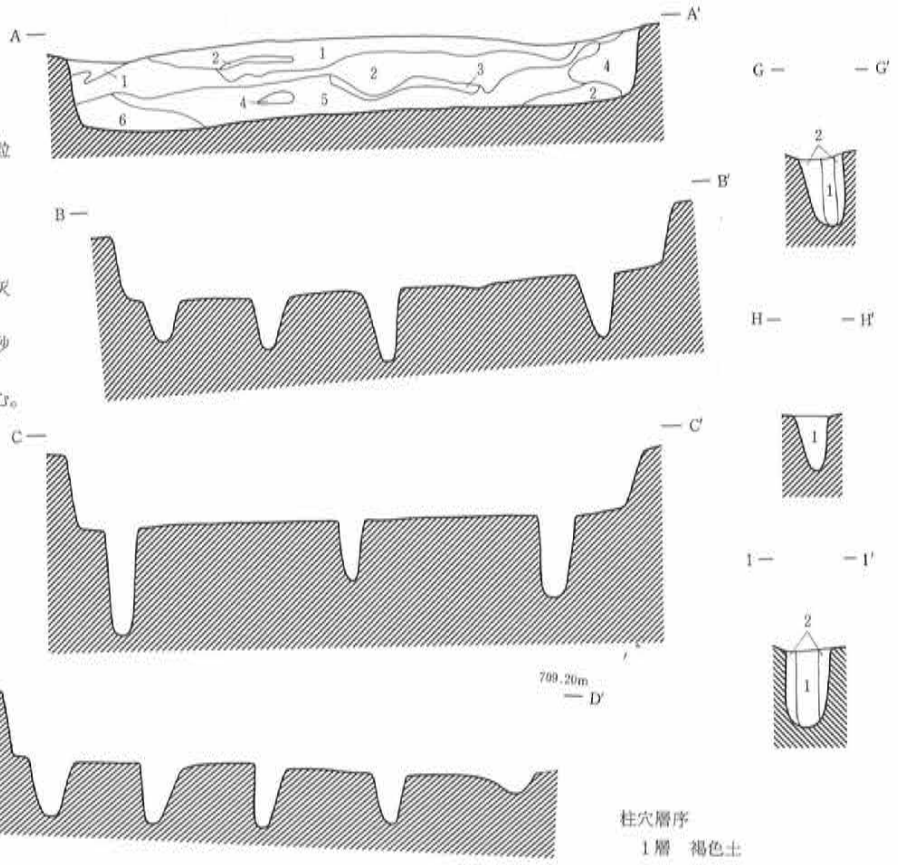


第47図　Ta38号竪穴遺構実測図

第45表　Ta39号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	21-3、22-1			検出区	え-11・12、お-11グリット						
重複状態	Ta38、D57に破壊され、H13、D68・200・201を破壊する。								平面形態	方形	
	北壁側		東壁側		南壁側		西壁側		面積		長軸方向
壁長	448cm		490cm		(467cm)		469cm		19.4㎡ (5.9坪)		N-15°-E
壁高	44.0～64.0cm		54.0～59.0cm		50.0～63.0cm		24.0～55.0cm				
張り出し部	位置	——	形状	——	覆土	6層　褐色土主体だが、灰・砂層も帯状、ブロック状に認められる。					
	長さ	—	幅	—	深さ	—					
柱穴	壁下の床面上を廻るように15個、床面中央に1個配される。北壁下のP1からP2の間隔のみが広い。										
出土遺物	白磁、青磁、美濃鉄釉、美濃灰釉、常滑、内耳土器、土師質土器、粉擂臼、茶臼										
備考	床面はほぼ平坦である。										





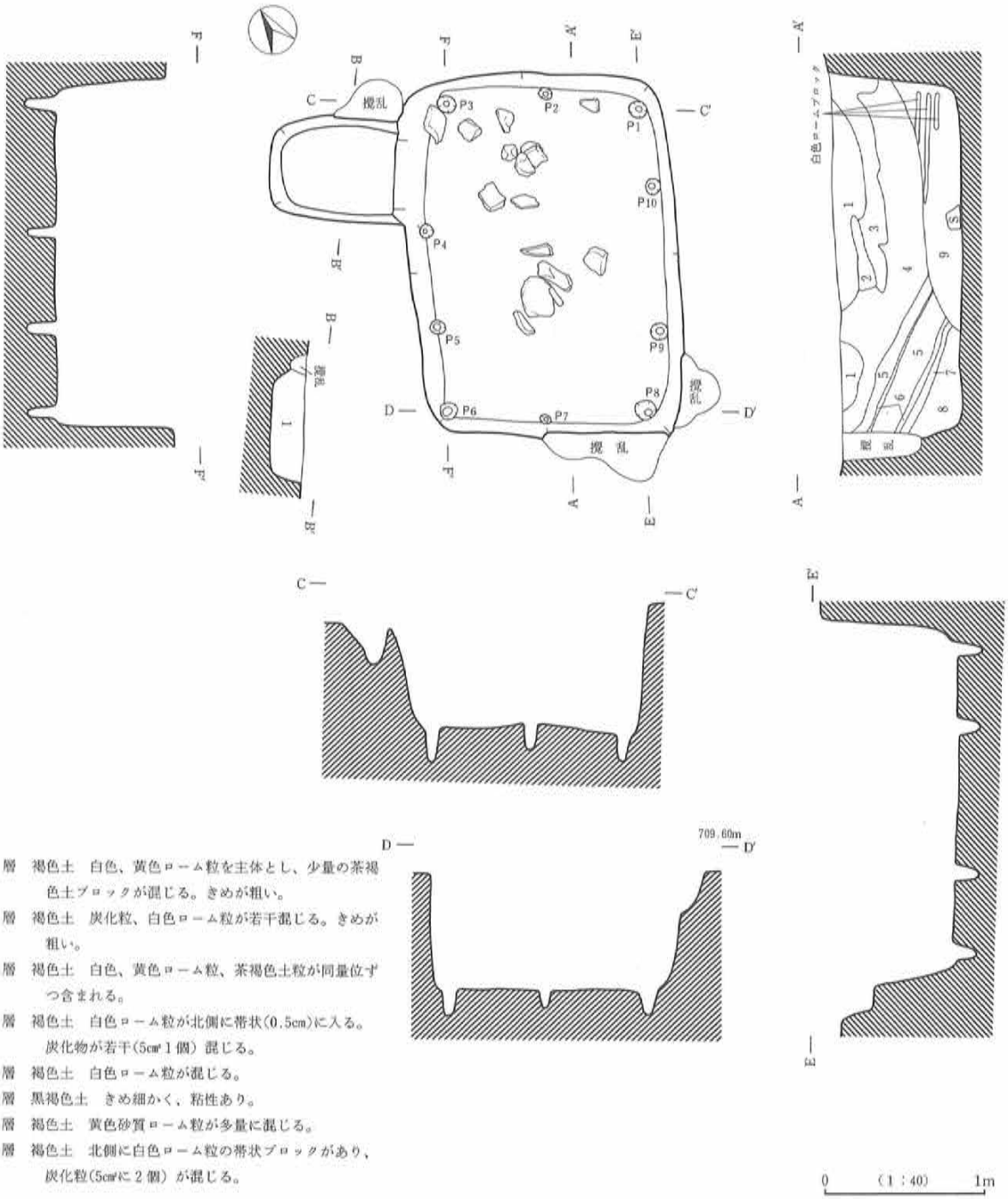
1層　褐色土　灰、カーボン、ローム粒を含む。ややしまる。
2層　褐色土　砂粒を多量に含む。粘性弱。
3層　褐色土　灰を多量に含む。
4層　褐色土　3層より更に多量に灰を含む。
5層　褐色土　2層よりきめ細かい砂粒を含む。
6層　褐色土　5層にカーボンを含む。

柱穴層序
1層　褐色土
2層　淡紫色土　ローム粒が主体で褐色土が僅かに含まれる。

炭化物が特に濃い範囲
炭化物範囲

0　(1：60)　1m

第48図　Ta39号竪穴遺構実測図

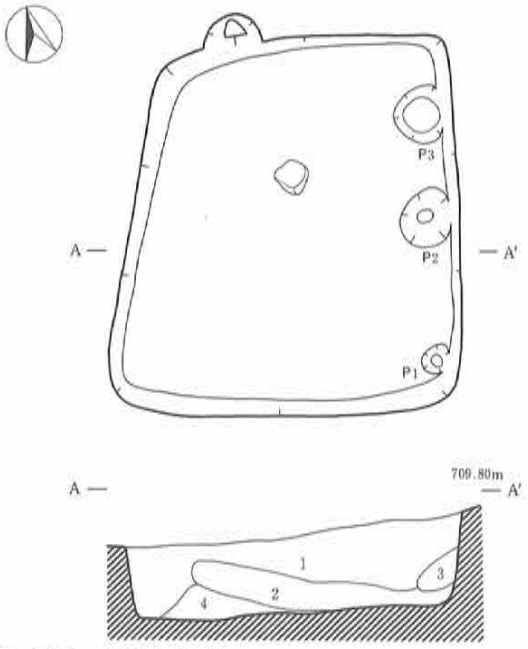


1層　褐色土　白色、黄色ローム粒を主体とし、少量の茶褐色土ブロックが混じる。きめが粗い。
2層　褐色土　炭化粒、白色ローム粒が若干混じる。きめが粗い。
3層　褐色土　白色、黄色ローム粒、茶褐色土粒が同量位ずつ含まれる。
4層　褐色土　白色ローム粒が北側に帯状(0.5cm)に入る。炭化物が若干(5cm²1個)混じる。
5層　褐色土　白色ローム粒が混じる。
6層　黒褐色土　きめ細かく、粘性あり。
7層　褐色土　黄色砂質ローム粒が多量に混じる。
8層　褐色土　北側に白色ローム粒の帯状ブロックがあり、炭化粒(5cm²に2個)が混じる。

第49図　Ta40号竪穴遺構実測図

第46表　Ta40号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	22-2	検出区	お-12グリット				
重複状態	単独					平面形態	長方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積	長軸方向	
壁長	165cm	225cm	160cm	220cm	2.9m²（0.9坪）	N-28°-E	
壁高	68.0～80.0cm	71.0～73.0cm	72.0～76.0cm	62.0～67.0cm			
張り出し部	位置 西壁北寄り	形状 長方形状	覆土	8層　おおむね白色ローム混じりの褐色土主体であるが、純粋な白色ロームも帯状に入り込んでいる。			
	長さ 73cm	幅 67cm	深さ 19cm				
柱穴	壁下を廻るように計10個検出されている。						
出土遺物	内耳土器、土師質土器、粉播臼、坩堝						
備考	床面はほぼ平坦である。						



1層　褐色土　小礫を多量に含む。
2層　黒褐色土　有機質できめ細かい。
3層　黄褐色土　黄色ローム主体。
4層　黒褐色土　2層と似るがきめがやや粗い。
　　床面に薄く付着する。

0　（1：40）　1m

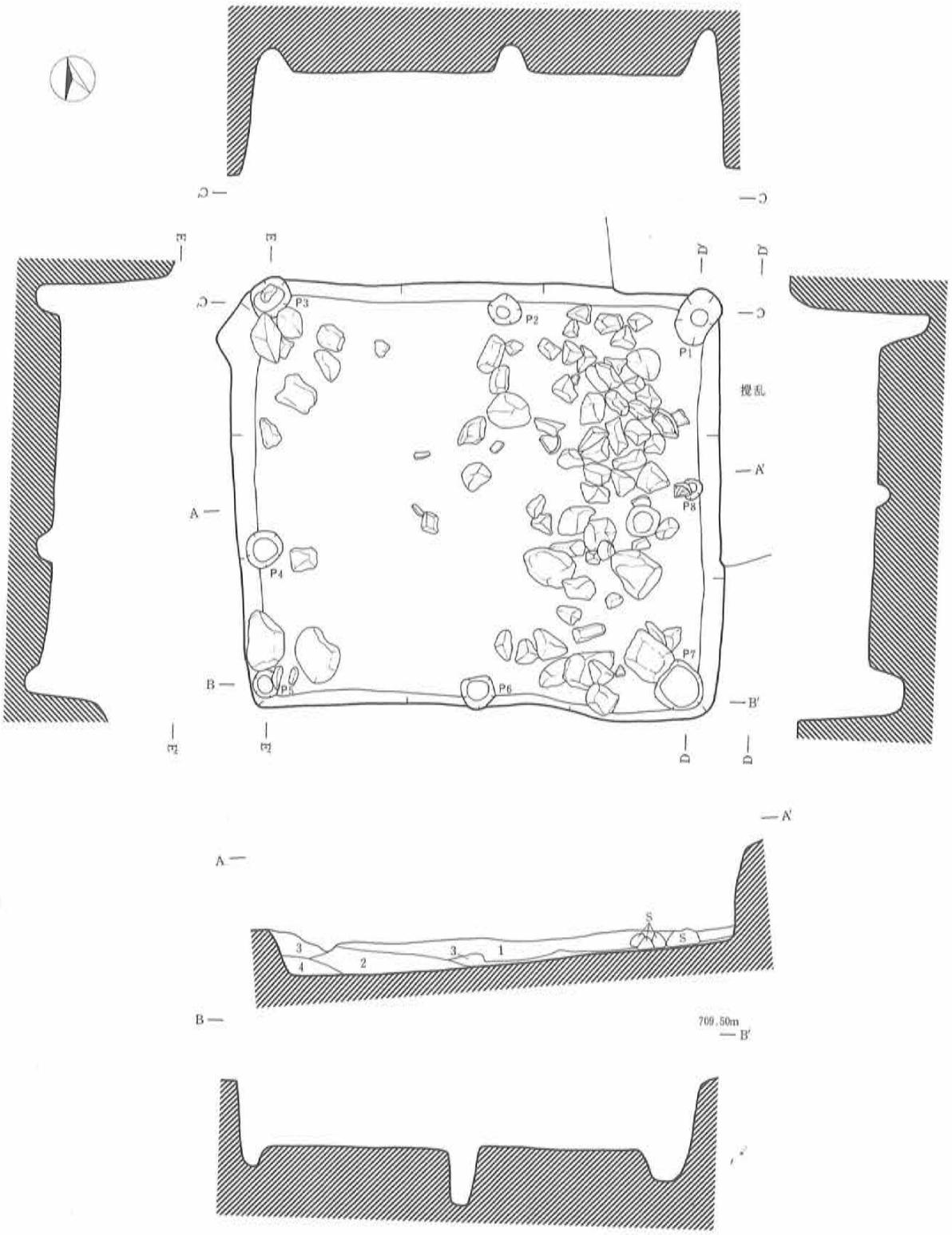
第50図　Ta41号竪穴遺構計測・説明表

第47表　Ta41号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	24-3				
検出区	え-9グリット				
重複状態	D143、H13を破壊する。				
平面形態	不整長方形				
	壁長	壁高			
北壁側	155cm	40.0～54.0cm			
東壁側	203cm	57.0～61.0cm			
南壁側	198cm	31.0～36.0cm			
西壁側	198cm	24.0～40.0cm			
面積	2.8m²(0.8坪)	長軸方向	N-20°-E		
張り出し部	位置 ——	形状 ——			
	長さ —	幅 —	深さ —		
覆土	4層　褐色土・黒褐色土・ロームが入り組む。				
柱穴	東壁下に3個認められる。				
出土遺物	——				
備考	床面はおおむね平坦である。				

第48表　Ta42号竪穴遺構計測・説明表

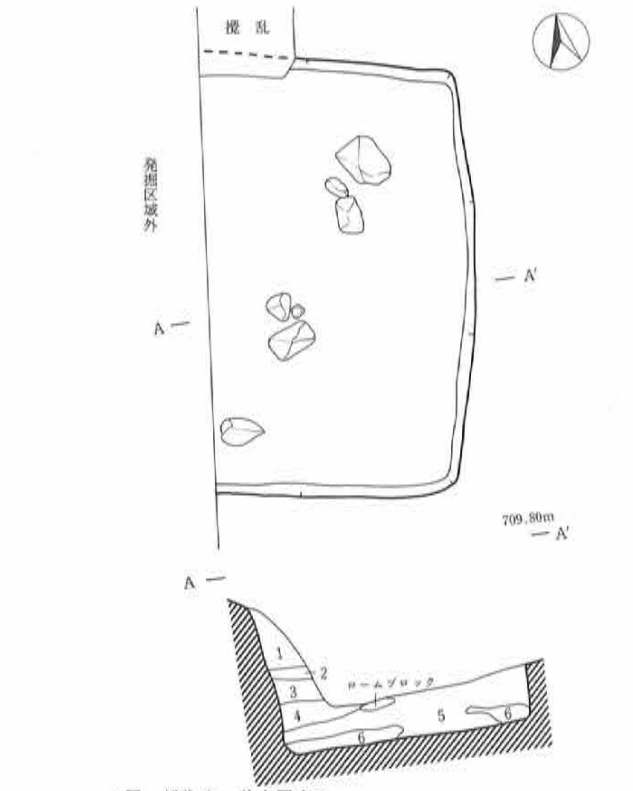
図版番号	23-2、24-1	検出区	か-9、き-9・10グリット				
重複状態	単独					平面形態	長方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積	長軸方向	
壁長	327cm	286cm	314cm	285cm	7.7m²（2.3坪）	N-74°-W	
壁高	59.0～77.0cm	42.5～62.0cm	14.5～47.0cm	21.5～50.0cm			
張り出し部	位置 ——	形状 ——	覆土	3層　褐色土・ローム・灰が入り組んでいる。			
	長さ —	幅 —	深さ —				
柱穴	四隅に各1個、北・東・南壁下中央に各1個、西壁下南寄りに1個検出されている。						
出土遺物	内耳土器、土師質土器、粉播臼、茶臼、石擂鉢、凹石						
備考	床面はほぼ平坦である。周溝が壁下を全周している。						



1層　褐色土　炭化粒子と焼土を含む。
2層　褐色土　炭化粒子を含む。
3層　褐色土　粘質で灰を含む。
4層　褐色土　黄色ローム、白色ロームを含む。

0　(1：40)　1m

第51図　Ta42号竪穴遺構実測図



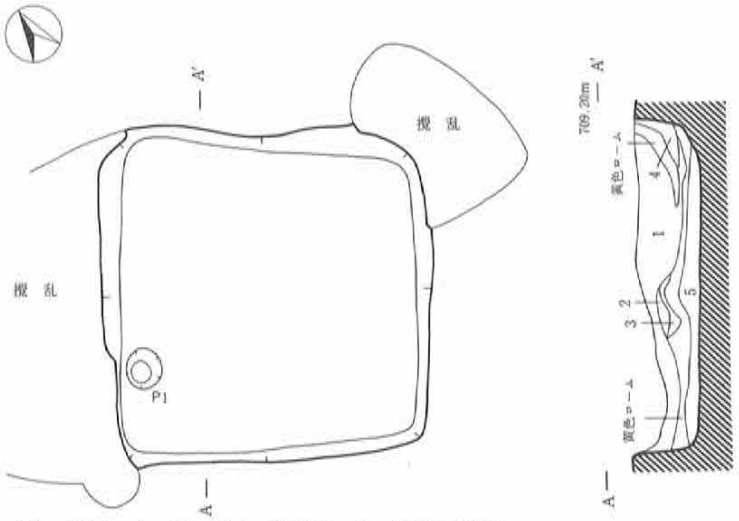
1層　耕作土　基本層序Ⅰ。
2層　黄褐色土　ローム主体。
3層　黒色土　ローム粒子を含む。
4層　褐色土。
5層　褐色土。
6層　黒褐色土　ローム粒子を含む。

0　(1：40)　1m

第52図　Ta43号竪穴遺構実測図

第49表　Ta43号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	24-2				
検出区	き-9グリット				
重複状態	単独				
平面形態	——				
	壁長		壁高		
北壁側	——		14.5～15.0cm		
東壁側	206cm		3.5～35.0cm		
南壁側	——		28.5～33.0cm		
西壁側	——		——		
面積	——	長軸方向	——		
張り出し部	位置	——	形状	——	
	長さ	—	幅	—	深さ —
覆土	5層　黒色土・褐色土・ロームがサンドイッチ状に堆積している。				
柱穴	——				
出土遺物	青白磁、内耳土器、土師質土器				
備考	床面はおおむね平坦と考えられる。				



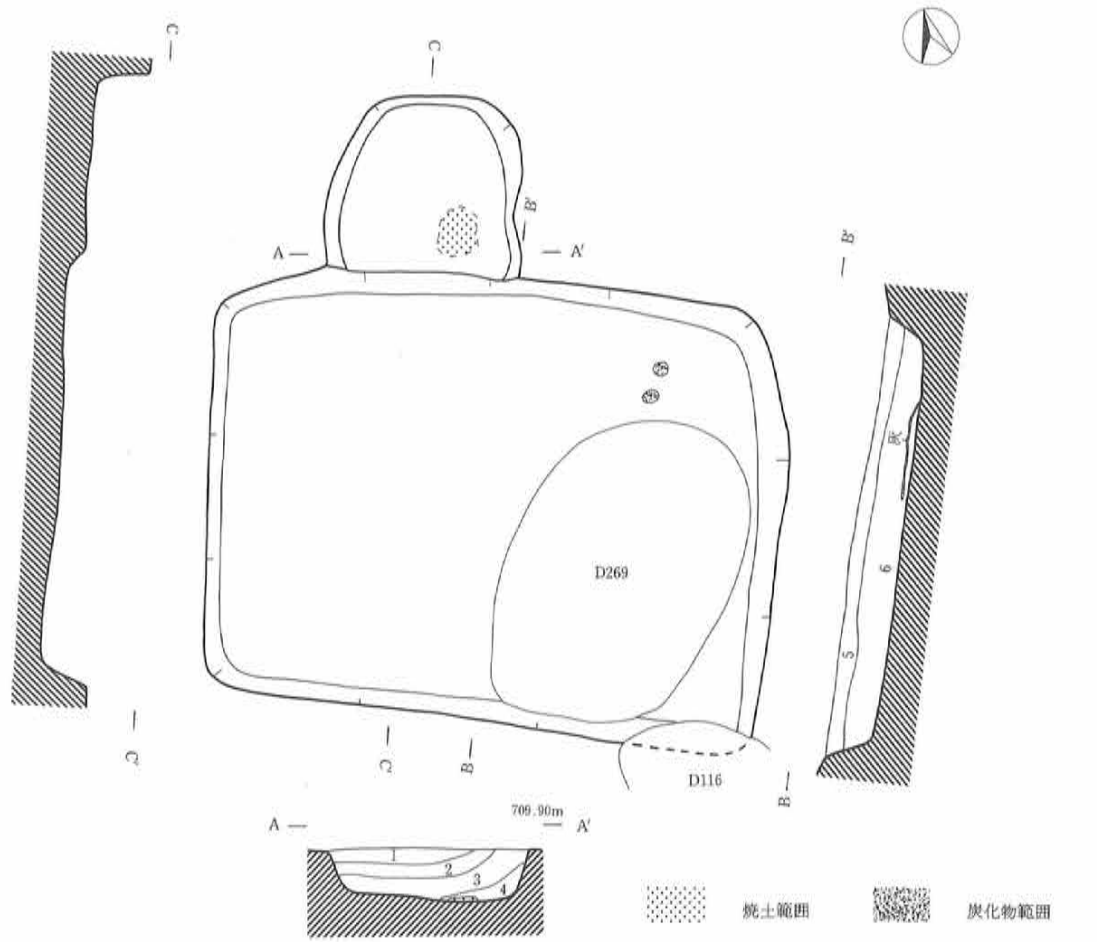
1層　褐色土　カーボン、焼土、灰を多量、ローム粒を少量含む。
2層　黄褐色土　ロームブロック。
3層　褐色土　きめ細かい、焼土を少量含む。
4層　褐色土　1層に黄色ロームが多量に混じる。
5層　褐色土　1層と似るが灰が主体。

0　(1：40)　1m

第53図　Ta44号竪穴遺構実測図

第50表　Ta44号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	24-3				
検出区	う-12グリット				
重複状態	単独				
平面形態	方形				
	壁長		壁高		
北壁側	173cm		28.0～42.0cm		
東壁側	171cm		35.0～41.0cm		
南壁側	173cm		37.5～40.0cm		
西壁側	180cm		33.5～36.0cm		
面積	2.4m²(0.7坪)	長軸方向	N-30°-E		
張り出し部	位置	——	形状	——	
	長さ	—	幅	—	深さ —
覆土	5層　褐色土主体だが、ロームが細い帯状に入り込む。最下層は灰層となる。				
柱穴	西壁南寄りに1個検出。				
出土遺物	内耳土器、土師質土器				
備考	床面はほぼ平坦である。				



1層　灰褐色土　直径5㎜の小石を少量および灰を多量含む。粒子は緻密で粘性は弱い。しまりがなくサラサラしている。

2層　暗灰褐色土　灰と炭化粒子が灰状になって多量に含まれる。粒子は緻密で粘性は弱い。しまりがなくサラサラしている。

3層　暗褐色土　炭化粒子と黄色ロームを多量に含む。粒子は細かく粘性は弱い。堅くしまっている。

4層　褐色土　炭化粒子を少量と黄色ロームを多量含む。粒子は細かく粘性は弱い。堅くしまっている。

5層　黒褐色土　灰、炭化粒子を少量含む。粒子は緻密で粘性は中程度。

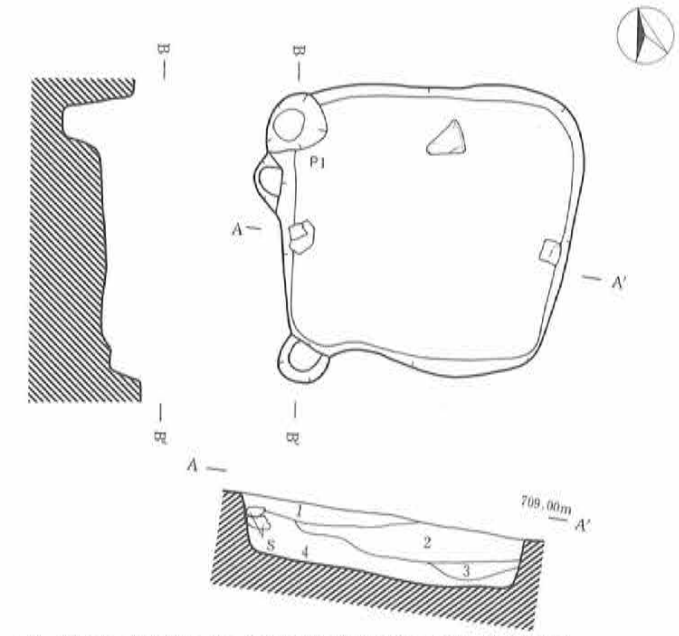
6層　褐色土　灰、炭化粒子を微量含む。直径5㎜大の小石およびパミスを少量含む。粒子は細かく粘性は弱い。

0　（1：40）　1m

第54図　Ta45号竪穴遺構実測図

第51表　Ta45号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	——			検出区	か-8・9グリット						
重複状態	D116・269に破壊され、F1、H15を破壊する。								平面形態	長方形	
	北壁側		東壁側		南壁側		西壁側		面積		長軸方向
壁長	311cm		240cm		301cm		229cm		5.8㎡（1.8坪）		N-18°-E
壁高	26.5～31.5cm		26.5～29.0cm		12.5～28.0cm		10.0～19.0cm				
張り出し部	位置	北壁西寄り	形状	半楕円状	覆土	6層　褐色土、黒褐色土が主体だが張り出し部は灰が多い。					
	長さ	96cm	幅	106cm	深さ	33.0cm					
柱穴	——										
出土遺物	土師質土器										
備考	床面はほぼ平坦である。										



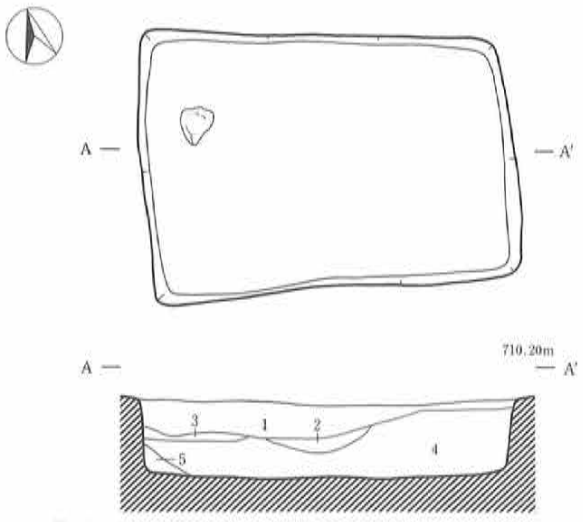
1層　褐色土　黄白色ローム、直径5㎜大の小石を少量含む。粒子細かい。
2層　黄褐色土　黄白色ロームを多量に、直径5㎜大の小石を少量含む。粒子細かく粘性弱。
3層　褐色土　黄白色ロームを多量に、直径5㎜大の小石を少量含む。粒子細かく粘性弱。
4層　褐色土　黄白色ロームを微量、直径5㎜大の小石、パミス、炭化粒子を含む。

0　（1：40）　1m

第55図　Ta46号竪穴遺構実測図

第52表　Ta46号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	25-2				
検出区	し-7グリット				
重複状態	D46を破壊する。				
平面形態	方形				
	壁長		壁高		
北壁側	180cm		33.0～38.0cm		
東壁側	162cm		28.0～29.5cm		
南壁側	131cm		27.0～28.0cm		
西壁側	143cm		27.0～33.0cm		
面積	1.8㎡(0.5坪)	長軸方向	N-70°-W		
張り出し部	位置	——	形状	——	
	長さ	—	幅	—	深さ —
覆土	4層　ロームを含む褐色土と純粋なロームが入り組む。				
柱穴	南西コーナーに1個検出されている。				
出土遺物	粉摺臼				
備考	床面はおおむね平坦である。				



1層　褐色土　砂粒と灰を少量含む。
2層　褐色土　1層より砂粒が多い。
3層　褐色土　灰を主体とする。
4層　褐色土　1層より灰が多く、炭化物も少量含む。
5層　褐色土　きめが細かく、粘性も弱い。

0　（1：40）　1m

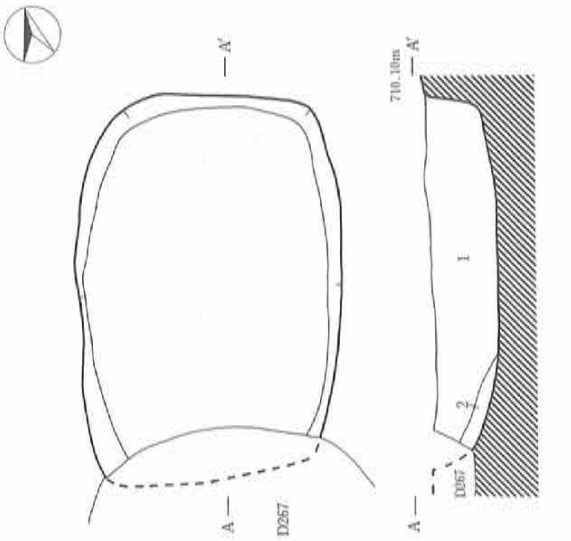
第56図　Ta47号竪穴遺構実測図

第53表　Ta47号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	——				
検出区	え-7・8、お-8グリット				
重複状態	D34を破壊する。				
平面形態	長方形				
	壁長		壁高		
北壁側	194cm		38.0～40.0cm		
東壁側	127cm		33.0～40.0cm		
南壁側	201cm		33.0～45.0cm		
西壁側	148cm		40.0～43.0cm		
面積	2.3㎡(0.7坪)	長軸方向	N-74°-W		
張り出し部	位置	——	形状	——	
	長さ	—	幅	—	深さ —
覆土	5層　褐色土主体だが、灰がまじり細い帯状の灰層も認められる。				
柱穴	——				
出土遺物	美濃鉄釉、土師質土器				
備考	床面はほぼ平坦である。				

第54表　Ta48号竪穴遺構計測・説明表

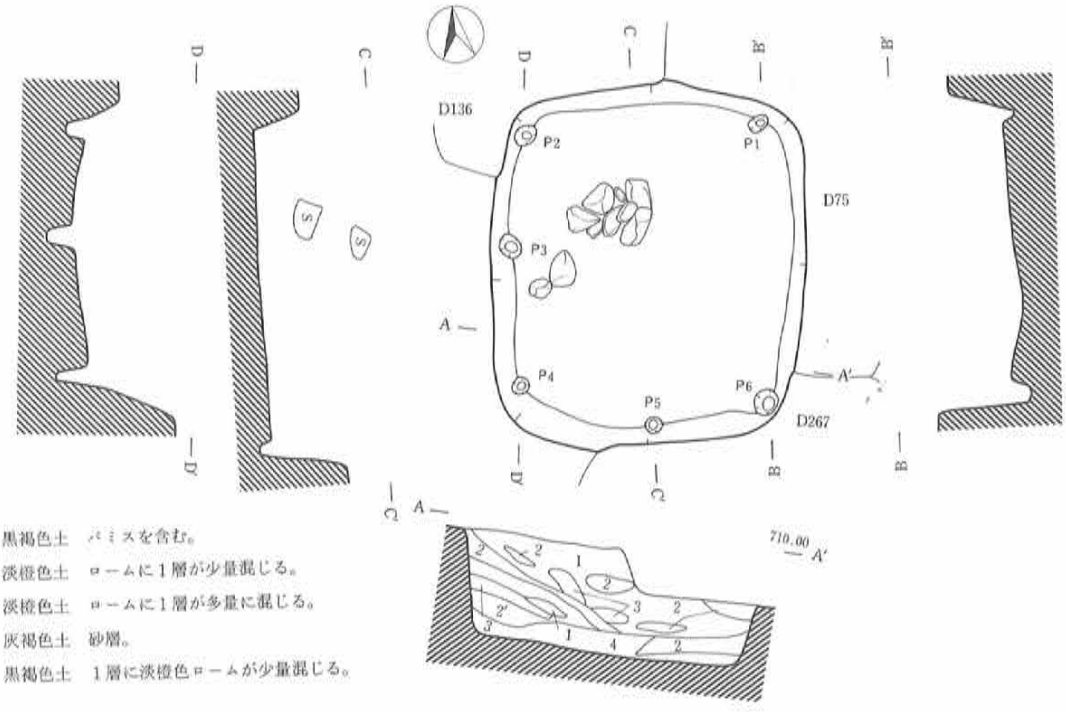
図版番号	——				
検出区	う-8、え-8グリット				
重複状態	D267に破壊され、D136・185を破壊する。				
平面形態	長方形				
	壁長		壁高		
北壁側	144cm		25.0～31.0cm		
東壁側	——		25.0～31.0cm		
南壁側	——		——		
西壁側	——		10.0～26.0cm		
面積	2.1m²(0.6坪)	長軸方向	N-16°-E		
張り出し部	位置	——	形状	——	
	長さ	—	幅	—	深さ —
覆土	2層　焼土・炭化物を含む褐色土を基調とする。				
柱穴	——				
出土遺物	青磁、内耳土器、土師質土器、石器				
備考	床面は断面はやや丸みを有する。				



1層　褐色土　焼土と炭化物を多量に含む。
2層　褐色土　焼土と炭化物を含まない。

0　(1：40)　1m

第57図　Ta48号竪穴遺構実測図



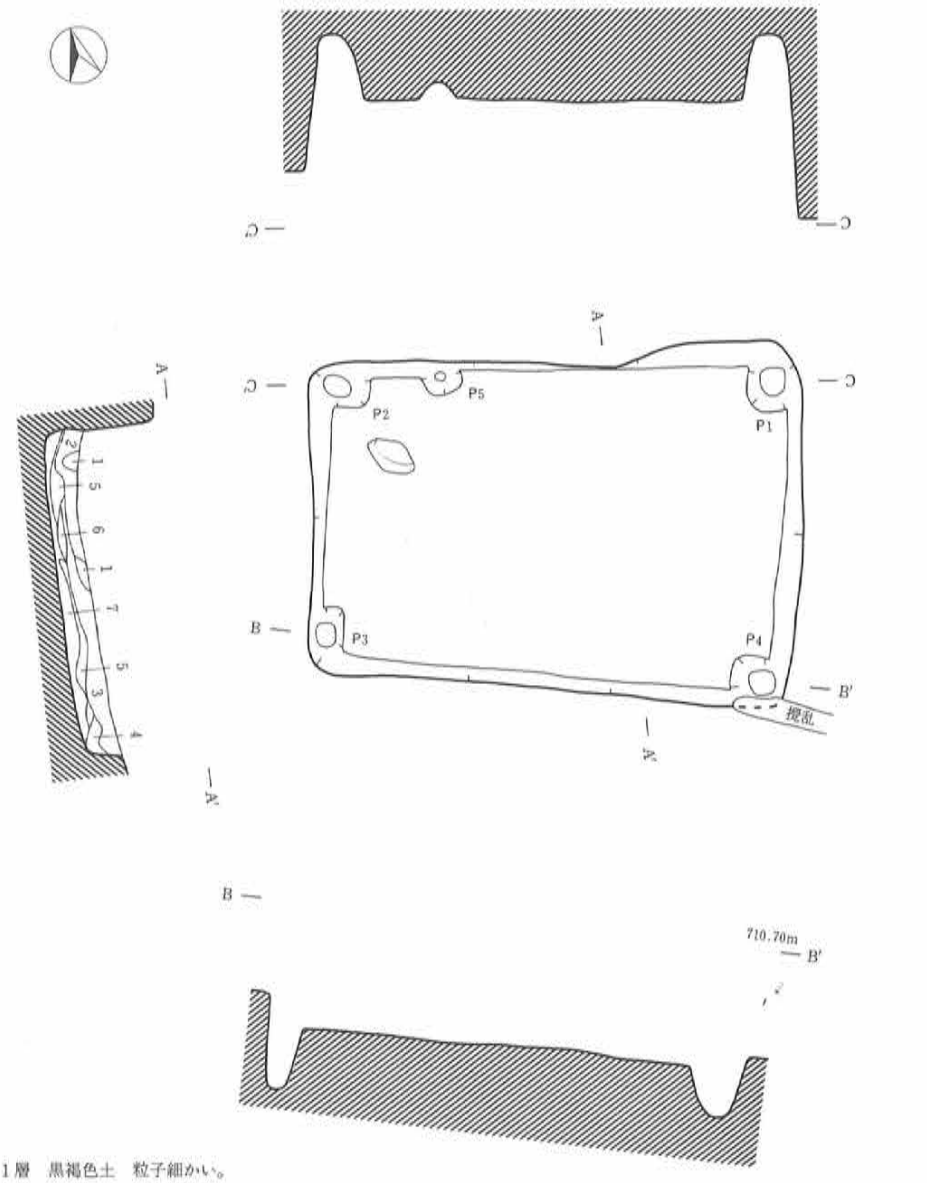
1層　黒褐色土　パミスを含む。
2層　淡橙色土　ロームに1層が少量混じる。
2'層　淡橙色土　ロームに1層が多量に混じる。
3層　灰褐色土　砂層。
4層　黒褐色土　1層に淡橙色ロームが少量混じる。

0　(1：40)　1m

第58図　Ta49号竪穴遺構実測図

第55表　Ta49号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	25-1	検出区	う-8、え-8グリット			
重複状態	D75・136・267に破壊される。				平面形態	方形
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積	長軸方向
壁長	166cm	189cm	165cm	196cm	2.3m²（0.7坪）	N-9°-E
壁高	20.5～30.5cm	29.5～34.0cm	37.5～48.0cm	20.5～48.0cm		
張り出し部	位置 —— 形状 ——		覆土	5層　黒褐色土・ローム・灰が、帯状・ブロック状に入りまじっている。		
	長さ — 幅 — 深さ —					
柱穴	四隅に各1個、西・南壁下の中央に各1個ずつ配されている。					
出土遺物	内耳土器、土師質土器					
備考	床面はほぼ平坦である。					



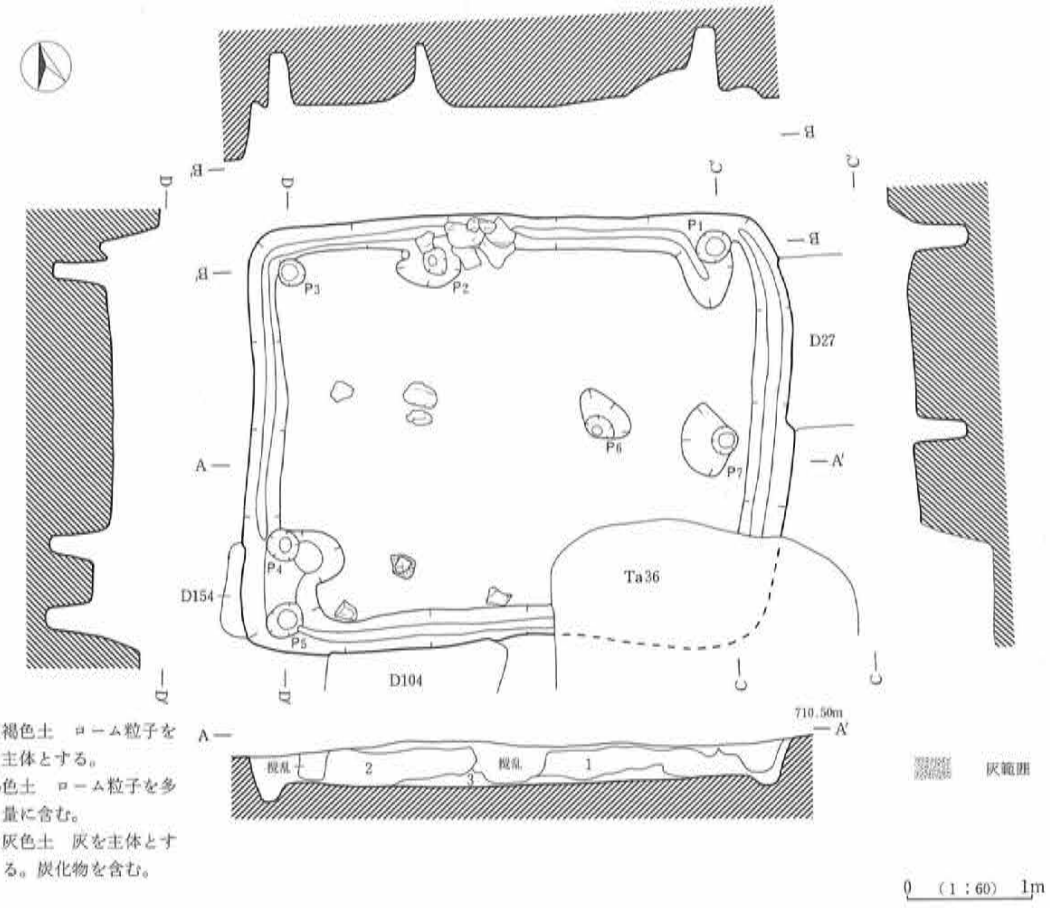
1層　黒褐色土　粒子細かい。
2層　褐色土　黒色土ブロック若干含む。
3層　褐色土　灰を多量に含む。
4層　褐色土　黄色砂質ローム粒子を多量に含む。炭化粒子を少量含む。
5層　褐色土　黄色砂質ローム粒子を多量に含む。
6層　白黄色土　地山の白黄色ローム粒ブロック。
7層　褐色土　土部に約0.2cmの灰層あり。

0　(1:40)　1m

第59図　Ta50号竪穴遺構実測図

第56表　Ta 50号竪穴遺構計測・説明表

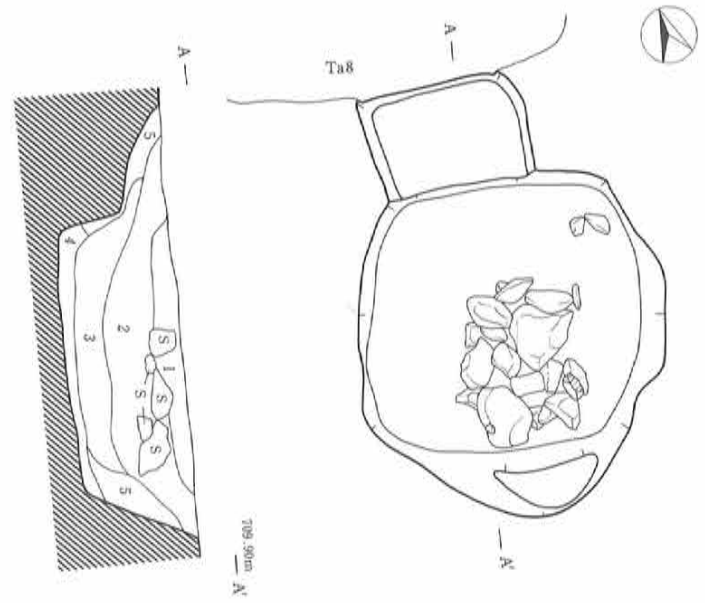
図版番号	25-3	検出区	え-4、お-4グリット				
重複状態	D74・80を破壊する。				平面形態	長方形	
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積	長軸方向	
壁長	266cm	(199cm)	(258cm)	163cm	3.8m² (1.2坪)	N-74°-W	
壁高	47.5～60.0cm	3.5～60.0cm	20.5～21.5cm	14.0～49.0cm			
張り出し部	位置 ―― 形状 ――		覆土	7層　褐色土・黒褐色土・灰が入り組んでいる。			
	長さ ― 幅 ― 深さ ―						
柱穴	四隅に各1個整然と並び、北壁下西寄りにも1個みられる。						
出土遺物	土師質土器、鉄釘						
備考	床面はほぼ平坦である。						



第60図　Ta51号竪穴遺構実測図

第57表　Ta51号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	25-4	検出区	お-5グリット				
重複状態	Ta27・36、D154に破壊される。				平面形態	長方形	
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積	長軸方向	
壁長	426cm	348cm	442cm	343cm	12.8m² (3.9坪)	N-79°-W	
壁高	7.5～40.5cm	7.5～34.0cm	9.5～27.0cm	2.0～44.0cm			
張り出し部	位置 ―― 形状 ――		覆土	3層　ロームと褐色土が入り組み、最下層に灰がみられる。			
	長さ ― 幅 ― 深さ ―						
柱穴	北東・北西コーナーに各1個、南西コーナーに2個、東壁下中央に1個、北壁下中央西寄りに1個、床面中央東寄りに1個みられる。						
出土遺物	土師質土器、鉄釘						
備考	床面はほぼ平坦である。周溝は壁下を全周すると思われる。						



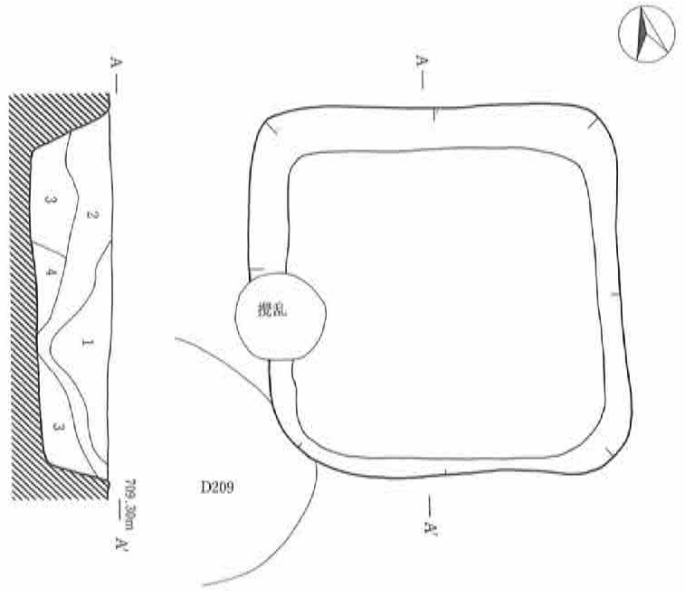
1層　褐色土　炭化粒、黄色ローム粒を含む。きめが細かい。
2層　褐色土　黄色ローム粒を含む。きめは細かい。
3層　褐色土　黄色ローム粒を含む。きめは細かい。
4層　褐色土　黒褐色の有機質様のブロックを多量に含む。きめは細かい。
5層　褐色土　黄色ローム粒を含む。きめは細かい。

0　（1：40）　1m

第61図　Ta52号竪穴遺構実測図

第58表　Ta52号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	26-1					
検出区	け-6グリット					
重複状態	H5、D41・42・207を破壊し、Ta8に破壊される。					
平面形態	方形					
	壁長			壁高		
北壁側	166cm			55.5～56.0cm		
東壁側	185cm			40.5～56.0cm		
南壁側	163cm			54.0～59.5cm		
西壁側	184cm			50.5～56.5cm		
面積	1.8m²(0.5坪)	長軸方向	N-20°-E			
張り出し部	位置	北壁西寄り	形状	長方形状		
	長さ	55cm	幅	86cm	深さ	23.5cm
覆土	5層　褐色土が基調で各層にロームが含まれる。					
柱穴	――					
出土遺物	内耳土器、土師質土器、土製品 粉播臼、石擂鉢					
備考	床面はほぼ平坦である。					



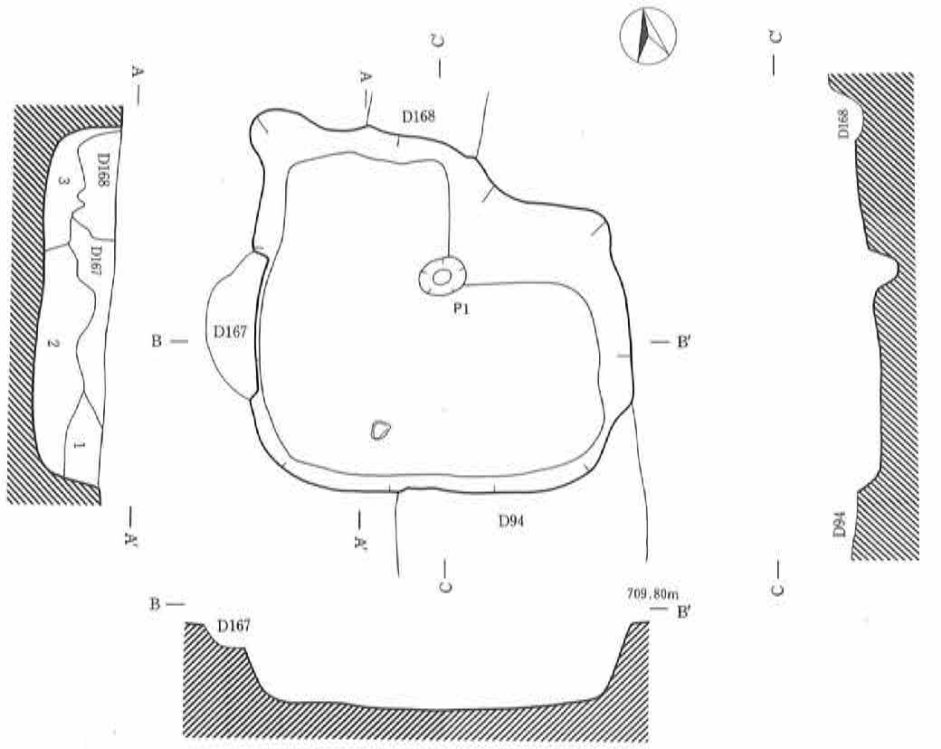
1層　褐色土　炭と白黄のロームブロックを少量含む。きめが粗い。
2層　褐色土　1層よりも白黄のロームブロックを多量に含む。大きな炭が混入する。きめが粗い。
3層　褐色土　白黄のロームブロックを少量含む。きめが粗い。
4層　褐色土　茶褐色の土が混入する。炭を少量含む。

0　（1：40）　1m

第62図　Ta53号竪穴遺構実測図

第59表　Ta53号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	――					
検出区	し-6グリット					
重複状態	D209に破壊される。					
平面形態	方形					
	壁長			壁高		
北壁側	195cm			36.0～50.0cm		
東壁側	197cm			36.0～45.0cm		
南壁側	193cm			24.0～35.0cm		
西壁側	199cm			10.5～36.0cm		
面積	2.6m²(0.8坪)	長軸方向	N-10°-E			
張り出し部	位置	――	形状	――		
	長さ	―	幅	―	深さ	―
覆土	4層　褐色土基調でロームが多量に含まれる層が帯状に入り込む。					
柱穴	――					
出土遺物	内耳土器、土師質土器					
備考	床面はほぼ平坦である。					



1層　褐色土　パミス、ローム粒子、直径5㎜大の小石を含む。ややしまりあり。
2層　褐色土　パミス、ローム粒子、直径5㎜大の小石を含む。粘性なくサラサラしている。
3層　褐色土　パミスを含む。白っぽいローム粒子および直径2～25㎜大の小石を多量に含む。
　　粘性、しまりなし。

第63図　Ta54号竪穴遺構実測図

第60表　Ta54号竪穴遺構計測・説明表

図版番号	——	検出区	こ-5、さ-5グリット				
重複状態	D94・167・168に破壊されている。					平面形態	曲屋風
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	194cm	188cm	208cm	192cm		2.3㎡（0.7坪）	N-10°-E
壁高	36.0～43.5cm	38.0～40.5cm	9.0～31.0cm	32.5～35.5cm			
張り出し部	位置 ——	形状 ——	覆土	3層　褐色土が基調で、白色のローム粒子が各層に含まれている。			
	長さ —	幅 —	深さ —				
柱穴	1個のみ。						
出土遺物	常滑、内耳土器						
備考	床面はおおむね平坦である。						

大井城跡（黒岩城跡）竪穴遺構一覧表

遺構	挿図番号	検出区	平面形態	規模（cm）			面積㎡(坪)	長軸方向	張り出し方向	柱穴	主な出土遺物
				長軸	短軸	深さ					
Ta 1	4-1	き-4・5	不整長方形	246	180	43.0	4.0 (1.2)	N-68°-W	N-74.5°-W	—	染付、白磁、青磁、内耳土器、粉播臼、石擂鉢
Ta 2	——	け-4・5	不整長方形	188	140	27.0	2.4 (0.7)	N-16°-E	—	1	内耳土器、土師質土器、茶臼
Ta 3	4-2	か・き-1・2	方形	174	130	53.0	1.7 (0.5)	N-22°-E	N-10°-E	—	——
Ta 4	5-3・4	さ-4・5	不整長方形	224	148	68.0	3.2 (1.0)	N-18.5°-E	—	—	内耳土器、土師質土器、銭貨（差97枚、永楽通宝・宣徳通宝他）
Ta 5	4-3、5-1	す-6	方形	180	180	45.5	3.0 (0.9)	N-15°-E	—	1	瀬戸灰釉、内耳土器、鉄釘
Ta 6	4-1、5-2	す-6	不整方形	136	149	29.5	1.9 (0.6)	N-21°-E	—	2	美濃灰釉
Ta 7	6-1	か-5・6	長方形	178	156	37.0	2.5 (0.8)	N-17°-E	—	—	内耳土器、鉄釘、永楽通宝
Ta 8	6-2・3・4	く-6・7	長方形	211	171	65.0	3.2 (1.0)	N-77°-W	N-66°-W	6	常滑、内耳土器、土師質土器、粉播臼、茶臼、鉄釘
Ta 9	7-1	き-6	不整長方形	203	138	41.0	2.6 (0.8)	N-72°-W	—	—	内耳土器、土師質土器、永楽通宝
Ta10	7-2・3	き-5	長方形	273	240	51.0	5.5 (1.7)	N-15°-E	—	6	内耳土器、土師質土器
Ta11	8-1・2	く-5	方形	169	166	89.0	2.8 (0.8)	N-19°-E	N-10°-E	4	白磁、中津川、瓦器、内耳土器、土師質土器、粉播臼、磨石、砥石、鉄製品
Ta12	——	お-5、か-5・6	長方形	167	110	85.0	1.8 (0.5)	N-6°-E	—	4	美濃鉄釉、土師質土器、粉播臼、石擂鉢
Ta13	8-3、9-1	さ・し-3・4	長方形	206	139	70.0	2.5 (0.8)	N-76°-W	—	2	常滑、内耳土器、土師質土器
Ta14	——	け-5	方形	184	206	53.5	3.6 (1.1)	N-74°-W	N-3.5°-E	—	中津川、内耳土器、土師質土器、茶臼
Ta15	——	く・け-10	長方形？	—	—	59.0	—	N-97°-E	—	—	内耳土器、土師質土器
Ta16	9-2・3	か・き-4・5	方形	318	297	60.0	8.6 (2.6)	N-83°-W	—	—	内耳土器、土師質土器、粉播臼、茶臼
Ta17	10-1	か-5	方形	126	120	73.0	1.4 (0.4)	N-14°-E	S-26°-W	2	内耳土器、土師質土器、茶臼
Ta18	10-2	く-8・9	長方形	240	171	63.0	3.7 (1.1)	N-72°-W	—	—	美濃鉄釉、美濃灰釉、内耳土器、土師質土器
Ta19	11-1	き・く-2	方形	380	202	49.0	4.3 (1.3)	N-4°-E	—	—	白磁、内耳土器、土師質土器
Ta20	11-2・3	き-3・4	長方形	293	231	79.0	6.5 (2.0)	N-7°-E	W	—	美濃鉄釉、備前、内耳土器、土師質土器、茶臼
Ta21	11-1	き・く-2	—	—	—	25.5	—	N-5°-E	—	2	土師質土器
Ta22	12-1	き-2	方形	295	314	57.5	9.1 (2.8)	N-72.5°-W	—	10	美濃鉄釉、内耳土器、土師質土器
Ta23	12-2・3・4、13-1	け・こ-3・4	方形	412	365	47.0	16.2 (4.9)	N-82°-W	N-9.5°-E	11	常滑、中津川、内耳土器、土師質土器、茶臼、硯、砥石台、石器、鉄釘、刀子銅製品、元祐通宝
Ta24	13-2	か・き-1・2	不整方形	297	283	46.5	8.4 (2.5)	N-13°-W	S-73°-E	1	内耳土器、土師質土器
Ta25	14-1・2	す・せ-4	長方形	276	216	45.0	5.6 (1.7)	N-15°-E	—	4	内耳土器、土師質土器、鞴羽口、土板、粉播臼
Ta26	15-1	さ-4	長方形	450	294	58.0	12.7 (3.8)	N-20.5°-E	S-68.5°-E	15	美濃鉄釉、常滑、内耳土器、土師質土器、鉄釘、永楽通宝、元豊通宝、熙寧元宝
Ta27	15-2	き-3	長方形	254	182	38.0	4.6 (1.4)	N-75°-W	—	—	美濃鉄釉、内耳土器、土師質土器
Ta28	16-1	し・す-5・6	不整形	277	224	48.5	5.9 (1.8)	N-11°-E	—	4	白磁、内耳土器、土師質土器、刀子、熙寧元宝、祥符元宝

遺構	挿図番号	検出区	平面形態	規模 (cm)			面積 ㎡(坪)	長軸方向	張り出し方向	柱穴	主な出土遺物
				長軸	短軸	深さ					
Ta29	16-2・3	こ-4	方形	178	162	77.0	2.9 (0.9)	N-11°-E	—	6	常滑、内耳土器、土師質土器、土板、紡錘車、鉄釘、鉄棍、熙寧元宝、坩堝
Ta30	17-1	く・け-1	長方形	348	243	58.5	8.2 (2.5)	N-12°-E	—	6	内耳土器、土師質土器、粉播臼、坩堝
Ta31	4-2	か-0・1、き-1	方形	241	200	53.5	4.7 (1.4)	N-19°-E	—	—	粉播臼
Ta32	17-4	お-0、か-0・1	方形	—	—	63.0	—	—	—	4	土師質土器、鉄釘、刀子、洪武通宝
Ta33	——	く-2	—	—	—	46.0	—	—	—	—	——
Ta34	18-1	お-1	—	—	—	54.5	—	—	S-20°-W	—	青磁、内耳土器、土師質土器
Ta35	18-2・3	お-3	方形	202	212	73.0	4.2 (1.3)	N-73°-W	S-24°-W	—	内耳土器、土師質土器、硯、石器
Ta36	19-1・2、20-1・2	お-4・5、か-5	方形	204	184	98.0	3.6 (1.1)	N-16.5°-E	S-16°-W	—	白磁、内耳土器、土師質土器、粉播臼、刀子
Ta37	——	か・き-1・2	—	—	—	15.5	—	—	—	3	——
Ta38	21-1・2・3、22-1	え・お-10・11	方形	210	182	73.0	3.6 (1.1)	N-75°-W	—	—	内耳土器
Ta39	21-3、22-1	え-11・12、お-11	方形	456	432	64.0	19.4 (5.9)	N-15°-E	—	16	白磁、青磁、美濃鉄釉、美濃灰釉、常滑、内耳土器、土師質土器、粉播臼、茶臼
Ta40	22-2	お-12	長方形	206	144	80.0	2.9 (0.9)	N-28°-E	N-60°-W	10	内耳土器、土師質土器、粉播臼、坩堝
Ta41	23-1	え-9	不整長方形	186	160	61.0	2.8 (0.8)	N-20°-E	—	3	——
Ta42	23-2、24-1	か-9、き-9・10	長方形	294	264	77.0	7.7 (2.3)	N-74°-W	—	8	内耳土器、土師質土器、粉播臼、茶臼、石擂鉢、凹石
Ta43	24-2	き-9	—	—	—	35.0	—	—	—	—	青白磁、内耳土器、土師質土器
Ta44	24-3	う-12	方形	158	156	42.0	2.4 (0.7)	N-30°-E	—	1	内耳土器、土師質土器
Ta45	——	か-8・9	長方形	286	212	31.5	5.8 (1.8)	N-18°-E	—	—	土師質土器
Ta46	25-2	し-7	方形	142	136	38.0	1.8 (0.5)	N-70°-W	—	1	粉播臼
Ta47	——	え-7・8、お-8	長方形	188	124	45.0	2.3 (0.7)	N-74°-W	—	—	美濃鉄釉、土師質土器
Ta48	——	う・え-8	長方形	—	142	31.0	2.1 (0.6)	N-16°-E	—	—	青磁、内耳土器、土師質土器、石器
Ta49	25-1	う・え-8	方形	170	146	48.0	2.3 (0.7)	N-9°-E	—	6	内耳土器、土師質土器
Ta50	25-3	え・お-4	長方形	240	156	60.0	3.8 (1.2)	N-74°-W	—	5	土師質土器、鉄釘
Ta51	25-4	お-5	長方形	370	284	44.0	12.8 (3.9)	N-79°-W	—	7	土師質土器、鉄釘
Ta52	26-1	け-6	方形	140	144	59.5	1.8 (0.5)	N-20°-E	N-3.5°-W	—	内耳土器、土師質土器、土製品、粉播臼、石擂鉢
Ta53	——	し-6	方形	164	164	50.0	2.6 (0.8)	N-10°-E	—	—	内耳土器、土師質土器
Ta54	——	こ・さ-5	曲屋風	166	174	43.5	2.3 (0.7)	N-10°-E	—	1	常滑、内耳土器

竪穴状遺構

(1)　定義

(2)　規模・形態の傾向

(3)　床面の状況と柱穴及び付属施設

(4)　出土遺物からの時代の推定

(5)　掘立柱建物址との関係――占地の問題に関連して

(6)　県内例との比較

(7)　県外例との比較

(1)　定義

竪穴状遺構あるいは竪穴遺構なる名称は、中世においては建物址が想定される方形、長方形区画の竪穴で柱穴を内・外に有する遺構に対して用いられる場合が多い。ここで用いる竪穴状遺構も以下に記す諸要素から、建物址を想定できる遺構に対して用いるものであり、他の方形土坑とは性格・機能上一線を画するものである。

中世の竪穴状遺構の定義については、浪岡城跡調査報告書Ⅶ（註１）で工藤清泰氏が次のように述べられている。

1　方形が基調であること。
2　柱穴あるいはそれに相当するものの存在。
3　覆土、床面出土遺物が中世までで近世までは存在しない。
4　基本的に炉・カマドをもたない。また出入口部分は張り出しを用いる。

本城跡から検出された竪穴状遺構も、一部の例外を除きこれらの諸要素を具備しており、中世の建物址として想定できるものである。

尚、あらかじめおことわりしておかねばならないことがある。竪穴状遺構の定義２に掲げた柱穴の存在についてである。挿図を見ればあきらかなとおり、柱穴の存在しない竪穴状遺構が相当数みられる。これは非常に恥ずべきことであるが、調査開始当初、壁下に存在するはずの柱穴に全く気づかないままに調査済みとして埋めもどしてしまったためである。平面図が不充分なまま掲載するはめになってしまった。御勘弁願いたい。

柱穴未検出のものを竪穴状遺構に含めた根拠は次の通りである。

①　出入口様の張出し施設をもつこと。
②　覆土の堆積状況が、柱穴をもつものと同様、人為的であること。
③　掘り込みが深いこと。

などである。②、③に関しては、本城跡から検出された中世遺構の中で、竪穴状遺構が一様に特に深い掘り込みをもち、特徴的な堆積状態を示すことによる。

(2)　規模・形態の傾向

検出された53棟のうち、竪穴状遺構相互の重複によって破壊されていたり調査区外までプランがあるため規模・形態が不明なものが、Ta15，21，32，33，34，37，43の7棟、また、その後の検討により建物址とは考えられないものが、Ta27，48の2基あるため、計44棟の規模・形態が伺える。このうち、方形を呈するものが16棟、長方形（短軸長＋短軸長の10%が長軸長を超えないこと）を呈するものが26棟、曲り屋風のものが2棟あり、方形・長方形のものに関しては、一覧表にまとめた。張り出し部を有するものは14棟、もたないものは28棟で、規模の大小、及び形態の差異によって、張り出し部の有無は決定されないようである。張り出し部の付設される位置は、北側2棟、南側5棟、東側2棟、西側4棟で、特に一定した方向性はみられない。北・南両側に有するものも1棟みられる。

規模は、方形を呈するもの16棟は一辺1.5m未満の超小型のものから一辺4.0m～5.0mの大型のものまでバラエティーに富むが、一辺1.5m未満の超小型のものと一辺1.5m～2.0mの小型のものが11棟で、比較的小規模なものが多い傾向がみられる。

一方、長方形を呈するものは、方形にみられた1.5m未満の超小型のものはみられないが、長軸1.5m～2.0mの小型のものから長軸4.0m～5.0mの大型のものまでやはりバラエティーに富む。数量では、長軸1.5m～2.0mが6棟、長軸2.0m～2.5mが12棟、長軸2.5m～3.0mが5棟で、計23棟となり、方形と同様小規模なものが多く、これらが一般的な規模であったと言える。

従って、方形のTa39や長方形のTa23，26など一辺及び長軸が4.0m～5.0mの大規模なものは、小型のものと性格が異なることも考えられるが、遺跡内における遺構の位置関係、出土遺物の保有率などから明確にこれを判別することができず、ここでは一応、規模の大小を問わず一括して取り扱うことにした。

この他、曲り屋風のTa28，54がみられる。

(3)　床面の状況と柱穴及び付属施設

床面の状況はすべての遺構がほぼ一様の傾向を示す。地山の黄褐色ローム層をそのまま利用し平坦に築かれたもので、貼床は認められない。また、特に堅緻な状況は示さず、どちらかと言えば軟弱で、頻繁に踏みしめられた痕跡はほとんど残っていない。唯一の例外として、Ta26の西側張り出し部直下の床面上に、土間状に盛り上がった有機性の堆積土が認められている。

柱穴に関しては、先述したように調査が不充分のため、充実した資料呈示ができない。

柱穴を検出できたのは、Ta8，11，12，23，26，39，40，42，49，50，51の11棟のみという非常に情ない状況であるが、他の遺構にも柱穴は確実に伴っていたはずである。

柱穴の位置は、いずれも壁直下の四隅を基本として設けられ、大型のTa39のみが床面中央にも設けられる。柱穴自体は概して小規模で木柱も細かったことが想像され、竪穴状遺構の規模が大きくなる程、柱穴数、間数が増加する傾向がみられる。柱穴の太さについては、Ta39のセクション図が一つの目安となろう。

付属施設は極めて例外的な存在であるが、Ta30，32に炉址が認められる。付設位置は、Ta30が中央南西寄り、Ta32が北西コーナーにあり、方形、長方形を呈する地床炉である。両遺構は城郭の東端にあたる崖ぎわに並んでおり、他の竪穴状遺構とは異った役割を果していたことが想像できる。この他、長軸412cmを測る大型のTa23の北東コーナー部には、小型の方形の掘り込みがある。大型の竪穴内の一画を占めるこの掘り込みが、どのような役割を果したのであろうか。

(4)　出土遺物からの時代の推定

竪穴状遺構からは、舶載磁器・国産磁器・内耳土器・土師質土器小皿・貨幣・石臼・茶臼・石擂鉢・鉄製品・

銅製品などで、比較的多量の遺物が検出されているが、明らかに遺構に共伴する遺物はほとんどなく、すべてが破損品で、大方が覆土中から出土しており、埋没土形成過程に投棄された遺物と做すことができる。このことは竪穴状遺構の覆土が一様にローム層→褐色土→ローム層→褐色土の繰り返しという人為的と理解される堆積状況に集約されることからも首肯できよう。つまり本調査区の竪穴状遺構群は、城の廃絶時期に伴い、何らかの意図によって一勢に埋め立てられ、整地されたものと思われ、破損品ばかりの出土遺物もこの時同時に投棄されたと考えられるのである。従って、個々の遺構に対して明確な年代的位置づけを与えることは困難であるが、出土した多くの舶載磁器・国産陶器から竪穴状遺構群の大雑把な年代を推定することは可能である。

出土陶磁器で最も古い陶磁器には、13世紀代の製品があり、龍泉窯の青磁碗がTa34, 39から、青白磁瓶子がTa43から出土している。次に14世紀代の製品は、白磁壺がTa１，39から、常滑系の甕がTa13, 26, 54から、中津川系の甕がTa11, 14, 23から出土している。15世紀代の製品は、染付碗がTa１から、青磁碗がTa１から出土している。以上の如13～15世紀代の陶磁器は量が少ないが、16世紀代の製品は爆発的に増加する。白磁皿がTa11, 19, 36から、備前系擂鉢がTa20から、美濃系灰釉小皿（16世紀前半）がTa６，18から、美濃系灰釉碗（16世紀前半）がTa39から、美濃系茶込れがTa27から、美濃系徳利がTa20, 26, 39から、美濃天目茶碗がTa12, 18, 20, 22, 47から、常滑系甕がTa８，23, 26, 29, 38から出土している。特にTa23出土の常滑系甕は大型破片が25片にも及ぶ。

以上の出土陶磁器の年代傾向から推察すると、本竪穴状遺構群は16世紀前半に廃絶された可能性が強く、使用された時期もこれとほぼ近い時期と考えておきたい。

(5)　掘立柱建物址との関係――占地の問題に関連して

本調査では、明瞭に年代が判定できる掘立柱建物址は検出されなかったが、調査区中央部の南北線上に並ぶＦ１～Ｆ３の３基の掘立柱建物址の存在は、竪穴状遺構群と有機的な関連性をもって配地されているようにも看取され興味深い。すなわち、竪穴状遺構群は台地の外部を取り巻くように数次の建て換えを繰り返しながら、相互に重複し、密集して占地する傾向がみられ、台地中央部の南北線上、すなわち、掘立柱建物址の占地する区域においては分布が薄く、重複関係も少ない。東北北部にみられる竪穴状遺構群は、掘立柱建物址の周囲に存在する傾向が認められる。青森県浪岡城跡（註２）、岩手県丸子館遺跡（註３）などで、この傾向がみられるが、本城跡の場合もこれと同様の傾向を示す可能性がある。しかし、今後更に当城跡の調査を拡大しなければ、この問題は解決しない。またこれに関連することとして、竪穴状遺構群が本調査区、すなわち黒岩城南端にのみ集中して分布するのか、それとも城郭全体に広域的な広がりをもつものなのかという問題もあげられる。

(6)　県内例との比較

県内においては、本調査で検出された竪穴状遺構と同様なものの検出例は聞かない。

最近、鋤柄俊夫氏が「長野県の中世集落遺跡について」（註４）と題して、飯田市猿小島遺跡、松本市島立南栗遺跡、根羽村日影平遺跡、飯田市伊賀良宮ノ先遺跡、富士見町砂原遺跡などの出土遺構を中心として、県内の中世集落のあり方を概観された。それによると、県内の中世集落は、13～14世紀代では集落を構成する住居の大部分が竪穴住居で、掘立柱建物址がほとんど一般化されていなかったこと、15～16世紀代では竪穴住居とともに掘立柱建物址が増加することを指摘され、長野県では中世においても竪穴の建物が、一般的な居住区の中で大きな位置を占めていたことを浮きぼりにした。氏の論点は中世の武家・一般庶民の集落を対象としているため城跡は扱ってないが、大井城跡において16世紀代まで竪穴状遺構が存続し盛行している姿が、本調査で明らかとなった。すなわち県内では、住居として機能したか否かはともかく、平安時代の竪穴住居址からの系譜をひくと考えられる竪穴の建物址が少なくとも中世全般に渡って連綿と継承され、一般集落でも城郭でも盛んに用いられていたと

考えられるのである。

但し、本調査で認められた竪穴状遺構と他の一般集落でみられる竪穴状遺構とでは、内容に弱若干の差がみられる。まず、柱穴のあり方が決定的に違う。大井城の竪穴状遺構は、壁直下に規則性をもった配置がなされているのに対し、他の一般集落でみられる竪穴状遺構の柱穴は、御代田町野火付遺跡（註５）の例のように、壁外に柱穴をもち配置もあまり規則性がみられないことが多い。また竪穴状遺構相互の密集度、主軸のほぼ揃った規則的な配置なども、大井城跡例は他の例に比べて濃く整っているように思えるし、入口施設の付設も差異があるように思われる。これは竪穴状遺構の城郭において果した役割と一般集落で果した役割の相違とも考えられる。

いずれにせよ長野県の中世遺跡では、つきものと言える程検出される竪穴状遺構については、その機能が遺跡の性格毎に多岐に渡っている可能性が強く、一概に位置づけることは困難な状況にある。本城跡の竪穴状遺構もその例外ではない。今後、同様な類例の増加を待って再検討したい。

(7)　県外例との比較

県外でも中世の竪穴状遺構の検出例は増加し、徐々にその分布範囲も拡大されているが、関西ではやはり少ない（註６）。関東では、鎌倉市長谷小路南遺跡、町田市小山田№１遺跡（註７）、海老名市上浜田遺跡（註８）など本資料と同様な竪穴状遺構の検出例が増加し、特に鎌倉市街地では極めて多く検出されているという。但し、その検出地は武家屋敷にはなく、道路沿いのスラム的なところに多く検出されており、庶民的なものとして位置づけられている。

竪穴状遺構が城あるいは館跡から密集して発見される例は、特に青森県、岩手県、秋田県などの東北北部や北海道に集中する。代表的なものを掲げておくと、青森県では八戸市根城跡（註９）、浪岡町浪岡城跡（註10）、岩手県では大瀬川館（大瀬川Ｃ遺跡）（註11）、北上市丸子館遺跡（註12）、一戸町一戸城跡（註13）、紫波町柳田館遺跡（註14）、秋田県では鹿角市妻の神Ⅲ遺跡（註15）、新斗館跡（註16）、北海道では上ノ国町上ノ国勝山館跡（註17）などがある。特に根城、浪岡城などは、史跡整備を前提とした調査が進行しており、巨大な中世城郭の実像が明らかになりつつある。これらの城・館跡から発見されている竪穴状遺構と大井城跡の竪穴状遺構は、規模・形態・柱穴の配置・張り出し部（出入口施設）の存在などで、極めて類似点が強い。唯一異なるのは、北海道、東北北部の竪穴状遺構の床面は堅緻で踏みしまっているのに対し、大井城のものは軟弱な点である。

性格については、掘立柱建物址と近接した区域で発見されることが多いため、掘立柱建物址の居住者に対して従属的な階級の住居とする説、大瀬川館、一戸城では炭化した籾、ヒエなどが出土していることから、穀物の貯蔵庫であるという説、この他、作業場、兵事の簡易住居、集会場、季節的住居等々、諸説があり、結論は導かれていない。

以上、概観した限りで、城館跡に竪穴状遺構が密集して検出される地域は、北海道、東北北部そして長野県佐久市の大井城となり、これらの地域の共通点は気候が冷涼なことである。案外この遺構は、寒い地域で必要に迫られたがために頻繁に造られたものではなかろうか。現状では大井城跡が唯一の例であるが、今後県内でも同様な竪穴状遺構の発見が期待されるところである。

註１　浪岡町教育委員会　1983　『浪岡城跡　Ⅶ』

註２　浪岡町教育委員会　1982～1984　『浪岡城跡Ⅵ～Ⅷ』

註３　北上市教育委員会　1983　「丸子館遺跡発掘調査略報」『北上市立博物館研究報告第４号』

註４　鋤柄俊夫　1986　「長野県の中世集落遺跡について」『長野県考古学会誌50号』

註５　御代田町教育委員会　1985　『野火付遺跡』

註６　前掲註２

註７　貫達人　「地下の鎌倉」『仏教芸術』164増大号

註８　國平健三他　1979　『上浜田遺跡』　神奈川県教育委員会

註９　八戸市教育委員会　1980～1984　『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅲ～Ⅷ』

註10　前掲註２

註11　岩手県教育委員会　1981　『大瀬川Ｃ遺跡（大瀬川館）』

註12　前掲註３

註13　一戸町教育委員会　1983～1985　『一戸城跡昭和57・58・59年度発掘調査概報』

註14　岩手県教育委員会　1980　「柳田館遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書―Ⅳ―』

註15　秋田県教育委員会　1984　「妻の神Ⅲ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅸ』

註16　岩手県北上市立博物館　1981　『東北地方北部の中世城郭発表資料』

註17　上ノ国町教育委員会　1985・1986　『史跡上ノ国勝山館跡Ⅵ・Ⅶ』

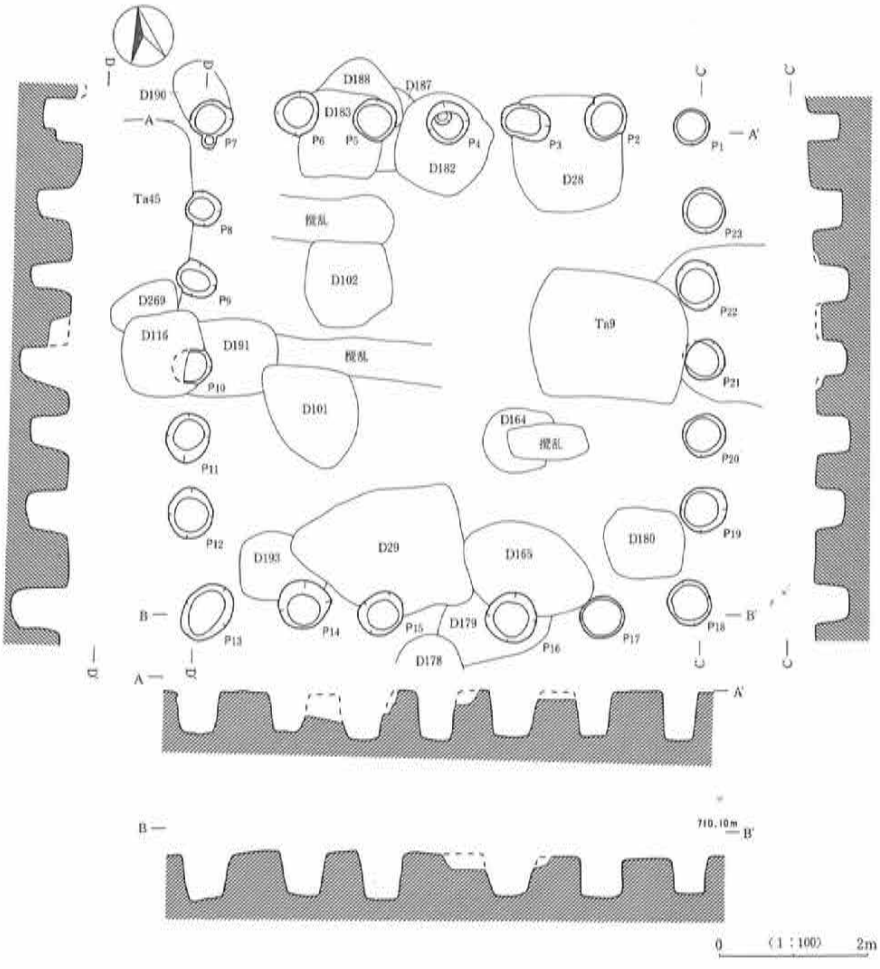
2　掘立柱建物址

1）　F1号掘立柱建物址（第64図，図版77－1）

本址は、か～く－6・7グリッドより検出された。検出面は全体層序第II層上面である。H3号住居址の西側を破壊し、Ta7・9・45と多数の土坑（D7・28・29・116・165・179・180・182・183・187・188・190・191・192・193・194・269号土坑）に破壊されている。東西・南北ともほぼ6.6mを測る方形の建物であるため桁行方向は北あるいは東となろう。他の2棟の掘立柱建物址がいずれも東西棟であることから、おそらく本址も東西棟かと思われる。柱穴は桁行・梁間とも同数の7個を数える。いずれの柱間寸法も約1.1mの中間である。柱穴の直径は50～60cmでほぼ円形を呈す。柱穴の深さは、50cm前後の深いものと40cm前後の浅いものとの両タイプがある。深い柱穴が構造柱とすれば桁行3間、梁間3間の建物址ということになり、その間の浅い柱穴には間柱があったということになるが定かでない。柱穴の埋土は、褐色土であったり、地山の黄褐色土であったり一定ではない。庇などが取りついていた可能性は検出された柱穴の配置からは考えられない。

2）　F2号掘立柱建物址（第65図，図版77－2）

本址は、さ・し－7・8グリッドより検出された。検出面は全体層序第II層の上面である。H4号住居址の西側を破壊し、多数の土坑（D40・46・158・162・202・245・247・258・259・260号土坑）に破壊されている。南北6.2m、東西7.4mを測る東西棟である。桁行方向はN－80°－Eを測り、F1号・F3号掘立柱建物址とほぼ一致する方向である。柱穴は桁行南・北列にそれぞれ9個、梁間東・西列にそれぞれ8個づつ配されている。柱間寸法は桁行北側柱列が0.8m～1.0mで0.9mが5柱間ありもっとも多い。南列は、中央がもっとも幅広く1.1mを

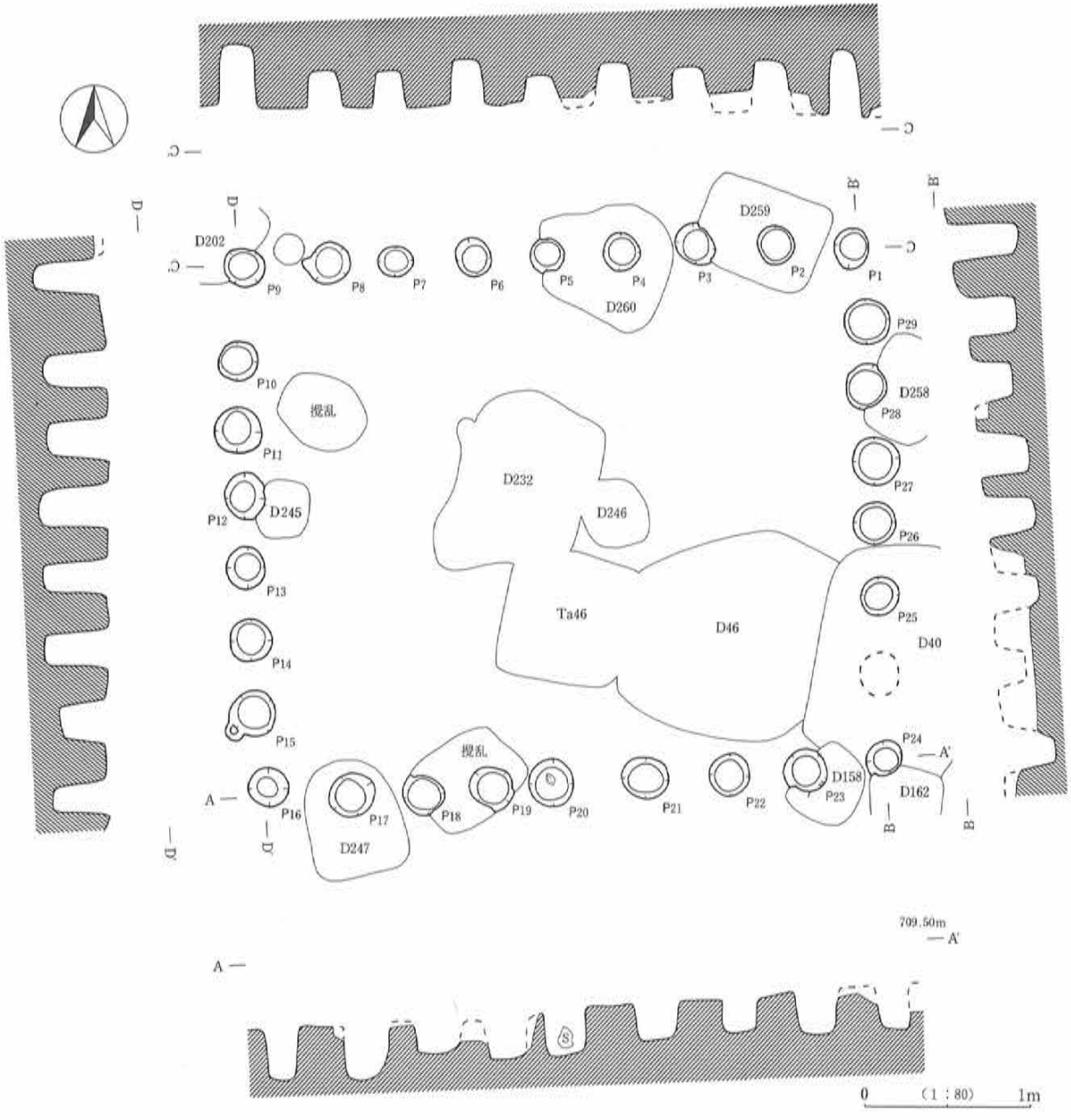


第64図　F1号掘立柱建物址実測図

測りその西隣が0.7mともっとも狭い。梁間東列は、南端が1.1mと広い他は0.9mと0.8mとなる。西列は反対に北端が1.1mともっとも広く他は東列と同様に0.8mと0.9mを測る。柱穴の直径は40cm内外と50cm内外のものが半々である。深さは深いもので80cm、浅いもので30cmを測るが、Ｆ１号ほど配置の規則性はない。柱間は桁行・梁間とも半間であり、４間×3.5間の建物と考えられ、7.4m×6.2mを計測する。

３）　Ｆ３号掘立柱建物址（第66図，図版77－３）

本址は、く・け・こ－７・８・９グリッドより検出された。Ｆ１号掘立柱建物址とＦ２号掘立柱建物址との間にあって、Ｆ１号掘立柱建物址とは約６m、Ｆ２号掘立柱建物址とは約５mの距離がある。Ｈ２号住居址の東側とＨ６号住居址の南側をそれぞれ一部分破壊している。D47・83・100・170・171・211・227・282・283号土坑に破壊されている。南北6.6m、東西8.0mの東西棟である。桁行方向は、N－85°－Eを測りＦ２号掘立柱建物址とはほぼ一致し、Ｆ１号掘立柱建物址とも近似する。柱穴は桁行南列に９個、北列に10個、梁間東列には９個がそれぞれ配されている。西列については、充分精査をせずまた作業中に点検を怠り検出できなかった。柱間寸法は、桁行北側柱列が東端が1.3mともっとも広く、他は0.9mと1.0mである。南列はやはり東端が1.2mともっとも広く、



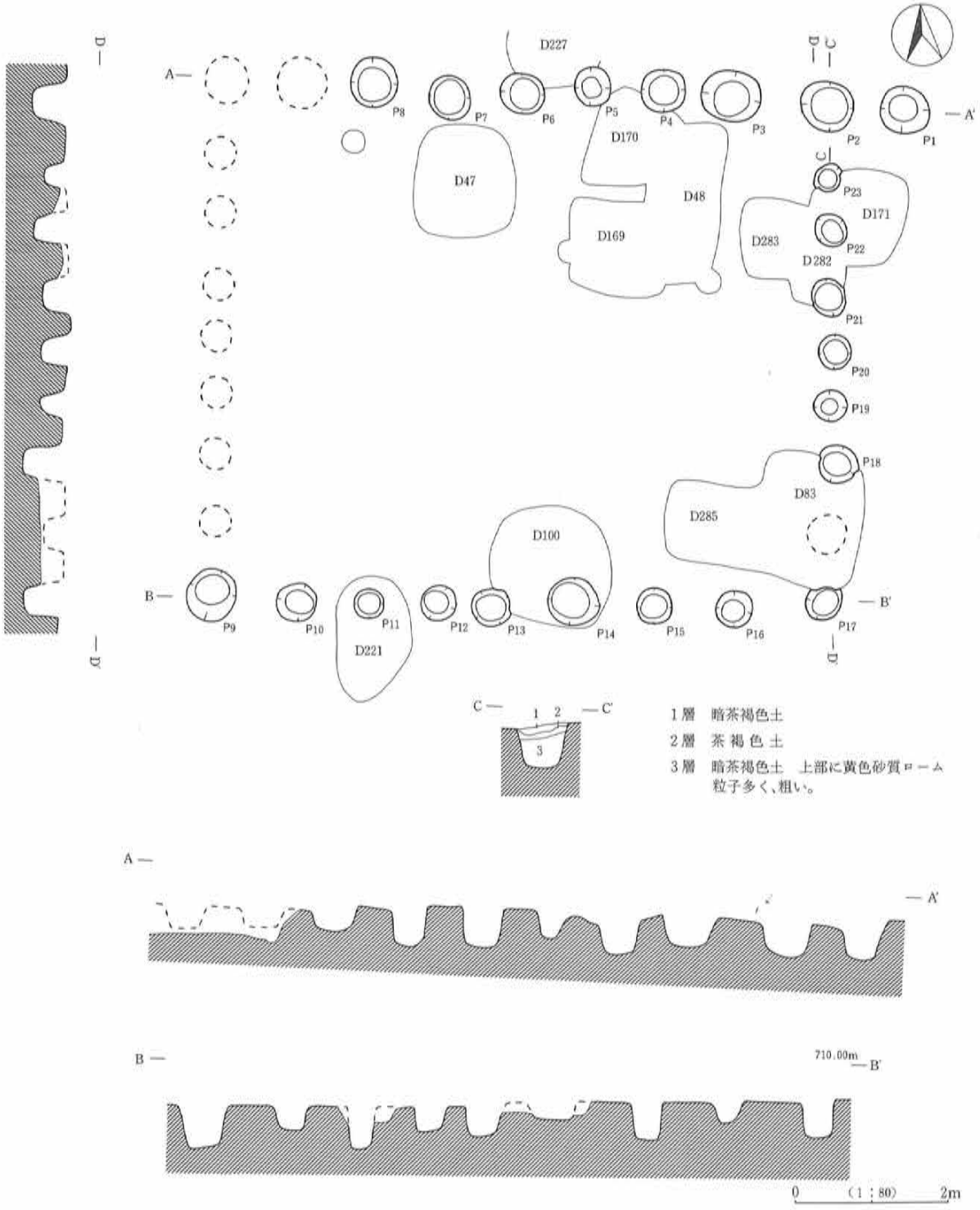
第65図　Ｆ２号掘立柱建物址実測図

1.1m、1.0m、0.9mが2柱間あって、0.7mと狭いものもある。梁間東列は、0.7m、0.8m、0.9mとなっている。

梁間東列のP_2東隣にあるP_1は、庇と関わるものであろうとも考えられる。

3　土坑（第67図～第350図，第61表～第345表，図版26—39）

大井城跡（黒岩城跡）の城郭平坦部より第345表に表記したとおり実に総数286基の土坑が検出された。その分

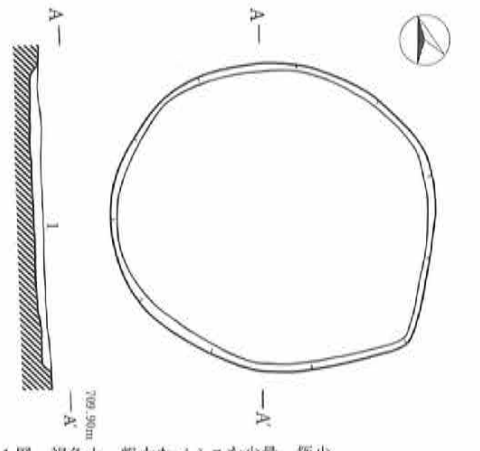


第66号　F 3号掘立柱建物址実測図

布は、ほぼ全面におよんでいるが、調査区の西・東側が若干薄いものの中央部では、多いものでは10基にのぼる土坑同志が複雑に重複しあっている。形状は、長方形、方形、円形、楕円形、不定形とさまざまであり、深さもまた、１m内外のものから10～15cmていどのものまである。注目されるのは、遺構内に灰を含むものや、石囲とか石組のみられる土坑である。遺物は、ほとんどが投棄された状態であった。

主な出土遺物には、次のものがある。内容は竪穴状遺構に似る。時期的には、13～16世紀に比定されるが、15～16世紀が主体を占める。

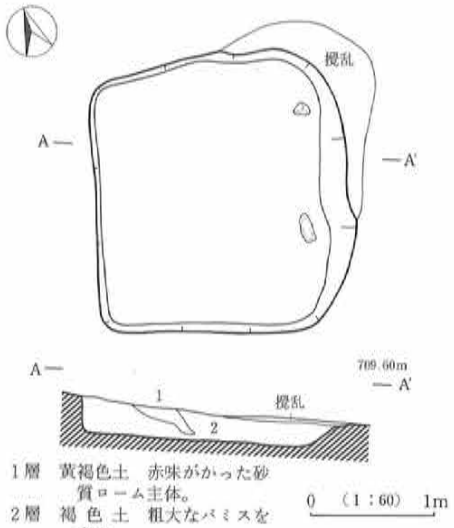
舶載陶磁器（青磁・白磁・青白磁）、国産陶磁器（常滑・中津川・美濃鉄釉・美濃灰釉・備前）、内耳土器、土師質土器、石臼（粉播臼・茶臼）、石擂鉢、砥石、磨石、銭貨、鉱滓、馬骨、その他自然遺物があった。



第67図　D１号土坑実測図

第61表　D１号土坑計測・説明表

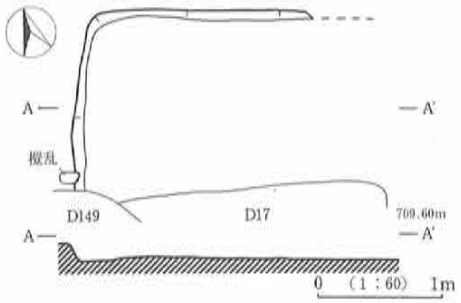
平面形態	円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	274	短軸(cm)	250
深さ(cm)	6.0～15.0	長軸方向	N－27°－E



第68図　D２号土坑実測図

第62表　D２号土坑計測・説明表

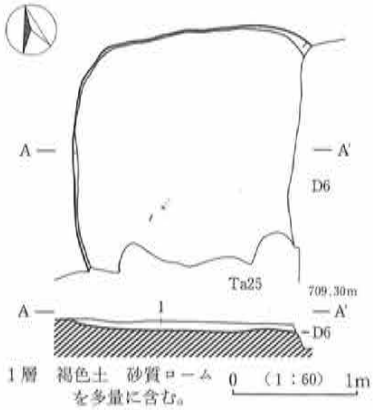
平面形態	方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	222	短軸(cm)	202
深さ(cm)	42.0	長軸方向	N－21°－E



第69図　D３号土坑実測図

第63表　D３号土坑計測・説明表

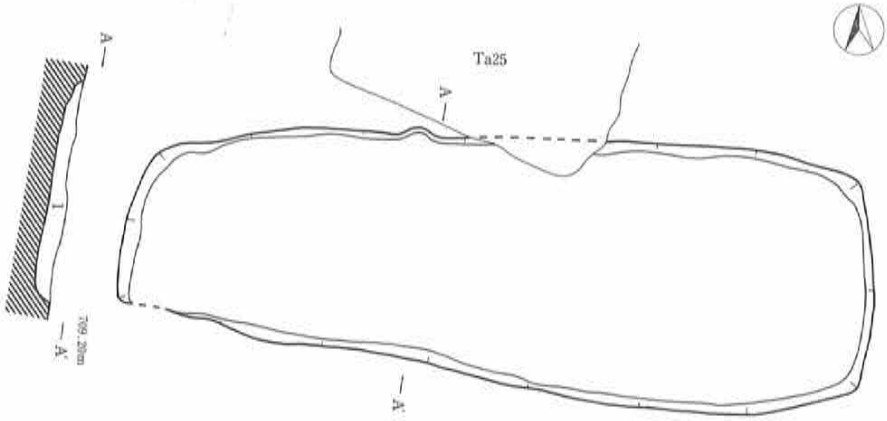
平面形態	—	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(cm)	31.0	長軸方向	—



第70図　D４号土坑実測図

第64表　D４号土坑計測・説明表

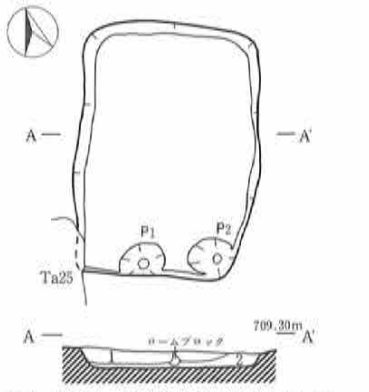
平面形態	(方　形)	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(cm)	21.0	長軸方向	—



1層　褐色土

0　(1：60)　1m

第71図　D5号土坑実測図



1層　褐色土　きめ細くサラサラしている。
2層　褐色土　砂質ローム粒子を含む。

0　(1：60)　1m

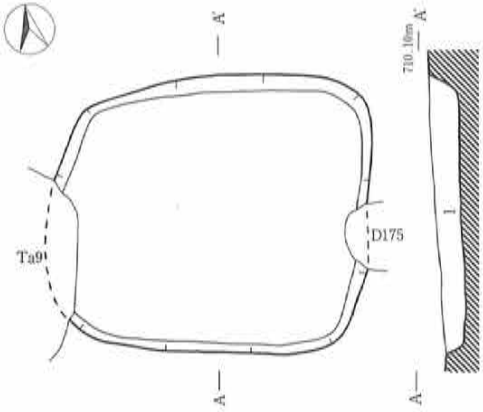
第72図　D6号土坑実測図

第65表　D5号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	601	短軸(cm)	186
深さ(cm)	40.0	長軸方向	N−85°−W

第66表　D6号土坑計測・説明表

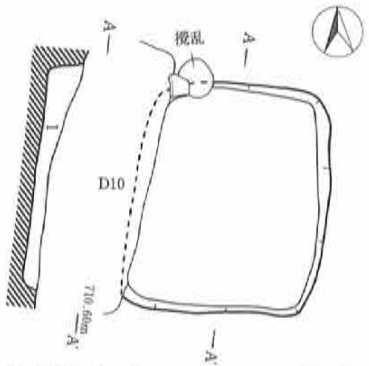
平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	203	短軸(cm)	146
深さ(cm)	22.0	長軸方向	N−30°−E



1層　暗褐色土　粒子が細かく、粘性弱。黄白色砂質ローム、炭化粒子、1〜2mm大の小の礫を少量含む。パミスを微量含む。

0　(1：60)　1m

第73図　D7号土坑実測図



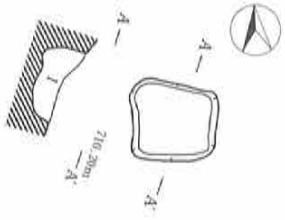
1層　茶褐色土　きめはやや細かい。下部に黄色砂質ローム粒子を若干含む。

0　(1：60)　1m

第75図　D9号土坑実測図

第67表　D7号土坑計測・説明表

平面形態	方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	250	短軸(cm)	230
深さ(cm)	34.0	長軸方向	N−78°−W



1層　褐色土　炭化物と焼けた粘土塊を多量に含む。

0　(1：60)　1m

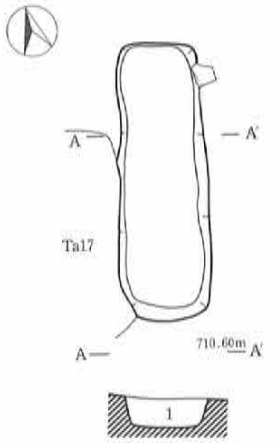
第74図　D8号土坑実測図

第68表　D8号土坑計測・説明表

平面形態	方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	68	短軸(cm)	62
深さ(cm)	49.5	長軸方向	N−77°−W

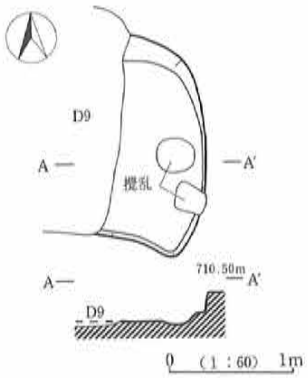
第69表　D9号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	184	短軸(cm)	—
深さ(cm)	34.5	長軸方向	N−10°−E

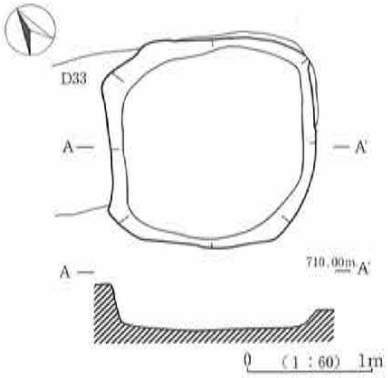


1層　茶褐色土(淡)　黄色砂質ローム粒子を多量に含み、粗い。9～5mm大の炭化粒子を25cm²に5個程含む。

第76図　D10号土坑実測図



第77図　D11号土坑実測図



第78図　D12号土坑実測図

第70表　D10号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	223	短軸(cm)	72
深さ(cm)	37.5	長軸方向	N－14°－E

第71表　D11号土坑計測・説明表

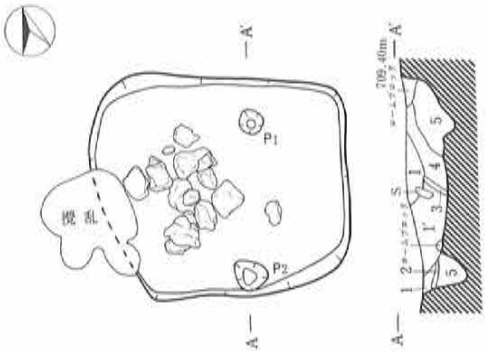
平面形態	—	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	161
深さ(cm)	35.0	長軸方向	—

第72表　D12号土坑計測・説明表

平面形態	方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	167	短軸(cm)	164
深さ(cm)	84.0	長軸方向	N－30°－E

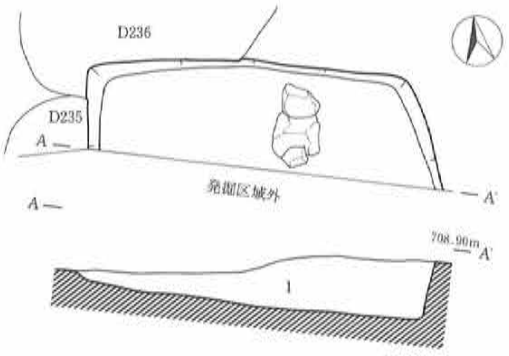
第73表　D13号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	206	短軸(cm)	174
深さ(cm)	39.5	長軸方向	N－73°－W



1層　褐色土　黄色砂質ローム粒子とパミスを含む。
1'層　褐色土　1層よりも砂質ローム粒子が少ない。
2層　黒褐色土　パミスを少量含む。
3層　茶褐色土　パミスを少量含む。
4層　褐色土　灰と炭化物を含む。
5層　明褐色土　砂質ローム粒子を1層よりも多量に含む。

第79図　D13号土坑実測図

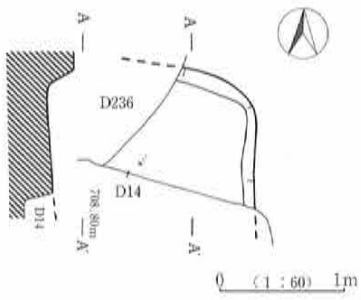


1層　暗茶褐色土　底面に焼土・炭化粒子を多く含む。

第80図　D14号土坑実測図

第74表　D14号土坑計測・説明表

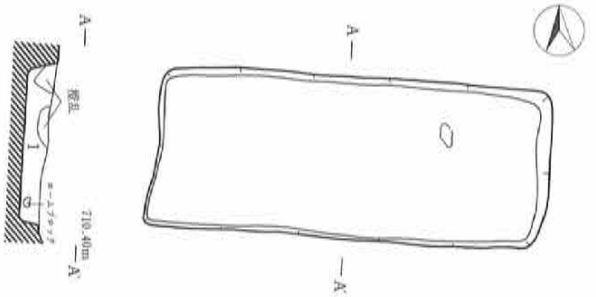
平面形態	—	断面形状	逆台形
長軸(cm)	287	短軸(cm)	—
深さ(cm)	66.5	長軸方向	—



第81図　D15号土坑実測図

第75表　D15号土坑計測・説明表

平面形態	—	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(cm)	6.0	長軸方向	—

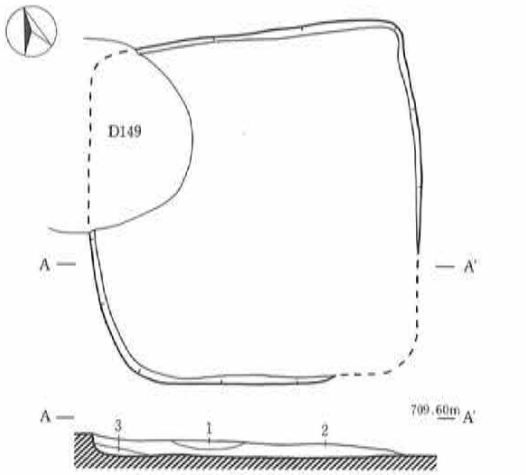


1層　淡褐色土　褐色土に白色砂質ローム粒子を含む。

第82図　D16号土坑実測図

第76表　D16号土坑計測・説明表

平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	313	短軸(cm)	128
深さ(cm)	30.5	長軸方向	N−86°−W

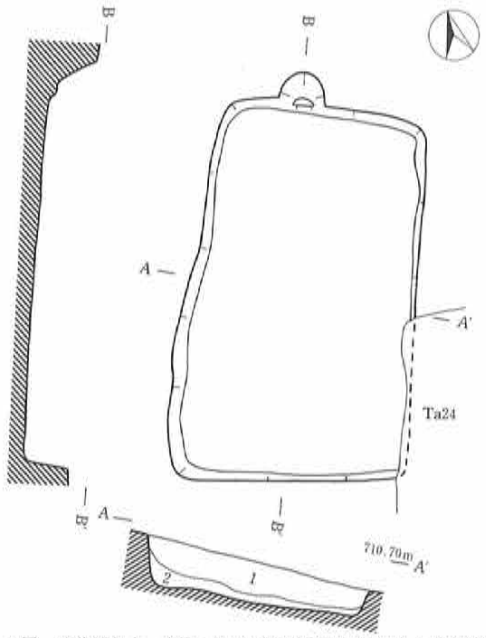


1層　淡褐色土　粒子が細かく、パミス含む。直径3～5mmの小の礫を含む。しまりなし。
2層　褐色土　黄色のパミス含む。直径1～4mmの小の礫を含む。
3層　暗褐色土　粒子が細かく、しまりなし。

第83図　D17号土坑実測図

第77表　D17号土坑計測・説明表

平面形態	方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	280	短軸(cm)	266
深さ(cm)	21.5	長軸方向	N−15°−E

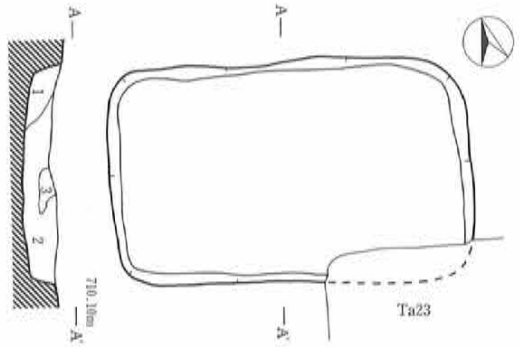


1層　暗茶褐色土　直径1～2cmの小の礫(5cm²に2個程)、と黄白砂質ローム粒子を含む。黒色土のブロックを含む。粒子は粗い。
2層　明茶褐色土　灰白色砂質ローム粒子を多量に含む。

第85図　D19号土坑実測図

第79表　D19号土坑計測・説明表

平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	302	短軸(cm)	183
深さ(cm)	50.5	長軸方向	N−20°−E

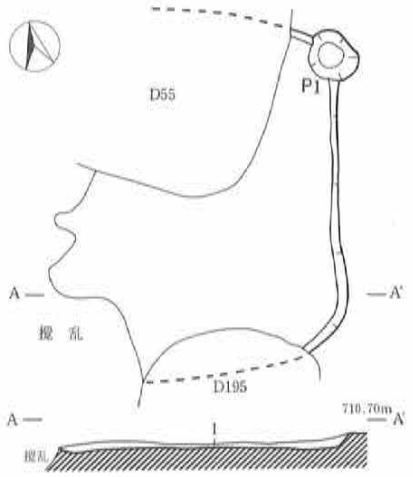


1層　明褐色土　淡橙色の砂質ロームを基本とする。ほとんどが砂質ローム。
2層　明褐色土　淡橙色の砂質ロームを基本とする。黒褐色土が混じる。
3層　明褐色土　淡橙色の砂質ロームを基本とする。2層よりも少量の黒褐色土を含む。

第84図　D18号土坑実測図

第78表　D18号土坑計測・説明表

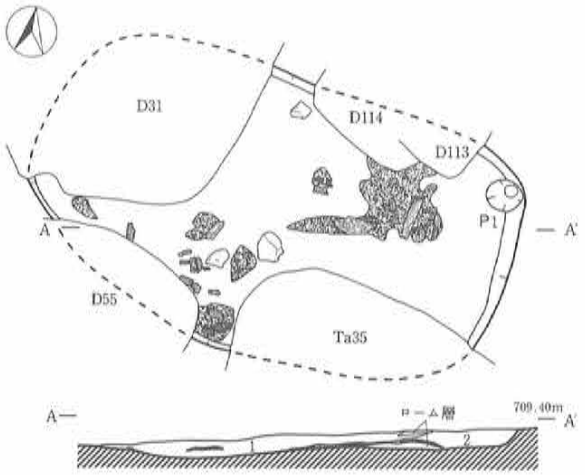
平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	290	短軸(cm)	167
深さ(cm)	25.0	長軸方向	N−72°−W



1層　褐色土　赤色・黄色の砂質ローム ブロックを多量に含む。

0　(1：60)　1m

第86図　D20号土坑実測図



1層　褐色土　砂質ローム粒子と、炭化物を少量含む。
2層　褐色土　ボヤ炭状の炭化物を多量に含む。

0　(1：60)　1m

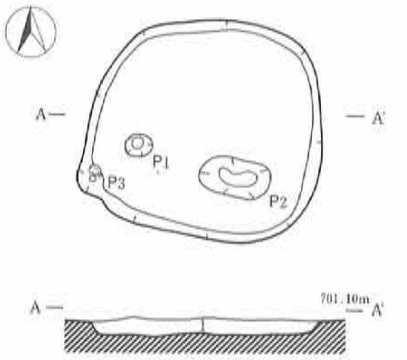
第87図　D21号土坑実測図

第80表　D20号土坑計測・説明表

平面形態	—	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(cm)	19.0	長軸方向	—

第81表　D21号土坑計測・説明表

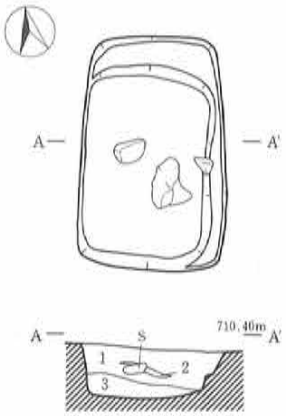
平面形態	(楕円形)	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	224
深さ(cm)	24.0	長軸方向	—



1層　暗茶褐色土　灰を含む。

0　(1：60)　1m

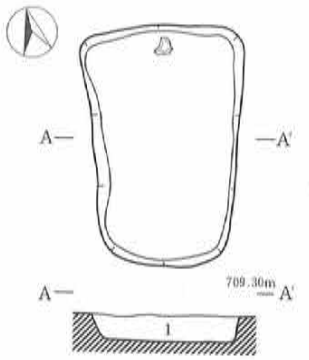
第88図　D22号土坑実測図



1層　暗褐色土　1cm前後のパミスを多量に含む。
2層　黒褐色土　炭化物を含む。
3層　淡褐色土　1層より砂質ローム粒子を多量に含む。

0　(1：60)　1m

第89図　D23号土坑実測図



1層　褐色土　炭化物とパミスを含み粘性弱。きめ細い。

0　(1：60)　1m

第90図　D24号土坑実測図

第82表　D22号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	183	短軸(cm)	175
深さ(cm)	15.0	長軸方向	N−82°−W

第83表　D23号土坑計測・説明表

平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	186	短軸(cm)	114
深さ(cm)	44.5	長軸方向	N−14°−E

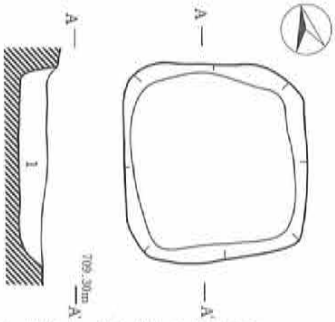
第84表　D24号土坑計測・説明表

平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	193	短軸(cm)	116
深さ(cm)	29.0	長軸方向	N−15°−E

1層　淡褐色土　白色ローム土と褐色土を含む。

0　(1：60)　1m

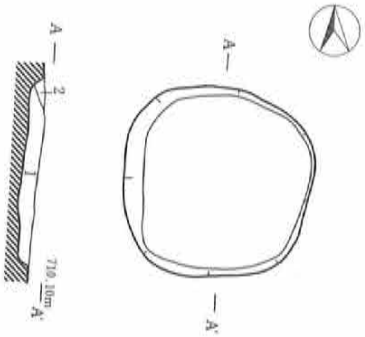
第91図　D25号土坑実測図



1層　褐色土　きめ細かく、灰を含む。

0　(1：60)　1m

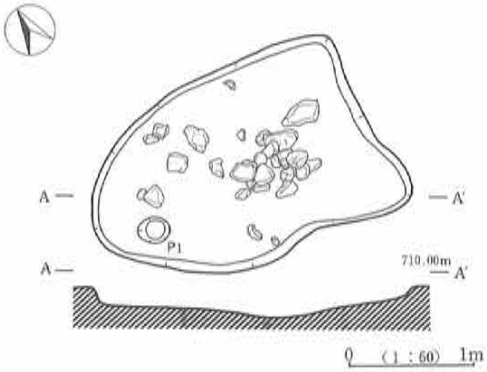
第92図　D26号土坑実測図



1層　褐色土　パミスを含む。
2層　褐色土　1層に砂質ロームブロックを含む。

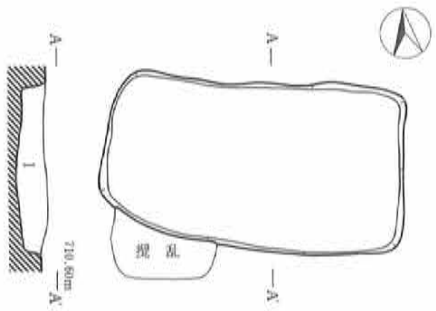
0　(1：60)　1m

第94図　D28号土坑実測図



0　(1：60)　1m

第95図　D29号土坑実測図



1層　茶褐色土　パミスと黄色砂質ローム粒子を多量に含む。

0　(1：60)　1m

第93図　D27号土坑実測図

第85表　D25号土坑計測・説明表

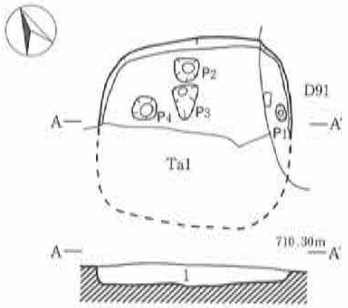
平面形態	方　形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	178	短軸(cm)	176
深さ(cm)	37.0	長軸方向	N−13°−E

第87表　D27号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	240	短軸(cm)	132
深さ(cm)	37.0	長軸方向	N−77°−W

第86表　D26号土坑計測・説明表

平面形態	方　形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	160	短軸(cm)	156
深さ(cm)	33.0	長軸方向	N−12°−E



1層　褐色土　粗砂、黄色および桃色砂質ロームを多量に含み、炭化粒子を少量含む。パサパサした土層。粒子は細かく粘性弱。

0　(1：60)　1m

第96図　D30号土坑実測図

第88表　D28号土坑計測・説明表

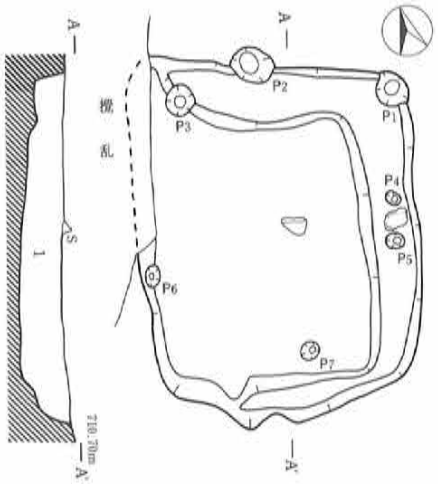
平面形態	円　形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	150	短軸(cm)	148
深さ(cm)	20.5	長軸方向	N−7°−E

第89表　D29号土坑計測・説明表

平面形態	不整形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	235	短軸(cm)	158
深さ(cm)	29.5	長軸方向	N−83°−W

第90表　D30号土坑計測・説明表

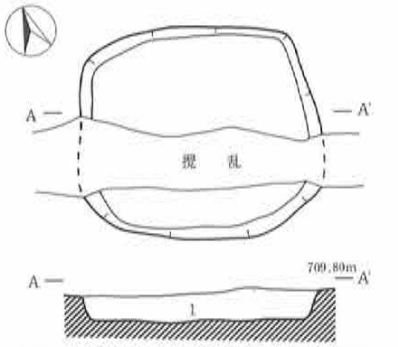
平面形態	(隅丸方形)	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	154
深さ(cm)	25.0	長軸方向	—



1層　明茶褐色土　黒色土、桃白色砂質ローム粒子を多量に、炭化粒子を少量含む。きめが粗い。

0　(1：60)　1m

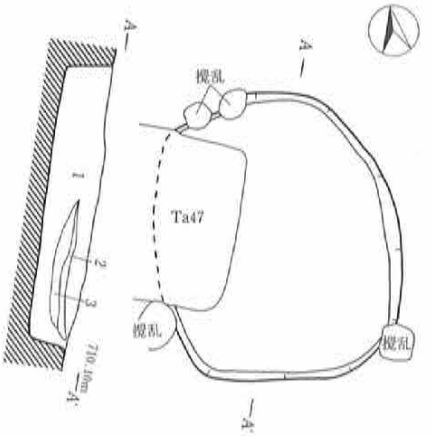
第97図　D31号土坑実測図



1層　褐色土　黄色砂質ローム・炭化物・焼土塊を含む。粘性は弱い。

0　(1：60)　1m

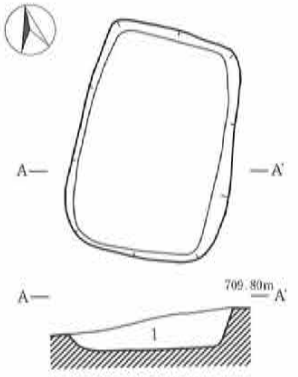
第98図　D32号土坑実測図



1層　明茶褐色土　ローム粒子・炭化物及びパミスを多量に含む。
2層　明茶褐色土　1層よりも大粒のロームを含む。
3層　暗茶褐色土　砂質ローム粒子と多量の炭化物を含む。

0　(1：60)　1m

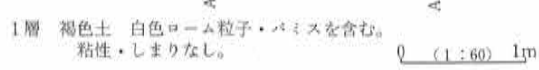
第100図　D34号土坑実測図



1層　褐色土　灰と少量の炭化物を含む。

0　(1：60)　1m

第101図　D35号土坑実測図



1層　褐色土　白色ローム粒子・パミスを含む。粘性・しまりなし。

0　(1：60)　1m

第99図　D33号土坑実測図

第91表　D31号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	294	短軸(cm)	225
深さ(cm)	45.0	長軸方向	N−12°−E

第92表　D32号土坑計測・説明表

平面形態	方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	188	短軸(cm)	171
深さ(cm)	27.5	長軸方向	N−72°−W

第93表　D33号土坑計測・説明表

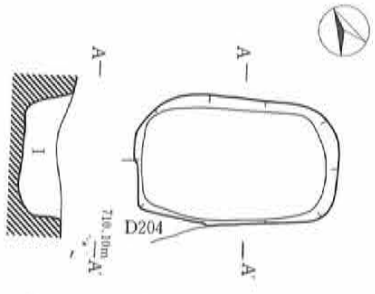
平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	262	短軸(cm)	112
深さ(cm)	80.0	長軸方向	N−67°−W

第94表　D34号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	231	短軸(cm)	195
深さ(cm)	43.0	長軸方向	N

第95表　D35号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	185	短軸(cm)	124
深さ(cm)	31.5	長軸方向	N−25°−E



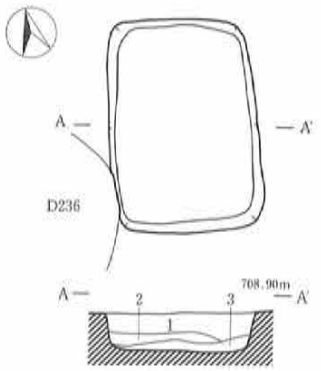
1層　暗褐色土　炭化粒子・焼土・黄色パミスを含む。

0　(1：60)　1m

第102図　D36号土坑実測図

第96表　D36号土坑計測・説明表

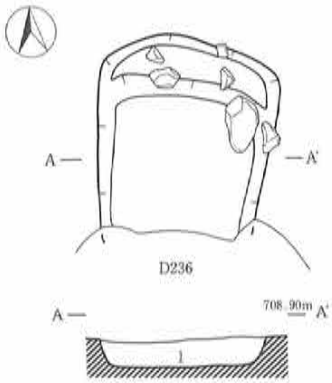
平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	162	短軸(cm)	102
深さ(cm)	49.0	長軸方向	N−63°−W



1層　暗茶褐色土　パミス・砂質ローム粒子を含む。
2層　暗茶褐色土　パミス・砂質ローム粒子とともに1層より多量に含む。
3層　黄褐色土　多量の砂質ローム粒子と少量のパミスを含む。

0　(1：60)　1m

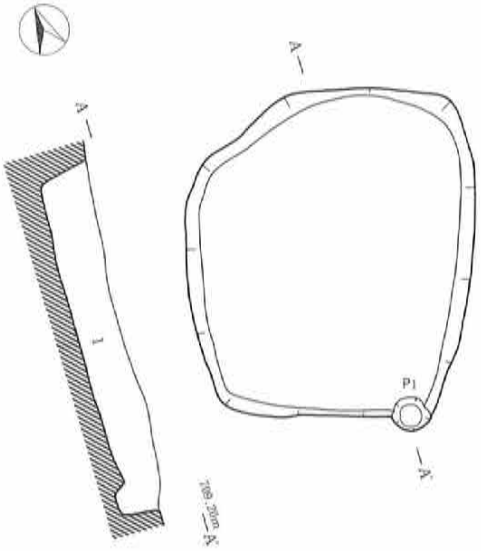
第103図　D37号土坑実測図



1層　黒褐色土　パミス・砂質ローム粒子を少量含む。粘性弱。

0　(1：60)　1m

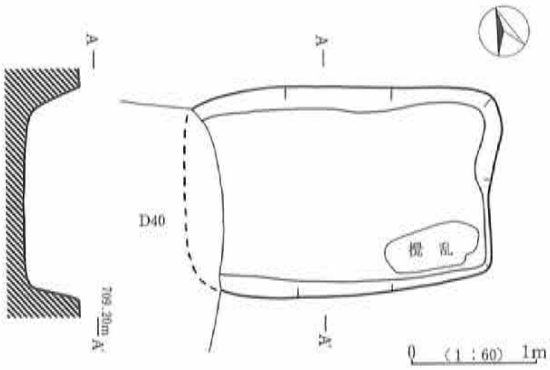
第104図　D38号土坑実測図



1層　茶褐色土　炭化物を含み、白桃色の砂質ロームブロックを多量に含む。きめが粗い。

0　(1：60)　1m

第106図　D40号土坑実測図



0　(1：60)　1m

第105図　D39号土坑実測図

第97表　D37号土坑計測・説明表

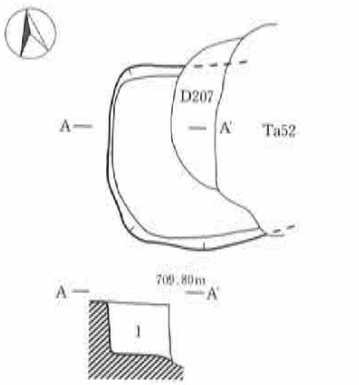
平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	174	短軸(cm)	120
深さ(cm)	42.5	長軸方向	N−11°−E

第98表　D38号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	135
深さ(cm)	21.0	長軸方向	—

第99表　D39号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	166
深さ(cm)	52.0	長軸方向	N−69°−W



1層　暗褐色土　砂粒とパミスを含む。サラサラしている。

0　(1：60)　1m

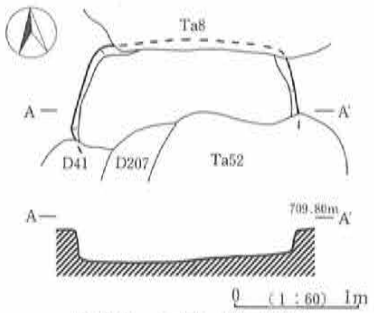
第107図　D41号土坑実測図

第100表　D40号土坑計測・説明表

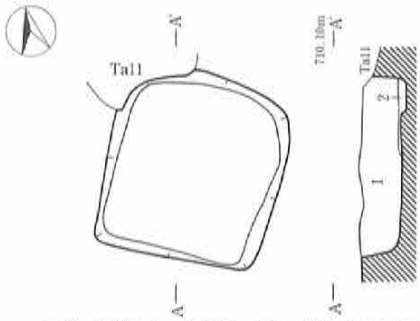
平面形態	不整方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	261	短軸(cm)	231
深さ(cm)	52.0	長軸方向	N−24°−E

第101表　D41号土坑計測・説明表

平面形態	(長方形)	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	143
深さ(cm)	49.0	長軸方向	—



第108図　D42号土坑実測図

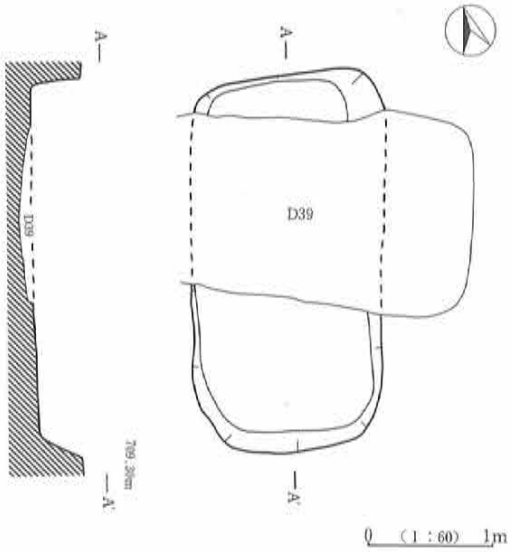


1層　明褐色土　炭化物・焼土・灰を多量に含む。
2層　明褐色土　砂質ローム粒子主体。褐色土を含む。

第110図　D44号土坑実測図

第104表　D44号土坑計測・説明表

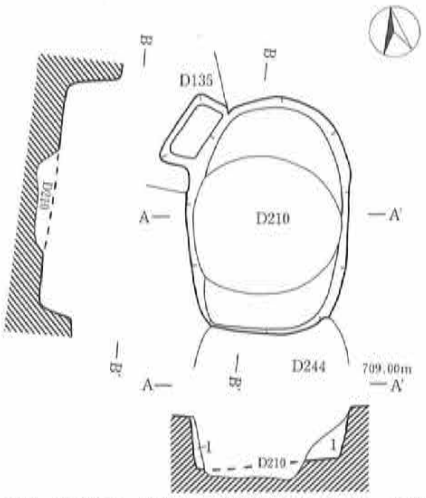
平面形態	方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	149	短軸(cm)	149
深さ(cm)	35.0	長軸方向	N−25°−E



第111図　D45号土坑実測図

第105表　D45号土坑計測・説明表

平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	302	短軸(cm)	154
深さ(cm)	42.0	長軸方向	N−17°−W



1層　黄褐色土　砂質ローム粒子を多量に含む。粘性弱。

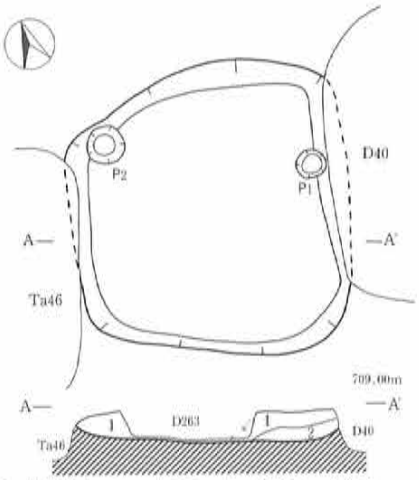
第109図　D43号土坑実測図

第102表　D42号土坑計測・説明表

平面形態	(長方形)	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(cm)	28.0	長軸方向	—

第103表　D43号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	192	短軸(cm)	130
深さ(cm)	52.0	長軸方向	N−8°−E

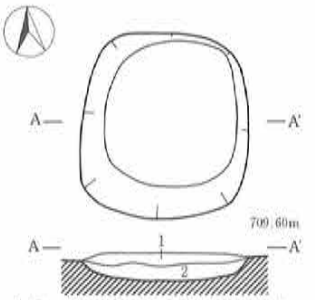


1層　黒褐色土　ロームブロック・砂質ローム粒子・パミスを含む。
2層　暗褐色土

第112図　D46号土坑実測図

第106表　D46号土坑計測・説明表

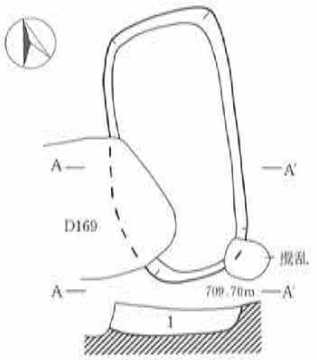
平面形態	不整方形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	210	短軸(cm)	—
深さ(cm)	24.5	長軸方向	—



1層　褐色土　パミス及び炭を含む。砂質ローム粒子混入。
2層　褐色土　1層よりパミスを多量に含む。

0　(1：60)　1m

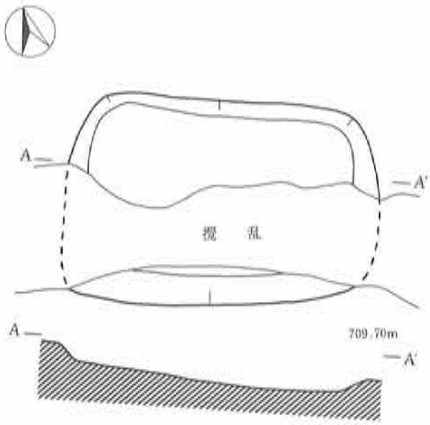
第113図　D47号土坑実測図



1層　明茶褐色土　黄色砂質ローム粒子を主体とし、炭化粒子を少量含む。

0　(1：60)　1m

第114図　D48号土坑実測図



0　(1：60)　1m

第115図　D49号土坑実測図

第107表　D47号土坑計測・説明表

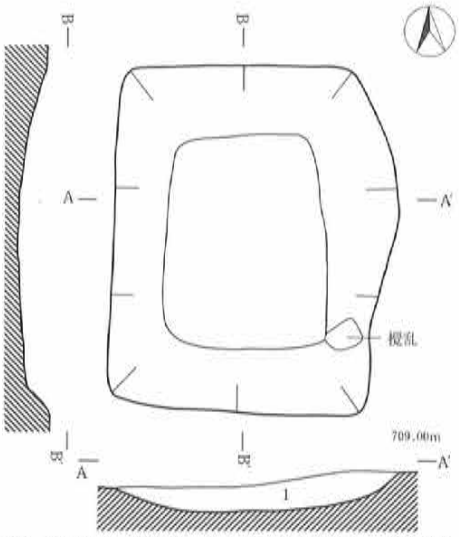
平面形態	方　形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	156	短軸(cm)	134
深さ(cm)	26.5	長軸方向	N－5°－E

第108表　D48号土坑計測・説明表

平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	213	短軸(cm)	106
深さ(cm)	42.0	長軸方向	N－6.5°－E

第109表　D49号土坑計測・説明表

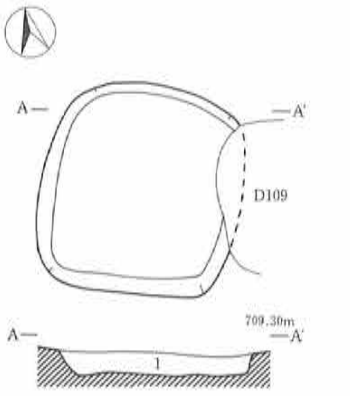
平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	246	短軸(cm)	163
深さ(cm)	27.5	長軸方向	N－72°－W



1層　茶褐色土　砂質ロームブロック・砂質ローム粒子を含む。パミスを少量含む。

0　(1：60)　1m

第116図　D50号土坑実測図



1層　茶褐色土　炭化物・灰を少量含む。

0　(1：60)　1m

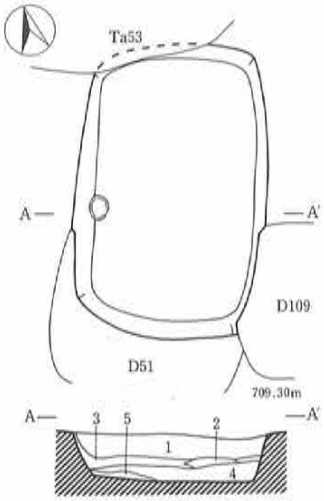
第117図　D51号土坑実測図

第110表　D50号土坑計測・説明表

平面形態	長　方　形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	356	短軸(cm)	224
深さ(cm)	34.5	長軸方向	N

第111表　D51号土坑計測・説明表

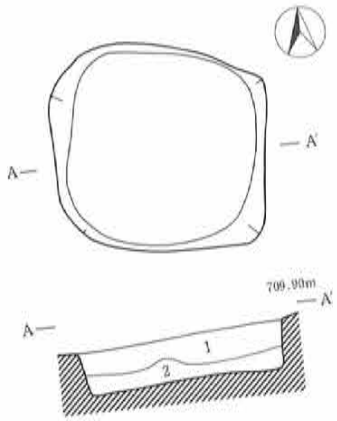
平面形態	方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	196	短軸(cm)	156
深さ(cm)	19.0	長軸方向	N－22°－E



1層　茶褐色土　炭化物・灰を少量含む。
2層　黒褐色土　有機質。
3層　明褐色土　砂質ローム粒子と褐色土を含む。
4層　明褐色土　砂質ローム粒が主体。
5層　灰褐色土　灰が主体。

0　(1：60)　1m

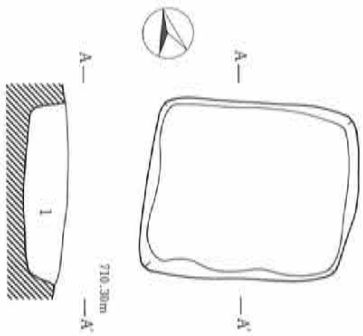
第118図　D52号土坑実測図



1層　暗褐色土　黄色砂質ローム・パミス・炭化粒子を含む。粒子は粗い。
2層　茶褐色土　黄色砂質ローム・炭化粒子を1層より多量に含む。粒子は粗い。

0　(1：60)　1m

第119図　D53号土坑実測図



1層　褐色土　粗砂・パミスを多量に含む。炭化物を少量含む。

0　(1：60)　1m

第120図　D54号土坑実測図

第113表　D53号土坑計測・説明表

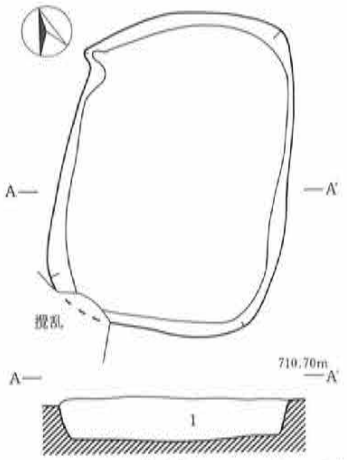
平面形態	不整方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	169	短軸(cm)	167
深さ(cm)	52.0	長軸方向	N−81°−W

第112表　D52号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	228	短軸(cm)	153
深さ(cm)	47.0	長軸方向	N−13°−E

第114表　D54号土坑計測・説明表

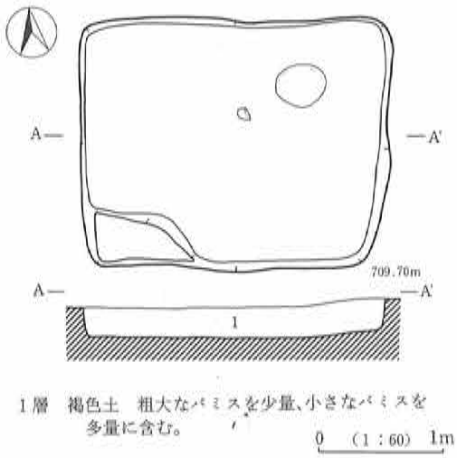
平面形態	方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	166	短軸(cm)	144
深さ(cm)	32.5	長軸方向	N−74°−W



1層　茶褐色土　桃白色のロームブロックと5cm²に1個の炭化粒子を含み、きめが粗い。人為的と思われる。

0　(1：60)　1m

第121図　D55号土坑実測図



1層　褐色土　粗大なパミスを少量、小さなパミスを多量に含む。

0　(1：60)　1m

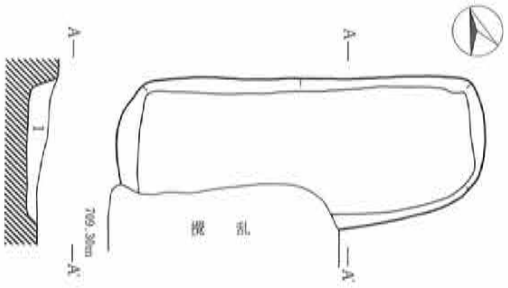
第122図　D56号土坑実測図

第115表　D55号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	257	短軸(cm)	180
深さ(cm)	39.5	長軸方向	N−31°−E

第116表　D56号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	245	短軸(cm)	200
深さ(cm)	39.0	長軸方向	N−5°−E



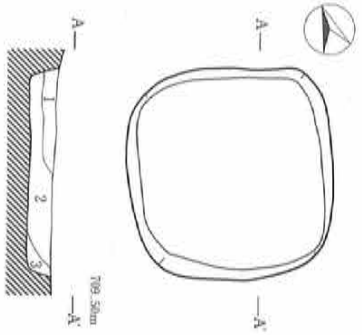
1層　灰褐色土　褐色土に灰が多量に混じる。

0　(1：60)　1m

第123図　D57号土坑実測図

第117表　D57号土坑計測・説明表

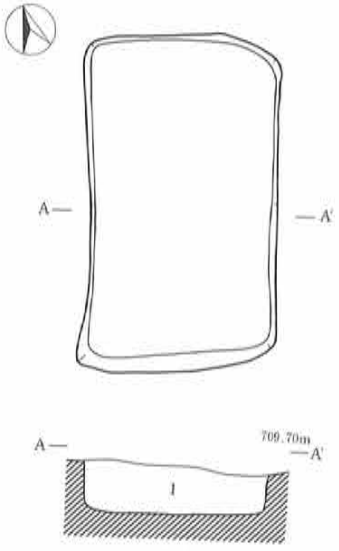
平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	294	短軸(cm)	120
深さ(cm)	51.5	長軸方向	N−18°−E



1層　褐色土　炭化物・パミスを含む。
2層　黄褐色土　黄色砂質ローム粒子が主体。
3層　褐色土　1層と酷似する。

0　(1：60)　1m

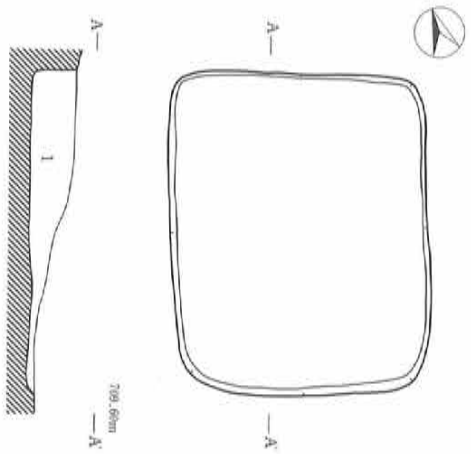
第125図　D59号土坑実測図



1層　褐色土　灰・極小パミスを含む。

0　(1：60)　1m

第126図　D60号土坑実測図



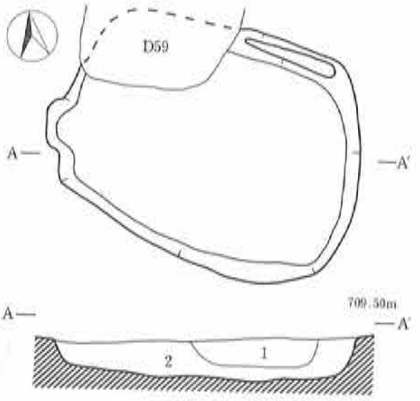
1層　褐色土　極小パミス・粗砂を多量に含む。

0　(1：60)　1m

第124図　D58号土坑実測図

第118表　D58号土坑計測・説明表

平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	247	短軸(cm)	205
深さ(cm)	52.5	長軸方向	N−19°−E



1層　褐色土　灰が多量に含まれる。
2層　褐色土　砂質ローム粒子・パミスを含む。

0　(1：60)　1m

第127図　D61号土坑実測図

第119表　D59号土坑計測・説明表

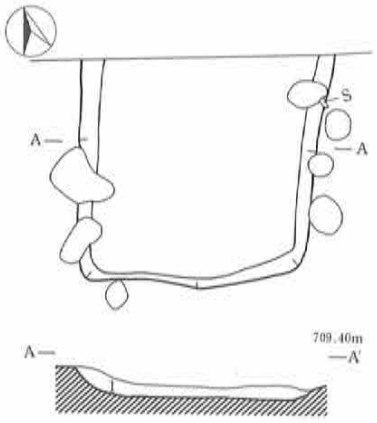
平面形態	隅丸方形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	159	短軸(cm)	151
深さ(cm)	21.0	長軸方向	N−18°−W

第120表　D60号土坑計測・説明表

平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	268	短軸(cm)	149
深さ(cm)	44.5	長軸方向	N−16°−E

第121表　D61号土坑計測・説明表

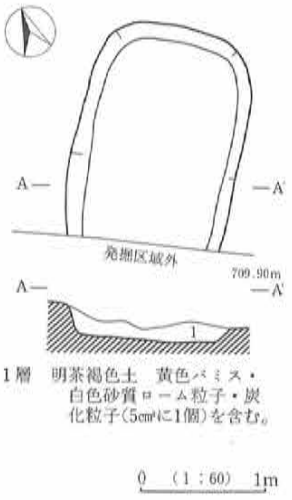
平面形態	隅丸長方形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	245	短軸(cm)	190
深さ(cm)	28.5	長軸方向	N−67°−W



1層　褐色土　黄色砂質ローム粒子・灰を含む。

0　(1：60)　1m

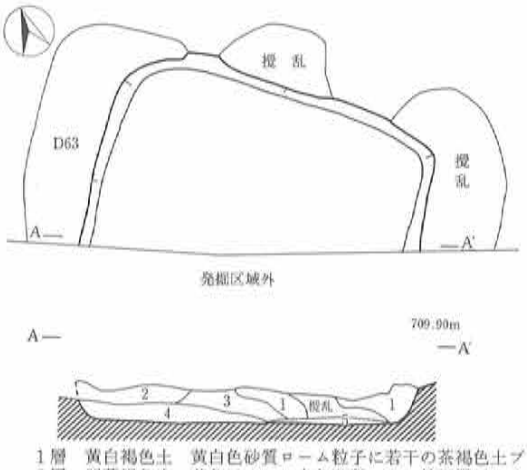
第128図　D62号土坑実測図



1層　明茶褐色土　黄色パミス・白色砂質ローム粒子・炭化粒子(5cm²に1個)を含む。

0　(1：60)　1m

第129図　D63号土坑実測図



1層　黄白褐色土　黄白色砂質ローム粒子に若干の茶褐色土ブロックが混入。
2層　明茶褐色土　黄色パミス・白色砂質ローム粒子混じる。炭化粒(5cm²に1個)を含む。
3層　明茶褐色土　パミス・砂質ローム粒子・炭化粒子を含む。
4層　黒褐色土　きめ細かく、粘性若干あり。
5層　淡褐色土　黄色砂質ローム粒子多量に含む。

0　(1：60)　1m

第130図　D64号土坑実測図

第122表　D62号土坑計測・説明表

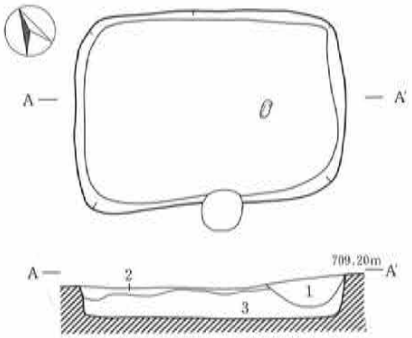
平面形態	長方形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	190
深さ(cm)	28.0	長軸方向	N—17°—E

第123表　D63号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	132
深さ(cm)	24.5	長軸方向	N—30°—E

第124表　D64号土坑計測・説明表

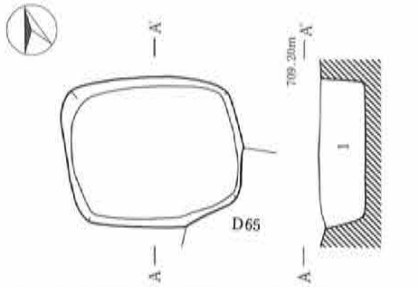
平面形態	—	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	264
深さ(cm)	65.5	長軸方向	—



1層　黒褐色土　パミスを少量含む。粘性なし。
2層　茶褐色土　黄色ローム粒子を少量含む。
3層　明茶褐色土　パミス・黄色ローム粒子を多量に含む。粘性なく、サラサラする。

0　(1：60)　1m

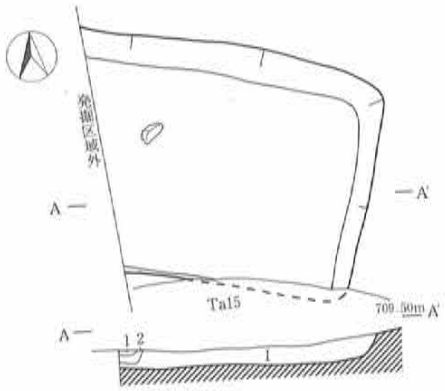
第131図　D65号土坑実測図



1層　明茶褐色土　黄色砂質ローム・黄色パミスを多量に含む。

0　(1：60)　1m

第132図　D66号土坑実測図



1層　褐色土　ローム砂質粒子・パミス・炭化物を含む。
2層　黄褐色土　黄色砂質ローム粒子を主体とする。

0　(1：60)　2m

第133図　D67号土坑実測図

第125表　D65号土坑計測・説明表

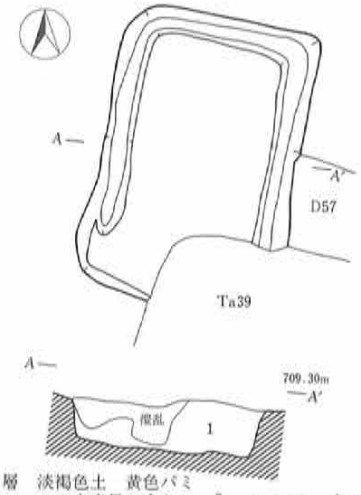
平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	214	短軸(cm)	154
深さ(cm)	28.5	長軸方向	N—63°—W

第126表　D66号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	140	短軸(cm)	121
深さ(cm)	42.0	長軸方向	N—79°—W

第127表　D67号土坑計測・説明表

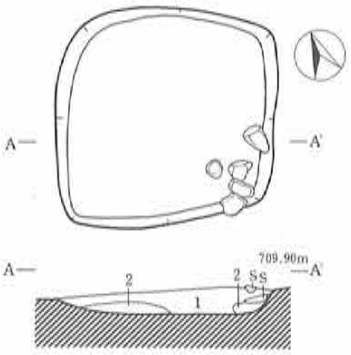
平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	200
深さ(cm)	33.5	長軸方向	N—77°—W



1層　淡褐色土　黄色パミスを多量に含む。

0　(1：60)　1m

第134図　D68号土坑実測図

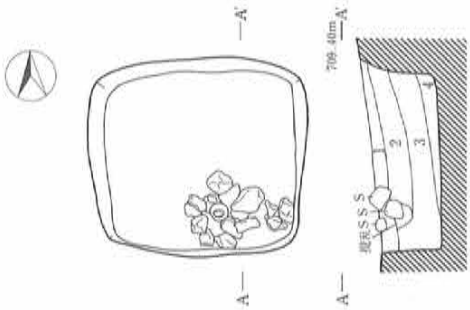


1層　褐色土　黄色砂質ローム・炭化粒子・パミスを微量含む。粒子は細かく、粘性弱。

2層　暗褐色土　黄色砂質ローム・パミスが少量混入する。粒子は細かく、粘性はやや強い。

0　(1：60)　1m

第136図　D70号土坑実測図



1層　暗褐色土　黄色砂質ロームが少量含まれる。

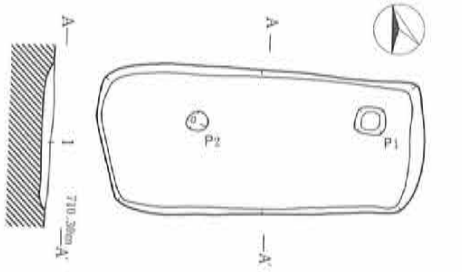
2層　褐色土　黄色砂質ローム・パミスを多量、炭化物を少量含む。

3層　暗褐色土　黄色砂質ロームを多量、パミス、炭化物を少量含む。

4層　明褐色土　黄色砂質ロームを多量に含む。

0　(1：60)　1m

第137図　D71号土坑実測図



1層　褐色土　灰を多量に含む。

0　(1：60)　1m

第135図　D69号土坑実測図

第128表　D68号土坑計測・説明表

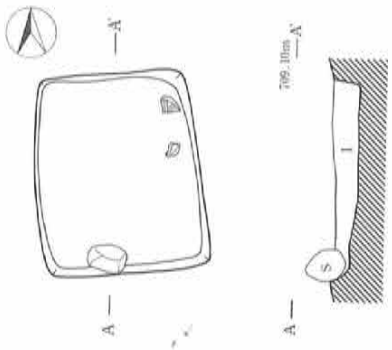
平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	234	短軸(cm)	155
深さ(cm)	51.0	長軸方向	N−14°−E

第129表　D69号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	260	短軸(cm)	118
深さ(cm)	18.5	長軸方向	N−71°−W

第130表　D70号土坑計測・説明表

平面形態	方形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	176	短軸(cm)	174
深さ(cm)	28.5	長軸方向	N−67°−W



1層　明茶褐色土　パミス及び砂質ローム粒子を多量に含む。

0　(1：60)　1m

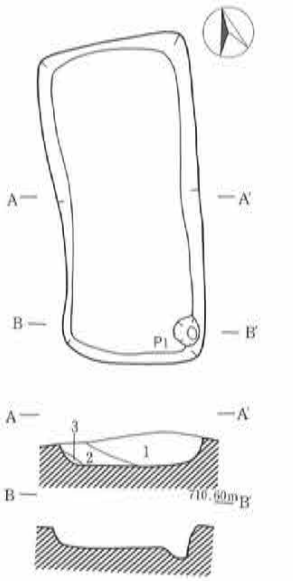
第138図　D72号土坑実測図

第131表　D71号土坑計測・説明表

平面形態	方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	173	短軸(cm)	159
深さ(cm)	65.5	長軸方向	E

第132表　D72号土坑計測・説明表

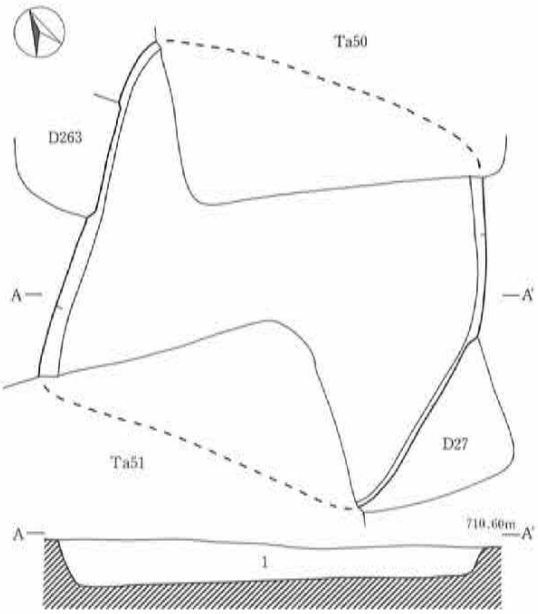
平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	162	短軸(cm)	131
深さ(cm)	27.5	長軸方向	N−6°−W



1層　暗褐色土　灰・炭化物を多量に含む。
2層　褐色土　砂質ローム粒子を多量に含む。
3層　黒褐色土　きめ細かい。

0　（1：60）　1m

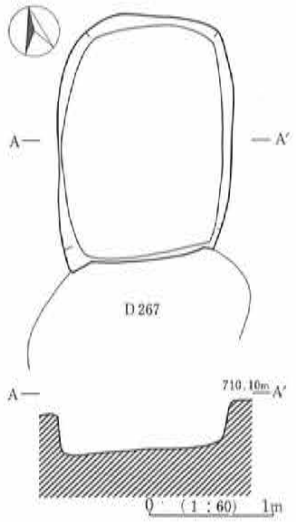
第139図　D73号土坑実測図



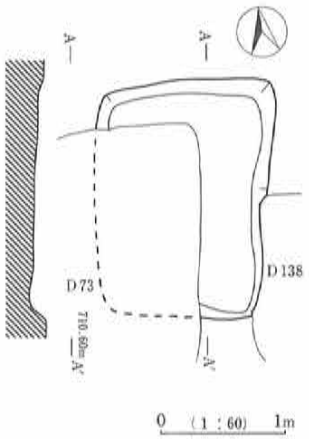
1層　明茶褐色土　小の礫・炭（10㎝に1～2個）・黒色土ブロックを含む。
壁際において黄色砂質ロームを多く含む。

0　（1：60）　2m

第140図　D74号土坑実測図

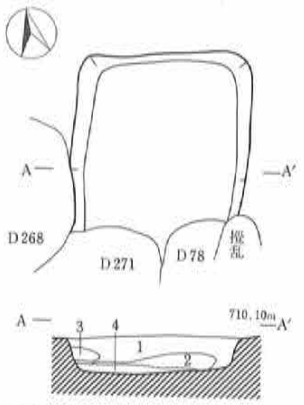


第141図　D75号土坑実測図



0　（1：60）　1m

第142図　D76号土坑実測図



1層　暗褐色土　きめはやや粗い。
2層　黄褐色土　砂質ロームを主体とする。
3層　黄褐色土　黄褐色土に暗褐色土が混じる。
4層　暗褐色土　暗褐色土に黄褐色土が混じる。

0　（1：60）　1m

第143図　D77号土坑実測図

第133表　D73号土坑計測・説明表

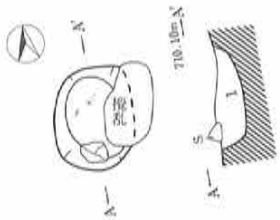
平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸（cm）	259	短軸（cm）	115
深さ（cm）	24.0	長軸方向	N－8°－E

第134表　D74号土坑計測・説明表

平面形態	方　形	断面形状	逆　台　形
長軸（cm）	321	短軸（cm）	—
深さ（cm）	43.0	長軸方向	—

第135表　D75号土坑計測・説明表

平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸（cm）	216	短軸（cm）	140
深さ（cm）	20.0～35.0	長軸方向	N－15°－E



1層　褐色土　砂質。

0　（1：60）　1m

第144図　D78号土坑実測図

第136表　D76号土坑計測・説明表

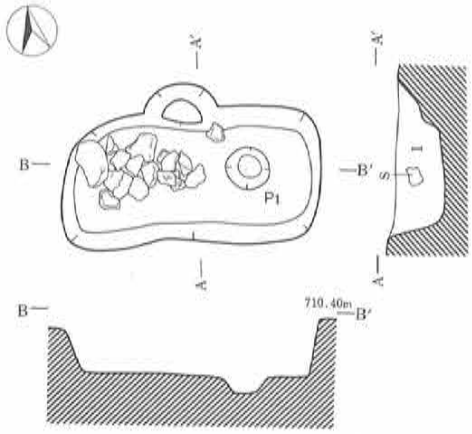
平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸（cm）	189	短軸（cm）	130
深さ（cm）	17.0	長軸方向	N－9°－E

第137表　D77号土坑計測・説明表

平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸（cm）	—	短軸（cm）	140
深さ（cm）	36.0	長軸方向	N－15°－E

第138表　D78号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸（cm）	82	短軸（cm）	—
深さ（cm）	35.5	長軸方向	N－11°－E



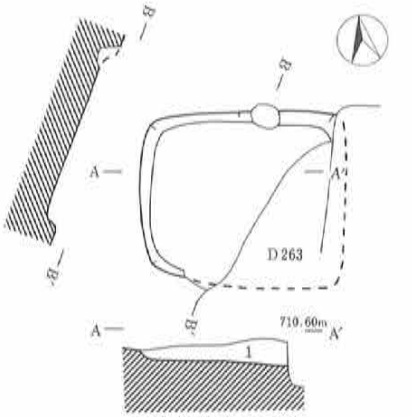
1層　明茶褐色土　きめ粗く、小の礫を少量含む。黒色土および黄白色砂質ロームがブロック状に含まれる。

0　(1：60)　1m

第145図　D79号土坑実測図

第139表　D79号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	205	短軸(cm)	122
深さ(cm)	48.0	長軸方向	N−82°−W



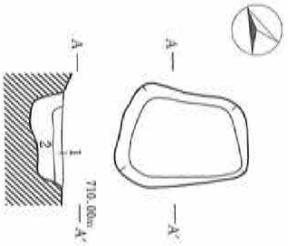
1層　明褐色土　砂質ローム粒子を多量に含む。

0　(1：60)　1m

第146図　D80号土坑実測図

第140表　D80号土坑計測・説明表

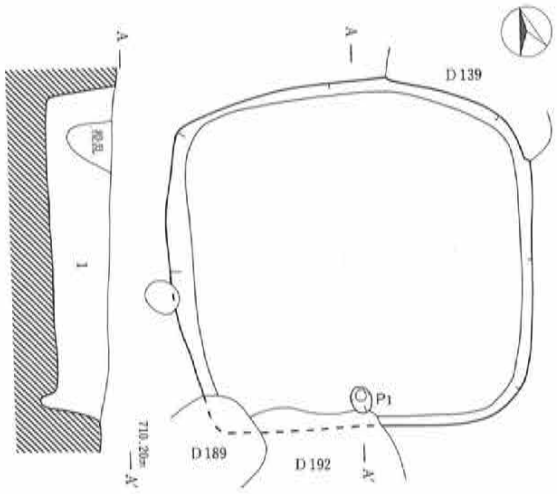
平面形態	長方形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	138
深さ(cm)	14.0	長軸方向	N−81°−W



1層　黄褐色土　砂質黄色ローム粒子と小の礫を含む。きめは粗い。
2層　暗茶褐色土　炭化粒子を含む。黄色砂質ロームがブロック状に含まれる。きめは細かい。

0　(1：60)　1m

第147図　D81号土坑実測図



1層　明茶褐色土　黄色砂質ローム粒子を主体とする。

0　(1：60)　2m

第148図　D82号土坑実測図

第141表　D81号土坑計測・説明表

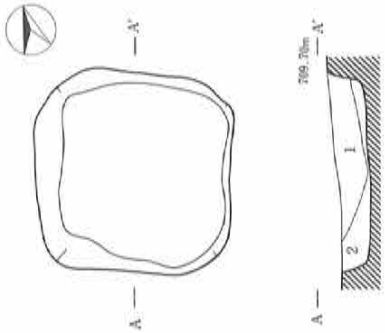
平面形態	隅丸長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	103	短軸(cm)	75
深さ(cm)	32.0	長軸方向	N−64°−W

第142表　D82号土坑計測・説明表

平面形態	方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	288	短軸(cm)	276
深さ(cm)	62.5	長軸方向	N−73°−W

第143表　D83号土坑計測・説明表

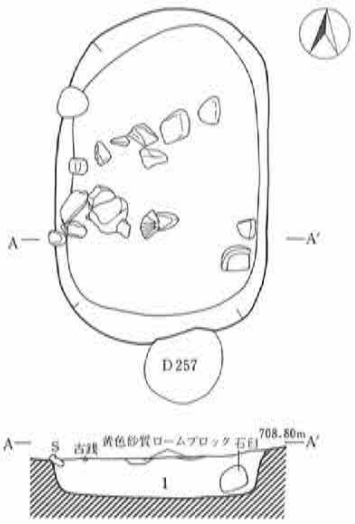
平面形態	方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	158	短軸(cm)	135
深さ(cm)	27.0	長軸方向	N−19°−E



1層　褐色土　灰・炭化物を含む。
2層　明褐色土　1層に黄色砂質ロームが混じる。

0　(1：60)　1m

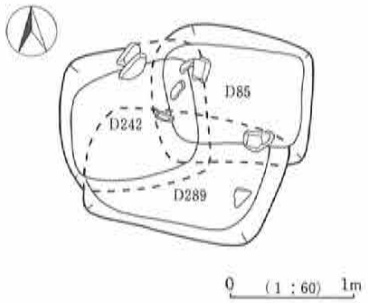
第149図　D83号土坑実測図



1層　茶褐色土　砂質ローム粒子・パミスを含む。黄色砂質ロームをブロック状に含む。炭化物を多量に含む。

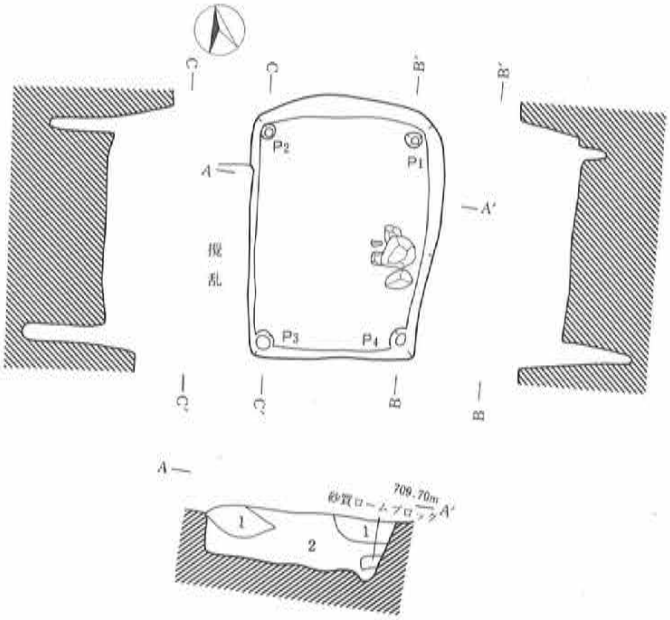
0　(1：60)　1m

第150図　D84号土坑実測図



0　(1：60)　1m

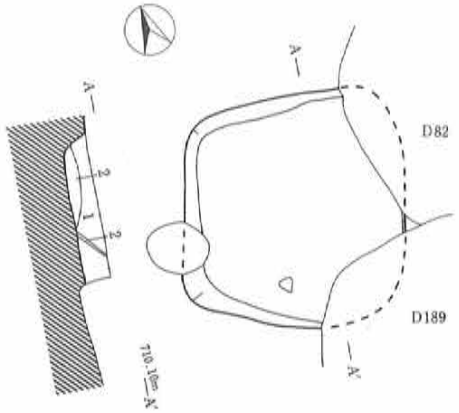
第151図　D85号・D242号・D289号土坑実測図



1層　黄褐色土　砂質ローム粒子を主体とする。
2層　黄褐色土　砂質ローム粒子・黒色土ブロックを多量に含む。

0　(1：60)　1m

第153図　D87号土坑実測図



1層　褐色土　砂質ローム粒子・炭化物を含む。
2層　褐色土　砂質ローム粒子を主体とする。炭化物を含む。

0　(1：60)　1m

第152図　D86号土坑実測図

第144表　D84号土坑計測・説明表

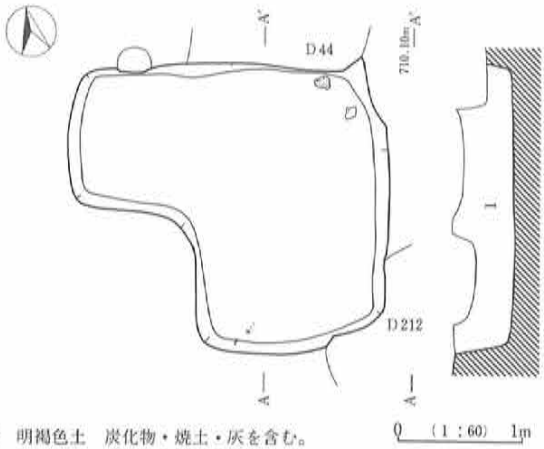
平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	266	短軸(cm)	169
深さ(cm)	31.0	長軸方向	N

第145表　D85号・D242号・D289号土坑計測・説明表

D85	平面形態	長　方　形	断面形状	—
	長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
	深さ(cm)	38.5	長軸方向	—
D242	平面形態	方　　形	断面形状	—
	長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
	深さ(cm)	40.0	長軸方向	—
D289	平面形態	長　方　形	断面形状	—
	長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
	深さ(cm)	33.0	長軸方向	—

第146表　D86号土坑計測・説明表

平面形態	方　　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	185	短軸(cm)	173
深さ(cm)	36.0	長軸方向	N—23°—E



1層　明褐色土　炭化物・焼土・灰を含む。

0　(1：60)　1m

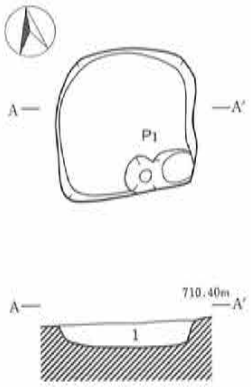
第154図　D88号土坑実測図

第147表　D87号土坑計測・説明表

平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	210	短軸(cm)	76
深さ(cm)	52.0	長軸方向	N—11°—E

第148表　D88号土坑計測・説明表

平面形態	曲　屋　風	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	256・227	短軸(cm)	119・173
深さ(cm)	29.0・41.0	長軸方向	—



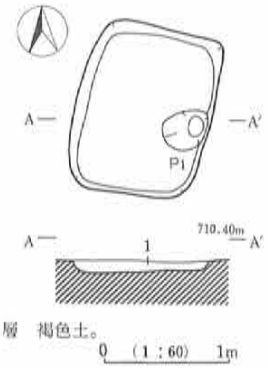
1層　暗褐色土　5㎜前後のパミスを含む。粘性弱。

0　(1：60)　1m

第155図　D90号土坑実測図

第149表　D90号土坑計測・説明表

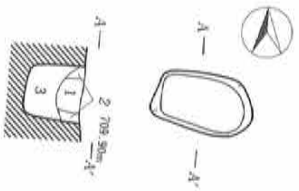
平面形態	方　形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	116	短軸(cm)	109
深さ(cm)	25.5	長軸方向	N－7.5°－E



1層　褐色土。

0　(1：60)　1m

第156図　D91号土坑実測図



1層　褐色土　砂質ローム粒子を含む。きめが粗い。
2層　褐色土　砂質ローム粒子を含む。きめが細かい。
3層　褐色土　パミスを少量含む。きめが細かい。

0　(1：60)　1m

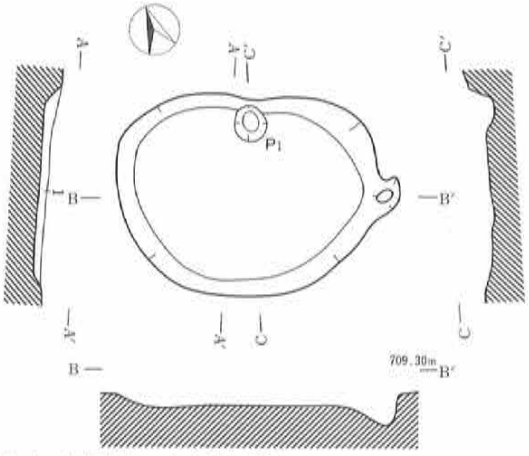
第157図　D92号土坑実測図

第150表　D91号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	136	短軸(cm)	106
深さ(cm)	18.5	長軸方向	N－14°－E

第151表　D92号土坑計測・説明表

平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	80	短軸(cm)	46
深さ(cm)	46.5	長軸方向	N－77°－W



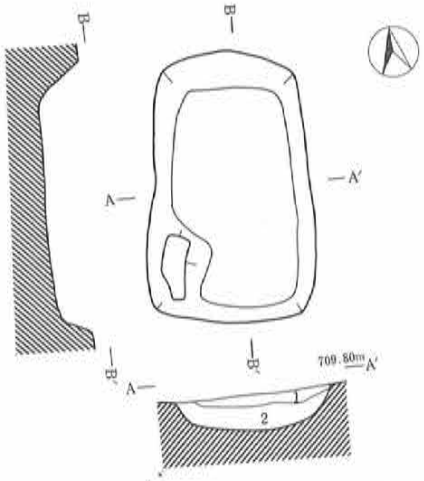
1層　褐色土　白色砂質ロームを多量に含む。

0　(1：60)　2m

第158図　D93号土坑実測図

第152表　D93号土坑計測・説明表

平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	226	短軸(cm)	156
深さ(cm)	15.5	長軸方向	N－70°－W



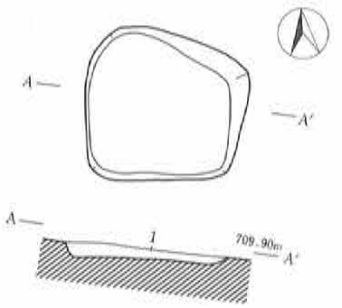
1層　褐色土　きめが細かく、灰・パミス・砂質ロームを含む。
2層　褐色土　灰・パミスを含む。

0　(1：60)　1m

第159図　D94号土坑実測図

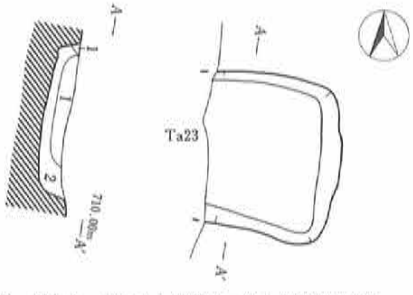
第153表　D94号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	217	短軸(cm)	123
深さ(cm)	38.0	長軸方向	N－8°－E



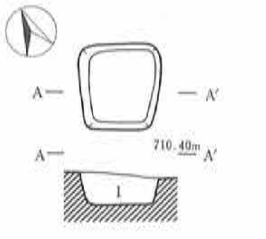
1層　褐色土　小のパミスを多量、砂質ローム粒子を少量含む。

第160図　D95号土坑実測図



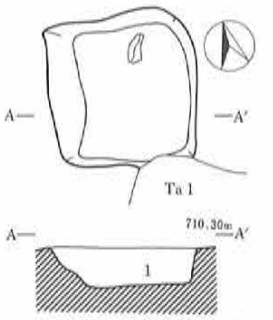
1層　褐色土　パミス・砂質ローム・炭化物を含む。粘性弱。しまりなし。
2層　褐色土　炭化物と多量の砂質ローム粒子を含む。粘性弱。サラサラしている。

第161図　D96号土坑実測図



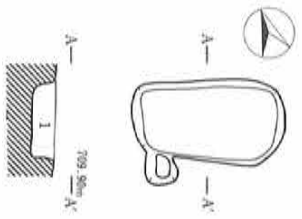
1層　褐色土　灰を多量に含む。

第162図　D97号土坑実測図



1層　褐色土　炭化粒子・ローム粒子を含む。

第163図　D98号土坑実測図



1層　褐色土　灰および炭化物を含む。

第164図　D99号土坑実測図

第154表　D95号土坑計測・説明表

平面形態	方　形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	127	短軸(cm)	121
深さ(cm)	10.0	長軸方向	N−79°−W

第155表　D96号土坑計測・説明表

平面形態	(方　形)	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	125
深さ(cm)	33.5	長軸方向	—

第156表　D97号土坑計測・説明表

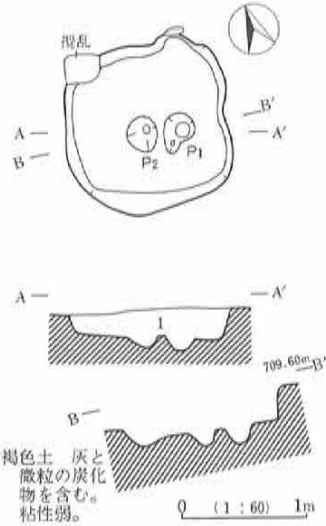
平面形態	方　形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	69	短軸(cm)	64
深さ(cm)	25.5	長軸方向	N−27°−E

第157表　D98号土坑計測・説明表

平面形態	方　形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	123	短軸(cm)	120
深さ(cm)	30.0	長軸方向	N−11°−E

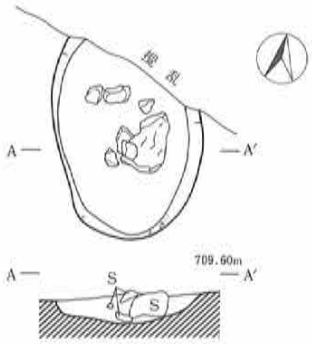
第158表　D99号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	121	短軸(cm)	64
深さ(cm)	19.0	長軸方向	N−68°−W



1層　褐色土　灰と微粒の炭化物を含む。粘性弱。

第165図　D101号土実測図



1層　褐色土　少量の灰が含まれパサパサしている。

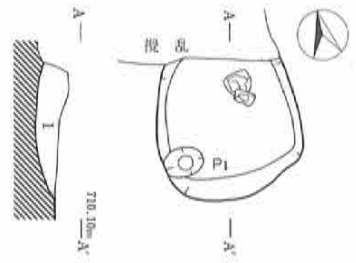
第166図　D101号土実測図

第159表　D100号土坑計測・説明表

平面形態	方　形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	133	短軸(cm)	125
深さ(cm)	43.0	長軸方向	N−14°−E

第160表　D101号土坑計測・説明表

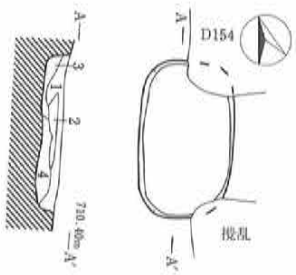
平面形態	楕円形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	117
深さ(cm)	24.5	長軸方向	—



1層　褐色土　少量の灰が含まれパサパサしている。

0　(1：60)　1m

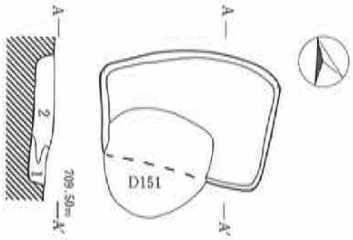
第167図　D102号土実測図



1層　黄褐色土　パミスを少量含む。
2層　茶褐色土　きめ細かい。
3層　黄茶褐色土　砂質ローム粒子を含む。
4層　黒褐色土　きめ細かい。

0　(1：60)　1m

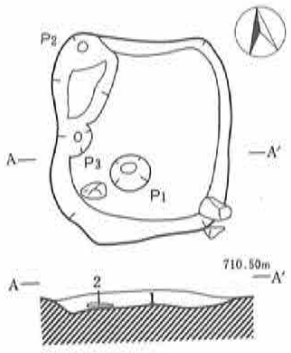
第168図　D103号土実測図



1層　黄茶褐色土　砂質ロームをブロック状に少量含む。
2層　茶褐色土　粗砂を少量含む。

0　(1：60)　1m

第169図　D104号土実測図



1層　暗茶褐色土　炭・灰を含む。
2層　灰褐色土　灰。

0　(1：60)　1m

第170図　D105号土実測図

第161表　D102号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	107
深さ(cm)	23.0	長軸方向	—

第162表　D103号土坑計測・説明表

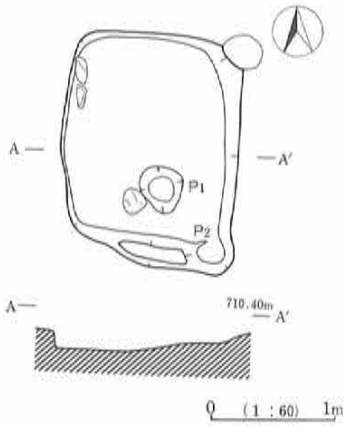
平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	125	短軸(cm)	75
深さ(cm)	23.0	長軸方向	N−18°−E

第163表　D104号土坑計測・説明表

平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	137	短軸(cm)	101
深さ(cm)	26.0	長軸方向	N−65°−W

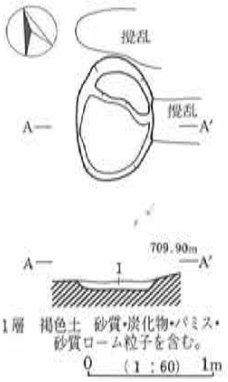
第164表　D105号土坑計測・説明表

平面形態	隅丸長方形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	161	短軸(cm)	138
深さ(cm)	23.5	長軸方向	N−9°−E



0　(1：60)　1m

第171図　D106号土実測図



1層　褐色土　砂質・炭化物・パミス・砂質ローム粒子を含む。

0　(1：60)　1m

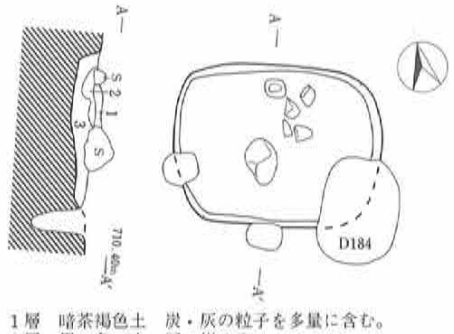
第172図　D107号土実測図

第165表　D106号土坑計測・説明表

平面形態	長　方　形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	184	短軸(cm)	142
深さ(cm)	35.5	長軸方向	N−9°−E

第166表　D107号土坑計測・説明表

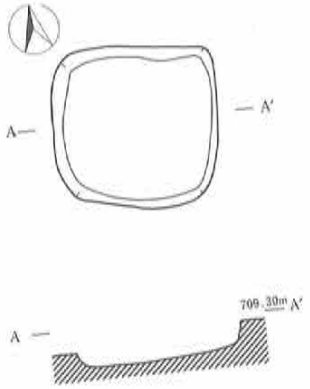
平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	97	短軸(cm)	63
深さ(cm)	7.0	長軸方向	N−21°−E



1層　暗茶褐色土　炭・灰の粒子を多量に含む。
2層　黒　色　土　灰・炭のみ。
3層　明茶褐色土　炭化粒子が1㎝につき2個位含まれる。

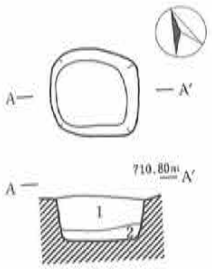
0　(1：60)　1m

第173図　D108号土実測図



0　(1：60)　1m

第174図　D109号土坑実測図



1層　茶褐色土　炭化物・砂質ローム粒子を含む。きめが粗い。
2層　明茶褐色土　砂質ローム粒子を多量に含む。きめが粗い。

0　(1：60)　1m

第175図　D110号土坑実測図

第167表　D108号土坑計測・説明表

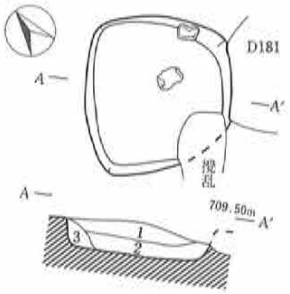
平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	167	短軸(cm)	129
深さ(cm)	20.0	長軸方向	N−76°−W

第168表　D109号土坑計測・説明表

平面形態	方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	130	短軸(cm)	125
深さ(cm)	30.5	長軸方向	N−80°−W

第169表　D110号土坑計測・説明表

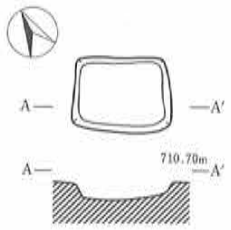
平面形態	方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	71	短軸(cm)	70
深さ(cm)	35.5	長軸方向	N−20°−E



1層　暗褐色土　粒子細かく粘性弱。小の礫を少量含む。
2層　黒褐色土　粒子細かく粘性弱。小の礫を少量含む。
3層　褐　色　土　粒子細かく粘性弱。黄色砂質ロームを少量含む。

0　(1：60)　1m

第176図　D111号土坑実測図



0　(1：60)　1m

第178図　D113号土坑実測図

第170表　D111号土坑計測・説明表

平面形態	方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	125	短軸(cm)	115
深さ(cm)	28.0	長軸方向	N−38°−E

第171表　D112号土坑計測・説明表

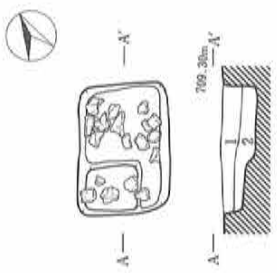
平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	104	短軸(cm)	72
深さ(cm)	32.0	長軸方向	N−29°−E

第172表　D113号土坑計測・説明表

平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	77	短軸(cm)	58
深さ(cm)	21.0	長軸方向	N−60°−W

第173表　D114号土坑計測・説明表

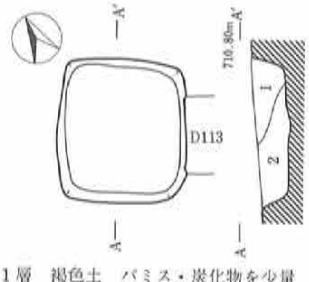
平面形態	方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	116	短軸(cm)	103
深さ(cm)	31.0	長軸方向	N−28°−E



1層　茶褐色土。
2層　淡褐色土　炭・焼土を多く含む。

0　(1：60)　1m

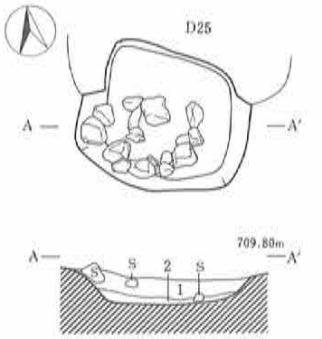
第177図　D112号土坑実測図



1層　褐色土　パミス・炭化物を少量含む。
2層　褐色土　1層とほぼ同一であるが、ローム粒子をより多く含む。

0　(1：60)　1m

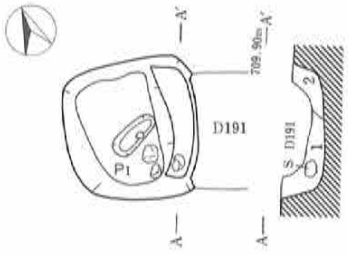
第179図　D114号土坑実測図



1層　茶褐色土　きめが細かい。
2層　明褐色土　桃白色砂質ロームを多量に含む。

0　(1：60)　1m

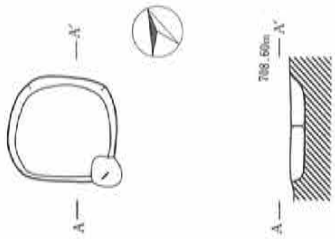
第180図　D115号土坑実測図



1層　暗褐色土　粒子細かく粘性弱。小の礫・黄色砂質ローム少量、灰を微量含む。
2層　褐色土　粒子細かく粘性弱。小の礫・黄色砂質ローム多量、灰を微量含む。

0　(1：60)　1m

第181図　D116号土坑実測図



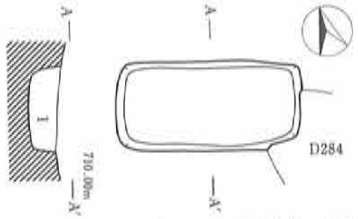
1層　褐色土　砂質ローム粒子を含む。粘性弱。

0　(1：60)　1m

第182図　D117号土坑実測図

第174表　D115号土坑計測・説明表

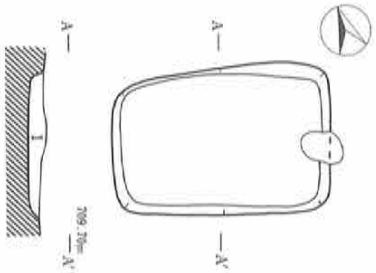
平面形態	方　形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	137	短軸(cm)	111
深さ(cm)	31.0	長軸方向	N−66°−W



1層　褐色土　砂質ローム粒子を多量に含む。

0　(1：60)　1m

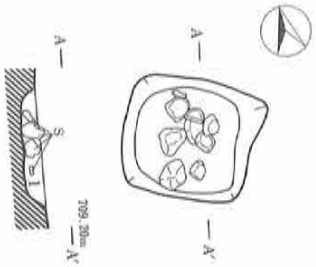
第183図　D118号土坑実測図



1層　暗褐色土　灰・炭化物・砂質ローム粒子を含む。

0　(1：60)　1m

第184図　D119号土坑実測図



1層　暗茶褐色土　黄色砂質ロームブロック・炭化粒子が、少量含まれる。

0　(1：60)　1m

第185図　D120号土坑実測図

第175表　D116号土坑計測・説明表

平面形態	方　形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	114	短軸(cm)	110
深さ(cm)	72.0	長軸方向	N−11°−E

第176表　D117号土坑計測・説明表

平面形態	方　形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	86	短軸(cm)	84
深さ(cm)	19.5	長軸方向	N−65°−W

第177表　D118号土坑計測・説明表

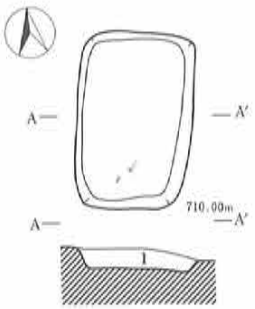
平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	149	短軸(cm)	71
深さ(cm)	23.0	長軸方向	N−75°−W

第178表　D119号土坑計測・説明表

平面形態	不整長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	175	短軸(cm)	118
深さ(cm)	12.0	長軸方向	N−71°−W

第179表　D120号土坑計測・説明表

平面形態	方　形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	102	短軸(cm)	96
深さ(cm)	18.0	長軸方向	N−25°−E



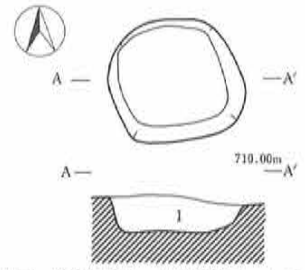
1層　暗褐色土　炭化粒子を含む。

0　(1：60)　1m

第186図　D121号土坑実測図

第180表　D121号土坑計測・説明表

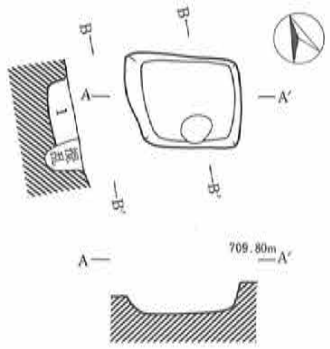
平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	142	短軸(cm)	92
深さ(cm)	21.0	長軸方向	N−13°−E



1層　暗茶褐色土　黄色砂質ロームブロック・炭化粒子を少量含む。粒子が細かい。

0　(1：60)　1m

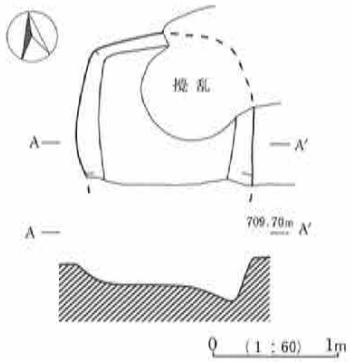
第187図　D122号土坑実測図



1層　暗茶褐色土　粒子が細かく、パサパサしている。砂質ローム粒子を少量含む。

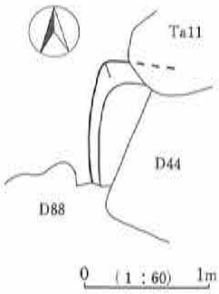
0　(1：60)　1m

第188図　D123号土坑実測図



0　(1：60)　1m

第189図　D124号土坑実測図



0　(1：60)　1m

第190図　D126号土坑実測図

第181表　D122号土坑計測・説明表

平面形態	隅丸方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	102	短軸(cm)	98
深さ(cm)	41.5	長軸方向	N−15°−W

第182表　D123号土坑計測・説明表

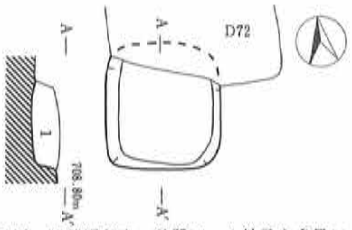
平面形態	不整方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	89	短軸(cm)	76
深さ(cm)	27.0	長軸方向	N−66°−W

第183表　D124号土坑計測・説明表

平面形態	隅丸方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	140
深さ(cm)	40.0	長軸方向	—

第184表　D126号土坑計測・説明表

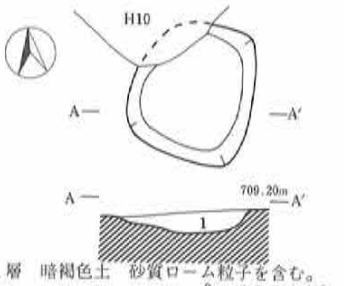
平面形態	—	断面形状	—
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(cm)	23.5	長軸方向	—



1層　明茶褐色土　砂質ローム粒子を多量に含み、少量の炭化物を含む。

0　(1：60)　1m

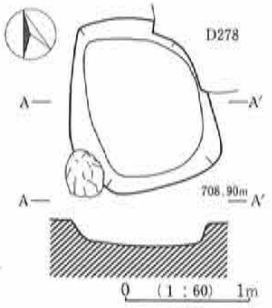
第191図　D127号土坑実測図



1層　暗褐色土　砂質ローム粒子を含む。

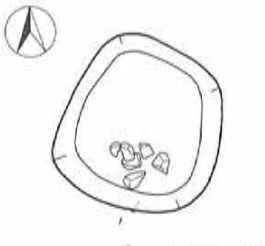
0　(1：60)　1m

第193図　D129号土坑実測図



0　(1：60)　1m

第192図　D128号土坑実測図



0　(1：60)　1m

第194図　D130号土坑実測図

第185表　D127号土坑計測・説明表

平面形態	方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	92
深さ(cm)	35.0	長軸方向	—

第186表　D128号土坑計測・説明表

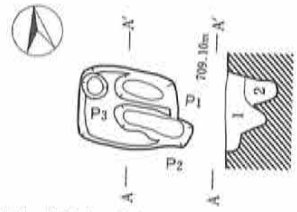
平面形態	不整長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	138	短軸(cm)	111
深さ(cm)	24.5	長軸方向	N−12°−E

第187表　D129号土坑計測・説明表

平面形態	不整方形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	110	短軸(cm)	95
深さ(cm)	21.0	長軸方向	N−22°−E

第188表　D130号土坑計測・説明表

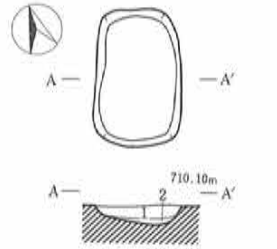
平面形態	隅丸方形	断面形状	—
長軸(cm)	135	短軸(cm)	125
深さ(cm)	26.5	長軸方向	N−25°−E



1層　褐色土　黄色のパミスを多量に含む。
2層　褐色土　1層より明るい褐色土。

0　(1：60)　1m

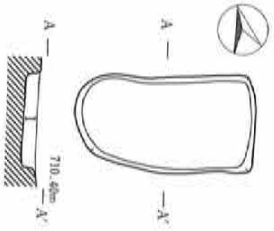
第195図　D131号土坑実測図



1層　暗褐色土
2層　明黄褐色土　砂質ローム粒子を多量に含む。

0　(1：60)　1m

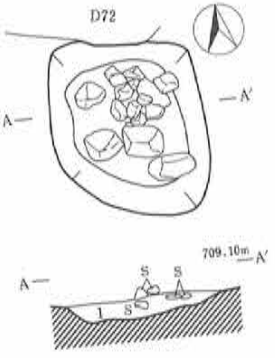
第197図　D133号土坑実測図



1層　褐色土　灰を多量に含む。

0　(1：60)　1m

第198図　D134号土坑実測図



1層　暗褐色土　炭化物・灰を含む。

0　(1：60)　1m

第199図　D135号土坑実測図

1層　褐色土　黄色のパミスを多量に含み、炭化物をも含む。
2層　褐色土　1層より暗い褐色土。炭化物を含む。

0　(1：60)　2m

第196図　D132号土坑実測図

第189表　D131号土坑計測・説明表

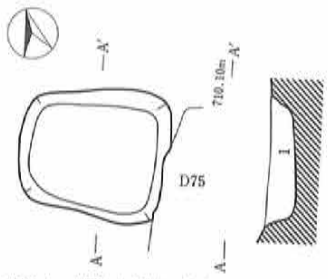
平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	80	短軸(cm)	62
深さ(cm)	41.0	長軸方向	N−72°−W

第190表　D132号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	210	短軸(cm)	121
深さ(cm)	21.0	長軸方向	N−52°−E

第191表　D133号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	110	短軸(cm)	68
深さ(cm)	21.0	長軸方向	N−20°−E



1層　褐色土　粗砂を多量に含む。

0　(1：60)　1m

第200図　D136号土坑実測図

第192表　D134号土坑計測・説明表

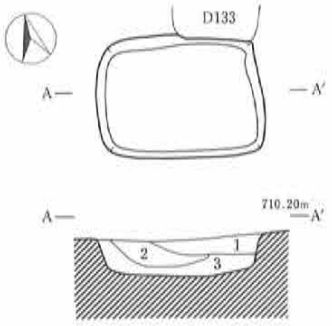
平面形態	不整長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	142	短軸(cm)	76
深さ(cm)	16.0	長軸方向	N−76°−W

第193表　D135号土坑計測・説明表

平面形態	不整方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	140	短軸(cm)	126
深さ(cm)	18.5	長軸方向	N−5°−W

第194表　D136号土坑計測・説明表

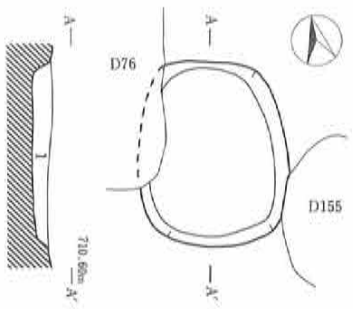
平面形態	不整長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	121	短軸(cm)	105
深さ(cm)	35.0	長軸方向	N−71°−W



1層　褐色土　砂質ローム粒子を少量含む。
2層　褐色土　1層より砂質ローム粒子を多く含む。
3層　黄褐色土　黄色砂質ロームを主体とする

0　(1：60)　1m

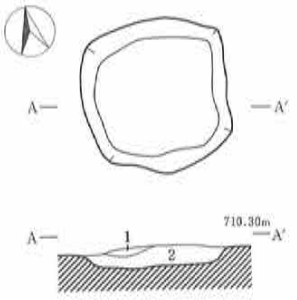
第201図　D137号土坑実測図



1層　褐色土　多量の灰と少量の炭化物を含む。

0　(1：60)　1m

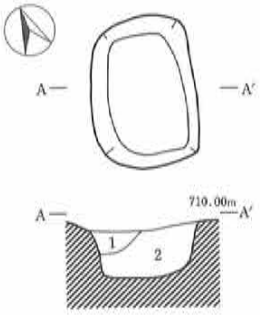
第202図　D138号土坑実測図



1層　灰褐色土　灰・炭化物を含む。
2層　褐色土　ごく少量のパミスを含む。

0　(1：60)　1m

第203図　D139号土坑実測図



1層　褐色土　砂質ローム粒子を多量に含む。
2層　褐色土　1層より砂質ローム粒子少ない。

0　(1：60)　1m

第204図　D140号土坑実測図

第195表　D137号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	131	短軸(cm)	99
長軸(cm)深さ(cm)	30.0	長軸方向	N−78°−W

第196表　D138号土坑・説明表

平面形態	隅丸長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	148	短軸(cm)	119
深さ(cm)	18.5	長軸方向	N−7°−E

第197表　D139号土坑計測・説明表

平面形態	不整方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	123	短軸(cm)	115
深さ(cm)	17.0	長軸方向	N−8°−E

第198表　D140号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	120	短軸(cm)	84
深さ(cm)	40.0	長軸方向	N−16°−E

1層　茶褐色土　黒色土・黄色砂質ローム粒子が帯状に混入する。炭化物を含み、きめはやや粗い。

0　(1：60)　1m

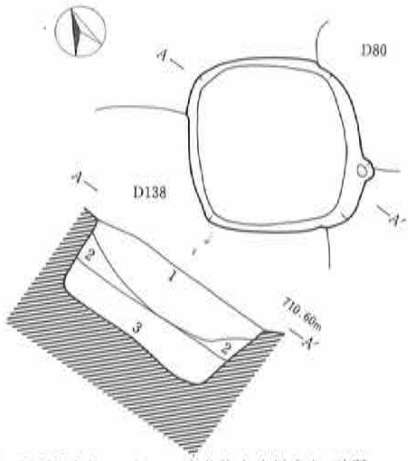
第205図　D141号土坑実測図

第199表　D141号土坑計測・説明表

平面形態	不整長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	184	短軸(cm)	130
深さ(cm)	43.0	長軸方向	N−12°−E

第200表　D142号土坑計測・説明表

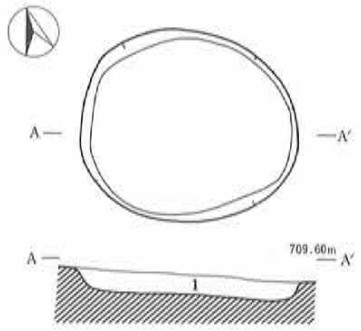
平面形態	隅丸方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	140	短軸(cm)	140
深さ(cm)	78.0	長軸方向	N−22°−E



1層　明茶褐色土　パミス・炭化物を少量含む。砂質ローム粒子を含む。砂質ロームがブロック状に混じる。
2層　暗茶褐色土　砂質ローム粒子・パミスを含む。
3層　黄褐色土　砂質ローム粒子を多量に、パミスを少量含む。砂質ロームブロックが混入する。

0　(1：60)　1m

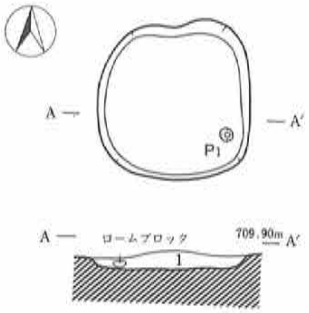
第206図　D142号土坑実測図



1層　黄茶褐色土　茶褐色土に黄色砂質ローム粒子を多量に含む。

0　(1：60)　1m

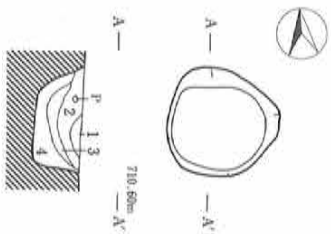
第213図　D149号土坑実測図



1層　褐色土　小のパミスを多量、砂質ローム粒子を少量含む。

0　(1：60)　1m

第214図　D150号土坑実測図



1層　茶褐色土(淡)　きめ粗い。黄色ローム粒子を少量含む。
2層　茶褐色土(暗)　きめ細かい。炭化粒子を少量含む。
3層　褐色土　きめ粗い。白色ローム粒子をブロック状に含む。
4層　黒褐色土　きめ細かい。

0　(1：60)　1m

第215図　D151号土坑実測図

第207表　D149号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	162	短軸(cm)	156
深さ(cm)	26.5	長軸方向	N−90°−E

第208表　D150号土坑計測・説明表

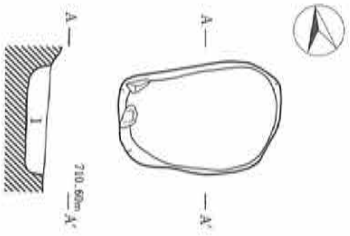
平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	123	短軸(cm)	121
深さ(cm)	14.0	長軸方向	N

第209表　D151号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	88	短軸(cm)	85
深さ(cm)	45.0	長軸方向	N−82°−W

第210表　D152号土坑計測・説明表

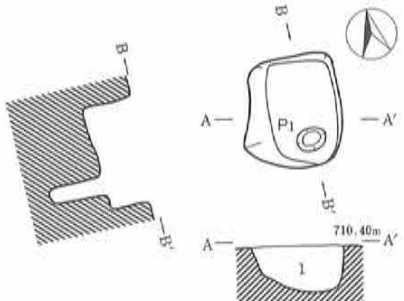
平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	128	短軸(cm)	86
深さ(cm)	26.0	長軸方向	N−84°−W



1層　茶褐色土(淡)　炭化物を極少量含む。

0　(1：60)　1m

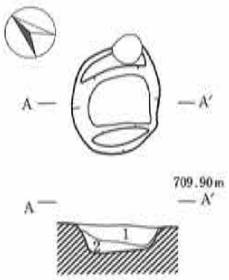
第216図　D152号土坑実測図



1層　茶褐色土　きめ細かい。下部に黄色ローム粒子を少量含む。炭化粒子を少量含む。

0　(1：60)　1m

第218図　D154号土坑実測図



1層　褐色土　炭化物を少量とパミスを含む。
2層　褐色土　1層に黄色ロームが混じる。

0　(1：60)　1m

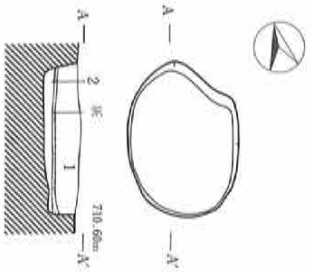
第217図　D153号土坑実測図

第211表　D153号土坑計測・説明表

平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	96	短軸(cm)	68
深さ(cm)	21.0	長軸方向	N−55°−E

第212表　D154号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	86	短軸(cm)	74
深さ(cm)	48.0	長軸方向	N−12°−E

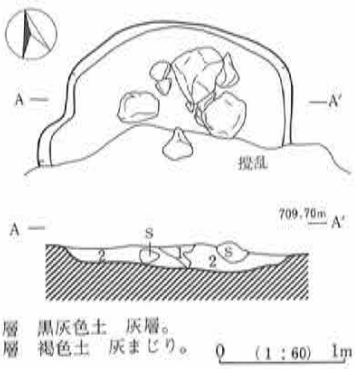


1層　淡茶褐色土　炭化粒を僅かに含む。
2層　暗茶褐色土　筋状に灰が混じる。

第219図　D155号土坑実測図

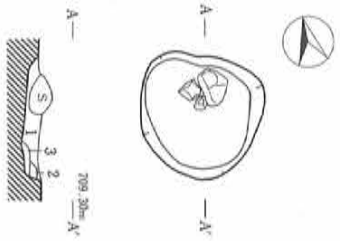
1層　褐色土　灰が混じる。
2層　灰白色土　炭化物を含む白色の灰層。

第220図　D156号土坑実測図



1層　黒灰色土　灰層。
2層　褐色土　灰まじり。

第221図　D157号土坑実測図

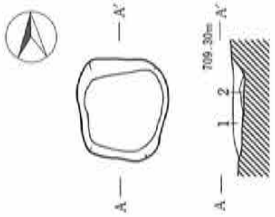


1層　褐色土　灰が混じりパサパサしている。
2層　灰黒色土　灰黒色の灰主体。
3層　褐色土　1層にローム粒子が混じる。

第222図　D158号土坑実測図

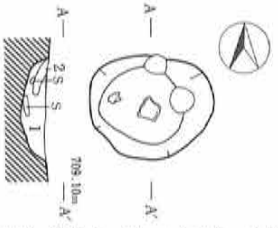
第216表　D158号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	103	短軸(cm)	86
深さ(cm)	14.0	長軸方向	N−37°−W



1層　褐色土　パミスを含み、きめ細かく粘性・しまりなし。
2層　黒色土　炭化物。

第223図　D159号土坑実測図



1層　褐色土　ロームを含み、きめ細かくサラサラしている。
2層　褐色土　きめ細かく、しまりあり。

第224図　D160号土坑実測図

第213表　D155号土坑計測・説明表

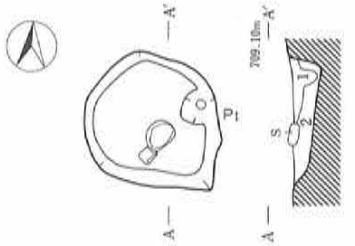
平面形態	米　粒　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	121	短軸(cm)	88
深さ(cm)	31.0	長軸方向	N−11°−E

第214表　D156号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	104	短軸(cm)	65
深さ(cm)	15.5	長軸方向	N−20°−E

第215表　D157号土坑計測・説明表

平面形態	不　整　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(cm)	17.0	長軸方向	—



1層　褐色土　炭化物を含む。きめ細かくしまりなし。
2層　褐色土　ローム・炭化物を含む。しまりあり。

第225図　D161号土坑実測図

第217表　D159号土坑計測・説明表

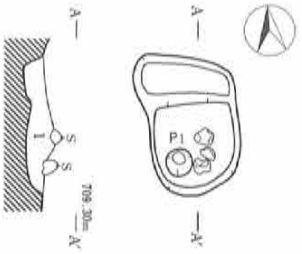
平面形態	隅丸方形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	78	短軸(cm)	70
深さ(cm)	95.0	長軸方向	N

第218表　D160号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	90	短軸(cm)	84
深さ(cm)	26.5	長軸方向	N−87°−W

第219表　D161号土坑計測・説明表

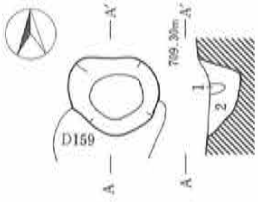
平面形態	不整円形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	107	短軸(cm)	106
深さ(cm)	30.0	長軸方向	N−86°−E



1層　褐色土　僅かに灰が混じる。

0　(1：60)　1m

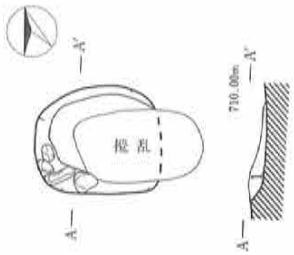
第226図　D162号土坑実測図



1層　褐色土　きめ細かく粘性なし。
2層　褐色土　ロームを多量に含む。

0　(1：60)　1m

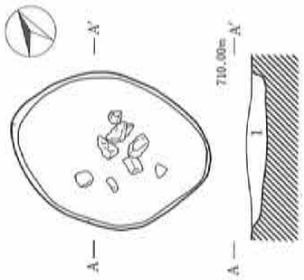
第227図　D163号土坑実測図



1層　褐色土　灰を多量に含む。
色調はくすむ。

0　(1：60)　1m

第228図　D164号土坑実測図



1層　褐色土　灰を多量に含むため、
色調がくすむ。

0　(1：60)　1m

第229図　D165号土坑実測図

第220表　D162号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	110	短軸(cm)	72
深さ(cm)	14.5	長軸方向	N－6°－E

第221表　D163号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	73	短軸(cm)	62
深さ(cm)	34.0	長軸方向	N

第222表　D164号土坑計測・説明表

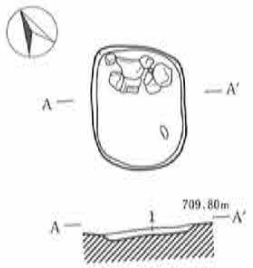
平面形態	隅丸長方形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	87
深さ(cm)	15.0	長軸方向	N－73°－W

第223表　D165号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	162	短軸(cm)	121
深さ(cm)	23.5	長軸方向	N－46°－W

第224表　D166号土坑計測・説明表

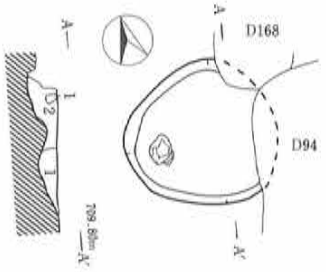
平面形態	隅丸長方形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	100	短軸(cm)	75
深さ(cm)	15.0	長軸方向	N－24°－E



1層　褐色土　灰を含み、色調が
くすむ。

0　(1：60)　1m

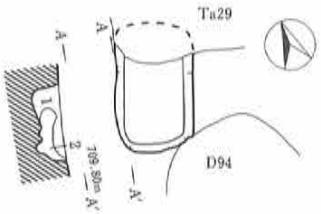
第230図　D166号土坑実測図



1層　褐色土　パミス・ローム粒子を含む。
小の礫を多量に含む。炭化物を含
む。2層よりローム粒子の量が多
い。粘性なし。
2層　褐色土　パミス・ローム粒子を含む。
小の礫を含む。粘性なし。

0　(1：60)　1m

第231図　D167号土坑実測図



1層　茶褐色土　パミス・ローム粒子を含
む。粘性なし。しまりなし。
2層　茶褐色土　ローム粒子・炭化物を含
む。きめ細かく粘性なし。1層よ
りやや黒っぽい。

0　(1：60)　1m

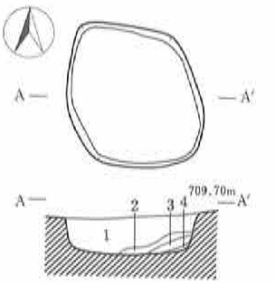
第232図　D168号土坑実測図

第225表　D167号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	114
深さ(cm)	12.5	長軸方向	—

第226表　D168号土坑計測・説明表

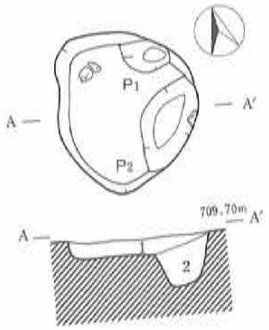
平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	62
深さ(cm)	24.5	長軸方向	N－21°－E



1層　褐色土　ローム粒子を含む。
2層　黒褐色土　ローム粒子を含む。
3層　褐色土　ローム粒子を多量に含む。
4層　黒褐色土

0　(1：60)　1m

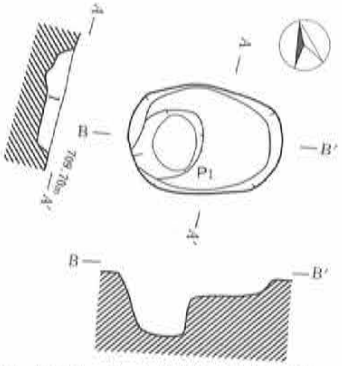
第233図　D169号土坑実測図



1層　褐色土　ローム粒子を含む。
2層　黒褐色土

0　(1：60)　1m

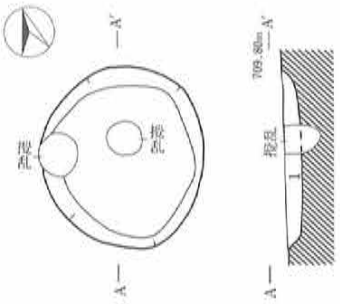
第234図　D170号土坑実測図



1層　褐色土　ローム粒子をわずかに含む。灰・炭化物を含む。フカフカでしまりなし。

0　(1：60)　1m

第235図　D171号土坑実測図



1層　褐色土　黄色ローム・炭化粒子・パミスを微量含む。粒子は細かく、粘性弱。

0　(1：60)　1m

第236図　D172号土坑実測図

第227表　D169号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	115	短軸(cm)	109
深さ(cm)	40.5	長軸方向	N－7°－W

第228表　D170号土坑計測・説明表

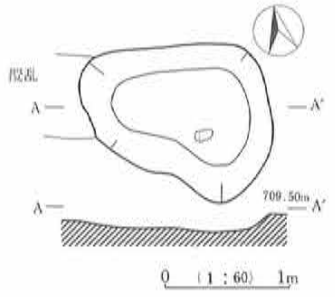
平面形態	円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	129	短軸(cm)	110
深さ(cm)	23.0	長軸方向	N－17°－E

第229表　D171号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	124	短軸(cm)	88
深さ(cm)	18.0	長軸方向	N－75°－W

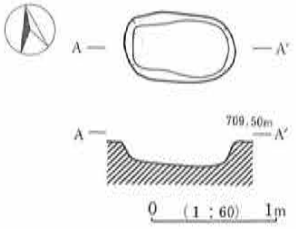
第230表　D172号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	146	短軸(cm)	128
深さ(cm)	25.0	長軸方向	N－6°－E



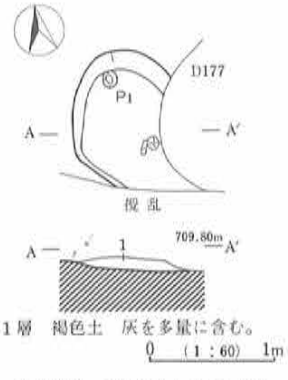
0　(1：60)　1m

第237図　D173号土坑実測図



0　(1：60)　1m

第238図　D175号土坑実測図



1層　褐色土　灰を多量に含む。

0　(1：60)　1m

第239図　D176号土坑実測図

第231表　D173号土坑計測・説明表

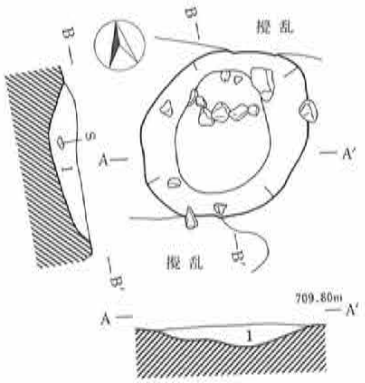
平面形態	不　整　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	144	短軸(cm)	109
深さ(cm)	23.0	長軸方向	N－85°－W

第232表　D175号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	88	短軸(cm)	54
深さ(cm)	22.0	長軸方向	N－79°－W

第233表　D176号土坑計測・説明表

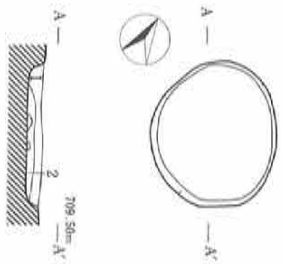
平面形態	—	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(cm)	20.0	長軸方向	—



1層　褐色土　灰を含む。

0　(1：60)　1m

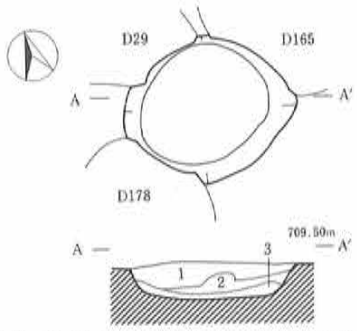
第240図　D177号土坑実測図



1層　黒色土　粒子細かく粘性強。褐色ローム・0.5～1cm大の小石粒・炭化粒子を少量含む。
2層　灰褐色土　粒子細かく粘性強。褐色ローム・灰・炭化粒子を少量含む。

0　(1：60)　1m

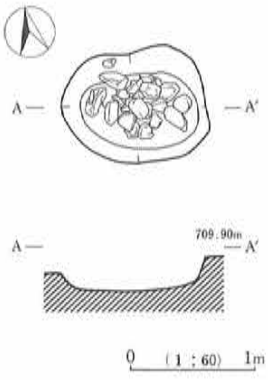
第241図　D178号土坑実測図



1層　褐色土　黄色砂質ローム・小の礫・パミスを多量に含む。
2層　暗褐色土　黄色砂質ローム・小の礫・パミスは少量でしまりある層。
3層　黄褐色土　白黄色の砂質気味ローム・を多量に含み、サラサラした層。

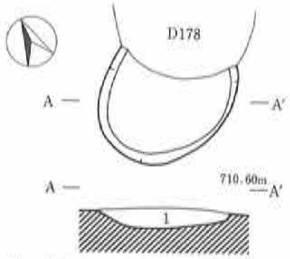
0　(1：60)　1m

第242図　D179号土坑実測図



0　(1：60)　1m

第243図　D180号土坑実測図



1層　褐色土　粒子細かく粘性中。黄色砂質ローム、炭化粒子・5mm大の礫を少量含み、ソフトな層。

0　(1：60)　1m

第244図　D181号土坑実測図

第234表　D177号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	133	短軸(cm)	132
深さ(cm)	16.0	長軸方向	N－10°－E

第235表　D178号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	116	短軸(cm)	100
深さ(cm)	12.0	長軸方向	N－32°－W

第236表　D179号土坑計測・説明表

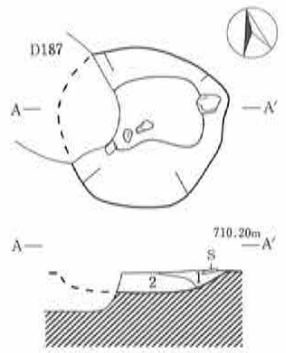
平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	138	短軸(cm)	118
深さ(cm)	25.0	長軸方向	N－62°－E

第238表　D181号土坑計測・説明表

平面形態	(楕円形)	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	100
深さ(cm)	16.5	長軸方向	N－49°－E

第237表　D180号土坑計測・説明表

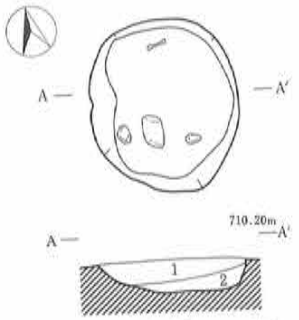
平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	114	短軸(cm)	86
深さ(cm)	28.0	長軸方向	N－85°－W



1層 暗褐色土 黄色砂質ローム粒子を少量含む。粒子は細かく、粘性弱。ひきしまっている。
2層 灰褐色土 灰を多量に含む。粒子は細かい。

0　(1：60)　1m

第245図　D182号土坑実測図



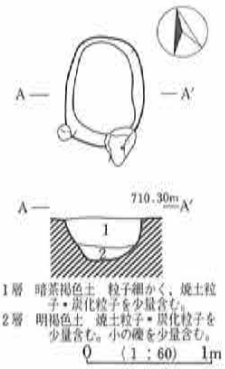
1層　暗褐色土　黄色砂質ローム粒子・炭化粒子・小の礫を少量含む。粒子は細かい。
2層　灰褐色土　多量の灰と微量の炭化粒子を含む。粒子は細かい。

0　(1：60)　1m

第246図　D183号土坑実測図

第239表　D182号土坑計測・説明表

平面形態	不整円形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	128
深さ(cm)	17.0	長軸方向	—



1層　暗茶褐色土　粒子細かく、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。
2層　明褐色土　焼土粒子・炭化粒子を少量含む。小の礫を少量含む。

0　(1：60)　1m

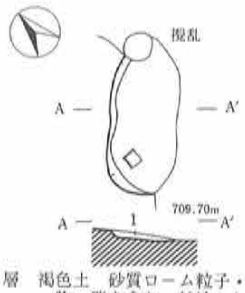
第247図　D184号土坑実測図

第240表　D183号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	141	短軸(cm)	120
深さ(cm)	24.5	長軸方向	N－5°－W

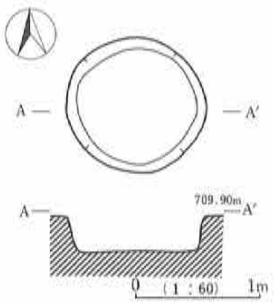
第241表　D184号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	U　字　形
長軸(cm)	87	短軸(cm)	61
深さ(cm)	43.5	長軸方向	N－15°－E

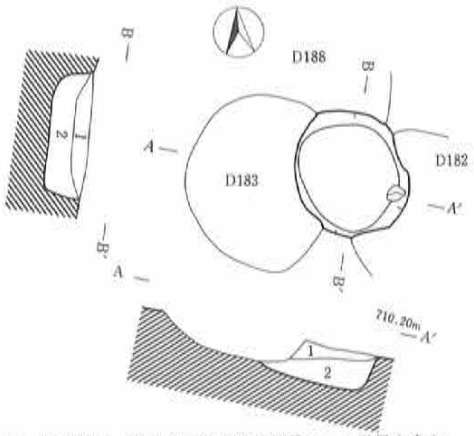


1層　褐色土　砂質ローム粒子・炭化物・礫を含む。粘性・しまりなし。

第248図　D185号土坑実測図



第249図　D186号土坑実測図



1層　暗褐色土　粗砂を少量と黄色砂質ローム微量を含む。粒子は細かい。
2層　褐色土　粗砂・少量の炭化粒子を含む。黄色砂質ロームをブロック状に含む。粒子は細かい。

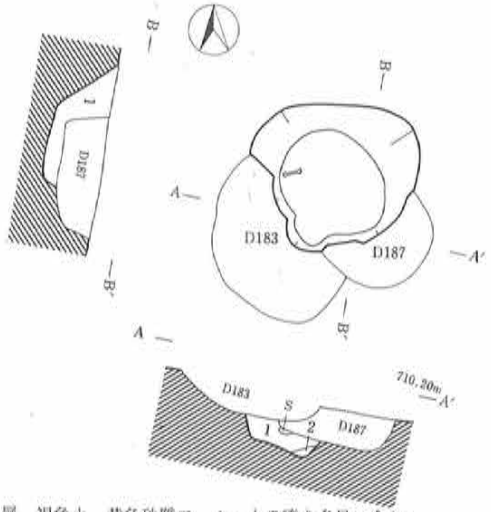
第250図　D187号土坑実測図

第242表　D185号土坑計測・説明表

平面形態	—	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(cm)	9.0	長軸方向	—

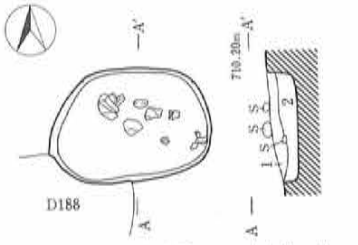
第243表　D186号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	111	短軸(cm)	108
深さ(cm)	29.5	長軸方向	N−89°−W



1層　褐色土　黄色砂質ローム・小の礫を多量に含む。粒子は細かく粘性弱。
2層　黒色土　黄色砂質ロームが混入する。粒子は細かい。

第251図　D188号土坑実測図



1層　暗褐色土　黄色砂質ロームを少量、炭化粒子を微量含む。粒子は細かい。
2層　褐色土　黄色砂質ロームを多量に含む。粒子は細かい。

第252図　D189号土坑実測図

第244表　D187号土坑計測・説明表

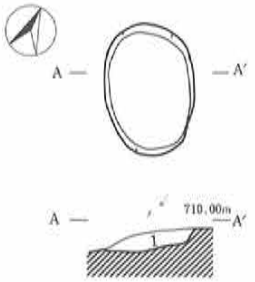
平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	103	短軸(cm)	87
深さ(cm)	31.0	長軸方向	N−23°−W

第245表　D188号土坑計測・説明表

平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	135	短軸(cm)	—
深さ(cm)	43.5	長軸方向	—

第246表　D189号土坑計測・説明表

平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	126	短軸(cm)	90
深さ(cm)	19.5	長軸方向	N−88°−E

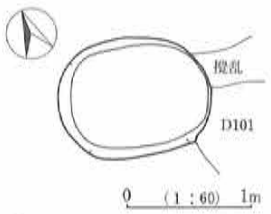


1層　暗褐色土　黄色砂質ローム・炭化粒子・粗砂を少量含む。粒子は細かく粘性弱。

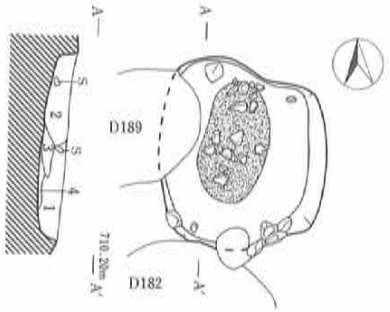
第253図　D190号土坑実測図

第247表　D190号土坑計測・説明表

平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	105	短軸(cm)	72
深さ(cm)	15.0	長軸方向	N−30°−W

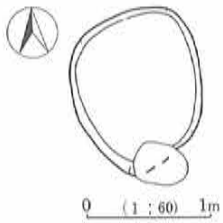


第254図　D191号土坑実測図



1層　褐色土　黄色砂質ローム・炭化粒子を多量に含む。粒子は細かく、粘性弱。
2層　黒褐色土　黄色砂質ローム・炭化粒子を少量含む。粒子は細かく、粘性弱。
3層　黄褐色土　黄色砂質ローム多量，炭化粒子を含む。粒子は細かい。
4層　黒色土　炭化粒子（1cm大）・板状の石（厚さ5mm，長さ3～5cm）を多量に含む。

第255図　D192号土坑実測図



第257図　D194号土坑実測図

第251表　D194号土坑計測・説明表

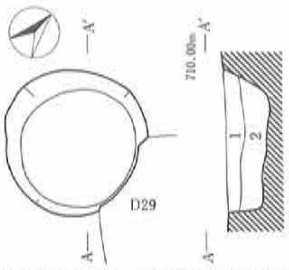
平面形態	楕円形	断面形状	—
長軸（cm）	124	短軸（cm）	103
深さ（cm）	20.5	長軸方向	N－12°－W

第252表　D195号土坑計測・説明表

平面形態	不整楕円形	断面形状	逆台形
長軸（cm）	182	短軸（cm）	—
深さ（cm）	27.0	長軸方向	N－6°－E

第253表　D196号土坑計測・説明表

平面形態	不整形	断面形状	舟底形
長軸（cm）	125	短軸（cm）	92
深さ（cm）	26.0	長軸方向	N－10°－E



1層　暗褐色土　粒子細かく，粘性中。黄色砂質ローム粒子を少量と，炭化粒子・5mm大の中の礫を少量含む。
2層　褐色土　粒子細かく，粘性弱。黄色砂質ローム粒子を1～2mm大斑点状に多量含み，5mm大の中の礫・炭化粒子を少量含む。

第256図　D193号土坑実測図

第248表　D191号土坑計測・説明表

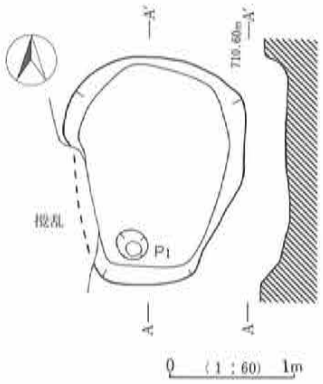
平面形態	楕円形	断面形状	—
長軸（cm）	123	短軸（cm）	95
深さ（cm）	32.0	長軸方向	N－81°－W

第249表　D192号土坑計測・説明表

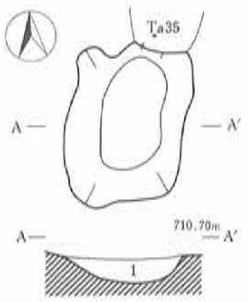
平面形態	不整形	断面形状	逆台形
長軸（cm）	154	短軸（cm）	128
深さ（cm）	32.0	長軸方向	N

第250表　D193号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸（cm）	115	短軸（cm）	114
深さ（cm）	34.0	長軸方向	N－50°－W

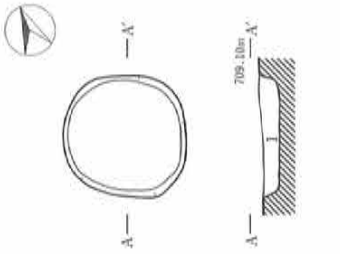


第258図　D195号土坑実測図



1層　黒褐色土　粗大なパミスと粒砂を少量含む。

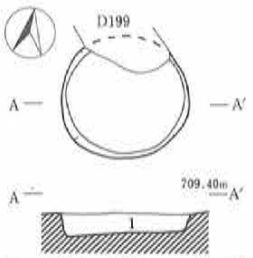
第259図　D196号土坑実測図



1層　褐色土　砂質ローム粒子を含む。粘性弱。

0　(1：60)　1m

第260図　D197号土坑実測図



1層　褐色土　砂質ローム粒子を多量に含む。

0　(1：60)　1m

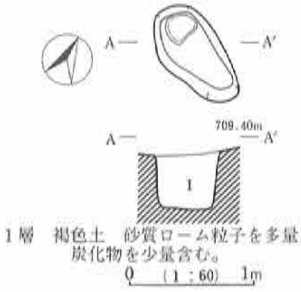
第261図　D198号土坑実測図

第254表　D197号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	97	短軸(cm)	94
深さ(cm)	17.5	長軸方向	N−25°−E

第255表　D198号土坑計測・説明表

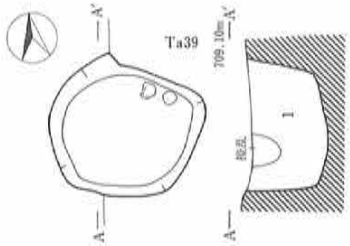
平面形態	円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	103	短軸(cm)	98
深さ(cm)	22.5	長軸方向	N−80°−E



1層　褐色土　砂質ローム粒子を多量、炭化物を少量含む。

0　(1：60)　1m

第262図　D199号土坑実測図



1層　褐色土　黄色パミスを多量に含み、粘性弱。

0　(1：60)　1m

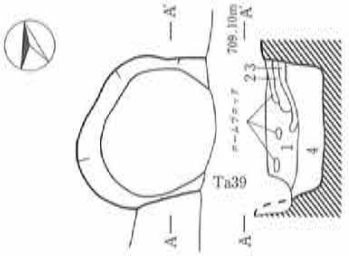
第263図　D200号土坑実測図

第256表　D199号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	88	短軸(cm)	47
深さ(cm)	50.0	長軸方向	N−60°−W

第257表　D200号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	117	短軸(cm)	105
深さ(cm)	68.0	長軸方向	N−57°−W



1層　褐色土　黄色砂質ローム粒子を含む。
2層　褐色土　割合堅くしまる。
3層　褐色土　砂質ローム粒子を多量に含む。
4層　黄褐色土　砂質ローム粒子が主体。

0　(1：60)　1m

第264図　D201号土坑実測図

第258表　D201号土坑計測・説明表

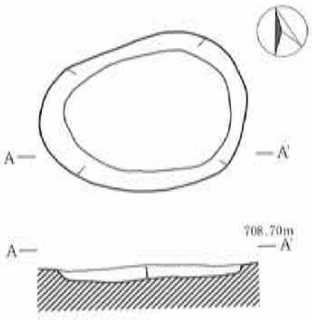
平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(cm)	73.0	長軸方向	N−56°−E

第259表　D202号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	168	短軸(cm)	118
深さ(cm)	15.0	長軸方向	N−87°−W

第260表　D204号土坑計測・説明表

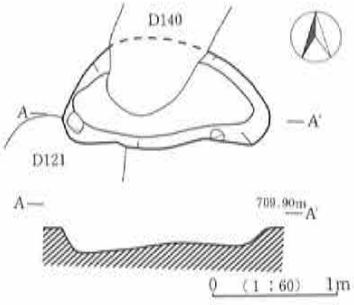
平面形態	不　整　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	155	短軸(cm)	—
深さ(cm)	25.0	長軸方向	N−84°−W



1層　茶褐色土　きめ細かく、黄色砂質ローム のブロックを含む。

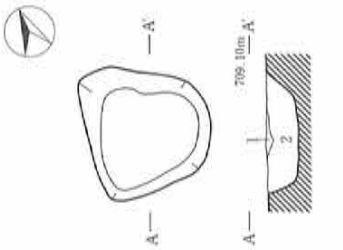
0　(1：60)　1m

第265図　D202号土坑実測図



0　(1：60)　1m

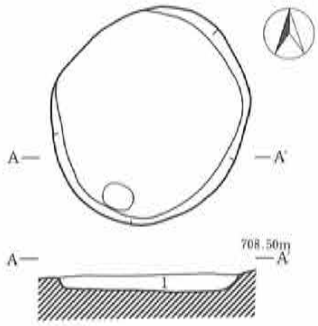
第266図　D204号土坑実測図



1層　黒褐色土　粘性弱。
2層　明茶褐色土　パミス・砂質ローム粒子を含む。粘性なし。

0　(1：60)　1m

第267図　D205号土坑実測図



1層　茶褐色土　炭化粒子・黄色砂質ローム粒子を含む。

0　(1：60)　1m

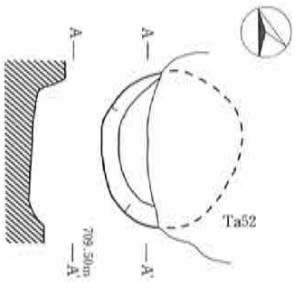
第268図　D206号土坑実測図

第261表　D205号土坑計測・説明表

平面形態	不整形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	100	短軸(cm)	98
深さ(cm)	30.0	長軸方向	N−45°−W

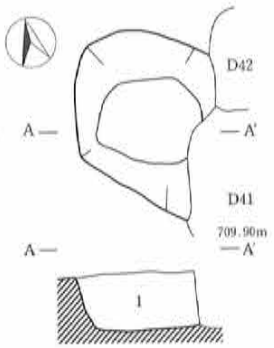
第262表　D206号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	176	短軸(cm)	158
深さ(cm)	17.5	長軸方向	N−6°−E



0　(1：60)　1m

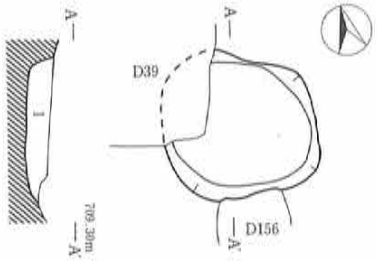
第269図　D207号土坑実測図



1層　暗黄褐色土　砂質ロームと褐色土をブロック状に含む。

0　(1：60)　1m

第270図　D208号土坑実測図



1層　暗茶褐色土　炭化粒子と黄色・桃色・白桃色砂質ローム粒子を含む。

0　(1：60)　1m

第271図　D209号土坑実測図

第263表　D207号土坑計測・説明表

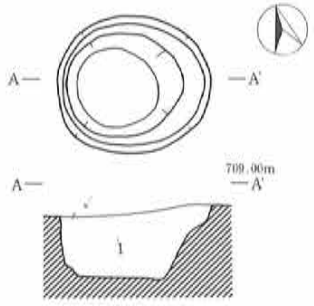
平面形態	(円形)	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(cm)	31.0	長軸方向	—

第264表　D208号土坑計測・説明表

平面形態	不整方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	123
深さ(cm)	62.0	長軸方向	N−58°−W

第265表　D209号土坑計測・説明表

平面形態	隅丸方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	122	短軸(cm)	116
深さ(cm)	18.0	長軸方向	N−74°−W



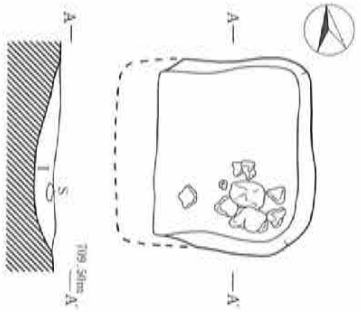
1層　明茶褐色土　砂質ローム粒子・パミスを少量含む。粘性なし。

0　(1：60)　1m

第272図　D210号土坑実測図

第266表　D210号土坑計測・説明表

平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	122	短軸(cm)	111
深さ(cm)	57.0	長軸方向	N−75°−W



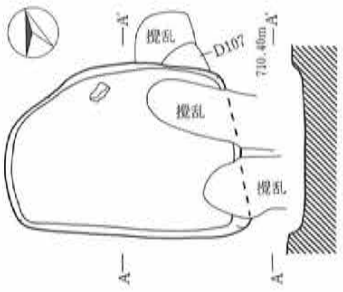
1層　暗褐色土　砂質ローム・灰・炭化物を含む。

0　(1：60)　1m

第273図　D211号土坑実測図

第267表　D211号土坑計測・説明表

平面形態	方　形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	148
深さ(cm)	32.5	長軸方向	—

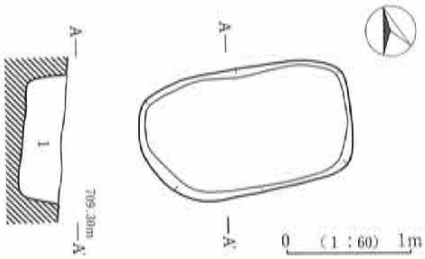


0　(1：60)　1m

第274図　D212号土坑実測図

第268表　D212号土坑計測・説明表

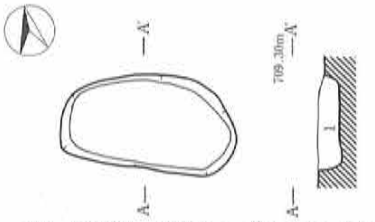
平面形態	不整長方形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	187	短軸(cm)	137
深さ(cm)	16.5	長軸方向	N−72°−W



1層　明茶褐色土　パミスを少量、砂質ローム粒子を多量に含む。

0　(1：60)　1m

第275図　D213号土坑実測図



1層　黒褐色土　砂質ローム粒子・パミスを少量含む。

0　(1：60)　1m

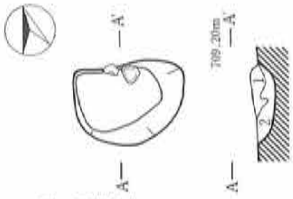
第276図　D214号土坑実測図

第269表　D213号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	170	短軸(cm)	100
深さ(cm)	42.0	長軸方向	N−9°−E

第270表　D214号土坑計測・説明表

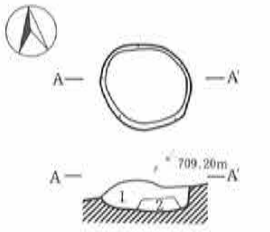
平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	140	短軸(cm)	75
深さ(cm)	27.0	長軸方向	N−20°−E



1層　黒褐色土
2層　茶褐色土　砂質ローム粒子・砂質ロームブロックを含む。

0　(1：60)　1m

第277図　D215号土坑実測図



1層　茶褐色土　砂質ローム粒子・パミスを微量に含む。
2層　黒褐色土

0　(1：60)　1m

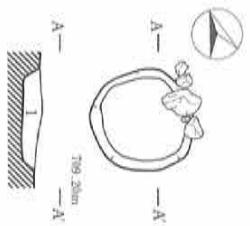
第278図　D216号土坑実測図

第271表　D215号土坑計測・説明表

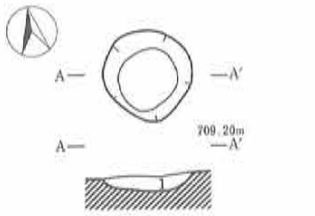
平面形態	長　方　形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	88	短軸(cm)	62
深さ(cm)	21.0	長軸方向	N−13°−E

第272表　D216号土坑計測・説明表

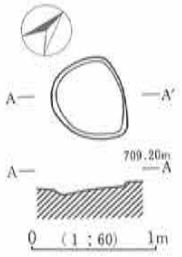
平面形態	円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	74	短軸(cm)	66
深さ(cm)	18.0	長軸方向	N−50°−W



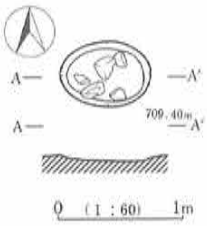
第279図　D217号土坑実測図



第280図　D218号土坑実測図



第281図　D219号土坑実測図



第282図　D220号土坑実測図

第273表　D217号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	82	短軸(cm)	81
深さ(cm)	9.0	長軸方向	E

第274表　D218号土坑計測・説明表

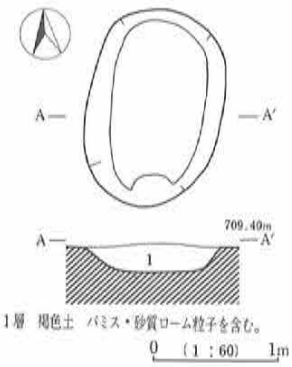
平面形態	円　形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	74	短軸(cm)	72
深さ(cm)	29.0	長軸方向	N－9°－W

第275表　D219号土坑計測・説明表

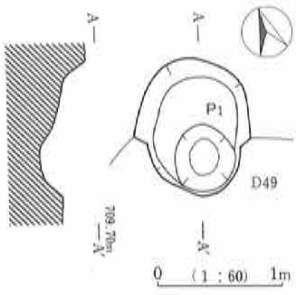
平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	70	短軸(cm)	56
深さ(cm)	9.0	長軸方向	N－83°－W

第276表　D220号土坑計測・説明表

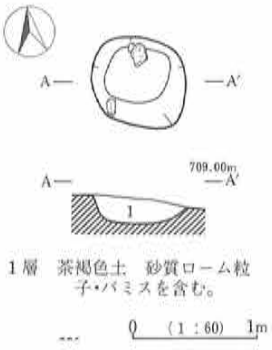
平面形態	楕　円　形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	72	短軸(cm)	52
深さ(cm)	3.0	長軸方向	N－88°－E



第283図　D221号土坑実測図



第284図　D222号土坑実測図



第285図　D223号土坑実測図

第277表　D221号土坑計測・説明表

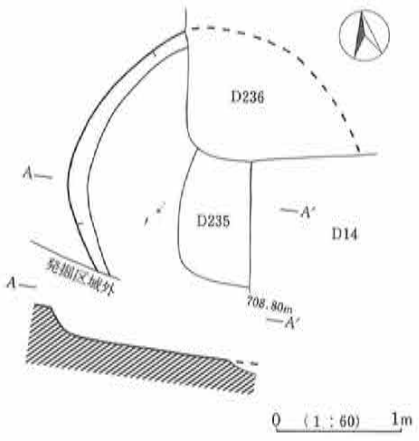
平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	160	短軸(cm)	106
深さ(cm)	25.5	長軸方向	N－13°－E

第278表　D222号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	109	短軸(cm)	92
深さ(cm)	30.5	長軸方向	N－22°－E

第279表　D223号土坑計測・説明表

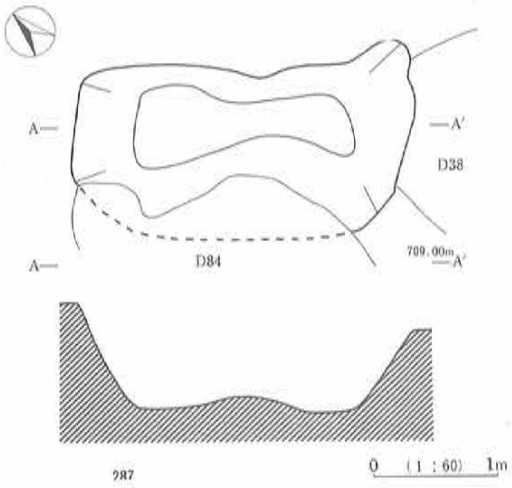
平面形態	隅丸方形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	77	短軸(cm)	70
深さ(cm)	24.5	長軸方向	N－72°－W



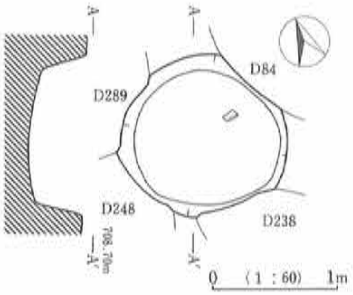
第286図　D224号土坑実測図

第280表　D224号土坑計測・説明表

平面形態	—	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(cm)	25.0	長軸方向	—



第287図　D225号土坑実測図



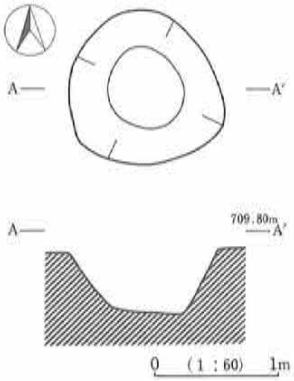
第288図　D226号土坑実測図

第281表　D225号土坑計測・説明表

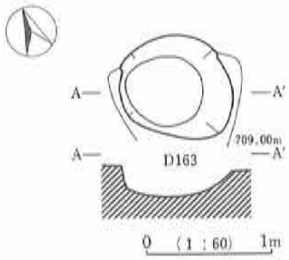
平面形態	不整形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	268	短軸(cm)	—
深さ(cm)	84.0	長軸方向	N—45°—W

第282表　D226号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	138	短軸(cm)	130
深さ(cm)	48.0	長軸方向	N—69°—W



第289図　D227号土坑実測図



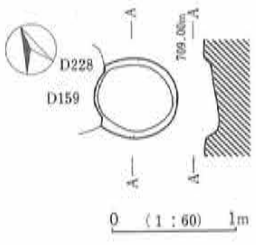
第290図　D228号土坑実測図

第283表　D227号土坑計測・説明表

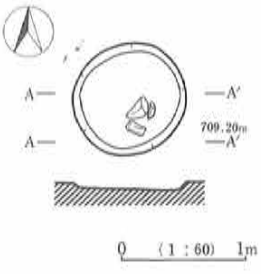
平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	127	短軸(cm)	123
深さ(cm)	50.0	長軸方向	N—65°—W

第284表　D228号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	88	短軸(cm)	81
深さ(cm)	29.0	長軸方向	N—77°—W



第291図　D229号土坑実測図



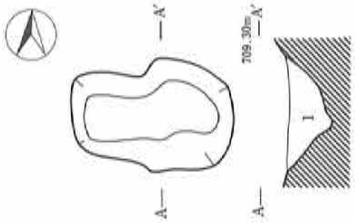
第292図　D230号土坑実測図

第285表　D229号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	69	短軸(cm)	65
深さ(cm)	13.0	長軸方向	N—35°—W

第286表　D230号土坑計測・説明表

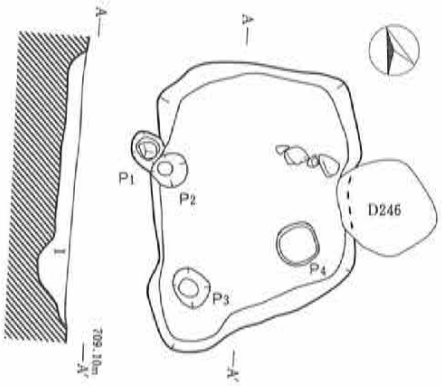
平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	91	短軸(cm)	87
深さ(cm)	6.0	長軸方向	N—53°—E



1層　明褐色土　灰・砂質ロームを多量に含む。上層部に灰が多く、下層部にロームが多い。

0　(1：60)　1m

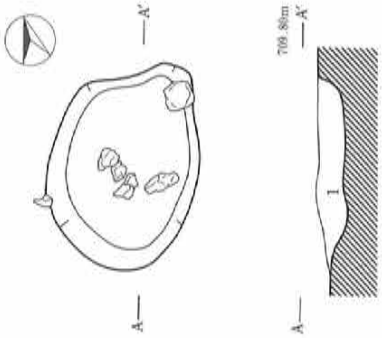
第293図　D231号土坑実測図



1層　褐色土　灰・パミスを含む。

0　(1：60)　1m

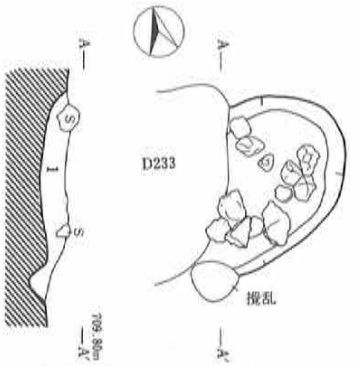
第294図　D232号土坑実測図



1層　褐色土　灰が混じり、柔らかくポソポソしている。

0　(1：60)　1m

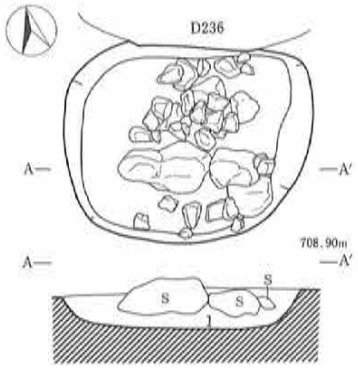
第295図　D233号土坑実測図



1層　褐色土　灰が混じり、柔らかくポソポソしている。

0　(1：60)　1m

第296図　D234号土坑実測図



1層　暗褐色土　砂質ローム粒子・パミス・炭化物を含む。粘性弱。

0　(1：60)　1m

第297図　D235号土坑実測図

第287表　D231号土坑計測・説明表

平面形態	不整形	断面形状	擂鉢形
長軸(cm)	130	短軸(cm)	90
深さ(cm)	29.0	長軸方向	N−78°−W

第288表　D232号土坑計測・説明表

平面形態	不整長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	210	短軸(cm)	180
深さ(cm)	33.0	長軸方向	N−22°−E

第289表　D233号土坑計測・説明表

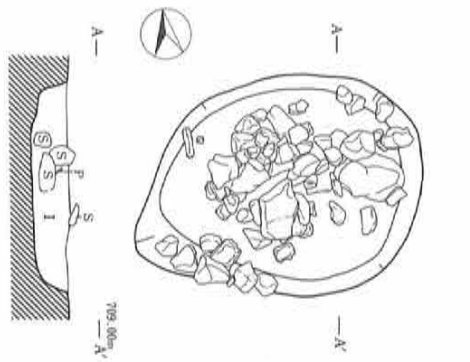
平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	153	短軸(cm)	120
深さ(cm)	20.0	長軸方向	N−23°−E

第290表　D234号土坑計測・説明表

平面形態	楕円形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	−	短軸(cm)	122
深さ(cm)	15.0	長軸方向	−

第291表　D235号土坑計測・説明表

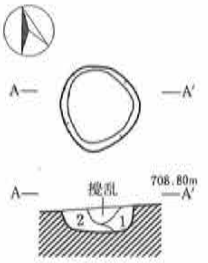
平面形態	隅丸方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	199	短軸(cm)	157
深さ(cm)	35.0	長軸方向	N−78°−W



1層　暗褐色土　砂質ローム粒子・パミス・炭化物を含む。粘性弱。

0　(1：60)　1m

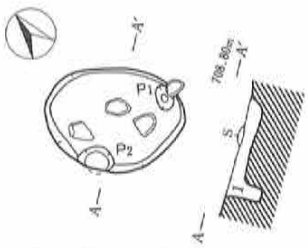
第298図　D236号土坑実測図



1層　褐色土　砂質ローム粒子・炭化物・粗砂を含む。
2層　黄褐色土　黄色砂質ロームを主体とする。

0　(1：60)　1m

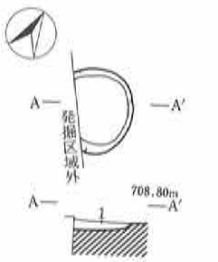
第299図　D237号土坑実測図



1層　褐色土　砂質ローム粒子・パミス・炭化物を含む。粘性・しまり共になし。

0　(1：60)　1m

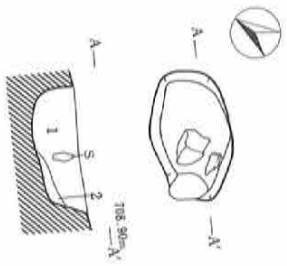
第300図　D238号土坑実測図



1層　褐色土　砂質ローム粒子・パミスを含む。粘性弱。しまりなし。

0　(1：60)　1m

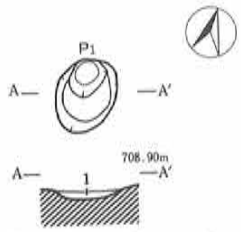
第301図　D239号土坑実測図



1層　褐色土　黄色砂質ローム粒子・パミス・炭化物を含む。粘性弱。しまりなし。
2層　黄褐色土　黄色砂質ロームを主体とする。

0　(1：60)　1m

第302図　D240号土坑実測図



1層　褐色土　砂質ローム粒子・粗砂を含む。粘性弱。しまりなし。

0　(1：60)　1m

第303図　D241号土坑実測図

第292表　D236号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	243	短軸(cm)	180
深さ(cm)	29.0	長軸方向	N—74°—E

第293表　D237号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	77	短軸(cm)	63
深さ(cm)	20.0	長軸方向	N—19°—E

第294表　D238号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	109	短軸(cm)	82
深さ(cm)	22.0	長軸方向	N—44°—W

第295表　D239号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	68	短軸(cm)	—
深さ(cm)	13.5	長軸方向	N—50°—E

第296表　D240号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	101	短軸(cm)	65
深さ(cm)	39.0	長軸方向	N—50°—W

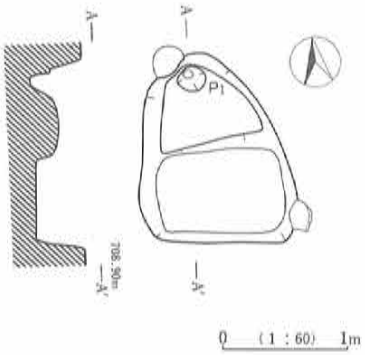
第297表　D241号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	61	短軸(cm)	48
深さ(cm)	11.0	長軸方向	N—8°—W

1層　褐色土　砂質ローム粒子・パミス・炭化物を含む。粘性・しまりなし。

0　(1：60)　1m

第304図　D243号土坑実測図



0　(1：60)　1m

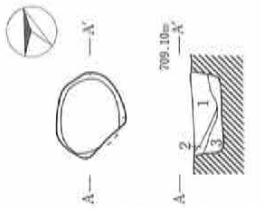
第305図　D244号土坑実測図

第298表　D243号土坑計測・説明表

平面形態	—	断面形状	逆台形
長軸(cm)	126	短軸(cm)	—
深さ(cm)	27.0	長軸方向	—

第299表　D244号土坑計測・説明表

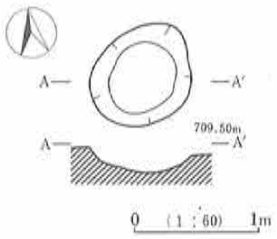
平面形態	不整形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	152	短軸(cm)	116
深さ(cm)	41.0	長軸方向	N



1層　褐色土　砂質ローム粒子・炭化物・1～3mmの小の礫を含む。
2層　白色土　灰層。
3層　黄褐色土　黄色砂質ローム主体とする。粘性弱。しまりなし。

0　(1：60)　1m

第306図　D245号土坑実測図



0　(1：60)　1m

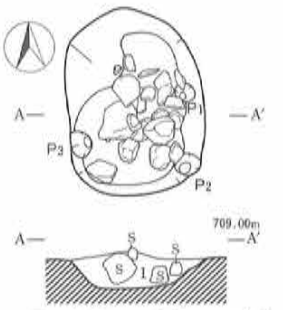
第307図　D246号土坑実測図

第300表　D245号土坑計測・説明表

平面形態	不整円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	68	短軸(cm)	56
深さ(cm)	25.0	長軸方向	N—22°—E

第301表　D246号土坑計測・説明表

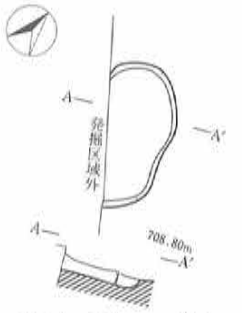
平面形態	円形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	90	短軸(cm)	72
深さ(cm)	19.0	長軸方向	N—54°—E



1層　暗褐色土　砂質ローム粒子・パミス・炭化物を含む。粘性弱。

0　(1：60)　1m

第308図　D247号土坑実測図



1層　褐色土　砂質ローム粒子と炭化物を含む。粘性弱。しまりなし。

0　(1：60)　1m

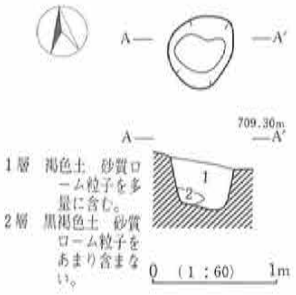
第309図　D248号土坑実測図

第302表　D247号土坑計測・説明表

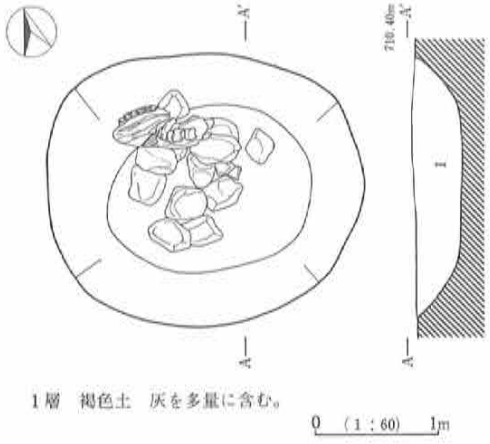
平面形態	楕円形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	150	短軸(cm)	107
深さ(cm)	31.0	長軸方向	N

第303表　D248号土坑計測・説明表

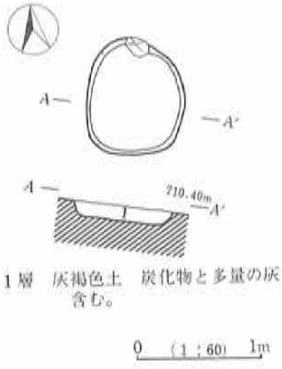
平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	60	短軸(cm)	—
深さ(cm)	19.0	長軸方向	N—27°—W



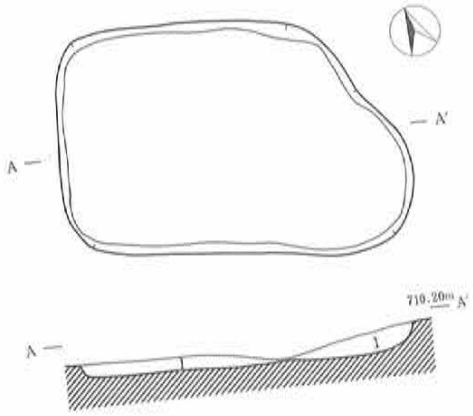
第310図　D249号土坑実測図



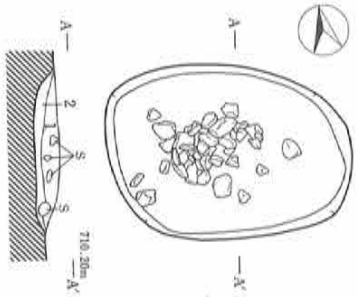
第311図　D250号土坑実測図



第312図　D251号土坑実測図



第313図　D252号土坑実測図



第314図　D253号土坑実測図

第304表　D249号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	60	短軸(cm)	50
深さ(cm)	47.0	長軸方向	N−13°−E

第305表　D250号土坑計測・説明表

平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	252	短軸(cm)	215
深さ(cm)	40.0	長軸方向	N−67°−W

第306表　D251号土坑計測・説明表

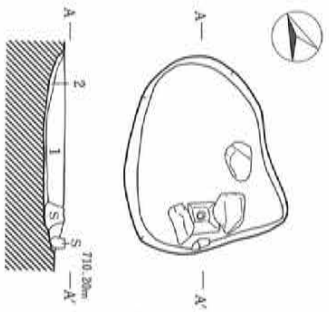
平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	90	短軸(cm)	77
深さ(cm)	14.0	長軸方向	N−14°−E

第307表　D252号土坑計測・説明表

平面形態	不整形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	274	短軸(cm)	184
深さ(cm)	21.0	長軸方向	N−66°−W

第308表　D253号土坑計測・説明表

平面形態	楕円形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	197	短軸(cm)	139
深さ(cm)	21.0	長軸方向	N−74°−W



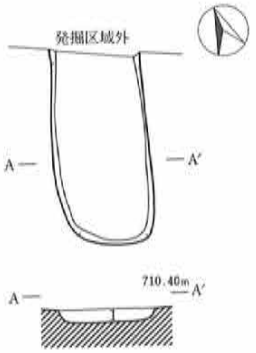
1層　褐色土
2層　灰褐色土　灰を主体とする。

0　(1：60)　1m

第315図　D254号土坑実測図

第309表　D254号土坑計測・説明表

平面形態	不整形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	154	短軸(cm)	116
深さ(cm)	20.0	長軸方向	N−16°−E



1層　褐色土　灰を多量に含む。

0　(1：60)　1m

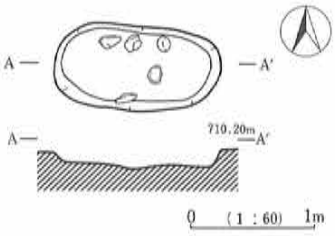
第317図　D256号土坑実測図

第311表　D256号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	76
深さ(cm)	15.0	長軸方向	N−18°−E

第313表　D258号土坑計測・説明表

平面形態	楕円形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	140	短軸(cm)	113
深さ(cm)	23.0	長軸方向	N−31°−E

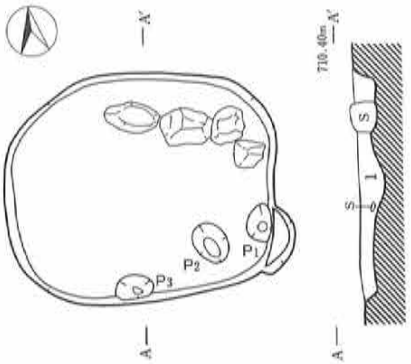


0　(1：60)　1m

第316図　D255号土坑実測図

第310表　D255号土坑計測・説明表

平面形態	長楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	131	短軸(cm)	68
深さ(cm)	18.5	長軸方向	N−85°−W



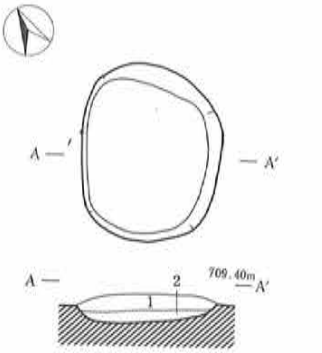
1層　暗褐色土　灰と炭化物を少量含む。

0　(1：60)　1m

第318図　D257号土坑実測図

第312表　D257号土坑計測・説明表

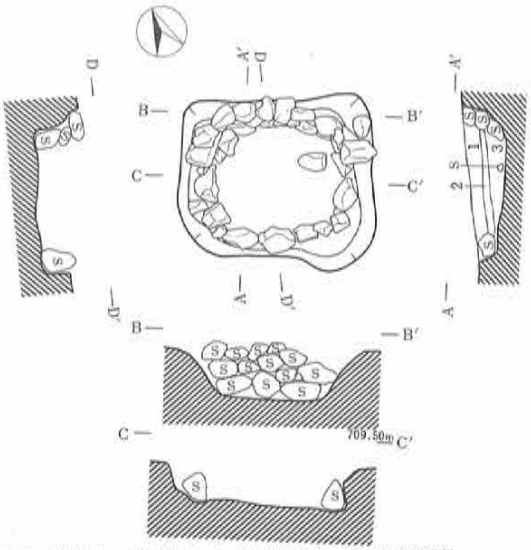
平面形態	隅丸方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	218	短軸(cm)	182
深さ(cm)	21.0	長軸方向	N−87°−W



1層　褐色土　パミス・炭化粒子を微量含む。粒子細かく粘性弱。
2層　暗褐色土　パミス・炭化粒子を微量含む。粒子は極めて細かい。

0　(1：60)　1m

第319図　D258号土坑実測図



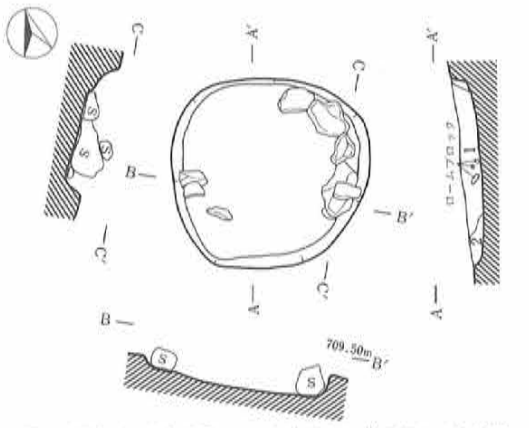
1層　暗褐色土　黄色砂質ローム・灰を微量含む。粒子細かく粘性弱。
2層　褐 色 土　灰を微量、黄色砂質ロームを多量に含む。粒子は極めて細かい。
3層　黒褐色土　黄色砂質ローム・炭化粒子を微量含む。粒子は極めて細かい。

0　(1：60)　1m

第320図　D259号土坑実測図

第314表　D259号土坑計測・説明表

平面形態	方　形	断面形状	逆 台 形
長軸(cm)	153	短軸(cm)	124
深さ(cm)	41.5	長軸方向	N−67°−W



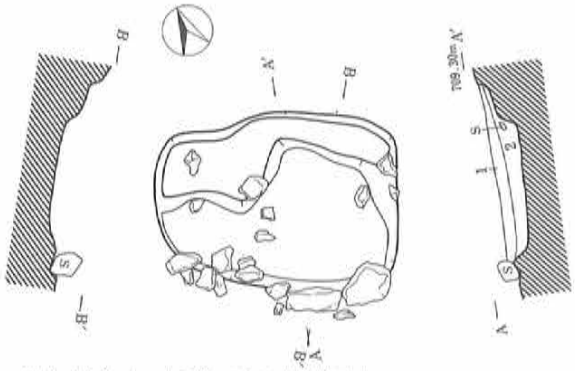
1層　暗褐色土　黄色砂質ロームを微量含む。粒子細かく粘性弱。
2層　褐 色 土　黄色砂質ロームを多量に含む。粒子細かく粘性弱。

0　(1：60)　1m

第322図　D261号土坑実測図

第316表　D261号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	逆 台 形
長軸(cm)	157	短軸(cm)	152
深さ(cm)	29.5	長軸方向	N−16°−E



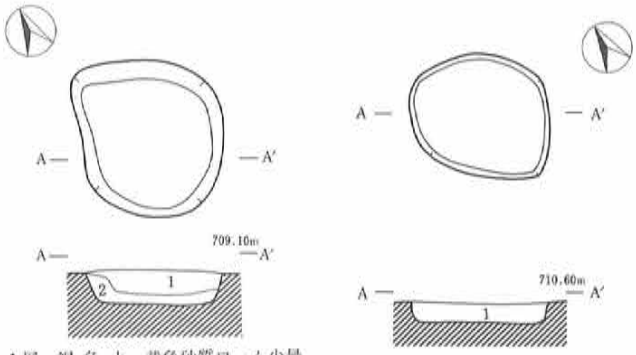
1層　褐 色 土　小の礫・パミス・炭化粒子を微量含む。粒子は細かい。
2層　暗褐色土　黄色砂質ローム・灰・パミス・炭化粒子を少量含む。粒子は細かい。

0　(1：60)　1m

第321図　D260号土坑実測図

第315表　D260号土坑計測・説明表

平面形態	不整長方形	断面形状	逆 台 形
長軸(cm)	195	短軸(cm)	139
深さ(cm)	29.5	長軸方向	N−61°−W



1層　褐 色 土　黄色砂質ローム少量と、炭化粒子微量を含む。粒子細かく粘性弱。
2層　暗褐色土　黄色砂質ロームを微量含む。粒子細かい。

1層　明褐色土　砂質で黄色味がかっている。

0　(1：60)　1m

第323図　D262号土坑実測図

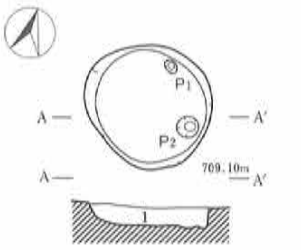
第324図　D263号土坑実測図

第317表　D262号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	逆 台 形
長軸(cm)	124	短軸(cm)	113
深さ(cm)	34.0	長軸方向	N−18°−E

第318表　D263号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	逆 台 形
長軸(cm)	113	短軸(cm)	96
深さ(cm)	18.0	長軸方向	N−50°−W



1層　暗褐色土　炭化物を含む。

0　(1：60)　1m

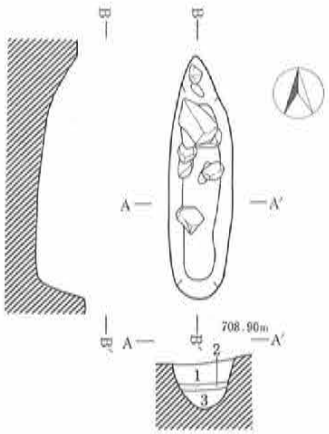
第325図　D264号土坑実測図

第319表　D264号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	104	短軸(cm)	96
深さ(cm)	27.0	長軸方向	N—77°—W

第320表　D265号土坑計測・説明表

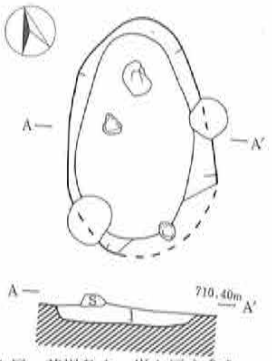
平面形態	長楕円形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	193	短軸(cm)	50
深さ(cm)	45.0	長軸方向	N



1層　黒褐色土　炭と炭化物を多量に含む。
2層　灰褐色土　灰層。
3層　暗褐色土　灰を多量に含み、炭化物を少量含む。炭化物の含有量は1層より少ない。

0　(1：60)　1m

第326図　D265号土坑実測図



1層　茶褐色土　炭と灰を含む。サラサラしている。

0　(1：60)　1m

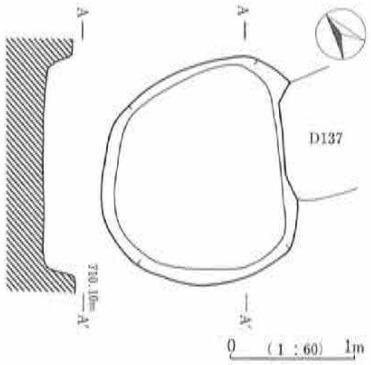
第327図　D266号土坑実測図

第321表　D266号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	113
深さ(cm)	21.0	長軸方向	N—12°—E

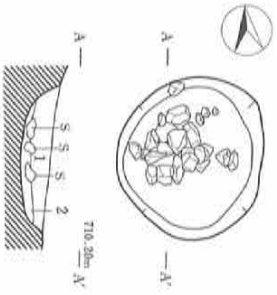
第322表　D267号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	180	短軸(cm)	155
深さ(cm)	30.0	長軸方向	N—44°—E



0　(1：60)　1m

第328図　D267号土坑実測図



1層　灰褐色土　灰を多量に含む。砂質ローム粒子を含む。
2層　灰褐色土　灰を少量含む。

0　(1：60)　1m

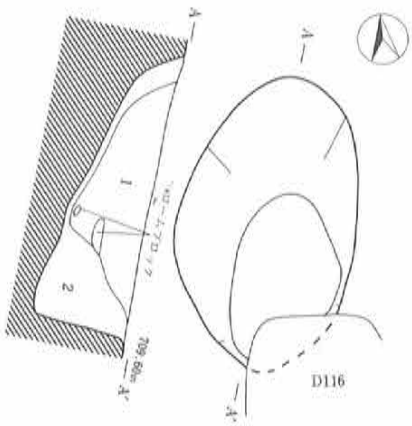
第329図　D268号土坑実測図

第323表　D268号土坑計測・説明表

平面形態	円　形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	128	短軸(cm)	117
深さ(cm)	37.0	長軸方向	N—7°—W

第324表　D269号土坑計測・説明表

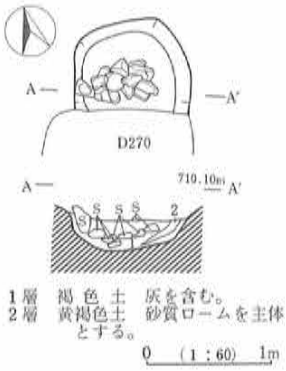
平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	233	短軸(cm)	143
深さ(cm)	72.0	長軸方向	N—15°—E



1層　黒褐色土　黄白色砂質ローム・小の礫・パミスを含む。粒子は極めて細かい。
2層　淡褐色土　黄白色砂質ローム・小の礫・パミスを多量に含む。粒子は細かく粘性弱。

0　(1：60)　1m

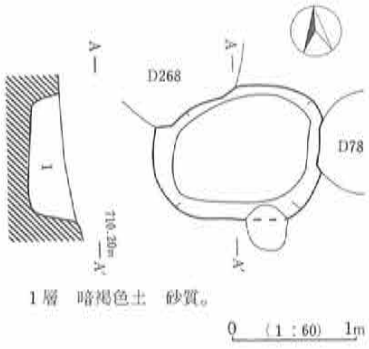
第330図　D269号土坑実測図



第331図　D270号土坑実測図

第325表　D270号土坑計測・説明表

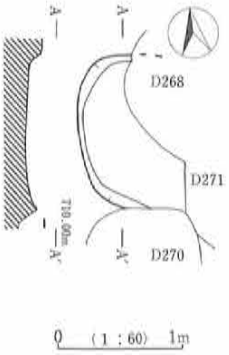
平面形態	—	断面形状	舟底形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	92
深さ(cm)	28.0	長軸方向	—



第332図　D271号土坑実測図

第326表　D271号土坑計測・説明表

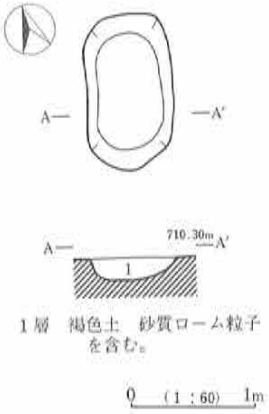
平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	134	短軸(cm)	109
深さ(cm)	39.5	長軸方向	N−87°−W



第333図　D272号土坑実測図

第327表　D272号土坑計測・説明表

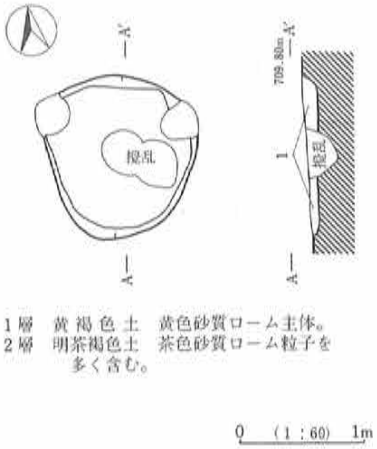
平面形態	—	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	121
深さ(cm)	14.0	長軸方向	—



第334図　D273号土坑実測図

第328表　D273号土坑計測・説明表

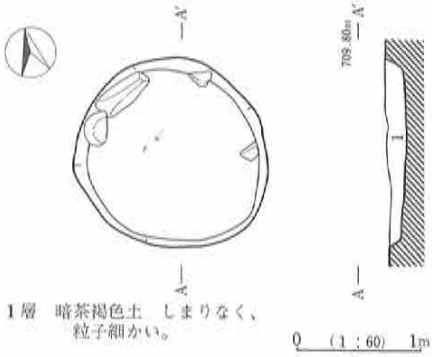
平面形態	楕円形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	124	短軸(cm)	70
深さ(cm)	19.0	長軸方向	N−17°−E



第335図　D274号土坑実測図

第329表　D274号土坑計測・説明表

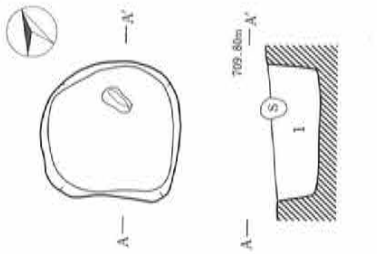
平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	130	短軸(cm)	120
深さ(cm)	11.0	長軸方向	N−8°−E



第336図　D275号土坑実測図

第330表　D275号土坑計測・説明表

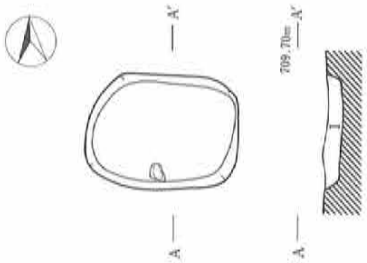
平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	156	短軸(cm)	154
深さ(cm)	14.0	長軸方向	N−36°−W



1層　明茶褐色土　黄色・赤色ロームブロック。炭化粒子10㎝に1個。粒子細かい。

0　(1：60)　1m

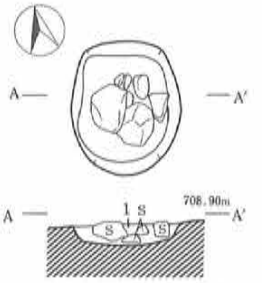
第337図　D276号土坑実測図



1層　明褐色土　灰・パミス・砂質ローム粒子を含む。

0　(1：60)　1m

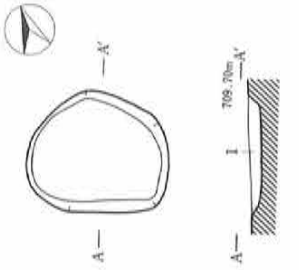
第338図　D277号土坑実測図



1層　暗褐色土　砂質ローム粒子、パミスを含む。粘性弱。しまりなし。

0　(1：60)　1m

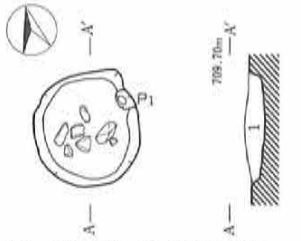
第339図　D278号土坑実測図



1層　淡褐色土　灰を含む。

0　(1：60)　1m

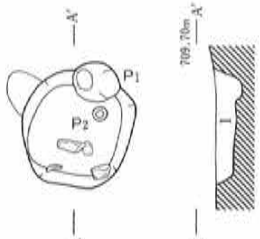
第340図　D279号土坑実測図



1層　淡褐色土　灰を多量に含む。

0　(1：60)　1m

第341図　D280号土坑実測図



1層　褐色土　砂質ローム粒子・炭化物・灰を含む。

0　(1：60)　1m

第342図　D281号土坑実測図

第331表　D276号土坑計測・説明表

平面形態	不整円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	111	短軸(cm)	108
深さ(cm)	40.0	長軸方向	N−56°−W

第332表　D277号土坑計測・説明表

平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	124	短軸(cm)	91
深さ(cm)	15.0	長軸方向	N−87°−W

第333表　D278号土坑計測・説明表

平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	114	短軸(cm)	87
深さ(cm)	18.0	長軸方向	N−14°−E

第334表　D279号土坑計測・説明表

平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	134	短軸(cm)	98
深さ(cm)	10.0	長軸方向	N−57°−W

第335表　D280号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	91	短軸(cm)	85
深さ(cm)	16.0	長軸方向	N−13°−E

第336表　D281号土坑計測・説明表

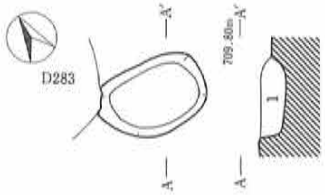
平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	94	短軸(cm)	88
深さ(cm)	16.0	長軸方向	N−6°−E

第337表　D282号土坑計測・説明表

平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	90	短軸(cm)	58
深さ(cm)	19.0	長軸方向	N−84°−W

第338表　D283号土坑計測・説明表

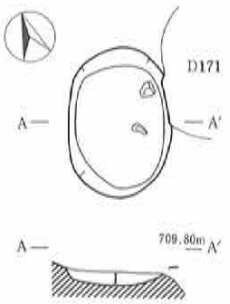
平面形態	楕円形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	120	短軸(cm)	83
深さ(cm)	17.0	長軸方向	N−18°−E



1層　茶褐色土　黄色土ブロック含む。

0　(1：60)　1m

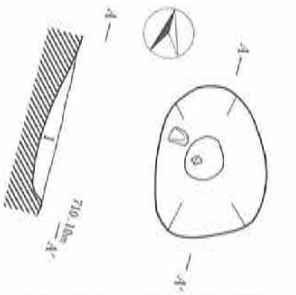
第343図　D282号土坑実測図



1層　暗茶褐色土　細かいがしまりがない。炭や焼土は全くない。

0　(1：60)　1m

第344図　D283号土坑実測図



1層　褐色土　多量の灰と少量の炭化物を含む。

0　(1：60)　1m

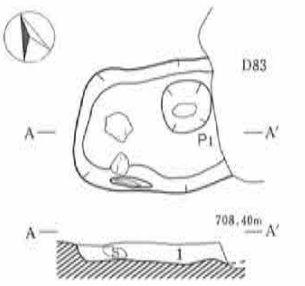
第345図　D284号土坑実測図

第339表　D284号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	舟　底　形
長軸(cm)	121	短軸(cm)	88
深さ(cm)	19.0	長軸方向	N−21°−W

第340表　D285号土坑計測・説明表

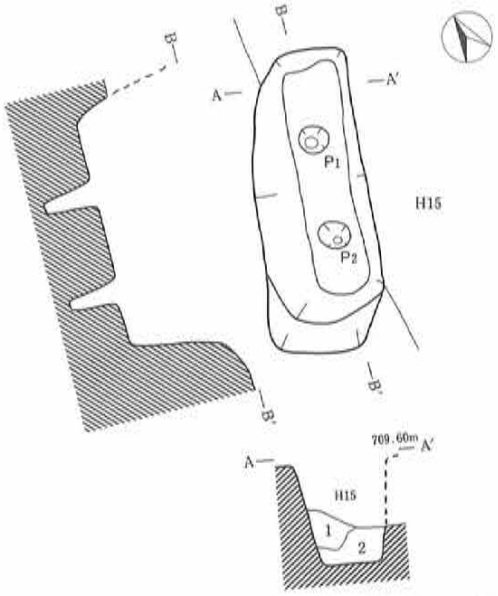
平面形態	隅丸長方形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	102
深さ(cm)	26.5	長軸方向	N−69°−W



1層　褐色土　灰を含むため、色調がくすむ。

0　(1：60)　1m

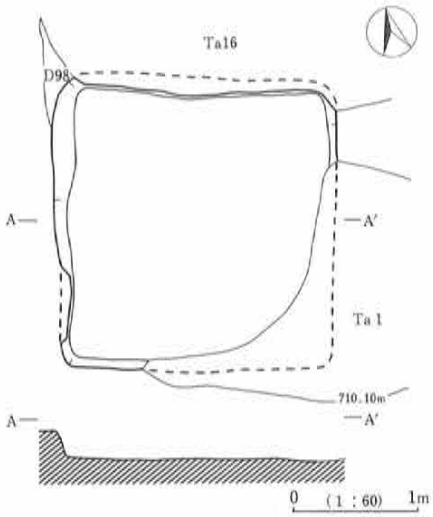
第346図　D285号土坑実測図



1層　黄褐色土　黄色砂質ロームを主体とする。パミスと小の礫を含む。黒っぽい土が少々混じる。
2層　褐色土　砂質ローム粒子・パミスを含む。きめ細かい。

0　(1：60)　1m

第347図　D286号土坑実測図



0　(1：60)　1m

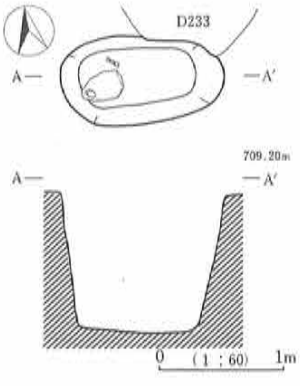
第348図　D287号土坑実測図

第341表　D286号土坑計測・説明表

平面形態	長　方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	243	短軸(cm)	91
深さ(cm)	95.0	長軸方向	N−24°−E

第342表　D287号土坑計測・説明表

平面形態	方　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	226
深さ(cm)	31.0	長軸方向	N−13°−E



0　(1：60)　1m

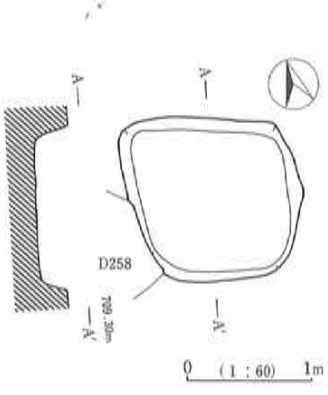
第349図　D288号土坑実測図

第343表　D288号土坑計測・説明表

平面形態	楕　円　形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	131	短軸(cm)	70
深さ(cm)	114.0	長軸方向	N−80°−W

第344表　D290号土坑計測・説明表

平面形態	不整方形	断面形状	逆　台　形
長軸(cm)	140	短軸(cm)	132
深さ(cm)	30.0	長軸方向	N−75°−W



0　(1：60)　1m

第350図　D290号土坑実測図

第345表　大井城跡（黒岩城跡）土坑一覧表

遺　構	挿図番号	検出区	平面形態 断面形状	規　模（cm） 長軸	 短軸	 深さ	長軸方向	備　考
D 1	67	こ－3・4	円　形 逆台形	274	250	6.0～15.0	N－27°－E	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器
D 2	68	さ－3	方　形 逆台形	222	202	42.0	N－21°－E	美濃灰釉碗片（16Ｃ前）
D 3	69	さ－3・4	－ 逆台形	－	－	31.0	－	内耳土器片
D 4	70	す－4	（方　形） 舟底形	－	－	21.0	－	内耳土器片
D 5	71	せ－4・5	長方形 逆台形	601	186	40.0	N－85°－W	土師質土器片
D 6	72	す－4	長方形 逆台形	203	146	22.0	N－30°－E	
D 7	73	き－6	方　形 逆台形	250	230	34.0	N－78°－W	常滑甕片（14Ｃ）、瀬戸片（14Ｃ前）、美濃灰釉碗片（16Ｃ前）、内耳土器片、土師質土器小皿片、弥生土器片、土師質土器片
D 8	74	け－4	方　形 逆台形	68	62	49.5	N－77°－W	底面が凸凹している。
D 9	75	か－4	長方形 逆台形	184	－	34.5	N－10°－E	土師質土器片
D 10	76	お・か－5	長方形 逆台形	223	72	37.5	N－14°－E	土師質土器小皿
D 11	77	か－4・5	－ 逆台形	－	161	35.0		土師質土器小皿　2、土師質土器片
D 12	78	き・く－2	方　形 逆台形	167	164	84.0	N－30°－E	土師質土器片
D 13	79	う－11	長方形 逆台形	206	174	39.5	N－73°－W	青磁碗片（15Ｃ）、土師質土器小皿　2、内耳土器片 土師質土器片
D 14	80	す－8	－ 逆台形	287	－	66.5	－	白磁皿（16Ｃ）
D 15	81	す－8	－ 逆台形	－	－	6.0	－	
D 16	82	く－2・3	長方形 逆台形	313	128	30.5	N－86°－W	内耳土器片、土師質土器小皿片
D 17	83	し－4	方　形 逆台形	280	266	21.5	N－15°－E	土師質土器小皿片、弥生土器片、土師質土器片
D 18	84	け－4	長方形 逆台形	290	167	25.0	N－72°－W	内耳土器片
D 19	85	か－2	長方形 逆台形	302	183	50.5	N－20°－E	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片
D 20	86	お・か－3	－ 逆台形	－	－	19.0	－	
D 21	87	お－3	（楕円形） 逆台形	－	224	24.0	－	土師質土器小皿　1、内耳土器片、土師質土器片、 茶臼　1
D 22	88	え－7・8	円　形 逆台形	183	175	15.0	N－82°－W	土製丸玉
D 23	89	く－3	長方形 逆台形	186	114	44.5	N－14°－E	内耳土器片 北壁、東壁下にテラスあり。
D 24	90	さ－4	長方形 逆台形	193	116	29.0	N－15°－E	刀子
D 25	91	け－2	方　形 逆台形	178	176	37.0	N－13°－E	土師質土器小皿　1、土師質土器小皿片、土師質土器 西壁下北隅にテラスあり。
D 26	92	す－5	方　形 逆台形	160	156	33.0	N－12°－E	内耳土器片、土師質土器片、須恵器片
D 27	93	お－4・5	長方形 逆台形	240	132	37.0	N－77°－W	内耳土器片、土師質土器小皿片、弥生土器片 土師質土器片
D 28	94	か－6	円　形 逆台形	150	148	20.5	N－7°－E	内耳土器片、弥生土器片、土師質土器片

遺　構	挿図番号	検出区	平面形態	規　模(cm)			長軸方向	備　考
			断面形状	長軸	短軸	深さ		
D 29	95	き－7	不整形	235	158	29.5	N－83°－W	土板　1、内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片 粉挽臼上下　4，茶臼上臼　1、石臼片、鉄滓　1、骨
			逆台形					
D 30	96	き－4	(隅丸方形)	－	154	25.0	－	内耳土器片、土師質土器小皿片、弥生土器片、土師質土器片 石臼片、砥石
			逆台形					
D 31	97	え・お－3	長方形	294	225	45.0	N－12°－E	土師質土器小皿　1、内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片、擂鉢口縁部　1
			逆台形					
D 32	98	く－7・8	方　形	188	171	27.5	N－72°－W	土師質土器小皿片、土師質土器片
			逆台形					
D 33	99	き－2	長方形	262	112	80.0	N－67°－W	土師質土器片
			逆台形					
D 34	100	お－7・8	円　形	231	195	43.0	N	
			逆台形					
D 35	101	お－9	長方形	185	124	31.5	N－25°－E	内耳土器片
			逆台形					
D 36	102	お－7・8	長方形	162	102	49.0	N－63°－W	土師質土器小皿　1
			逆台形					
D 37	103	す－8	長方形	174	120	42.5	N－11°－E	石臼片
			逆台形					
D 38	104	す－8	長方形	－	135	21.0	－	石臼片 北壁下にテラスあり。礎はほとんどが底面直上より検出される。
			逆台形					
D 39	105	し－6	長方形	－	166	52.0	N－69°－W	砥石、磨石
			逆台形					
D 40	106	し－6	不整方形	261	231	52.0	N－24°－E	瀬戸折縁小鉢片(15 C)、内耳土器片、土師質土器小皿片、 弥生土器片、土師質土器片
			逆台形					
D 41	107	け－6・7	(長方形)	－	143	49.0	－	青磁碗連弁文片(14 C)、常滑甕片(16 C前半) 瀬戸折縁鉢片(15 C後)
			逆台形					
D 42	108	く・け－5・6	(長方形)	－	－	28.0	－	
			逆台形					
D 43	109	さ・し－9	楕円形	192	130	52.0	N－8°－E	西壁北隅に長さ27 cm、幅60 cm、段差16 cmのテラスあり。
			逆台形					
D 44	110	く・け－5・6	方　形	149	149	35.0	N－25°－E	
			逆台形					
D 45	111	し－6	長方形	302	154	42.0	N－17°－W	
			逆台形					
D 46	112	し－7	不整方形	210	－	24.5	－	
			逆台形					
D 47	113	け－8	方　形	156	134	26.5	N－5°－E	内耳土器片
			舟底形					
D 48	114	け－8	長方形	213	106	42.0	N－6.5°－E	
			逆台形					
D 49	115	く－8	長方形	246	163	27.5	N－72°－W	
			逆台形					
D 50	116	す－7	長方形	356	224	34.5	N	土師質土器小皿　2、土師質土器片
			舟底形					
D 51	117	す－6	方　形	196	156	19.0	N－22°－E	
			逆台形					
D 52	118	す－6	長方形	228	153	47.0	N－13°－E	内耳土器片、土師質土器片、不明貨幣　1
			逆台形					
D 53	119	お－8・9	不整方形	169	167	52.0	N－81°－W	石臼片
			逆台形					
D 54	120	き－4	方　形	166	144	32.5	N－74°－W	
			逆台形					
D 55	121	お－3	長方形	257	180	39.5	N－31°－E	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片
			逆台形					
D 56	122	さ－3	長方形	245	200	39.0	N－5°－E	内耳土器　1、内耳土器片、土師質土器片、須恵器片 化石　1
			逆台形					
D 57	123	え－11	長方形	294	120	51.5	N－18°－E	内耳土器片、土師質土器小皿片
			逆台形					

遺　構	挿図番号	検出区	平面形態	規　模（cm）			長軸方向	備　考
			断面形状	長軸	短軸	深さ		
D 58	124	う－11	長方形 逆台形	247	205	52.5	N－19°－E	内耳土器片、土師質土器小皿片
D 59	125	い・う－11・12	隅丸方形 逆台形	159	151	21.0	N－18°－W	内耳土器片、土師質土器片
D 60	126	う－10	長方形 逆台形	268	149	44.5	N－16°－E	美濃灰釉小皿片(16Ｃ前)、内耳土器片、土師質土器片 土師質土器小皿片、砥石　1
D 61	127	う－12	隅丸長方形 逆台形	245	190	28.5	N－67°－W	土師質土器小皿　2、内耳土器片、土師質土器片
D 62	128	い－12	長方形 舟底形	－	190	28.0	N－17°－E	内耳土器片
D 63	129	か－12	長方形 逆台形	－	132	24.5	N－30°－E	
D 64	130	か－12	－ 逆台形	－	264	65.5	－	
D 65	131	か－12	長方形 逆台形	214	154	28.5	N－63°－W	常滑甕片(16Ｃ前)、内耳土器片
D 66	132	お－12	長方形 逆台形	140	121	42.0	N－79°－W	内耳土器片、土師質土器片
D 67	133	く－9・10	長方形 逆台形	－	200	33.5	N－77°－W	内耳土器片、土師質土器片、須恵器片
D 68	134	う・え－11	長方形 逆台形	234	155	51.0	N－14°－E	土師質土器小皿　1、内耳土器片、土師質土器小皿片
D 69	135	え－6・7 お－6	長方形 舟底形	260	118	18.5	N－71°－W	内耳土器、土師質土器片、硯片
D 70	136	く－7・8	方　形 舟底形	176	174	28.5	N－67°－W	土師質土器片 礫はすべて底面より浮いた状態で検出される。
D 71	137	さ－8	方　形 逆台形	173	159	65.5	E	凹石　2、粉挽き臼下臼　1、骨
D 72	138	さ－9	長方形 逆台形	162	131	27.5	N－6°－W	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片 粉挽き臼上臼　1、石臼片
D 73	139	え－5	長方形 逆台形	259	115	24.0	N－8°－E	
D 74	140	え・お－4・5	方　形 逆台形	321	－	43.0	－	美濃灰釉小皿(16Ｃ前)、美濃灰釉小皿片(16Ｃ前)、土師質土器小皿　2、内耳土器片、土師質土器小皿片、角釘 底面は平坦であるが、西に傾斜する。
D 75	141	う・え－8	長方形 逆台形	216	140	20.0～35.0	N－15°－E	青磁碗片(15Ｃ)、内耳土器片、土師質土器小皿片 土師質土器
D 76	142	え－5	長方形 逆台形	189	130	17.0	N－9°－E	美濃灰釉小皿(16Ｃ前)、内耳土器片、土師質土器片
D 77	143	う－8	長方形 逆台形	－	140	36.0	N－15°－E	内耳土器片、土師質土器片
D 78	144	う－8	楕円形 逆台形	82	－	35.5	N－11°－E	遺構の一部を撹乱によって破壊されている。
D 79	145	お－6	長方形 逆台形	205	122	48.0	N－82°－W	北壁中央に小さな張り出しあり。西半分に多量の礫があり、全て底面より10㎝以上浮いた状態で検出される。
D 80	146	え－4・5	長方形 舟底形	－	138	14.0	N－81°－W	
D 81	147	お－8	隅丸長方形 逆台形	103	75	32.0	N－64°－W	鉄滓　1 底面が凸凹している。
D 82	148	お・か－6	方　形 逆台形	288	276	62.5	N－73°－W	内耳土器片、鉄滓、銅滓　1 底面は北に傾斜する。
D 83	149	こ－7	方　形 逆台形	158	135	27.0	N－19°－E	
D 84	150	し・す－8・9	楕円形 逆台形	266	169	31.0	N	青磁碗(16Ｃ)、美濃鉄釉天目茶碗(16Ｃ)、土師質土器小皿　2、内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片、粉挽臼上臼　4、茶臼下臼　1、石臼片、骨、砥石　1、皇宋通宝、咸平通宝、不明通宝
D 85	151	し・す－9	長方形 －	－	－	38.5	－	美濃灰釉小皿(16Ｃ前)、内耳土器片、土師質土器片、弥生土器片、石臼片、砥石片、坩堝、チャート
D 86	152	か－6・7	方　形 逆台形	185	173	36.0	N－23°－E	美濃灰釉天目茶碗(16Ｃ)、土師質土器小皿片 北壁東隅底面緩やかに陥没する。

遺　構	挿図番号	検出区	平面形態	規　模(cm)			長軸方向	備　考
			断面形状	長軸	短軸	深さ		
D 87	153	か・き－8・9	長方形 逆台形	210	76	52.0	N－11°－E	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片、 粉挽き臼上臼　1、石臼片、角釘　2、鉄釘　6
D 88	154	け－5・6	曲屋風 逆台形	256 227	119 173	29.0 41.0	—	内耳土器片、土師質土器小皿片、弥生土器片、 土師質土器片
D 90	155	き－4	方　形 逆台形	116	109	25.5	N－7.5°－E	
D 91	156	き－4	長方形 逆台形	136	106	18.5	N－14°－E	内耳土器片、土師質土器小皿片
D 92	157	こ－4	楕円形 逆台形	80	46	46.5	N－77°－W	内耳土器片、土師質土器片
D 93	158	さ－5	楕円形 逆台形	226	156	15.5	N－70°－W	
D 94	159	こ・さ－5	長方形 舟底形	217	123	38.0	N－8°－E	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片 西壁南隅に小さなテラスあり。
D 95	160	こ－5	方　形 逆台形	127	121	10.0	N－79°－W	
D 96	161	け－3	(方　形) 逆台形	—	125	33.5	—	内耳土器片
D 97	162	か－5	方　形 逆台形	69	64	25.5	N－27°－E	
D 98	163	か－5	方　形 逆台形	123	120	30.0	N－11°－E	骨
D 99	164	け－5・6	長方形 逆台形	121	64	19.0	N－68°－W	
D 100	165	こ－8	方　形 逆台形	133	125	43.0	N－14°－E	土師質土器小皿片、土師質土器片、石臼片
D 101	166	き－7	楕円形 舟底形	—	117	24.5	—	茶臼上臼　1、石臼片
D 102	167	き－7	楕円形 舟底形	—	107	23.0	—	石臼片
D 103	168	お－5・6	長方形 逆台形	25	75	23.0	N－18°－E	正隆元宝
D 104	169	お－5	長方形 逆台形	137	101	26.0	N－65°－W	
D 105	170	お－5	隅丸長方形 舟底形	161	138	23.5	N－9°－E	美濃鉄釉天目茶碗(16 C) 西壁北半分にテラスあり。礫は底面直上より検出される。
D 106	171	か－4	長方形 舟底形	184	142	35.5	N－9°－E	土師質土器片
D 107	172	け－4	楕円形 逆台形	97	63	7.0	N－21°－E	内耳土器片
D 108	173	か－4・5	長方形 逆台形	167	129	20.0	N－76°－W	青磁碗連弁文片(14 C)、内耳土器片、土師質土器片、 擂鉢片口部　1、石臼片、凹石　1
D 109	174	す－5・6	方　形 逆台形	130	125	30.5	N－80°－W	
D 110	175	お－2	方　形 逆台形	71	70	35.5	N－20°－E	土師質土器片
D 111	176	く－7	方　形 逆台形	125	115	28.0	N－38°－E	内耳土器片
D 112	177	き－0	長方形 逆台形	104	72	32.0	N－29°－E	内耳土器片、土師質土器片、粉挽き臼下臼　1、石臼片
D 113	178	お－3	長方形 逆台形	77	58	21.0	N－60°－W	
D 114	179	お－3	方　形 逆台形	116	103	31.0	N－28°－E	
D 115	180	け－2	方　形 逆台形	137	111	31.0	N－66°－W	礫を多量に含む。
D 116	181	き－7	方　形 逆台形	114	110	72.0	N－11°－E	土師質土器片

遺　構	挿図番号	検出区	平面形態	規　模(cm)			長軸方向	備　考
			断面形状	長軸	短軸	深さ		
D 117	182	え－12	方　形	86	84	19.5	N－65°－W	
			逆台形					
D 118	183	お－ 7	長方形	149	71	23.0	N－75°－W	
			逆台形					
D 119	184	か－ 9	不整長方形	175	118	12.0	N－71°－W	
			逆台形					
D 120	185	か－ 9	方　形	102	96	18.0	N－25°－E	内耳土器片、土師質土器片
			逆台形					
D 121	186	お－ 8	長方形	142	92	21.0	N－13°－E	土師質土器片、元豊通宝
			逆台形					
D 122	187	か－ 8	隅丸方形	102	98	41.5	N－15°－W	
			逆台形					
D 123	188	く－ 8	不整方形	89	76	27.0	N－66°－W	
			逆台形					
D 124	189	く－ 9	隅丸方形	－	140	40.0	－	土師質土器片、擂鉢把手部 1、石臼片 東壁底面傾斜する。
			逆台形					
D 126	190	け－ 6	－	－	－	23.5	－	青磁連弁文(14 C) 1
			－					
D 127	191	さ－ 9	方　形	－	92	35.0	－	内耳土器片
			逆台形					
D 128	192	す－ 8	不整長方形	138	111	24.5	N－12°－E	内耳土器片、土師質土器小皿片
			逆台形					
D 129	193	え－12	不整方形	110	95	21.0	N－22°－E	
			舟底型					
D 130	194	う－10	隅丸方形	135	125	26.5	N－25°－E	
			－					
D 131	195	え－12	長方形	80	62	41.0	N－72°－W	
			逆台形					
D 132	196	え－12	長方形	210	121	21.0	N－52°－E	内耳土器片、鉄滓 1
			逆台形					
D 133	197	え－ 8	長方形	110	68	21.0	N－20°－E	
			逆台形					
D 134	198	え－ 6	不整長方形	142	76	16.0	N－76°－W	土師質土器片、永楽通宝
			逆台形					
D 135	199	さ－ 9	不整方形	140	126	18.5	N－ 5 °－W	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片、砥石 1
			逆台形					
D 136	200	う－ 8	不整長方形	121	105	35.0	N－71°－W	土師質土器小皿 1、内耳土器片
			逆台形					
D 137	201	え－ 8	長方形	131	99	30.0	N－78°－W	常滑甕(14 C)、土師質土器片
			逆台形					
D 138	202	え－ 5	隅丸長方形	148	119	18.5	N－ 7 °－E	土師質土器片、熙寧元宝 礫は底面より浮いた状態で検出される。
			逆台形					
D 139	203	お－ 6	不整方形	123	115	17.0	N－ 8 °－E	
			逆台形					
D 140	204	お－ 8	長方形	120	84	40.0	N－16°－E	土師質土器小皿 1、内耳土器片、土師質土器片、石臼片
			逆台形					
D 141	205	お－ 8	不整長方形	184	130	43.0	N－12°－E	
			逆台形					
D 142	206	え－ 5	隅丸方形	140	140	78.0	N－22°－E	内耳土器片、土師質土器片
			逆台形					
D 143	207	え－ 8 ・ 9	不整長方形	168	108	39.0	N－ 4 °－E	
			逆台形					
D 144	208	こ－ 7	長方形	129	90	18.0	N－ 5 °－E	
			逆台形					
D 145	209	け－ 8	長方形	164	104	48.5	N－20°－E	
			逆台形					
D 146	210	け－ 7	(長方形)	－	69	15.5	－	
			逆台形					

遺　構	挿図番号	検出区	平面形態 / 断面形状	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	長軸方向	備　考
D 147	211	け・こ－7	方　形 / 逆台形	117	115	19.0	N－80°－W	石臼片
D 148	212	き－4	不整形 / －	129	106	－	N－3°－W	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片
D 149	213	し－3・4	円　形 / 逆台形	162	156	26.5	N－90°－E	土師質土器片
D 150	214	け－5・6	円　形 / 逆台形	123	212	14.0	N	中津川甕(14 C)、土師質土器小皿　1、内耳土器片 土師質土器片
D 151	215	お－5	円　形 / 逆台形	88	85	45.0	N－82°－W	
D 152	216	お－5	楕円形 / 逆台形	128	86	26.0	N－84°－W	
D 153	217	け－6	楕円形 / 逆台形	96	68	21.0	N－55°－E	
D 154	218	お－6	長方形 / 逆台形	86	74	48.0	N－12°－E	
D 155	219	え－5	米粒形 / 逆台形	121	88	31.0	N－11°－E	内耳土器片、土師質土器片
D 156	220	し－6	楕円形 / 逆台形	104	65	15.5	N－20°－E	土師質土器片
D 157	221	き－5	不整形 / 逆台形	－	－	17.0	－	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片 礫を多量に含む。
D 158	222	き－7	円　形 / 逆台形	103	86	14.0	N－37°－W	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片
D 159	223	す－7	隅丸方形 / 逆台形	78	70	95.0	N	
D 160	224	す－7	楕円形 / 逆台形	90	84	26.5	N－87°－W	
D 161	225	す－7	不整円形 / 逆台形	107	106	30.0	N－86°－E	内耳土器
D 162	226	し－7	楕円形 / 逆台形	110	72	14.5	N－6°－E	
D 163	227	す－7	円　形 / 逆台形	73	62	34.0	N	内耳土器
D 164	228	き－6	隅丸長方形 / 逆台形	－	87	15.0	N－73°－W	石臼片
D 165	229	き－6	楕円形 / 舟底形	162	121	23.5	N－46°－W	青磁碗片(14 C)、内耳土器片、弥生土器片、土師質土器片 茶臼上臼　1
D 166	230	く・け－7	隅丸長方形 / 逆台形	100	75	15.0	N－24°－E	青磁碗　1、粉挽き臼上臼　1、粉挽き臼下臼　1，擂鉢　1 石臼片
D 167	231	こ・さ－5	円　形 / 舟底形	－	114	12.5	－	底面は凸凹している。
D 168	232	こ－5	長方形 / 逆台形	－	62	24.5	N－21°－E	内耳土器片、不明石製品 底面は凸凹している。
D 169	233	け－8	楕円形 / 逆台形	115	109	40.5	N－7°－W	石臼片
D 170	234	け－8	円　形 / 逆台形	129	110	23.0	N－17°－E	
D 171	235	け－7	楕円形 / 逆台形	124	88	18.0	N－75°－W	
D 172	236	き－8	円　形 / 舟底形	146	128	25.0	N－6°－E	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片
D 172	237	さ－7	不整形 / 逆台形	144	109	23.0	N－85°－W	焼石（加工）
D 175	238	き－5	楕円形 / 逆台形	88	54	22.0	N－79°－W	土師質土器片
D 176	239	く－7	－ / 舟底形	－	－	20.0	－	内耳土器片

遺　構	挿図番号	検出区	平面形態	規　模(cm)			長軸方向	備　考
			断面形状	長軸	短軸	深さ		
D 177	240	く－7	円　形	133	132	16.0	N－10°－E	内耳土器片、土師質土器小皿片、弥生土器片
			舟底形					土師質土器片、茶臼下臼　1、石臼片
D 178	241	く－7	円　形	116	100	12.0	N－32°－W	土師質土器小皿片、石臼片
			逆台形					
D 179	242	く－7	楕円形	138	118	25.0	N－62°－E	土師質土器片
			逆台形					
D 180	243	き－6	楕円形	114	86	28.0	N－85°－W	土師質土器小皿片、土師質土器片、粉挽き臼上臼　1
			逆台形					粉挽き臼下臼　2、搗き臼　1、茶臼上臼　1、石臼片、凹石
								磯を多量に含む。
D 181	244	く－7	（楕円形）	－	100	16.5	N－49°－E	搗き臼　1
			舟底型					
D 182	245	か－7	不整円形	－	128	17.0	－	内耳土器片、土師質土器片、不明貨幣
			舟底形					
D 183	246	か－7	楕円形	141	120	24.5	N－5°－W	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片、骨
			逆台形					
D 184	247	か－4	楕円形	87	61	43.5	N－15°－E	内耳土器片、土師質土器片
			U字形					
D 185	248	き－2	－	－	－	9.0	－	土師質土器小皿　1、内耳土器片
			逆台形					
D 186	249	く－3	円　形	111	108	29.5	N－89°－W	土師質土器小皿　1
			逆台形					
D 187	250	か－6・7	円　形	103	87	31.0	N－23°－W	
			逆台形					
D 188	251	か－6・7	楕円形	135	－	43.5	－	土師質土器小皿　1
			逆台形					
D 189	252	か－6・7	楕円形	126	90	19.5	N－88°－E	土師質土器小皿片、茶臼下臼　1、石臼片
			逆台形					
D 190	253	か－7	楕円形	105	72	15.0	N－30°－W	
			逆台形					
D 191	254	き－7	楕円形	123	95	32.0	N－81°－W	土師質土器小皿　1、土師質土器片
			－					
D 192	255	か－6	不整形	154	128	32.0	N	土師質土器小皿　1、内耳土器片、土師質土器小皿片
			逆台形					粉挽き臼下臼　1
D 193	256	き－7	円　形	115	114	34.0	N－50°－W	土師質土器片
			逆台形					
D 194	257	く－8	楕円形	124	103	20.5	N－12°－W	
			－					
D 195	258	か－3	不整楕円形	182	－	27.0	N－6°－E	
			逆台形					
D 196	259	か－3	不整形	125	92	26.0	N－10°－E	
			舟底形					
D 197	260	え－12	円　形	97	94	17.5	N－25°－E	
			逆台形					
D 198	261	う－13	円　形	103	98	22.5	N－80°－E	
			逆台形					
D 199	262	う－13	楕円形	88	47	50.0	N－60°－W	
			逆台形					
D 200	263	え－11	楕円形	117	105	68.0	N－57°－W	内耳土器片、不明石製品
			逆台形					
D 201	264	お－12	楕円形	－	－	73.0	N－56°－E	土師質土器片
			逆台形					
D 202	265	さ－8	楕円形	168	118	15.0	N－87°－W	
			逆台形					
D 203	466	か－10	長方形	92	55	63.0	N－89°－W	弥生土器片、土師質土器片
			逆台形					
D 204	266	お－8	不整形	155	－	25.0	N－84°－W	西壁底面傾斜する。
			逆台形					
D 205	267	さ－9	不整形	100	98	30.0	N－45°－W	
			逆台形					

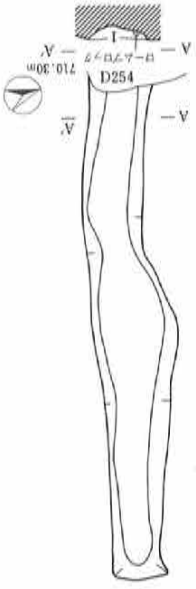
遺　構	挿図番号	検出区	平面形態 断面形状	規　模(cm) 長軸	 短軸	 深さ	長軸方向	備　考
D 206	268	し－8・9	円　形 逆台形	176	158	17.5	N－6°－E	青磁碗連弁文(14 C) 1、内耳土器片
D 207	269	け－6	(円　形) 逆台形	－	－	31.0	－	
D 208	270	け－7	不整方形 逆台形	－	123	62.0	N－58°－W	
D 209	271	し－6	隅丸方形 逆台形	122	116	18.0	N－74°－W	
D 210	272	し－9	楕円形 逆台形	22	111	57.0	N－75°－W	円形のテラスあり。
D 211	273	け－9	方　形 舟底形	－	148	32.5	－	内耳土器片、土師質土器片
D 212	274	け－5	不整長方形 逆台形	187	137	16.5	N－72°－W	
D 213	275	さ－8	楕円形 逆台形	170	100	42.0	N－9°－E	
D 214	276	し－8	長方形 逆台形	140	75	27.0	N－20°－E	
D 215	277	し－9	長方形 舟底形	88	62	21.0	N－13°－E	内耳土器片、土師質土器小皿片
D 216	278	さ－9	円　形 逆台形	74	66	18.0	N－50°－W	
D 217	279	し－9	円　形 逆台形	82	81	9.0	E	内耳土器片、粉挽き臼上臼 2，石臼片
D 218	280	さ－9	円　形 舟底形	74	72	29.0	N－9°－W	
D 219	281	さ－9	楕円形 逆台形	70	56	9.0	N－83°－W	
D 220	282	さ－9	楕円形 舟底形	72	52	3.0	N－88°－E	石臼 1
D 221	283	さ－8	楕円形 逆台形	160	106	25.5	N－13°－E	
D 222	284	く－8	楕円形 逆台形	109	92	30.5	N－22°－E	内耳土器片
D 223	285	す－7	隅丸方形 舟底形	77	70	24.5	N－72°－W	
D 224	286	す－8・9	－ 逆台形	－	－	25.0	－	
D 225	287	し－8・9 す－8	不整形 逆台形	268	－	84.0	N－45°－W	
D 226	288	す－9	円　形 逆台形	138	130	48.0	N－69°－W	
D 227	289	く－8	円　形 逆台形	127	123	50.0	N－65°－W	
D 228	290	す－7	円　形 逆台形	88	81	29.0	N－77°－W	
D 229	291	す－7	円　形 逆台形	69	65	13.0	N－35°－W	
D 230	292	す－7	円　形 逆台形	91	87	6.0	N－53°－E	
D 231	293	す－6	不整形 擂鉢形	130	90	29.0	N－78°－W	
D 232	294	さ・し－7・8	不整長方形 逆台形	210	180	33.0	N－22°－E	土師質土器小皿 1、土師質土器片 礫はすべて底面より浮いた状態で検出される。
D 233	295	う－9	楕円形 逆台形	153	120	20.0	N－23°－E	土師質土器片、石臼片、不明石製品、絹聖元宝 礫を含む。
D 234	296	う－9	楕円形 舟底形	－	122	15.0	－	美濃灰釉碗(16 C前) 1、土師質土器片 礫を含む。

遺　構	挿図番号	検出区	平面形態	規　模(cm)			長軸方向	備　考
			断石形状	長軸	短軸	深さ		
D 235	297	す－8	隅丸方形	199	157	35.0	N－78°－W	内耳土器片、凹石　1 礫はほとんどが底面より浮いた状態で検出される。
			逆台形					
D 236	298	す－8	楕円形	243	180	29.0	N－74°－E	美濃灰釉碗(16Ｃ前)　1、内耳土器片、土師質土器片 粉挽き臼上臼　2、粉挽き臼下臼　1、茶臼下臼　1、石臼片 礫を含む。
			逆台形					
D 237	299	す－8・9	円　形	77	63	20.0	N－19°－E	不明鉄製品
			逆台形					
D 238	300	す－9	楕円形	109	82	22.0	N－44°－W	内耳土器片、土師質土器片
			逆台形					
D 239	301	す－9	円　形	68	—	13.5	N－50°－E	
			舟底形					
D 240	302	し－9	楕円形	101	65	39.0	N－50°－W	内耳土器片、茶臼下臼　1、石臼片
			逆台形					
D 241	303	し－9	楕円形	61	48	11.0	N－8°－W	石臼片
			舟底形					
D 242	151	し・す－9	方　形	—	—	40.0	—	石臼片
			—					
D 243	304	し－9	—	126	—	27.0	—	内耳土器片、土師質土器片、擂鉢　1、鉄釘、角釘　1 礫は底面より浮いた状態で検出される。
			逆台形					
D 244	305	し－9	不整形	152	116	41.0	N	土師質土器小皿　1 北半部は、テラス状を呈する。
			逆台形					
D 245	306	し－8	不整円形	68	56	25.0	N－22°－E	
			逆台形					
D 246	307	し－8	円　形	90	72	19.0	N－54°－E	
			舟底形					
D 247	308	し－8	楕円形	150	107	31.0	N	内耳土器片、土師質土器片、粉挽き臼下臼　2、搗き臼　1、 石臼片　礫を含む。
			舟底形					
D 248	309	す－9	楕円形	60	—	19.0	N－27°－W	
			逆台形					
D 249	310	う－11・12	円　形	60	50	47.0	N－13°－E	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片
			逆台形					
D 250	311	え－6	楕円形	252	215	40.0	N－67°－W	土師質土器片、獣骨 礫を含む。
			逆台形					
D 251	312	え－6	楕円形	90	77	14.0	N－14°－E	
			逆台形					
D 252	313	う－7	不整形	274	184	21.0	N－66°－W	内耳土器片、土師質土器小皿片
			逆台形					
D 253	314	え－7・8	楕円形	197	139	21.0	N－74°－W	青磁碗(16Ｃ)　1、内耳土器片、土師質土器片、石臼片 石製紡錘車　2
			舟底形					
D 254	315	え・お－7	不整形	154	116	20.0	N－16°－E	五輪塔
			舟底形					
D 255	316	お－7	長楕円形	131	68	18.5	N－85°－W	凹石　1
			逆台形					
D 256	317	う－6	長方形	—	76	15.0	N－18°－E	
			逆台形					
D 257	318	え－7	隅丸方形	218	182	21.0	N－87°－W	搗き臼　1、石臼片
			逆台形					
D 258	319	さ－7	楕円形	140	113	23.0	N－31°－E	土師質土器片
			舟底形					
D 259	320	さ－7	方　形	153	124	41.5	N－67°－W	凹石　1、編物石　1、直方体石、不明石製品　1
			逆台形					
D 260	321	さ－7・8	不整長方形	195	139	29.5	N－61°－W	常滑甕片(14Ｃ)、土師質土器小皿　1、内耳土器片、土師質 土器片、擂鉢　1、石臼片、敲石台　1、砥石、不明石製品 北半部はテラス状を呈する。南壁際より角礫多量に検出さ れる。(石組み跡か？)
			逆台形					
D 261	322	さ－7	円　形	157	152	29.5	N－16°－E	東壁に石組みあり。
			逆台形					
D 262	323	し－7	円　形	124	113	34.0	N－18°－E	美濃灰釉小皿(16Ｃ前)　1、土師質土器小皿　1 内耳土器片、土師質土器片、石臼片
			逆台形					
D 263	324	え－5	円　形	113	96	18.0	N－50°－W	
			逆台形					

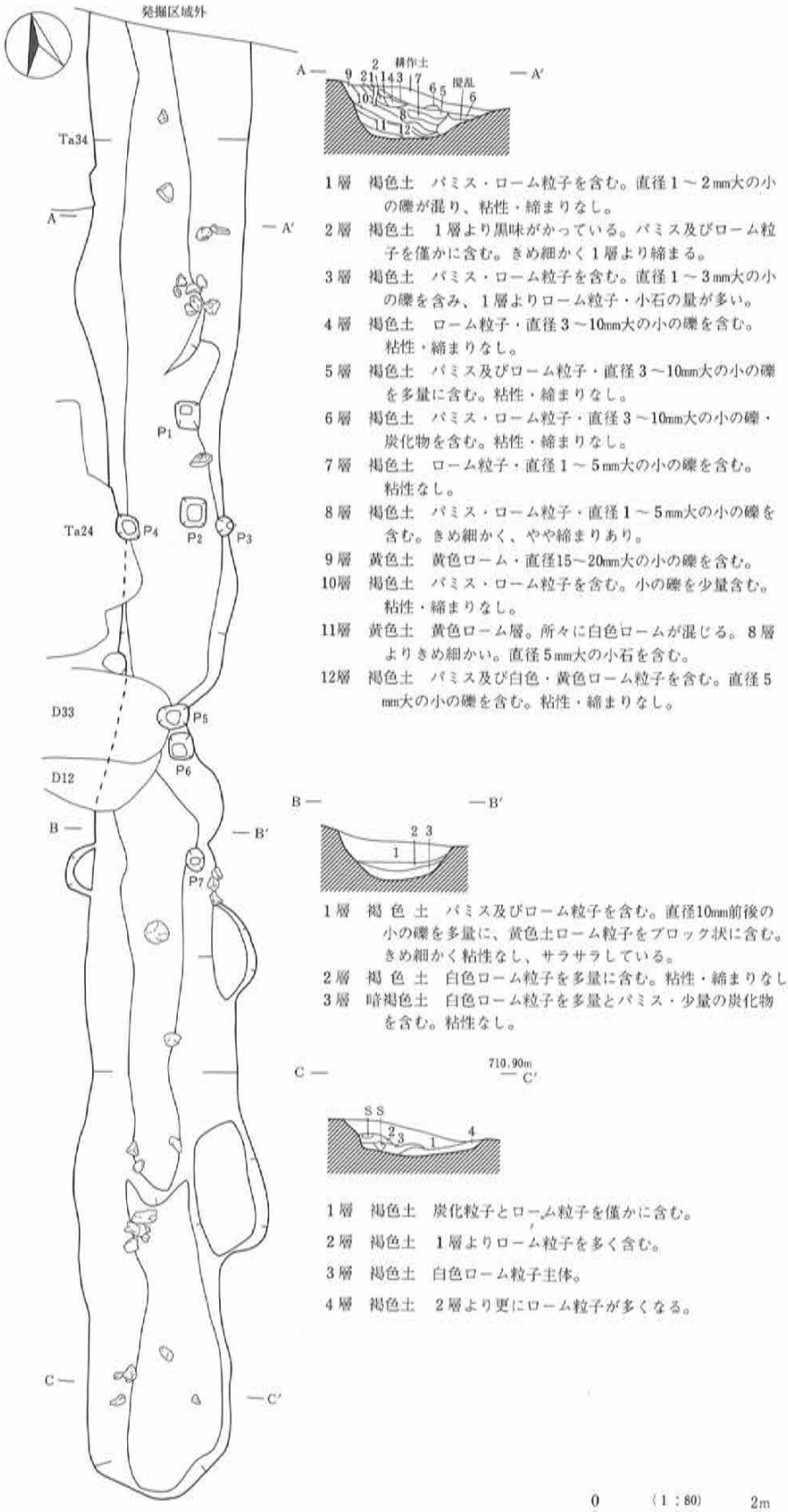
遺　構	挿図番号	検出区	平面形態 断面形状	規　模(cm) 長軸	短軸	深さ	長軸方向	備　考
D 264	325	さ－9	円　形 逆台形	104	96	27.0	N－77°－W	内耳土器片
D 265	326	さ・し－9	長楕円形 U字形	193	50	45.0	N	内耳土器片、土師質土器小皿片、粉挽き臼上臼　1 粉挽き臼下臼　1、石臼片
D 266	327	え・お－6・7	楕円形 逆台形	－	113	21.0	N－12°－E	内耳土器片、土師質土器片 礫は底面より浮いた状態で検出される。
D 267	328	え－8	円　形 逆台形	180	155	30.0	N－44°－E	元祐通宝　1
D 268	329	う－8	円　形 舟底形	128	117	37.0	N－7°－W	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片、石臼片 礫を多量に含む。底面より浮いた状態で検出される。
D 269	330	か－8	楕円形 逆台形	233	143	72.0	N－15°－E	
D 270	331	う－8	－ 舟底形	－	92	28.0	－	内耳土器片 礫(主に角礫)を多量に含む。底面より浮いた状態で検出される。
D 271	332	う－8	楕円形 逆台形	134	109	39.5	N－87°－W	内耳土器片、土師質土器小皿片、熙寧元宝　1、不明貨幣　1
D 272	333	う－8	－ 逆台形	－	121	14.0	－	土師質土器小皿片
D 273	334	お－6	楕円形 舟底形	124	70	19.0	N－17°－E	内耳土器片
D 274	335	こ－6	円　形 逆台形	130	120	11.0	N－8°－E	内耳土器片
D 275	336	こ・さ－6	円　形 逆台形	156	154	14.0	N－36°－W	青磁碗(15C)　1、内耳土器片、土師質土器片
D 276	337	こ－6・7	不整円形 逆台形	111	108	40.0	N－56°－W	内耳土器片
D 277	338	う－10	楕円形 逆台形	124	91	15.0	N－87°－W	
D 278	339	す－7・8	楕円形 逆台形	114	87	18.0	N－14°－E	内耳土器片、粉挽き臼下臼　1、茶臼下臼　1、石臼片
D 279	340	さ－6	楕円形 逆台形	134	98	10.0	N－57°－W	
D 280	341	こ－6・7	円　形 逆台形	91	85	16.0	N－13°－E	礫を含む。
D 281	342	こ－7	円　形 逆台形	94	88	16.0	N－6°－E	内耳土器片、土師質土器小皿片、搗き臼　1、石臼片 礫を含む。
D 282	343	け－7	楕円形 逆台形	90	58	19.0	N－84°－W	
D 283	344	け－7	楕円形 舟底形	120	83	17.0	N－18°－E	
D 284	345	お－7	楕円形 舟底形	121	88	19.0	N－21°－W	礫は底面より浮いた状態で検出される。
D 285	346	こ－7・8	隅丸長方形 逆台形	－	102	26.5	N－69°－W	内耳土器片、石臼片、小柄　1
D 286	347	か－9	長方形 逆台形	243	91	95.0	N－24°－E	土師質土器小皿片、土師質土器片
D 287	348	き－4・5	方　形 逆台形	－	226	31.0	N－13°－E	
D 288	349	う－9	楕円形 逆台形	131	70	114.0	N－80°－W	土師質土器片、骨
D 289	151	し・す－9	長方形 －	－	－	33.0	－	
D 290	350	さ－7・8	不整方形 逆台形	140	132	30.0	N－75°－W	

4　溝状遺構

本城郭から溝状遺構は２基検出された。Ｍ１号溝状遺構は、城郭の東端お～け－１・２グリッドより検出され、南北に走っている。幅は最長で２ｍ、最短で１ｍ、深さは0.7mがもっとも深い。覆土は、耕作土下に10層まで分けられた。他の遺構と同様に地山の崩落流れ込みが激しい。溝の外側つまり、断崖寄りには円形・方形のピットが５個みられ、柵などの施設が想定される。



第351図　Ｍ２号溝状遺構実測図



1層　褐色土　パミス・ローム粒子を含む。直径１～２㎜大の小の礫が混り、粘性・締まりなし。
2層　褐色土　１層より黒味がかっている。パミス及びローム粒子を僅かに含む。きめ細かく１層より締まる。
3層　褐色土　パミス・ローム粒子を含む。直径１～３㎜大の小の礫を含み、１層よりローム粒子・小石の量が多い。
4層　褐色土　ローム粒子・直径３～10㎜大の小の礫を含む。粘性・締まりなし。
5層　褐色土　パミス及びローム粒子・直径３～10㎜大の小の礫を多量に含む。粘性・締まりなし。
6層　褐色土　パミス・ローム粒子・直径３～10㎜大の小の礫・炭化物を含む。粘性・締まりなし。
7層　褐色土　ローム粒子・直径１～５㎜大の小の礫を含む。粘性なし。
8層　褐色土　パミス・ローム粒子・直径１～５㎜大の小の礫を含む。きめ細かく、やや締まりあり。
9層　黄色土　黄色ローム・直径15～20㎜大の小の礫を含む。
10層　褐色土　パミス・ローム粒子を含む。小の礫を少量含む。粘性・締まりなし。
11層　黄色土　黄色ローム層。所々に白色ロームが混じる。８層よりきめ細かい。直径５㎜大の小石を含む。
12層　褐色土　パミス及び白色・黄色ローム粒子を含む。直径５㎜大の小の礫を含む。粘性・締まりなし。

1層　褐色土　パミス及びローム粒子を含む。直径10㎜前後の小の礫を多量に、黄色土ローム粒子をブロック状に含む。きめ細かく粘性なし、サラサラしている。
2層　褐色土　白色ローム粒子を多量に含む。粘性・締まりなし。
3層　暗褐色土　白色ローム粒子を多量とパミス・少量の炭化物を含む。粘性なし。

1層　褐色土　炭化粒子とローム粒子を僅かに含む。
2層　褐色土　１層よりローム粒子を多く含む。
3層　褐色土　白色ローム粒子主体。
4層　褐色土　２層より更にローム粒子が多くなる。

第352図　Ｍ１号溝状遺構実測図

第2節　中世の遺物

1．土師質土器小皿

本調査区遺構内、耕作土中からは多量の土師質土器小皿が出土した。完存品は少なく、破損品が主体を占めるが、その量は陶磁器、内耳土器等の他の種類に比べてもはるかに多い。土師質土器小皿も他の種別と同様、遺構との共伴性を首肯できるものはほとんどなく、大方が同時期に投棄されたものと理解される。出土した土師質土器のうち概ね形状を把握でき、図化し得たものは72点にのぼる。これらは、形態・法量などに差があり、分類することが可能である。

まず、以下に形態・法量を中心とした本調査区出土の土師質土器小皿の分類を行ったのち、分析を加えることにする。尚、ここで用いる土師質土器小皿とは、中世から近世にかけて日本の各地域で焼かれた、通称「かわらけ」と呼ばれる[註1]最も安価な素焼きの供膳形態（皿型）の土器に対して用いる。「かわらけ」に対する認識は研究者毎に異なり、古代平安時代の土師器から系統が連なると考えて土師器とする見解（小林[註2]　1977）や、形態的にも胎土・製作技法的にも土師器と素焼の土器とは異質であり、共伴遺物も違いをみせることから、「かわらけ」を土師器の系統から分離する見解[註3]（本沢　1983）など様々である。当佐久地域では、古代末期から中世に至る土器の編年研究は全く白紙の状態であり、前述した「かわらけ」の系統に対する検討などはなすすべもない。従って、ここではとりあえず土師質土器なる曖昧な名称を用いることにした訳である。

土師質土器小皿の分類

本調査で出土した小皿は、いずれもロクロ成形で回転糸切り痕を残し、丸底の手捏成形の小皿はなく、技法はおおむね共通する。また、ほとんどの底部から口辺下部にかけて、指か布で撫でられた擦痕が残る[註4]。

A型　口辺部が直線的に大きく開くか、口辺下部でやや丸味をもって開く。口辺端部は一様に短く、引き出されるように外反する。法量の相違から、大・中・小型の3タイプに細分できる。器肉はいずれも分厚い。

A_1　大型品　口径11.8～15.9cm、器高2.6～3.7cm　15点

A_2　中型品　口径9.0～11.5cm、器高2.0～3.3cm　17点

A_3　小型品　口径6.7～8.6cm、器高1.6～2.6cm　例外あり　27点

B型　いずれもロクロ成形で回転糸切り痕を残す、平底の小皿である。口辺部は内弯して開くが、A型ほど大きく開かない。法量の相違から4タイプに細分したが、分類の基準にまだ検討の余地がある。器肉はB_1・B_2・B_4は厚いが、B_3は薄く、11は特に薄く胎土も他と明らかに異なる。

B_1　大型品　口径12.6cm、器高2.1cm、口径に対して器高が低く偏平である。　1点

B_2　中型品　口径9.6～11.4cm、器高2.3～2.7cm、B_1に比べ器高が高い。　6点

B_3　小型品　口径8.3～9.8cm、器高1.8～2.1cm、器厚が薄い。　3点

B_4　小型品　口径8.8cm、器高3.5cm、口径に対し器高が極めて高い。　1点

C型　1点のみ。口辺部が内弯して大きく開いたのち、端部で強く外反する。胎土は他に比べ、細かく緻密で灰白色を呈する。B_3型の11の胎土と共通する。口径15.8cm、器高3.1cmを測る。

D型　1点のみ。口辺部に円形と考えられる焼成前の3孔を有する。器肉は厚い。

以上の如く、本調査区から出土した土師質土器小皿は、口縁端部が引き伸ばされるように外反する、共通の癖をもったA型が合計59点あり、全体の82%を占めることから、A型が当城郭で一般的に用いられた形態であったことが伺える。また、これらが大・中・小の3形態をもつことは、小皿の大きさに応じて用途に違いがあったことも想定できる。B_1・B_2は形態上の相違はあるものの、器肉の厚い点はA型と一致するところであり、同じ形式内における形態のバラエティーと考えておきたい。B_3の2・15についても、A_3の55などの器肉がやや薄いものと

類似する形態を示すことから、B_1・B_2と同様の理解を与えておきたい。すなわち、A型及びB型のB_1・B_2・B_3の7・15については、ほぼ同じ時期に同じ場所で製作されたものと考えられる。これらは、個体毎に若干の相違はみられるが、大方がきめの粗い胎土を有し、在地性の強い製品であることからも裏づけられよう。胎土の面からみれば、B_4やDもこれらに含められる。但し、B_4については、用途の基本的な相違も考えられ、後述する香炉型製品362—90・91との関連も考えられよう。これらと全く異なるのが、CとB₃の11である。胎土は他に比べ緻密で灰白色を呈する。これらは一見して在地性の強い他の胎土とは、見分けることができる。当時、赤かわらけに比べて高価であったと伝えられる白かわらけ[註5]とも考えられる。いずれにせよ、C・B₃の11ともに、在地性の強い他の小皿とは別目的で購入されたものとし、他形式と同時期に使用されていたと考えておきたい。

以上のことから、第353図に掲示した土師質土器小皿を同一型式と考え、年代的位置づけを行うことにする。本調査区からは、土師質土器小皿とともに中国産磁器、国産陶器が多量に出土した。これらは、土師質土器との一括性が肯定できるものと考えられ、陶磁器の年代を土師質土器小皿の時間位置付けに対する一応の目安とすることができる。但し、中国産磁器は国産陶器の年代のピークに比べると一世紀程古い状況を示しているため、国産陶器の年代から土師質土器小皿の年代を推定することにする。国産陶器は常滑・中津川・美濃・瀬戸・備前系の製品がみられ、年代は16世紀の製品が最も多く、他を圧倒する。次いで、15世紀、14世紀の順序で出土しているが、量は少ない。以上の国産陶器のあり方から、土師質土器小皿の年代は、16世紀代と推定される。

他地域との比較

本調査区出土の土師質土器小皿の年代を16世紀に位置づけたが、佐久地方では比較的資料に恵まれない。本年3月調査中の佐久市安原下川原・光明寺遺跡において、寺社に関すると考えられる遺構から、多量の土師質土器小皿が出土している。これらは、出土陶磁器から15世紀以前の年代を考えられそうであるが、資料化されていないため、本資料との詳細な比較はできない。但し、大小2タイプあり、本遺跡資料よりも薄手のつくりであることから、本資料よりも若干先行する形式と考えて良いかもしれない。いずれにしても佐久地方では大井城跡出土資料の位置づけを検証する材料に乏しい。そこで、地方差が激しく、遠隔地との比較は困難という指摘が常々なされている[註6]のを承知の上で、編年が整備された鎌倉[註7]（服部　1984）との比較を行っておきたい。大井城出土の土師質土器小皿が、器肉の著しく厚いものが主体を占めることは前述したとおりであるが、このような器肉の厚い「かわらけ」は、鎌倉では、服部氏の編年のVI期（15世紀後半～16世紀代）に出現する。また器形は、若干の異なりをもつが、服部氏分類のVI期のII群Aが本資料のA_1、II群BがA_2、II群CがA_3、III群BがB_2と共通するように思われる。つまり、年代観及び形態上の特徴において、両者は一致を見ている部分が多いわけである。

以上、漠然とではあるが、大井城跡の土師質土器小皿の年代が16世紀代であることがわかってきた。今後はこれを土台として、地域内における資料を用いて比較検討し、編年を組みたててゆく必要があろう。

註1　大橋康二　1979　「中世における赤土器・白土器考」『白水』No.7

註2　小林秀夫　1977　「御社宮司遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——茅野市その5——』

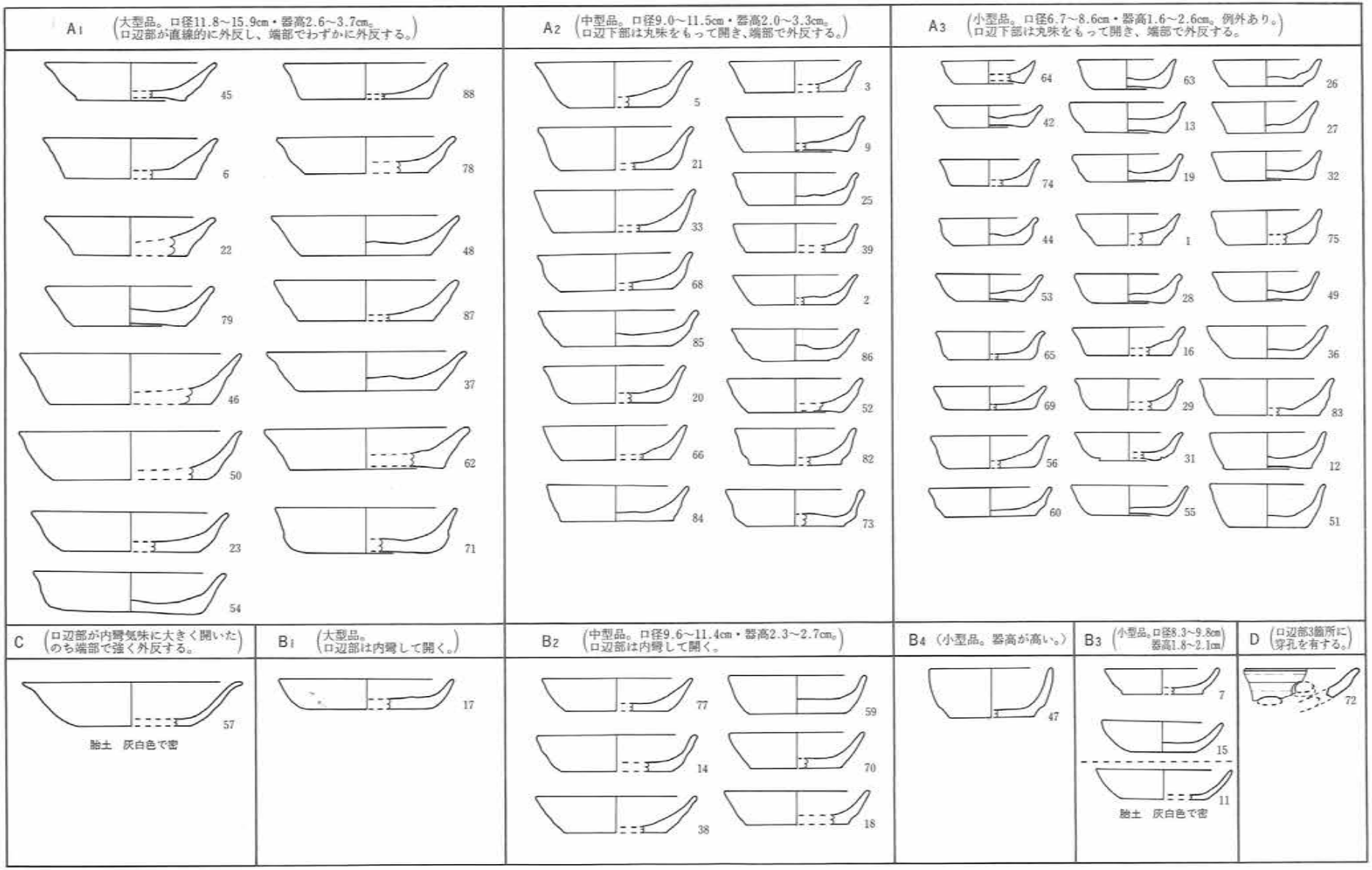
註3　本沢慎輔　1978　『柳ヶ御所跡発掘調査報告書』平泉町教育委員会

註4　通常、スノコ痕と呼ばれるようであるが、本資料の場合、どうしても木目とはみられないため、このような表現をした。

註5　前掲註1

註6　柳谷　博　1984　『本町小学校遺跡』小田原市教育委員会

註7　服部実喜　1984　「中世都市鎌倉における出土かわらけの編年的位置について」『神奈川考古第19号』



第353図　大井城跡出土土師質土器小皿分類図

2．内耳土器

本調査区からは、遺構内・耕作土中より多量の内耳土器が出土した。これらはすべてが破損品である。これは当地方の中世代において、一般的な煮沸具として利用頻度の高かった内耳土器の性格を考えれば、当然のことと言える。多量に出土した内耳土器のうち、辛うじて図上で復原されたものは総数で12点のみであるが、形態の特徴からみて大区分で二形態、小区分で三形態に分類することが可能である。これは、茅野市御社宮司遺跡の報告（1977）において小林秀夫氏によってなされた内耳土器の鍋型（A型）の分類とおおむね対応できるものと考えられる。従ってここでは、小林氏の分類及び編年観を軸に、本調査で伴出した陶磁器等の年代も勘案して、本調査区出土の内耳土器に対して検討を加えることとする。尚、ここで用いる内耳土器とは、口縁部付近の内側に橋状の把手を有する器で瓦質のものに対して用いる(註1)。また、小林氏の分類による、浅鉢型（B型）は本調査では、全くみられず、C型（ほうろく型）についても、AIII型と明確に分離されるものがみられないため、ここでは検討を加えることができない。

小林氏の鍋型（A型）に関する3分類の基準（Ⅰ～III）は以下の通りである。（全文報告書より転載(註2)）

AⅠ型　「く」の字状に屈曲しながら外反する口縁部で、口縁部内側にも稜を残す特色がある。ロクロ成形で、口縁部内外面はロクロ成形痕が顕著である。胴部は成形後、刷毛状工具による縦方向のナデ調整が行われている。耳の接合されている資料はない。外面には煤が付着している。器厚は、0.8～1.2cmと薄く、特に底面は薄く調整されている。口径は35.0～32.0cm、器高28.8～26.8cmである。

AII型　AⅠ型に比べると、口縁部の外反が小さく直立気味で、肩部に小さな稜を残している。成形・整形ともにAⅠ型と同じである。耳部は1対で、縦位につけられ、口縁端部の数mm下からつけられているものと、口縁端部に連続してつけられるものの2通り存在するようであるが、後者の器形は明確でない。器厚はAⅠ型に比べると1.2～1.4cmと厚く、口径36.2～32.3cm、器高19.7cm前後、底径28.2～27.2cmである。

AIII型　口縁部は直立し、外反はなくなる。器高が低くなるのが特色である。成形はAⅠ・AII型と同様であるが、整形段階で、胴部に縦方向のナデ、底部下端部に刷毛状工具による横方向のナデ、耳部にヘラ状工具による縦方向のナデが行われている違いがある。口径31.0～30.5cm、器高16.0～14.5cmである。

小林氏はこれらの分類に基づいて、器形変遷の過程を伴出土器などから15世紀・16世紀代ととらえ、Ⅰ～VI期に分けて検討されている。それによると、AⅠ・AII型をⅠ～III期15世紀代、AIII型をIV・V期16世期代に比定している。また、AⅠ型の口縁部の外反傾向に注目し、14世紀代の鉄鍋にAⅠ型と類似する口縁部が外反する形態が認められることから、内耳土器鍋の口縁部の外反する器形は古い様相を示していることを裏付けられている。

以上のような分類基準に則って、本調査出土の内耳土器を当てはめてみよう。AⅠ型には355—4・5・6、356—7・10・11などの6点があてられよう。器高はいずれも不明であるが、口径は355—4・5・6、356—7・11が32.0～31.6cmを測り、御社宮司例とおおむね一致する。356—10は内側に稜を有するが、口径は28.8cmとやや小型である。御社宮司例には耳の付けられている資料はみられなかったが、本資料には耳のつけられたものが多いという差異もみられる。AII型には355—1・2があてられるが、口径は355—1が26.4cm、355—2が23.6cmと御社宮司例に比べはるかに小さい。AIII型には355—3、356—9の2例があり、口径はいずれも36.6cm、器高は355—3が14cm、356—9が16cmを測り、御社宮司例と大方の一致をみる。

以上のように、本調査で出土した内耳土器の鍋型のものは、法量に若干のバラエティーを含むものの、御社宮司の資料と大方が一致しており、三形態に分類することができた。小林氏はこの形態変化を時間差として把えたことは前述した如くであり、この年代観に従えば、大井城址出土の内耳土器は15～16世紀の年代幅をもつことになる。本調査で出土した遺物の大半が、一括投棄されてた破損品であり、各種別毎に相当の年代幅を有している

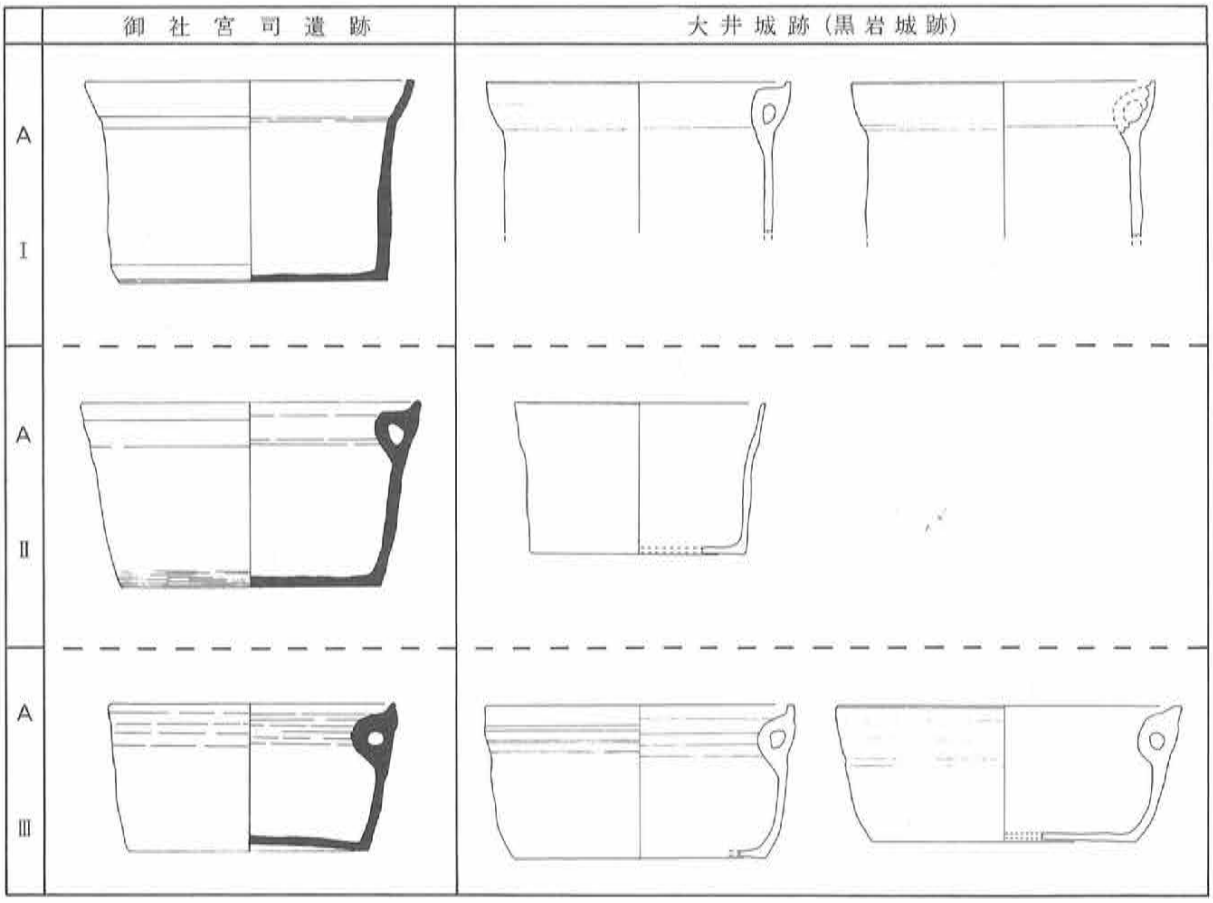
（例えば、中国磁器は13～16世紀、国産陶器は14～16世紀の年代幅をもつ）ことを考えれば、小林氏の分類規準に従って行った大井城の内耳土器鍋型の年代15～16世紀の変遷過程はおおむね肯定できるものと言える。但し、現段階では全く推測の域を脱しないが、本調査で出土した国産陶器は16世紀代の製品が圧倒的に多く、検出された遺構群もこれに近い時期に形成された可能性が強いことを考え合わせると、ＡⅠ・ＡⅡ・ＡⅢ型と分類したこれらの内耳土器も16世紀代に同時に共存していたことも考えられる。形態の相違を時間差としてとらえるか、同時期の同じ器種内におけるバラエティーとして把えるかは、今後の検討課題として提起しておきたい。いずれにせよ、本調査出土の内耳土器は15～16世紀の範疇でおさえられることはほぼ確実である。御社宮司報告でも小林氏が触れておられるが、中村倉司氏が1979年に発表された論文「内耳土器の編年とその問題」[註3]において行われた編年の中で、第Ⅰ期14世紀前に比定した長野県の資料は、大井城出土資料と同形態を有するものと考えられ、その年代観は大きな矛盾を内包しているように思われる。

362—93も、ほうろくと考えられる。焼成前に口縁部に孔を穿っており、鉄環を装着し、耳の代りとしている。器高が極めて低く、江戸時代でも末期のものと考えられる。

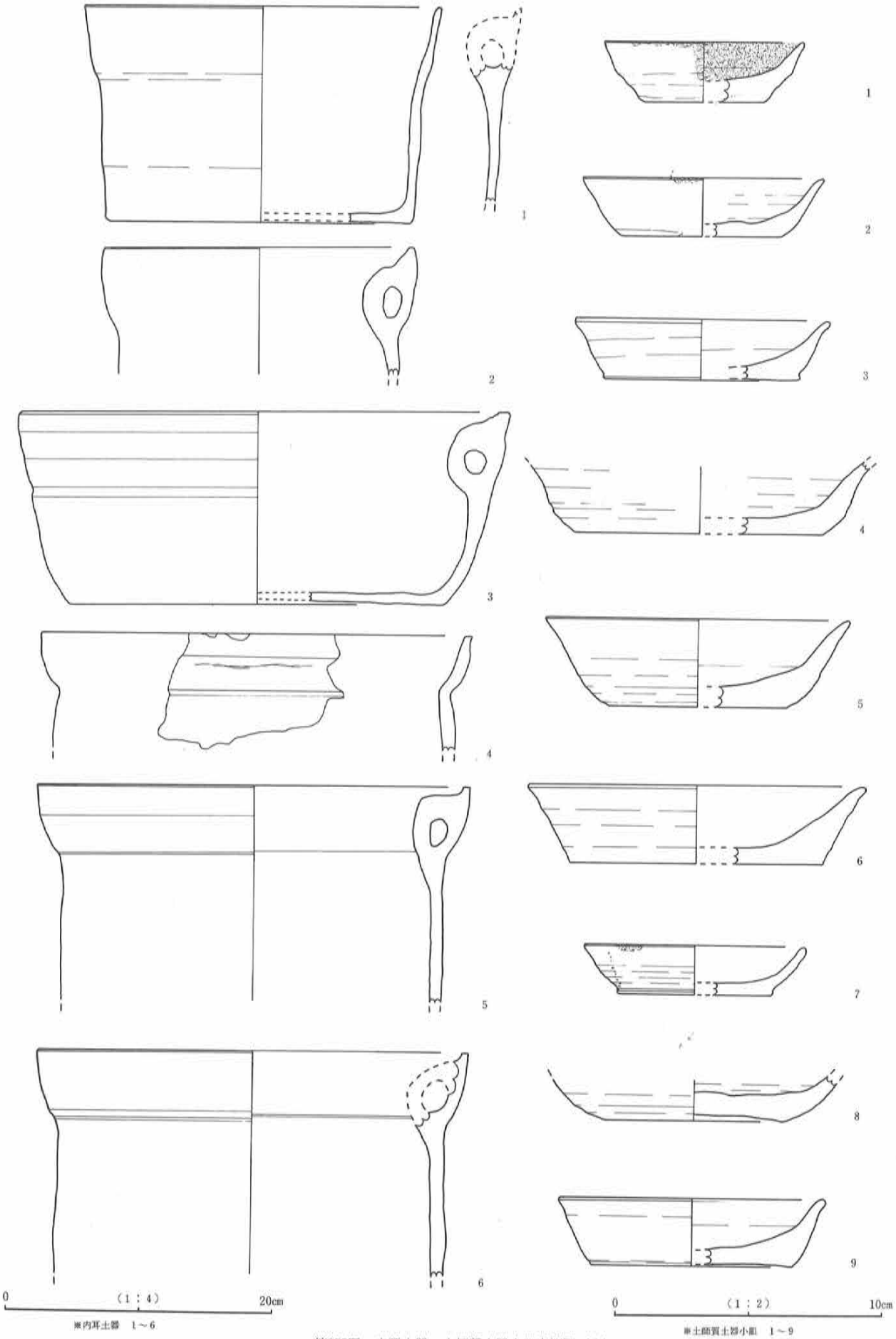
註1　中村倉司　1979　「内耳土器の編年とその問題」『土曜考古　創刊号』

註2　小林秀夫　1977　「御社宮司遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——茅野市その5——』

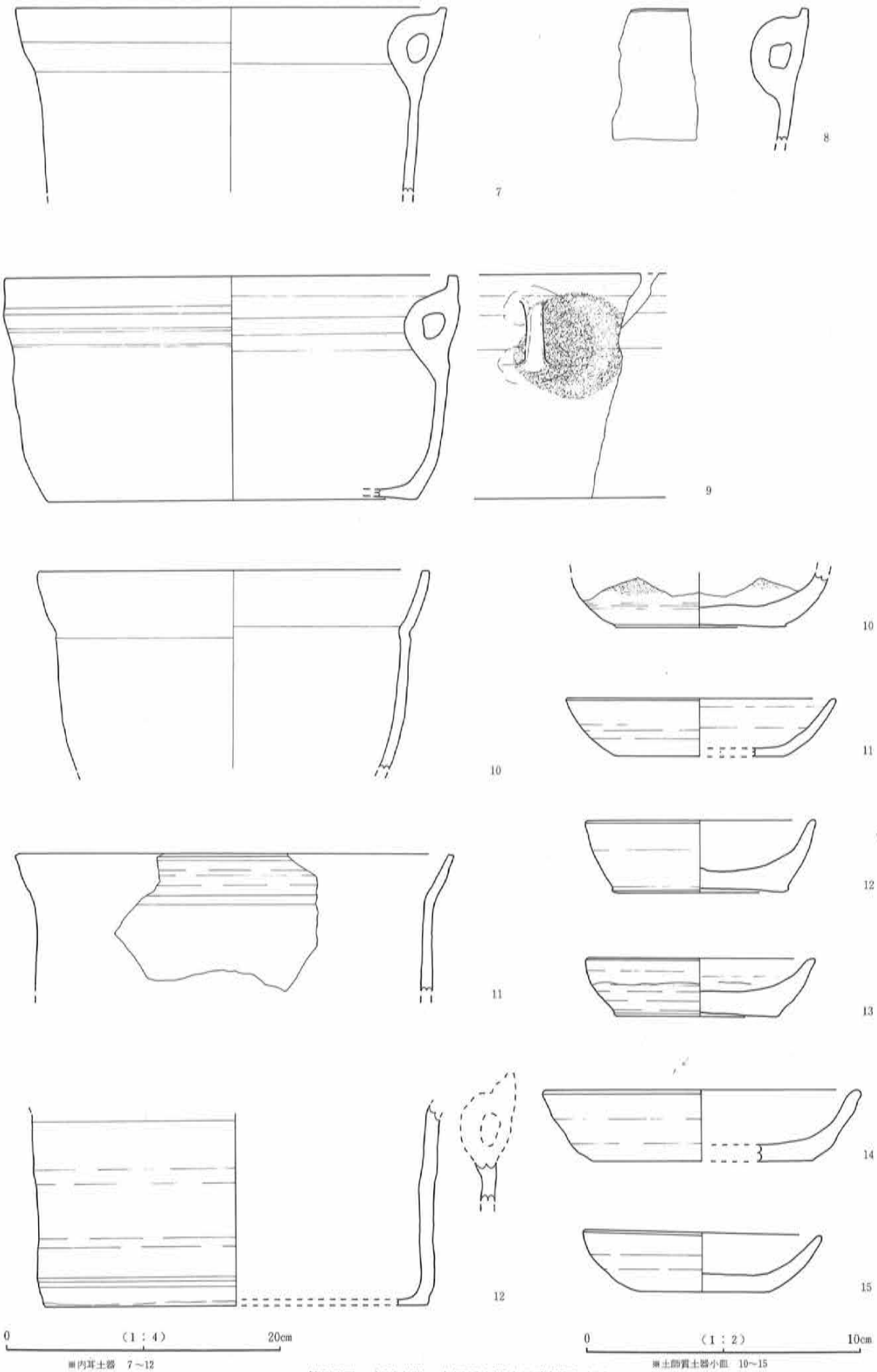
註3　前掲註1



第354図　御社宮司遺跡、大井城跡出土内耳土器の比較（1：8）

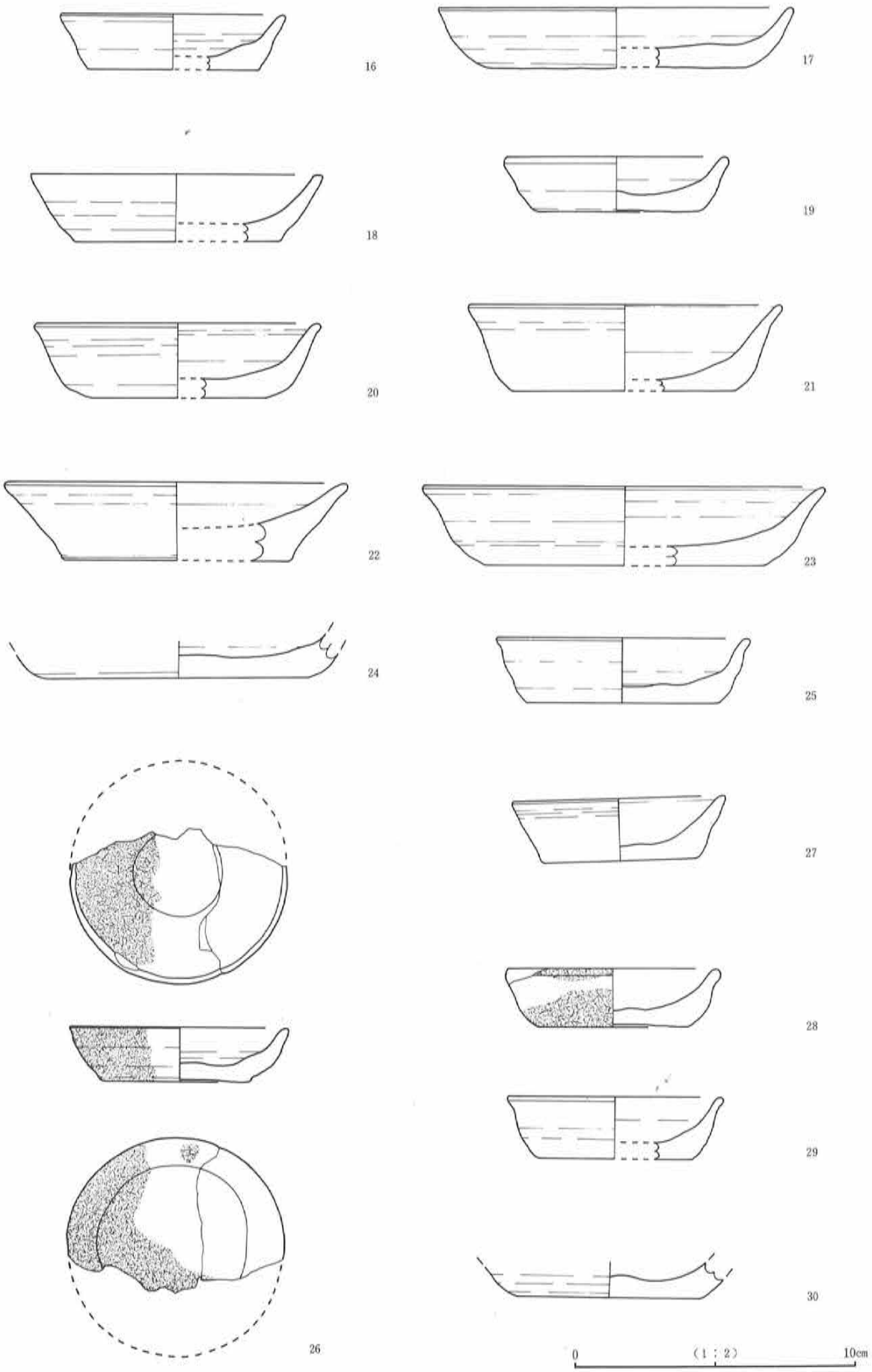


第355図　内耳土器・土師質土器小皿実測図〈1〉

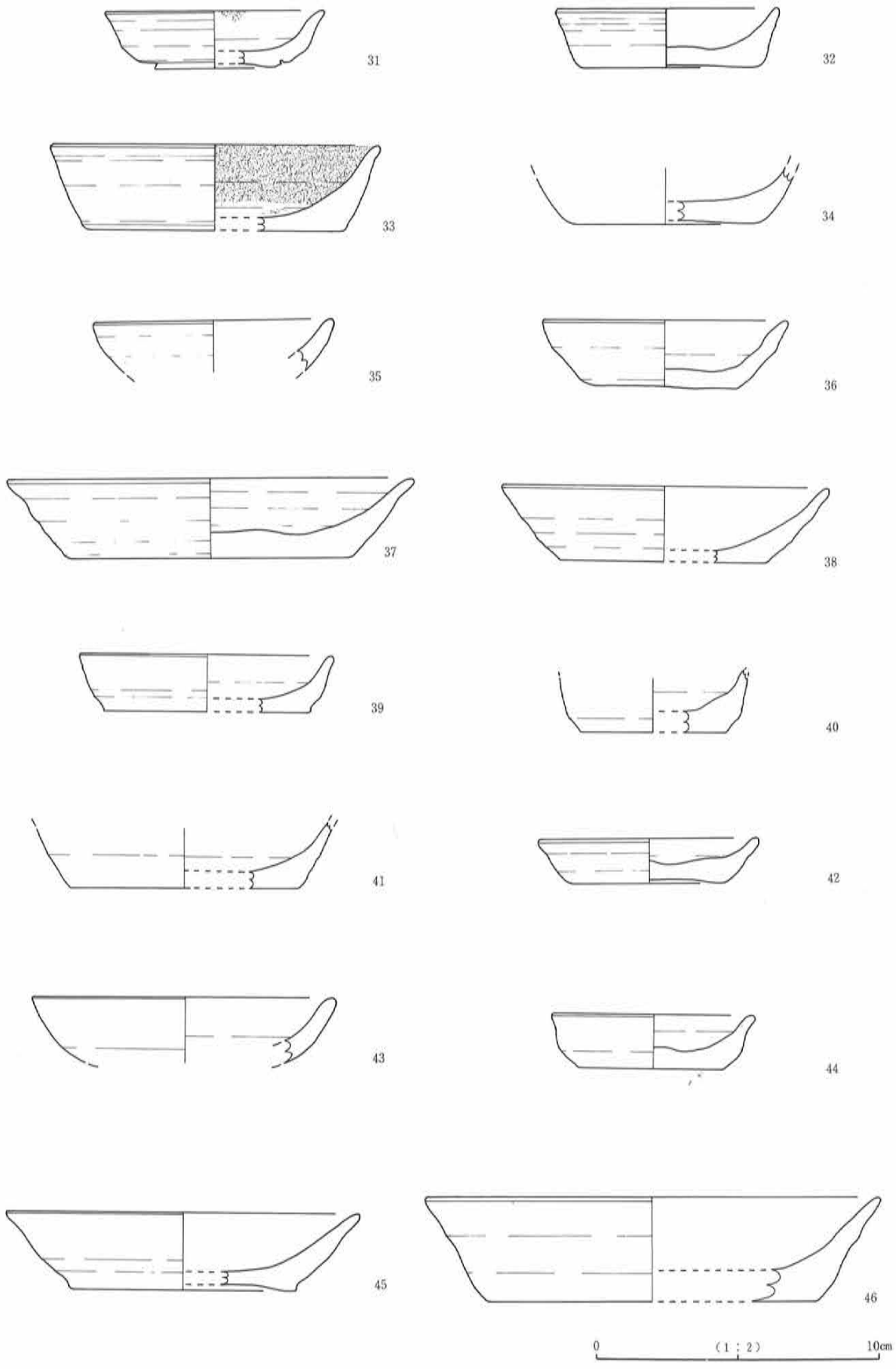


※内耳土器　7～12
※土師質土器小皿　10～15

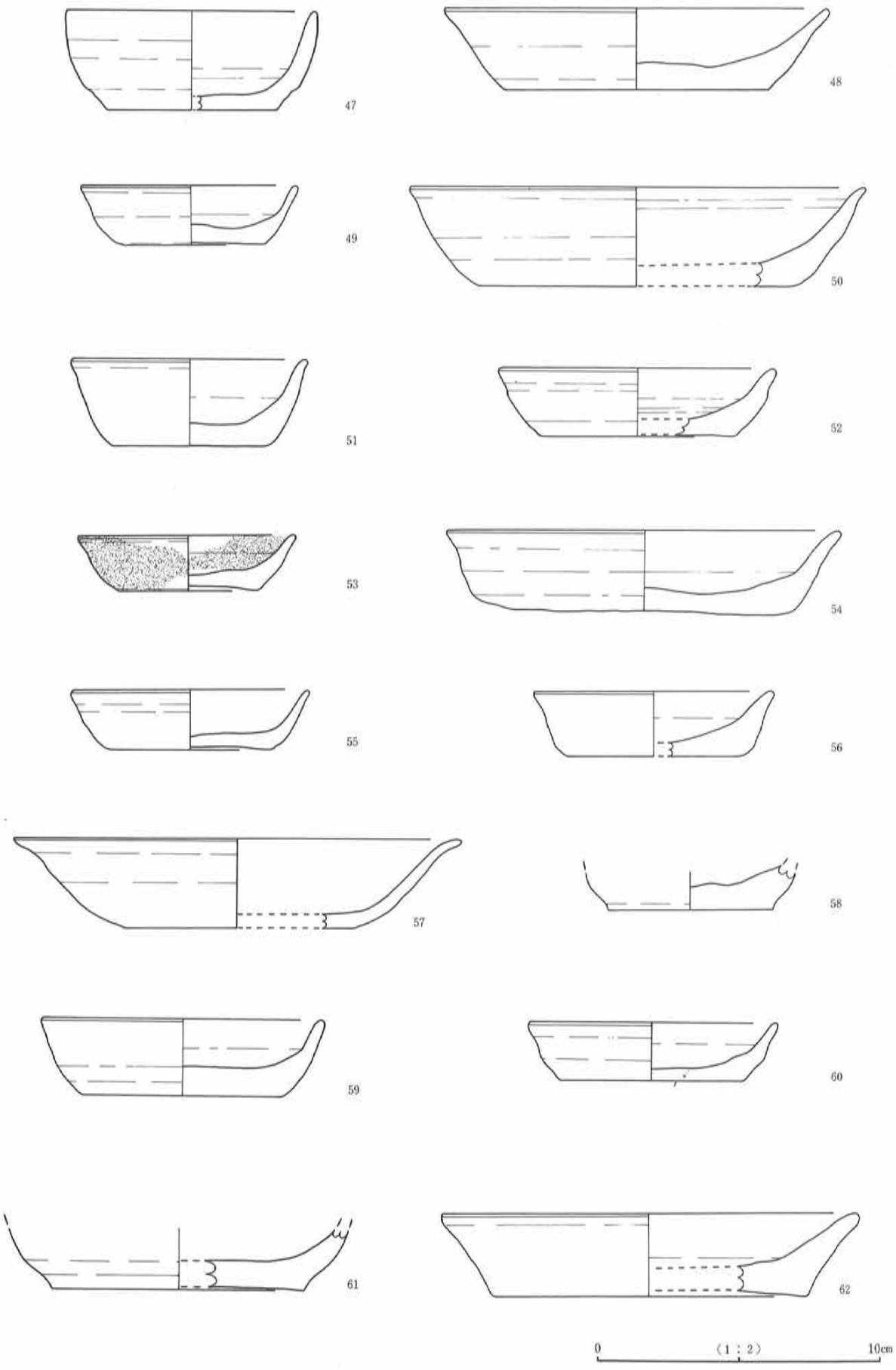
第356図　内耳土器・土師質土器小皿実測図〈2〉



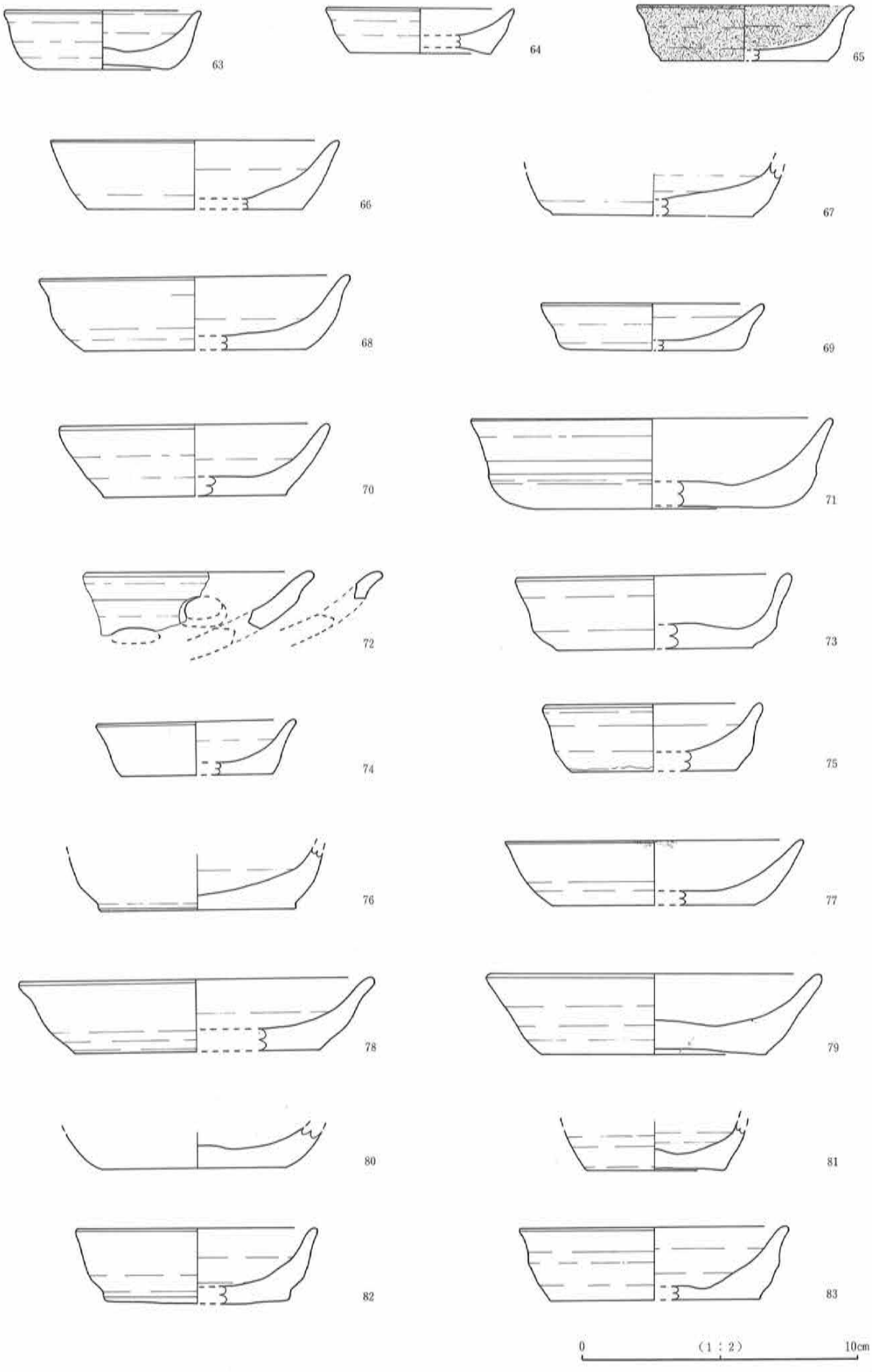
第357図　土師質土器小皿実測図〈3〉



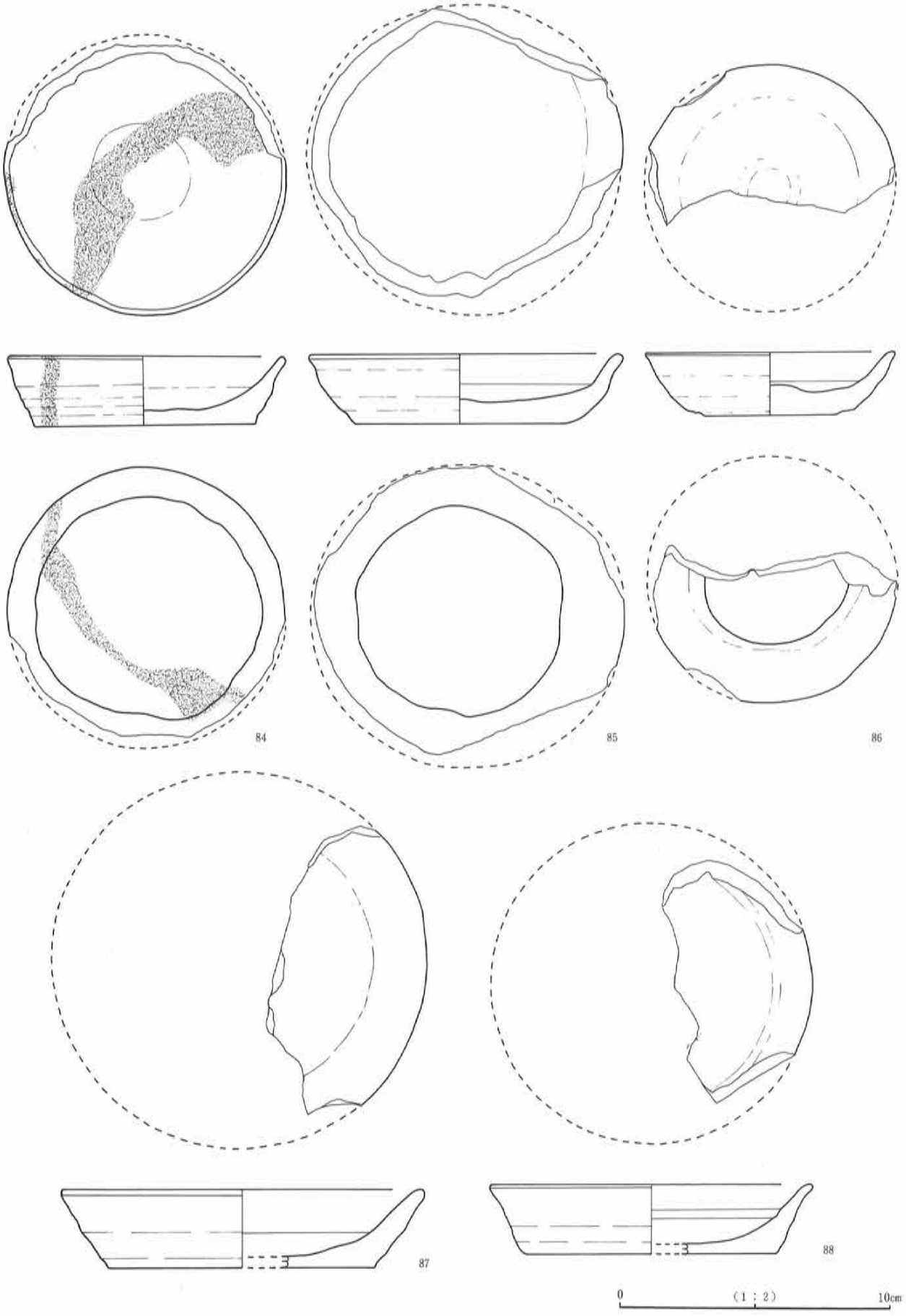
第358図　土師質土器小皿実測図〈４〉



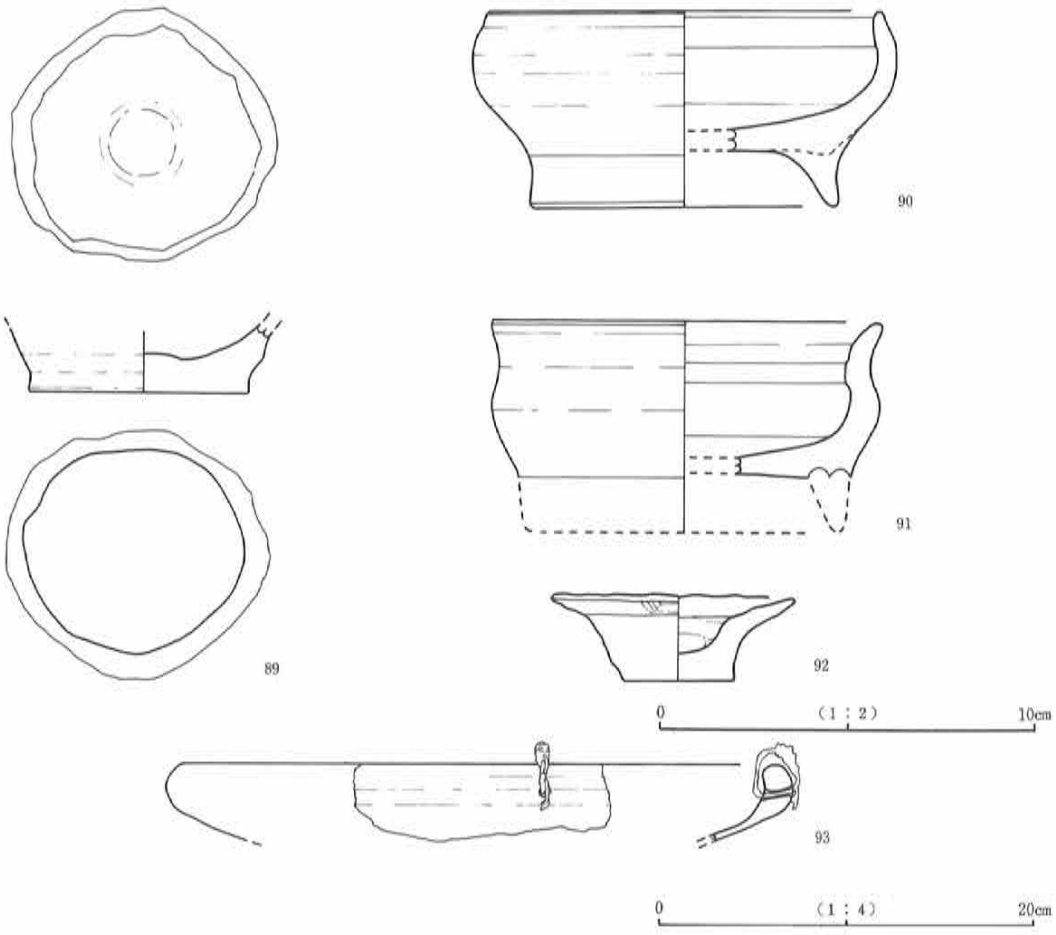
第359図　土師質土器小皿実測図〈5〉



第360図　土師質土器小皿実測図〈6〉



第361図　土師質土器小皿実測図〈7〉



第362図　土師質土器小皿・香炉等実測図〈８〉

第346表　土師質土器小皿一覧表〈1〉

挿図番号	遺構 検出地区 層位	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
355-1	Ta4 Ⅱ区 覆土	土師質土器小皿	(7.4) 2.2 (4.4)	短い口辺は、内湾気味に外傾する。	外面　口辺部ロクロヨコナデ 内面　黒色塗彩 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好 その他　内面に油煤の付着が著しい
355-2	Ta4 覆土 さ－6耕	土師質土器小皿	(9.0) 2.2 (5.8)	口辺はやや内湾気味に外傾し、端部でわずかに外反する。	外面　口辺部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/4 焼成　良好 その他　口縁部に煤付着
355-3	Ta8 Ⅰ区 覆土	土師質土器小皿	(9.4) 2.2 (7.2)	器高低く、短い口辺が内湾気味に外傾し、端部でわずかに外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/4 焼成　良好
355-4	Ta12 腐土	土師質土器小皿	－ 〈2.5〉 (9.5)	口辺部は、外反気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/4 焼成　良好
355-5	Ta12 覆土	土師質土器小皿	(11.4) 3.3 (6.6)	口辺は直線的に外傾し、端部でわずかに外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/1 焼成　良好
355-6	Ta18 覆土	土師質土器小皿	(12.6) 2.9 9.4	口辺は直線的に広く外傾し、端部は外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/2 焼成　良好
355-7	Ta19 覆土	土師質土器小皿	(8.3) 1.8 (5.8)	口辺は内湾気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/4 焼成　良好 その他　口辺部に油煤付着
355-8	Ta21 No.11	土師質土器小皿	－ 〈1.5〉 6.6	底部は上底気味。 口辺部は内湾気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/4 焼成　良好
355-9	Ta23 No.10 No.24	土師質土器小皿	(9.8) 2.5 (7.6)	口辺部は内湾気味に外傾し、端部でわずかに外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/4 焼成　良好
356-10	Ta23 No.17	土師質土器小皿	－ 〈2.0〉 (7.2)	器厚が薄めで、口辺は内湾気味に外傾すると思われる。	外面　ロクロ調整 内面　ロクロ調整 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好 その他　内外面に油煤付着
356-11	Ta25 覆土	土師質土器小皿	(9.8) 2.1 (6.0)	口辺は内湾気味に外傾する。 口辺天井部は平ら。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　白色を呈し、きめ細かい 色調　2.5Y8/2 焼成　良好
356-12	Ta26 1、Ⅲ、Ⅳ区 覆土	土師質土器小皿	8.2 2.6 (6.4)	口辺部は内湾気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ、ナデ 内面　ロクロヨコナデ、ナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
356-13	Ta28 No.11	土師質土器小皿	8.2 2.1 5.9	底部の器厚が大きく、 口辺部は短かく内湾気味に外傾する。 底部平底。	外面　ロクロヨコナデ、ナデ 内面　ロクロヨコナデ、ナデ 底部　回転糸切り	
356-14	Ta32 覆土	土師質土器小皿	(11.4) 2.6 (8.0)	器厚は薄め。口辺部は内湾気味に外傾し、上半部でやや肥厚する。	外面　ロクロヨコナデ、ナデ 内面　ロクロヨコナデ、ナデ	胎土　やや粗 色調　10YR8/2 焼成　良好
356-15	Ta32 No.1	土師質土器小皿	8.6 2.2 4.8	器高は低く、口辺部は内湾気味に外傾する。	外面　ロクロ成形 内面　ロクロ成形 底部　回転横切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/4 焼成　良好
357-16	Ta35 覆土	土師質土器小皿	(8.0) 1.95 8.0	器高は低く、短い口辺部が内湾気味に外傾し、端部でわずかに外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内部　ロクロヨコナデ 底部　糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/4 焼成　良好

第347表　土師質土器小皿一覧表〈2〉

挿図番号	遺構 検出地区 層位	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
357-17	Ta36 No.6	土師質土器小皿	(12.6) 〈2.1〉 (9.0)	口辺はやや内湾気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土　やや粗 色調　5YR8/4 焼成　良好
357-18	Ta36 覆土内	土師質土器小皿	(10.4) 〈2.4〉 〈7.2〉	口辺はやや内湾気味に外傾する。 口辺端部面取りが施される？	外面　ロクロヨコナデ 内面　剝離著しくよくわからないが、残存部分から判断するとロクロヨコナデ。	胎土　やや粗 色調　10YR8/4 焼成　良好 その他　口辺部は煤付着
357-19	Ta39 I区 覆土	土師質土器小皿	7.8 2.0 5.0	口辺部は直線的に短く外傾する。 全体に厚い器形。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/4 焼成　良好
357-20	Ta39 I区 覆土	土師質土器小皿	(10.0) 2.7 (6.2)	口辺部は内湾気味に外傾し、口辺端部で短く外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
357-21	Ta40 覆土	土師質土器小皿	(11.1) 3.1 (8.0)	器高はやや深く、口辺部は内湾気味に外傾し、端部でわずかに外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　7.5YR8/6 焼成　良好
357-22	Ta40 覆土	土師質土器小皿	(12.0) 2.8 (8.0)	口辺は直線的に広く外傾し、端部でわずかに外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/2 焼成　良好
357-23	Ta17 覆土	土師質土器小皿	14.0 2.8 10.0	口辺部内湾気味に外傾し、端部でわずかに外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　7.5YR8/4 焼成　良好
357-24	Ta42 II区 覆土	土師質土器小皿	— 〈1.5〉 (9.3)		外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
357-25	Ta44 覆土	土師質土器小皿	(9.0) 2.3 (6.8)	器高低く、短い口辺が内湾気味に外傾し、口辺部でやや外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR7/2 焼成　良好
357-26	Ta43	土師質土器小皿	(7.8) 1.9 (5.3)	口辺は、内湾して外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	色調　10YR8/2 焼成　良好 その他　内外面とも煤付着
357-27	Ta49 覆土	土師質土器小皿	(7.5) 2.2 5.4	口辺部は短く、直線的に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
357-28	Ta49 覆土	土師質土器小皿	(7.4) 2.05 (5.4)	口辺部は内湾気味に外傾し、端部でわずかに外反する。	内外面　摩滅著しく調整不明だが、底部に回転糸切痕が認められ、ロクロヨコナデ調整によるものと考えられる。	胎土　粗 色調　10YR8/2 焼成　良 その他　外面に煤付着
357-29	H13 II区 覆土	土師質土器小皿	〈7.8〉 2.2 〈5.4〉	器高低く、短い口辺が内湾気味に外傾し、口唇部で外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
357-30	表採	土師質土器小皿	— 〈1.0〉 6.6		外部　底部糸切り 体部ロクロヨコナデ	胎土　きめ細かい 焼成　良好
358-31	D11 No.2	土師質土器小皿	(7.6) 2.0 (4.0)	口辺は内湾気味に外傾し、端部でわずかに外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り（途中で乱れが見られる）	胎土　やや粗 色調　10YR8/4 焼成　良好 その他　内面口唇部に煤付着
358-32	D11 No.4	土師質土器小皿	7.7 2.1 6.3	口辺部は外反気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/4 焼成　良好

第348表　土師質土器小皿一覧表〈3〉

挿図番号	遺構検出地区層位	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
358-33	D13 No.1	土師質土器小皿	(11.0) 3.0 (9.0)	口辺内湾気味に外傾し、端部でわずかに外反する。 器厚。口縁・底部中央が薄くなっている。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/4 焼成　良好 その他　内面に油煤付着
358-34	D13 覆土	土師質土器小皿	— 〈1.9〉 (6.4)	口辺内湾気味に上がると思われる。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR7/2 焼成　良好
358-35	D25 覆土	土師質土器小皿	(8.4) 〈1.8〉 —	口辺部は内湾気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土　やや粗 色調　10YR8/2 焼成　良好
358-36	D31 覆土	土師質土器小皿	8.6 2.3 5.0	口辺はやや内湾気味に外傾し、端部でわずかに外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 焼成　良好
358-37	D36 覆土	土師質土器小皿	(14.3) 2.8 (10.0)	口辺部は直線的に広く外傾し、端部で外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
358-38	D50 覆土	土師質土器小皿	(11.4) 2.6 (7.2)	口辺部は内湾気味に広く外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好 その他　煤付着
358-39	D50 覆土	土師質土器小皿	(9.0) 2.0 (7.2)	器高低く、口辺部は内湾気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/2 焼成　良好
358-40	D61 覆土	土師質土器小皿	— 〈2.2〉 (5.1)	口辺部は内湾気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　2.5YR6/1 焼成　良好
358-41	D61 覆土	土師質土器小皿	— 〈2.4〉 (8.0)	口辺部は内湾気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR6/1 焼成　良好
358-42	D68 覆土	土師質土器小皿	(7.6) 1.55 (5.4)	口辺部は直線的に外傾する。 底部は多少上底気味。 器高が極めて低く小型。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/2 焼成　良好
358-43	D74 覆土	土師質土器小皿	(10.8) 〈2.3〉 —	口辺部はやや内湾気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
358-44	D74 No.1	土師質土器小皿	7.2 1.9 5.1	口辺は内湾気味に外傾し、端部で外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/2 焼成　良好
358-45	D84 覆土	土師質土器小皿	(12.4) 2.7 (7.9)	口辺部は直線的に広く外傾する。 底部上底。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
358-46	D84 覆土	土師質土器小皿	(15.8) 3.65 (11.5)	口辺部は直線的に広く外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　2.5Y8/2 焼成　良好
359-47	D136 覆土	土師質土器小皿	(8.8) 3.5 (6.0)	口辺部は内湾して外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
359-48	D140 覆土	土師質土器小皿	(13.6) 2.85 (9.2)	口辺部は直線的に外傾し、端部でわずかに外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好

第349表　土師質土器小皿一覧表〈4〉

挿図番号	遺構 検出地区 層位	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
359-49	D115 覆土	土師質土器小皿	7.6 2.1 5.0	口辺部は内湾気味に立ち上がる。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR7/4 焼成　良好
359-50	D125 覆土	土師質土器小皿	(15.9) 3.5 (11.0)	口辺部は外傾し、端部で外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
359-51	D125 覆土	土師質土器小皿	(8.2) 3.1 (5.4)	器高が深く、口辺部は内湾気味で端部で外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　2.5YR5/8 焼成　良好
359-52	D150 No.2	土師質土器小皿	(9.6) 2.4 (6.8)	口辺部は内湾気味に外傾し、端部で外反する。	外面　ロクロ成形 内面　ロクロ成形 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　2.5YR7/2 焼成　良好
359-53	D185 No.2	土師質土器小皿	7.6 1.95 4.9	口辺部は内湾気味で端部で外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　2.5Y8/2 焼成　良好 その他　内外面に煤付着著しい
359-54	D186 No.1	土師質土器小皿	(13.6) 2.8 (11.3)	口辺部は外反気味に外傾する。底部は広い。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/4 焼成　二次焼成痕
359-55	D188 No.1	土師質土器小皿	(8.2) 2.1 (5.6)	器厚は薄く、口辺部は内湾気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR7/3 焼成　良好 その他　内外面所々に剥落
359-56	D191 覆土	土師質土器小皿	(8.4) 2.3 (6.0)	口辺部は短かく直線的に外傾して、端部でわずかに外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/1 焼成　良好
359-57	D192 覆土	土師質土器小皿	(15.8) 3.1 (8.0)	口辺部は内湾して広く外傾し、口唇部で外反する。全体的に肉薄。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土　きめ細かい 色調　2.5Y8/2 焼成　良好
359-58	D232 覆土	土師質土器小皿	— 〈1.7〉 (5.8)	口辺部は内湾気味と考えられる。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　砂粒わずかに混入 鉄分極めて少ない 色調　10YR8/2 焼成　良好
359-59	D260 覆土	土師質土器小皿	(9.8) 2.7 (6.9)	口辺部はやや内湾気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　きめ細かい 焼成　良好
359-60	D262	土師質土器小皿	(8.6) 2.05 (6.4)	口辺部は内湾気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	色調　10YR8/2 焼成　良好
359-61	う－9 耕作土	土師質土器小皿	— 〈2.1〉 (8.9)	口辺部は内湾気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　7.5YR8/4 焼成　良好
359-62	う－13 耕作土	土師質土器小皿	(14.6) 2.9 (11.2)	口辺部は外反気味に外傾する。(口辺部やや外反気味) 底部上底気味。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　2.5YR6/6 焼成　良好
360-63	い－10	土師質土器小皿	(7.0) 2.1 (4.8)	口辺部内湾気味に外傾する。 口唇部やや外反気味。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
360-64	い－12	土師質土器小皿	(6.7) 1.6 (5.1)	口辺部内湾気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　7.5YR8/4 焼成　良好

第350表　土師質土器小皿一覧表〈5〉

挿図番号	遺構 検出地区 層位	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
360-65	え－7	土師質土器小皿	(7.6) 2.0 (6.0)	口辺部は内湾し、端部で外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　粗 色調　3.5Y7/1 焼成　良好 その他　油煤付着（内外面）
360-66	え－10	土師質土器小皿	(10.4) 2.5 (7.8)	口辺部は内湾気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR7/2 焼成　良好
360-67	え－11	土師質土器小皿	－ 〈1.6〉 (7.2)	－	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　二次焼成
360-68	え－11	土師質土器小皿	(11.0) 2.6 (8.0)	口辺部は内湾気味に外傾し、端部で外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR7/1 焼成　二次焼成
360-69	お－10	土師質土器小皿	(8.0) 1.7 (6.4)	口辺部は直線的に外傾し外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　二次焼成
360-70	お－12	土師質土器小皿	(9.6) 2.6 (6.6)	口辺部は内湾気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
360-71	き－6	土師質土器小皿	(12.9) 3.2 (8.0)	口辺部は直線的に外傾する。 底部やや丸底。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/4 焼成　良好
360-72	き－7	？	－ － －	穿孔が2ヶ所にある。		胎土　やや粗 色調　10YR7/2 焼成　良好
360-73	く－3	土師質土器小皿	(9.8) 2.6 (7.0)	口辺部は内湾気味に外傾し、端部で外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
360-74	き・く－5	土師質土器小皿	(7.0) 1.9 (5.4)	口辺部は直線的にやや外反し、端部で外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　2.5YR6/8 焼成　良好
360-75	け－6	土師質土器小皿	(7.7) 2.4 (5.8)	口辺部は内湾気味に外傾する？	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
360-76	さ－9	土師質土器小皿	－ 〈2.0〉 (7.0)	－	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	
360-77	し－5	土師質土器小皿	(10.8) 2.3 (7.2)	口辺部は内湾気味に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　やや不良 その他　口唇部煤付着
360-78	表採	土師質土器小皿	(12.8) 2.6 (8.8)	口辺部は内湾気味、端部は外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
360-79	表採	土師質土器小皿	(12.2) 2.9 (8.0)	口辺部は直線的にやや内湾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR7/2 焼成　良好
360-80	表採	土師質土器小皿	－ 〈1.4〉 6.6	－	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR7/1 焼成　良好

第351表　土師質土器小皿一覧表〈6〉

挿図番号	遺構 検出地区 層位	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
360-81	表採	土師質土器小皿	— 〈1.7〉 5.0	—	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/4 焼成　良好
360-82	H15	土師質土器小皿	(8.6) 2.2 (6.6)	口辺部は内湾気味で端部は外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	
360-83	H15	土師質土器小皿	(9.6) 2.5 7.5	口辺部は内湾気味で端部は外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	
361-84	H8	土師質土器小皿	(10.0) 2.6 8.1	口辺部は直線的にやや内湾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好 その他　内外面煤付着
361-85	表採	土師質土器小皿	(11.5) 2.6 (7.6)	口辺部は内湾気味に外傾し、端部で外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/2 焼成　良好 その他　内外面煤付着
361-86	き－2	土師質土器小皿	(9.2) 2.3 (4.8)	口辺部は内湾気味に外傾し、端部で外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR7/2 焼成　良好
361-87	き－2	土師質土器小皿	(13.2) 2.9 (9.8)	口辺部は直線的に外傾する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	色調　暗褐色
361-88	し－8	土師質土器小皿	(11.8) 2.6 9.2	口辺部は外反する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/4 焼成　良好
362-89	表採	土師質土器小皿	— 〈1.8〉 5.8	—	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
362-90	表採	土師質土器小皿	— — —	口辺部は内湾し、内傾する。 3ヶ所に脚を有する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	
362-91	う－11	土師質土器小皿	(10.2) 〈4.2〉 (8.8)	口辺部は外反し、胴部は張る。 3ヶ所に脚を有する。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
362-92	Ta9 No.1	？	6.4 2.3 2.8	口辺部は強く外反する。	ヘラナデ	胎土　やや粗 色調　10YR8/3 焼成　良好
362-93	す－2	ほうろく	(31.2) 〈4.1〉 —	—		

表中における色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の新版標準土色帖に基づいて行った。

3　陶磁器

本調査区3,605㎡の区域内の遺構・耕作土から出土した陶磁器は、中国産（大方が龍泉窯製品と考えられる）磁器が52点、国産陶器が193点の計245点を数えるが、完存品は一点もなくすべてが破片である。このうち、近世18世紀の製品366—1・2・3（美濃片口鉢・灯明皿）及び美濃鉄釉土瓶の4点を除く241点が、中世13世紀～16世紀代の製品と考えられる。耕作土の除去は人力によるものであり、この際にエラーした陶磁器は極僅かと考えられるので、241点という数を城郭内における当エリアの陶磁器の総保有数と考えられても大過ない。そしてこの総数は決して多いものとは言えないようである。尚、以下に述べる陶磁器の系統・年代観は、赤羽一郎氏の御教示によるものであることを予めお断りしておく。

中国産磁器には青磁・白磁・青白磁・染付がある。青磁の器種には碗・皿がある。碗は13世紀代の製品が2点14世紀代の製品が15点、15世紀代の製品が14点、16世紀代の製品が2点あり、皿は15世紀代の製品が1点あり、14・15世紀代に、多くの製品が認められる。白磁の器種には皿・壺がある。皿は15世紀代の製品が3点、16世紀代の製品が8点あり、壺は14世紀代の製品が2点、15世紀代の製品が3点ある。青白磁は13世紀代の瓶子、染付は15世紀代の碗が各々1点のみみられ、染付の製品は、本調査ではこれ以外一点も検出されていない。このことから本城郭全体において、染付製品の保有率が極めて少なかったことが想起される。年代は13世紀代の製品は極少なく、14・15世紀代の製品でピークを迎え16世紀代ではやや減少する。器種には碗・皿・瓶子・壺がみられるが、碗・皿などの供膳具が全体の88％を占めており、中国産磁器の供膳具としての利用頻度が極めて高かったことを示している。図化できたものは364—1～9まで9点あり、青磁碗364—1～5のうち、364—2に蓮弁文、364—5に蓮弁文が施されている。364—6～9はすべて白磁皿の底部片で、16世紀代の製品である。

国産陶器は常滑系、中津川系、美濃系、瀬戸系、備前系等、5系統に渡る窯の製品がみられる。

常滑系製品の器種には甕がある。甕は14世紀代の製品が6点、15世紀代の製品が6点、16世紀前半の製品が70点あり、16世紀に入ると爆発的に増加する傾向が顕著である。また大型の破片が多く、363—1・2の2点が図化できた。363—1の口縁部は貼付による幅の広い口縁帯をもつ。口縁上端には接合による沈線帯がめぐっており、胴部は大きく脹らむ。363—2は363—1と同様貼付による幅広い口縁帯をもち、断面はN字状を呈する。胴部は363—1程大きくは脹らまないと考えられる。以上、常滑系製品の器種は甕のみに限られ、貯蔵用具としてのみ利用されたと理解される。

中津川窯系の製品の器種には甕・片口鉢がある。総破片数12点のみで、同じ貯蔵用具でも常滑系製品に比べると利用頻度が低い。年代は14世紀代に比定される。片口鉢は1点のみの出土で、年代はわからない。

美濃系製品には鉄釉が施釉される製品と灰釉が施釉される製品がある。

鉄釉が施釉される製品の器種には天目茶碗・折縁小皿・瓶・徳利・広口短頸壺・茶入れ・擂鉢などがある。天目茶碗はいずれも16世紀代に限定され、総数で32点と多量に出土している。図化できたものも365—1～5の計5点にのぼる。これに関連する製品として、茶入れ365—15が1点みられ、これも16世紀代の製品である。多量の天目茶碗と茶入れのような茶器の存在は、本調査で伴に多量に出土している茶臼とも強く関連するものであり、16世紀代に至って本城郭内において、茶の湯が流行していたことも十分想像できる。この他、内面にヒダ状の削りが入る折縁小皿365—13が1点、瓶が2点、徳利が3点、広口短頸壺が1点、外面に段を有して直角状に立ち上がる擂鉢363—3が1点出土している。擂鉢363—3の卸し目は不明である。以上美濃鉄釉陶器を概括すれば、擂鉢363—3のような実質的な調理用具＝生活用品は少なく、天目茶碗・茶入れ・徳利などに代表される嗜好目的の器が多い傾向がみられる。年代はすべてが16世紀代の製品である。

美濃灰釉製品の器種には碗・小皿・香炉がある。碗は16世紀前半代の製品が15点、16世紀後半代の製品が2点あり、圧倒的に16世紀前半が多い。16世紀前半の製品は365—6が図化された。小皿はいずれも16世紀前半代の製品であり、18点と量も多い。365—7～12が図化されており、365—7・8・9・12は断面三角形の小さな削り出

し高台、365—11は断面短形の小さな削り出し高台を有する。また365—12の内面中央には、菊花状の削り込みが施されている。香炉は1点のみで16世紀代の製品である。以上、美濃灰釉は、香炉のような嗜好目的の製品も僅かに認められるが、概して、碗・小皿などの供膳具が多い。但し、これらも多くは小型のものであり、その使用目的を単純に日常食器として良いものかと戸惑いを感じる。

瀬戸系の製品はいずれも灰釉が施釉される製品である。器種には折縁鉢・片口鉢・片口壺・瓶子・小鉢・卸し皿・三足盤などがある。折縁鉢は3点あり、いずれも15世紀後半の製品である。片口鉢は1点のみで14世紀前半の製品である。片口壺365—14は15世紀代、瓶子も15世紀代で、各々1点ずつ出土している。小鉢は3点、卸し皿は1点、三足盤は5点あり、これらはいずれも15世紀代の製品である。総じて瀬戸系製品は15点と少なく、時代性はおおむね15世紀に集約されるが、器種はバラエティーに富む。

備前系製品の器種には擂鉢があり、1点のみ出土している。

この他、14世紀代の山茶碗の破片も3点出土している。

これらをとりまとめると、本調査区出土の陶磁器には次のような傾向が指摘できる。

1．時代性は中国産磁器が14～15世紀にそのピークを迎えているのに対し、国産陶器は16世紀(特に前半代)に主体を占めていること。また、国産陶器の年代幅が14～16世紀であるのに対し、中国産磁器は13～16世紀と、より大きな年代幅をもつこと。
2．中国産磁器は供膳具としての役割がおおむね一致していること。
3．国産磁器の中で常滑系甕は実生活に密着した貯蔵具として位置づけられており、中津川系の甕は従属的であること。
4．美濃、瀬戸系の製品は器種構成がバラエティーに富み、概して小型品が多く、実生活に即した調理具は少なく、嗜好目的とした製品が多いこと。
5．総じて、調理具が少ないこと。(これは当時の一般集落では生活必需品と言われる程に当り前に出土するという捏鉢が出土していないことからも伺える。)また、陶磁器に限らず、土師質土器にも、石製品にも、調理具に該当する器種がほとんどみられないこと。

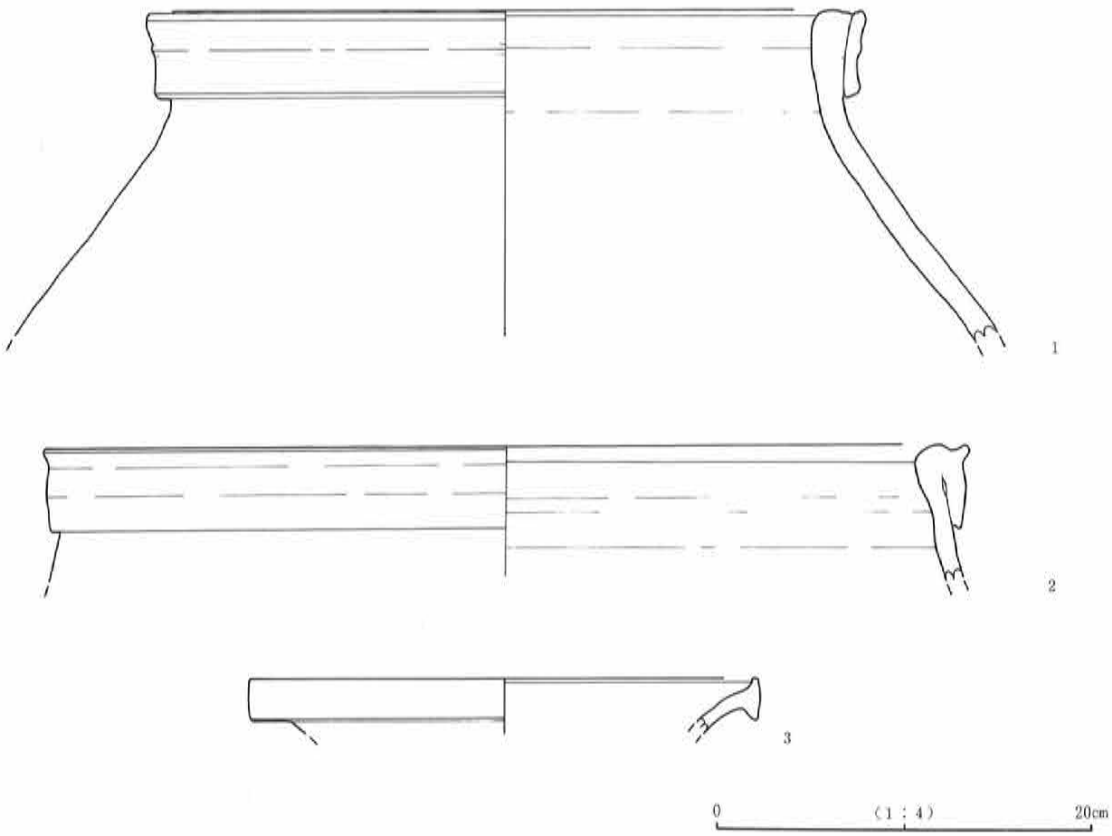
これらの傾向から、大井城跡の本調査地区における生活の実態を想像することも可能なのであろうが、筆者は力不足でその能力をもっていない。後日、再考したい。

4　瓦器

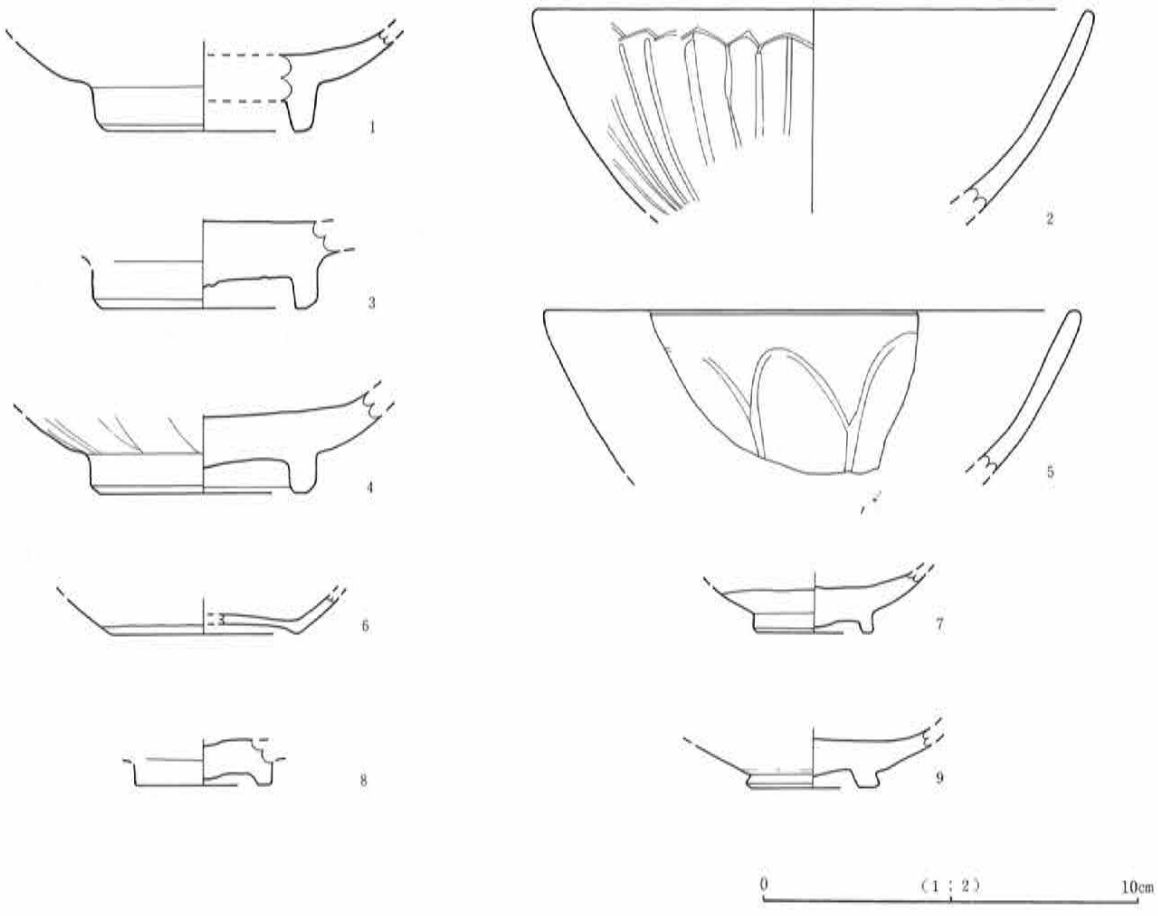
大井城跡（黒岩城跡）から出土した瓦器の器種には火鉢と考えられるものと、小型で用途が不明確なものがある。いずれも細片であるため、全形態は知り得ない。

火鉢と考えられるものには367—1・2がある。それぞれ口径41cm、37cmをはかる大型の製品で、平面形は円形を呈する。脚がつくかどうかは不明である。367—1は内面の口縁端部直下に断面「U」字状の突帯が廻っており、その直下にも上段のものよりは小型の突帯が廻っている。口縁部外面には一条の沈線がめぐり、体部はディンプル状の文様が施されている。367—2は口縁端部が平坦でやや肥厚している。外面上端に円形と七弁花状のスタンプ文を交互に廻らせている。367—1・2いずれの外面も黒色処理が施され、367—1の内面は2次焼成が著しい。

367—3・4は用途が不明確である。いずれも椀状の形態を呈しており、口径は367—3が21cm、367—4が11cmをはかる。367—3の口縁部には四菱状のスタンプ文、367—4の口縁部には菊花状のスタンプ文が廻っている。



第363図　常滑甕・美濃擂鉢実測図



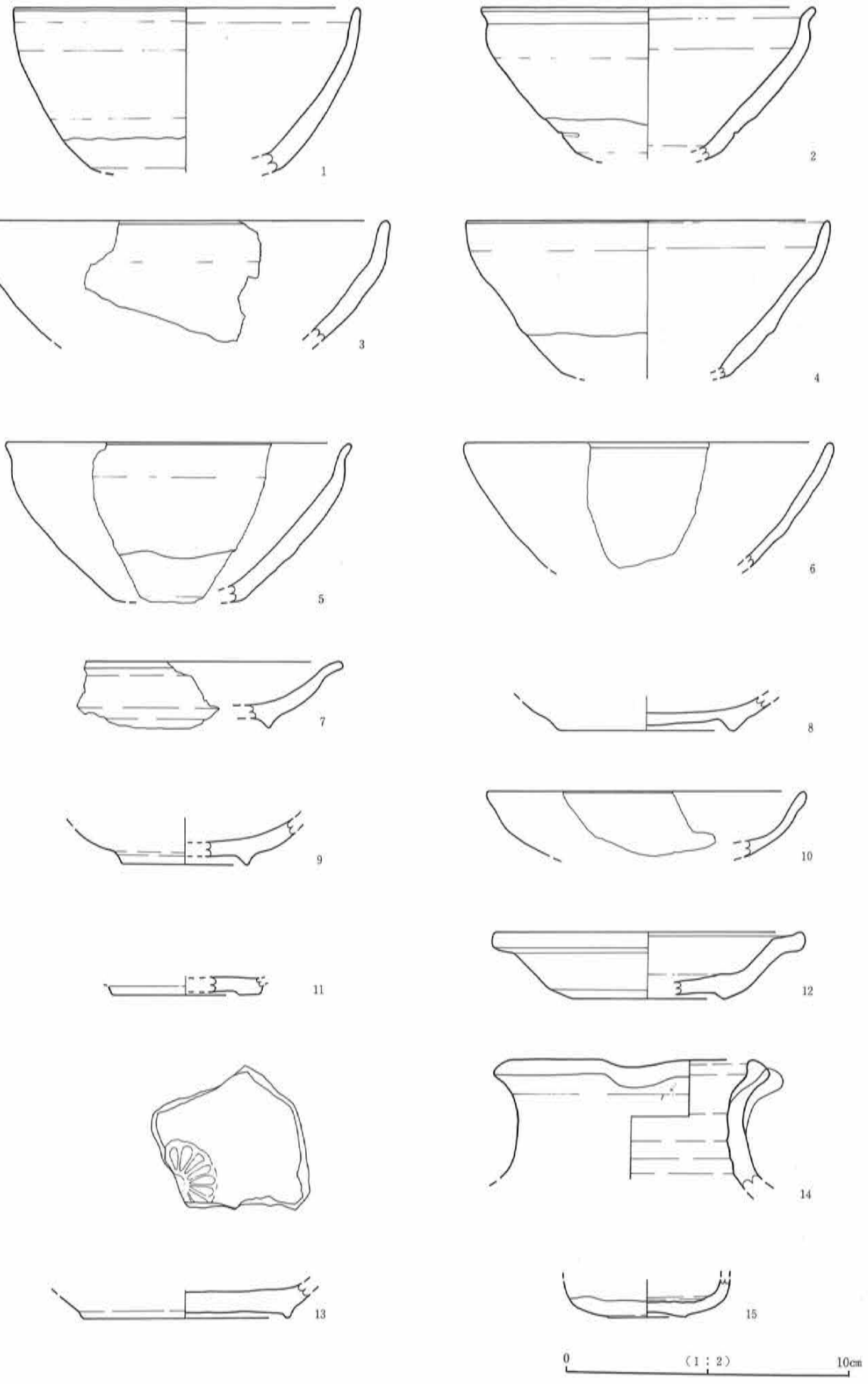
第364図　青磁・白磁実測図

第352表　常滑・大甕・美濃擂鉢一覧表

挿図番号	遺構 検出地区 層位	器種	法量	器形の特徴	釉調	備考（年代）
363-1	Ｔａ23 №13・18 Ⅰ区覆土	常滑 甕	(37.3) 〈18.3〉	口縁部は貼付けによる幅広い口縁帯があり断面は「Ｎ」字状を呈する。口縁上端には接合による突帯が廻る。胴部は大きくふくらむ。	内外面ともにナデが施され内面には巻き上げ痕（？）が観察できる。	16世紀前半
363-2	く－6	常滑 甕	(48.4) 〈7.1〉	口縁部は幅の広い口縁帯を有し、断面は「Ｎ」字状を呈する。		16世紀前半
363-3	く－8 耕作土	美濃 鉄釉 擂鉢	(26.8) 〈2.8〉	ロクロ使用。外面段を有して直角に立ち上がる。 卸目は不明。		16世紀

第353表　青磁・白磁一覧表

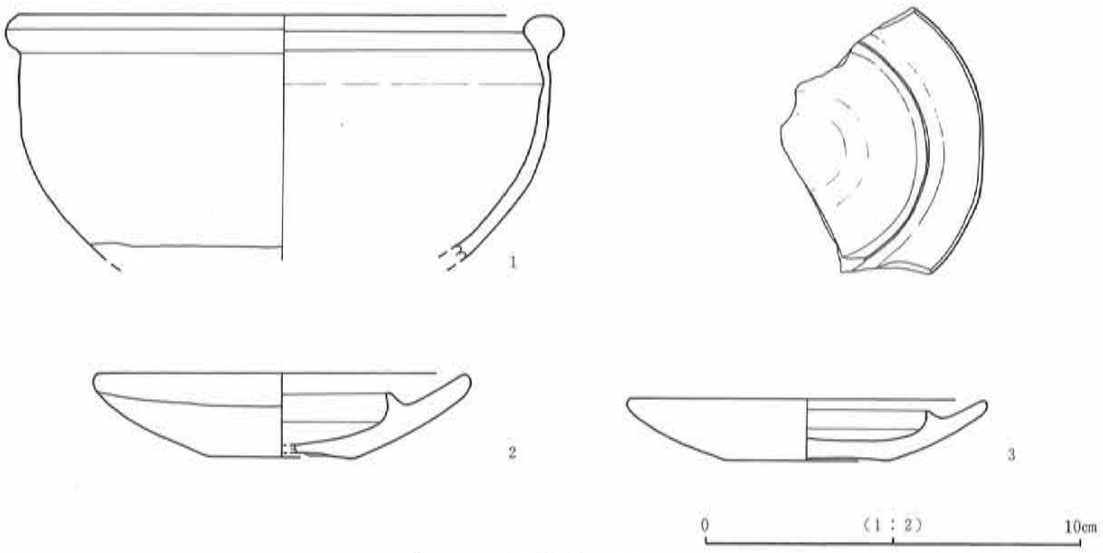
挿図番号	遺構 検出地区 層位	器種	法量	器形の特徴	釉調	備考（年代）
364-1	D84 覆土	青磁碗	(2.7)	削り出しによる高台部を有する。	青みがかった緑色に施釉されている。	16世紀
364-2	D126 №7・8・12	青磁碗	(14.6) 〈4.5〉	口辺部は内湾する。	外面に蓮弁文を有する。 緑色に施釉されている。	14世紀
364-3	D166	青磁碗	〈2.3〉 5.4	高台は削り出しによるものと考えられ垂直に立ちあがる。	明るい緑色に施釉されている。	15世紀前
364-4	え－9 耕作土	青磁碗	〈2.6〉	削り出しによる高台を有する。	緑色に施釉されている。	14世紀
364-5	Ｍ1 №5	青磁碗	(14.2) 〈4.3〉		蓮弁文を有する。 淡緑色に施釉されている。	時期不明
364-6	Ｔａ19 №6	白磁Ⅲ	〈1.2〉 3.6	高台部のみ。 削り出しによる高台部を有する。	黄色味をおびる白色に施釉されている。	16世紀
364-7	Ｔａ36 №8	白磁Ⅲ	〈1.6〉 3.15	削り出しによる高台を有する。	黄色味をおびる白色に施釉されている。	16世紀
364-8	D14 覆土	白磁Ⅲ	〈1.0〉 4.8	削り出しによる小さな高台を有する。	黄色味をおびる白色に施釉されている。	16世紀
364-9	け－15	白磁Ⅲ	〈1.6〉 3.2	削り出しによる高台部を有する。		16世紀



第365図　美濃・瀬戸陶器実測図

第354表　美濃・瀬戸陶器一覧表

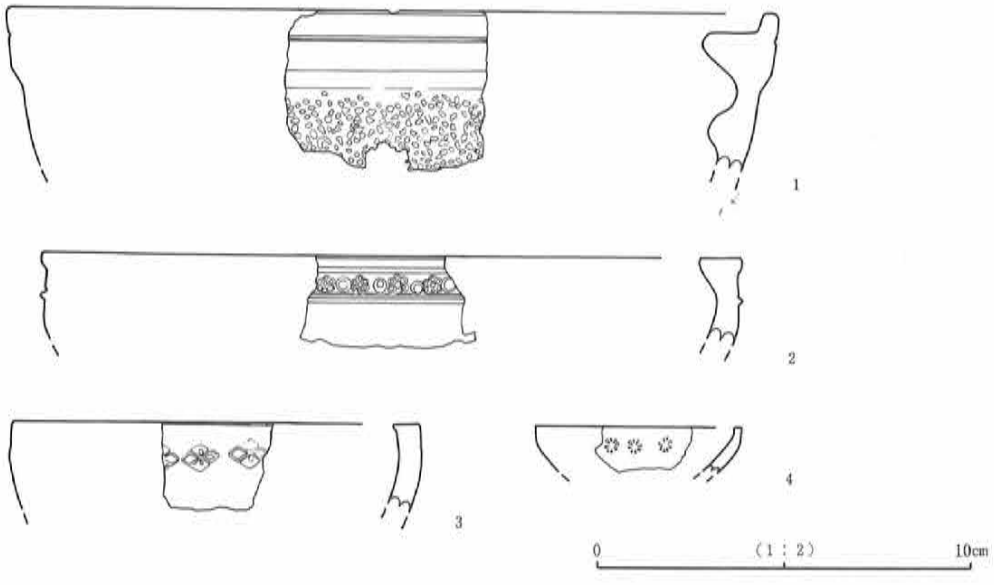
挿図番号	遺構 検出地区 層位	器種	法量	器形の特徴	釉調	備考（年代）
365-1	Ta12 No.2	美濃 鉄釉 天目茶碗	(12.0) 〈5.8〉 —	口辺部は端部で僅かに外反する。	内外面に鉄釉が施釉されているが，外面の口辺部下位には施釉されていない。	16世紀
365-2	Ta18 く－8 耕作土	美濃 鉄釉 天目茶碗	(11.5) 〈5.3〉 —	口辺部は端部で「く」の字状にくびれる。	内外面に鉄釉が施釉されているが，外面の口辺部下他には施釉されていない。	16世紀
365-3	D84	美濃 鉄釉 天目茶碗	(14.0) 〈4.2〉 —	口辺部で内湾する。		16世紀
365-4	D86 覆土，炭内	美濃 鉄釉 天目茶碗	(12.6) 〈5.5〉 12.6	口辺部はやや内湾する。	内外面に施釉されているが，内外面は口辺下部で止まっている。	16世紀
365-5	D105 覆土	美濃 鉄釉 天目茶碗	(12.6) 〈5.6〉 —	口辺部は端部で「く」の字状にくびれる。	内外面に施釉されているが，外面は口辺下部で止まっている。	16世紀
365-6	D234 覆土	美濃 灰釉 碗	(12.8) 〈4.4〉 —	口辺部はわずかに内湾気味に外傾する。	淡緑色の灰釉が施釉されている。	16世紀前
365-7	Ta6 No.1	美濃 灰釉 小皿	— 〈2.4〉 —	口辺部は外反する。 削り出しによる断面三角形の小さな高台を有する。	内外面に淡緑色の灰釉がうすく施釉されている。	16世紀前半 大窯Ⅰ期
365-8	D74 覆土	美濃 灰釉 小皿	(6.2) — —	削り出しによる断面逆台形の高台を有する。	底部にトチ痕が残る。（淡緑色の灰釉が全面に施釉されている。）	16世紀前
365-9	D76	美濃 灰釉 小皿	— 〈1.6〉 (4.4)	削り出しによる断面三角形の小さな高台を有する。	内外面に淡緑色の灰釉が施釉されている。	16世紀前 陶器
365-10	D85 覆土	美濃 灰釉 小皿	(11.0) 〈2.3〉 —	口辺部は端部でわずかにふくらむ。	内外面にくすんだ淡緑色の灰釉が施釉されている。	16世紀前 陶器
365-11	こ－8 耕作土	美濃 灰釉 小皿	— 〈0.6〉 —	削り出しによる高台を有する。	淡緑色の灰釉が施釉されている。	16世紀前
365-12	D262 覆土	美濃 灰釉 小皿	— — (7.2)	内面中央に菊花状の削り込みを有する。 削り出しによる三角形を呈する小さな高台を有する。	白みがかった淡緑色の灰釉が施釉されている。	16世紀前
365-13	え－13 耕作土	美濃 鉄釉 折縁小皿	(10.7) 〈2.3〉 (5.2)	削り出しによる小さな高台を有する。 内部にヒダ状のケズリを入れている。 見込み部と底に輪とち痕を残す。	茶褐色の施釉が全面におよんでいる。	16世紀前
365-14	お－3	瀬戸 灰釉 片口壺	(8.4) 〈4.2〉 —	口辺部外傾はなく，口縁で外反し，端部で内傾する。	内外面くすんだ淡緑色の灰釉が施釉されている。	15世紀 陶器
365-15	Ta27 No.4	美濃 鉄釉 筆入れ	— 〈1.3〉 (2.7)	上底。	上部に鉄釉がかかっている。（底部は回転糸切り。）	16世紀



第366図　近世美濃陶器実測図

第355表　近世美濃陶器一覧表

挿図番号	遺構検出地区層位	器種	法量	器形の特徴	釉調	備考（年代）
366-1	さ－8 耕作土	美濃 片口鉢	(14.0) 〈6.5〉 —	口辺部に最大径をもつ。 端部は玉縁状を呈する。	—	—
366-2	か－4 耕作土	美濃 灯明皿	(9.8)口径 〈2.2〉器径 (4.0)底径	やや上底気味。	—	—
366-3	さ－2	美濃 灯明皿	(9.4)口径 〈1.6〉器径 4.4 底径	上底気味。	—	—



第367図　瓦器・火鉢等実測図

第356表　大井城跡（黒岩城跡）陶器一覧表

産　地	釉	器　形	時　代	遺　　構　　名
常滑	自然釉	甕	14C	Ｔａ13（1点）、Ｔａ26（1点）、Ｔａ54（1点）、D7（1点）、D136（1点）、D260（1点）　計6点
常滑	自然釉	甕	15C	え−12G（1点）、か−5G（1点）、か−6G（1点）、き−7G（1点）　計4点
常滑	自然釉	甕	16C前半	Ｔａ8（1点）、Ｔａ23（41点）、Ｔａ26（2点）、Ｔａ29（1点）、Ｔａ39（1点）、D1（1点）、D18（1点）、D27（1点）、D29（1点）、D41（1点）、D65（1点）、D87（1点）、D100（1点）、D125（1点）、D165（1点）、え−7G（1点）、え−9G（2点）、お−3G（1点）、お−4G（1点）、お−6G（1点）、お−7G（2点）、お−9G（11点）、か−5G（1点）、か−8G（1点）、き−5G（1点）、き−6G（4点）、き−7G（1点）、き−8G（2点）、き−9G（1点）、く−1G（1点）、く−5G（3点）、く−6G（4点）、く−7G（3点）、く−8G（1点）、け−2G（2点）、け−3G（6点）、け−5G（1点）、け−6G（1点）、こ−3G（4点）、こ−4G（6点）、こ−5G（2点）、さ−7G（1点）、し−4G（1点）、し−6G（1点）、し−8G（1点）、し−9G（1点）、す−6G（1点）、す−8G（1点）、す−9G（1点）、表採（10点）〔Ｔａ23・お−3G・け−3G・こ−3G・こ−4G・く−6G・け−6G・す−8G・表採は接合関係あり〕　計126点
常滑	自然釉	壺	16C後半	か−5G（1点）　計1点
中津川黒	自然釉	甕	14C	Ｔａ11（3点）、Ｔａ14（4点）、Ｔａ23（1点）、D150（1点）、う−8G（1点）、き−7G（1点）、く−5G（1点）、け−5G（1点）、け−6G（1点）、表採（1点）　計15点
中津川黒	自然釉	片口鉢	14C	え−5G（1点）　計1点
美濃	鉄釉	壺（広口短頸）	16C	お−7G（1点）　計1点
美濃	鉄釉	天目茶碗	16C	Ｔａ12（1点）、Ｔａ18（1点）、Ｔａ20（1点）、Ｔａ22（1点）、Ｔａ47（1点）、D84（1点）、D86（1点）、D105（1点）、う−8G（1点）、う−9G（1点）、う−10G（1点）、え−6G（1点）、え−8G（1点）、え−9G（3点）、え−10G（1点）、え−12G（1点）、お−5G（1点）、お−6G（2点）、お−7G（1点）、か−5G（2点）、か−6G（1点）、か−8G（1点）、か−9G（1点）、き−6G（3点）、き−8G（3点）、く−4G（3点）、く−8G（1点）、け−6G（2点）、こ−3G（1点）、す−9G（1点）、せ−4G（1点）、せ−8G（1点）、表採（1点）〔Ｔａ12・か−8G、Ｔａ18・く−8Gは接合関係あり〕　計44点
美濃	鉄釉	折縁小皿	16C	え−13G（1点）　計1点
美濃	鉄釉	瓶	16C	か−4G（1点）、か−6G（1点）　計2点
美濃	鉄釉	土瓶	18C	お−11G（1点）、お−12G（1点）　計2点
美濃	鉄釉	徳利	16C	Ｔａ20（1点）、Ｔａ26（1点）、Ｔａ39（1点）　計3点
美濃	鉄釉	茶入れ	16C	Ｔａ27（1点）　計1点
美濃	鉄釉	擂鉢	16C	く−8G（1点）、さ−4G（1点）　計2点
美濃	灰釉	碗	16C前半	Ｔａ39（1点）、D2（1点）、D7（1点）、D23（1点）、D74（2点）、D234（1点）、D236（1点）、う−8G（1点）、え−8G（1点）、お−5G（1点）、き−8G（3点）、け−3G（1点）、け−8G（1点）、こ−5G（1点）、こ−8G（1点）、し−7G（1点）、し−9G（1点）　計20点
美濃	灰釉	碗	16C後半	い−11G（1点）、お−5G（1点）、お−9G（1点）　計3点

産　地	釉	器　形	時　代	遺　　構　　名
美濃	灰釉	山茶碗	14C	え−9G（1点）、え−11G（1点）、き−5G（1点）、き−6G（1点）、け−6G（1点）　計5点
美濃	灰釉	小皿	16C前半	Ｔａ6（1点）、Ｔａ18（1点）、D60（1点）、D74（1点）、D76（1点）、D85（1点）、D262（1点）、え−10G（1点）、お−4G（1点）、か−5G（1点）、き−2G（1点）、き−6G（1点）、く−6G（1点）、け−3G（1点）、け−8G（1点）、こ−8G（1点）、さ−4G（1点）、表採（1点）　計18点
美濃	灰釉	香炉	16C	し−4G（1点）　計1点
瀬戸	灰釉	片口壺	15C	お−3G（1点）　計1点
瀬戸	灰釉	おろし皿	15C	き−5G（1点）　計1点
瀬戸	灰釉	瓶子	15C	お−3G（1点）　計1点
瀬戸	灰釉	片口鉢	14C前半	D7（1点）　計1点
瀬戸	灰釉	折縁鉢	15C後半	Ｔａ5（1点）、D40（1点）、D41（1点）　計3点
瀬戸	灰釉	小鉢	15C	お−11G（1点）、き−5G（1点）、し−18G（1点）　計3点
瀬戸	灰釉	三足盤	15C	い−12G（1点）、お−7G（1点）、お−10G（1点）、く−6G（1点）、け−6G（1点）、表採（1点）　計6点
備前	灰釉	擂鉢	16C	Ｔａ20（1点）　計1点

第357表　大井城跡（黒岩城跡）磁器（舶載）一覧表

器　種	器　形	時　代	遺　　構　　名
青磁	碗	13C	Ｔａ34（1点）、Ｔａ39（1点）　計2点
青磁	碗	14C	D41（1点）、D108（1点）、D126（1点）、D165（1点）、D206（1点）、う−7G（1点）、う−10G（1点）、え−8G（1点）、え−9G（1点）、お−3G（1点）、か−7G（1点）、き−6G（2点）、き−8G（2点）、け−5G（2点）、し−5G（1点）　計18点
青磁	碗	15C	Ｔａ1（1点）、F2（1点）、D13（1点）、D75（1点）、D166（1点）、D275（1点）、お−3G（1点）、か−2G（1点）、き−2G（1点）、き−6G（1点）、き−8G（1点）、き−9G（1点）、表採（1点）　計13点
青磁	碗	16C	Ｔａ1（1点）、D84（1点）、D253（1点）　計3点
青磁	皿	15C	か−5G（1点）　計1点
青白磁	瓶子	13C	Ｔａ43（1点）　計1点
白磁	壺	14C	Ｔａ1（1点）、Ｔａ39（1点）　計2点
白磁	壺	15C	う−3G（1点）、か−5G（1点）、け−5G（1点）　計3点
白磁	皿	15C	Ｔａ28（1点）、え−8G（1点）、け−3G（1点）、け−5G（1点）　計4点
白磁	皿	16C	Ｔａ11（1点）、Ｔａ19（1点）、Ｔａ36（1点）、D14（1点）、か−11G（1点）、け−5G（1点）、し−9G（1点）、す−9G（1点）　計8点
染付	碗	15C	Ｔａ11（1点）　計1点

5　石　臼（第368図～第430図，図版51～62）

現在、私達が生活する中でテレビ、冷蔵庫、洗濯機等は欠くことのできない生活用具の必需品であろう。その意味において、原始、古代よりつい最近に至るまで生活用具の中心をなしてきた一つに「臼」が挙げられる。かつて、どこの家でも臼は生活する上で切り離すことのできなかったものであり、ときには水車のように集落の共同体の中にまで深く浸透していた。（水車も機能面から臼に属する）

しかし昭和30年代に入ると急激な工業の機械化、そして生活様式の変化、更には食性の移行等により、臼はその姿を消して行った。こうした臼はかつてあまりに人間と深くかかわりを持っていたためであろうか、社寺等に奉献される例も数多いようである。埼玉県川本村にある「村社稲荷神社」は、通称「石臼稲荷」と言われ、約320～330個の石臼（完形品が大半を占める）が参道に敷かれており、又、山梨県東八代郡一宮町田中の「瑞蓮寺」には、その数実に1000個をこえる石臼がやはり参道に敷きつめられている(註1)という。こうしたことからも臼の文化は、長い歳月私達の生活の上で大きな役割を果してきたことは如実である。

こうした臼が今回の大井城跡の調査により、多量に検出されたため、その概略を記してみたいが、本項の前文である「臼の種類」、「臼の初現」等は、臼の研究家である三輪茂雄氏の『臼』1978を引用してまとめてみた。

数多い臼の種類　臼には多くの種類がある（第368図、石臼の種類）。1粉挽き臼、2茶臼、3搗き臼（石擂鉢）、4木摺(ずり)臼（木製のもので主に粉挽き用の臼）、5土臼（大型の臼で作業効率の拡大を計ったもの）、6胴臼（餅つき臼）、7手杵臼、8踏み臼（水車の原理の元となった臼）、更には9碾磑(てんがい)（薬研も含む）等がある。本城跡からは1～3が出土した。これらは木製品と石製品とに大別できるが、近世になると金属製、陶磁器製のものも出現するようである。機能面では、「挽き臼」、と「搗き臼」とに大別ができ、前者は摺りつぶすことによって物を砕粉化し、後者は杵による打撃からその用途をなすはたらきをもつものである。このようにひとロに臼といっても各用途により、機能面、及び、形態の相異を見ることができる。又、近世においては前述したように磁器による茶臼が出現(註2)し、この種のものは主に貴重品として取扱われた臼であるように思われる。

石臼の初現　ではこうした石臼の初現は一体いつごろであろう。その形態の元、つまりルーツは縄文、若しくはそれ以前の遺跡から出土する石製の凹石、摺り石にその機能の元を見ることができるとされ、弥生時代に入ると木製の杵と臼が出現し、静岡県登呂遺跡からはその出土例が見られるようであり、更に、香川県高松市の瀬戸内海歴史民族資料館に展示されている銅鐸（弥生後期）の写真には、人が杵と臼で物を搗く様子がはっきりと描かれていることが紹介されている。このように弥生時代にはすでに現在の粉挽き臼の元である「手杵臼」が使用されており、その背景には大陸から伝わった稲作文化の大きな影響があることが推察される。ではこのように杵を搗くことによりその機能をはたした臼から、最近まで見られた石に溝（目）を刻んだ回転式の「石臼」が初現するのはいつ頃であろうか。三輪氏の諸見によると、石臼の伝来は推古天皇18年（610年）高麗の僧曇徴によりもたらされたとされる「日本書紀」の、次の文献が注目されるとしている。

『推古天皇の18年春三月高麗の僧二人を献じ名を曇徴
はじめて碾磑(てんがい)を造る。けだし碾磑を造るはこのときに始るなり。』

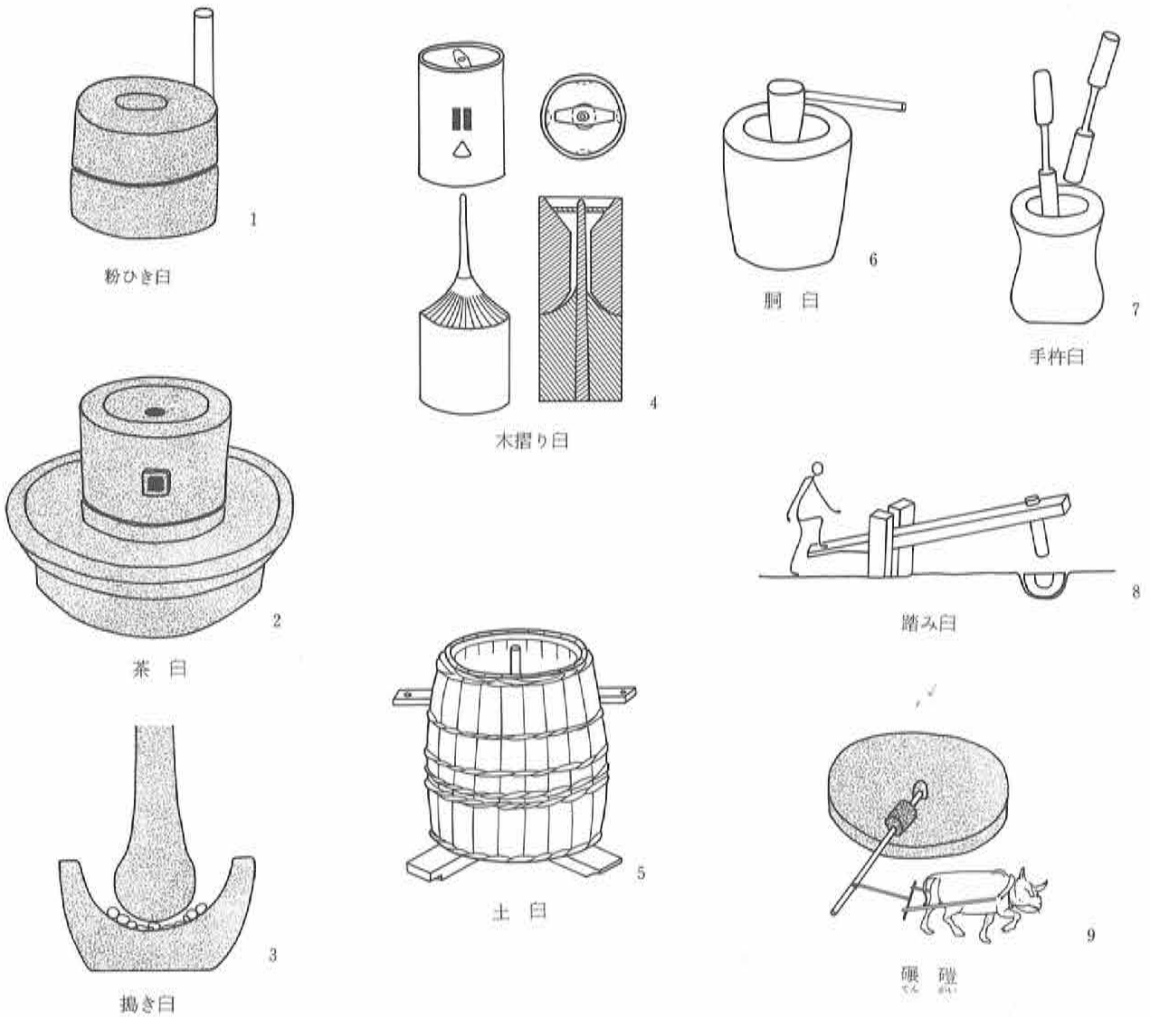
碾磑とは主に畜力により大型の臼を挽かせるものであり（第368図9）、この碾磑は太宰府観世音の境内に安置されるものとされ、直径93cm、8分画11溝からなる花崗岩製のものであることが認められるようである。このことから回転式の石臼は7世紀前半にわが国に渡来したことが推察できうるとされ、それ以前の文献には「粉挽き臼」の存在を明確に示す記述は確認されていないようである。

そこで、『臼』に記されている各地の遺跡からの出土例を見ると「山梨県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書」からは、平安時代に比定されると思われる上臼片1点が報告されている。しかし、一般的には中世遺跡に代表され

る一乗谷朝倉氏遺跡（福井市城戸ノ内町）を始め、南蛮寺跡（京都市中京区）、同志社女子大学校地内（京都市上京区）より出土した室町期と推定されるものが最も上限とされるようである。そして出土する多くの石臼は本遺跡を含めた、中世における城郭址等からの出土例が大半であり(註3)、15～16世紀より城郭、社寺等を中心に普及しはじめ、広く一般庶民に使用され盛行するようになるのは更にそれ以後のことであろうと指摘している。

さて今回調査した大井城跡より出土した石臼の年代観であるが、他の中世遺跡と同様に、本遺跡の性格、伴出遺物の相対年代から15世紀後半より16世紀まで遡り得ることは、ほぼ間違いないものと推察される。又、本遺跡からは146点という多量の石臼類（石擂鉢を含む）が出土したことは注目にあたいすべきことと思われる。

ちなみに御代田町に所在する「野火付遺跡(註4)」においても、中世における竪穴状遺構、土坑が検出されている。大井城跡の事例と比較すると石臼の出土量は少ないものの、搗き臼(擂鉢)、内耳土器も出土しており検出された遺構の形態も近似する点が興味深い。そして報告によれば、竪穴状遺構より伴出した青磁、白磁等の遺物と、主に石臼が出土した土坑（集石遺構）とを有機的に考えたとき、その年代観は14世紀まで遡ることが想定されるとしている。又、長楽寺遺跡(註5)（群馬県新田郡）の報告においても遺物相互の年代観から15世紀代まで遡り得ることはほぼ間違いないとされている。このように従来までは16世紀が石臼の上限とされていたが、近年の各地調査報告書によると15世紀、若しくはそれ以上まで遡ることが指摘されつつある。



第368図　臼の種類　三輪茂雄『臼』1978.より転載

本遺跡からの出土臼　本遺跡から出土した臼はその総てが石臼であり、これらは各形態の特徴から「粉挽き臼」、「茶臼」、「石擂鉢」、「搗き臼」であった。

出土総数は146点が確認され、粉挽き臼75点（上臼39点、下臼36点）、茶臼36点（上臼14点、下臼22点）、石擂鉢（24点）、搗き臼（11点）である。これらは総てが破損しており、接合復原による完形品も皆無であった。個体数についても石材の類似、及び小破片の混入から実際の数は不明であり、146点を上回る数量が考えられる。

各石臼の遺構別出土状況は第358・359表に掲載した通りであった。

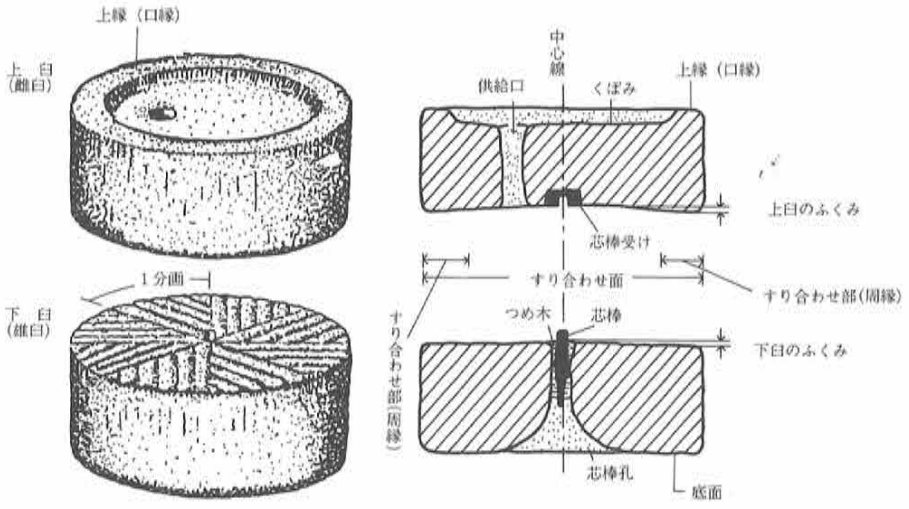
このことから本遺跡における石臼の出土は、1．竪穴遺構、2．土坑、3．遺構確認作業時、4．溝の順であることが判明した（遺構の検出割合から）。

以下出土した臼について概略を述べてみたい。尚、「搗き臼」、「石擂鉢」については機能面、及び形態上の相違が認められるため、別記して述べることにした。

(1)　粉挽き臼　　上　臼

39点のうち完形のものは一点も認められず、その破片の形状を見ると、½近い残存率を有するものが3点、⅓近いものが3点、¼近いものは10点であった。他23点は¼に順ずるもの、若しくはそれ以下の破片であった。これら大半の割れ口には、芯棒穴、供給穴、更には挽き手穴の一部が認められるものの、その原形を留めているものは数点のみであった。従って、此等の石臼片については当部を中心に意図的に割られた可能性があるものと推察される。又、⅓、¼片についてはそのすべてが「扇型」に近い形状を呈しており、その割れ口はほぼ直線的であり一分画に等しい大きさを持って割れている点（第381図12、図版57）更には第375図1、図版57—3で見ることができるように½近い破片などは、一つの特徴をもった破片形状であると観察できよう。つまり、此等の破片については先ず器用に意図的に割られた後、廃棄された可能性もありうると推察されるのである。

直径は図上復原により24.3～36cmが計測される。大別すると30cm以上が21点、25～30cmが4点であり、25cm以下はわずかに1点のみであった。よって出土した上臼の約半数は30cm前後の大きさであることが確認された。この中で24.3cmと粉挽き臼の中では極めて小型に属する臼については「物くばり」及び「供給口」の残存、更には溝（目）の大きさ等から茶臼とは考え難く、特異な粉挽き臼と思われる。しかし、その性格、用途などは判然としなかった（第378図6）。



第369図　粉挽臼各部の名称　三輪茂雄『臼』1978より転載

高さ（厚さ）は5.8～16.2cmであった。このうち10cm前後のものが大半を占め、磨滅によるものなのか、最近まで使用された臼に比べ全体に器薄であるように思われた。

すり合わせ面の分画数、溝（目）については完形する臼が検出されていないことから正確な数値を把握することはできなかった。39点のうち図上復原によりほぼ分画数を推測できたものは6点であり、これらはいずれも6分画、若しくは8分画のものと思われる。分画内に刻まれる溝（目）の数は、不均等に配分されたものが多いことが認められた。これは施される分画が一定の大きさを持って均等に配分されていないためであろう。

「目なし臼」と思われるものについては6点確認されている（第371図　特殊な目のパターン）。これは製作の当初より溝を刻み込まないタイプの臼であり、溝を有する臼との相違は「すり合わせ部」、及び「ふくみ」にその主な特徴を見ることができよう。つまり、目なし臼の「ふくみ」は、他の石臼に比べはるかに大きい（深い）ことが認められ、更に、周辺部に施される平坦な「すり合わせ部」をほとんど有していないことである(第376図－2他)。このほぼ平坦に施された「すり合わせ部」は、石臼の機能の中で大きな役割を果す箇所である。つまり供給口より下臼のすり合わせ面に落ちた原料は、ここで上臼の回転により、ほぼ大まかに砕かれ、上臼、下臼に刻まれる溝の働きによって外側へ移行する。ここで、両者のすり合わせ面の外周に施される「すり合わせ部」で、更に緻密に細分化される仕組になっている。こうした点よりほとんどの目なし臼はすり合わせ部を有しておらず、原料の粉砕化に際し特異な用途に使用された異質な臼であることが推察される。

「こぼれ目」をもつものは一点確認されている。これは前述のことから回転時におけるすり合わせ部は大きな力が加わると共に、使用度の激しい部位であることが認められる。従って此の部位は欠損しやすく、又、剝離しやすい箇所と言え、此を防ぐ方法として平行する副溝の最初に、逆目の溝を入れる方法が施されている(第378図7、図版54－10)。又、図版56－5は出土した下臼片であるが、これを見るとすり合わせ部の一部に欠損箇所が認められる。このことは上記したすり合わせ部の縁辺部は破損しやすいことを示す好事例と言え、欠損した当部には粘土を充塡し焼きつけて補修されている。

「放射型」と思われる上臼片は1点確認される（第377図4、図版55－1）。石質は黒色安山岩であり、目なし臼と同様に、ふくみが大きく、又、「凹み」の面は皿状を呈し上縁にゆるやかに立ち上がる点は、他の粉挽き臼とは若干の違いが認められる。

以上が出土した石臼の中で特殊な溝(目)を有するものであったが、次に、此等一分画内に施される溝のパターンを観察して見ると、次の2種類の形態に大別できると思われる。

1、副溝が主溝に対しほぼ平行に刻まれているもの（第379図8、図版55－3）

2、副溝が放射状を呈していると思われるもの（第380図9、図版55－5）

（主溝のパターンが第371図　特殊な目のパターンでの「切線主溝型」を呈すると考えられる）

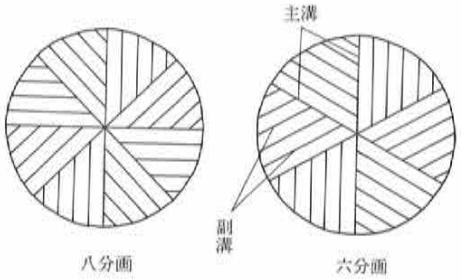
此等の溝は太く刻まれるもの、或いは、細く刻まれるもの等があり(図版57)、この配される溝の太さ、細さにより各石臼の「供給口」、「もの配り」等も比例した大きさとなって施されているものと推考される。又、此等配される溝の間隔も巾の広いもの、狭く配されるもの等ありその形態は多様である。この様なことから原料の粉砕化に際しては、その粉砕される原料の大きさ、並びに、精粉されるべき製品の細かさを想定し粉挽き臼が選択され、使用されたことが伺われよう。

目たて直しが行なわれたと思われる臼（第382図14）がある。此は使用により磨滅した溝を新たに刻み込んだ痕跡が認められるものである。又、第385図18は統一性のない溝が配せられており、目たて直しが行なわれた臼であろうと思われる。

片減りが著しい上臼は7点が確認され（第374図石臼・茶臼の器形の歪むもの)、最もそれが顕著に認められるものは第374図3の最大高11.1cm、最小高8.6cmであった。こうしたいわば器形の歪む石臼は群馬県「浜松屋敷内遺跡C地点」[註6]からも出土しているが、この片減りについては2つの見解ができるものと思われる。一つには長期

間の使用などにより、すり合わせ部の片側が磨滅し歪んだと考えられるものであり、一方は、製作の当初より高低差（厚い、うすい）を設け、臼をたやすく回転させるための力学的根拠を応用し、あえて歪みをもたせたと考えられるものである。つまり、前者においては、回転時における力の加わり様で片側のみが片減りしたものと推考されるのであり、このことは、いわば片側の磨滅したと考えられる「すり合わせ面」に残存する溝は、当然片減りのしない面に残された溝よりも、はるかに磨滅度が大きくなると思われるのである。しかし、出土した臼を見るとその磨滅度は、ほぼ均等であり片面にだけ片寄った磨滅の仕方ではなかった（第379図、図版54－6）。よって回転時における力の加わり方のみで片減り（歪み）が生じるとは考え難く、むしろ製作の当初より意図的に高低差（厚さ、うすさ）を設けたものであるとも推察されるのである。だが此の後者についても、当初よりあえて歪みをもたせたとするならば、回転の際に原料が「凹み面」からこぼれ易いことも考えられ、不自然な点があると言えよう。こうしたことからこの「歪み」については今後の課題としたい。

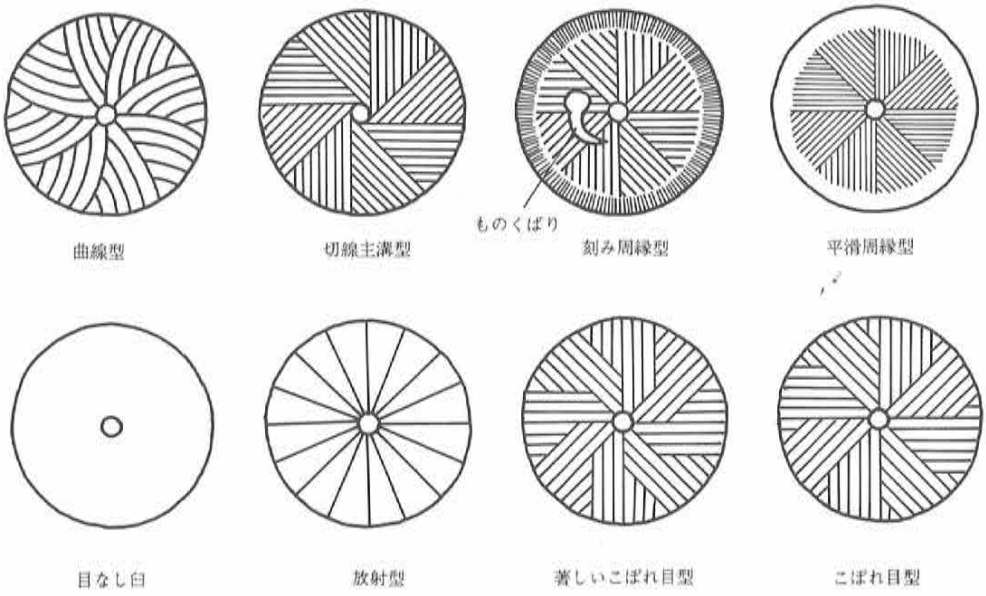
上縁の断面形状は大別して三種類が認められる。1．凹み面から極めて緩やかに立ち上がるもの（第377図5、図版54－4）。2．凹み面からほぼ垂直にたち上がるもの（第382図13、図版54－2）。3．全体に丸みをおびるもの（第384図17、図版54－7）が認められ、その深さ（高さ）は第395図34が最もあり、3.5cmであった。



第370図　基本的な八分画と六分画のパターン
三輪茂雄『臼』1978より転載

凹み面は大別して2種類の形態をもつことが認められる。1．断面形状が皿状を呈し上縁がゆるやかに立ち上がるもの（第377図4）。2．ほぼ平坦な面を呈するもの等である（第375図1）。

供給口の形状が検討できる資料は16例あり、隅丸長方形を呈するもの9例、長方形6例、円形1例であった。この点、佐久地方において近年まで使用された石臼の供給口は、比較的円形を呈するものが多いと思われるが、本調査より出土した臼で円形を呈するものは1例のみであった。



第371図　特殊な目のパターン　三輪茂雄『臼』1978より転載

挽き手穴が認められるものは2例あり、うち1例の第395図34、図版55—10は同じ位置に挽き手穴が2個認められる。一つの穴はすり合わせ面の直上部にあり、その原形の大きさ等は破砕によりほとんどが残存しておらず計測できないが、一方の穴は残存する側面のほぼ中央部に位置し、縦4.4cm、横5.4cmの長方形を呈するものである。このほぼ同一の箇所に2つの挽き手穴が設けられていることについては、次のことが考えられる。すり合わせ面の直上に一部残存する挽き手穴については、長期間の使用によりすり合わせ面が著しく磨滅し、機能上に支障をきたし使用が不能となったものと思われる。そこでほぼ中央部に認められる挽き手穴は、新たに設けられたものであり、再機能を促すための穴であったことが考えられる。では、なぜ新たに施された挽き手穴を、旧状の穴のほぼ同一部に設けたのか、この点については次のことが考えられよう。石臼の機能上、挽き手穴と供給口とは共通した一連の関連動作が必要とされる。つまり、回転時における右手（挽き手穴）の動作と、原料を供給口に運ぶための左手の動作とは、よりプライマリーな一体的動作が必要とされるであろうし、そこには当然、供給穴と挽き手穴との重要な「位置関係」が保たれなければ円滑な機能は促されなかったと考えられる。こうしたことから本残存部に確認される2つの挽き手穴の内、新たに施されたと思われる中央部の挽き手穴は、旧挽き手穴が残存する位置とほぼ同一箇所にあえて配置せざるを得なかったものと考えられる。

ふくみ巾を計測できるものは19例ある。約2～4.6cmを測るものが16点と多く、最大ふくみ巾を呈するものは4.6cm（第392図27、図版53—6）であり、最も小さなふくみを呈するものは第381図12の0.7cmであった。

下　臼

36点のうち⅓近くを残存するものが1点、½近いものが7点、¼片は6点であった。他22点は⅛に順ずるもの、若しくはそれ以下のものであった。

径は図上復原により27～33cmが計測される。30～33cmが13点と最も多く、全体の約50%を占め、上臼の径の数値ともほぼ一致している。出土した上臼、下臼の残存形状を見ると下臼は⅔片が1点認められるのに対し、上臼は0であり、½片については下臼7点に対し、上臼は3点と少なく、¼片は下臼6点、上臼10点であった。この結果¼以上の残存片に関しては下臼の方が上臼よりも数多く残存していたことが確認され、いいかえれば下臼の方が上臼よりも大きな割れ方を呈しているようにも推察された。

断面形状は2種類が認められ、内1点は中央部にふくらみをもち、すり合わせ面が平坦であるもの（第403図51、図版53—5）、と中央部よりすり合わせ面が施され（溝を有し）、周端部に向かって緩やかで直線的な傾斜をもつものとが観察された（第400図45、図版53—2）。

此等のすり合わせ面に施される溝（目）の分画についても、上臼と同様に6分画、若しくは8分画が多いことが認められる。しかし、その中で5分画と考えられるものが1点確認され、こうした類例の報告は比較的少なく、稀れな分画のパターンを呈する一例と言えよう（第401図47、図版56—2）。この石臼に施される副溝は1分画内に5本が確認でき、その溝と溝との間隔はきわめて巾広く施されている。又、底部のえぐりの面にはノミ痕が顕著に観察され、この敲打痕を見ると左側方向に成形された跡がうかがわれる。更に、この敲打痕はほぼ4単位に分割されながら向きが急反していることが分る。このことから底部のえぐり面を成形する際には、¼回転ずつ回しながら成形された様子をうかがい知ることができよう。尚、当えぐり面には、径6cm、深さ1.5cmの円形を呈する凹みが施されている。この凹みは石臼との機能面で共通する関連性があったものなのかは不明である。しかし、凹み面に残存するノミ痕から、若干の時間的な隔たりが感じられ、後に新たに施された痕跡がうかがわれる。このことから石臼との機能的な関連性は考え難く、何らかの意味で2次的な利用がなされたものと考えたい。

分画内に刻まれる溝のパターンは、上臼と同様に主溝に対し、副溝がほぼ平行に施されるものと、放射状を呈して施される2種類の形態が認められる。その中で第403図51は放射状と思われるが、目たてなおしが著しく行なわれており規則性をもった溝の刻みは認められない(図版55—8)。尚、目たて直しが行われたと思われる下臼は他に1例のみであった（第400図45)。

目なし臼と思われるものは、１点が確認された（第399図42）。断面形状は先の類からは、中央部に若干のふくらみを有するものである。

芯棒穴はえぐり面に貫通しているもの（第400図45、図版53－８）と、いないもの（第397図38、図版53－７）との２形態に大別できる。そして、貫通している芯棒穴の形状は、えぐり面に大きくラッパ状に広がっているもの（第400図45）と、やや直線的に末広がりをもつもの（第404図52）とに分けることができる。尚、貫通していないものは１～２cmと比較的浅い面に芯棒穴が施されており、その断面形状は「U」字形を呈するものと（第398図40）、矩形を呈するものとに分けることができよう（第403図50）。

尚、上臼における芯棒穴の断面形状は段状を呈する例が第375図１の他に５点確認される。この芯棒穴に差し込まれる「つめ木」には木製のもの、或いは、金属性のものが使用されたことが考えられるが、段状を呈する芯棒穴については、主に金属性のつめ木が使用されたことが推察される。つまり、上臼の回転の際に、此の上臼の芯棒受けに差し込まれたつめ木が、仮に木製のものであったと仮定するならば、その磨滅度は石臼に施された芯棒穴よりも当然木製であるつめ木が磨滅してしまうであろうし、逆に金属性のものであったとするならば臼に施される芯棒受けの方が磨滅してしまい、段状となりえることが考えられる。こうした点から此の６例の芯棒穴を見ると、いずれの有段部にも著しい磨滅痕が認められ、その頂部はやや細くなっている。従ってこの金属性のつめ木の先端部は円錐形を呈するものであったことが推考される。

ふくみの巾を計測できるものは、36例中12点が確認され、最も大きいものが2.2cm、最も少ない（小さい）ものは0.5cmであった。このことから下臼のふくみ巾は、上臼に比べ極端に少ないことが認められる。

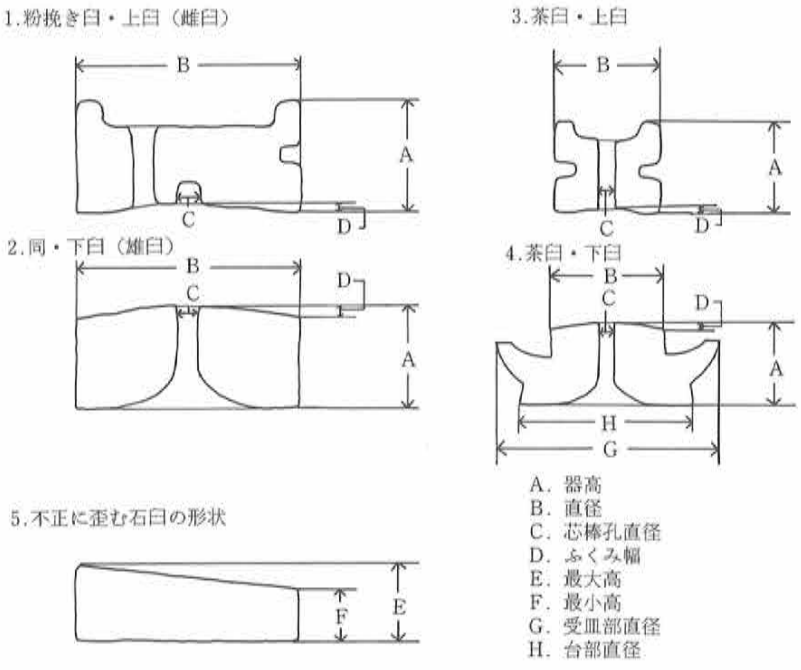
底部のえぐり面は、半月状にえぐられているもの（第404図52）と、ほぼ平坦を呈するもの（第399図41）との形態があり、半月状のえぐりにはノミ痕が多く残存し、一方、ほぼ平坦面を呈するものはその大半が自然面であり、若干の成形痕が残存している。又、側面にノミ状工具による成形痕が残るものとしては第405図56が好例であり、平ノミ加工によるものと考えられる。

器形の歪む（片減り）下臼は２点が確認され、第396図35、図版54－９は下臼の中では最大高6.3cm、最小高3.2cmを測り、歪みの著しいものである。

粉挽き臼（上臼、下臼）の石質は75点の内41点は「その他の安山岩」であり半数以上を占め、次に黒色多孔質安山岩の13点である。

(2) 茶臼　上臼

茶臼は上下臼片を合わせて36点出土した。その内、上臼は14点が確認され接合



第372図　石臼・茶臼の計測箇所

復原による完形品は全く認められなかった。破片の形状は約⅓の残存率を有するもの１点（第409図２、図版58－１）、約½を有するもの４点（第410図４、図版58－４他）、¼のもの１点（第411図７）であった。他２点は⅙に近いものであり、他の６点は小片であった。石質は14点のうち細粒安山岩が８点と約⅔を占め、多用便されている。

図上復原により径を割り出せたものは10点あり、17～20.7cmであった。高さは、10.2～14.6cmが計測され、その総てが径の比率が高さを上まわる形態を示すものであった。

くぼみ面は粉挽き臼と同様に、ほぼ平坦を呈しているものと、中央に向かってやや深くなり皿状を呈するもの（第410図５）との２形態がある。

上縁の形状は、その総てが凹み面から緩やかに立ち上がる形態を呈しており、前述した粉挽き臼のようにいくつもの形態を示す形状は観察できなかった。

回転方向は溝の刻み方から左回転がそのほとんどである。しかし、右回転と思われるものが１点確認される(第408図１)。尚、第409図２の溝は不規則であり、「目たて直し」が加えられ回転方向は判然としない。

分画は６～８分画が認められ、１分画に刻まれる副溝の形状は粉挽き臼と同様に、主溝に対し平行に施されるものと、やや放射状を呈するものとがある。しかし、粉挽き臼で認められたような分画を持たず、中心部に向かって主溝のみ放射状に刻まれるいわゆる「放射型」のもの、及び「目なし臼」等は皆無であった。

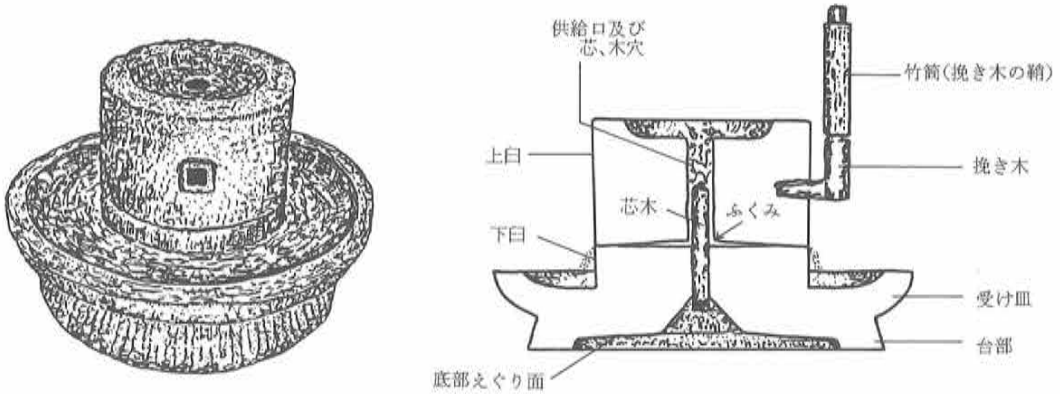
以下粉挽き臼とを比較しながら機能面における茶臼の主な特徴を観察してみたい。

石質	茶臼は36例中、19点が細粒安山岩であり約半数以上を占めるが、粉挽き臼はその他の安山岩が多用使されている。
直径・高さ	径17～20.7cmであり、高さは10.2～14.6cmと全体に小規模な形態である。
ふくみ巾	粉挽き臼の最大数値は4.6cmを測るのに対し、茶臼は１cmと極めて少なく平坦面を呈する。
分画・溝	粉挽き臼に比べ、分画内に刻まれる副溝は非常に細く約0.1～0.3cmであり、一分画内に配される数は十数本が施され、粉挽き臼よりは数多く配されている。
芯棒穴及び供給穴	粉挽き臼の上臼は芯棒穴がくぼみ面（供給面）まで貫通していないが、茶臼の場合総ての芯棒穴は、凹み面まで達しており、「供給口」の機能を兼ねている（第414図12)。従ってこの供給穴へ芯棒となる「つめ木」が差し込まれ、上下臼が固定される仕組となっている。そして供給口より入った原料は、つめ木との隙間より下臼のすり合わせ面に落ち、粉砕されるのである（第373図　茶臼各部の名称を参照)。このことを示す事例としては第411図６、７の断面形状が明瞭にものがたっていると言えよう。
ものくばり	粉挽き臼には「ものくばり」があるが、茶臼には全くない。

此等のことから、茶臼は本来の機能である「碾茶（てんちゃ）」を粉末にし、「抹茶（まっちゃ）」にすることが、その主たる用途であったと考えられ、粉砕されるべき原料そのものが極めて小さい（細かい）ものでなければ、その機能ははたらかなかったと言え、細粒粉を促すための臼であったと言える。又、各部位における成形痕からもその違いは顕著であり、粉挽き臼は全体に粗野な仕上げが観察されるが、茶臼は上縁を始め、凹み面、その他各部において非常に丁寧な仕上げが施され、全体に滑らかな様子を呈している。

他には挽き手穴の飾り模様にその特徴を見ることができよう（第408図１、図版59－７)。茶臼の場合、側面部に相対して２箇所に挽き手穴があるが、その周縁部に装飾効果を兼ねて縦６cm、横6.7cm、厚さ２cmとほぼ正方形を呈する有段の刻みが施されている。しかし、粉挽き臼にはこのような装飾的効果が施されている事例は皆無であった。

この装飾形態には、菱形模様を始め、連弁模様、二重正方形、更には二重菱形等の模様を有する出土(註7)例がある



第373図　茶臼各部の名称　三輪茂雄『臼』1978より転載

が、今回の大井城跡からは、正方形を有するもののみが４点検出された（第408図他３点）。

下　臼

22点のうち約½の残存率を有するものが１点、⅓のものが１点、¼のものが３点、⅙のものが１点であり、その内の第419図20、図版59―３は受皿部の一部、及び台部の側面のみが½残存する。他11点は受皿部の破片並びにその他の部位に関する小破片であった。石質は細粒安山岩が８点使用され、下臼22点の内の約半数を占めている。

図上復原により径が計測できたものは３点あり、18.8～20cmであった。この径は上臼の径とほぼ同じ数値であることが認められる。又、分画をほぼ割り出せたものは３例あるが（第416図14他２点）、その中で７分画と思われるものが１点あり、１分画内に施される副溝は８～９条と思われるものである（第414図12、図版59―１）。他の３例はいずれも８分画と思われ、分画内に施される副溝は、いずれも不規則に配されている。

すり合わせ面の磨滅は、上下臼に共通して言えるが、粉挽き臼のようにすり合わせ部（周縁部）にあまり関係なく、すり合わせ面の全体に磨擦痕が認められ、中には光沢をおびて、すべすべとした感じを呈しているものもある。この点については次のことが考えられる。茶臼は粉挽き臼に比べ「ふくみ巾」が極端に少なく（小さく）、ほぼ平坦なすり合わせ面を呈していることが起因とされ、それだけ回転時における摩擦度が大きいと言えよう。

芯棒穴はその全てが底部のえぐり面に貫通しており、その形状は小さなラッパ状を呈しているものがその大半である（第416図14）。しかし、粉挽き臼に施されているような大きくラッパ状を呈する穴は確認されなかった。

台部えぐり面の形状は、その全てが半月状を呈しており、これは上臼の回転時における震動などから下臼の安定度をより保つために施されたいわば機能的構造と言えよう。

台部の径を計測できたものは６点あり、24～38cmであった。此の台部の断面形状は、底面よりやや内傾しながら受皿部に達する「ハ」の字状のもの（第414図12、図版59―２）と、底面より受皿部にほぼ垂直に立ち上がるもの（第416図14）との２形態が認められる。

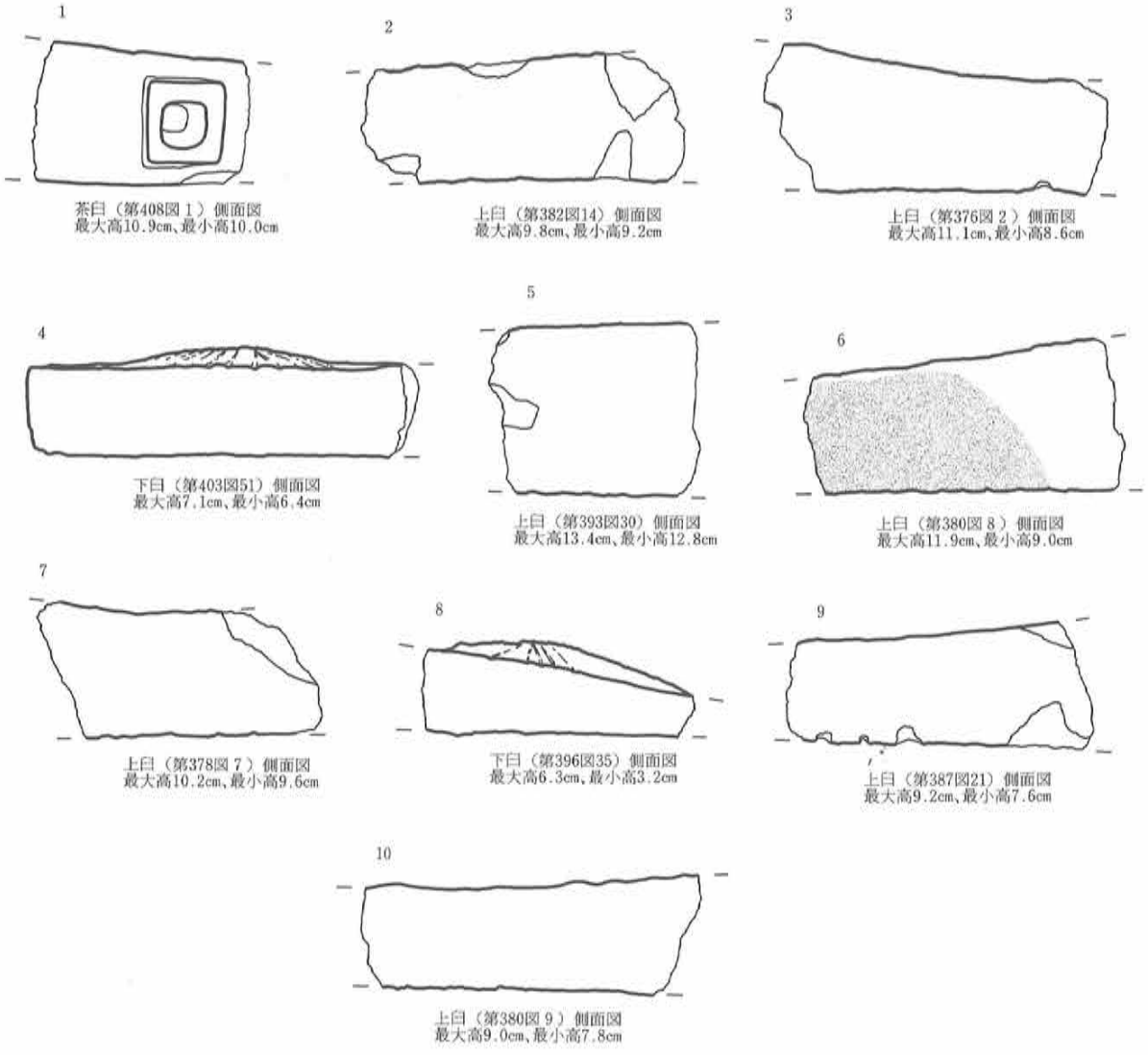
受皿（粉末化された製品を受ける部分）の径は５点が計測でき、28.4～39.6cmであった。此の受皿の内面加工は、極めて丁寧な仕上げが施されるものがその大多数である。此は、当部分が仮に粗野な仕上面（凹凸の著しい面）であったなら、粉末化された製品がこの凹凸に入り込みその機能が半減するためであろう。

その意味では受皿の内面に漆が塗布された破片が１例検出されていることは、上記の点を防ぐための好事例と言え、又装飾的な効果も十分兼ねていることが考えられるものである（第420図21、図版59―５）。本片は受皿の一部分しか残存しておらず、そこに付随する台部の形態及びすり合わせ面の形態等は明らかではないが、受皿の

径を計測できた５点の中では39.6cmを測るものであり、最も大きな径を有するものであった。ところで、こうした漆が塗布された茶臼の出土例としては、開善寺境内(註8)（飯田市川上路）より受皿の上縁部が１片出土しているようであるが、あまり出土例がないものと思われ出土品としては貴重な事例と言えるであろう。しかし、寺院等の所蔵品として保管されている例は大泉寺(註9)（甲府市館(やかた)）の外、数例あるようである。

出土した茶臼下臼の中で極めて小型に属するものが１例観察される（第416図15、図版58—９）。図上復原により台部径24.0cm、すり合わせ面の径18.8cmを測り、台部の底面はほぼ平坦を呈し、台部高も約2.3cmと他の茶臼に比べ極端に低いことが認められる。仕上げも他の類例とを比較すると全体にきめこまかな仕上げが施され、特に受皿部、そして台部の側面等は研磨による丁寧な仕上げが観察される。又、この茶臼は他の類よりもはるかに濃い黒色の染み込みが観察され、形態上の相違、並びに仕上加工の緻密さなどから何か特別な用途に使用された茶臼であろうと推察される。

下臼の台部側面及び上臼の胴部側面の仕上げはノミ状の工具による「たたき模様」が顕著に施されている（図版59—４）。これは丁寧な研磨が当部に施された後、更に、装飾効果を兼ねて行なわれるものである。



第374図　石臼・茶臼の器形の歪むもの

6　石擂鉢、搗き臼

本遺跡からの出土総数は35点であり、内3点の種別は小破片で不明である。

破片の残存形態は⅔を有しているもの1点、½のもの10点、¼のもの4点、他に台部の破片½を有しているもの3点であり、他は胴部～口縁部に至る破片17点であった。従って½の残存率を有するものが約⅓を占め比較的多く残存していることが判明した。そして又、此等の破片、特に内面の形状から対象物となる原料を、杵を回転させることによって粉砕する「擂鉢」と、一方、杵による打撃力から原料を粉砕する「搗き臼」との2種類に分類できると思われた。従って、この2つを分けてその概略を記してみたい。尚、出土した破片の中に「シデ鉢」と思われるものがあり(註10)、灯明用に使用されたと思われるものがある（第426図14、図版62—6）。

(1)　石擂鉢

石擂鉢と思われるものは24点が認められる。

図上復原により径を測れたものは9点あり、23～33.2cmであった。このうち最大径を計測できたものは把手が造り出しとなっているものである（第424図5、図版62—3）。高さは8点が確認でき、11～14.2cmであった。

内部のすり面（使用面）の深さを計測できたものは8点であり、6.8～8.8cmが認められる。又、全体の外面形態で台部を有するもの（第427図16、図版61—1）と、当部を有していないもの（第426図15、図版62—2）との2形態が認められる。

外面の側面部形状は、やや丸みを呈するもの（第426図15）と、底部からの立ち上がりがほぼ直線的に外傾して口縁部に接するもの（第427図18、図版62—10）の2形態が観察される。

此等の中で台部を有するものは6点が認められ、その厚さはいずれも約5～6cmと非常に厚い台部を有している。台部の断面形状は、底部よりほぼ垂直に立ち上るもの（第428図21）を除き、他は全て内傾気味に成形してある（第429図22）。この点については次のことが推察されよう。つまり、外見からの見ばえの良さを想定し、あえて内傾気味に成形したと言うよりは、むしろ擂鉢として杵を回転させるための機能を考えると、より安定度のある大きな台部が必要とされたのであろう。そこには当然、前記した5～6cmという厚い台部が要求され、又、台部の側面を内傾させることにより、より安定度を増すための工夫がなされたものと言える。又、第424図5、図版62—3の把手が作り出されるものについても、残存する破片の形状より台部の形態は、やや内傾を呈するものであったことが考えられる。

外面底部は平坦を呈するものと、やや半月状に浅くえぐられているもの（第429図23）とがあり、後者の類例は4点であった。又、台部を有するものでは、その総てが平坦な面であることが観察された。

外面の成形は、その総てが金属工具による粗い仕上である。しかし台部を有するものに関しては、当部に若干の研磨が施されていることが伺われる。

口縁部の形状は平坦を呈するもの（第429図24）と、丸みをおびるもの（第423図3）とが観察でき、此の部位の仕上げは軽い研磨がなされており、外面の粗い仕上げ方法とは対照的な様子がうかがわれる。

内部使用面（すり面）の断面形状は、口縁部より急な角度をもって底部に達し、その底部の形状は平底を呈するもの（第426図15）と、緩やかに底部に達し、その底部の形状が丸みをおびているもの（第429図24）とがある。そして、この内部使用面の形態から前者は「搗き臼」に属する部類と思われ、後者は「石擂鉢」に属すると思われるのである。つまり、石擂鉢と定義付けした点には、その使用面より次の2点が看取されると思われた。

1　上記した石擂鉢の内部使用面を更に観察すると、底部径及び口縁部径（上縁部径）が大きく、広く施され石擂鉢としての機能面に適する。

2　石擂鉢の機能面から、使用面には「磨擦痕」が顕著に認められ、その内面形状は全体になめらかであり、一部には光沢をおびる箇所がある。

以上の点から内部使用面に石擂鉢としての機能上の特徴があるものと思われた。そして又、「光沢」については、石擂鉢の機能をより促すために、内部使用面の成形の際に若干の「磨き」が施され、更に、そこへ杵による回転が加わったためでもあるように推察された。こうした点に対し、一方の搗き臼の使用面には凹凸が著しく残存しており、搗き臼としての機能上の特徴がやはり内部使用面に認められた。つまり、擂鉢24点に使用される石質は細粒安山岩が最も多く13点であり、次にその他の安山岩が５点使用されている。一方、搗き臼11点に使用される石質はその他の安山岩１点を除き、他は総て黒色多孔質安山岩である点に大きな違いが認められる。この石質の違いは、搗き臼と石擂鉢との機能上の相違、並びに上記した内部使用面の相違にも大いに関係し、あえて搗き臼には多孔質の石材を選び、その使用面は当初より磨きを施さなかったものと推察され、一方の擂鉢にはその機能面から細粒安山岩が適しており、若干の磨きが使用面に施されたものと考えられる。

さて、出土した擂鉢の中に造り出しの「片口」を有するものが２点確認される。このうちの１点は、約½の残存が認められ、出土した擂鉢及び搗き臼の中では、最も重量感のあるものである（第427図16、図版61－５）。

この片口の形態は、口縁部からやや張り出し気味に造り出されており、縦4.4cm、巾2.4cm、深さ0.8cmを測り、器形全体の大きさからはきわめて浅く施されている。内面の使用部断面形状は、緩やかな半月状を呈し、その内面はゆるやかに外傾して口縁部に達している。又、当部には使用時と思われる杵の回転による磨擦痕が顕著に認められ、かなりの使用度が伺われる。そして、他の擂鉢、搗き臼に比べ底部面が著しく黒色に変化している点が注目され、その範囲は片口にまで及んでいる。このことは、かなり主体的に「そそぎ口」としての機能が果されていたと言えるであろう。又、本擂鉢の台部は、高さ（厚さ）５cmを有し、その断面形状はやや丸みを呈しており、他の台部とは若干の相違が認められる。

他の１点は、主に片口の部分のみが残存する破片であり（第427図17、図版62－８）、器形及びその形態等は判別できなかった。しかし、片口の規模は縦4.0cm、横2.4cmと上記したものよりは小さめなものであることが認められ、器形全体も上記のものよりは若干、小規模なものであることが推測される。

把手を有する破片が一点確認されており（第424図５、図版62－３）、図上復原から径は33.2cmと、擂鉢、搗き臼の中では最大径を測るものである。把手の平面形態はほぼ正方形を呈しており、当部は側面の最上部に施されている。尚、本遺物は回転実測により図上復原をしたため、把手は相対する位置にあるが、前橋市「下東遺跡」からも同様な擂鉢が完形品で出土していることが指摘されており(註11)、この遺物には、造り出しとなる把手の相対部に「片口」が施されていることが報告されている。こうした事例から、本擂鉢においても、把手に相対する位置には、片口が施されていた可能性も有り得ると考えられる。

(2)　搗き臼

出土した中で搗き臼と思われるものは第423図１の他10点である。擂鉢との形態上の違いは前述したように、内部使用面の形状に最もよく観察できる。つまり、搗き臼の使用面は口径と底径の差が極めて小さく、狭い点が認められ、それは擂鉢との機能上の相違点からおのずとこうした作りが施されたものと考えられる。

外面の形状は丸みをおび、高さも擂鉢に比べ全体に低いことが特徴と思われる。又、出土した搗き臼と思われる類のものには、台部が施されておらず、外面の底部面が浅く掘りくぼめられていることも一つの特徴と言えよう（第423図３、図版60－５）。石質は11点の内、その他の安山岩１点を除く他の10点総てが黒色多孔質安山岩である。

これらの外に特殊な形態を示すものがあり、第428図20、図版62－11は出土した石擂鉢類の中で最も小規模なものである。高さは11.2cmと極めて低いことが認められる。しかし、器形は総じて厚く、底部は約4.6cmの厚さを測り、著しく肥厚している。その反面、使用面は非常に浅く残存形状から内面底部（使用面）は「皿状」を呈するものと考えられる。

他に、そそぎ口が施されていると思われる例として第423図3、図版60－6がある。本遺物は前述した擂鉢の「片口」とは違い、丸みをおびる口縁部に三条の溝が刻み込まれている。その形状は規則性がなく、いわば粗悪な作り方とも言える。従って、粉砕物をそそぐための機能が果せたものなのか疑問であり、又、仮にそそぎ口としての機能をもつ溝であったならば、此の三本のそそぎ口は機能上にどのような効果をもつものであったのか不明であり、その性格は判然としない点が多い。

「シデ鉢」と思われるものが一点確認される（第426図14、図版62－6）。此は灯明用の鉢とも考えられ、内面の底部断面形状から皿状を呈していることが確認できる。そして当部には、著しく煤状のものが付着し、真黒に変色している点が注目される。尚、台部は他の石擂鉢類には観察できない丁寧な磨きが施されている。石質は細粒安山岩である。

まとめ

本調査により検出された粉挽き臼、茶臼、石擂鉢（搗き臼）等の破片総数は146点を数えた。此等の石臼に用いられた石質は、黒色多孔質安山岩、細粒安山岩、その他の安山岩、玻璃質安山岩であった。此の内、粉挽き臼は75点が確認され、その内の41点が「その他の安山岩」であり半数以上を占めている。一方、茶臼は36点中の19点が「細粒安山岩」であり、その他の安山岩は6点と極めて使用数が少ないことが伺われる。これは石臼のもつ機能面及び用途の違いからであろうか、使用される石材に明らかな相違が認められる。このことは、石擂鉢類にも同様なことが言え、搗き臼のそのほとんどは黒色多孔質安山岩が使用されるのに対し、擂鉢は大半が細粒安山岩である。そして、その石材の相違は、粒挽き臼、茶臼よりはむしろ「搗き臼」と「石擂鉢」とに歴然とした違いが観察される。これは、前述したように両者における機能上の違いに大きな要因があるものと思われる。つまり、搗き臼は主に杵を搗いて原料を砕くため、その内部使用面はザラザラとした面を有する多孔質系の安山岩がより適し、効果的に粉砕できるものと考えられる。その一方、石擂鉢は杵を回転して物を砕くという機能面から、若干のザラザラとした使用面を用するものの、ある程度の滑らかさが必要とされよう。このような点から擂鉢には多孔質系の石質よりは、むしろ細粒安山岩が多く使用されているものと思われるのである。

こうした石臼類は、前述したように完形品は一点もなく、その総てが破片であった。此の中で粉挽き臼、茶臼に関する破片を、その残存する形状別に大別すると次の3種類に分けることができる。

1　ほぼ½の残存率を有し、その割れ口が直線的であるもの（第400図45、図版56－1他）。

2　ほぼ一分画の大きさで破損され、その形状が「扇型」を呈しているもの（第396図35、図版57－1他）。

3　不規則な破損形状を呈するもの。

この内、1、2の残存片と、3とに観察される相違点は、煤の付着と思われる黒色に変色している状態が対照的である。つまり、1、2に認められるその大半の破片については火を受けたことによって生ずる黒色の変色は認められず、一方、3の破片には、そのほとんどが側面部まで変色していることが確認される（図版56－6）。このことは、いわば1、2の様に規則的な残存形状を呈する破片にあっては火を受けた可能性が少ないとも言え、3の不規則な破片形状を残すものについては、火を受けたことによる煤の付着が顕著であるとも言えよう。

そして、此の煤の付着について考えられることは、大井城はたびたび兵火にあい焼失[註12]したことが伝えられていることから、その際に生じたことも推察される。

又、1、2における破片の形状からは、使用に堪えなくなった臼を単に割って廃棄したものなのか、それとも、その「割る」ということ自体に何らかの意味が意図的に含まれていたのか、その正確な位置付けはできなかった。しかし、茶臼片36例中の14点は、ほぼ規則的な破損形状を呈していること、更には粉挽臼の下臼½片（第400図45外2例）などの残存形状からは、単に割って廃棄しただけのものとは考え難いことが伺われる。

この点について三輪茂雄氏『臼』によると「各地の臼にまつわる民間伝承からうかがわれることは、過去の日常生活の中で臼が果す役割はきわめて大きく、特に食物を扱う道具ゆえに神仏が宿るとされる風習があった」とされ、その廃棄処分の方法も多種であった様である。中でも「霊ぬき」と称し、石臼を二つ割りにすることによって普通の石と同じように処理したとされる伝承(註13)、更には、木の搗き臼に関しても同様な例として、割った臼片を近隣に分配した風習(註14)が各地に残されているようである。このように「割る」ということ、或いは「割って」処分するということのもつ意味は、長く親しんだ物に対する敬虔な念が込められた素朴な信仰形態の一面とも言えるであろう。

こうした石臼類146点の中で、粉挽き臼の上臼39例に関しては、その大半が薄い器形でありかなりの使用度が認められる。それは「目たて直し」の痕跡を顕著にとどめているもの或いは、磨滅によりすり合わせ面が挽き手穴に接してしまい、新たに挽き手穴を設けているもの等から類推することができよう。

機能面における粉挽き臼と、茶臼との各部の特徴、相違点等は前述したが、両者を外観すると、その仕上げ加工にも大きな違いが認められる。即ち、粉挽き臼は全体に粗野な作りが観察されるのに対し、茶臼は側面を始め各部に研磨が施され、非常に丁寧な仕上げが認められる。特に側面部における仕上げにはその傾向が顕著であり、茶臼には研磨が施されるか、若しくは、その研磨がなされた後、当部にはノミ状工具による丁寧な「たたき仕上」が施されている（図版59—４）。

此のたたき模様は、茶臼上臼の引き手穴同部に施される正方形の刻み（第408図１、図版59—７）、更には下臼の受皿片で認めることができた漆の塗布と同様に装飾的効果を兼ねているとも言えるであろう。この様に粉挽き臼には認めることのできない各部における仕上げの施し方等から、茶臼は特別な階層の中でのみ使用された貴重なものであると共に、至高品的な価値をも兼ねていたことが伺われる。

ところで、此の茶臼は火薬製造のために流用されたとする説(註15)がある。つまり火薬を製造するに当っては、「木炭粉」、「硝石」等を細粒しなければならず、その際に茶臼が用いられたようである。その１例として「東京都世田谷区立郷土資料館」には、火薬製造用の茶臼が保管されており、又、福島県郡山市の「中村館跡(註16)」における報告からは、石臼が使用された可能性が十分考えられるとしている。この点について本遺跡から検出された石臼類及び遺構等からはそのことを直接に推察でき得る資料は認められなかった。しかし、火薬を製造するまでの過程を思考した場合、そこには先ず、木炭や硝石、更には硫黄等を粉砕化する必要性がある。その際には当然、粉挽き臼、茶臼のみならず「石擂鉢」、「搗き臼」等の流用も考えられると思われるのである。つまり、仮に木炭を粉砕化するならば、先ず、搗き臼などで粗く砕き、その砕かれた木炭を粉挽き臼等により細粒粉化し、更にはそれを茶臼、石擂鉢、或いは、薬研等で微粉化する行程が考えられよう。その意味からすると、本城跡から出土した石擂鉢（第429図23、図版61—４）、搗き臼（第425図11、図版60—２）、そして粉挽き臼（第382図14、図版51—３）などの使用面には炭素の付着及び侵透などが顕著に認められるものもあり、此の様な点からは「火薬製造説」を推考でき得る一類例とも言えるのではないだろうか。

そして又、石臼類によって硝石、硫黄等を細粒化したとするならば、当然、その原料別に石臼を分けて取り扱う必要があろう。でなければその原料の性格からして危険性が生じ、同一臼での粉砕は憂慮されるものと考えられる。しかしながら本出土中の臼類には、それらしきことを推考できる資料は認められなかった。

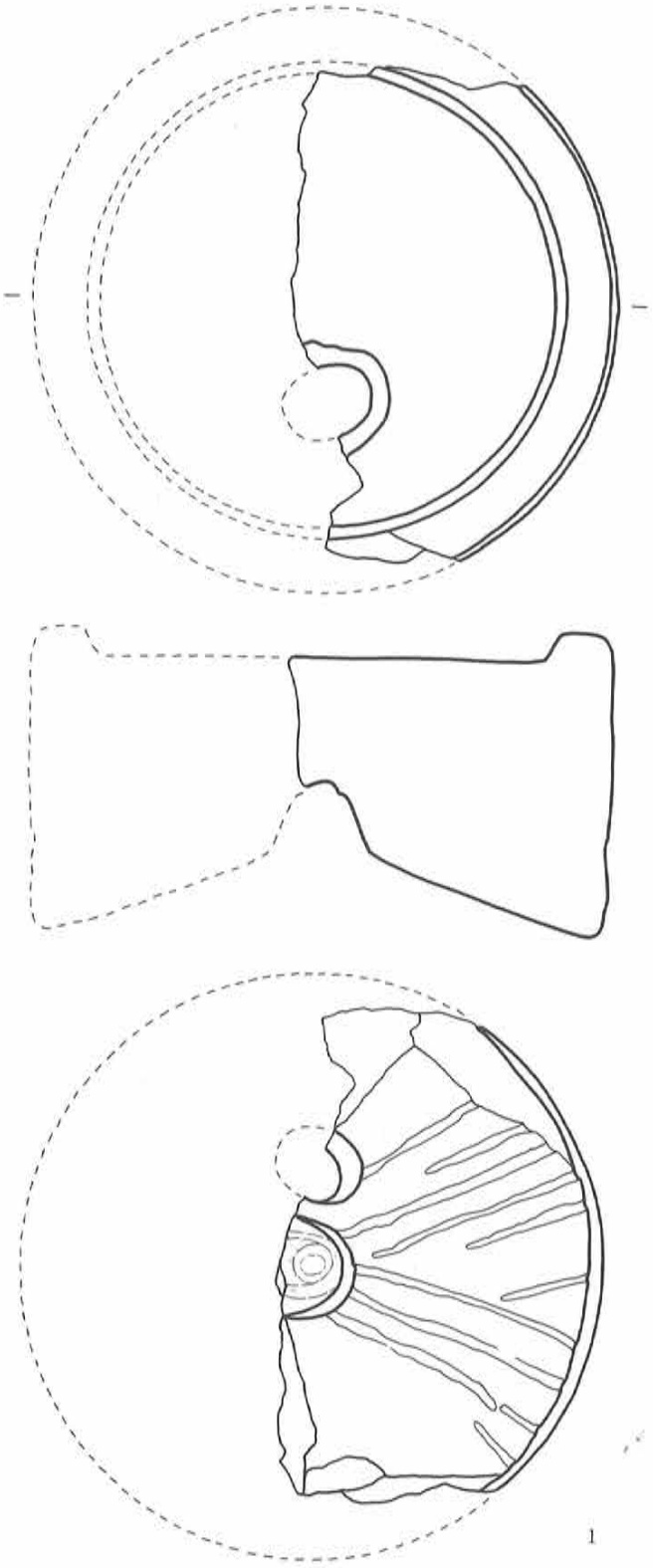
さて、検出された石臼と遺構との共伴性であるが、冒頭にも述べたように竪穴遺構54基、土坑286基、溝２基等が検出された。しかし、此等各遺構における覆土層の堆積状況は、第36図Ta—29号竪穴遺構で確認されるように、そのほとんどが自然堆積でなく、むしろ、人為的な覆土層で形成されていることが看取された。このことは同遺構内より多量に検出された石類からも推考でき得ることと思われる。つまり、城郭の攻略者が落城させた後、各施設の再構築の目的のために、あるいは城郭の使用者が各施設の再構築の際に埋め戻し、整地した時点で石類及び石臼などが遺構内に廃棄されたものと思われるのである。それは又、出土した石臼片からも推察され、全く

の別遺構より出土した破片が接合されることからも理解できよう。こうしたことからも本石臼と遺構との共伴性は少ないものと考えたい。

以上のことを踏まえて、今回大井城跡より検出された石臼類を概観するならば、146点という数量は、一般的な生活に伴なう装備数からは多量な出土と言わざるを得ないであろう。こうした多量の石臼、石擂鉢等が本址より検出されたその背景を思考すると、本址は北側より石並(いせならび)城、王城、黒岩城の三城を合せて通称大井城と呼ばれている。今回発掘調査が行われた区域は、その中で主に「黒岩城」と称される最南端の舌状地であった。よって発掘した区域は本址の規模からすると一部の狭い範囲であり、又、上記した点から、石臼が装備されていたであろうその種の遺構を看取することはできなかった。このことから検出された石臼類は、本城郭址のいずれかの地に石臼の機能を装備しうるある種の空間をもつエリアがあったものと想定される。それは、例えば精粉をするための「場」をもった施設が装備されていたことも考えられるのである。

註

1　三輪茂雄　1978　「第5章　粉挽き臼の歴史」(『臼』)
2　愛知県陶磁資料館　1984　(『企画展―瀬戸の染付陶器』)の表紙カラー図版に掲載される茶臼。同館によると、S59.7～同9まで出展された。
3　福島県教育委員会　1981　「二ノ丸土塁発掘調査報告書」(『梁川城跡』)
　上尾市教育委員会　1985　(『第22集　西通Ⅰ遺跡』)
　浪岡町教育委員会　1986　「昭和59年度浪岡城跡発掘調査報告書」(『浪岡城跡Ⅷ』)
　一戸町教育委員会　1983　「昭和58年度発掘調査概報」(『一戸城跡』)
　　1984　「昭和59年度発掘調査概報」(『一戸城跡』)
　八戸市教育委員会　1982　「八戸市埋蔵文化財調査報告書第12集」(『史跡根城跡発掘調査報告書』)
　　1983　「八戸市埋蔵文化財調査報告書第14集」(『史跡根城跡発掘調査報告書』)
　栃木県教育委員会　1981　「栃木県埋蔵文化財調査報告書第36集」(『赤塚遺跡』)
　葛西城跡調査会　1975　(『青戸、葛西城址調査報告　Ⅲ』)
4　御代田町教育委員会　1985　「長野県北佐久郡御代田町野火付遺跡発掘調査報告書」(『野火付遺跡』)
5　尾寺町教育委員会　1978　「世良田小学校改築工事に伴う発掘調査」(『長楽寺遺跡』)
6　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985　(『浜町屋敷内遺跡C地点』)
7　三輪茂雄　1978　(『第6章　茶臼』)
8　註7に同じ。
9　註7に同じ　武田信玄が愛用したと伝えられる通称「いぼ丸」といわれる茶臼の完形品が収蔵されている。
10　浪岡町教育委員会　1986　「昭和59年度浪岡城跡発掘調査報告書」(『浪岡城跡Ⅷ』)
11　註6に同じ。
12　佐久市教育委員会　1984　「大井城関係年表」によると『龍雲寺文書』、『大田山実録』、『新撰和漢絵図』に見られるという(『大井城』)
13　三輪茂雄　1978　「第7章臼の民俗」(『臼』)の中で、山口県大島郡久賀町立歴史民俗資料館長、松田国雄氏によると「げんのうなどで二つ割りにして捨てた」と記されている。
14　註3と同じ章で(『民間伝承』2巻8号、S11)によると、諏訪の山浦地方は一般にこの様な風習があったようである。
15　世田谷区立民俗資料館、稲木氏の御教示によると当石臼(茶臼)は、付近の家から寄贈されたもので、同館に提供の際「代々幕府の火薬倉を務めた家であり、火薬を製造する際に使用した臼であった」と当家の人が語ったとのことで、本文での火薬製造のために石臼を流用した可能性もあり得るであろうとのことであった。
16　註1に同じ。

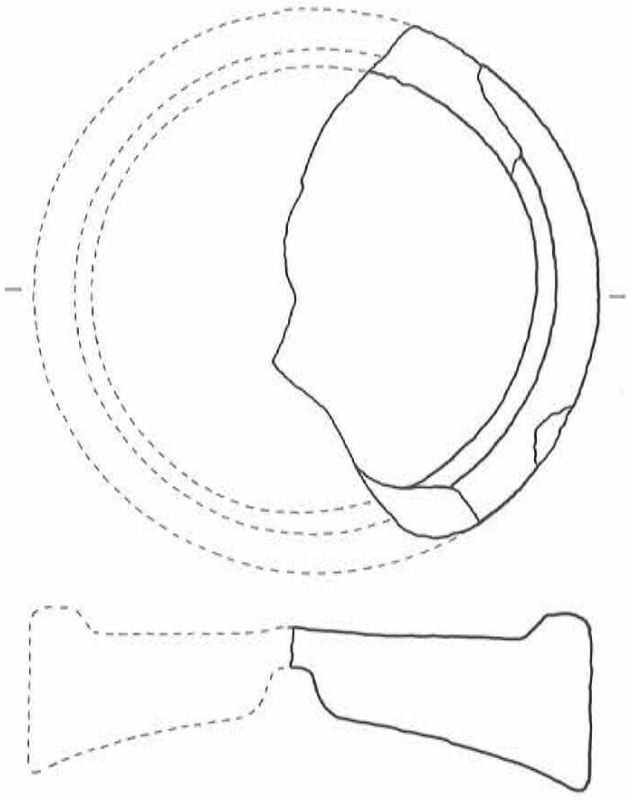


（mm）

挿図番号	出土臼		出土地点・遺構		直径	高さ	ふくみ
375-1	上臼1/2片		D265		(310)	162	44
	分画×溝	芯棒孔直径	石質		回転方向		供給口形状
	(6)×不明	(50)	黒色多孔質安山岩		左		——
備考	側面に煤が付着し、火熱によるものと思われる。本遺跡より出土した上臼の中では約160mmの器高を測り、最も高いものである。ふくみは比較的大きい。すり面は磨滅が著しく、溝は判別し難い。						

0　（1：4）　10cm

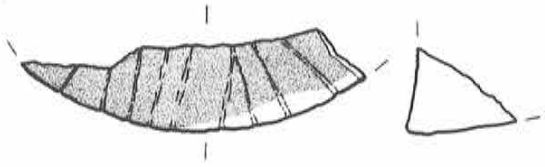
第375図　石臼　上臼実測図



2

(mm)

挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構		直　径	高　さ	ふくみ
376-2	上臼1/2片		D84		(300)	94	40
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質		回転方向	供給口形状	
	目なし臼	(29)	その他の安山岩		(左)	――	
備考	側面一部に煤状の付着が認められ、火熱によるものと思われる。 上縁の形状は不整に歪み最大高111㎜、最小高86㎜である。 すり合せ面（目なし臼）の形状は407-61に図した。						



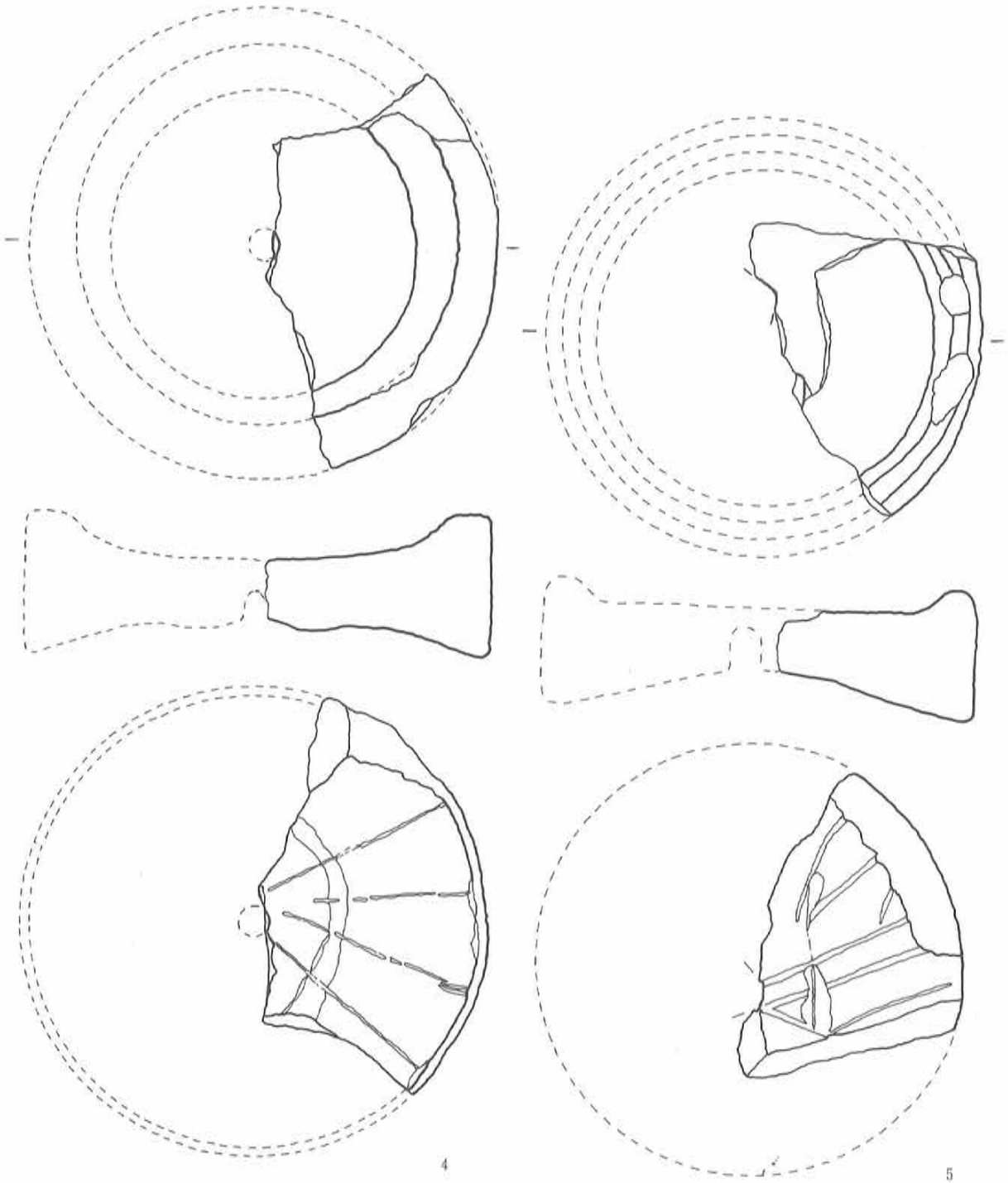
3

(mm)

挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構		直　径	高　さ	ふくみ
376-3	上臼破片		Ｔａ11		――	〈58〉	――
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質		回転方向	供給口形状	
	――	――	その他の安山岩		――	――	
備考	すり合わせ部及び側面は黒色に変色している（有機質の浸透によるものと思われ、特にすり合わせ部には著しく認められる）。						

0　（1：4）　10cm

第376図　石臼　上臼実測図



（mm）

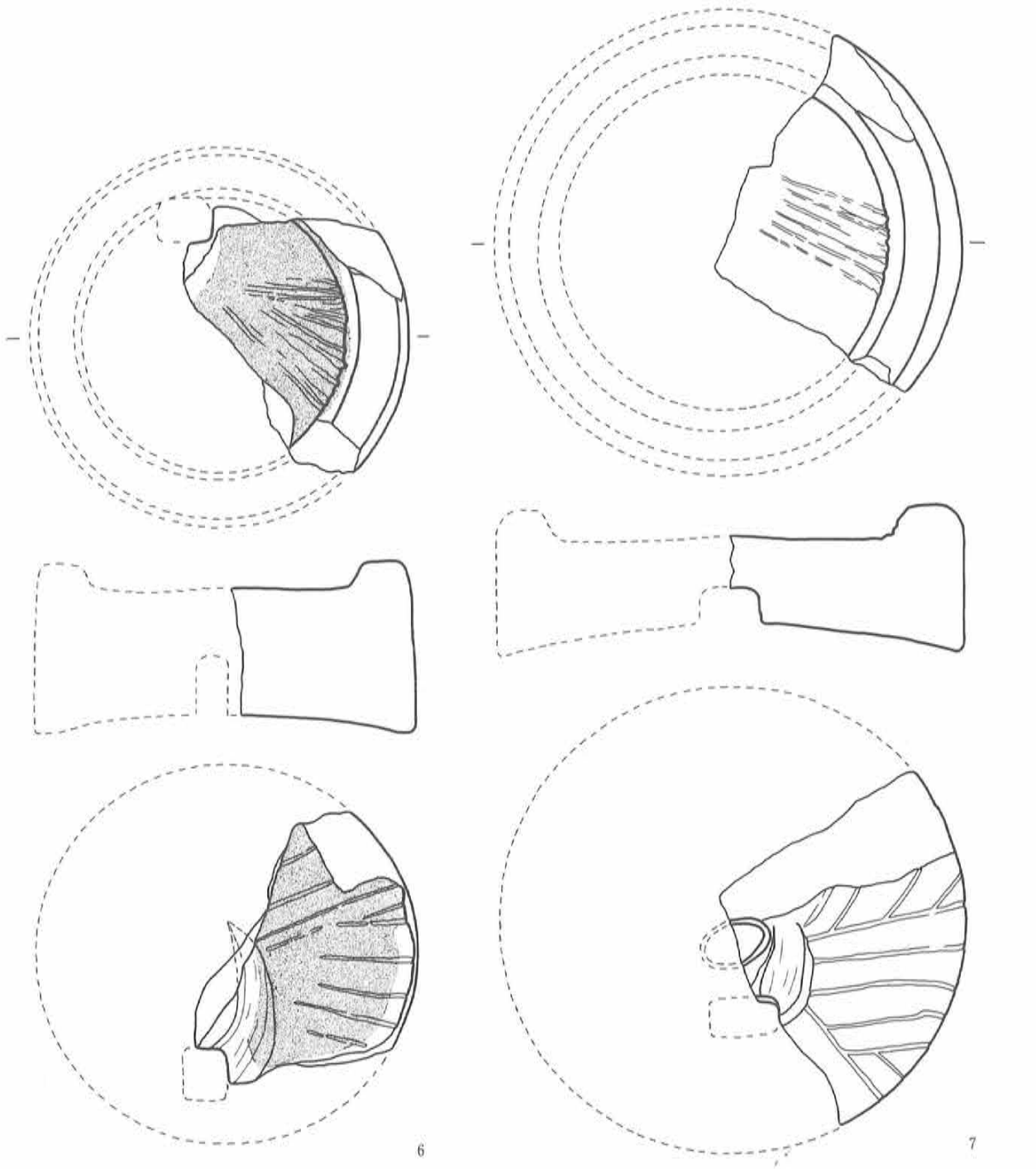
挿図番号	出土臼	出土地点・遺構	直径	高さ	ふくみ
377-4	上臼1/3片	D29	(300)	90	(20)
	分画×溝	芯棒孔直径	石質	回転方向	供給口形状
	刃こぼし（放射状）	(20)	黒色多孔質安山岩	(左)	――
備考	くぼみ面から上縁への立ち上がりは、ほぼ17㎜と浅い。すり面の磨滅は著しく、副溝はまったく認められない。しかし主溝の残存状況は良好であり容易に認められる。このことから副溝は製作時より刻まれなかったものと思われる。滑り止めと思われる溝がすり面に認められる。全体の成形は粗野である。器形の形状は不整に歪み、高低差は最大高98㎜、最小高92㎜である。				

（mm）

挿図番号	出土臼	出土地点・遺構	直径	高さ	ふくみ
377-5	上臼1/4片	か・き-11グリット	(280)	82	(30)
	分画×溝	芯棒孔直径	石質	回転方向	供給口形状
	――	――	細粒安山岩	左	(隅丸長方形)
備考	口縁断面の形状は丸みを呈する。すり面の周縁部は欠損しているものの残存する溝の状況から、周縁部まで達していたものと思われる。				

0　（1：4）　10cm

第377図　石臼　上臼実測図



（mm）

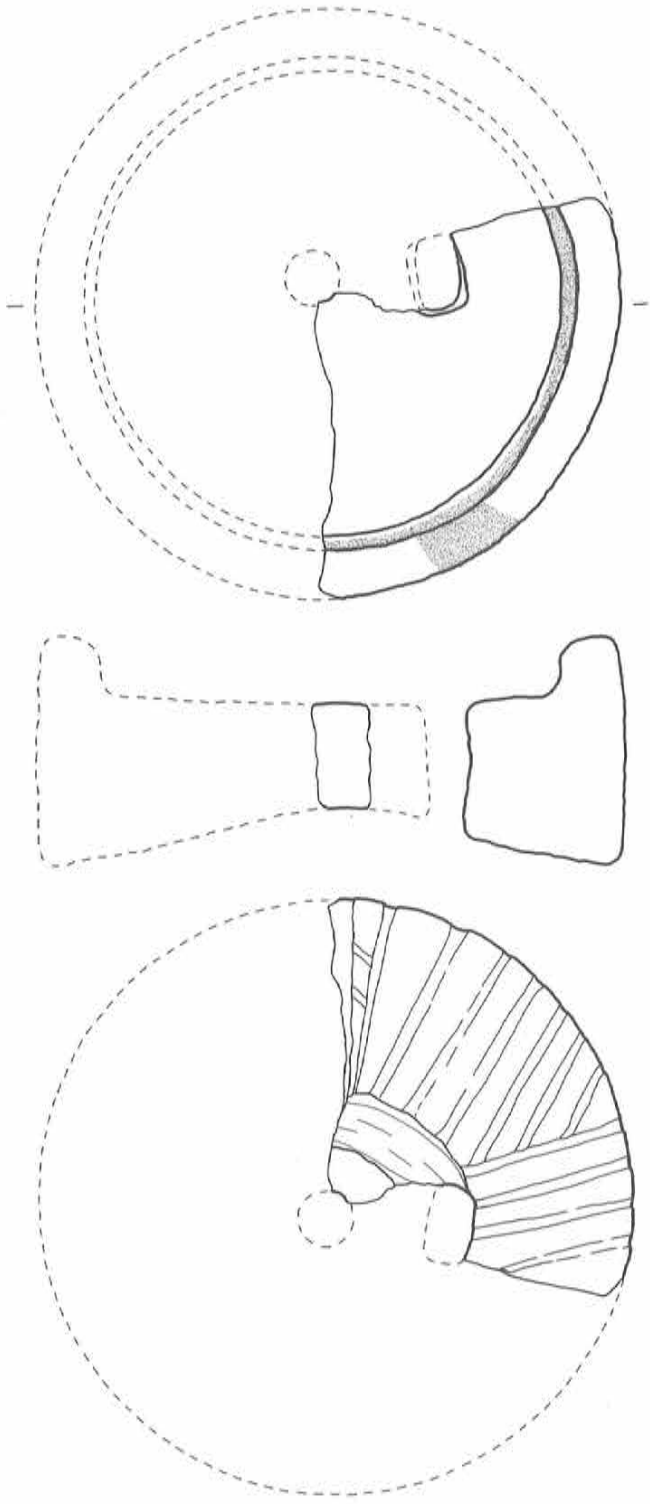
挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
378-6	上臼1/4片		D166	(243)	110	(12)
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向	供給口形状	
	——	——	その他の安山岩	——	(隅丸長方形)	
備考	供給面は、黒色に変色している（有機質の浸透によるものと思われる）。すり合わせ部は著しく磨滅し、光沢をおびている。よって溝は判別しがたい。					

（mm）

挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
378-7	上臼1/4片		D84	(300)	94	(20)
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向	供給口形状	
	(6×4)	(39)	黒色多孔質安山岩	左	(隅丸長方形)	
備考	「目こぼれ」が認められる。すり面は比較的磨滅が少なく、溝及びものくばりはほぼ旧状を呈するものと思われる。器形は不整に歪み、最大高102㎜、最小高96㎜である。					

0　（1：4）　10cm

第378図　石臼　上臼実測図

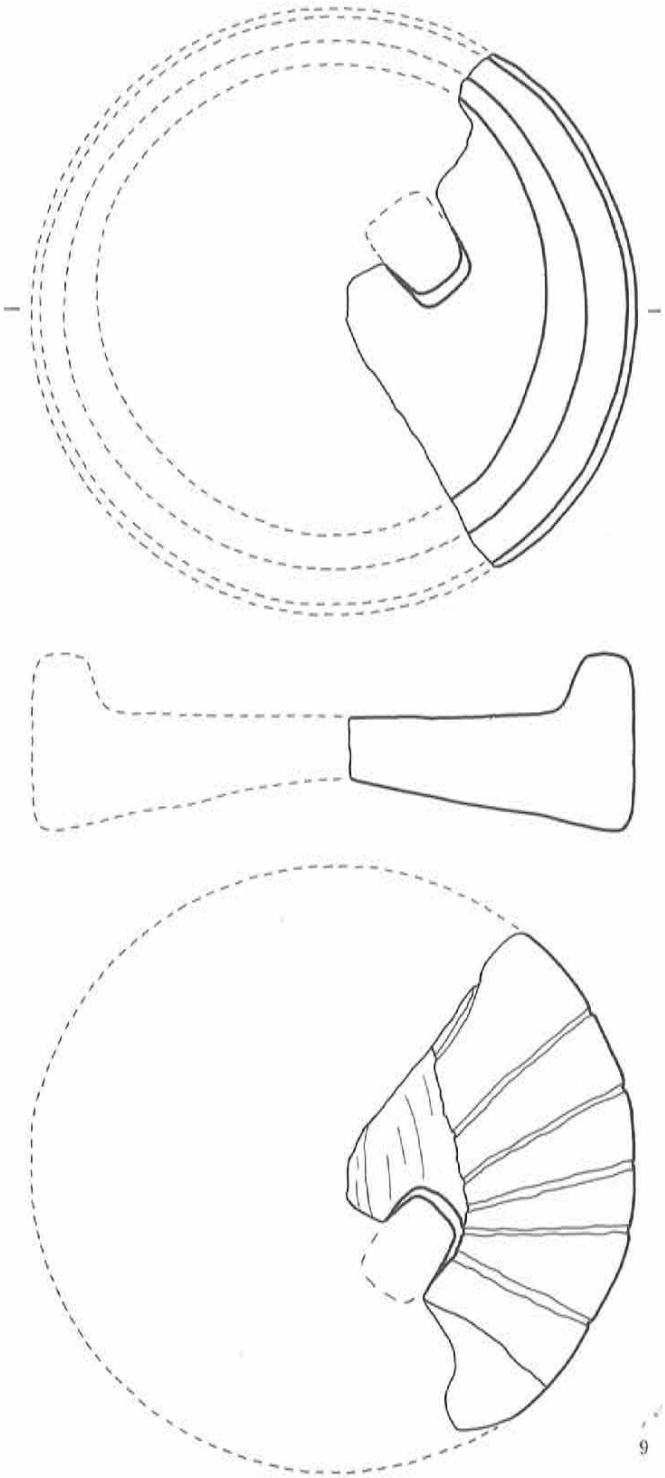


（mm）

挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
379-8	上臼1/3片		Ｔａ16	（316）	124	32
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向	供給口形状	
	(6)×7～(?)	——	その他の安山岩	左	（隅丸長方形）	
備考	側面には煤が付着し、一部赤褐色に変色している。よって強い火を受けたものと思われる。くぼみ面から上縁への立ち上りはほぼ垂直であり27㎜と深い（高い）。尚、口縁部、及びくぼみ面の一部は黒色に変色している。（有機質の浸透によるものと思われる）。すり面の磨滅は著しいものの、溝は深く幅広であり、整然とした刻みが施されている。周縁の形状は不整に歪み、高低差（厚い・高い）は、最大高119㎜で、最小高は90㎜を測る。					

0　（1：4）　10cm

第379図　石臼　上臼実測図

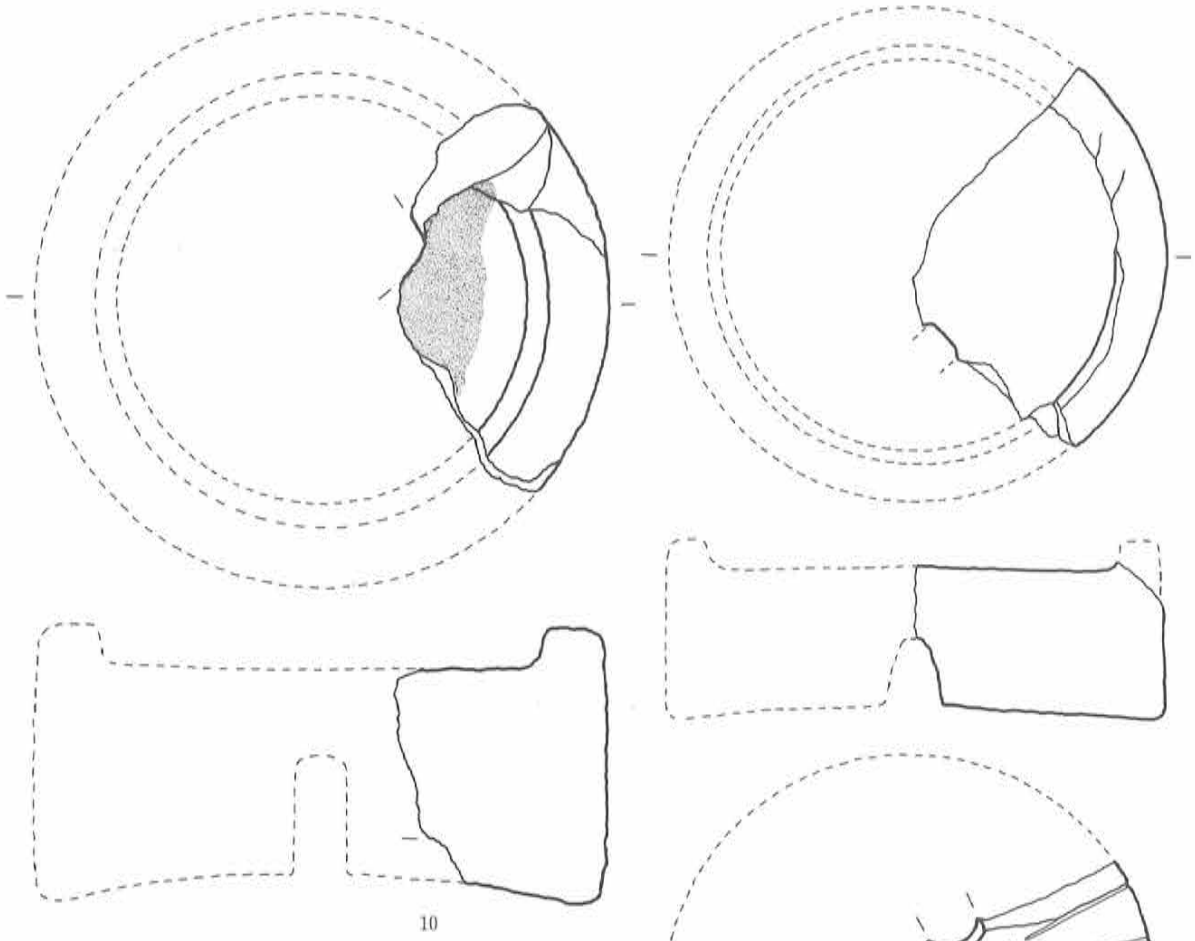


（㎜）

挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
380-9	上臼1/3片		D84	(320)	94	——
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向		供給口形状
	——	——	その他の安山岩	左		(長方形)
備考	くぼみ面から上縁への立ち上がりはほぼ垂直であり、28㎜と深い。すり合わせ面は磨滅が著しく、すり合わせ部は光沢を帯びている。供給口の形状は、不整長方形で大きい。口縁部から側面にかけ赤褐色に変色し、火を受けたものと思われる。形状は不整に歪み最大高90㎜、最小高78㎜である。					

0　（1：4）　10cm

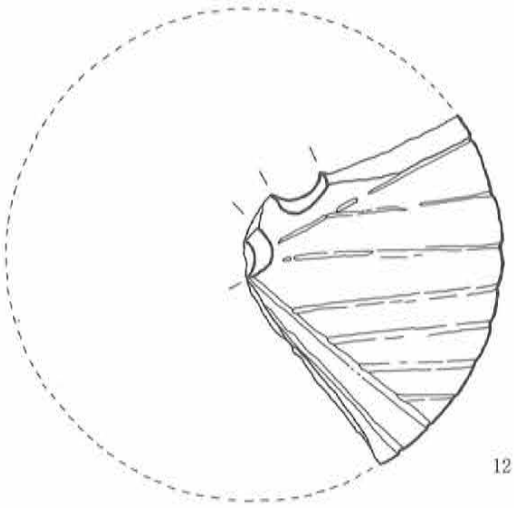
第380図　石臼　上臼実測図



10

（mm）

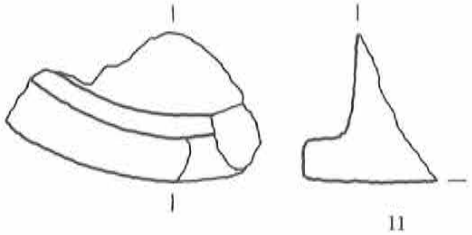
挿図番号	出土臼		出土地点・遺構	直径	高さ	ふくみ
381-10	上臼1/4片		表採	(304)	146	——
	分画×溝	芯棒孔直径	石質	回転方向	供給口形状	
	(目なし臼と思われる)	——	黒色多孔質安山岩	(左)	(正・長)方形	
備考	くぼみ面の一部は黒色に変色している（有機質の浸透か？）。すり合わせ部の磨滅が著しく、溝は判別し難い。					



12

（mm）

挿図番号	出土臼		出土地点・遺構	直径	高さ	ふくみ
381-12	上臼1/4片		D29	(268)	〈94〉	7
	分画×溝	芯棒孔直径	石質	回転方向	供給口形状	
	(6×6)	(30)	その他の安山岩	左	(長方形)	
備考	上縁の剝離面からくぼみ面及びすり面にかけて煤の付着が著しく、赤褐色に変色している。よって、火を受けたものと思われる。					



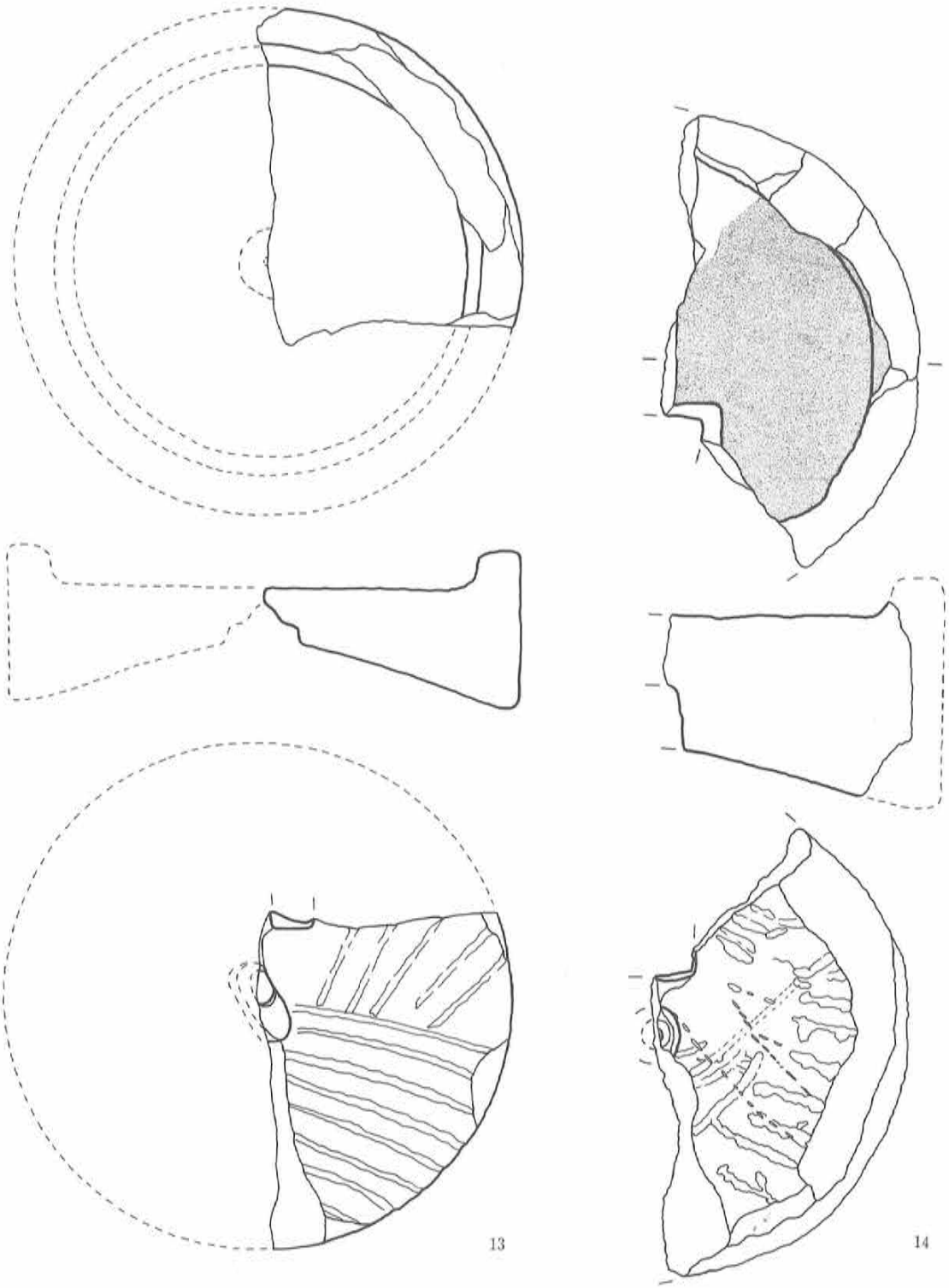
11

（mm）

挿図番号	出土臼		出土地点・遺構	直径	高さ	ふくみ
381-11	上臼破片		Ta11	不明	〈72〉	——
	分画×溝	芯棒孔直径	石質	回転方向	供給口形状	
	——	——	その他の安山岩	——	——	
備考	上縁の高さ（深さ）は約23mmと高く、ほぼ垂直にくぼみ面に達する。側面、及びくぼみ面にノミ痕が認められる。					

0　（1：4）　10cm

第381図　石臼　上臼実測図



（mm）

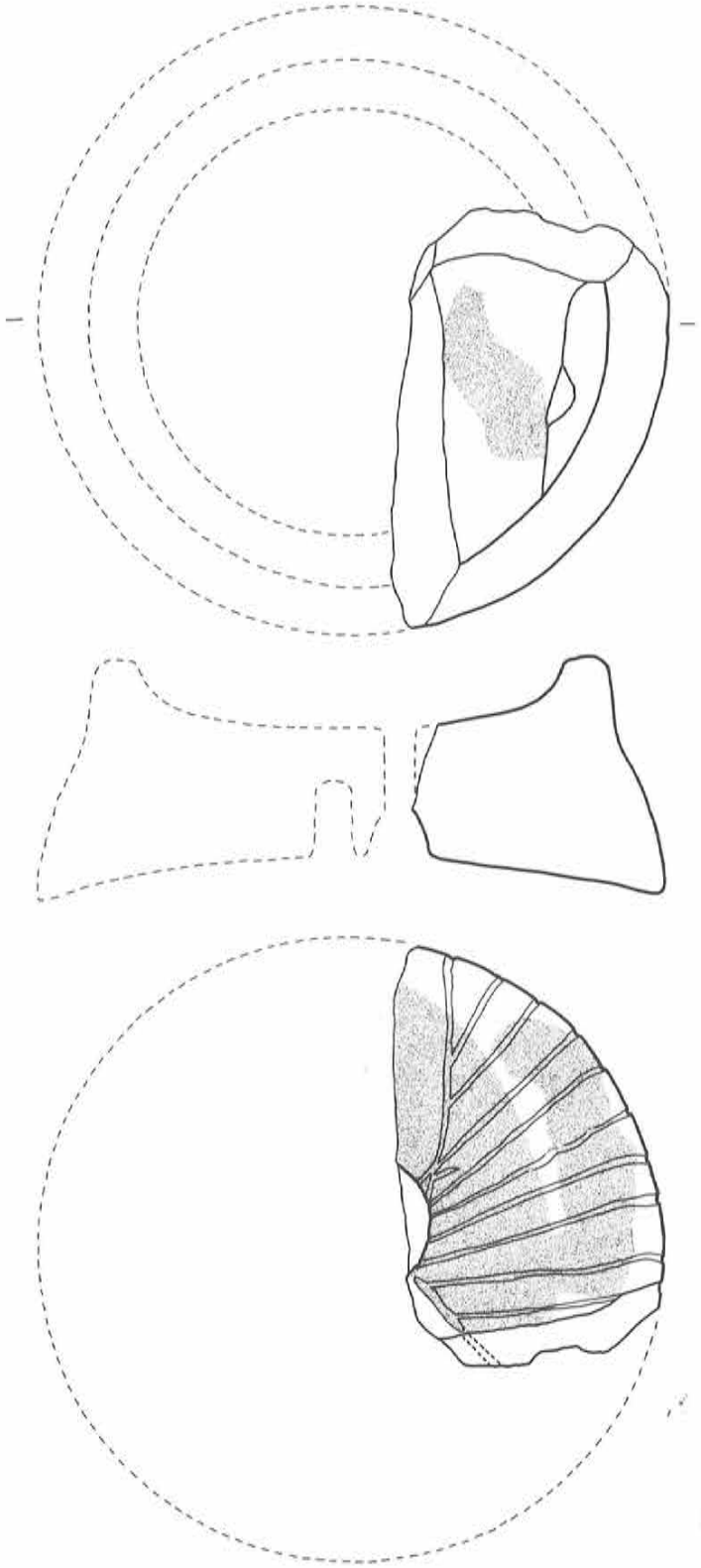
挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
382-13	上臼1/4片		D236	(316)	98	40
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向	供給口形状	
	——	——	細粒安山岩	左	——	
備考	上縁の高さは、25～30mm位でほぼ垂直に立ち上がり深い。ふくみは著しく大きい。側面一部、及びすり合わせ面に煤が付着しており、火熱によるものと思われる。					

（mm）

挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
382-14	上臼破片		M1	——	〈121〉	——
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向	供給口形状	
	——	——	その他の安山岩	——	隅丸方形 or 隅丸長方形	
備考	くぼみ面及び供給口は、黒色に変色している。（有機質の浸透か？）。すり合わせ面は磨滅が著しいものの、溝はすり合わせ部の一部に確認される。					

0　（1：4）　10cm

第382図　石臼　上臼実測図



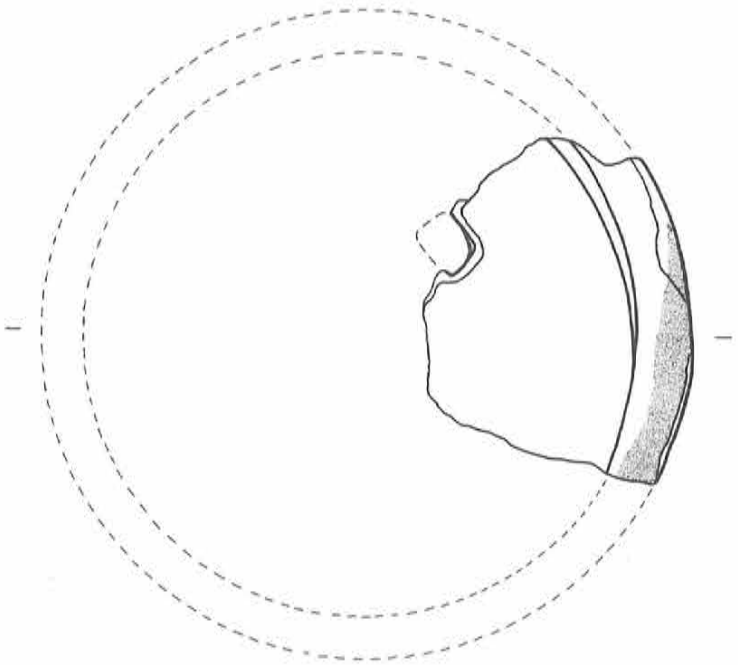
15

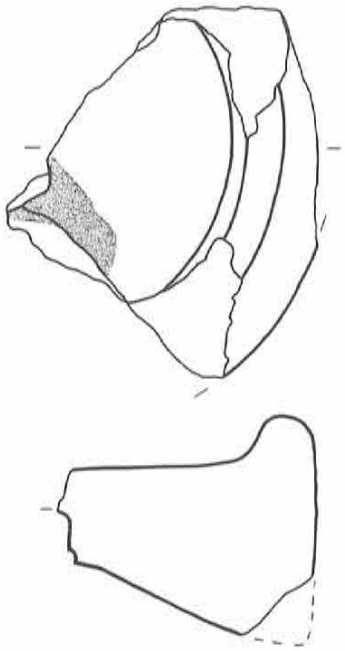
（mm）

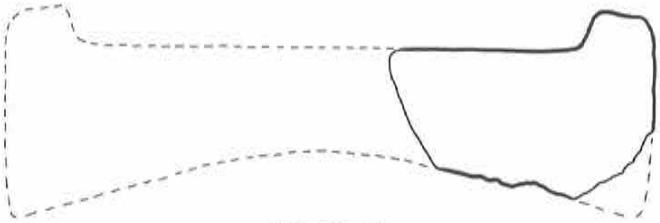
挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
383-15	上臼1/4片		D72	（337）	130	（23）
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向	供給口形状	
	（4）×不明（放射状）	（21）	その他の安山岩	（右）	——	
備考	くぼみ面及びすり合わせ面は黒色に変色している（有機質が浸透しているものと思われる）。溝は周縁部まで達している。					

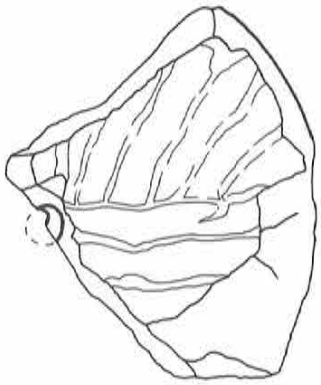
0　（1：4）　10cm

第383図　石臼　上臼実測図

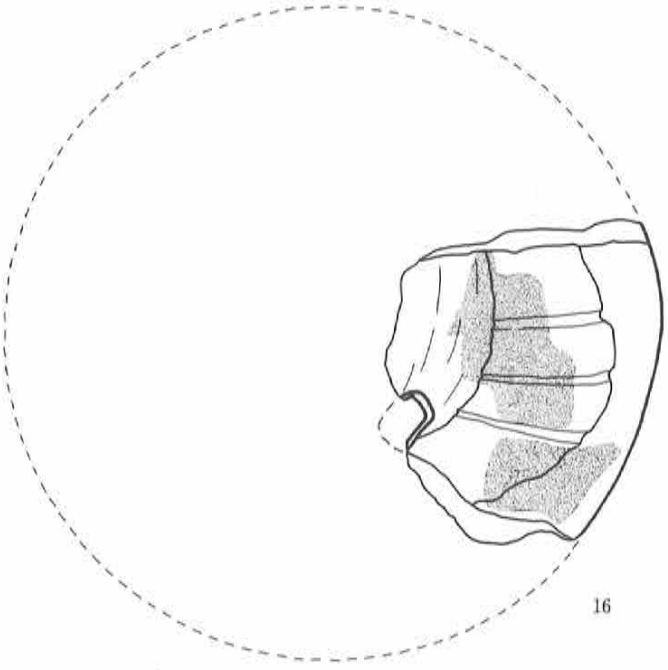








17



16

挿図番号	384-17		
出　土　臼	上臼1/5片		
出土地点・遺構	き・く-10グリット		
直　径	―― mm	高　さ	〈116〉mm
ふくみ	―― mm		
分画×溝	――		
芯棒孔直径	――		
石　質	その他の安山岩		
回転方向	左	供給口形状	――
備　考			

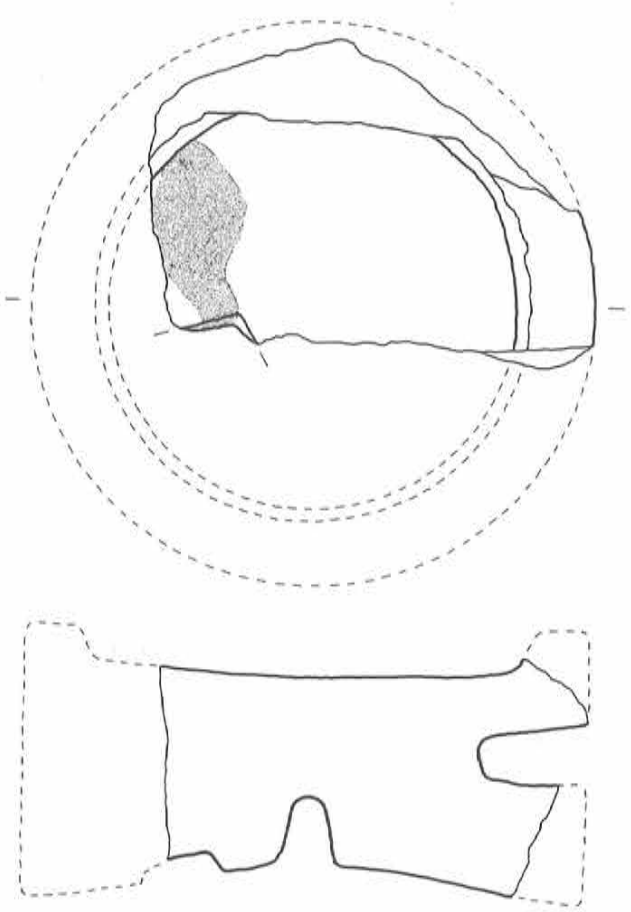
供給面の中央付近は黒色に変色する　（有機質の浸透か？）。
ふくみの幅は著しく大きい。

（mm）

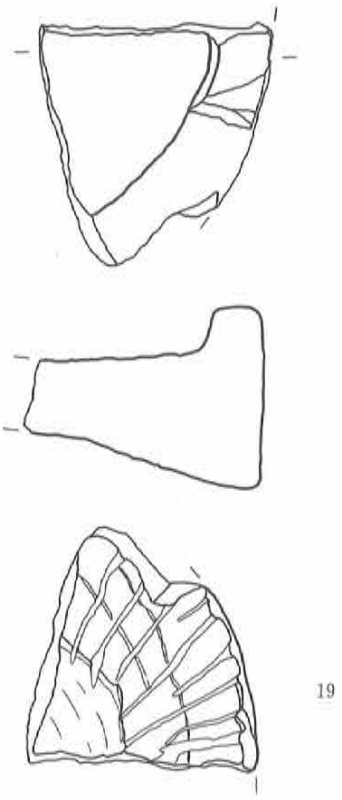
挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
384-16	上臼1/6片		Ta42	(345)	〈100〉	――
	分画×溝	芯棒孔直径	石　質	回転方向	供給口形状	
	――	――	その他の安山岩	左	隅丸長方形	
備考	全体に黒色に変色している部分が斑状にある（有機質の浸透によるものと思われる）。すり合せ部は欠損している。					

0　（1：4）　10cm

第384図　石臼　上臼実測図



18



19

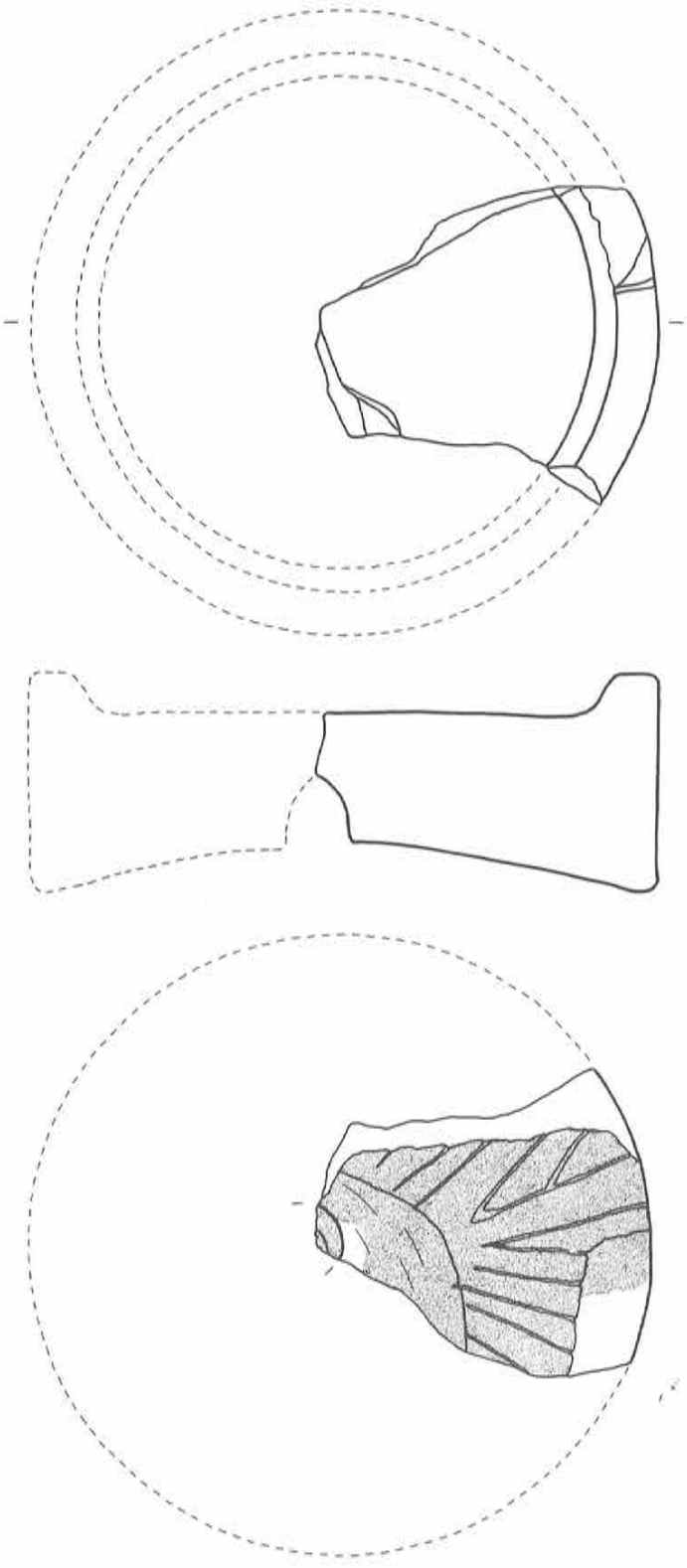
挿図番号	385-19		
出土日	上臼破片		
出土地点・遺構	D84		
直径	—— mm	高さ	96 mm
ふくみ	—— mm		
分画×溝	——		
芯棒孔直径	——		
石質	細粒安山岩		
回転方向	左	供給口形状	——
備考	くぼみ面から上縁への立ち上がりは、ほぼ垂直である。溝の残存状況は明瞭である。しかし、すり合わせ部においては、磨擦による光沢が認められる。ふくみは比較的大きい。		

（mm）

挿図番号	出土日		出土地点・遺構	直径	高さ	ふくみ
385-18	上臼1/2片		え-12グリット	(300)	〈126〉	(20)
	分画×溝	芯棒孔直径	石質	回転方向	供給口形状	
	——	(28)	細粒安山岩	左	(正方形/長方形)	
備考	くぼみ面の一部は黒色に変色する（有機質の浸透か？）。 くぼみ面にはノミ痕が認められる。					

0　（1：4）　10cm

第385図　石臼　上臼実測図



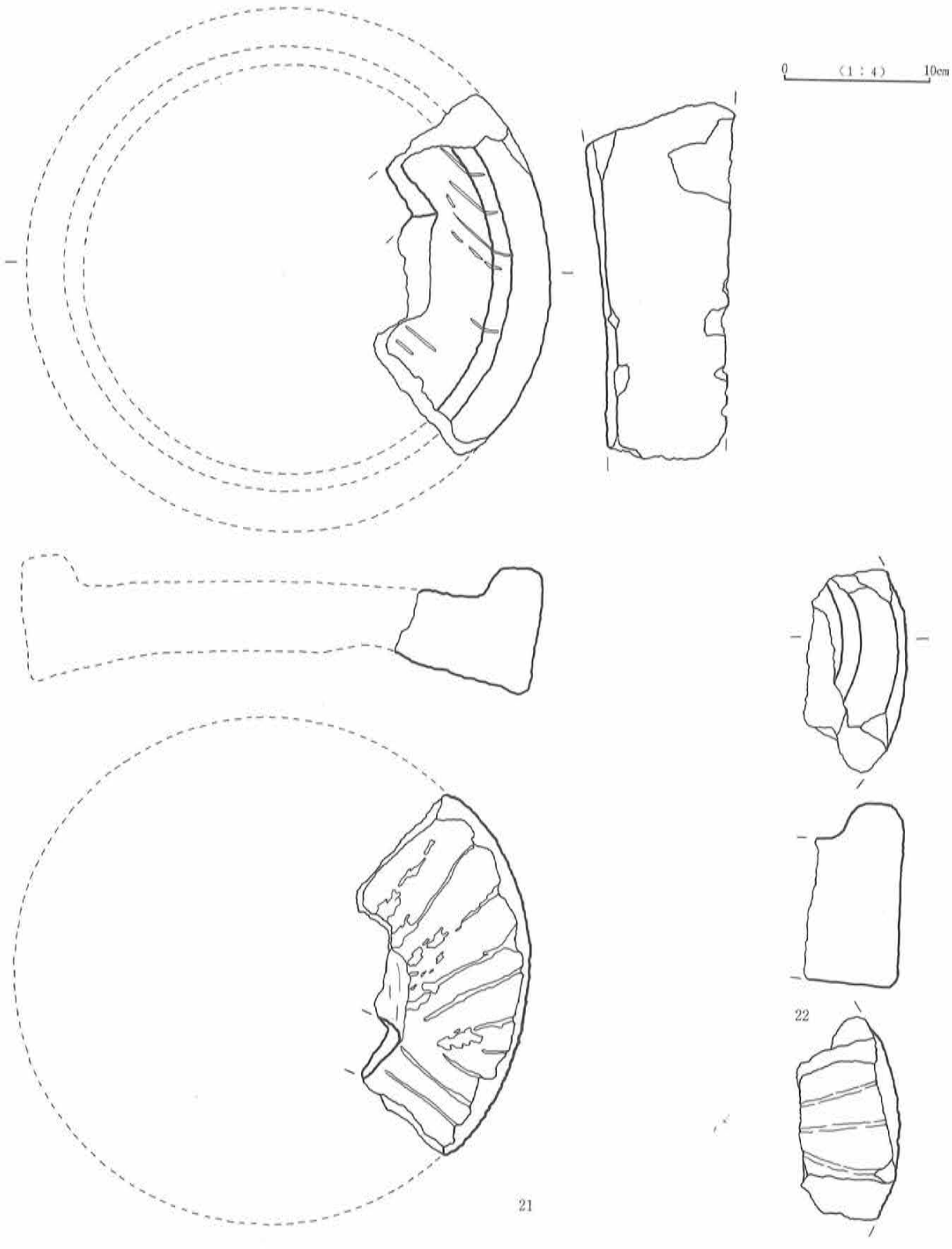
20

（mm）

挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
386-20	上臼1/4片		Ｔａ31	（328）	120	28
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向		供給口形状
	――	（37）	黒色多孔質安山岩	左		――
備考	すり合わせ面は黒色に変色している　（有機質の浸透によるものと思われる）。ふくみは比較的大きい。					

0　（1：4）　10cm

第386図　石臼　上臼実測図



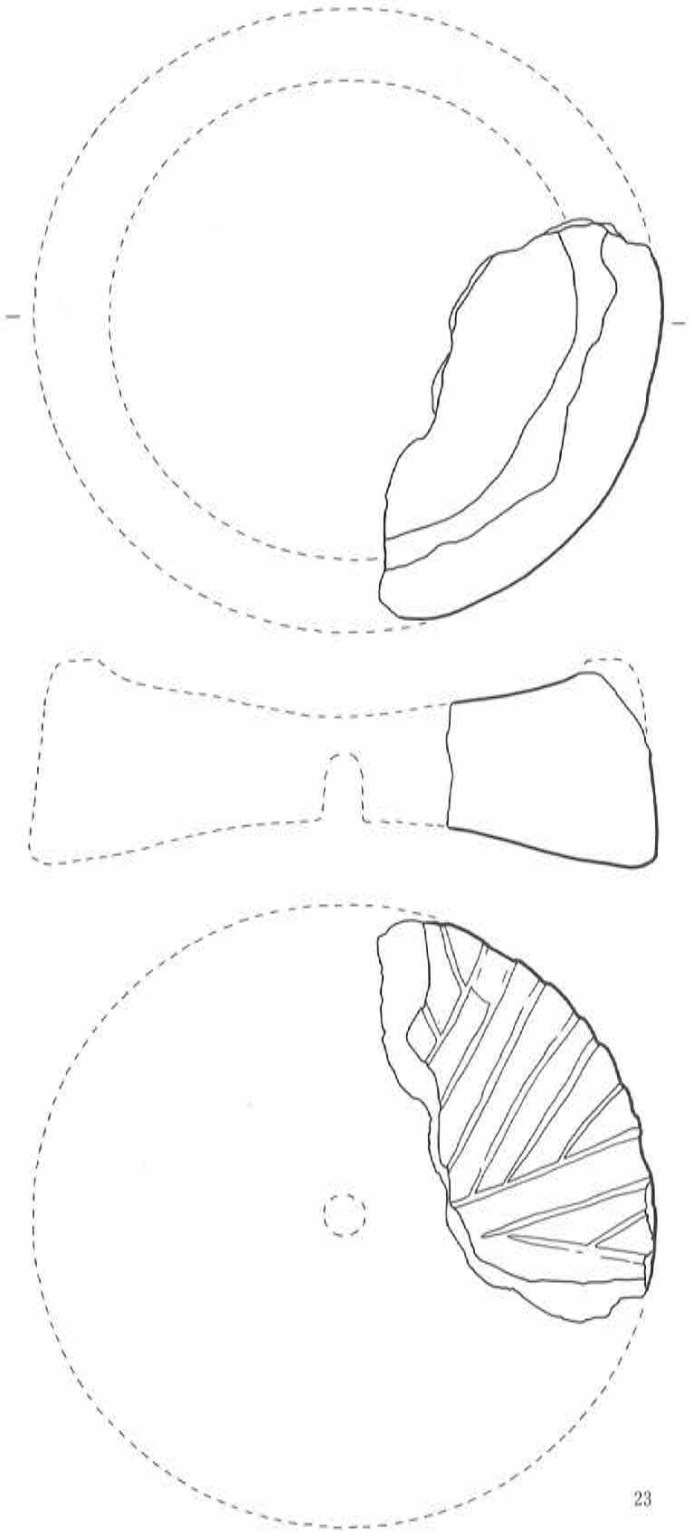
（mm）

挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
387-21	上臼1/5片		え-9グリット	(356)	(85~100)	——
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向	供給口形状	
	——	——	玻璃質安山岩	左	(長方形 正方形)	
備考	上縁の形状は不整に歪み、最大高92㎜、最小高76㎜である。上縁部の幅は30～35㎜を有し幅広である。くぼみ面にノミ痕が認められる。					

（mm）

挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
387-22	上臼破片		か‥き-10グリット	——	125	——
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向	供給口形状	
	——	——	黒色多孔質安山岩	——	——	
備考	くぼみ面から上縁への立ち上りはゆるく丸みをおびて湾曲する。ふくみの面は磨滅が著しく、一部光沢をおびている。					

第387図　石臼　上臼実測図

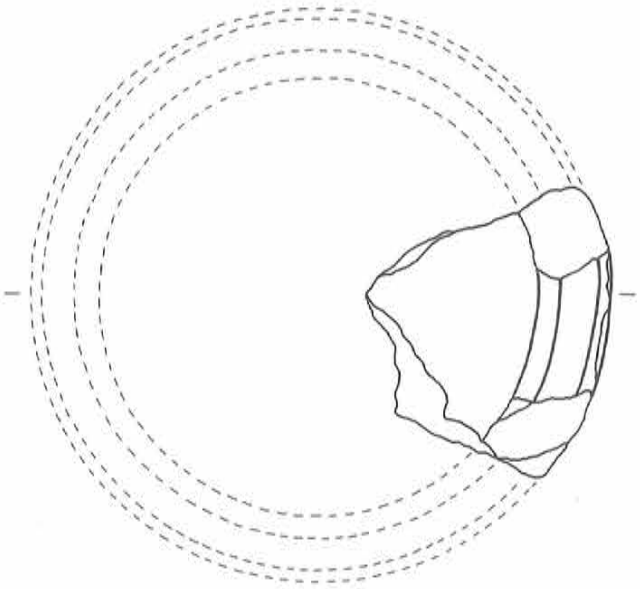


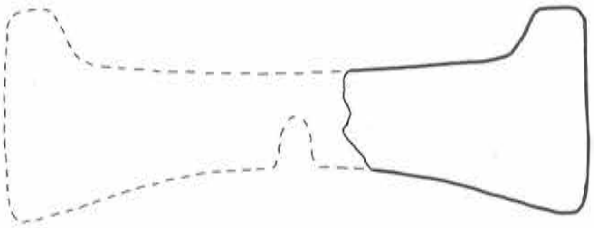
（mm）

挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
388 23	上臼1/4片		D180	(332)	〈104〉	——
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向		供給口形状
	(8)×6～(?)	——	その他の安山岩	左		——
備考	すり合わせ面の溝は比較的磨滅が少なく、ほぼ旧状を呈するものと思われる。すり合わせ面の周縁部溝は深く、「V」字形に刻まれる。					

0　（1：4）　10cm

第388図　石臼　上臼実測図





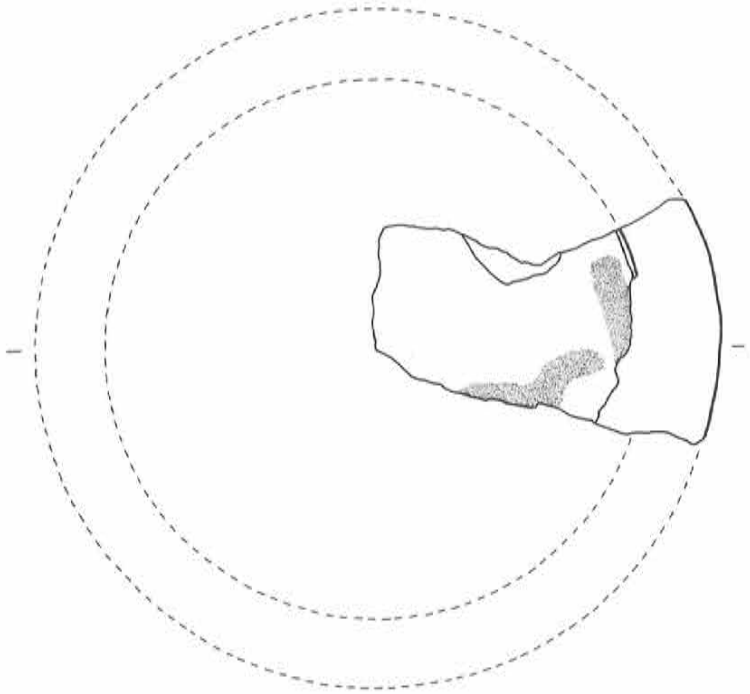
24

（mm）

挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
389-24	上臼1/6片		D29	(306)	110	(26)
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向	供給口形状	
	目なし臼	——	その他の安山岩	(左)	——	
備考	くぼみ面から上縁への立ち上りは、ほぼ垂直であり、27mmと深い。ふくみは大きい。側面及びすり面に煤が付着しており、火熱によるものと思われる。					

0　（1：4）　10cm

第389図　石臼　上臼実測図



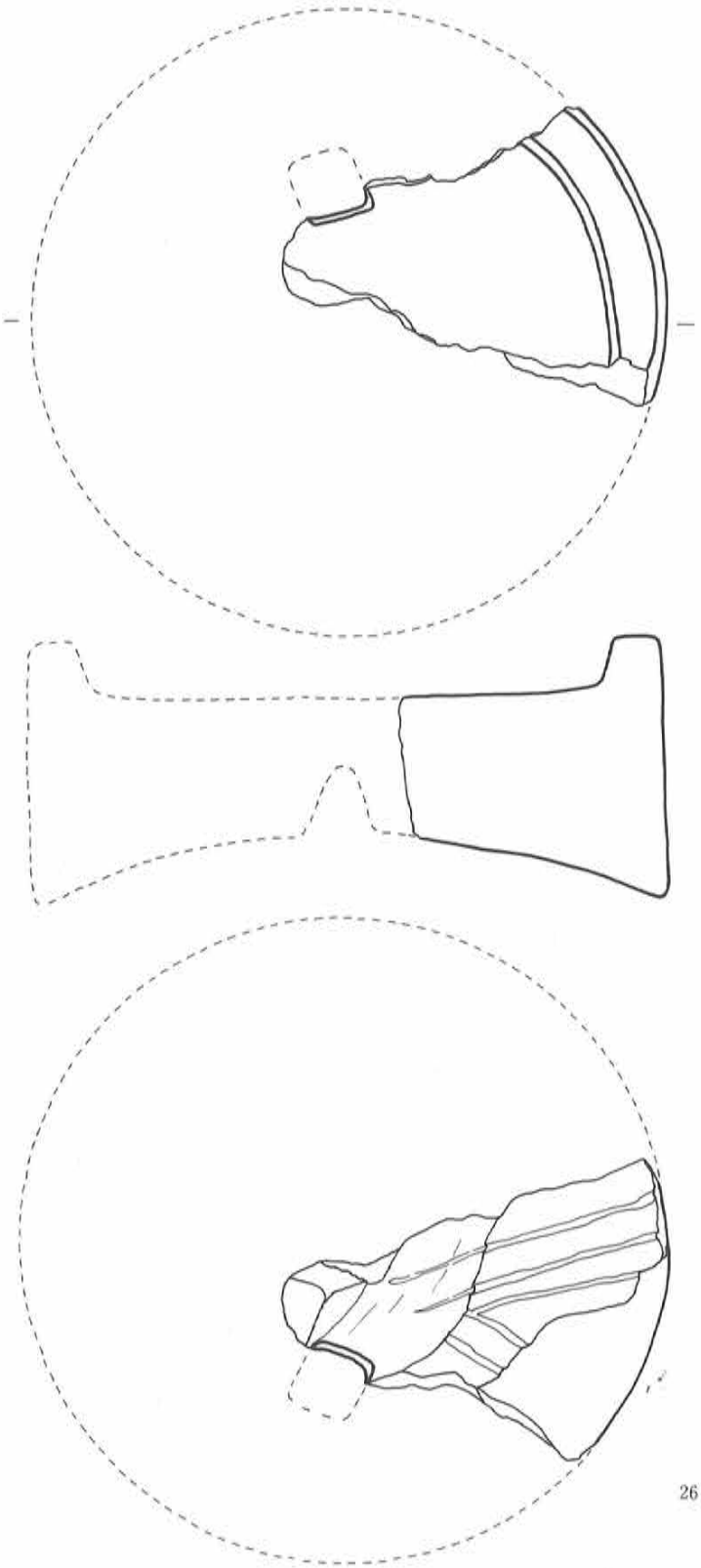
25

（mm）

挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
390-25	上臼1/8片		Ｔａ35	（360）	〈102〉	（10）
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向	供給口形状	
	目なし臼	（35）	その他の安山岩	（左）	（長方形）	
備考	溝の痕跡は見られず、目なし臼と思われる。くぼみ面、及びすり合わせ部最端部は、黒色に変色している。（有機質の浸透によるものと思われる）。					

0　（1：4）　10cm

第390図　石臼　上臼実測図



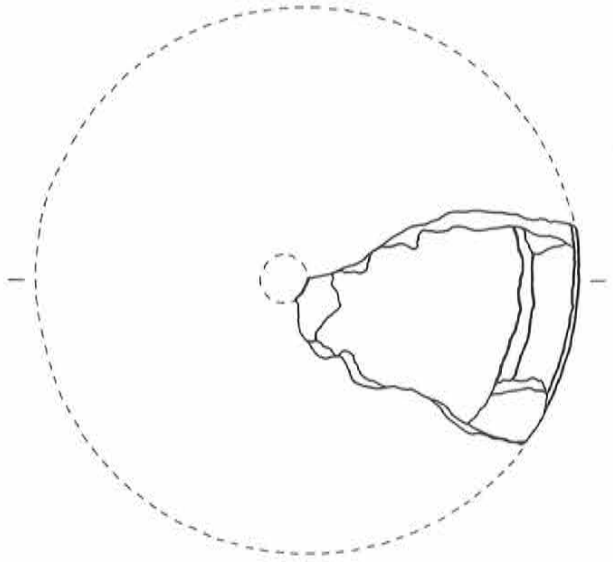
26

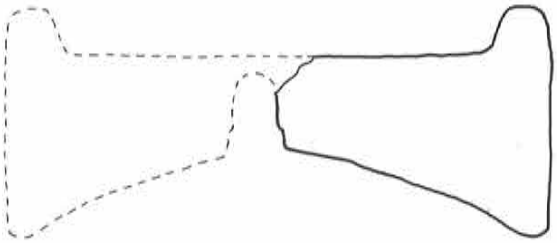
（mm）

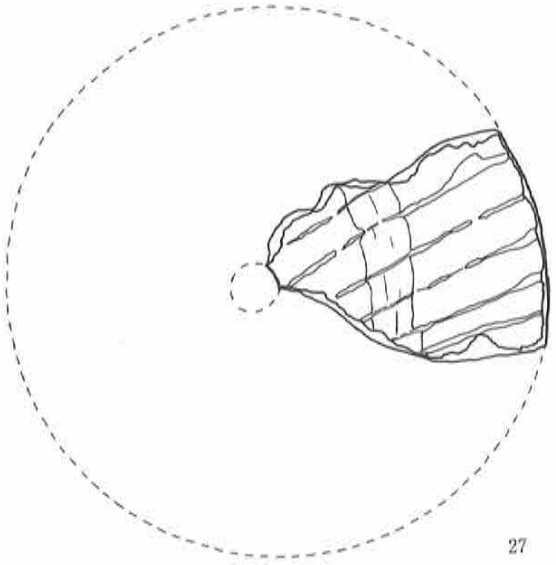
挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
391 26	上臼1/6片		Ｔａ46	（346）	143	（39）
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向	供給口形状	
	――	――	玻璃質安山岩	左	（隅丸長方形）	
備考	上縁の高さ（深さ）は約25㎜と高く、くぼみ面に達する。すり面及び供給口下部に煤が付着し、火熱によるものと思われる。すり面の磨滅は著しく、一部光沢を帯びている。すり合わせ部の溝は深く、ほぼ旧状を呈するものと思われる。ふくみは著しく大きい。					

0　（1：4）　10cm

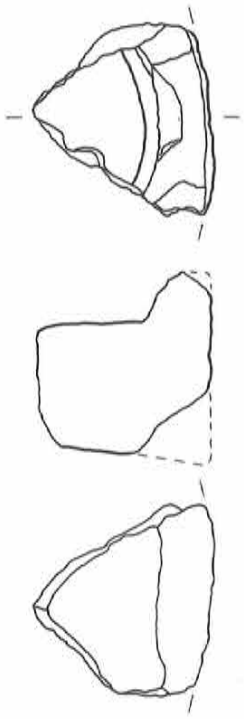
第391図　石臼　上臼実測図







27



28

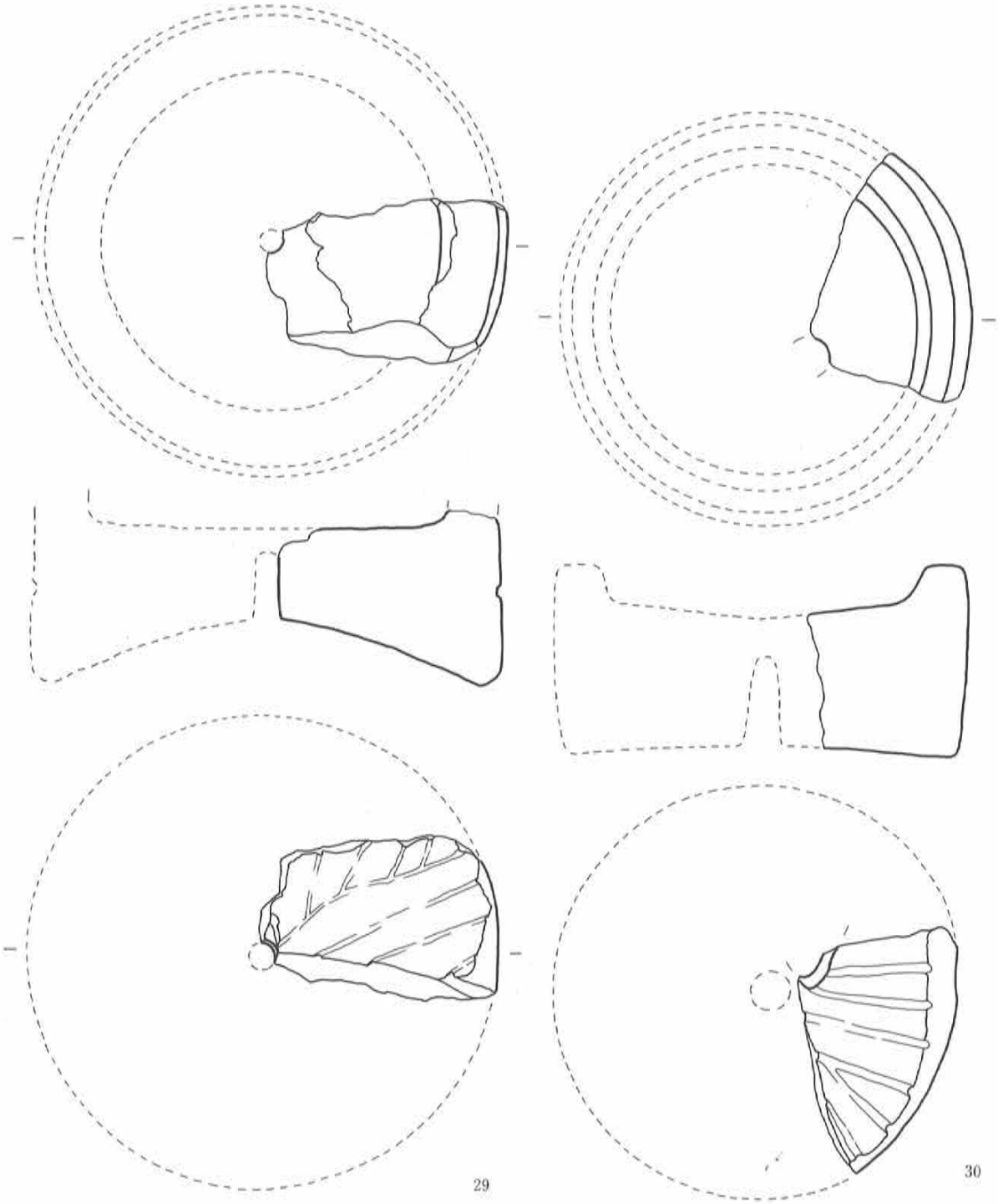
挿図番号	392-28					
出　土　臼	上臼破片					
出土地点・遺構	D217					
直　径	—— ㎜	高　さ	〈97〉㎜	ふくみ	—— ㎜	
分画×溝	目なし臼と思われる					
芯棒孔直径	——					
石　質	黒色多孔質安山岩					
回転方向	——	供給口形状	——			
備　考	上縁の深さが約28㎜と深い。					

(㎜)

挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
392-27	上臼1/6片		D236	(288)	122	46
	分画×溝	芯棒孔直径	石　質	回転方向	供給口形状	
	——	(26)	その他の安山岩	左	(隅丸長方形/隅丸方形)	
備考	すり面及び割れ口の一部には煤が付着し、火熱によるものと思われる。すり合わせ部の溝は深く、「V」字型を呈す。ふくみの幅は著しく大きい。					

0　(1：4)　10cm

第392図　石臼　上臼実測図



29

30

（mm）

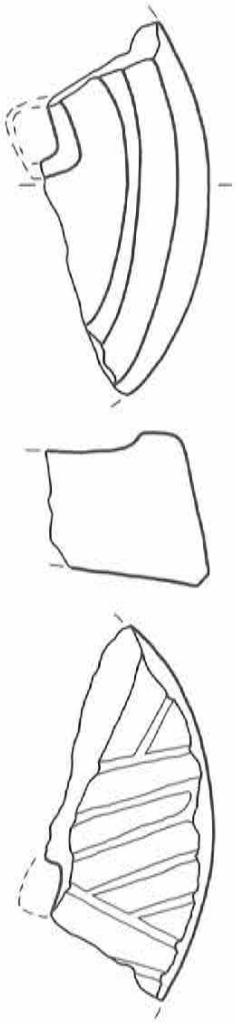
挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
393-29	上臼破片		D217	（300）	〈111〉	41
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向	供給口形状	
	（不明×5）	（18）	黒色多孔質安山岩	左	――	
備考	上縁の剝離面よりくぼみ面にかけ、煤の付着が認められる（火を受けたものと思われる）。すり合わせ面、及びすり合わせ部は磨滅が著しい。ふくみの幅は、著しく大きい。					

（mm）

挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
393-30	上臼1/4片		表採	（260）	134	（7）
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向	供給口形状	
	不明（こぼれ目）	――	その他の安山岩	（左）	（円）	
備考	上縁は、ほぼ垂直にくぼみ面に達し、25mmと深い（高い）。すり合わせ面の磨滅が著しく、一部光沢をおびている。上縁の形状は不整に歪み、最大高134mm、最小高128mmを測る。					

0　（1：4）　10cm

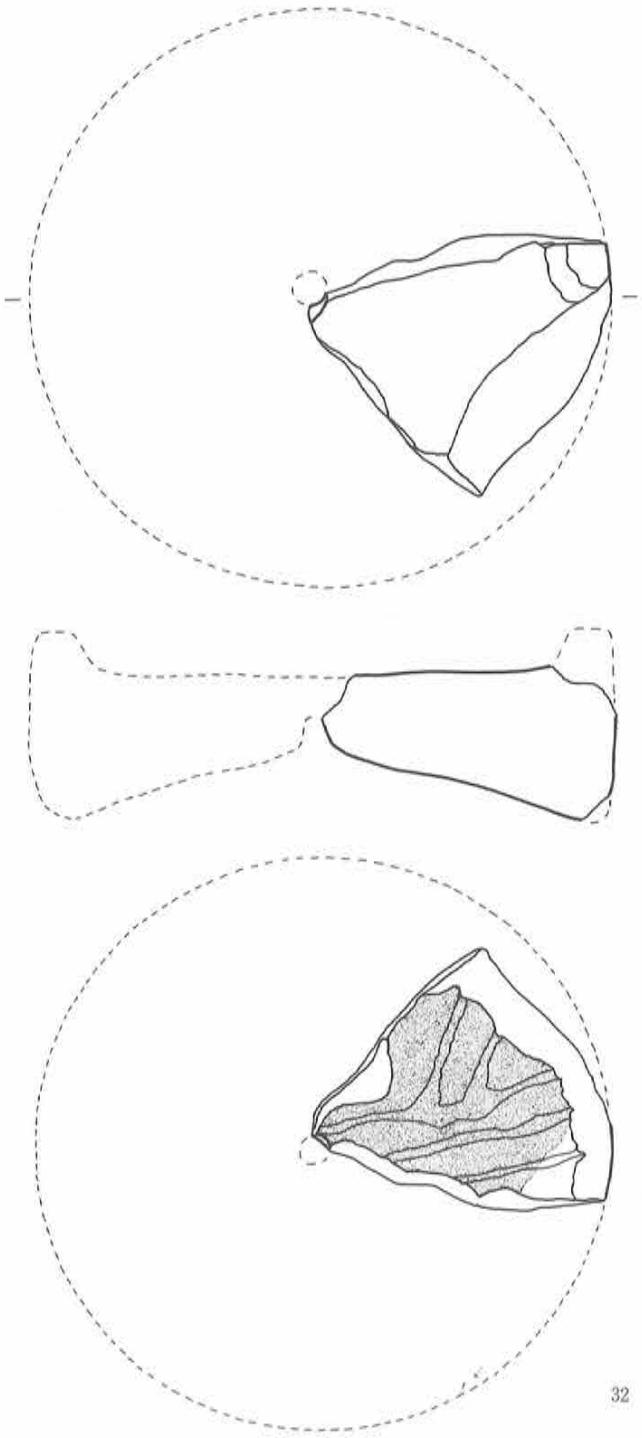
第393図　石臼　上臼実測図



31

挿図番号	394-31				
出　土　臼	上臼破片				
出土地点・遺構	き・く-10グリット				
直　径	—— mm	高　さ	82 mm	ふくみ	—— mm
分画×溝	不明×5				
芯棒孔直径	——				
石　質	細粒安山岩				
回転方向	左	供給口形状	(隅丸方形/隅丸長方形)		
備　考					

上縁の高さ(深さ)は５～８㎜と浅い。
くぼみ面にノミ痕が認められる。



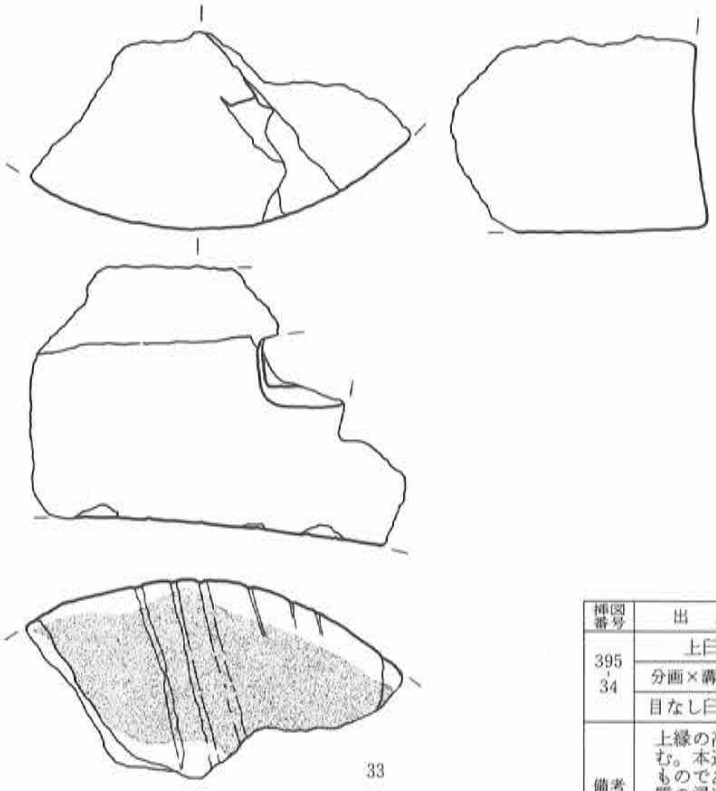
32

(㎜)

挿図番号	出　土　臼	出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
394-32	上臼1/6片	Ｔａ42	(308)	〈82〉	(40)
	分画×溝	芯棒孔直径	石　質	回転方向	供給口形状
	——	(15)	その他の安山岩	左	——
備考	すり面の一部は、黒色に変色している。(有機質の浸透によるものと思われる)。溝の断面は「Ｕ」字形を呈し、幅広く深い刻みを有する。				

0　(1：4)　10cm

第394図　石臼　上臼実測図

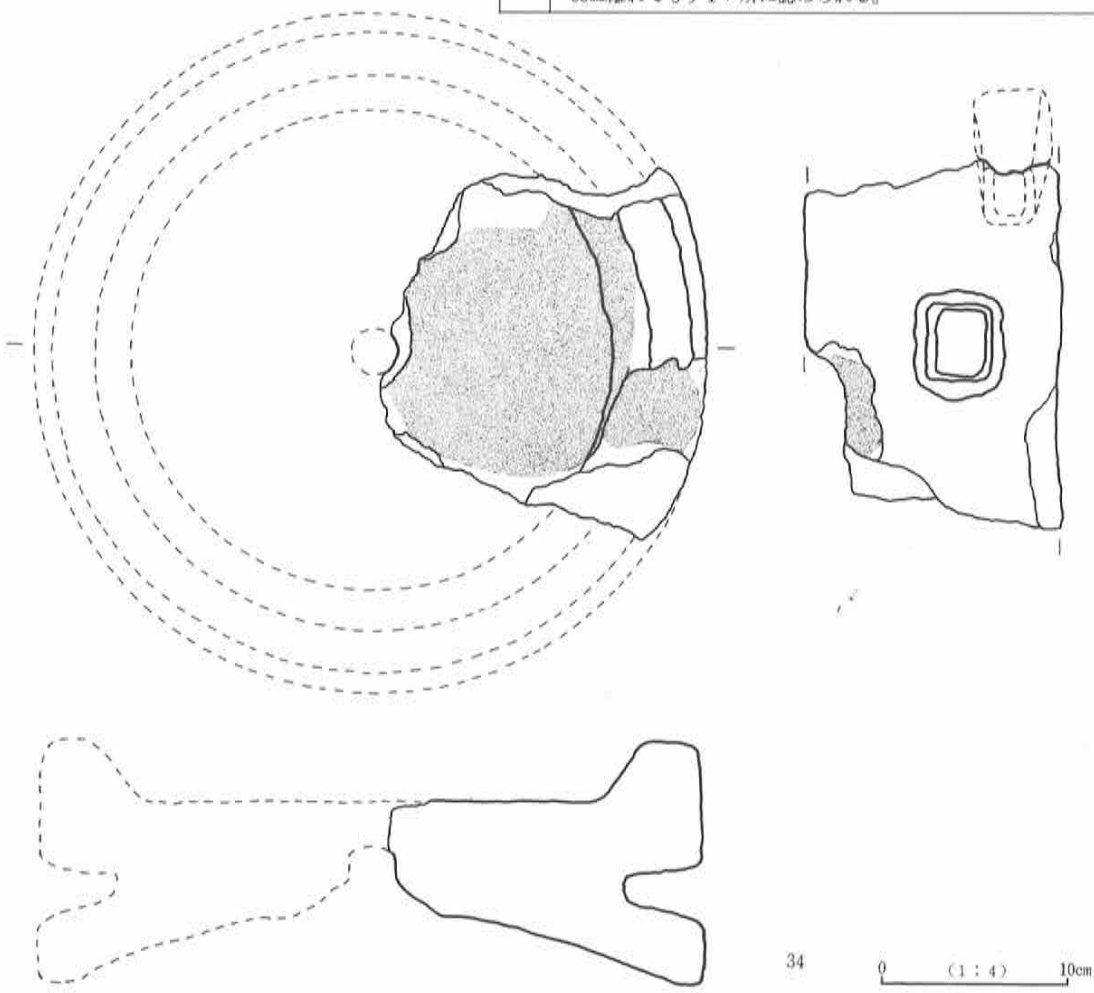


33

挿図番号	395-33				
出　土　臼	上臼破片				
出土地点・遺構	Ｔａ８				
直　径	—— mm	高　さ	〈142〉mm	ふくみ	—— mm
分画×溝	——				
芯棒孔直径	——				
石　　質	その他の安山岩				
回転方向	——	供給口形状	——		
備　　考	すり合わせ面は著しく黒色に変色している（有機質の浸透によるものと思われる）。すり合わせ面は磨滅が著しく、溝の旧状は判別し難い。側面は、ノミ痕が著しく認められる。なお、側面部は一部赤褐色に変色し、火を受けているものと思われる。				

（mm）

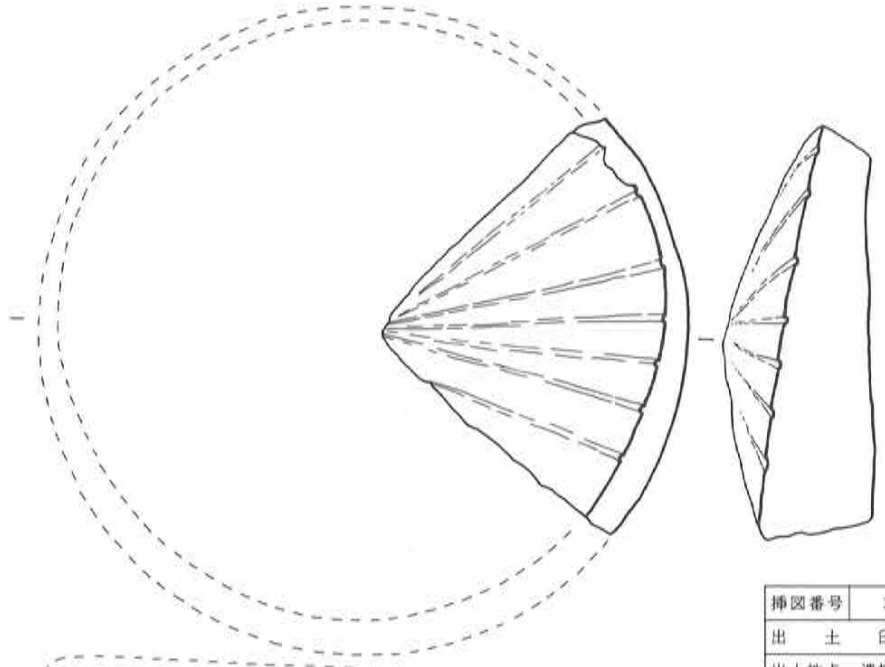
挿図番号	出　土　臼	出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
395-34	上臼1/4片	Ｔａ39	(356)	128	(34)
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向	供給口形状
	目なし臼	(25)	その他の安山岩	(左)	——
備考	上縁の高さ（深さ）は約31mmと高く、緩やかにくぼみ面に落ち込む。本遺跡出土の石臼においては最も高い（深い）上縁を有するものである。くぼみ面及びすり面は黒色に変色している（有機質の浸透によるものと思われる）。溝の痕跡は認められず、目なし臼と思われる。引手穴は残存する側面中央部に１つ、更に約65mm離れてもう１ケ所に認められる。				



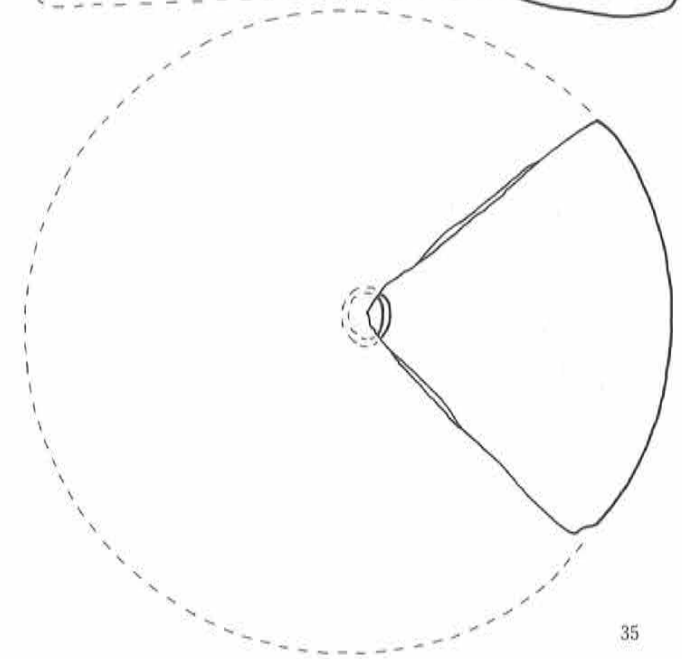
34

0　（1：4）　10cm

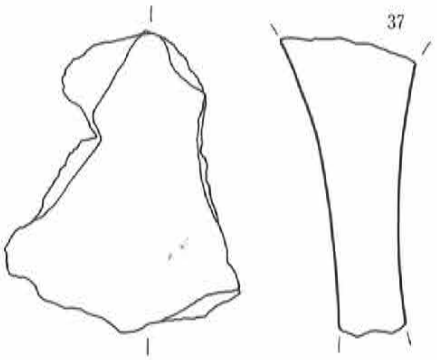
第395図　石臼　上臼実測図



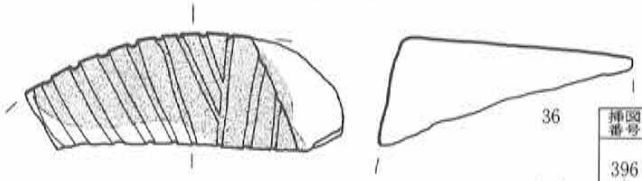
挿図番号	396-35					
出　土　臼	下臼1/4片					
出土地点・遺構	か-3グリット					
直　径	(280)㎜	高　さ	〈80〉㎜	ふくみ	5　㎜	
分画×溝	不明（放射状）					
芯棒孔直径	(22)					
石　質	その他の安山岩					
回転方向	——	供給口形状	——			
備　考	すり面の磨滅は著しいものの、溝は周縁部まで達している。全体の形状は不整に歪み、最大高約630㎜を測り、最小高320㎜を測る。※下臼で形状が歪むものは他に一点のみである。					



35



37



36

(㎜)

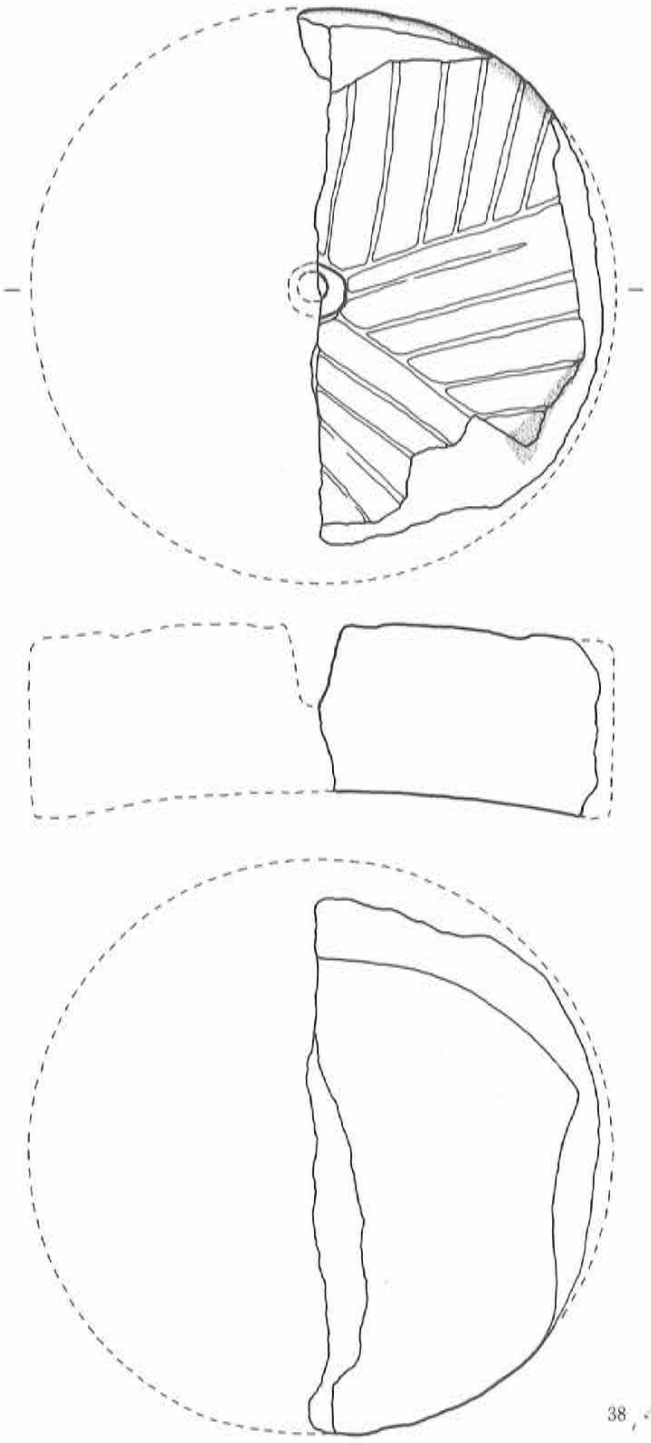
挿図番号	出　土　臼	出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
396-36	下臼破片	D265	——	134	——
	分画×溝	芯棒孔直径	石　質	回転方向	供給口形状
	——	——	細粒安山岩	左	
備考	すり面は黒色に変色する　（有機質の浸透によるものと思われる）。側面はノミによるたたき模様が施されている。				

(㎜)

挿図番号	出　土　臼	出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
396-37		T a 18	——	〈72〉	——
	分画×溝	芯棒孔直径	石　質	回転方向	供給口形状
	——	——	黒色多孔質安山岩	——	——
備考	残存部位からして、上臼か下臼かどちらとも判別できない。				

0　（1：4）　10cm

第396図　石臼　下臼実測図

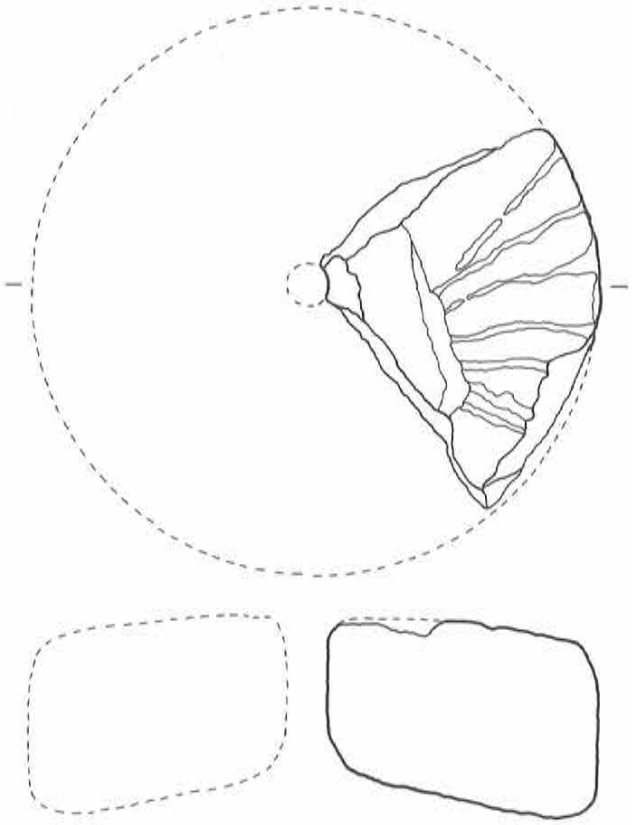


（mm）

挿図番号	出土臼		出土地点・遺構	直径	高さ	ふくみ
397-38	下臼1/2片		Ｔａ18	(310)	〈98〉	(10)
	分画×溝	芯棒孔直径	石質	回転方向	供給口形状	
	(6×7～8)	(28)	その他の安山岩	左	——	
備考	すり合わせ面、周縁部は一部を残し欠損している。すり面の磨滅は著しく、溝は一部を残し観察することができる。すり面、周縁部の一部は黒色に変色している（有機質の浸透によるものと思われる）。底部の底面形状は半月状に浅くえぐられている。					

0　（1：4）　10cm

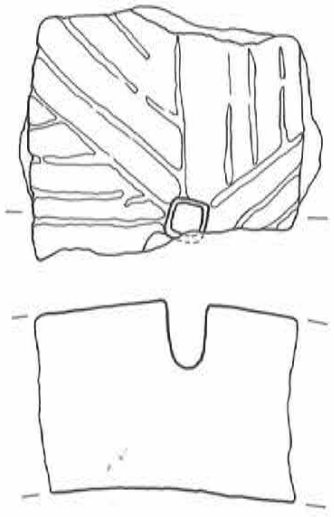
第397図　石臼　下臼実測図



39

(mm)

挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
398-39	下臼1/4片		T a 42	(300)	105	(11)
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向		供給口形状
	——	——	その他の安山岩	左		——
備考	底面は深いえぐりを量する。					



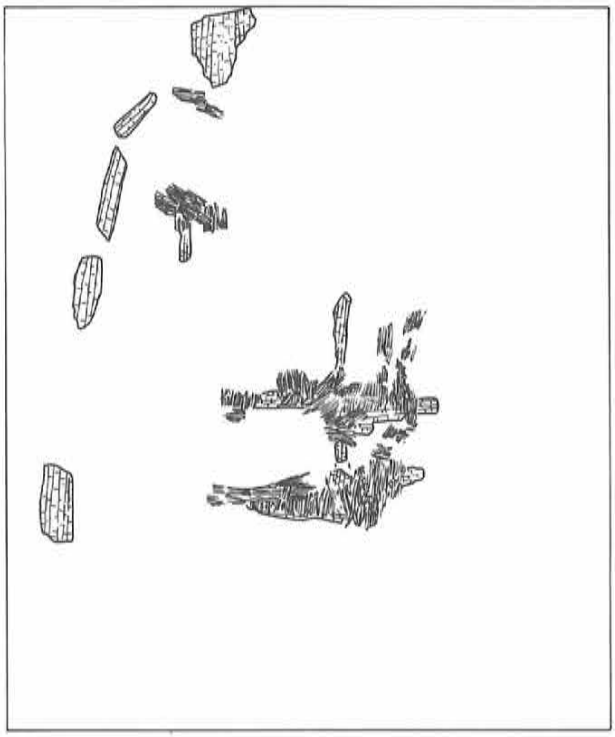
40

(mm)

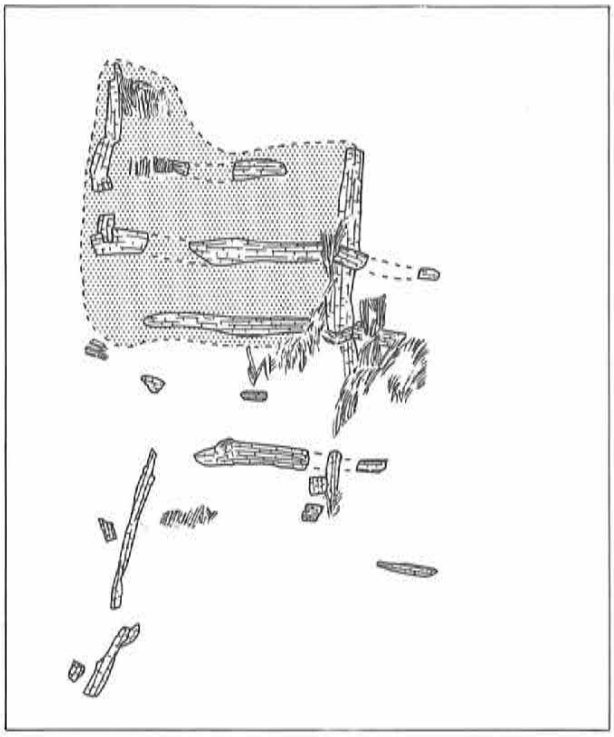
挿図番号	出　土　臼		出土地点・遺構	直　径	高　さ	ふくみ
398-40	下臼破片		D112	——	〈106〉	——
	分画×溝	芯棒孔直径	石　　質	回転方向		供給口形状
	(8)×不明	39	その他の安山岩	左		——
備考	すり面は磨滅が著しく一部光沢を帯びている。よって溝は磨滅し、全体に丸みを帯びている。芯棒孔は底面まで達していない。なお、平面の形状は隅丸正方形と思われる。					

0　(1：4)　10cm

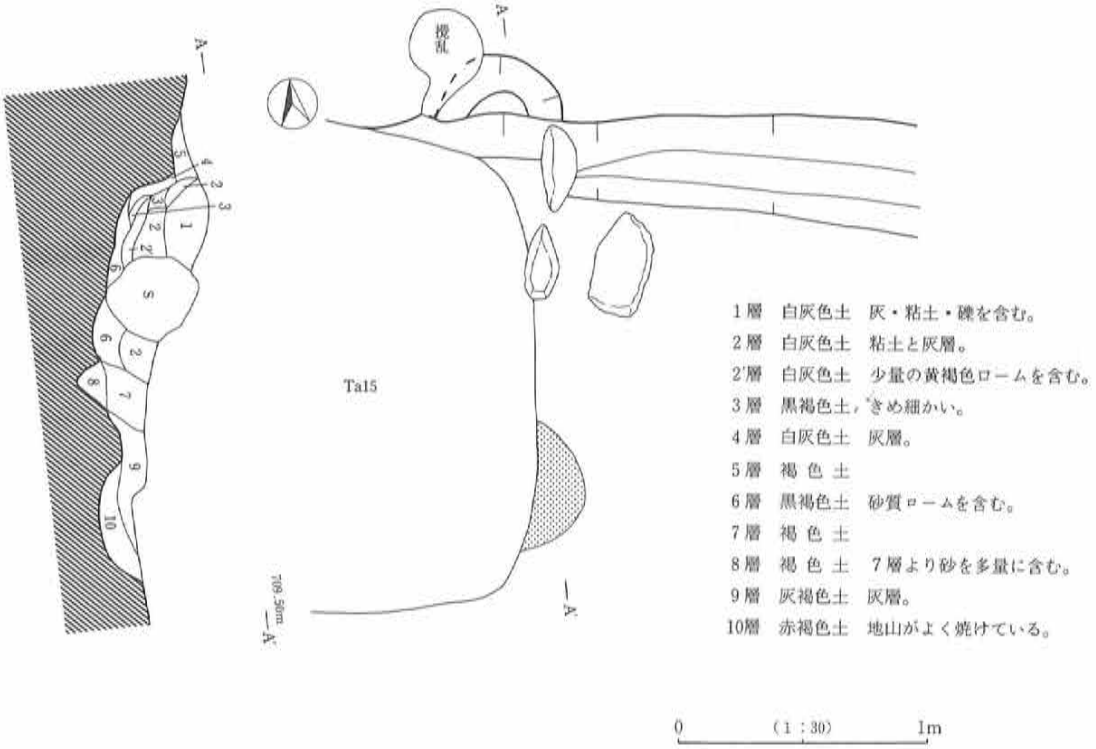
第398図　石臼　下臼実測図



第473図　Ｈ２号住居址第１地点実測図



第474図　Ｈ２号住居址第２地点実測図



第475図　Ｈ２号住居址カマド実測図

覆土は5層に分割された。1層は耕作土で粘性なく粒子が粗い。2層は茶褐色土層で炭化物を多量に含む。3層は茶褐色土層で粒子細かく、全体層序第Ⅱ層白色ブロック・粒子を含む。4層は黒褐色土層で粒子細かく堅くしまる。5層は暗茶褐色土層で床面直上に2～6cmの厚さで堆積しており、やや粘性を有する。確認面からの壁高は37～66cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がる。壁体は、黄褐色ローム層を利用して構築され、比較的堅固な状態である。壁溝は南壁中央付近で一部断絶するが、ほぼ全周すると考えられる。壁溝幅は12～32cmを測り、3～13.5cmの深さを有する。断面形は「U」字状を呈する。床面は黄褐色ローム層を踏み固めて堅緻な状態であり、全体にほぼ平坦である。ピットは総数で6個検出された。P_1～P_3は主柱穴で、P_1－P_2間320cm、P_1－P_3間336cmを測り、南西の主柱穴は破壊されているがほぼ方形に配されると考えられる。平面形態はいずれも径50～56cmの円形を呈し、深さは各々55cm・82cm・57cmを測る。P_4は南壁中央部に位置する張り出しピットで、残存部で92×54cmの楕円形を呈し、70cmの深さを有する貯蔵穴である。P_5・P_6は中央付近北西寄りに位置し、性格は不明である。P_5は38×52cmの楕円形を呈し深さは15.5cmを測り、P_6は径26cmの円形で深さは7cmを測る。

カマドは北壁中央に位置し、Ta15号竪穴遺構に西半部を破壊され残存状態は不良である。焚口から煙道部までの長さは200cmを測り、袖部の幅は不明である。煙道部は壁体を長さ24cm、幅50cm(推定)の半円状に緩い傾斜で掘り込んで構築する。火床部は壁から105cm離れた床面を径50cmの円形に掘り窪め、焼土が約10cmの厚さで堆積していた。天井部・袖部は既に崩壊しているため旧状は不明である。尚、東側袖部付近より礫が出土しており、カマドの構築材と考えられる。

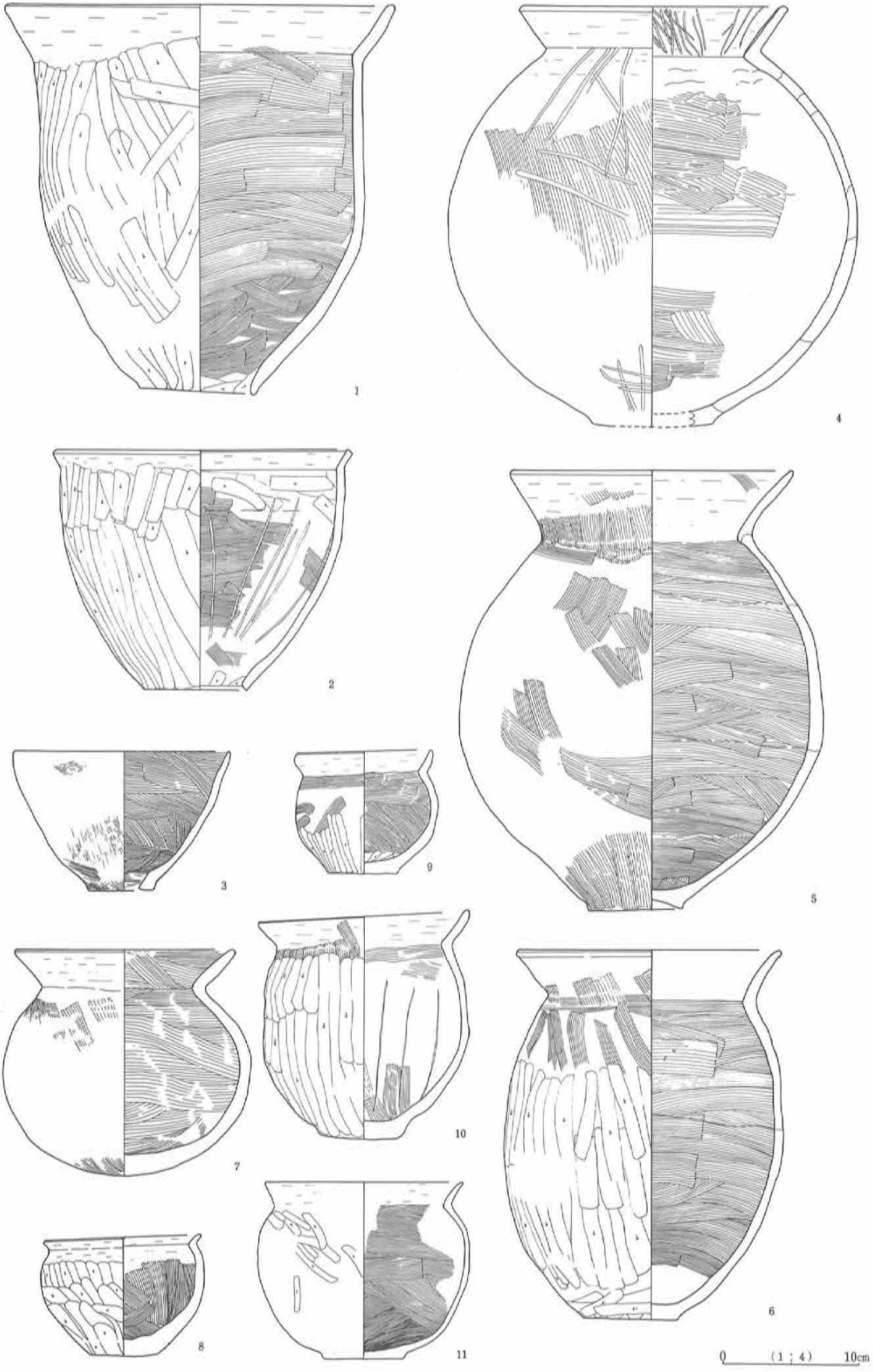
東壁中央付近には母屋桁とそれに直交する材及びカヤ状の炭化材が検出され屋根の一部と思われるが、壁の可能性も考えられる。さらにP_3付近には垂木と考えられる炭化材が多量に出土している。

遺物の出土状況は、本住居址からは多量の土師器・石器が出土しており、カマドの東側中央付近に集中する傾向が認められ、いずれも床面直上からの出土である。

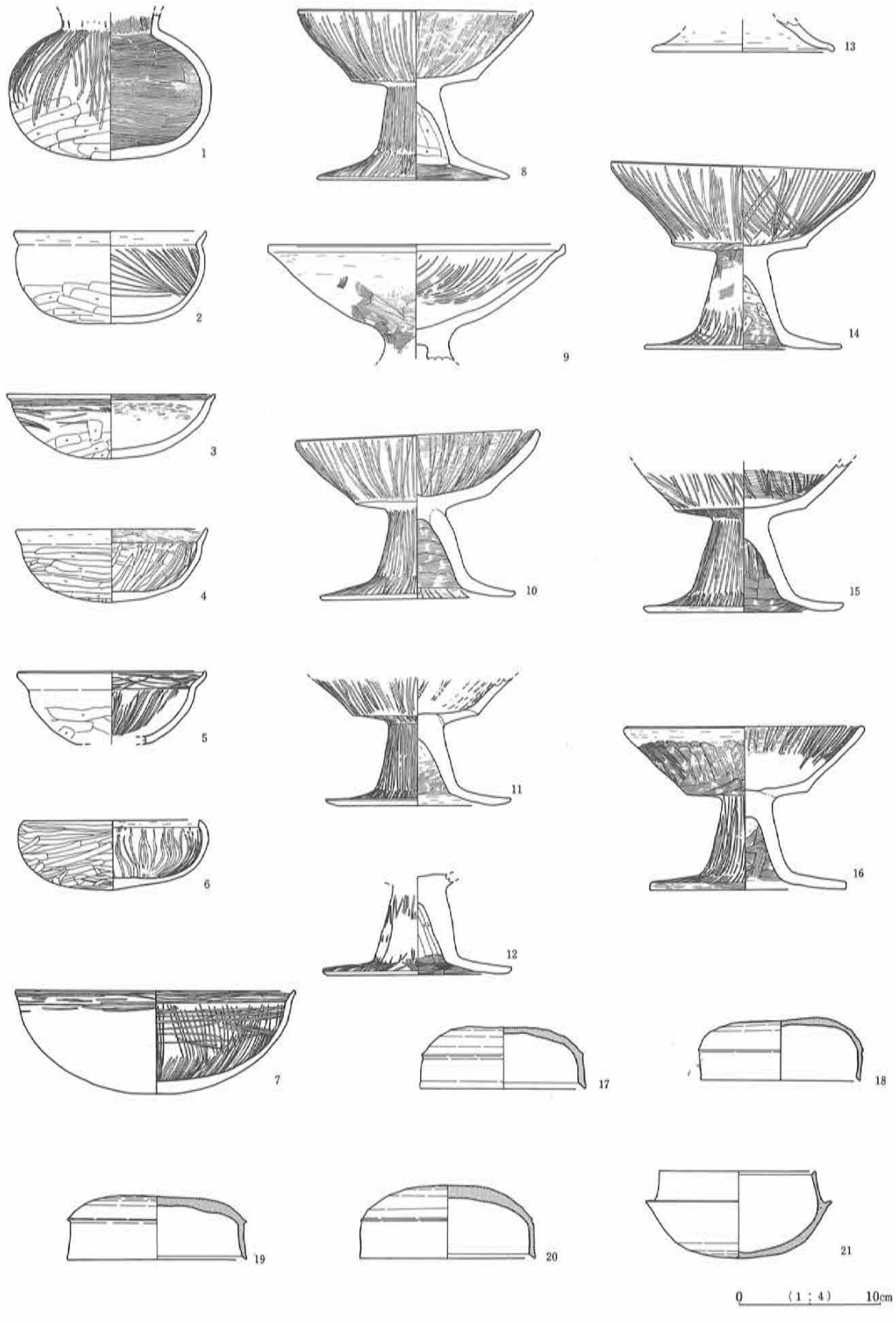
476図1は北東隅の床面より土圧で潰れた状態で出土した。476図4・7・10、477図1・6・17・19・21はカマドの東側より出土し、P_1上面より476図8と476図3が重なり横転した状態で出土した。東壁中央付近からは476図9、477図8・9・10・11・13・14が床面より出土した。さらに石器類は、編物石(479図1～14)がP_1付近よりまとまって出土し、他に砥石が3点、石製模造品が1点出土した。

第369表　H2号住居址出土遺物一覧表〈1〉

挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
476－1	甕	口径　27.5 胴径　23.7 孔径　8.5 器高　28.5	孔部はやや外反し、直線的に胴中央部に至る。胴部上半は垂直に頸部に立上がり、口縁は鋭く外反する。	内外面口縁部はヨコナデ 外面胴部は上→下への篦削り 内外面孔部は下→上への篦削り 内面胴部は右→左への刷毛目	完全実測
476－2	甕	口径　21.5 孔径　7.6 器高　17.5	孔部から頸部へやや内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	内外面口縁部はヨコナデ 外面胴部は上→下への篦削り 内面胴上半は横位の篦削り 内面胴部は横位の刷毛目の後、縦位の篦削り 内面孔部は篦削り	完全実測
476－3	甕	口径　15.9 孔径　2.6 底径　4.7	孔部から口縁部までやや内彎気味に立ち上がる。	外面は刷毛状工具によるナデ 内面は刷毛目	完全実測



第476図　Ｈ２号住居址出土遺物実測図



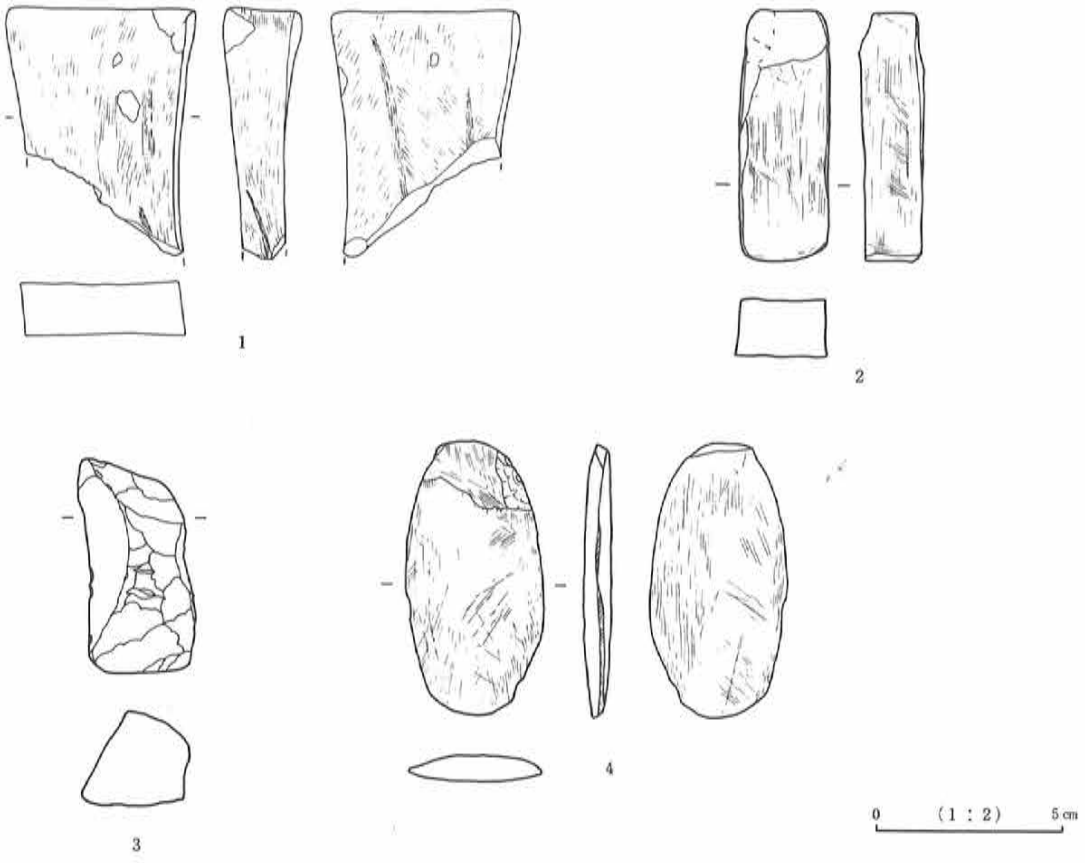
第477図　H２号住居址出土遺物実測図

第369表　Ｈ２号住居址出土遺物一覧表〈２〉

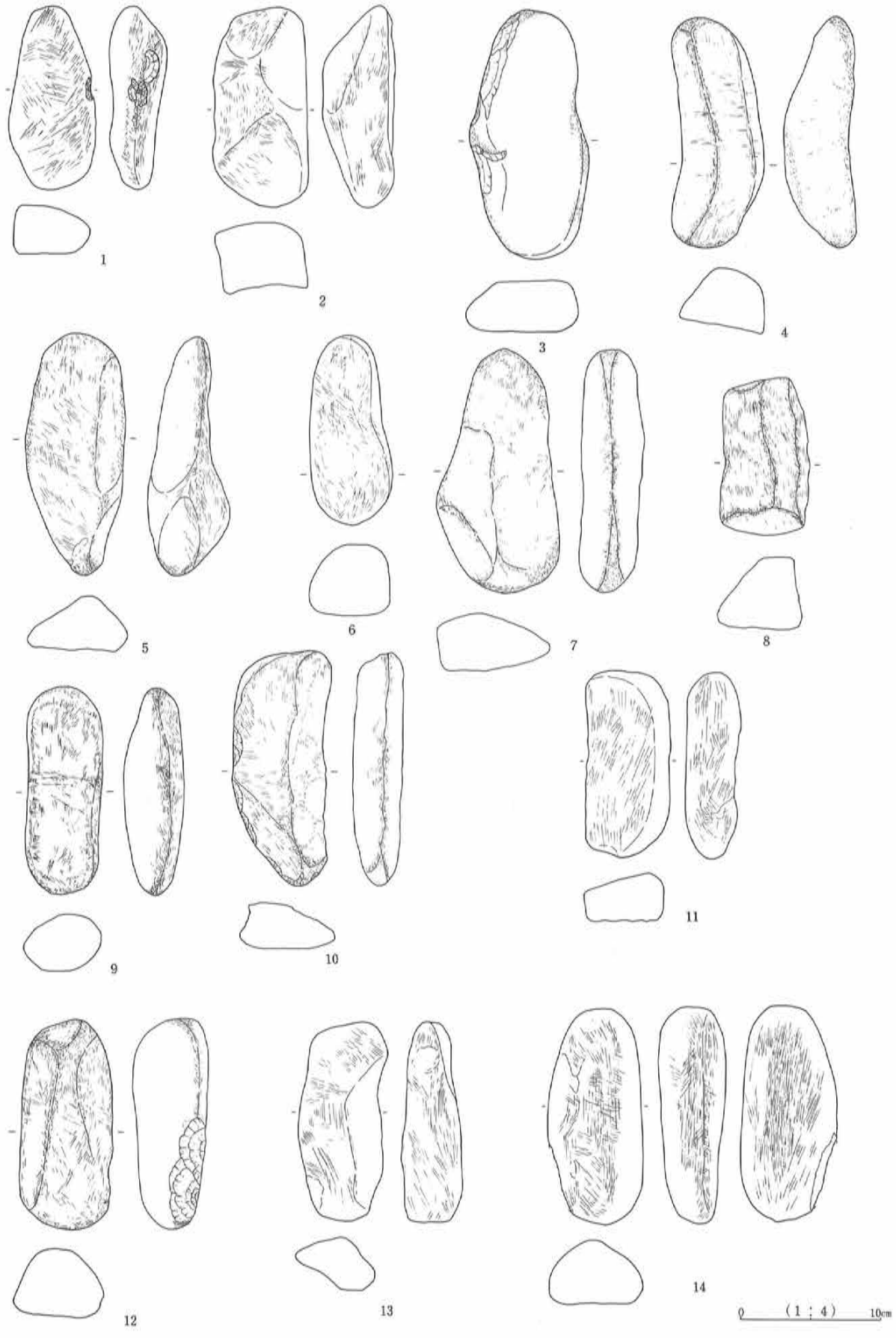
挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
476－４	甕	口径　19.2 胴径　29.8 底部　(8.8) 器高　37.0	やや丸味を持った平底から球胴に至る。口縁部は「く」の字に外反する。	外面口縁部・胴上部ヨコナデ 外面胴部刷毛目の後、篦ミガキ 内面口縁部ヨコナデの後、篦ミガキ 内面胴部刷毛目	回転実測
476－５	甕	口径　20.1 胴径　26.3 底径　6.8 器高　32.1	底部から球胴に至る。 口縁部は「く」の字に外反する。	外面頸部下→上への刷毛目 外面胴部刷毛目 内面胴部横位の刷毛目 内外面口縁部ヨコナデ	完全実測
476－６	甕	口径　19.4 胴径　23.0 底径　6.7 器高　27.2	やや長胴で、口縁部は「く」の字に外反する。	内外面口縁部ヨコナデ 外面胴上部・頸部刷毛目 外面胴部上→下への篦削り 内面横位の刷毛目	完全実測
476－７	小　形 壺	口径　16.1 胴径　18.1 頸径　11.9 器高　16.5	底部丸底で球胴部に至り、口縁部は「く」の字に外反する。	外面胴部磨耗により調査不明 外面口縁部ヨコナデ 内面刷毛目	完全実測
476－８	小　形 甕	口径　11.5 胴径　11.9 底径　4.9 器高　8.6	やや丸味を持った底部から、内彎気味に最大径を持つ胴上半部に至り、口縁は小さく外反する。	内外面口縁部・頸部ヨコナデ 外面胴部上→下への篦削り 内面胴部刷毛目	完全実測
476－９	小　形 甕	口径　10.1 胴径　10.3 底径　5.1 器高　8.9	口縁部「く」の字に内彎気味に外反する。	内外面口縁部ヨコナデ 外面胴下半部下→上への篦削り 外面頸部刷毛目 内面底部篦削り 内面胴部刷毛目	完全実測
476－10	小　形 甕	口径　15.3 胴径　15.1 底径　5.8 器高　16.3	やや丸味を持った底部から胴部に至り、内傾気味に外反する口縁部を持つ。	内外面口縁部ヨコナデ 外面胴部上→下への篦削り 外面頸部に刷毛目残る 内面刷毛目、単位不明の刷毛状工具によるナデ、間隔の広い縦位の篦ミガキ	完全実測
476－11	小　形 甕	口径　14.2 胴径　15.4 底径　5.6 器高　12.9	口縁部外傾気味に外反する。	内外面口縁部ヨコナデ 外面胴部下→上への篦削り 内面胴部横位の刷毛目	回転実測
477－１	小　形 壺	頸部　6.8 胴径　14.2 現高　10.4	底部丸底で球胴部を持つ。	外面口縁部縦位の篦ミガキ 外面胴上半縦位の篦ミガキ 外面胴下半横位の篦削り 外面底部篦削り 内面口縁部縦位の刷毛目 内面胴部横位の刷毛目	回転実測
477－２	坏	口径　(13.4) 器高　(6.5)	底部丸底で口辺部内彎気味に外反し、内稜を有す。	口辺部ヨコナデ 外面体部下半横位の篦削り 内面体部篦ミガキ	回転実測
477－３	坏	口径　14.4 器高　4.6	底部丸底で短く外反する口辺部を持つ。	外面体部上半篦ミガキ 外面体部下半篦削り 内面篦ミガキ（磨耗著しい）	完全実測
477－４	坏	口径　13.4 器高　5.1	底部丸底で口辺部内彎気味に外反する。 口縁楕円を呈する。	外面口辺部ヨコナデ 外面体部横位の篦削り 内面篦ミガキ	回転実測
477－５	坏	口径　13.3 現高　5.1	口辺部内彎気味に外反する。	外面口辺部ヨコナデ 外面体部篦削り 内面口辺部横位の篦ミガキ 内面体部放射状の篦ミガキ	回転実測

挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
477－6	坏	口径　12.4 器高　5.1	底部丸底で、体部内彎気味に立ち上がり、口辺に至る。	外面篦削り 内面口辺部ヨコナデ 内面体部放射状の篦ミガキ	完全実測
477－7	坏	口径　19.7 器高　7.4	底部丸底で、短く外反する口辺部を持つ。 口辺楕円を呈する。	内外面口縁部横位の篦ミガキ 内面体部横位・縦位の篦ミガキ	回転実測
477－8	高　坏	口径　16.6 脚径　3.8 ～ 5.8 裾径　13.6 器高　11.9	裾部は直線的に開き、円筒状の脚部を経て坏部に至る。坏部は内彎気味に外傾し、口辺部に至る。	坏部外面縦位の篦ミガキ(暗文風) 坏部内面横位の刷毛目の後、放射状の暗文風篦ミガキ 脚部外面縦位の篦ミガキ 脚部内面篦削り 裾部外面放射状の暗文風篦ミガキ 裾部内面横位の刷毛目	完全実測
477－9	高　坏	口径　21.0 脚径　4.5 現高　8.1	坏部はやや内彎しながら口辺部に至り、一度外反した後短く直立する。	坏上部外面ヨコナデ 坏下部外面刷毛目 坏部内面放射状の暗文風篦ミガキ	回転実測 脚部欠損
477－10	高　坏	口径　17.2 脚径　4.1 ～ 7.5 裾径　13.7 器高　11.5	裾部は直線的に開き、脚部は内彎気味に坏部へ集約される。 坏部は内彎気味に外傾し、口辺部に至る。	坏部外面縦位の暗文風篦ミガキ 坏部内面横位の刷毛目調整の後、放射状の暗文風篦ミガキ 脚部外面縦位の丁寧な篦ミガキ 脚部内面横位の刷毛目 裾部外面放射状の暗文風篦ミガキ 裾部内面ナデの後、放射状の暗文風篦ミガキ	完全実測
477－11	高　坏	脚径　3.9 ～ 5.3 裾部　13.0 現高　9.1	裾部は鋭く外反し、脚部は直線的に立ち上がる。 坏下部に外稜を持つ。	坏部外面縦位の篦ミガキ 坏部内面篦ミガキ 脚部外面縦位の篦ミガキ 脚部内面横位の刷毛目 裾部外面放射状の篦ミガキ 裾部内面ナデ	完全実測 口辺部欠損
477－12	高　坏	脚径　3.7 ～ 6.1 裾径　13.3 現高　7.1	裾部は直線的に鋭く外反し、脚部は直線的に立ち上がる。	脚部外面篦ミガキ 脚部内面篦削り 裾部外面篦ミガキ 裾部内面刷毛目	完全実測 坏部欠損
477－13	高　坏	裾径　12.9 現高　2.3	裾部は外傾気味に開き、端部で短く内彎する。	裾部内外面ヨコナデ	回転実測 坏脚部欠損
477－14	高　坏	口径　18.6 脚径　3.6 ～ 6.5 裾径　14.8 器高　13.2	裾部は鋭く外反し、脚部は直線的に立ち上がる。 坏部は下半に強い稜を持ち、内彎気味に口辺部に至る。	坏部内外面縦位の篦ミガキ 脚部外面刷毛目調整の後、縦位の篦ミガキ 脚部内面刷毛目調整の後、篦削り 裾部外面篦ミガキ 裾部内面刷毛状工具によるナデ	完全実測
477－15	高　坏	脚径　3.9 ～ 7.4 裾径　14.2 現高　10.6	裾部外傾気味に開き、脚部は直線的に立ち上がる。 坏部は下半に稜を持ち内彎気味に外傾する。	坏部外面縦位の篦ミガキ 坏部内面刷毛目調整の後、主として縦位の暗文風篦ミガキ 脚部外面縦位の篦ミガキ 脚部内面刷毛目調整及びナデ 裾部外面篦ミガキ 裾部内面刷毛目調整とヨコナデ	回転実測 口辺部欠損

挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
477—16	高　坏	口径　17.2 脚径　3.9 ～ 8.0 裾径　13.8 器高　11.4	裾部は直線的に開き、脚部は直線的に立ち上がる。 坏部は下半に強い稜を持ち直線的に外傾し口辺部に至る。	坏部外面縦位の刷毛目 坏部口辺部ヨコナデ 坏部下半部横位の刷毛目 坏部内面刷毛目調整の後、暗文風篦ミガキ 脚部外面縦位の篦ミガキ 脚部内面刷毛目 裾部外面篦ミガキ、内面ナデ	回転実測
477—17	坏　蓋 （須）	口径　12.4 器高　4.3	やや外反する縁部から垂直に立ち上がり、平らな天井部に至る。 体部中央に稜を持つ。	天井部右回転篦削り 天井頂部右回転篦ナデ 体部外面ヨコナデ 内面ヨコナデ	完全実測
477—18	坏　蓋 （須）	口径　11.2 器高　4.4	やや外反する縁部から内彎気味に立ち上がり、丸味を持った天井部に至る。	天井部外面右回転篦削り 体部外面ヨコナデ 体部・天井部内面ヨコナデ	完全実測
477—19	坏　蓋 （須）	口径　12.6 器高　4.5	やや外反する縁部から直線的に立ち上がり、やや平らな天井部に至る。 体部中央やや上半に稜を持つ。	天井部外面回転篦削り 体部外面ヨコナデ 体部・天井部内面ヨコナデ 外面に暗灰色の釉をかぶる	完全実測
477—20	坏　蓋 （須）	口径　12.4 器高　5.2	やや外反する縁部から丸味を持つ天井部に至る。 体部中央に稜を持つ。	天井部外面右回転篦削り 体部外面ヨコナデ 体部・天井部内面ヨコナデ	完全実測
477—21	坏 （須）	口径　11.0 器高　6.1	丸底から内彎気味に立ち上がり、やや外反する口辺端部に至る。	外面体部下半・底部右回転篦削り 外面体部上半・口辺部ヨコナデ 内面ヨコナデ	完全実測 470—20と セット関係か



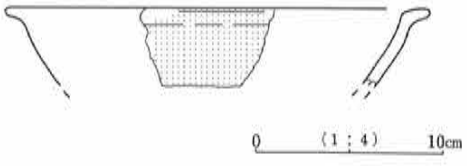
第478図　第2号住居址出土石器実測図



第479図　H２号住居址出土石器実測図

第370表　Ｈ２号住居址出土石器一覧表

挿図番号	器　種	石　質	法　量　（cm, g）				備　　考
			長さ	幅	外周	重量	
479－1	編物石	安山岩	13.0	5.2	15.8	427.3	加工痕を有し、表面に使用擦過痕
479－2	編物石	安山岩	14.3	6.2	20.1	749.4	表面に使用擦過痕
479－3	編物石	ホルンヘルス	17.7	8.5	18.4	737.0	使用時の欠損が数ヶ所有り
479－4	編物石	角閃石安山岩	16.3	5.9	16.0	628.6	表面に使用擦過痕及び敲打痕
479－5	編物石	安山岩	17.1	7.1	17.0	643.8	表面に使用擦過痕及び敲打痕
479－6	編物石	安山岩	13.4	5.8	16.5	592.3	表面に使用擦過痕
479－7	編物石	安山岩	17.3	8.5	17.0	709.0	表面に使用擦過痕及び敲打痕
479－8	編物石	安山岩	11.1	6.2	18.4	534.3	表面に使用擦過痕及び敲打痕
479－9	編物石	安山岩	14.7	5.3	15.2	416.9	表面に使用擦過痕
479－10	編物石	安山岩	16.6	6.7	15.8	500.7	表面に使用擦過痕及び敲打痕
479－11	編物石	輝　石安山岩	13.2	5.9	16.1	486.7	表面に使用擦過痕
479－12	編物石	安山岩	14.9	6.5	18.0	696.5	表面に使用擦過痕、使用時の欠損部有り
479－13	編物石	安山岩	13.9	5.8	14.1	399.1	表面に使用擦過痕
479－14	砥　石	安山岩	15.3	6.7	厚さ4.8	668.1	砥石としての使用頻度は低い
478－1	砥　石	砂　岩	(6.55)	5.0	厚さ2.1	58.6	扁平四面砥、荒砥
478－2	砥　石	流紋岩	6.65	2.35	厚さ1.7	45.1	四面砥、仕上砥
478－3	砥　石	流紋岩	5.5	2.8	厚さ2.6	39.4	未成品
478－4	石　製模造品	粘板岩	7.3	3.6	厚さ0.75	27.4	表面及び外周に研磨痕



第480図　Ｈ２号住居址出土弥生土器実測図

第371表　Ｈ２号住居址出土弥生土器一覧表

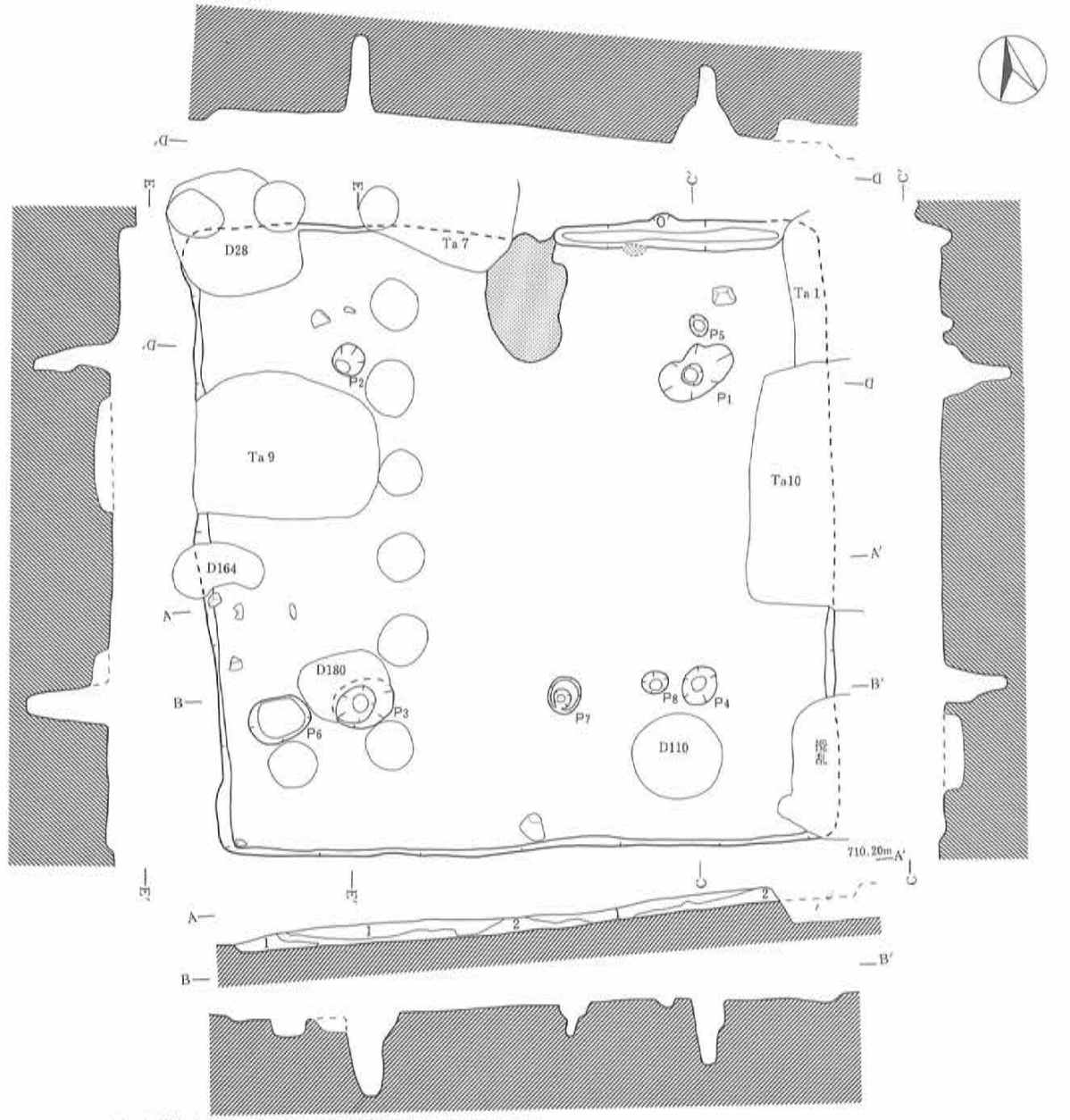
挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態及び手法の特徴
480－1	坏	口径　(22.6) 現高　4.1	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外傾気味に短く外反する。 内外面赤色塗彩。

4　H３号住居址

本住居址は、調査区中央付近か・き・く－５・６グリッド内に位置し、全体層序第Ⅱ層黄褐色土層上面において検出された。Ta１・７・９・10号竪穴遺構、D28・110・164・165・180・287号土坑、Ｆ１号掘立柱建物址と重複関係にあり破壊される。また南東隅を撹乱により破壊される。

平面形態及び規模は、推定で東壁708cm、西壁725cm、南壁728cm、北壁743cmで、東西760cm、南北747cmを測り、東西にやや長い方形を呈する。主軸方位はＮ－10°－Ｅを示す。

覆土は２層に分割された。１層は黒褐色土層で、粒子細かく、粘性がややあり、黄白色ローム・漆黒色土を多量に含み、５㎜大の小石粒・炭化粒子・パミスを微量含む。２層は粒子細かく、黄白色ローム・５㎜大の小石粒を含む褐色土層である。確認面からの壁高は6.5～33.5cmを測り、床面から比較的急傾斜で立ち上がる。壁溝は北

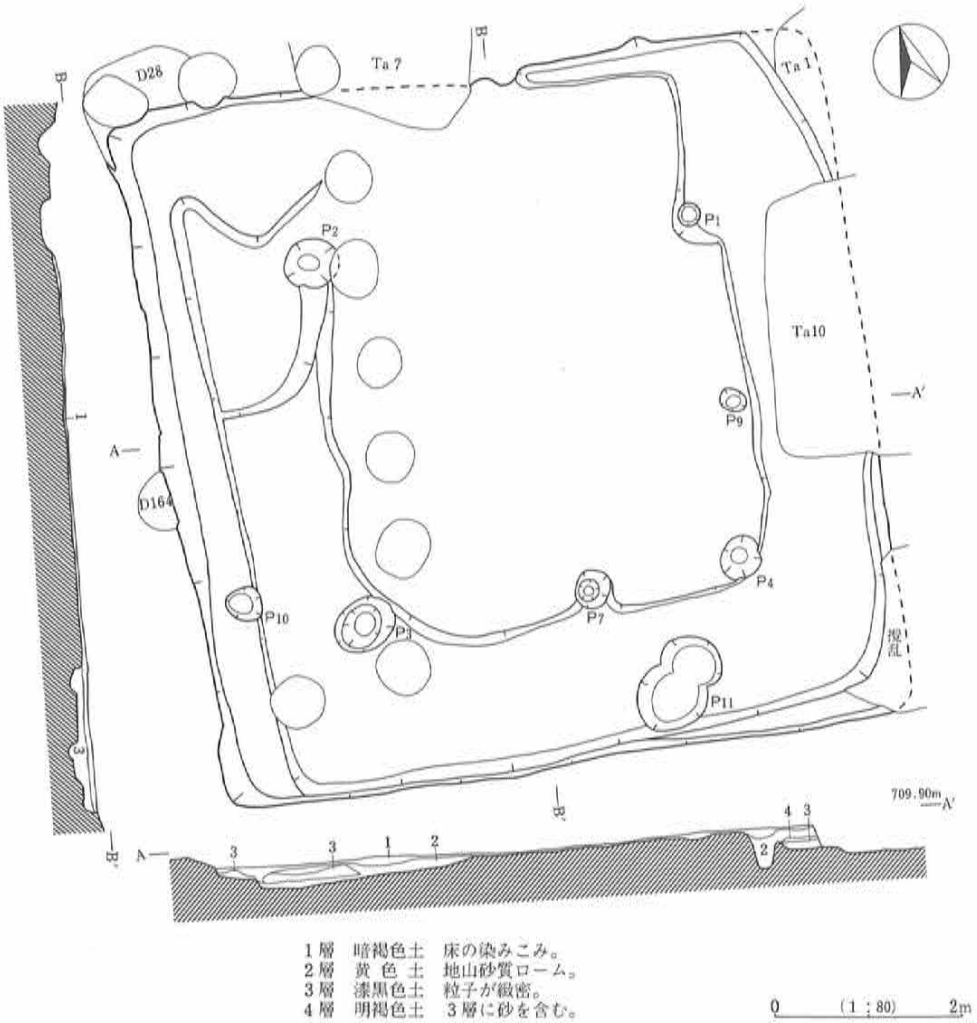


１層　黒褐色土　粒子細かく粘性中。黄白色ローム・漆黒色土を斑点状に多量に含む。炭化粒子５㎜大の小石粒・パミスを微量に含む。

２層　褐 色 土　粒子細かく粘性中。黄白色ローム・５㎜大の小石粒を含む。

0　（１：80）　2m

第481図　H３号住居址実測図

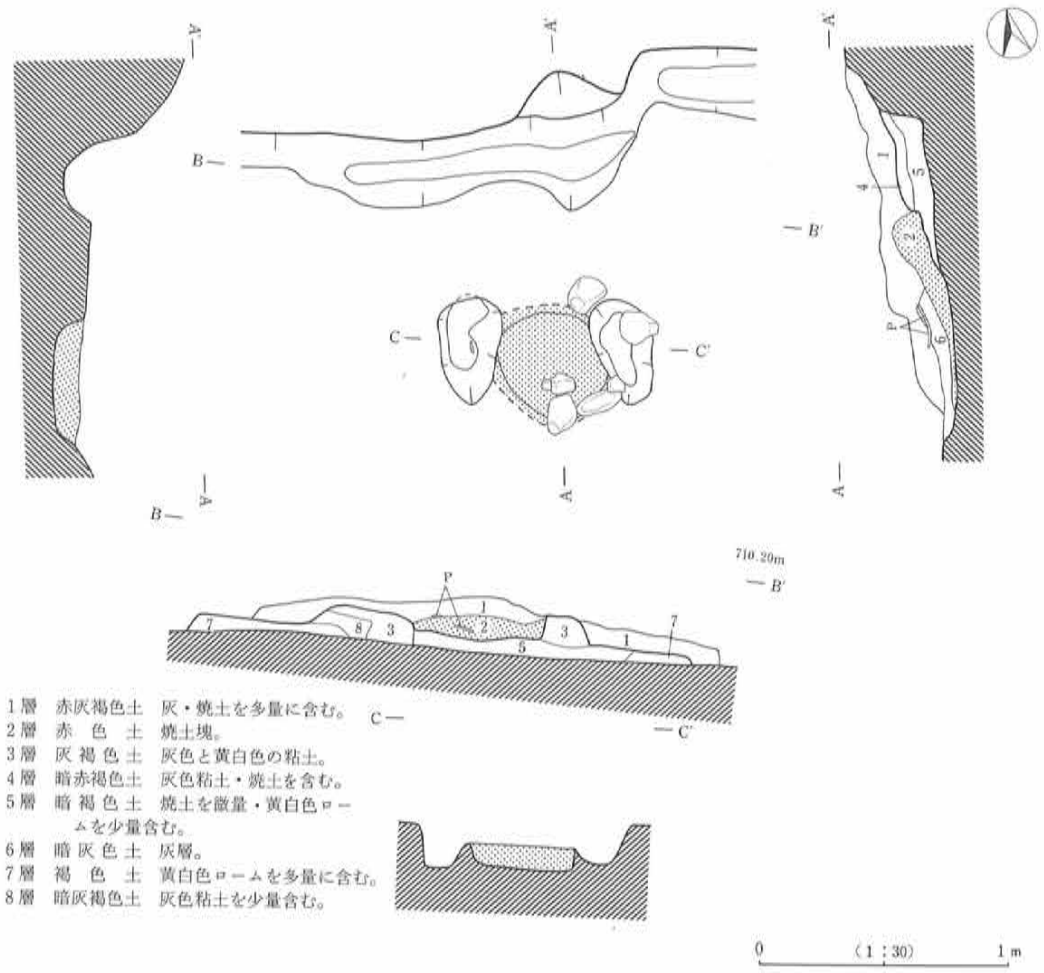


第482図　Ｈ３号住居址掘り方実測図

壁東側で確認された。溝幅は22～38cmを測り、７～13cmの深さを有する。断面形は「Ｕ」字状を呈する。床面は、東壁・西壁・南壁の内側約130～180cmを「コ」の字状に20cm前後掘り込み、黄色砂質ローム（２層）・漆黒色土（３層）・明褐色土（４層）を埋め戻した後、暗褐色土を２～10cmの厚さで貼床が施されており、平坦で堅緻な状態である。ピットは８個検出され、そのうちP_1～P_4は主柱穴である。各主柱穴間は各々400cm前後でほぼ方形に配される。P_1は53×92cmの不整楕円形を呈し、深さは85cmを測る。P_2は径40cmの円形で91cmの深さを有し、南側がやや袋状となる。P_3はＤ180号土坑に上面を破壊されるが、58×78cmの楕円形で98cmの深さを有する。P_4は40×50cmの楕円形を呈し、深さは77cmを測る。P_5はP_1の北側、P_6はP_3の西側に位置し、P_7・P_8はP_3—P_4間に位置するが、性格は不明である。また貼床下よりP_9・P_{10}・P_{11}が検出された。

カマドは北壁中央やや東寄りに位置し、焚口から煙道までの長さ140cm、袖部の幅約85cmの規模を有したと考えられる。煙道部は壁体を長さ18cm、幅45cmの舟先状に掘り込んで構築される。火床部は壁から約100cm離れた床面を径50cmの円形に掘り込んで構築され、内部には10cmの厚さで焼土が観察された。袖部は灰褐色粘土（３層）を用いて構築され、火床部の両側には袖石が埋設された25×42cmの楕円形を呈するピットが２個検出された。火床部周辺には、10～15cm前後の礫が７個検出されており、カマドの構築材と考えられる。

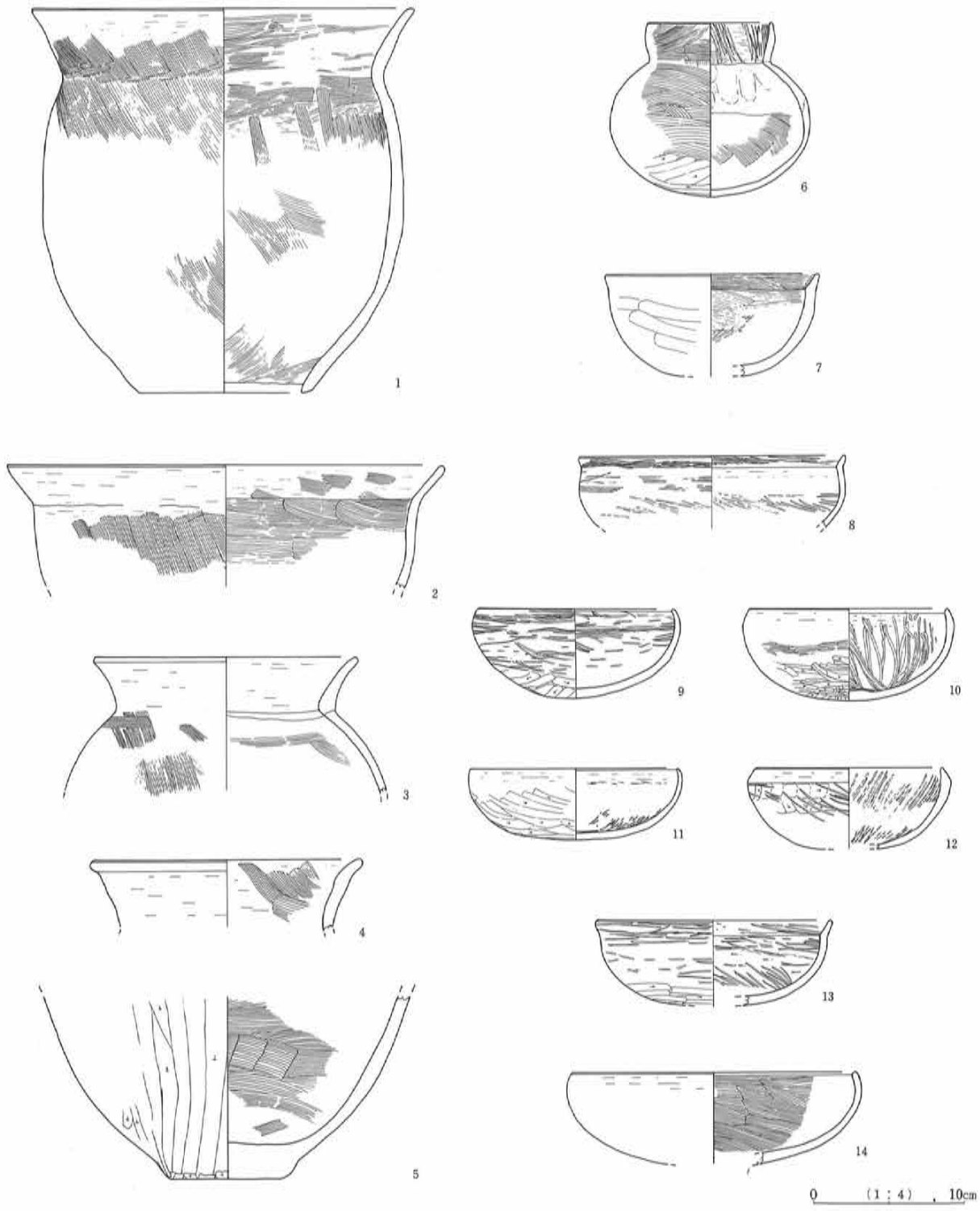
遺物の出土状況は、カマド内及び周辺に集中する傾向が認められ、その他の遺物は、住居址内に散在し、床面直上または床面よりわずかに浮いた状態で出土した。484図１・２・３・５・７・８・11・13・14はカマド内より出土し、484図４は南西隅の床面より出土した。484図６は北壁東側より、484図10は中央付近南側より床面よりわずかに浮いた状態で出土した。また484図12は貼床内より出土した。



第483図　H３号住居址カマド実測図

第372表　H３号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
484－1	甕	口径　25.2 胴径　23.8 孔径　10.6 器高　25.3	孔部やや外反し、胴部ゆるやかに内彎しつつ立ち上がり、最大径を持つ口縁部に至る。	口縁部内面横位の篦ミガキ 口縁部・胴上半部縦位の刷毛目 胴部内外面刷毛目	回転実測
484－2	甕	口径　28.8 現高　7.9	口縁部内彎気味に外反する。 口縁に最大径を持つ。	口縁部外面ヨコナデ 胴上半部外面縦位の刷毛目 口縁部内面ヨコナデ・刷毛目 胴上半部内面横位の刷毛目	回転実測 胴下半部を欠損
484－3	甕	口径　15.4 現高　8.6	球形を成す胴部から「く」の字に外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴上半部内外面刷毛目	回転実測
484－4	甕	口径　17.9 現高　4.3	口縁部やや外傾しながら外反する。	口縁部外面ヨコナデ 口縁部内面ヨコナデ・刷毛目	回転実測
484－5	甕	底径　7.5 現高　12.0	平底より球胴部に至る。	胴下半部外面上→下への篦削り 胴下半部内面横位の刷毛目	回転実測



第484図　Ｈ３号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
484―６	坩	口径　8.3 頸径　8.0 胴径　13.2 器高　11..4	丸底より球胴を経て頸部で窄まる。口縁部やや内彎気味に直立する。	口縁部外面刷毛目 胴中央・上半部刷毛目 胴下半部・底部篦削り 口縁部内面ヨコナデの後、縦位の篦ミガキ 胴中央部以下刷毛目 胴上半部に指頭痕	回転実測

挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
484－7	坏	口径　14.1 現高　6.2	丸底より内彎気味に立ち上がり、口辺に至る。 口辺部内稜を持ち、短く外反する。	口辺部内面刷毛目 口辺部外面ヨコナデ 体部外面篦削り 体部内面刷毛目調整の後、放射状の暗文風篦ミガキ	回転実測 底部欠損
484－8	坏	口径　17.6 現高　4.7	体部内彎気味に立ち上がり、内稜を持ち、短く外反する口辺に至る。	口辺部内外面横位の篦ミガキ 体部内外面篦ミガキ	回転実測 底部欠損
484－9	坏	口径　13.0 器高　5.9	丸底より内彎して立ち上がり、口辺に至る。	口辺部内外面主として横位の篦ミガキ 体上半部内外面篦ミガキ 体下半部・底部外面篦削り	完全実測
484－10	坏	口径　12.9 器高　5.1	丸底より内彎して立ち上がり、口辺に至る。	口辺部内外面ヨコナデ 体上半部外面横位の篦ミガキ 体下半部・底部外面篦削り 体部内面篦ミガキ	回転実測
484－11	坏	口径　13.6 器高　4.7	丸底より内彎して立ち上がり、口辺に至る。	口辺部内外面ヨコナデ 体部・底部外面篦削り 体部内面放射状の暗文風篦ミガキ	回転実測
484－12	坏	口径　12.2 現高　5.4	丸底より内彎して立ち上がり、弱い外稜を持つ口辺に至る。	口辺部内外面ヨコナデ 体上半部外面横位の篦削りの後、篦ミガキ 体部内面篦ミガキ	回転実測 底部欠損
484－13	坏	口径　15.4 現高　5.6	体部内彎して立ち上がり、内稜を持ち、短く外反する口辺に至る。	口辺部内外面横位の篦ミガキ 体上半部外面篦ミガキ 体下半部外面篦削り 体部内面暗文風篦ミガキ	回転実測 底部欠損
484－14	坏	口径　18.7 現高　6.0	体部内彎して立ち上がり、口辺に至る。	口辺部外面ヨコナデ 体部外面調整不明 体部内面横位の刷毛目	回転実測 底部欠損

第373表　H３号住居址出土石器一覧表

挿図番号	器　種	石　種	法　量　(cm, g)				備　考
			直径	孔径	厚さ	重量	
485	臼　玉	滑　石	0.53	0.12	0.21	0.13	研磨痕

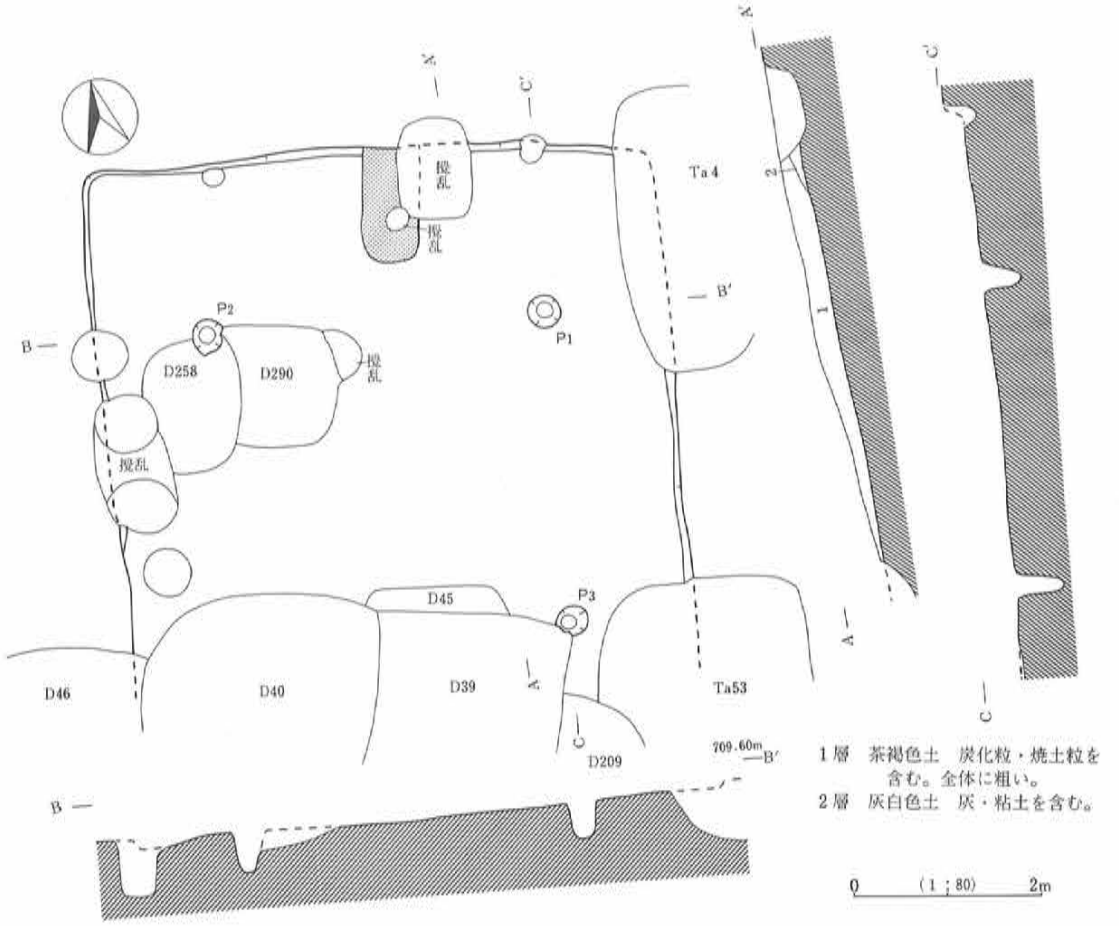
第485図　第３号住居址出土石器実測図

5　H４号住居址

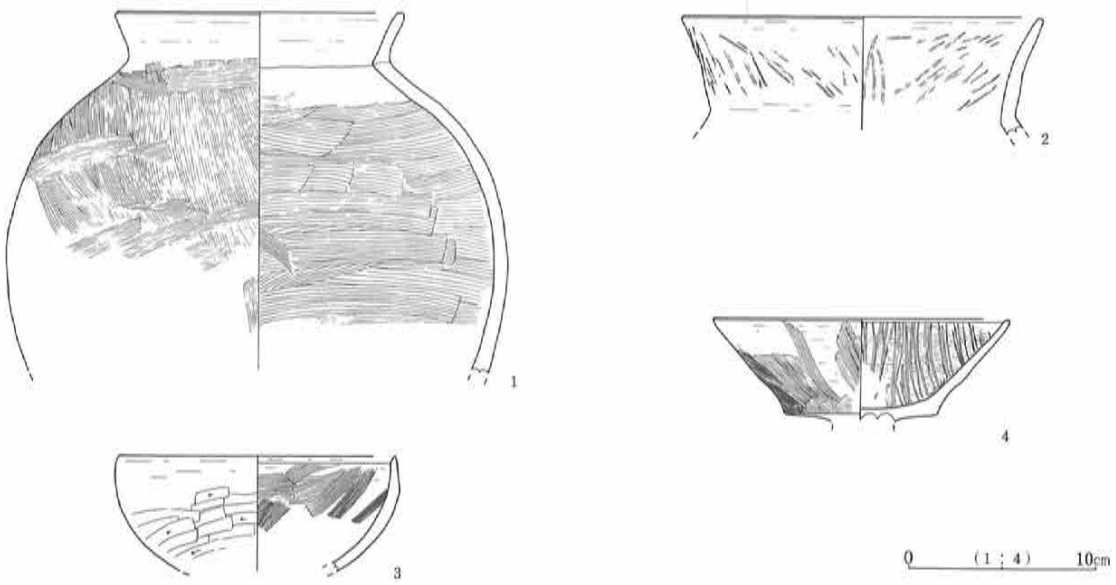
本住居址は、調査区南側さ・し－6・7グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。Ta４・53号竪穴遺構、D39・40・45・46・209・258・290号土坑、F２号掘立柱建物址と重複関係にあり、Ta４号竪穴遺構に東壁北側、D258・290号土坑にP_2南側、F２号掘立柱建物址に西壁の一部、Ta53号竪穴遺構、D39・40・45・46・209号土坑に南側を破壊され、さらに撹乱によって北壁の一部を破壊される。

平面形態及び規模は南側が破壊されているため明確ではないが、北壁長は576cmで、東西長は残存部で600cmを測り、ほぼ方形を呈すると考えられる。主軸方位はN－11°－Eを示す。

覆土は粒子粗く、炭化粒・焼土粒子を含む茶褐色土層１層のみである。確認面からの壁高は０～25cmを測り、

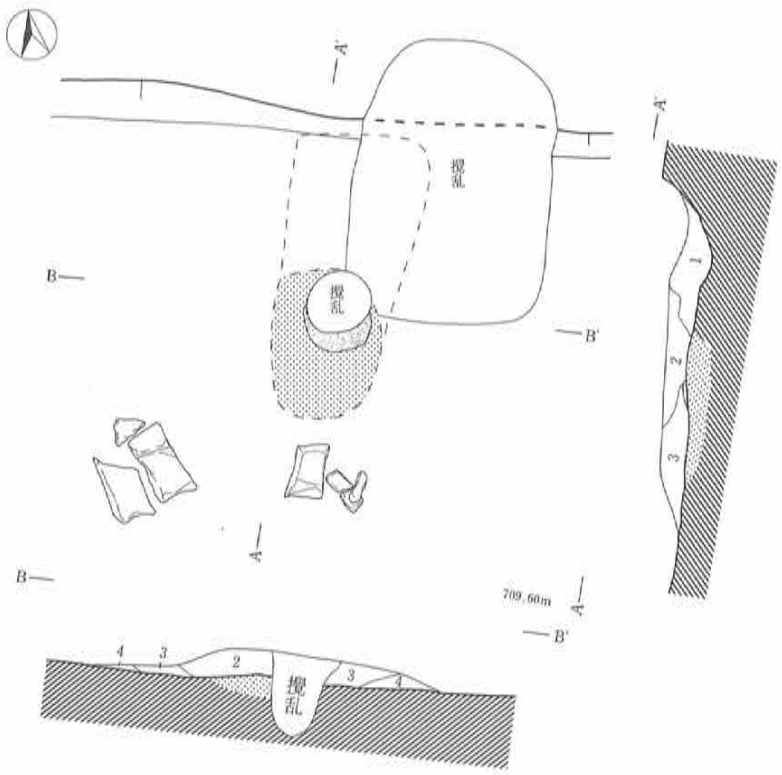


第486図　H 4 号住居址実測図



第487図　H 4 号住居址出土遺物実測図

床面から比較的急傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかった。床面は黄褐色ローム層を踏み固めてあり、全体に平坦であるが、南に向ってわずかにレベルを低下させている。ピットは総数で3個検出された。いずれも主柱穴で、P_1-P_2間322cm、P_1-P_3間295cmを測り、南西の主柱穴は破壊されているが、東西に長い長方形に配され



1層　暗褐色土　焼土・灰・ローム粒子を含む。
2層　灰褐色土　灰多量に含む。
3層　暗褐色土　灰を含む。
4層　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。

0　(1：30)　1m

第488図　H４号住居址カマド実測図・遺物分布図

る。平面形態はいずれも径35cmの円形を呈し、深さは各々41cm・55cm・50cmを測る。

カマドは北壁中央に位置するが、撹乱により北東部を破壊されており、残存状況は極めて不良である。北壁から約50cmの床面上に44×60cmの範囲で焼土と灰が認められ、さらにその南にカマドの構築材と考えられる溶結凝灰岩が検出された。袖部は既に崩壊しており、旧状は不明である。

遺物の出土状況は、本住居址からは極く少量の土師器が出土しており、特に集中する箇所は認められない。487図１はカマドの西側の床面より出土し、487図４はカマド内より出土している。また撹乱層から分銅形石製品が出土している。

第374表　H４号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
487－1	甕	口径　15.1 胴径　26.7 現高　18.9	胴部は球胴から頸部まで窄まり、「く」の字に短く外反する口縁部を持つ。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面左→右への刷毛目 胴部内面主として上→下への刷毛目	回転実測 胴下半以下欠
487－2	甕	口径　19.1 現高　6.2	口縁部は外傾気味に立ち上がる。	口縁部内外面ヨコナデの後、篦ミガキ	回転実測 口縁のみ残存
487－3	坏	口径　14.7 現高　6.1	体部ゆるやかに内彎して立ち上がり口辺部に至る。	口辺部内外面ヨコナデ 体部外面右→左への篦削り 体部内面刷毛目	回転実測 底部欠損
487－4	高坏	口径　15.7 現高　5.4	坏部直線的に外傾し、口辺部に至る。	坏部外面ヨコナデの後、上→下への刷毛目 坏部内面刷毛目調整の後、暗文風ミガキ	回転実測 坏部のみ残存

0　（1：2）　5cm

第489図　Ｈ４号住居址出土石器実測図

第375表　Ｈ４号住居址出土石器一覧表

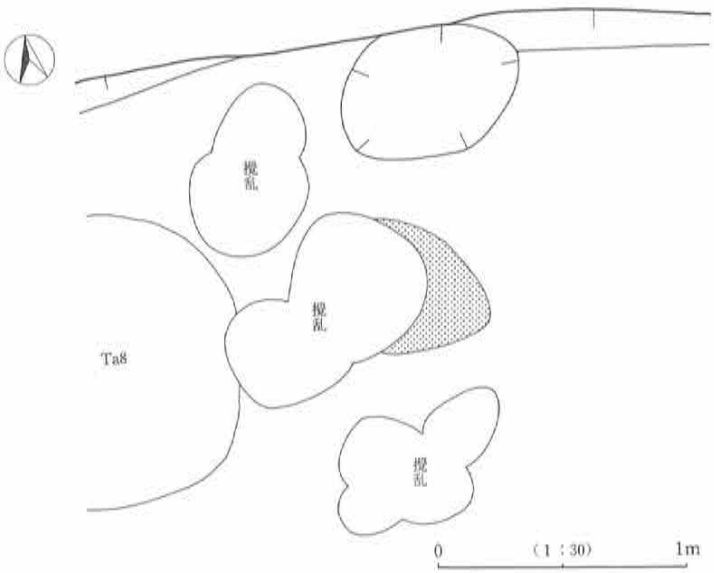
挿図番号	器種	石質	法量（cm, g）			備考
			長さ	幅	重量	
489	分銅形石製品	流紋岩	6.0	2.95	72.2	研磨痕、断面八角形 摘部孔径1.9mm 中世の混入遺物か

6　Ｈ５号住居址

1層　茶褐色土　小パミスと極小砂粒を含む。
2層　褐色土　小パミスを含み、きめ細かい。
3層　褐色土　2層にロームを含む。
4層　暗褐色土　2層よりさらにきめ細かい。

0　（1：80）　2m

第490図　Ｈ５号住居址実測図



第491図　H５号住居址カマド実測図

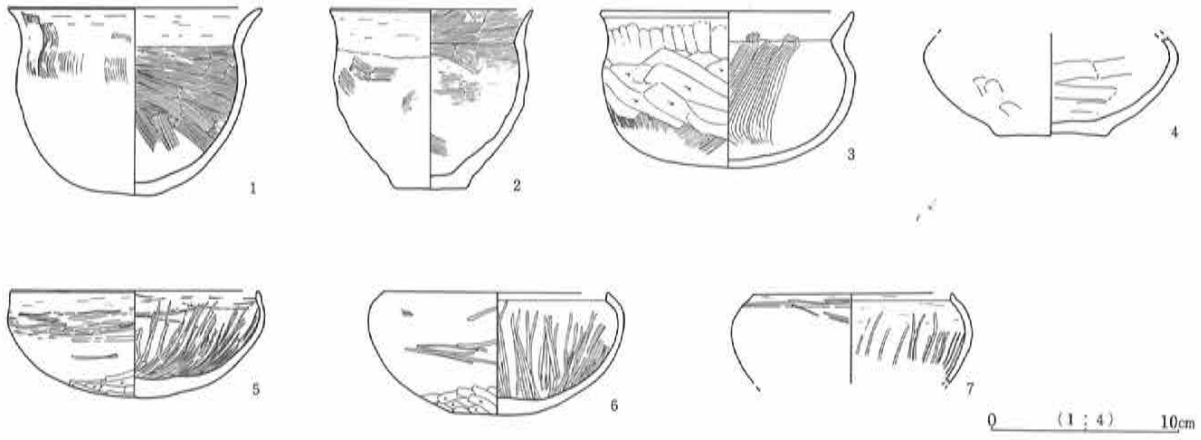
本住居址は、調査区中央付近く・け・こ－５・６・７グリッド内に位置し、全体層序第Ⅱ層黄褐色土層上面において確認された。Ta８・11・14・52号竪穴遺構、D41・42・44・88・95・126・144・147・150・153・207・208・212土坑と重複関係にあり破壊される。また径30～50cm大の円形の撹乱によって床面を破壊される。

平面形態及び規模は、東壁・南壁は推定で708cm・750cm、西壁745cm・北壁779cmで、東西788cm・南北764cmを測り、東西にやや長い方形を呈する。主軸方位はN－７°－Eを示す。

確認面からの壁高は０～17.5cmを測る。壁溝は南壁のみに検出され、溝幅は８～26cmを測り、４～15cmの深さを有する。床面は黄褐色ローム層を踏み固めて比較的堅固な状態で、全体にほぼ平坦であるが西に向ってわずかにレベルを低下させている。ピットは総数で３個検出された。P_1・P_2は南側に配される主柱穴で、北側の主柱穴はD88号土坑・D42号土坑によって破壊されている。P_1は44×56cmの楕円形を呈し深さは66.5cmを測る。P_2は54×64cmの楕円形で西側にテラスを有する。深さは、テラス部で29cm、最深部で74cmの深さを有する。P_3は南壁中央東寄りに位置する張り出しピットで、壁体を一辺約100cmの方形に掘り込み、さらに48×108cmの長方形に掘り込んだ貯蔵穴で深さは87cmを測る。覆土は４層に分割された。１層はパミス・砂粒を含む茶褐色土層、２層は粒子が細かく、パミスを含む褐色土層、３層はパミス・ローム粒子を含む褐色土層、４層は粒子の細かい暗褐色土層である。

カマドは北壁中央に位置するが、天井部・袖部はすでに失われ、さらに西側を撹乱により破壊されており、火床部がわずかに確認されたのみで、残存状況は極めて不良である。

遺物の出土状況は、492図１・２はP_3内より出土し、492図４は中央付近西側床面より、492図５・６は北東隅床面より出土しており、特に遺物の集中する箇所は認められない。



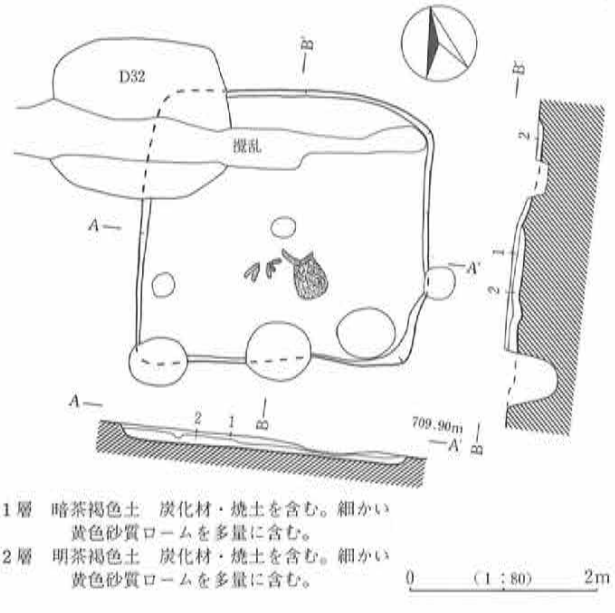
第492図　H５号住居址出土遺物実測図

第376表　H5号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
492－1	小　形 甕	口径　13.5 胴径　12.2 底径　3.4 器高　10.0	丸味を帯びた平底から内彎気味に立ち上がり、口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面縦位の刷毛目 胴部内面横位の刷毛目	完全実測
492－2	小　形 甕	口径　10.8 胴径　10.3 底径　3.8 器高　9.5	平底から内彎気味に立ち上がり、口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部外面ヨコナデ 胴部外面刷毛目 口縁部・胴部内面横位の刷毛目	回転実測
492－3	小　形 甕	口径　13.5 胴径　13.4 器高　13.2	丸底から内彎して立ち上がり、口縁部は「く」の字に外反する。	口縁部内外面ヨコナデ 胴上半外面篦状工具によるナデ 胴上中半外面横位の刷毛目 胴下半部刷毛目	完全実測
492－4	小　形 壺 ？	胴径　13.6 底径　6.2 現高　5.3	上底から内彎気味に立ち上がる。	胴下半部内外面刷毛状工具によるナデ	回転実測 胴下半以下欠
492－5	坏	口径　13.1 器高　5.7	丸底から内彎気味に立ち上がり、口辺部でやや直線的に内傾する。	口辺部外面ヨコナデ 体部上半横位の篦ミガキ 体部下半・底部篦削り 口辺部内面ヨコナデの後、横位の篦ミガキ 体部内面放射状暗文風篦ミガキ	完全実測
492－6	坏	口径　11.9 底径　4.6 器高　6.4	丸味を帯びた平底から内彎気味に立ち上がり、口辺部で内傾する。	体部上半外面横位の篦ミガキ 体部下半外面・底部篦削り 体部内面放射状暗文風篦ミガキ 口辺部内面ヨコナデ	回転実測
492－7	坏	口径　10.6 現高　4.7	内彎気味に立ち上がる体部から、内傾する口辺部に至る。口辺端部はわずかに外反する。	口辺部外面ヨコナデ後横位の篦ミガキ 体部外面不明 口辺部内面ヨコナデ 体部内面放射状暗文風篦ミガキ	回転実測 底部欠損

7　H6号住居址

本住居址は、調査中央付近く・け－7グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。D32号土坑、F3号掘立柱建物址と重複関係にあり、D32号土坑に北西隅を、F3号掘立柱建物址に南壁付近を破壊される。また撹乱により、北壁付近を破壊される。



1層　暗茶褐色土　炭化材・焼土を含む。細かい黄色砂質ロームを多量に含む。
2層　明茶褐色土　炭化材・焼土を含む。細かい黄色砂質ロームを多量に含む。

第493図　H6号住居址実測図

平面形態及び規模は、北壁・南壁・西壁は推定で各々290cm・284cm・270cm、東壁は245cmで、東西309cm・南北290cmを測る東西にやや長い方形を呈する。主軸方位はN－18°－Eを示す。

覆土は2層に分割された。1層は炭化物・焼土を含み、粒子の細かい黄色砂質ロームを多量に含む暗茶褐色土層で、2層は明茶褐色土層である。確認面から壁高は3～20cmを測り、床面から比較的急傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかった。床面は全体にほぼ平坦であるが、わずかに凹凸が見られ、中央付近やや南寄りにナラの木と思われる炭化物が出土した。

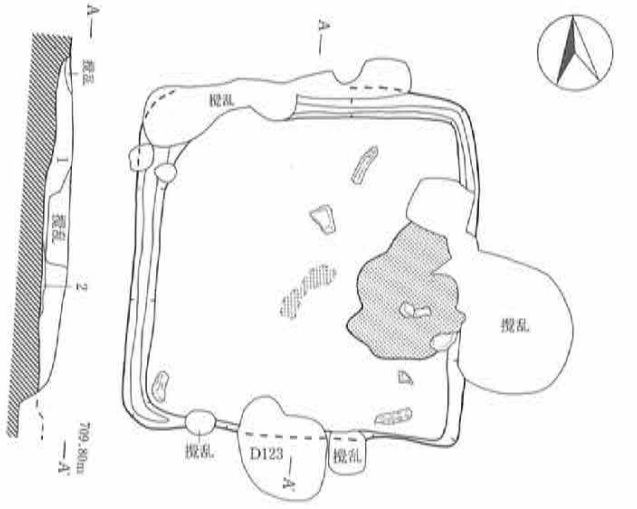
ピット・カマド等の付属施設は検出されなかっ

た。

遺物の出土状況は、覆土中より極く少量土師器が出土したのみである。

8　H７号住居址

本住居址は、調査区中央付近西側き・く－8・9グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。D123号土坑と重複関係にあり、南壁中央部を破壊され、さらに撹乱によって東壁中央部、北壁西側、南壁の一部を破壊される。



1層　暗茶褐色土　炭化材・焼土を含む。粒子細かい。
2層　黒褐色土　炭化材を含む。

0　(1：80)　2m

第494図　H７号住居址実測図

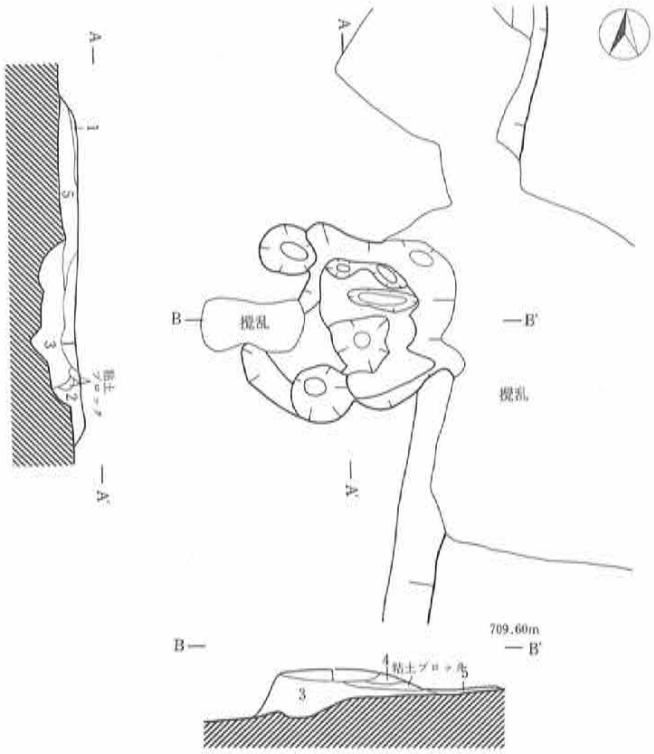
平面形態及び規模は、東壁356cm、南壁344cmで西壁・北壁は推定で各々340cm・326cmを測り、南北にやや長い方形を呈する。主軸方位はS－83°－Eを示し、床面積は10.3m²を測る。

覆土は２層に分割された。１層は暗茶褐色土層で粒子細かく、炭化物・焼土を含む。２層は炭化物を含む黒褐色土層で、床面直上にわずかに観察されるのみである。確認面からの壁高は1.5～24.5cmを測る。壁溝は西壁・北壁・東壁北側において検出され、住居址をほぼ半周する。壁溝幅は10～30cmを測り、2.5～6.5cmの深さを有する。床面は全体にほぼ平坦であるが、西に向ってわずかにレベルを低下させている。また床面中央には焼土が観察され、北壁付近東寄り、南東隅より炭化材が出土した。

ピットは検出されなかった。

カマドは東壁中央に位置する。天井部・袖部は既に崩壊し、煙道部は撹乱によって破壊されており、旧状は不明である。袖部の幅は約80cmの規模を有すると考えられる。火床部は壁直下の床面を70×75cmの不整形に掘り窪めた後、黒褐色土（３層）を埋め戻して設けたと考えられ、約５cmの厚さで焼土が観察された。また、火床部両側には袖石を埋設した径約20cm・25cm深さ８cm・14cmの円形ピットが２個検出されたが、袖石は既に失われている。

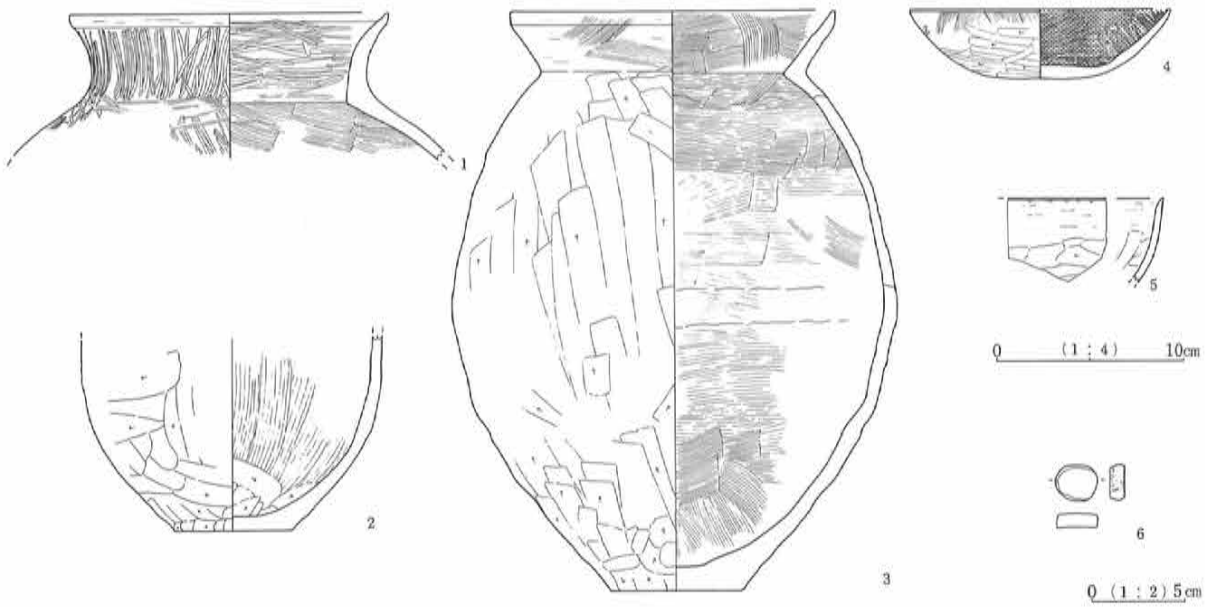
遺物の出土状況は、カマド内及び周辺に集中する傾向が認められる。496図１・４は中央付近南寄り、床面より約10cm浮いた状態で出土した。496図２はカマド内より出土し、496図３はカマド南側床面直上より出土した。



1層　赤褐色土　焼土。
2層　赤褐色土　(袖部と思われる。)
3層　黒褐色土　焼土粒を若干含む。
4層　黄褐色土　黄色ローム粒・灰を含む。
5層　赤褐色土　焼土を主体とする。

0　(1：30)　1m

第495図　H７号住居址カマド実測図



第496図　H７号住居址出土遺物実測図

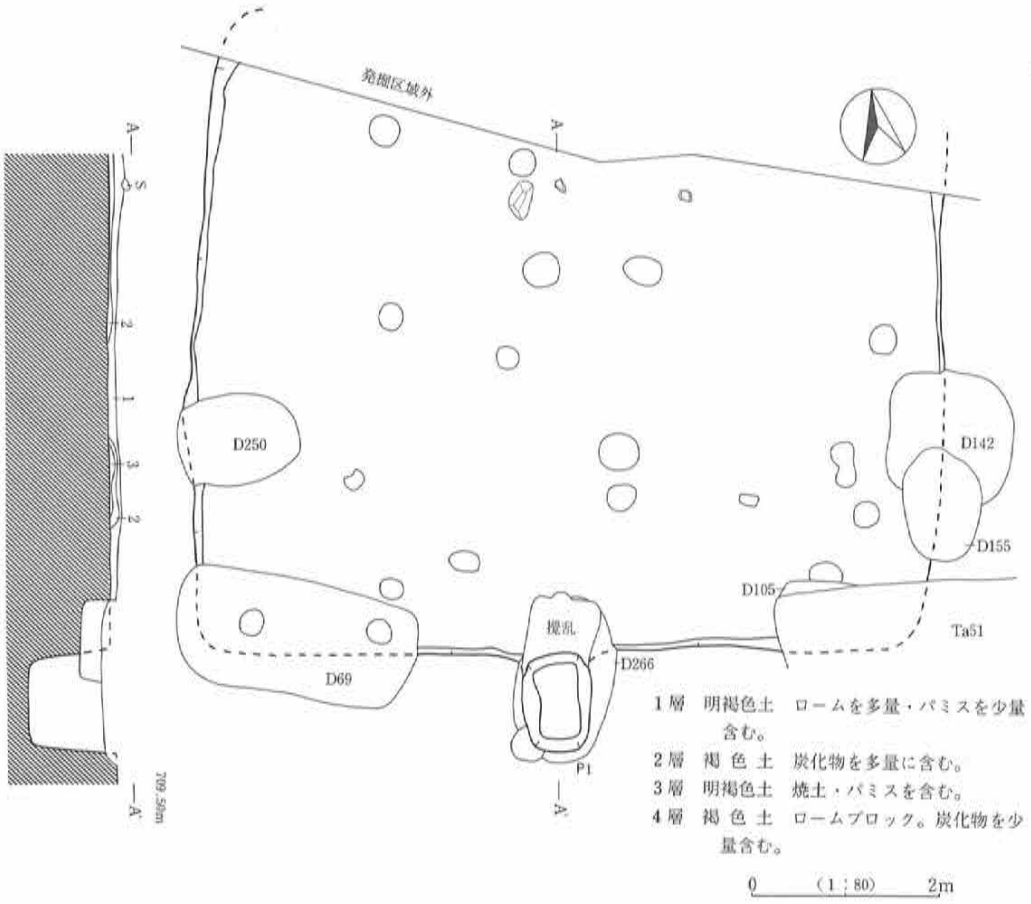
第377表　H７号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
496－1	甕	口径　16.9 現高　7.7	口縁部ゆるやかに外反する。	口縁部外面縦位の篦ミガキ 胴上半外面不規則な篦ミガキ 口縁部内面横位の篦ミガキ 胴上半内面横位の刷毛目	回転実測 胴部以下欠
496－2	甕	底径　6.3 現高　10.2	平底から内彎気味に立ち上がる。	胴下半外面篦削り 胴下半内面縦位の刷毛目 底部内面篦削り	回転実測 胴中央以上欠
496－3	甕	口径　17.2 胴径　23.7 底部　6.9 器高　30.8	平底から球胴を経て頸部で窄まる。口縁部「く」の字に折れ、直線的に外反する。	口縁部外面ヨコナデ及び刷毛目 胴部外面下→上への篦削り 口縁部内面刷毛目 胴部内面横位の刷毛目	回転実測
496－4	坏	口径　13.8 底径　5.1 器高　3.6	丸味を帯びた平底から、ほぼ直線的に口辺に至る。	口辺部外面刷毛目 体部外面・底部篦削り 内面篦ミガキ 内面黒色研磨	回転実測
496－5	坏	口径　(13.2)	内彎する体部からやや外反する口辺部に至る。	口辺部内外面ヨコナデ 体部外面篦削り 体部内面刷毛状工具によるナデ	破片実測
496－6	土製円板	径　2.2 厚さ　0.8	周囲を円形に研磨	内耳土器片を利用しており、本遺構には伴わない。	

9　H８号住居址

本住居址は、調査区北端う・え・お－5・6グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。Ta51号竪穴遺構、D69・73・76・105・134・138・142・155・250・251・256号土坑と重複関係にあり、D142・155号土坑に東壁南側、Ta51号竪穴遺構・D105号土坑に南東隅、D69号土坑に南西隅、D250号土坑に西壁南側、D266号土坑に南壁中央を破壊される。さらに径40cm前後の撹乱によって床面を破壊される。

平面形態及び規模は北側が調査区域外であるため、南壁が推定で740cm、東西796cmを測るのみで他は不明であるが、ほぼ方形を呈するものと考えられる。



第497図　H 8 号住居址実測図

覆土は3層に分割された。1層はローム粒子を多量に含み、パミスを少量含む明褐色土層、2層は炭化物を多量に含む褐色土層、3層は焼土・パミスを含む明褐色土層である。確認面からの壁高は12～31cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかった。床面は黄褐色ローム層を踏み固めて堅緻な状態であり、平坦である。なお、床面上より多量の焼土・灰及び垂木とそれに直交する母屋桁と考えられる炭化材が出土している。出土状況は桁の上に垂木が乗った状態で出土し、また、南北方向の垂木の上に東西方向の垂木が乗った状態が観察される。このことから本住居址の上屋構造は方形隅丸の寄棟造りであり、さらに上屋の構築状況をある程度推察することができよう。なお棟木・主柱と考えられる炭化材は検出されなかった。

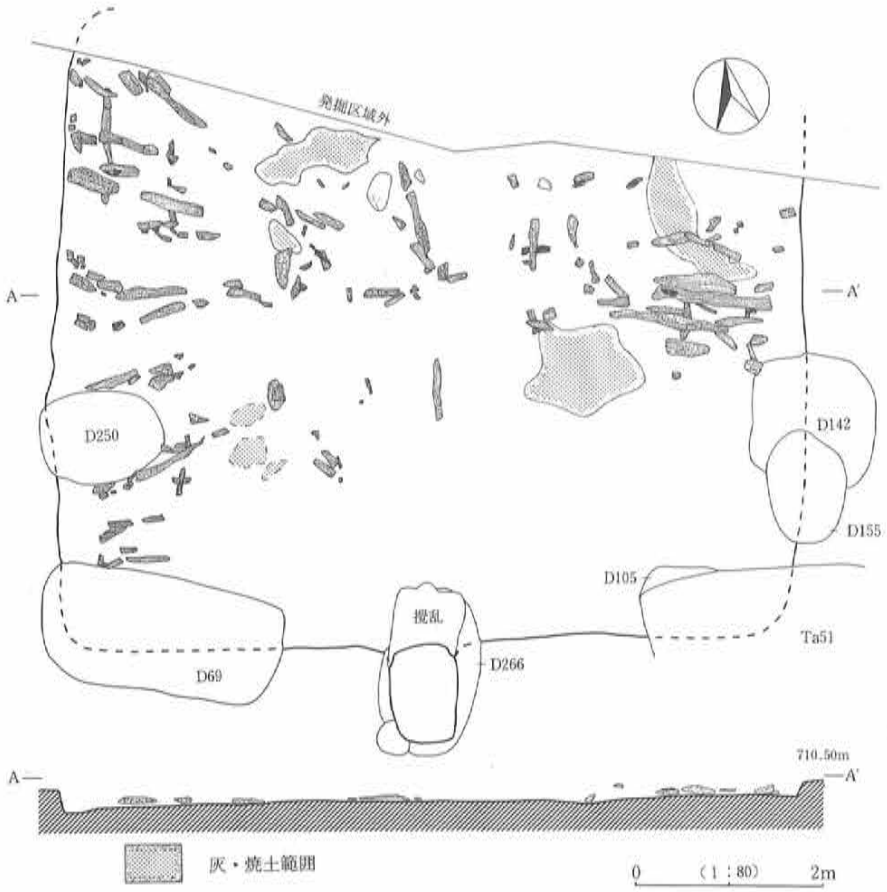
ピットは南壁中央に張り出しピットが1個（P1）検出された。

上面をD266号土坑、撹乱によって破壊されるが、残存部で東西74cm、南北104cm、深さ80cmを測る長方形を呈し、壁体から約100cm張り出す。

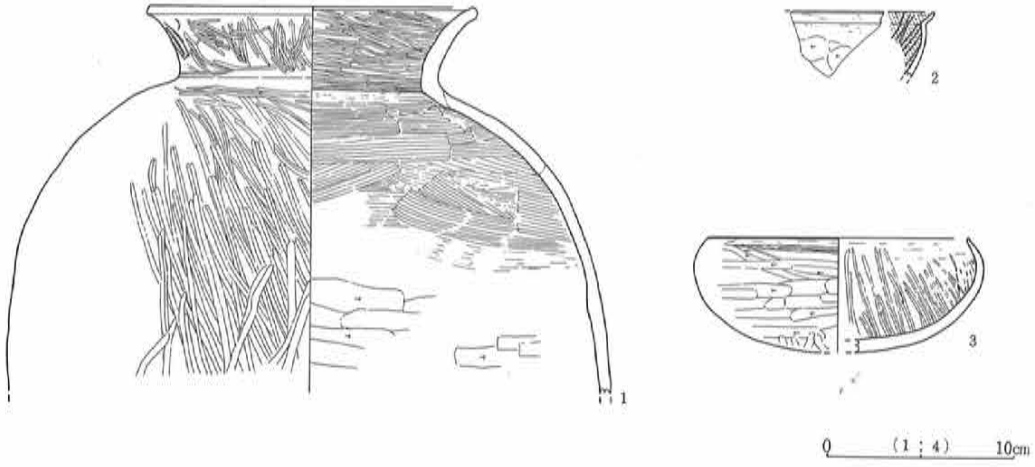
覆土はロームブロック・炭化物を少量含む褐色土層1層のみである。

カマドは北側が調査区域外であるため検出されなかった。

遺物の出土状況は、北側が未調査であるため明確ではないが、南壁中央付近に集中する傾向が看取される。499図1はP_3の付近床面直上より出土し、499図3は南壁東側直下より出土した。



第498図　Ｈ８号住居址炭化材分布図



第499図　Ｈ８号住居址出土遺物実測図

第378表　Ｈ８号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
499—１	甕	口径　17.6 現高　20.4	球胴から「く」の字に折れ、強く外反する口縁部に至る。	口縁部外面主として縦位の篦ミガキ 口縁部内面横位の篦ミガキ 胴部上半縦位の篦ミガキ 胴部上半横位の刷毛目 胴部中央横位の篦削り	回転実測

挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
499－2	坏	口径　(14.2) 現高　3.5	内彎する体部を経て、やや内彎気味に外反する口縁部に至る。	口辺部内外面ヨコナデ 体部外面左→右への篦削り 体部内面放射状暗文風篦ミガキ	回転実測
499－3	坏	口径　(13.8) 現高　6.1	内彎する体部を経て、やや内彎する口辺部に至る。	口辺部外面ヨコナデの後、横位の篦ミガキ 体部外面横位の篦削り 底部外面篦削り 口辺部内面ヨコナデ 体部内面暗文風篦ミガキ	回転実測

10　H９号住居址

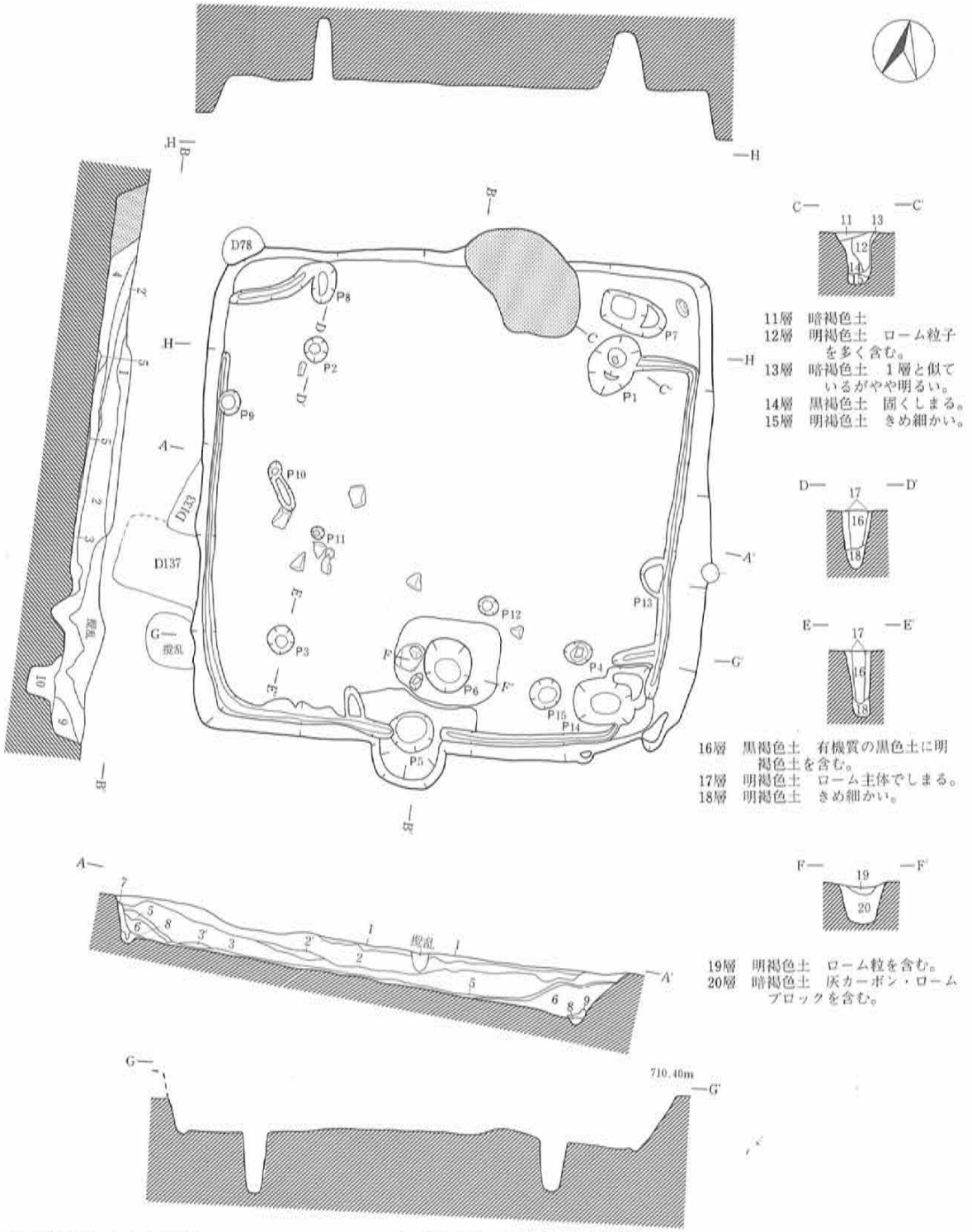
本住居址は、調査区北端う・え－7・8グリッド内に位置し、全体層序第Ⅱ層黄褐色土層上面において検出された。D22・D78・D133・D137・D244・D252・D253・D257号土坑と重複関係にあり、覆土上面、西壁の一部上面を破壊される。

平面形態及び規模は、東壁610cm、西壁610cm、南壁575cm、北壁596cmで、東西655cm、南北630cmを測り、東西にわずかに長い方形を呈する。床面積は35.5m²を測り、主軸方位はN－9°－Wを示す。

覆土は11層に分割され、堆積状態から自然堆積と考える。１層はパミスを含む黒褐色土、２・２′層は暗褐色土層で、パミス・砂粒を多量に含み、２′層は２層に比べ砂粒を多量に含む。３・３′層はパミス・砂粒を少量含む暗褐色土層で、３′層はローム粒子を含む。４層はパミスを含む暗褐色土で、５層は炭化粒子を主体とする黒色土層である。６・７・８層は暗褐色土層で、６層は粒子細かく、７・８層はローム粒子を含む。９層は黒色土層で、有機質を含む。確認面からの壁高は43～70cmで、床面から急傾斜で立ち上がるが、東壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。壁溝は北壁を除く三壁で検出され、西壁の壁溝は北西隅より約110cm位置で断絶し、東壁の壁溝は北東壁より約110cmの位置で直角に屈曲してP_1に至る。さらに北西隅床面より長さ約120cmの溝が検出された。溝幅は10～26cmを測り、2.5～12cmの深さを有する。床面は黄色ローム層を踏み固めてあり、平坦で堅固な状態である。ピット数は総数で12個検出された。P_1～P_4は主柱穴で、P_1は58×83cm楕円形で南側にテラスを有する。深さはテラス部で13cm、最深部で69cmを測る。覆土は５層に分割された。P_2～P_4は径30～40cmのほぼ円形を呈する。深さは各々76cm・83cm・68cmを測り、断面は「U」字形を呈する。P_5は南壁中央に位置する張り出しピットで、壁体を幅98cm、長さ50cmの半円状に掘り込み、さらにその中を53×60cmの円形に掘り込んで構築され、30cmの深さを有する。覆土は炭化粒子と灰を含む淡褐色土層１層である。P_6はP_5の北側に位置し134×110cmの円形で54cmの深さを有する。覆土は明褐色土層と暗褐色土層の２層からなる。また、周縁部は黄色ロームを利用して約５cmの盛土が行われている。P_5・P_6とも貯蔵穴と考えられる。P_7はカマドの右側、北東隅に位置する灰落しのピットと考えられ、48×47cmの楕円形を呈し、東側にテラスを有する。深さはテラス部で17cm、最深部で34cmを測る。覆土は灰を主体とする灰褐色土層１層のみである。P_8～P_{15}については性格等不明である。

カマドは北壁中央東寄りに位置し、煙道から焚口の長さ280cm、袖部の幅150cmを測る。煙道部は壁体を長さ100cm、幅75cmの半楕円状に掘り込んで構築する。火床部は地山を利用し、灰を敷きつめて構築されたと思われる。また、焼土が火床部から煙道まで約10cmの厚さで観察されたが、天井部の崩落によるものとも考えられる。袖部は火床部の両側に約10cmの深さで埋設された安山岩２個と甕の口縁部～胴部の破片を利用し、構築土には明茶褐色土（３層）と明褐色土（６層）を利用したと考えられる。支脚石は長さ17cm、幅７cmの安山岩が用いられ、さらに高坏が逆位に乗せられた状態で出土した。また煙道部の西約60cmの位置に幅95cm、長さ68cmの半円状の掘り込みが見られ、煙道部と思われることから、カマドのつくりなおしが想定される。

遺物の出土状況は、カマド内とP_5周辺に集中する傾向が認められる。502図１はカマド西側より床面から約30cm

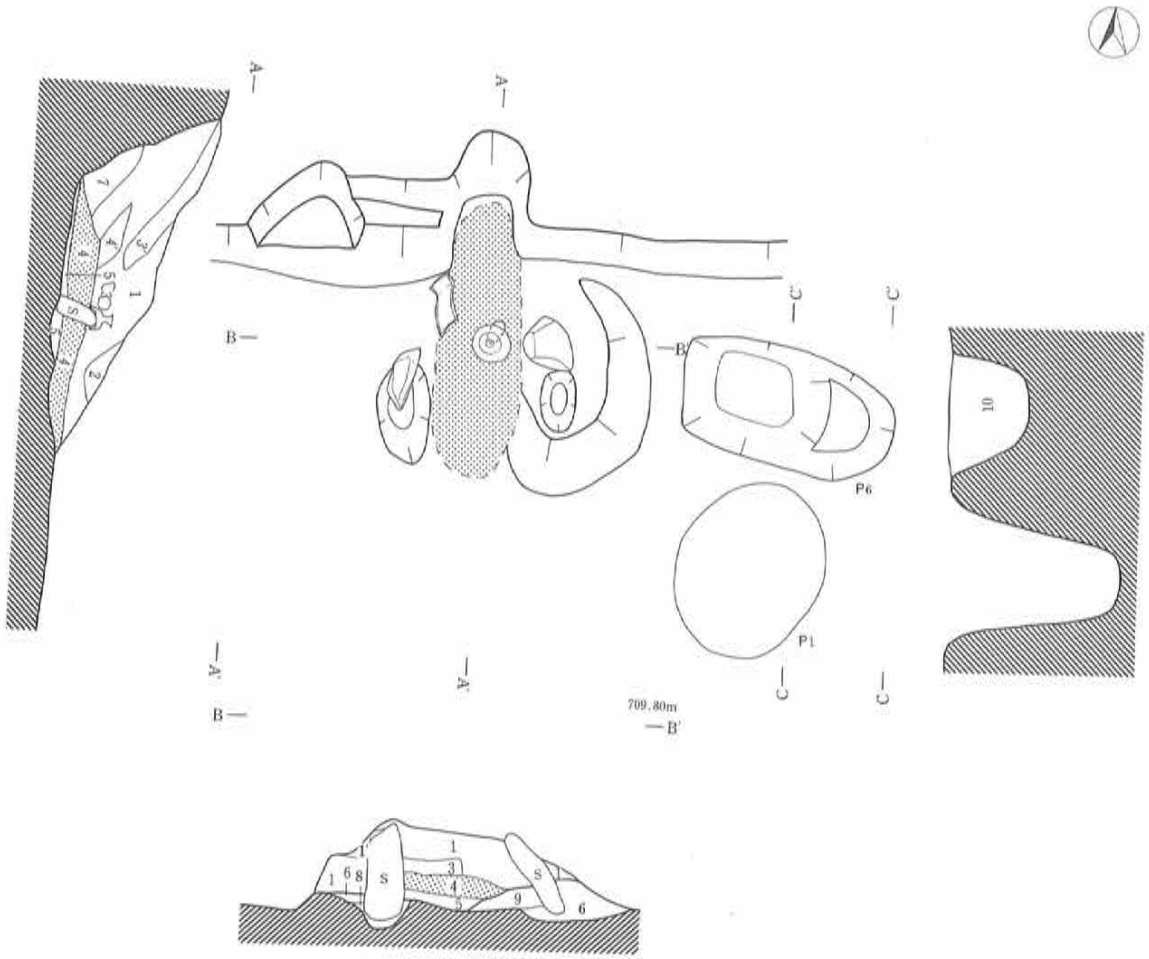


1層　黒褐色土　パミスを含む。
2層　暗褐色土　パミス・砂粒を多量に含む。
2′層　暗褐色土　2層より更に多量の砂粒を含む。
3層　暗褐色土　パミスと砂粒を少量含む。
3′層　暗褐色土　3層にローム粒を含む。
4層　暗褐色土　パミスを含む。
5層　黒色土　炭化粒子主体。
6層　暗褐色土　4層に比べきめ細かい。
7層　暗褐色土　6層にローム粒を含む。
8層　暗褐色土　7層より実に多量のローム粒を含む。
9層　黒色土　有機質。
10層　淡褐色土　炭化粒子と灰を含む。

0　（1：80）　2m

第500図　H9号住居址実測図

浮いた状態で出土し、502図２は西壁中央付近より約10cm浮いた状態で出土した。502図３・８はP_7より、502図4・５はP_5の東床面直上より出土し、502図７はP_{14}内より出土した。502図９は支脚石の上に逆位に乗せられた状態で出土した。



1層　暗褐色土　僅かに焼土を含む。
2層　暗褐色土　焼土含まず。
3層　明茶褐色土　焼土・ローム粒子を含み、しまりなし。(天井部か？)
3'層　明茶褐色土　ロームが３層より多い。
4層　赤褐色土　焼土層。(火床部)
4'層　赤褐色土　焼土層。
5層　暗灰褐色土　暗褐色土が主体。灰を少量含む。
6層　明褐色土　ローム粒を多量に含み、割合かたくしまる。
7層　黒灰色土　灰層。きめ細かい。
8層　淡橙褐色土　地山ロームに極めて近くしまる。
9層　明灰褐色土　柔かい。５層に近いが、色調が明るい。
10層　灰褐色土　灰主体。炭化粒子を多量に含む。固くしまる。

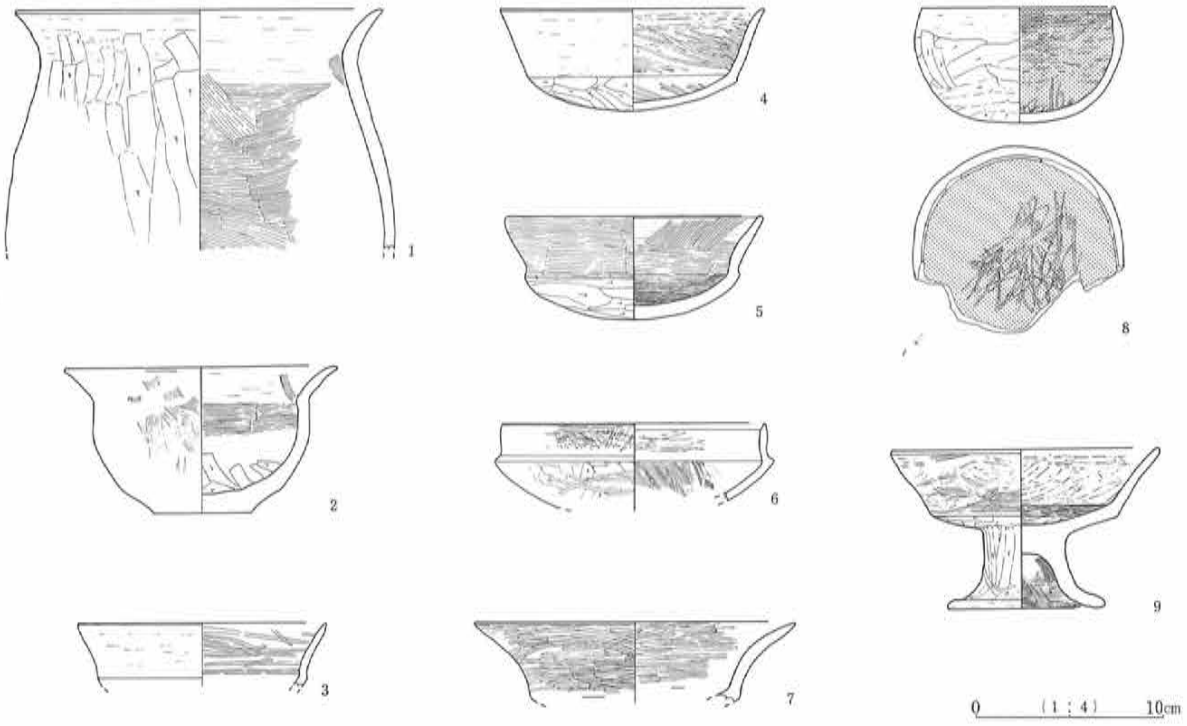
0　(1：30)　1m

第501図　Ｈ９号住居址カマド実測図

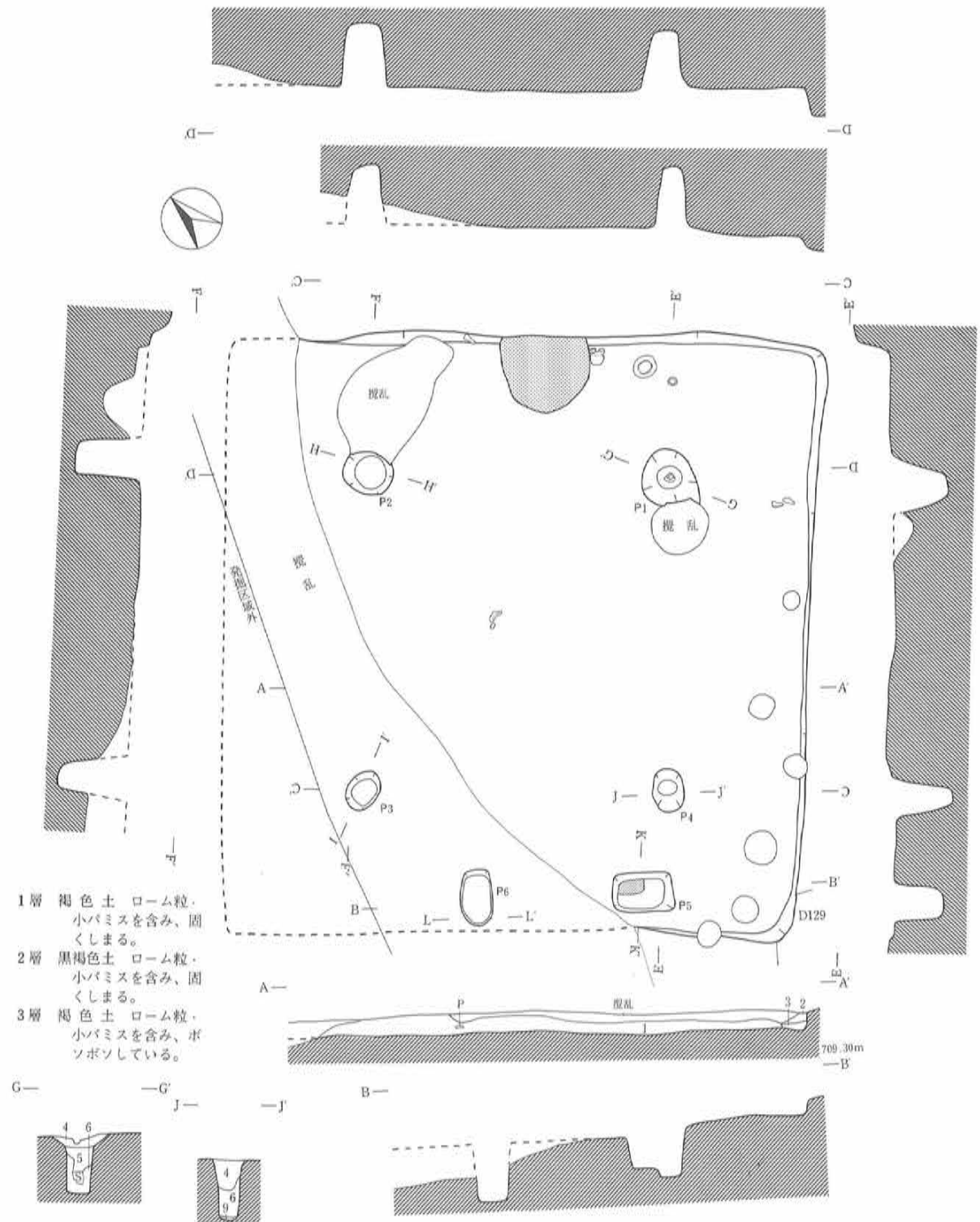
第379表　Ｈ９号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
502－１	甕	口径　19.4 現高　12.7	球胴からゆるやかに外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 頸部・胴上半下→上への篦削り 胴上半内面横位の刷毛目	回転実測

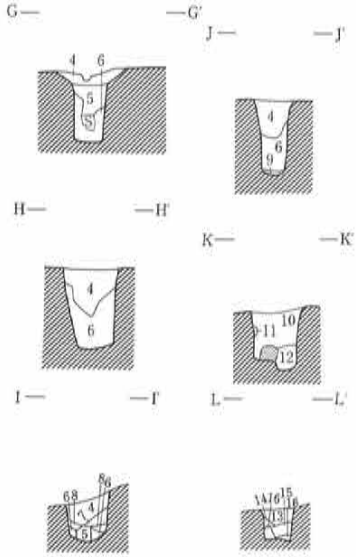
挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
502－2	小　形 甕	口径　14.4 胴径　11.5 器径　7.7	平底から内彎して立ち上がり、ゆるやかに外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面刷毛目 胴上半内面横位の刷毛目 胴下半・底部内面篦削り	回転実測
502－3	坏	口径　13.2 現高　3.4	口辺部はやや外反する。	口辺部外面ヨコナデ 口辺部内面横位の篦ミガキ	回転実測
502－4	坏	口径　14.0 器高　5.1	丸底から直線的に立ち上がり、口辺部はやや外反する。 外稜を持つ。	口辺部外面ヨコナデ 口辺部内面ヨコナデの後、篦ミガキ 底部外面篦削り	完全実測
502－5	坏	口径　13.5 器高　5.5	丸底から直線的に立ち上がり、口辺部は外反する。 体部中央に強い稜を持つ。	口辺部・体部上半横位の刷毛目 口辺部内面ヨコナデ 体部上半内面横位の刷毛目 体部下半・底部外面篦削り 体部下半・底部内面刷毛目	完全実測
502－6	坏	口径　14.0 現高　4.6	丸底からゆるやかに内彎し、口辺部で直立する。 体部上半に強い稜を持つ。	口辺部内外面篦ミガキ 体部外面篦削りの後、篦ミガキ 体部内面刷毛目	回転実測
502－7	坏	口径　17.0 現高　4.3	丸底から体部口辺部ともにゆるやかに外反する。	口辺部・体部内外面横位の篦ミガキ	回転実測
502－8	坏	口径　10.3 器高　6.1	丸底からゆるやかに内彎し、口辺部に至る。	口辺部外面ヨコナデ 体部・底部外面篦削り 体部内面横位の篦ミガキ 体部底部内面、暗文風篦ミガキ 内面黒色研磨	回転実測
502－9	高　坏	口径　14.3 脚径　4.2 裾径　8.4 器高　8.5	外反気味に開く裾部から直線的に立ち上がる脚部を経て、外稜を持ちやや外反する坏部に至る。	坏部外面篦ミガキ 坏部内面篦ミガキ 坏部外稜以下右→左への篦削り 脚部外面下→上への篦削り 脚部内面刷毛目	完全実測



第502図　H 9号住居址出土遺物実測図



1層　褐色土　ローム粒・小パミスを含み、固くしまる。
2層　黒褐色土　ローム粒・小パミスを含み、固くしまる。
3層　褐色土　ローム粒・小パミスを含み、ボソボソしている。



4層　褐色土　炭化粒子・パミスを含む。パサパサしている。
5層　褐色土　パミスを含み、パサパサしている。1層より色調暗い。
6層　褐色土　白色ロームを多量に含み、しまる。
7層　淡褐色土　白色・黄色ローム主体。
8層　褐色土　パミス含み、しまる。
9層　褐色土　一番固くしまる。
10層　褐色土　パミスを含み、ややしまる。
11層　褐色土　ロームを含む。
12層　褐色土　10層より色調がくすみ、しまる。
13層　褐色土　炭化粒子・パミスを含む。
14層　褐色土　13層にローム粒を少量含む。
15層　褐色土　色調暗く、パミスを含む。
16層　褐色土　白色ロームを多量に含む。

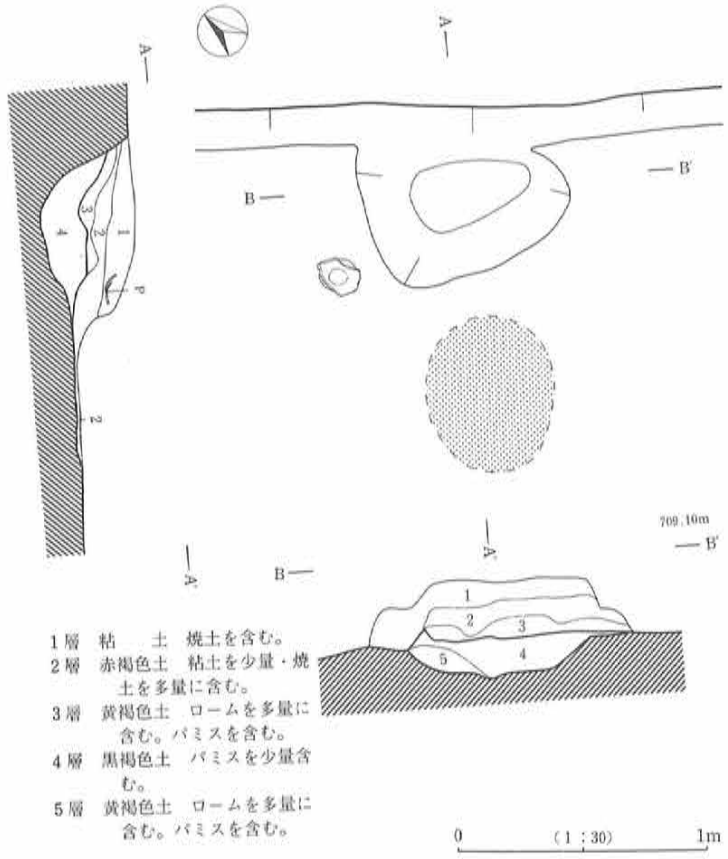
0　(1:80)　2m

第503図　H10号住居址実測図

11　H10号住居址

本住居址は、調査区西端い・う－11～13グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。D129号土坑と重複関係にあり、南東隅を破壊される。さらに南西部を撹乱によって破壊される。

平面形態及び規模は、東壁長768cm、南北長は推定で778cmを測るのみで、他は不明である。主軸方位はN－46°－Eを示す。

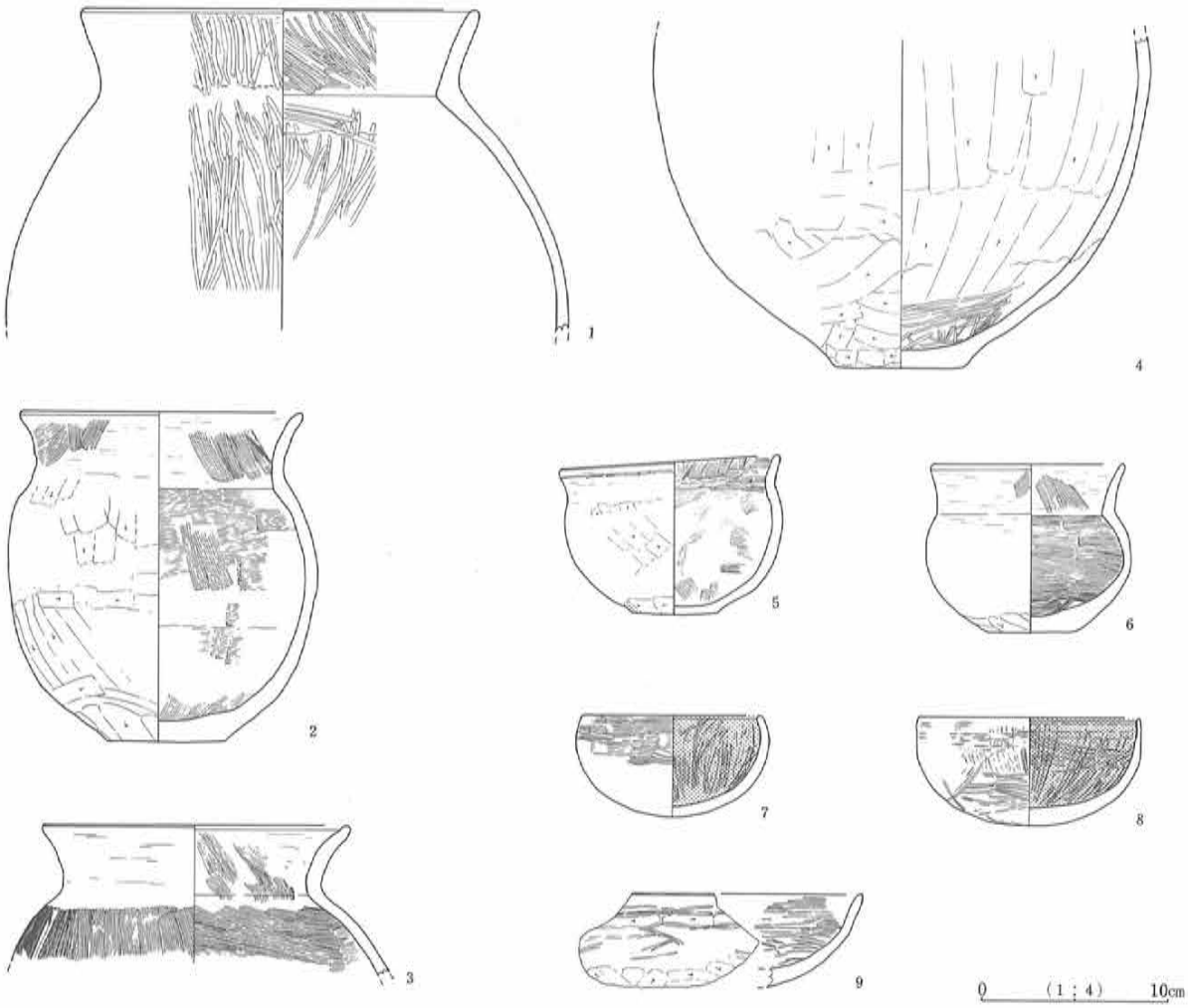


第504図　H10号住居址カマド実測図

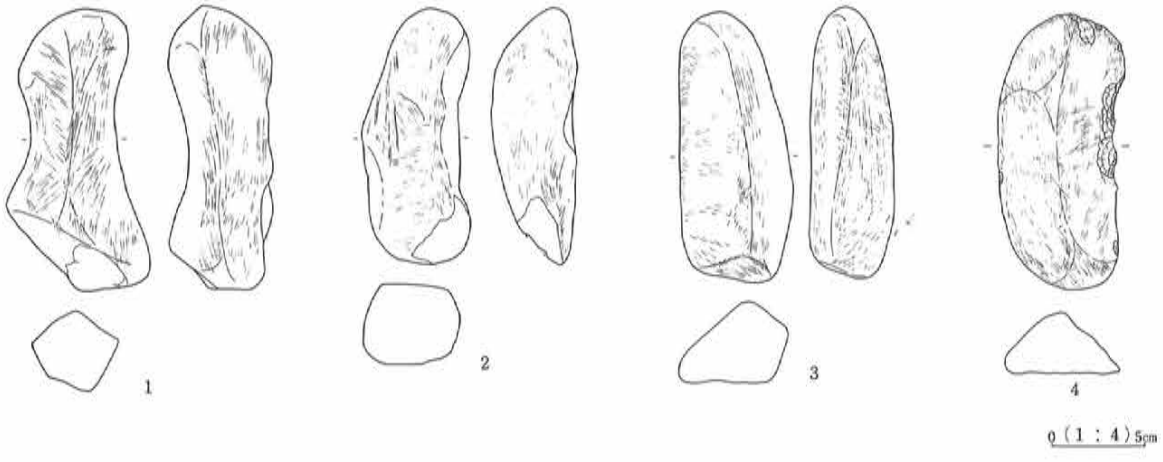
覆土は3層に分割された。1層は褐色土層、2層は黒褐色土層、3層は褐色土層でローム粒子とパミスを含む。確認面からの壁高は0～43cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかった。床面は黄色ローム層を踏み固めて堅固な状態であり、全体にほぼ平坦である。ピットは総数で6個検出された。P_1～P_4は主柱穴である。P_1・P_2は撹乱により一部上面を破壊されるが、径70cm・60cmのほぼ円形を呈し、75.5cm・82.5cmの深さを有する。P_3は上面を撹乱により破壊されており、残存部で40×54cmの楕円形を呈し、深さは55cmを測る。P_4は42×58cmの楕円形で78.5cmの深さを有する。覆土はいずれも褐色土を基調とする。P_5は貯蔵穴と考えられ、南壁東側直下に位置する。東西80cm、南北52cmの長方形で北西側にテラスを有する。深さはテラス部で52cm、最深部で66.5cmを測る。覆土は3層に分割され、テラス上より約18cmの粘土塊が検出された。P_6は南壁中央直下に位置し、上面は撹乱によって破壊されており、残存部で42×74cmの楕円形を呈し、55cmの深さを有する。なお、このP_6は入口部施設とも考えられる。

カマドは北壁中央に位置する。壁体の掘り込みは見られず、壁直下の床面を50×80cmの楕円状に掘り込み、黒褐色土（4層）、黄褐色土（5層）を埋め戻して構築される。天井部・袖部は既に崩落しているため旧状はつかめないが、焼土を含む粘土（1層）を構材として設けられたと考えられる。火床部は地山を利用しており、焼土が薄く観察された。

遺物の出土状況は、北半部、特にカマド周辺に集中する傾向が認められる。505図1・2・6はカマド東側の床面直上より、505図3・4・8はカマド内より出土した。505図5はP_1内より、505図7はP_1の西側約80cmの床面より、505図9は中央付近より床面からやや浮いた状態で出土した。この他、編物石が4点出土し、506図1は中央付近床面より、506図2はカマド西側より、506図3・4は東壁北側直下より出土した。またP_1－P_2間ややP_2寄りの床面より約10cm浮いた状態で銅銭（463図163）が出土した。



第505図　H10号住居址出土遺物実測図



第506図　H10号住居址出土石器実測図

第380表　H10号住居址出土遺物一覧表

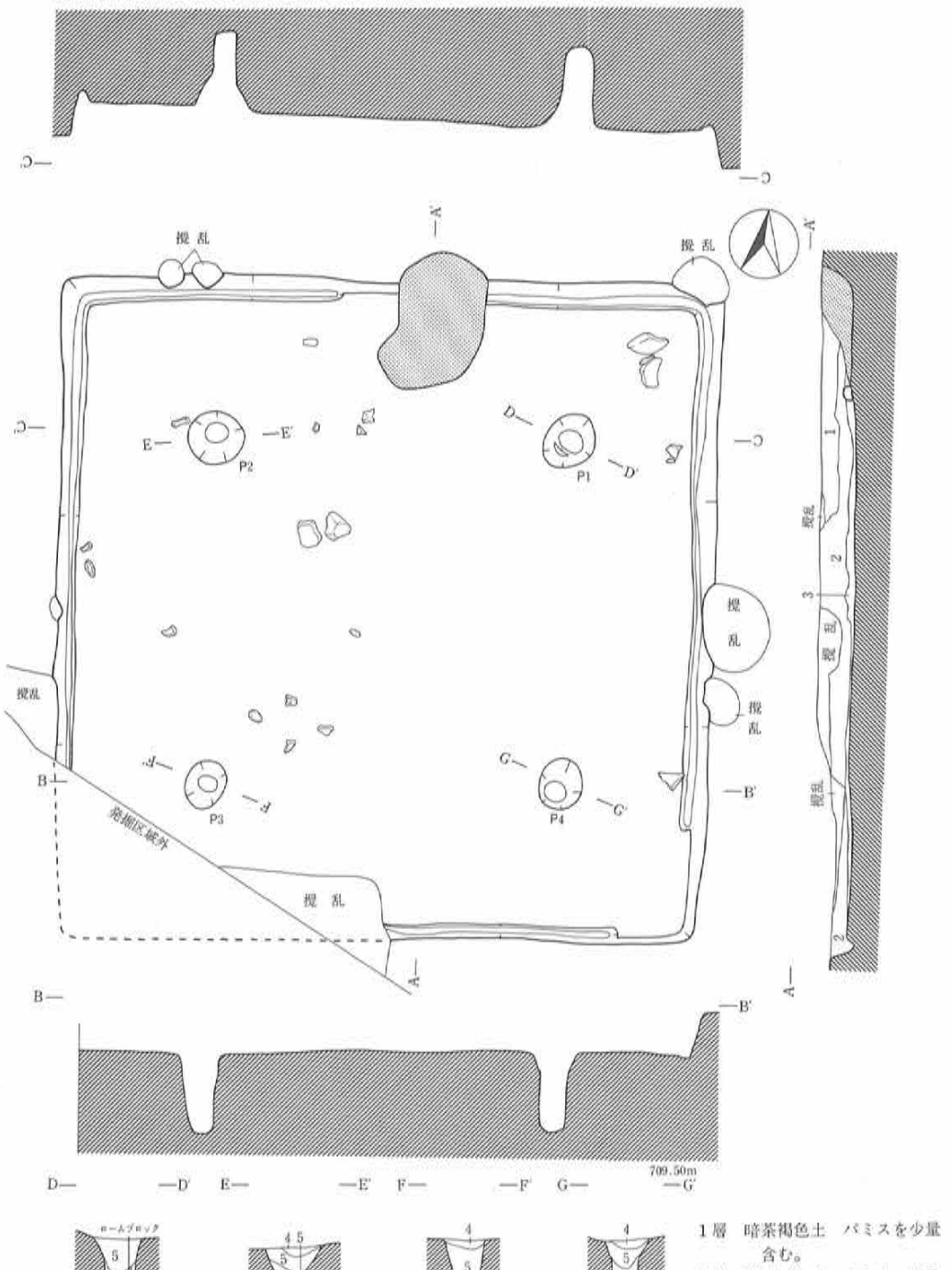
挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
505—1	甕	口径　20.9 胴径　30.0 現高　17.2	球胴から頸部で窄まり、直線的に外反する口縁に至る。	口縁部内外面篦ミガキ 胴部内外面篦ミガキ	完全実測 胴下半以下欠
505—2	小　形 甕	口径　15.0 胴径　16.5 器高　17.6	平底からやや球胴化する胴部を経て頸部で窄まり、口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部内外面ヨコナデ及び刷毛目 胴部外面篦削り 胴部内面主として横位の刷毛目	完全実測
505—3	甕	口径　16.4 現高　8.0	球胴から頸部で窄まり、ゆるやかに外反する。	口縁部外面ヨコナデ 胴部上半外面上→下への刷毛目 口縁部内面ヨコナデ及び刷毛目 胴部上半内面横位の刷毛目	回転実測 胴中央以下欠
505—4	甕	底径　7.0 現高　17.7	平底から球胴に至る。	胴下半外面篦削り 胴下半内面下→上への篦削り 底部内面不規則な篦ミガキ	回転実測 胴上半以上欠
505—5	小　形 甕	口径　11.7 胴径　11.6 底径　4.6 器高　8.1	平底から内彎して立ち上がり、直線的に外反する口縁部に至る。	口縁部外面ヨコナデ、一部に横位の篦ミガキ 口縁部内面ヨコナデ及び篦ナデ 胴部外面上→下への篦削り 底部周辺外面横位の篦削り 胴部内面不規則な刷毛目	回転実測
505—6	小　形 甕	口径　10.1 胴径　10.9 底径　4.5 器高　9.0	平底から内彎して立ち上がり、ゆるやかに外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ及び刷毛目 底部周辺外面篦削り 胴部外面調整不明 胴部内面横位の刷毛目	完全実測
505—7	坏	口径　9.5 器高　5.4	丸底から内彎して口辺部に至る。	口辺部横位の篦ミガキ 体部外面不規則な篦ミガキ 体部内面暗文風篦ミガキ 内面黒色研磨	回転実測
505—8	坏	口径　11.8 器高　5.8	丸底から内彎して口辺部に至る。	口辺部・体部上半外面横位の篦ミガキ 内面暗文風篦ミガキ 内面黒色研磨	回転実測
505—9	坏	現高　5.0	体部内彎気味に立ち上がり、やや外反する口辺部に至る。	口辺部・体部上半外面横位の篦ミガキ 口辺部外面左→右への篦削り 底部外面篦削り 内面横位の篦ミガキ	破片実測

第381表　H10号住居址出土石器一覧表

挿図番号	器　種	石　質	法　量　(cm, g)				備　考
			長さ	幅	外周	重量	
506—1	編物石	安山岩	14.8	6.5	14.3	690.4	表面に使用擦過痕
506—2	編物石	安山岩	13.5	5.3	14.9	415.7	表面に使用擦過痕
506—3	編物石	安山岩	14.4	6.0	16.1	553.5	表面に使用擦過痕、表面磨耗
506—4	編物石	細粒 安山岩	14.6	6.3	14.7	324.5	加工痕有り。表面に使用擦過痕

12　H11号住居址

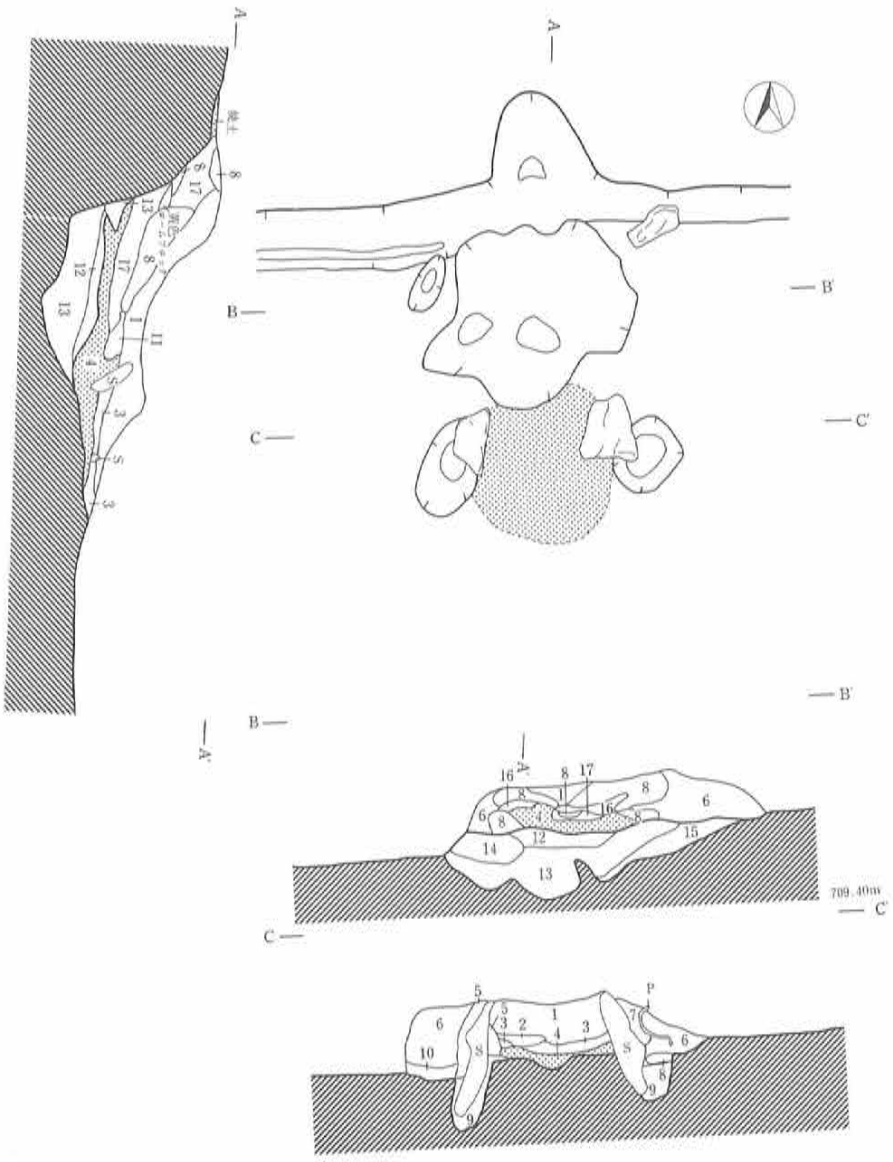
本住居址は、調査区西側お・か・き—10・11グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。D203号土坑と重複関係にあり、上部を破壊して構築される。また南壁西側、東壁の一部上面を撹乱によって破壊され、南西隅は調査区域外である。



第507図　H11号　住居址実測図

平面形態及び規模は、東壁長755cm、北壁長753cm、西壁長・南壁長は推定で755cm・718cmで、東西762cm、南北760cmを測る方形を呈する。主軸方位はN－7°－Wを示す。

覆土は3層に分割された。1層はパミスを少量含む暗茶褐色土層、2層はパミス・炭化物を含む茶褐色土層、3層はパミスを少量含む明茶褐色土である。確認面からの壁高は35～51cmと深い。壁体は床面から急傾斜で立ち上がり、黄色ローム層を利用して構築され、堅固な状態である。壁溝は南東隅で断絶するが、ほぼ全周する。溝



1層　茶褐色土　焼土粒を含む。
2層　茶褐色土　焼土ブロック(天井の崩落か？)
3層　黒褐色土　炭化粒を主体とする。焼土を少量含む。
4層　赤黄褐色土　灰を主体とする。焼土を多量に含む。
5層　茶褐色土　焼土粒および粘土を若干含む。
6層　暗茶褐色土　灰・粘土を含む。
7層　茶褐色土　焼土粒を少量含む。
8層　暗茶褐色土　灰・焼土を含む。
9層　明茶褐色土
10層　茶褐色土　白色ローム粒子を含む。
11層　明茶褐色土　焼土を多量に含む。炭化粒子を少量含む。
12層　明茶褐色土　焼土ブロック・黄色ロームブロックを含む。
13層　黒褐色土　炭を多量に含む。
14層　黄褐色土　黄色ロームを主体とする。
15層　暗茶褐色土　黄色ローム粒子・炭化粒子を含む。
16層　明茶褐色土　灰・焼土を含む。(天井の崩落か？)
17層　暗茶褐色土　炭化物・焼土を少量含む。

0　(1：30)　1m

第508図　H11号住居址カマド実測図

幅は6～18cmで、深さは3.5～10.5cmを測る。床面は黄色ローム層を踏み固めて堅緻な状態であり、ほぼ平坦である。

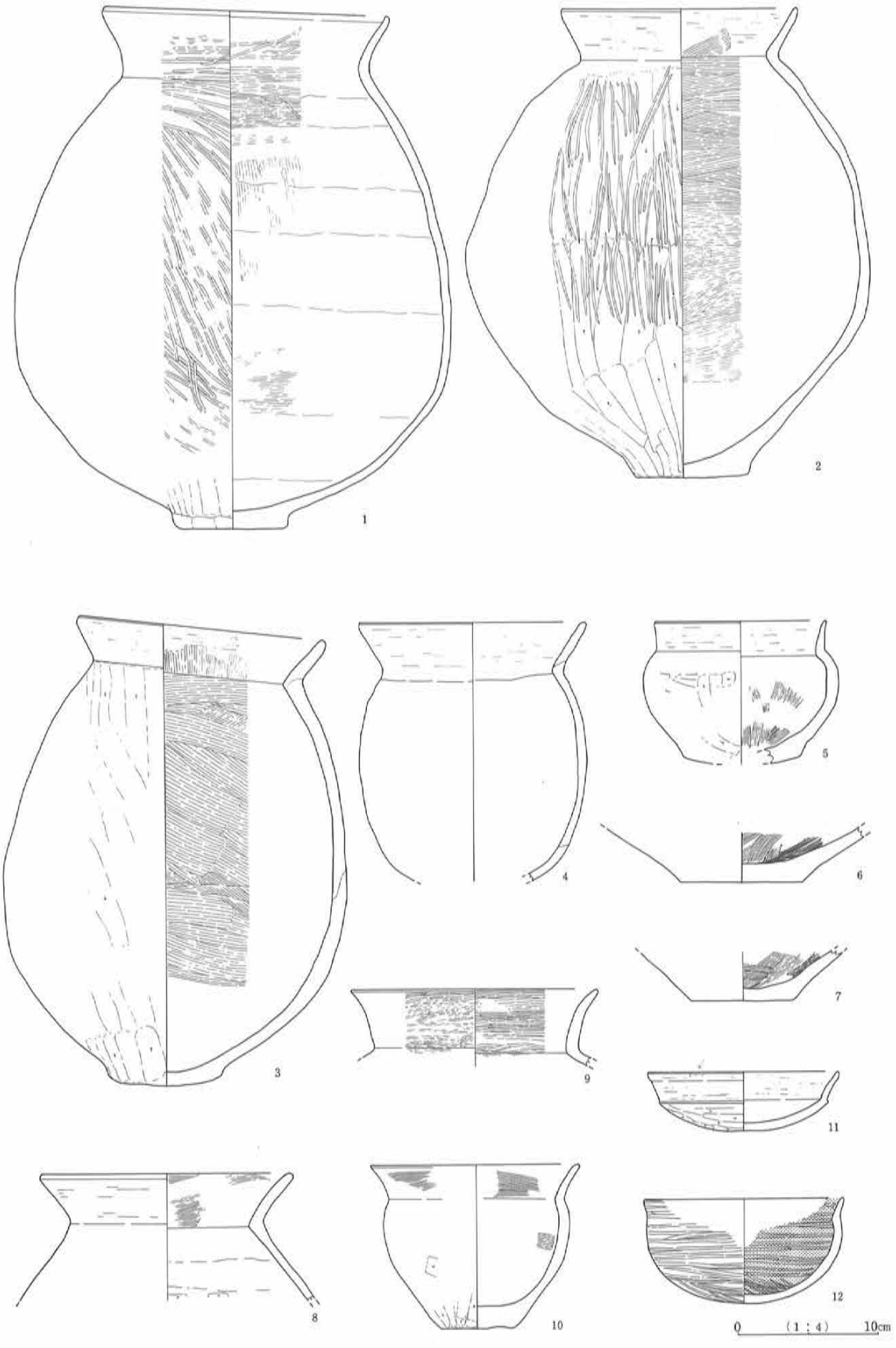
ピットは主柱穴が4個検出された。P_1は57×69cmの楕円形で南西側にテラスを有する。深さはテラス部で27cm最深部で91cmを測り、断面形は有段の「U」字状を呈する。P_2は径64cmの円形で95cmの深さを有する。P_3・P_4は45×58cm・50×60cmの楕円形で深さは各々95cm・96cmを測る。覆土はP_2・P_3・P_4は1層黒褐色土層、2層褐色土層、3層黒褐色土層の3層に分割され、P_1では1層は観察されなかった。

カマドは北壁中央に位置する。煙道から焚口の長さは180cm、袖部の幅110cmの規模を有する。天井部・袖部は既に崩落しているため、旧状はつかめない。煙道部は壁体を長さ60cm、幅40cmの楕円状に掘り込み、壁直下の床面を75×83cmの不整形に掘り込んだ後、明茶褐色土（12層）・黒褐色土（13層）・黄褐色土（14層）・暗茶褐色土（15層）を埋め戻して構築される。火床部は地山を利用し、焼土が約８cmの厚さで観察された。袖部は、火床部の両側に安山岩が袖石として配置されていた。黄色ローム層を20cm・25cmの深さに、やや「ハ」の字状に埋められ、火床より約25cm露出している状態で、これに粘土を含む茶褐色土（５層）を補強材として構築されている。

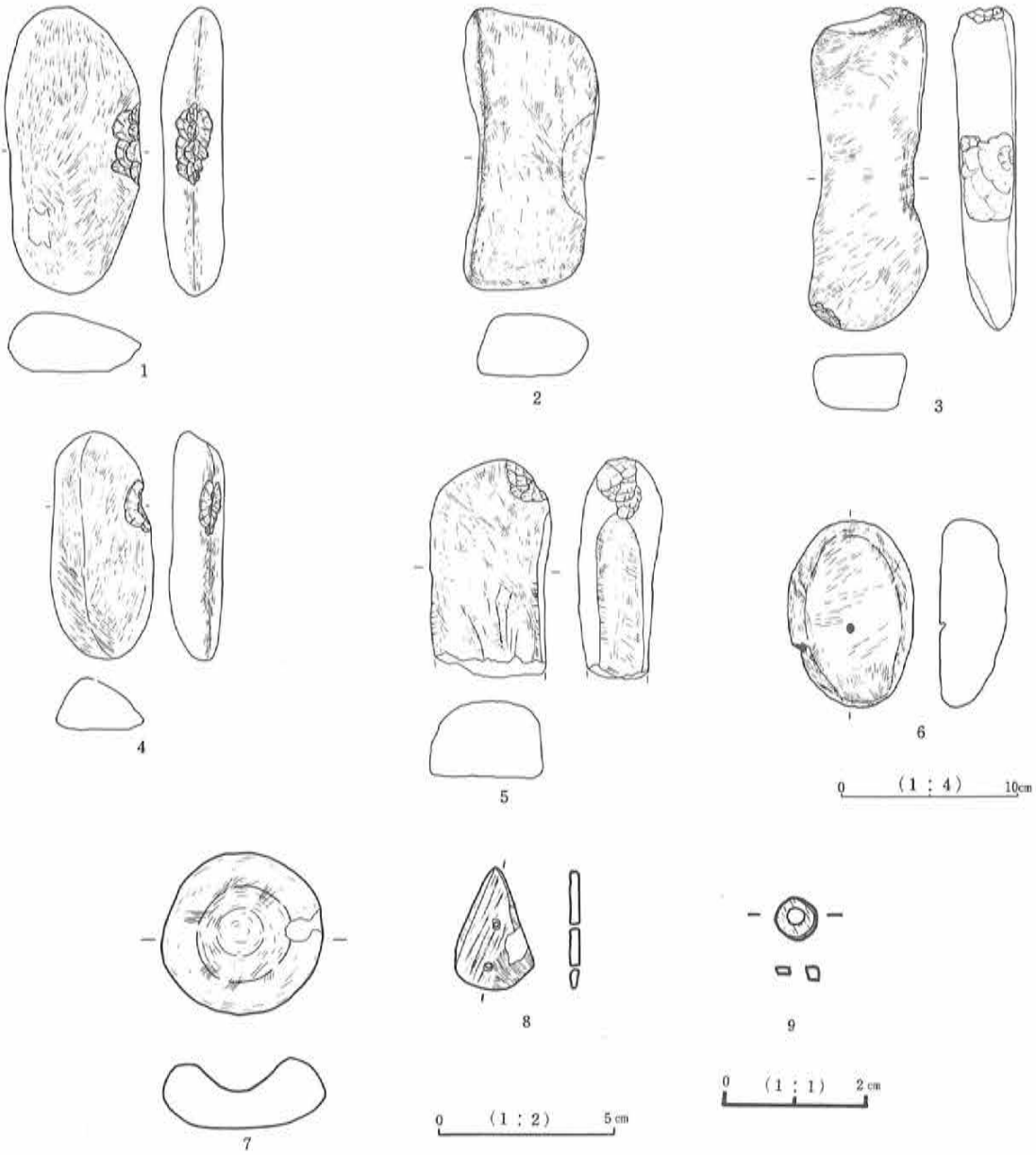
遺物の出土状況は、住居址内に散乱し、床面直上または床面からやや浮いた状態で出土した。509図１・11はP_4付近、509図３はP_1付近に散乱した状態で出土し、509図２はカマドの西60cmの床面上に横転した状態で出土した。509図４・12はカマド内より出土し、509図５はカマドの東約110cmの床面より出土した。503図７は中央付近床面直上より、509図８はカマドの西側及びカマド内より出土した。この他、編物石（510図１・２・３・４・５・６）が西壁中央付近及びP_1—P_4間より出土している。

第382表　H11号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
509—１	甕	口径　20.0 胴径　30.9 底径　8.2 器高　36.8	平底から内彎して立ち上がり、頸部で窄まる。口縁部は直線的に外反し端部でやや内彎する。 最大径を胴下半部に持つ。	外面底部周辺以外は篦ミガキ 底部周辺外面篦削り 口縁部・頸部内面篦ミガキ 胴部内面刷毛目	完全実測
509—２	甕	口径　16.6 胴径　28.7 底径　8.2 器高　33.1	平底から内彎して立ち上がり、頸部で窄まる。口縁部は内彎気味に外反する。最大径を胴部中央やや下方に持つ。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面篦削りの後、篦ミガキ 胴部内面横位の刷毛目	完全実測
509—３	甕	口径　17.5 胴径　24.4 底径　8.1 器高　32.7	丸味を帯びた平底から、やや内彎気味に長胴化する胴部を経て頸部で窄まる。口縁部「く」の字に折れ、直線的に外反する。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面上→下への篦削り 底部周辺外面下→上への篦削り 胴部内面横位の刷毛目	回転実測
509—４	小　形 甕	口径　16.0 胴径　16.2 現高　18.3	やや長胴化する胴部を経て頸部で窄まる。口縁部は直線的に外反する。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内外面調整不明 （単位不明の刷毛状工具によるナデ）	回転実測
509—５	小　形 甕	口径　12.1 胴径　13.9 底径　8.2 現高　10.1	丸味を帯びた平底から、内彎する胴部を経て頸部で窄まる。口縁部は直線的に立ち上がる。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面篦削り 胴部内面縦位の刷毛目	回転実測
509—６	甕	底径　8.7 現高　3.7	底部平底	外面単位不明の刷毛状工具によるナデ 内面刷毛目	回転実測 底部のみ残存
509—７	甕	底径　7.3 現高　3.5	底部平底	外面単位不明の刷毛状工具によるナデ 内面刷毛目	回転実測 底部のみ残存
509—８	甕	口径　17.7 現高　9.0	胴部上半内傾して立ち上がり、頸部で窄まる。口縁部「く」の字に折れ外反する。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面単位不明の刷毛状工具によるナデ 胴部内面単位不明の刷毛状工具によるナデ及び篦削り	回転実測 胴中央以下欠
509—９	甕	口径　17.3 現高　5.5	口縁ゆるやかに外反する。	口縁部内外面篦ミガキ	回転実測 口縁のみ残存
509—10	小　形 甕	口径　14.9 胴径　13.3 底径　5.2 器高　11.6	平底から内彎気味に立ち上がり、ゆるやかに外反する口縁部に至る。	口縁部内外面刷毛目 胴部外面篦削り 胴部内面刷毛目	回転実測
509—11	坏	口径　13.4 器高　4.2	丸底からゆるやかに内彎し、やや外反する口辺部に至る。	口辺部内外面ヨコナデ 体部・底部外面篦削り	回転実測
509—12	坏	口径　14.1 器高　7.4	丸底からゆるやかに内彎し、弱い稜を持ち外反する口縁に至る。	口辺部内外面横位の篦ミガキ 底部内面暗文風篦ミガキ 内面黒色研磨	回転実測



第509図　H11号住居址出土遺物実測図



第510図　第11号住居址出土石器実測図

第383表　H11号住居址出土石器一覧表

挿図番号	器　種	石　質	法　量　(cm, g)				備　考
			長さ	幅	外周	重量	
510－1	編物石	安山岩	16.1	7.6	18.1	612	加工痕有り、表面に使用擦過痕
510－2	編物石	安山岩	15.8	7.1	17.1	795.9	表面に使用擦過痕及び敲打痕
510－3	編物石	安山岩	17.8	6.4	15.2	739.5	表面に使用擦過痕
510－4	編物石	安山岩	12.7	5.7	—	273	加工痕有り、表面に使用擦過痕
510－5	敲　石	安山岩	現長 12.5	6.3	—	608	表面に使用擦過痕及び敲打痕 表面磨耗し鈍い光沢
510－6	紡錘車	軽　石	10.4	7.1	厚さ 4.7	176.1	表面に研磨痕、未成品
510－7	凹　石	軽　石	4.5	—	凹径 2.7	21	表面に研磨痕、凹部に使用擦過痕

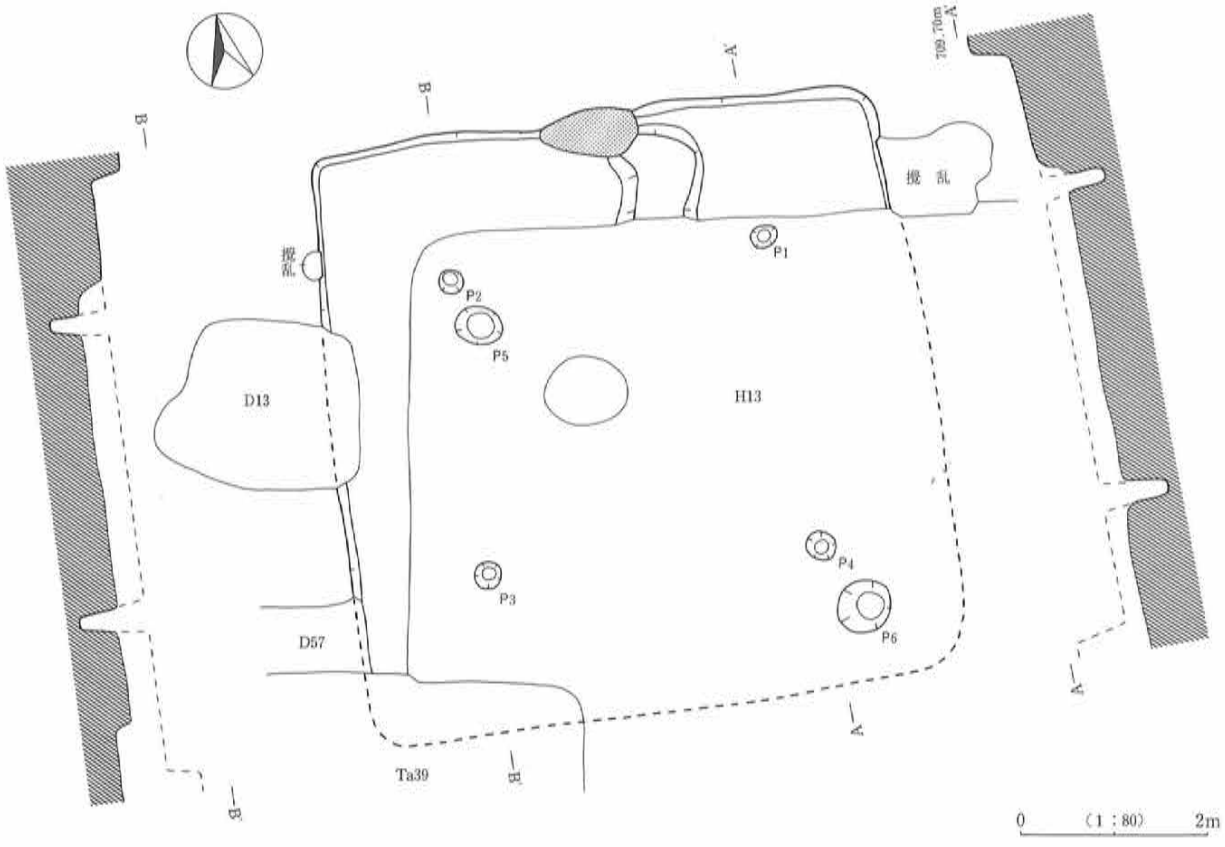
挿図番号	器　種	石　質	法　量　（cm, g）				備　　考
			長さ	幅	厚さ	重量	
510－8	石　製 模造品	滑　石	3.5	2.2	0.28	5.1	表面に研磨痕
510－9	臼　玉	滑　石	0.6	－	0.19	0.13	孔径0.18cm

13　H12号住居址

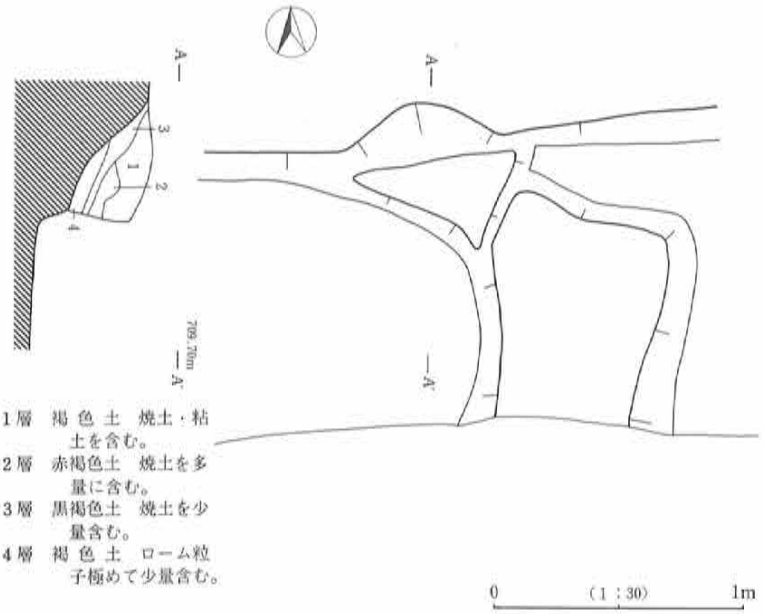
本住居址は調査区北端う・え－10・11グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。H13号住居址、Ta39号竪穴遺構、D13・57号土坑と重複関係にあり、H13号住居址に北壁、西壁付近を残して大部分を、Ta39号竪穴遺構、D13・57号土坑に西壁一部を破壊される。

平面形態及び規模は、北壁、西壁付近が残存しているのみであるため北壁594cm、西壁は推定で612cmを測るのみで他は不明であるが、方形を呈すると推定される。主軸方位はN－4°－Eを示す。確認面からの壁高は19.5～43cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかった。床面はわずかに残存しているのみであるため明確ではないが、堅固で平坦な状態である。

ピットは総数で6個検出された。そのうちP_1～P_4は主柱穴である。ピットはいずれもH13号住居址により上面を破壊されており、計測値は全て残存部についてのものである。平面形態は径30cm前後の円形を呈し、深さは各々48cm・49cm・44.5cm・44cmを測る。各ピット間の距離は、P_1－P_2間310cm、P_2－P_3間288cm、P_3－P_4間325cm、P_4－P_1間308cmで東西にやや長い方形に配されている。



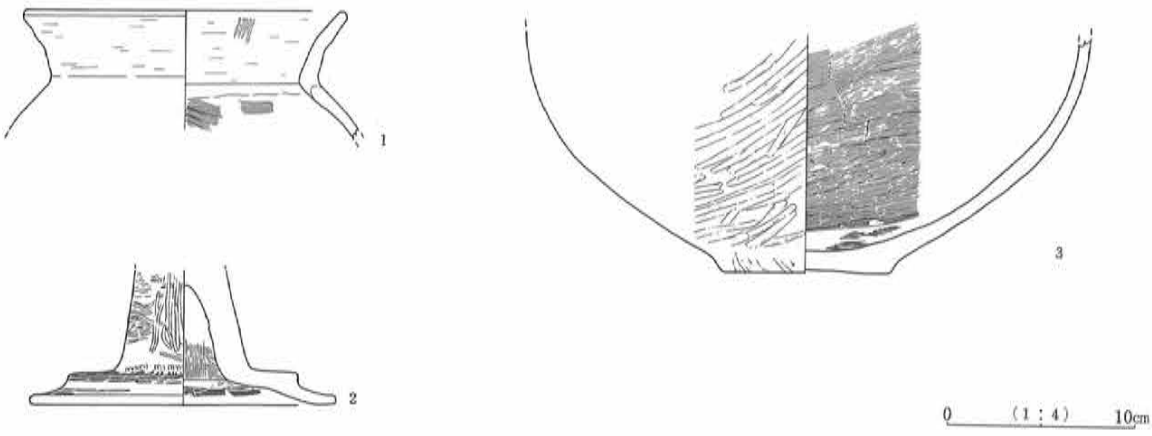
第511図　H12号住居址実測図



第512図　H 2号住居址カマド実測図

カマドは北壁中央に位置するが、天井部・袖部・火床部は既に破壊されており、煙道部がわずかに残存するのみで、残存状態は極めて悪い。煙道部は壁体を幅60cmの舟先状に掘り込み、壁直下に床面より約13～18cm高い三角状のテラスを有する。

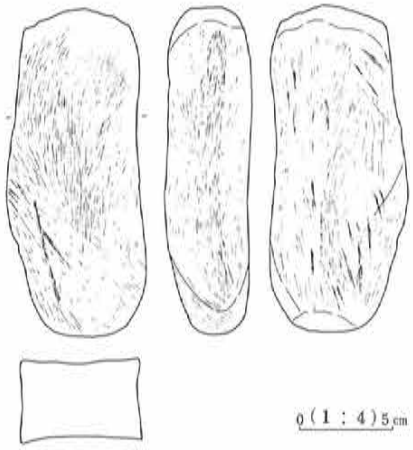
遺物の出土状況は、本住居址の大半が破壊を受けているため、遺物の出土量は少なく、513図1・3がカマド内より、513図2が北東隅より床面から約7cm浮いた状態で出土した。



第513図　H12号住居址出土遺物実測図

第384表　H12号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
513－1	甕	口径　17.2 現高　6.3	球胴からゆるやかに外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴上半外面刷毛状工具によるナデ 胴上半内面刷毛目	回転実測
513－2	高坏	脚径　6.4 ～4.9 裾径　16.3 現高　7.2	裾部階段状を呈し、直線的に立ち上がる脚部に至る。	脚部外面篦ミガキ 脚部内面単位不明の篦削り及び刷毛目 裾部外面放射状篦ミガキ 裾部外面段以下横位の篦ミガキ 裾部内面ヨコナデ及び刷毛目	完全実測 坏部欠損
513－3	甕	底径　9.0 現高　12.9	上底から球胴化した胴部に至る。	胴下半外面右上→左下への篦ミガキ 胴下半内面横位の刷毛目	回転実測 胴上半以上欠



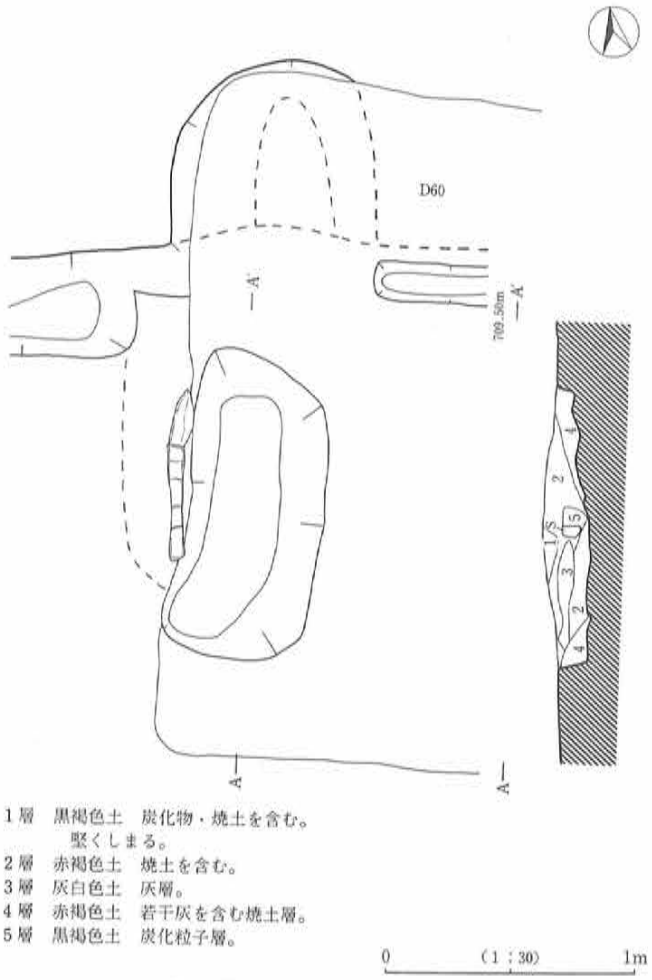
第514図　H12号住居址出土石器実測図

第385表　H12号住居址出土石器一覧表

挿図番号	器種	石質	法量（cm, g）			
			長さ	幅	厚さ	重量
514	砥石	砂岩	17.4	7.2	4.4	949.2
備考	大形四面砥石、四面に使用痕残る。 荒砥と考えられる。 使用頻度は低いが、四面とも使用による凹みが認められる。					

14　H13号住居址

本住居址は、調査区北端う・え・お－9・10・11グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。Ta38・39・41号竪穴遺構、D58・60・130・233・234号土坑と重複関係にあり、北壁、南西部を破壊される。さらに攪乱によって北壁中央を破壊される。

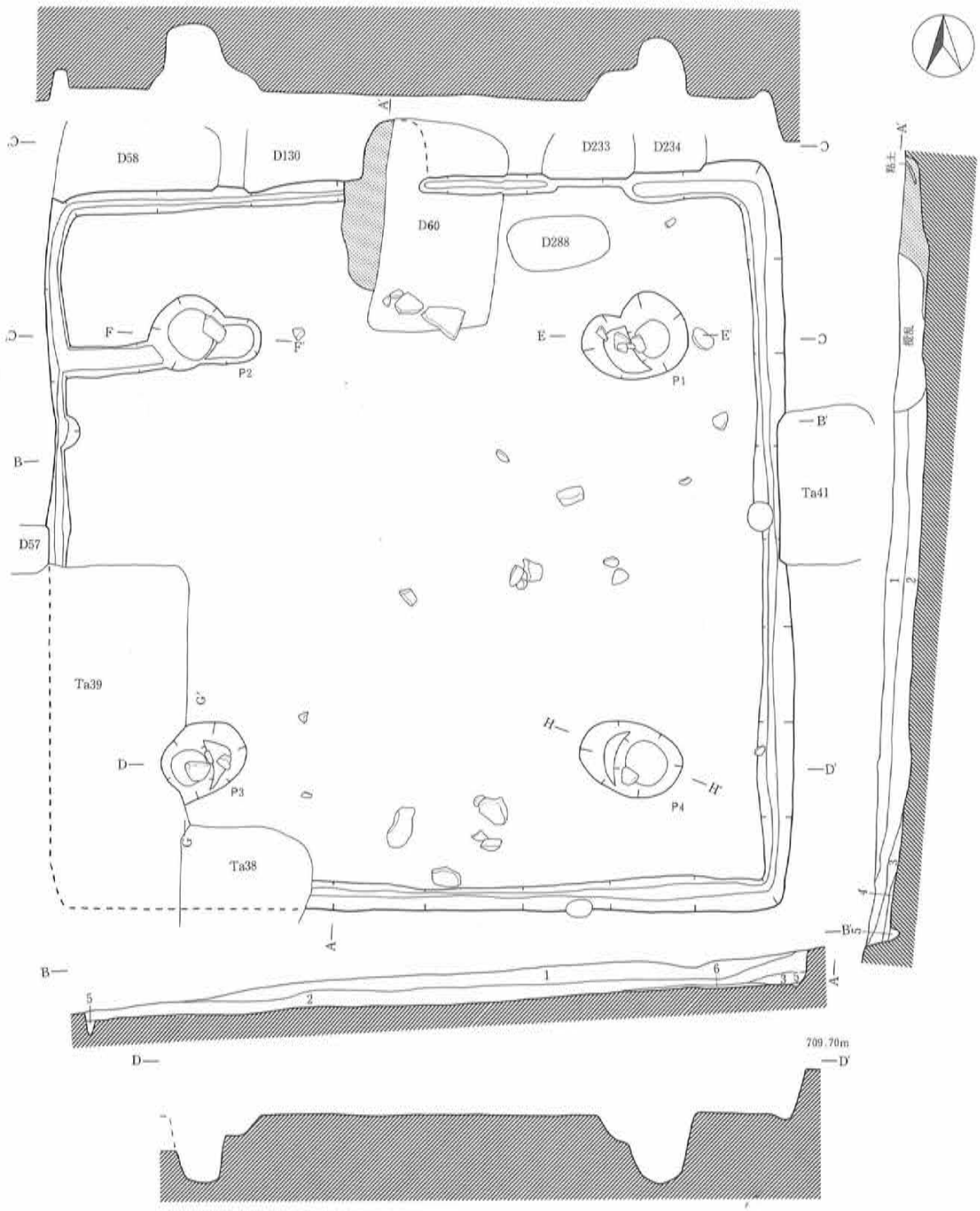


1層　黒褐色土　炭化物・焼土を含む。
　　堅くしまる。
2層　赤褐色土　焼土を含む。
3層　灰白色土　灰層。
4層　赤褐色土　若干灰を含む焼土層。
5層　黒褐色土　炭化粒子層。

第516図　H13号住居址カマド実測図

平面形態及び規模は、北壁長920cm、東壁長954cm、西壁・南壁は推定で910cm・936cmで、東西944cm、南北950cmと大型で方形を呈する。主軸方位はN－2°—Wでほぼ北を示す。

覆土は5層に分割された。1層・2層はパミスを含む褐色土層、3層は黒色土層で、粒子細かく、しまりを有する。4層は褐色土層でパミスを微量含む。5層はローム粒子とパミスを含む明褐色土層で、壁溝を充填している。確認面からの壁高は、13～59cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がる。壁体は黄色ローム層を利用して構築され堅固な状態である。壁溝は北壁東側で一部断絶するがほぼ全周し、さらに西壁の壁溝は北西隅より約160cmの位置から直角に東へ約100cm延びP_2に至る。溝幅は10～60cmで深さは4～23.5cmを測り、断面形は「U」字状を呈する。床面は黄色ローム層を踏み固めて、堅緻な状態であり、全体に平坦である。ピットは4個検出された。いずれも主柱穴で、内側に一段のテラスを有す



1層　褐色土　極少と∅1～2cmのパミスを含む。
2層　褐色土　1層より色調が明るい。
3層　黒色土　きめ細かく堅くしまる。
4層　褐色土　2層よりもパミスが少なく、きめ細かい。
5層　明褐色土　ローム粒・パミスを含み、ガリガリしている。

6層　褐色土　ロームブロックを含む。
7層　褐色土　ロームブロックを僅かに含む。
8層　褐色土　ロームブロックを多量に含む。
8′層　褐色土　ロームブロックを主体とする。
9層　黒褐色土　きめ細かい。
10層　褐色土　小礫を含む。粘性弱。パサパサしている。
10′層　褐色土　10層よりもややしまる。
11層　白橙色土　白橙色のロームを主体とする。
11′層　白橙色土　10層よりもロームの量が少ない。
12層　暗褐色土　ローム粒を含み堅くしまる。
12′層　暗褐色土　白橙色のローム粒を多量に含み堅くしまる。
13層　黒褐色土　パミスを含み柔かい。
13′層　黒褐色土　13層にローム粒を含み柔かい。
14層　褐色土　白橙色のロームを多量に含み堅くしまる。
15層　黒褐色土　堅くしまる。
15′層　黒褐色土　15層にローム粒を含む。

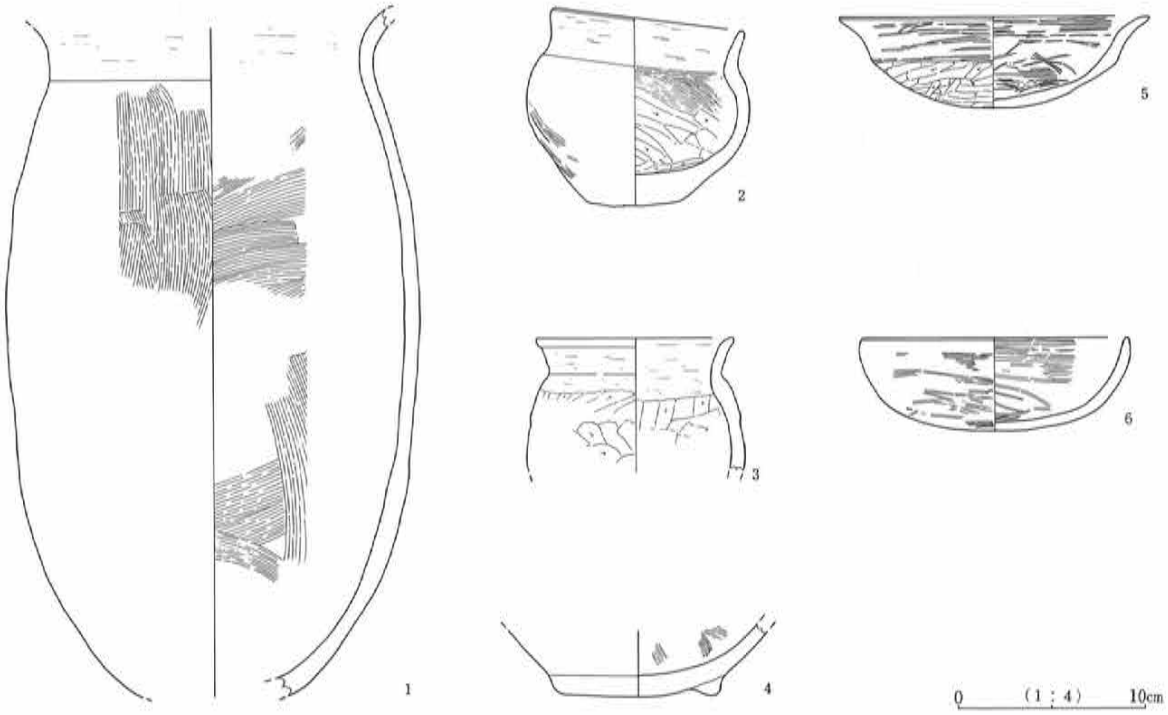
第515図　H13号住居址実測図

0　(1：80)　2m

る。P_1は106×138cmの不整楕円形で、深さはテラス部で32cm、最深部で77.5cm、P_2は96×146cmの楕円形で、テラス部で44cm、最深部で95cmを測り、P_4は83×134cmの楕円形を呈し、テラス部で43cm、最深部で93cmの深さを有する。P_3は西半部をTa39号竪穴遺構によって破壊されるため長径は不明であるが、短径92cmを測る楕円形を呈すると考えられ、深さはテラス部で28cm、最深部で80cmを測る。覆土は、P_1・P_2・P_4はテラス部付近まで粘性なく、小礫を含む褐色土を基調とし、以下は白橙色土層・暗褐色土層・黒褐色土層・褐色土層に分割される。P_3はロームブロックを含む褐色土を基調としており、最下層は粒子の細かい黒褐色土層である。

カマドは北壁中央に位置するが、西側をわずかに残してD60号土坑に破壊されており、形状は不明である。火床部はD60号土坑の床面より検出され、106×230cmの楕円形に掘り込んで設けられる。火床面は激しい熱を受けたためか脆い状態である。袖部はわずかに左袖部に使用された袖石が検出されたのみである。

遺物の出土状況は、土師器が少量出土したのみで、特に集中する箇所は認められなかった。517図１・５は住居址内に散乱した状態で出土し、517図３は南壁東側直下より出土した。また東壁北側直下より土製紡錘車（518図１）、南側直下より滑石製紡錘車（518図２）が出土し、P_3の北側より碧玉製の管玉（518図３）が出土した。

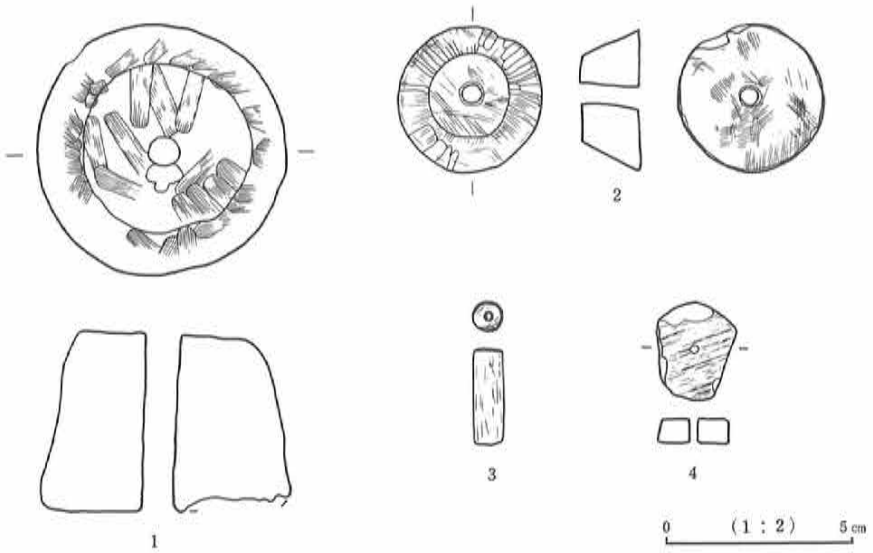


第517図　H13号住居址出土遺物実測図

第386表　H13号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
517－1	甕	胴径　22.0 現高　36.5	長胴を呈する胴部から外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面上→下への刷毛目 胴部内面刷毛目	回転実測
517－2	小　形 甕	口径　10.2 胴径　11.8 底径　4.9 器高　10.0	肥厚するやや丸味を帯びた平底から球胴を経て直立気味に外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面単位不明の刷毛状工具によるナデ、一部に縦位の篦ミガキ 胴部上半内面ナデ	回転実測

挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
517－3	小　形 甕	口径　10.4 胴径　11.6 現高　7.0	球胴化する胴部を経て、やや外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部上半外面篦削り 胴部上半内面上→下への篦削り	回転実測 胴下半以下欠
517－4	甕	底径　8.1 現高　3.8	底部貼付高台	外面刷毛状工具による単位不明のナデ 内面不規則な刷毛目	回転実測 底部のみ残存
517－5	坏	口径　16.5 器高　4.3	丸底から内彎気味に立ち上がり、口辺部で外反する。	口辺部内外面横位の篦ミガキ 体部・底部外面篦削り 体部内面不規則な篦ミガキ	回転実測
517－6	坏	口径　14.0 器高　4.9	丸底から内彎気味に立ち上がり、口辺部に至る。	口辺部外面ヨコナデ 体部内外面横位の篦ミガキ	回転実測



第518図　H13号住居址出土石器・土製品実測図

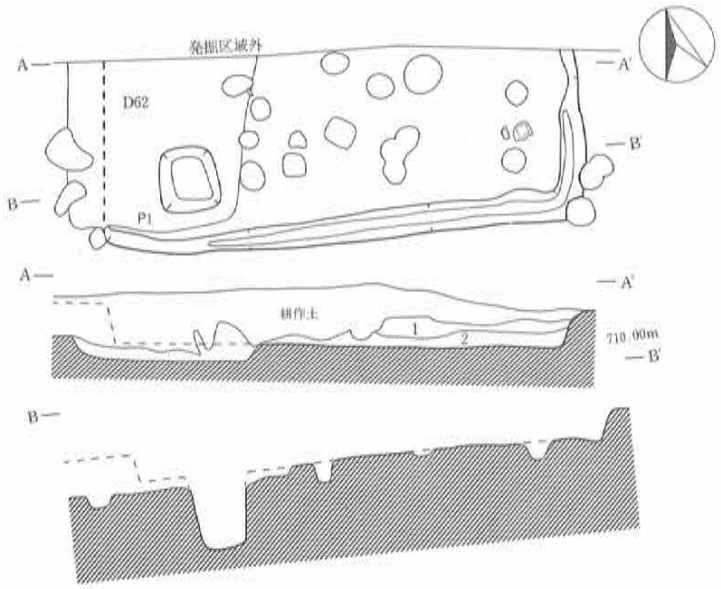
第387表　H13号住居址出土石器・土製品一覧表

挿図番号	器　種	石　質	法　量　(cm, g)				備　考
			長さ	孔径	厚さ	重量	
518－1	土製 紡錘車	土　製	6.6	0.8	4.8	200	表面に篦状工具によるナデ
518－2	石製 紡錘車	滑　石	3.8	0.48	1.52	35.6	表面に削痕及び研磨痕
518－3	管　玉	碧　玉	2.5	0.14	径 0.8	2.55	表面に研磨痕
518－4	石製 模造品	滑　石	2.6	0.2	0.65	6.35	幅2.15cm、表面に研磨痕

15　H14号住居址

本住居址は、調査区北端西側い－11・12グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色層上面において検出された。D62号土坑と重複関係にあり、西側を破壊され、さらに、径30cm前後の撹乱によって床面及び壁体を破壊される。また、北側大部分は調査区域外であるため未調査である。

規模は、南側一部分のみの検出であるため、南壁の548cmが測定できるのみであり、平面形態・主軸方位等は不



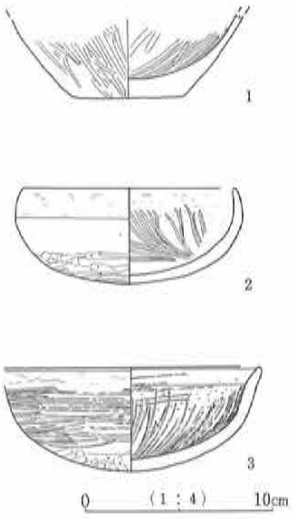
1層　褐色土　砂質ローム粒・小礫を含む。
2層　褐色土　1層よりきめ細かく、炭化粒子を含む。
3層　黒灰色土　灰主体。炭化粒子を含む。
4層　褐色土　ローム粒を多量に含む。

第519図　H14号住居址実測図

明である。

覆土は耕作等の影響を受け大部分が撹乱されているが、東側で2層に分割された。1層は砂質ローム粒と小礫を含む褐色土層で、2層は1層より粒子細かく、炭化粒子を含む褐色土層である。確認面からの壁高は9～21.5cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がる。壁溝は東壁と南壁の一部で検出され、東壁の壁高は南東隅から100cm、南壁の壁溝は南西隅から約100cmの位置で断絶する。溝幅は12～26cm、深さは6.5～9.5cmを測る。床面は全体にほぼ平坦であるが、軟弱な状態である。ピットは南壁西側より1個検出された。上面をD62号土坑に破壊されるが、残存部で62×68cmの長方形を呈し、69cmの深さを有する。

遺物の出土状況は、南側一部分のみの検出であるため、土師器が極く少量出土したのみである。520図2はP_1内より出土し、520図3は南壁直下床面より出土した。



第520図　H14号住居址出土遺物実測図

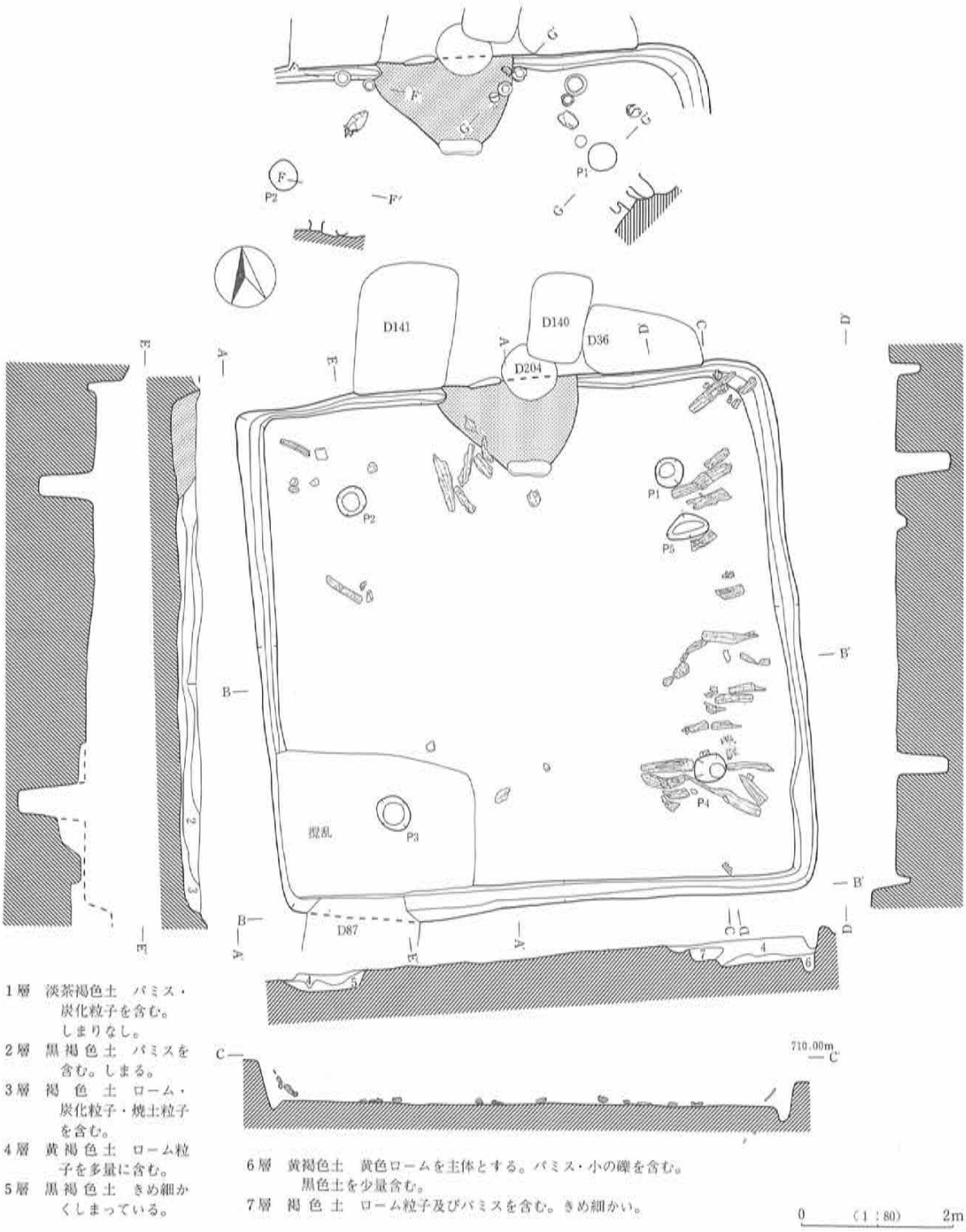
第388表　H14号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
520－1	小形甕	底部　5.8 現高　4.2	平底から内彎気味に立ち上がる。	胴下半・底部周辺縦位のヘラミガキ	回転実測 胴部以上欠損
520－2	坏	口径　(11.2) 器高　5.0	丸底から内彎して立ち上がり、口辺に至る。	口辺部内外面ヨコナデ 底部外面ヘラ削り 体部内面暗文風ヘラミガキ	回転実測
520－3	坏	口径　13.9 器高　5.5		口辺部内外面ヨコナデ 体部外面ヘラミガキ 底部外面ヘラ削り 体部内面暗文風ヘラミガキ	

16　H15号住居址

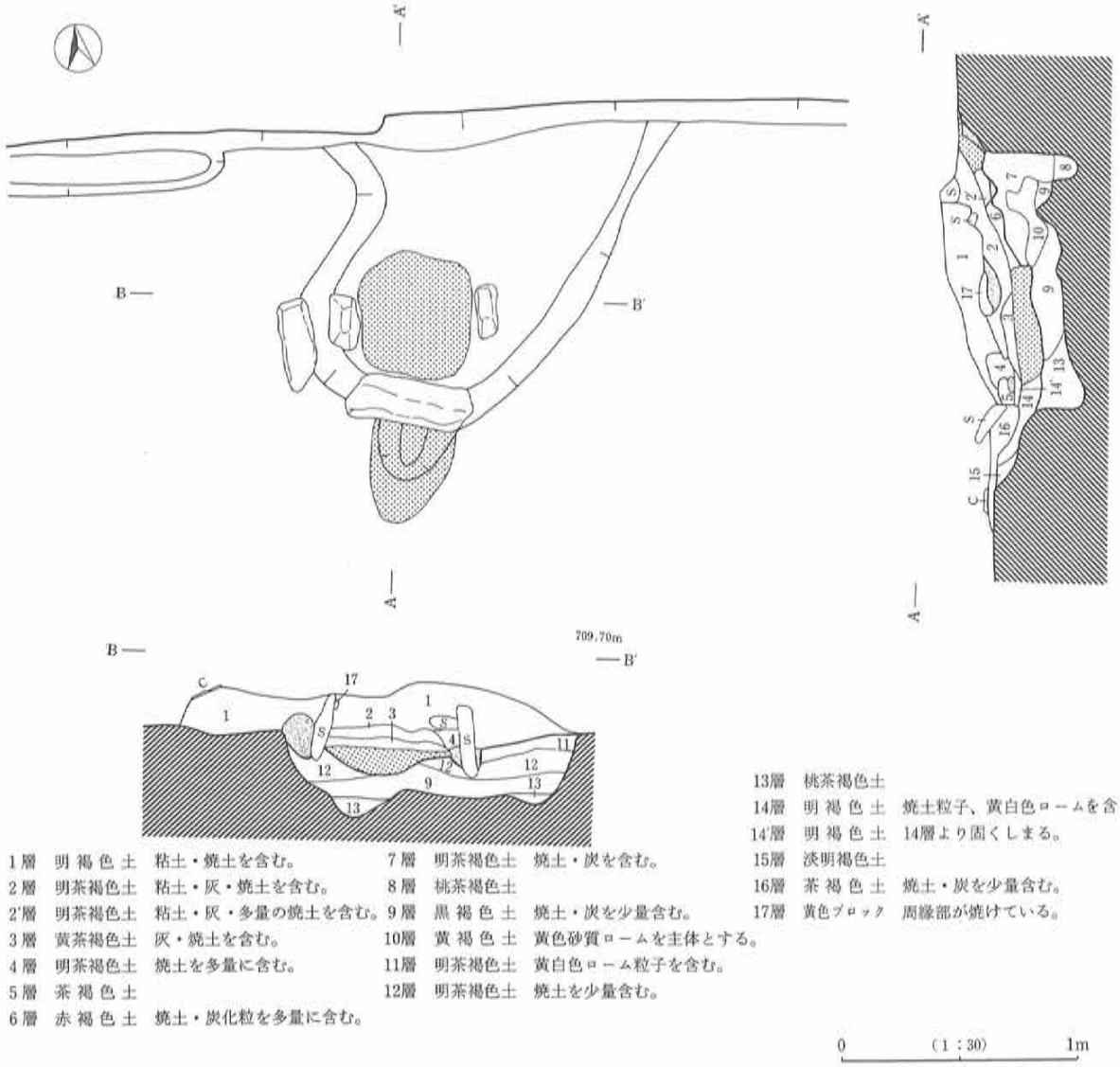
本住居址は調査区中央北寄りお・か－7・8・9グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。D36・89・121・141・204号土坑と重複関係にあり、北壁及び南壁の一部を破壊され、また南西隅を撹乱によって破壊される。

平面形態及び規模は、東壁648cm・西壁678cm・南壁681cm・北壁682cmで、東西708cm・南北683cmを測り、東西にわずかに長い方形を呈する。床面積は44.6m²を測り、主軸方位はN－1°－Wを示す。



第521図　H15号住居址実測図

覆土は3層に分割され、堆積状況から自然堆積と考えられる。1層はパミス・炭化粒子を含む淡茶褐色土層で、2層はパミスを含む黒褐色土層である。3層は褐色土層でローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を含む。確認面からの壁高は、9～50cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がる。壁溝は住居址を全周し、溝幅は8～26cmで、深さは2.5～7.5cmを測る。断面形は「U」字状を呈する。壁体は黄色ローム層を利用して構築され、比較的堅固な状態である。床面は、東壁・西壁の内側約100～200cmを20～30cm掘り込んだ後、黄褐色土（4・6層）・黒褐色土（5

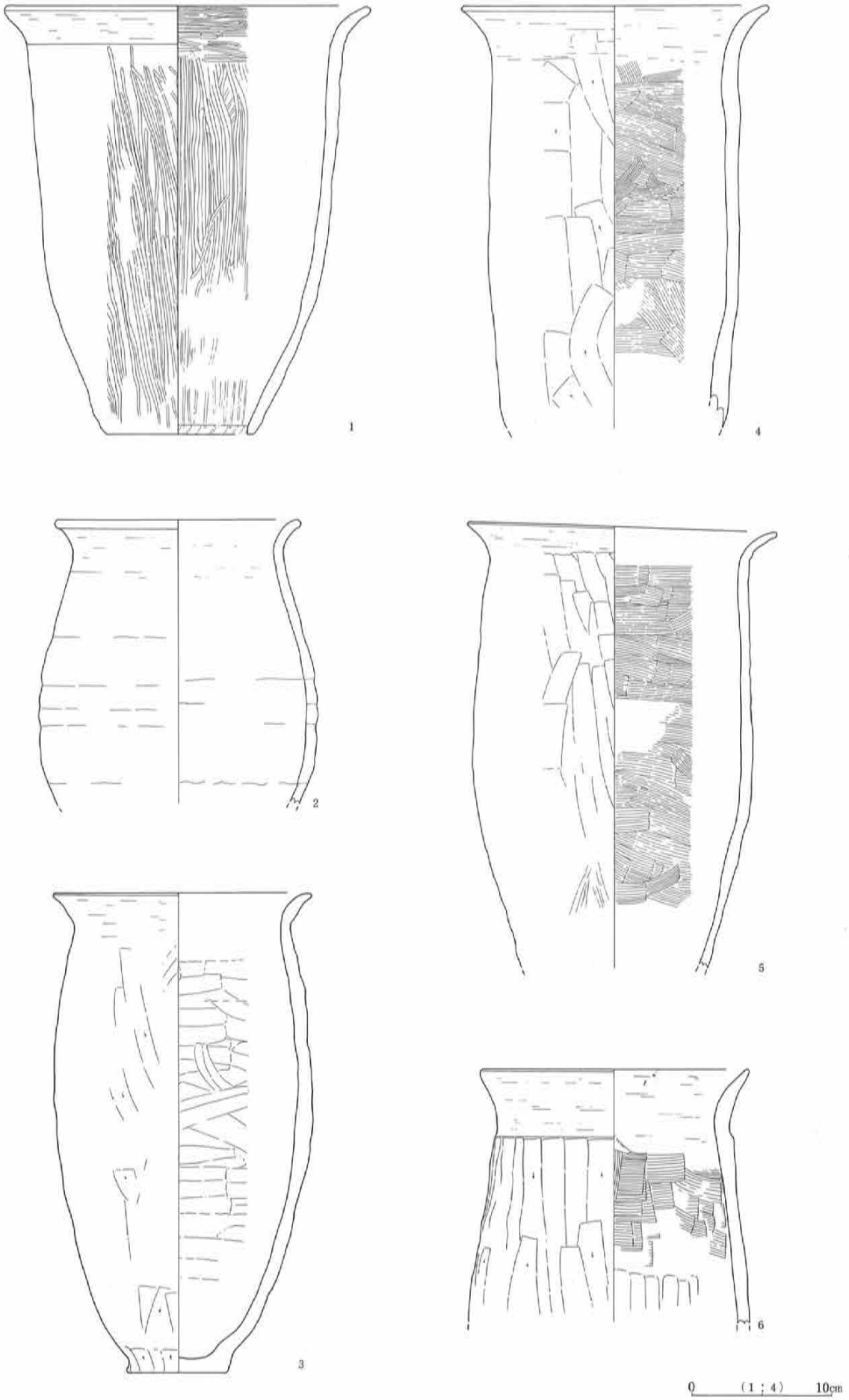


第522図　H15号住居址カマド実測図

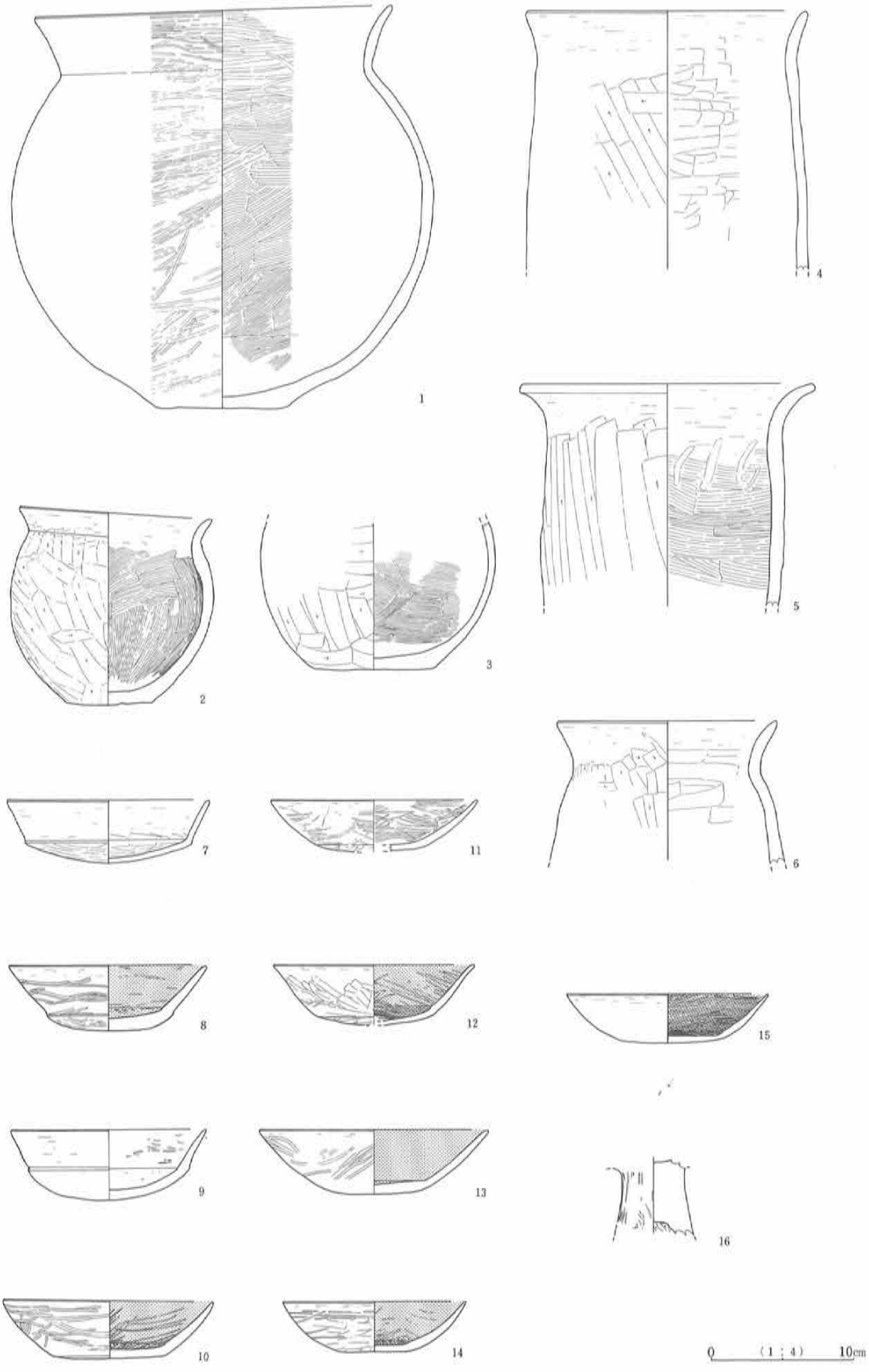
層）・褐色土（7層）を埋め戻して貼床が施され、中央付近は黄色ローム層を踏み固めて構築されており、全体に平坦で堅固な状態である。なお床面上より多量の炭化材が出土し、特に東壁付近に集中する。炭化材はいずれも住居址の中央に向った状態で出土していること等より垂木と考えられ、桁・主柱と考えられる炭化材は検出されなかった。ピットは総数で5個検出された。P_1～P_4は主柱穴であるが、P_3は撹乱によって上面を破壊される。P_1・P_2・P_4は径40cm前後を測る円形を呈し、深さは各々71.5cm・72cm・70.5cmを測る。P_3は残存部で38×50cmの楕円形で、82cmの深さを有する。P_5はP_1の南38cmの位置に配され、32×56cmの楕円形を呈し、深さは12cmを測るが、性格は不明である。

カマドは北壁中央に位置するが、天井部・袖部は既に崩壊しており、残存状況は極めて不良である。火床部は壁下を幅110cm・長さ120cmの不整形に掘り込んだ後、明茶褐色土（11層）・暗茶褐色土（12層）を埋め戻して設けられ、約10cmの厚さで焼土が観察される。袖部は崩落しているため形状は明らかでないが、長さ約30cmの安山岩が袖石として埋設され、さらに補強材として灰を含んだ粘土を被覆して構築される。

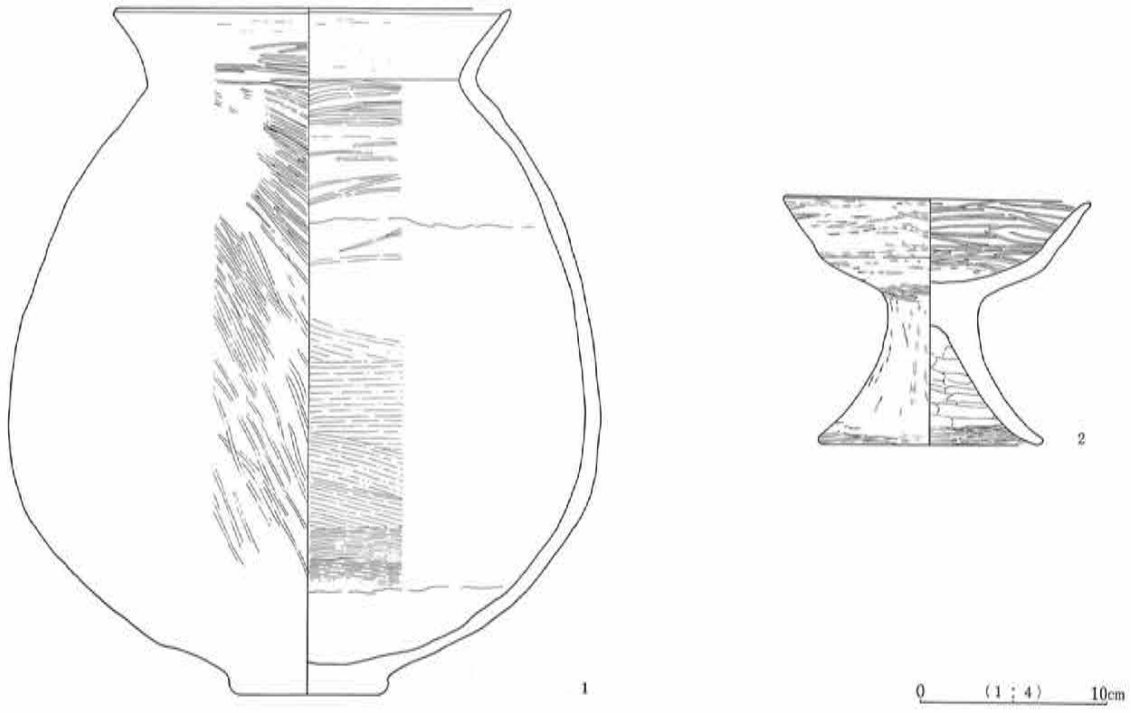
遺物の出土状況は、本住居址より多量の土師器が出土している。平面的な分布は住居址北側、特にカマド周辺に集中する傾向が顕著である。垂直分布は、いずれも床面からの出土であり、その出土状況から、これらの土師器は本住居址に共伴するものと考えられ、本住居址の所産期を決定する上で良好な一括セットと思われる。



第523 図　H15号住居址出土遺物実測図



第524図　H15号住居址出土遺物実測図



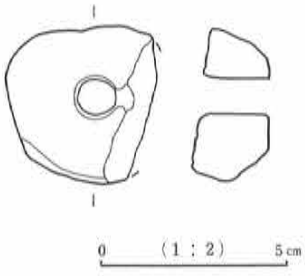
第525図　H15号住居址出土遺物実測図

第389表　H15号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
523－1	甕	口径　25.5 孔径　10.5 器高　30.4	孔部から直線的に立ち上がる胴部を経て強く外反する口縁部に至る。	口縁部外面ヨコナデ 口縁部内面横位の篦ミガキ 胴部外面縦位の篦ミガキ 胴部内面縦位の篦ミガキ 孔部内面篦削り	回転実測
523－2	甕	口径　17.2 胴径　19.6 現高　20.1	長胴から立ち上がり、強く外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面刷毛状工具による単位不明のナデ 胴部内面調整不明	回転実測
523－3	甕	口径　18.5 胴径　18.4 底径　7.0 器高　34.1	平底から長胴を経て短く外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面上→下への篦削り 胴部内面刷毛状工具によるナデ 底部周辺外面下→上への篦削り	回転実測
523－4	甕	口径　21.7 胴径　17.7 現高　29.9	長胴で直線的に立ち上がる胴部を経て外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面下→上への篦削り 胴部内面主として横位の刷毛目	回転実測
523－5	甕	口径　22.0 胴径　20.2 現高　31.2	長胴で直線的に立ち上がる胴部を経て強く外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面方向不明（一部下→上）の篦削りで、不半部に篦ナデ 胴部内面横位の刷毛目	回転実測
523－6	甕	口径　19.0 現高　12.9	長胴を経て外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面上→下への篦削り 胴部上半内面横位の刷毛目 胴部中央内面縦位の刷毛目状工具によるナデ	回転実測
524－1	甕	口径　24.8 頸径　21.7 胴径　29.3 底径　8.8 器高　27.8	平底から大きく張らむ胴部を経て頸部で窄まり、外反気味に開く口縁部に至る。	口縁部内外面横位の篦ミガキ 胴部外面横位と斜位の篦ミガキ 胴部内面横位の刷毛目	完全実測 壺？

挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
524—2	小形甕	口径　13.4 胴径　14.0 底径　6.0 器高　13.4	平底から球胴化して立ち上がり、外反する口縁部に至る。 器形大きく歪む。	口縁部内外面ヨコナデ 頸部外面上→下への篦削り 胴部外面下→上への篦削り 胴部内面右上→左下・上→下への篦削り	完全実測
524—3	小形甕	胴径　16.4 底径　8.5 現高　10.4	平底から球胴化する胴部に至る。	外面左→右・上→下への篦削り 内面主として横位の刷毛目	回転実測
524—4	甕	口径　19.3 胴径　19.6 現高　18.1	直線的に立ち上がる長胴から外反して開く口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面下→上・右→左への篦削り 胴部内面刷毛状工具によるナデ	回転実測
524—5	甕	口径　20.3 胴径　17.0 現高　15.4	直線的に立ち上がる長胴から強く外反して開く口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面下→上への篦削り 胴部内面横位の刷毛目 胴部内面一部に篦ナデ	回転実測
524—6	甕	口径　15.3 現高　9.7	長胴化する胴部を経て、外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面主に上→下への篦削り 胴部内面刷毛状工具によるナデ	回転実測
524—7	坏	口径　14.0 器高　4.4	丸底から直線的に外傾する口辺部に至る。 体部下半に稜を持つ。	口辺部・体部上半外内面ヨコナデ 底部外面篦削り 体部下半・底部内面刷毛状工具によるナデ	回転実測
524—8	坏	口径　13.6 器高　4.5	丸底から直線的に外傾し、口辺部に至る。 体部下半に弱い外稜を持つ。	口辺部・体部上半横位の篦ミガキ 底部外面篦削り後篦ミガキ 内面黒色研磨	完全実測
524—9	坏	口径　13.6 器高　4.9	丸底からやや外反して立ち上がり、口辺部に至る。 体部内外面に稜を持つ。	口辺部外面ヨコナデ 体部下半調整不明 口辺部内面横位の篦ミガキ 体部・底部内面篦ミガキ	回転実測
524—10	坏	口径　14.7 底径　7.9 器高　4.1	やや丸味を持った平底からやや内彎気味に立ち上がり口辺部に至る。	外面横位を主として篦ミガキ 体部内面横位・斜位の篦ミガキ 底部内面放射状暗文風篦ミガキ 内面黒色研磨	完全実測
524—11	坏	口径　14.4 現高　3.6	やや丸味を持った平底から直線的に立ち上がり、口辺部に至る。	口辺部外面ヨコナデ 体部外面主として横位の篦ミガキ 底部外面篦削り 体部内面横位・斜位の篦ミガキ 底部内面篦ミガキ	回転実測
524—12	坏	口径　14.0 現高　4.2	丸底から直線的に立ち上がり、口辺部でやや外反する。 体部下半外面に弱い稜を持つ。	口辺部外面ヨコナデ 体部外面篦状工具によるナデ、及び一部にミガキ 底部外面篦削り 体部内面横位・斜位の篦ミガキ 底部内面暗文風篦ミガキ 内面黒色研磨	回転実測
524—13	坏	口径　16.0 底径　5.2 器高　4.5	丸味を持った平底から直線的に立ち上がり口辺部に至る。	口辺部外面ヨコナデ 体部外面篦ミガキ 内面黒色研磨	回転実測
524—14	坏	口径　12.7 底径　5.0 器高　3.5	丸味を持った平底から内彎気味に立ち上がり口辺部に至る。	口辺部外面ヨコナデ 体部上半外面横位の篦ミガキ 体部外面篦削り、一部ミガキ 底部外面篦削り 体部内面主として横位の篦ミガキ 底部内面暗文風篦ミガキ 内面黒色研磨	回転実測

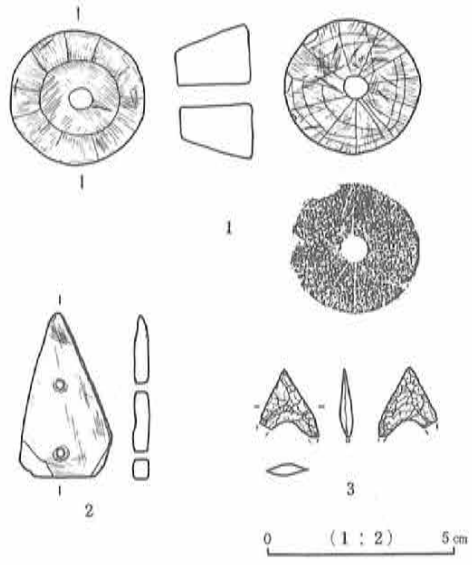
挿図番号	器　種	法　量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備　考
524－15	坏	口径　14.0 器高　3.4	丸底から直線的に外傾し、口辺部に至る。 体部内面下半に弱い稜を持つ。	口辺部外面ヨコナデ 体部外面単位不明の篦状工具によるナデ 体部内面横位の篦ミガキ 底部内面暗文風篦ミガキ 内面黒色研磨	回転実測
524－16	高坏	脚径　4.4 現高　5.3	脚部は直線的に立ち上がる。	脚部外面縦位の篦ミガキ 脚部内面篦削り	回転実測
525－1	甕	口径　21.2 胴径　31.6 底径　8.1 器高　36.3	平底から球胴化する胴部を経て頸部で窄まる。口縁部は「く」の字に折れて外反する。	口縁部外面ヨコナデ及び篦ミガキ 口縁部内面ヨコナデ 胴部外面左上→右下への篦ミガキ 胴部上半内面横位の篦ミガキ 胴部下半内面横位の刷毛目	完全実測
565－2	高坏	口径　16.3 脚径　4.8 裾径　11.9 器高　13.1	弱い稜を持つ坏部とラッパ状に開く脚部から成る。	坏部内外面横位の篦ミガキ 脚部外面縦位の篦ミガキ 脚部内面横位の篦削り 裾部内外面横位の篦ミガキ	完全実測



第526図　H15号住居址出土石器実測図

第390表　H15号住居址出土石器一覧表

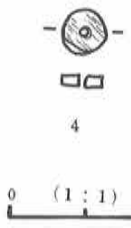
挿図番号	器種	石質	法量 径	法量 孔径	法量 厚さ	法量 重量	備考
			(cm, g)				
526	紡錘車	軽石	4.6 ～4.1	0.95	2.0	12.4	孔部周辺に抉り痕 表面にかすかな使用痕 ½欠損



第527図　遺構外出土石器実測図

第391表　遺構外出土石器一覧表

挿図番号	器種	石質	法量 長さ	法量 幅	法量 厚さ	法量 重量
	備考		(cm, g)			
527-1	紡錘車	滑石	径 3.5	孔径 0.65	1.95	31.8
	表裏面放射状に刻線 全面に研磨痕					
527-2	石製模造品	ホルンヘルス	4.35	2.35	0.45	8.3
	孔径 0.21 cm(上)、0.2 cm(下) 孔部周辺に穿孔時の加工痕 全面に研磨痕					
527-3	石　鏃	玄武岩	現長 1.82	1.5	0.34	0.52
	脚部欠損					



第528図　遺構外出土石器実測図

第392表　遺構外出土石器一覧表

挿図番号	器種	石質	法量 (cm, g) 径	孔径	厚	重量
	備考					
528	臼玉	滑石	0.61	0.07	0.14	0.13
	全面に研磨痕					

第393表　大井城跡（黒岩城跡）古墳時代住居址一覧表

遺構名	挿図番号	検出位置	形態	規模 (cm) 東西	南北	壁長 (cm) 東	西	南	北	床面積 m²	壁残高 cm	主軸方位
			炉・カマド	ピット		備考						
H 1	469	す－5・6 せ－5	長方形	334	300	256	252	310	326	9.1	3.5～21	N－10°－W
			－	主柱穴 2		D 26 に破壊される						
H 2	477	く－8・9 け－8～10 こ－9・10	(方形)	－	(770)	685	－	－	－	－	37～66	N－10°－E
			北壁中央	主柱穴 3 貯蔵穴 1 他 2		Ta 15・D 211・F 3 に破壊される 攪乱により南西部を壊される 周溝有す						
H 3	481	か・き・く －5・6	方形	(760)	(747)	(708)	(725)	(728)	(743)	(51.8)	6.5～33.5	N－10°－E
			北壁中央	主柱穴 4 他 4		Ta 1・7・9・10, D 28・110・164・165・180・287 F 1 に破壊される。 攪乱により南西部を破壊される。						
H 4	486	さ・し－6・7	－	(600)	－	－	－	－	(576)	－	0～25	N－11°－E
			北壁中央	主柱穴 3		Ta 4・53, D 39・40・45・46・209・258・290, F 2 に破壊される。 北壁中央付近を攪乱により破壊される。						
H 5	490	く・け・こ －5・6・7	方形	(788)	764	(708)	745	(750)	779	(57.3)	0～17.5	N－7°－E
			北壁中央	主柱穴 2 貯蔵穴 1		Ta 8・11・14・52, D 41・42・44, 88・95・126・144・147・150・153・207・208・212 に破壊される。 周溝有し、ピット状の攪乱多し。						
H 6	493	く・け－7	方形	(309)	(290)	245	(270)	(284)	(290)	(7.9)	3～20	N－18°－E
			－	－		D 32, F 3 に破壊される。 周溝有す。						
H 7	494	き・く－8・9	方形	(359)	(374)	356	(340)	344	(326)	(10.3)	1.5～24.5	S－83°－E
			東壁中央	－		D 123 に破壊される。 北壁・東壁を攪乱により破壊される。 周溝有す。						

遺構名	挿図番号	検出位置	形態	規模（cm）		壁長（cm）				床面積 ㎡	壁残高 cm	主軸方位
				東西	南北	東	西	南	北			
			炉・カマド		ピット	備考						
H 8	497	う・え・お −5・6	（方形）	（796）	−	−	−	（740）	−	−	12〜31	−
			−		−	Ta 51，D 69・73・76・105・134・138・142・155・250・251・256 に破壊される。 ピット状の撹乱多数有す。						
H 9	500	う・え −7・8	隅丸方形	655	630	610	610	575	596	35.5	43〜70	N−9°−W
			北壁中央		主柱穴 4 貯蔵穴 2 他 9	D 22・78・133・137・244・252・253・257 に破壊される。 周溝・張出ピット（南壁中央）有す。						
H 10	503	い・う −11〜13	方形	−	（778）	768	−	−	−	−	0〜43	N−46°−E
			北壁中央		主柱穴 4 貯蔵穴 1	D 129 に破壊される。 撹乱により南西部が破壊される。 入口部施設有す。						
H 11	507	お〜き −10・11	方形	762	760	755	（755）	（718）	753	（53）	35〜51	N−7°−W
			北壁中央		主柱穴 4	D 203 を破壊する。 撹乱により南壁を破壊される。 周溝有す。						
H 12	511	う・え −10・11	（方形）	−	−	−	（612）	−	594	−	19.5〜43	N−4°−E
			北壁中央		主柱穴 4 他 2	H 13，Ta 39，D 13・57 に破壊される。						
H 13	515	う〜お −9〜11	方形	（944）	（950）	954	（910）	（936）	920	（83.2）	13〜59	N−2°−W
			北壁中央		主柱穴 4	Ta 38・39・41，D 58・60・130・233・234 に破壊される。 撹乱により北壁中央を破壊される。 周溝有す。						
H 14	519	い−11・12	−	−	−	−	−	（548）	−	−	9〜21.5	−
			−		他 1	D 62 に破壊される。 ピット状の撹乱有す。 周溝有す。						
H 15	521	お・か −7〜9	方形	708	683	648	678	681	682	44.6	9〜50	N−1°−W
			北壁中央		主柱穴 4 他 1	D 36・89・121・141・204 に破壊される。 周溝有す。						

執筆分担

事　務　局　第Ⅰ章

白 倉 盛 男　第Ⅱ章大井城跡（黒岩城跡）の自然環境

林　　幸 彦　第Ⅱ章大井城跡（黒岩城跡）の歴史環境，第Ⅲ章，第Ⅳ章第１節２～４

小 山 岳 夫　第Ⅳ章第１節１，第Ⅳ章第２節１～４

佐々木宗昭　第Ⅳ章第２節５・６

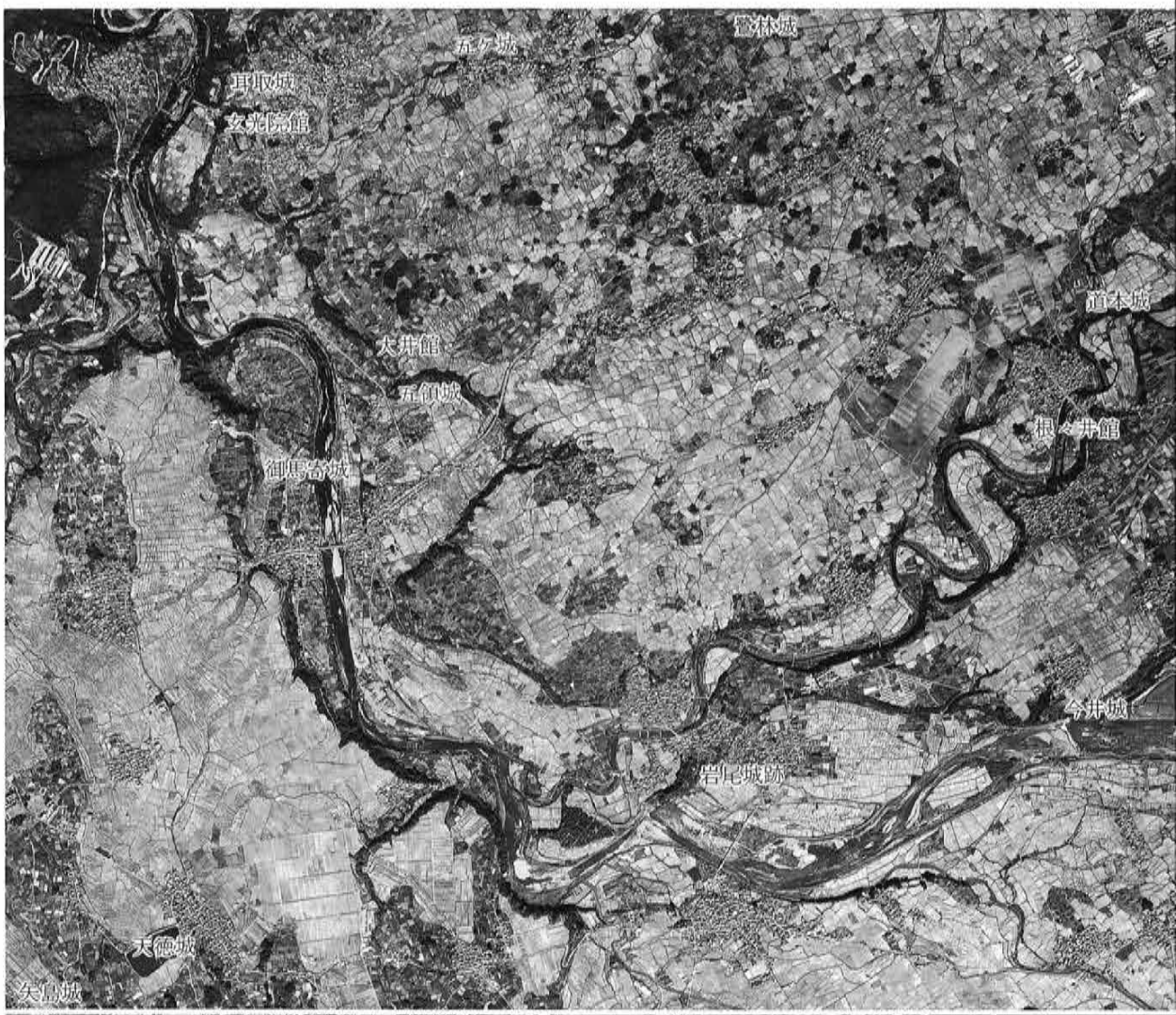
羽毛田卓也　第Ⅳ章第２節７～９・11，第Ⅳ章第３節１～16（遺物）

三 石 宗 一　第Ⅳ章第３節２～16（遺構）

森泉かよ子　第Ⅳ章第２節10

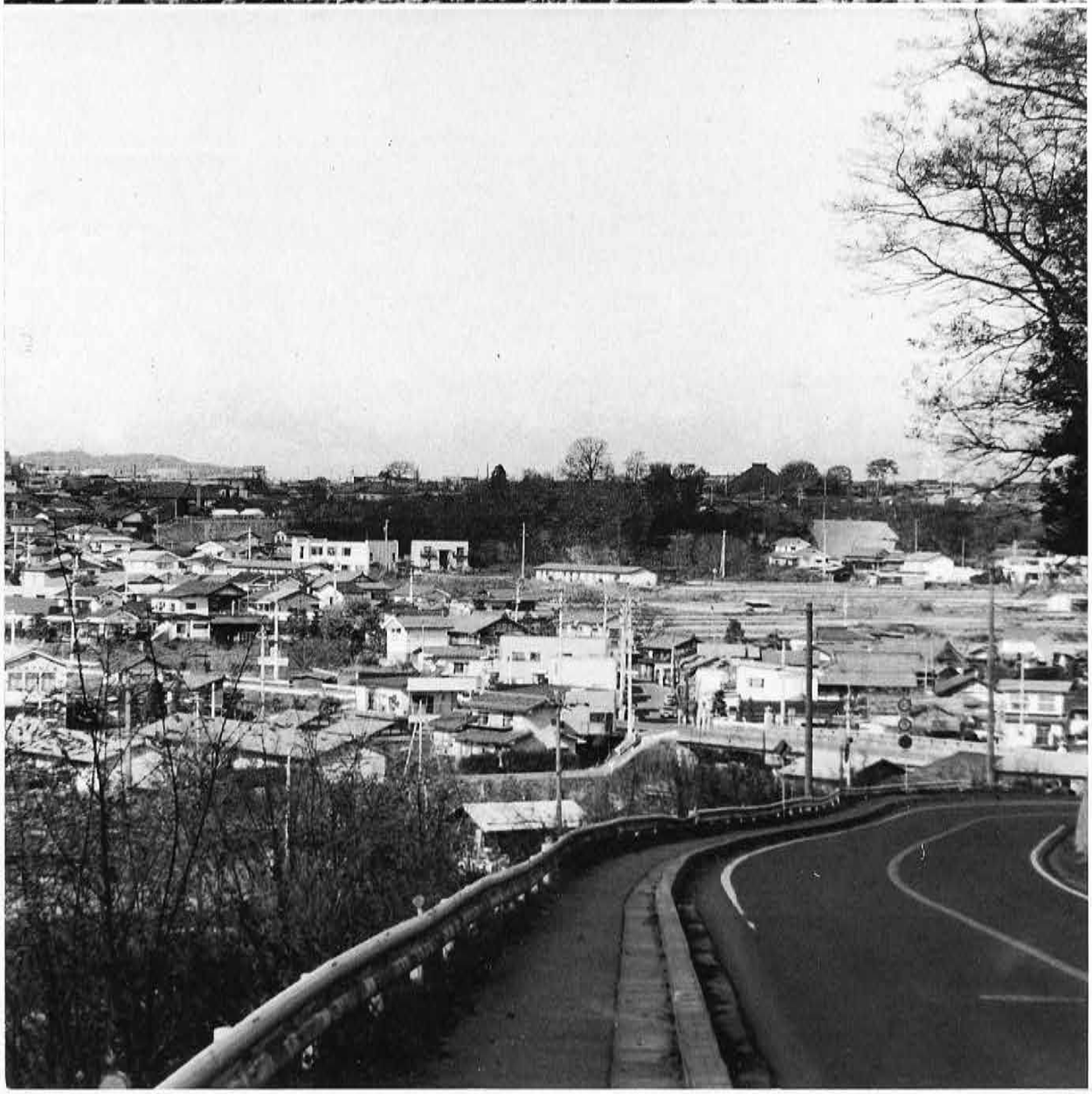
大井城跡周辺
航空写真
（東洋航空事業株式会社撮影）

1　岩尾城跡付近
航空写真
（東洋航空事業株式会社撮影）



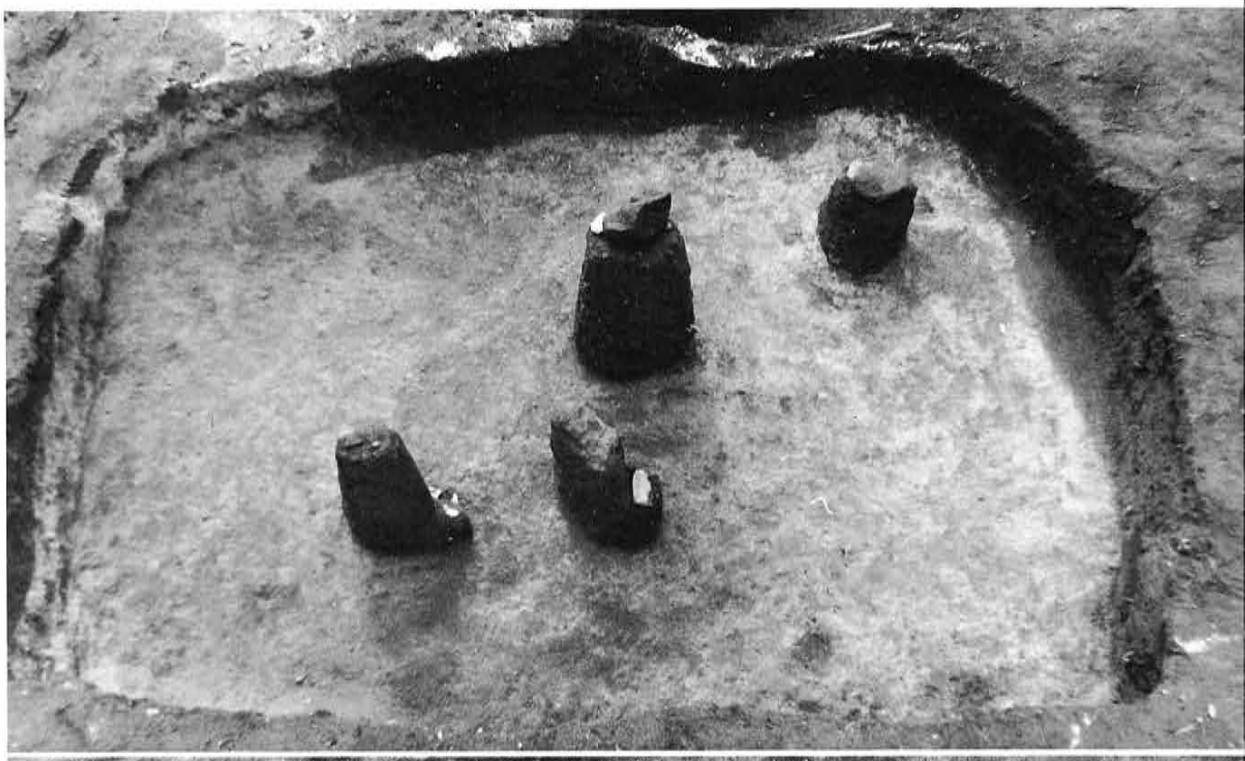
2　野沢城跡付近
航空写真
（東洋航空事業株式会社撮影）

1　調査区遠影
（東方より）



2　調査区遠影
（南東方より）

1　Ta1号竪穴遺構
（北より）



2　Ta3・31号
竪穴遺構
（東より）

3　Ta5・6号
竪穴遺構
（北より）

1　Ta5号竪穴遺構
（北より）

2　Ta6号竪穴遺構
（北より）

3　Ta4号竪穴遺構
遺物出土状況

4　Ta4号竪穴遺構
（東より）

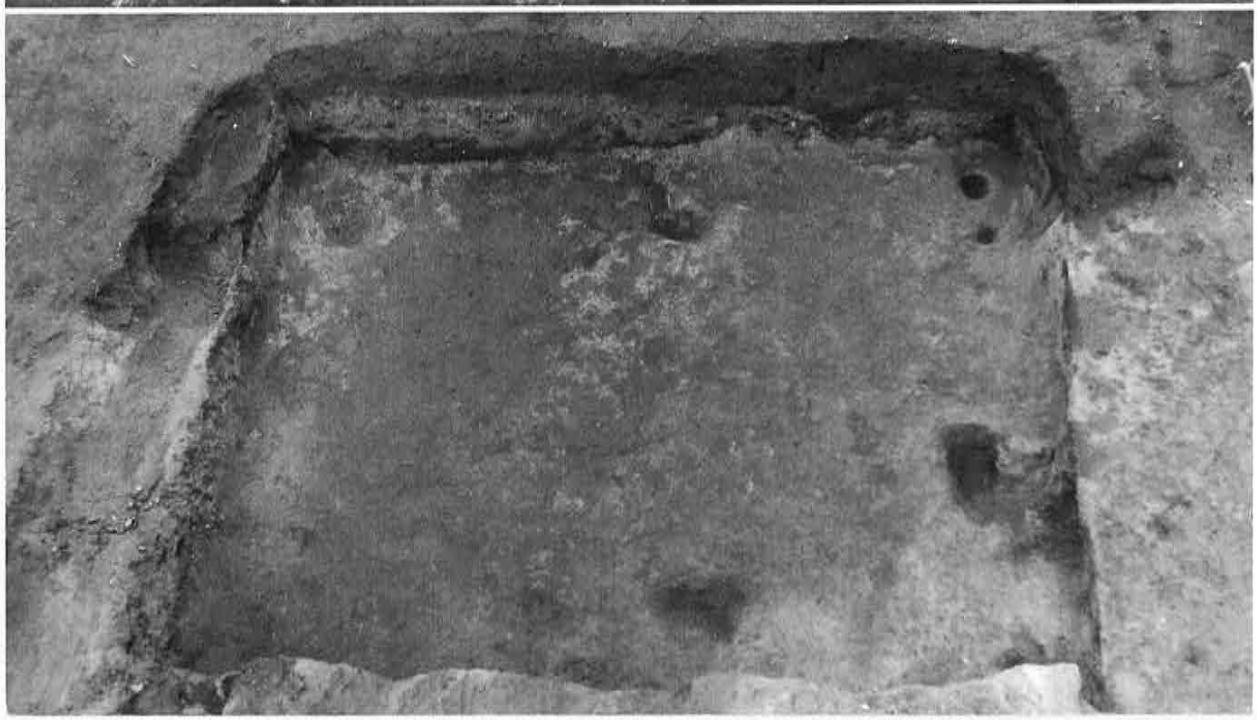
1　Ta 7 号竪穴遺構
（南より）

2　Ta 8 号竪穴遺構
（北より）

3・4
Ta 8 号竪穴遺構
遺物出土状況

1　Ta9号竪穴遺構
（東より）

2　Tal0号竪穴遺構
（西より）



3　Tal0号竪穴遺構
（東より）

1　Ta11号竪穴遺構
（東より）

2　Ta11号竪穴遺構
（西より）

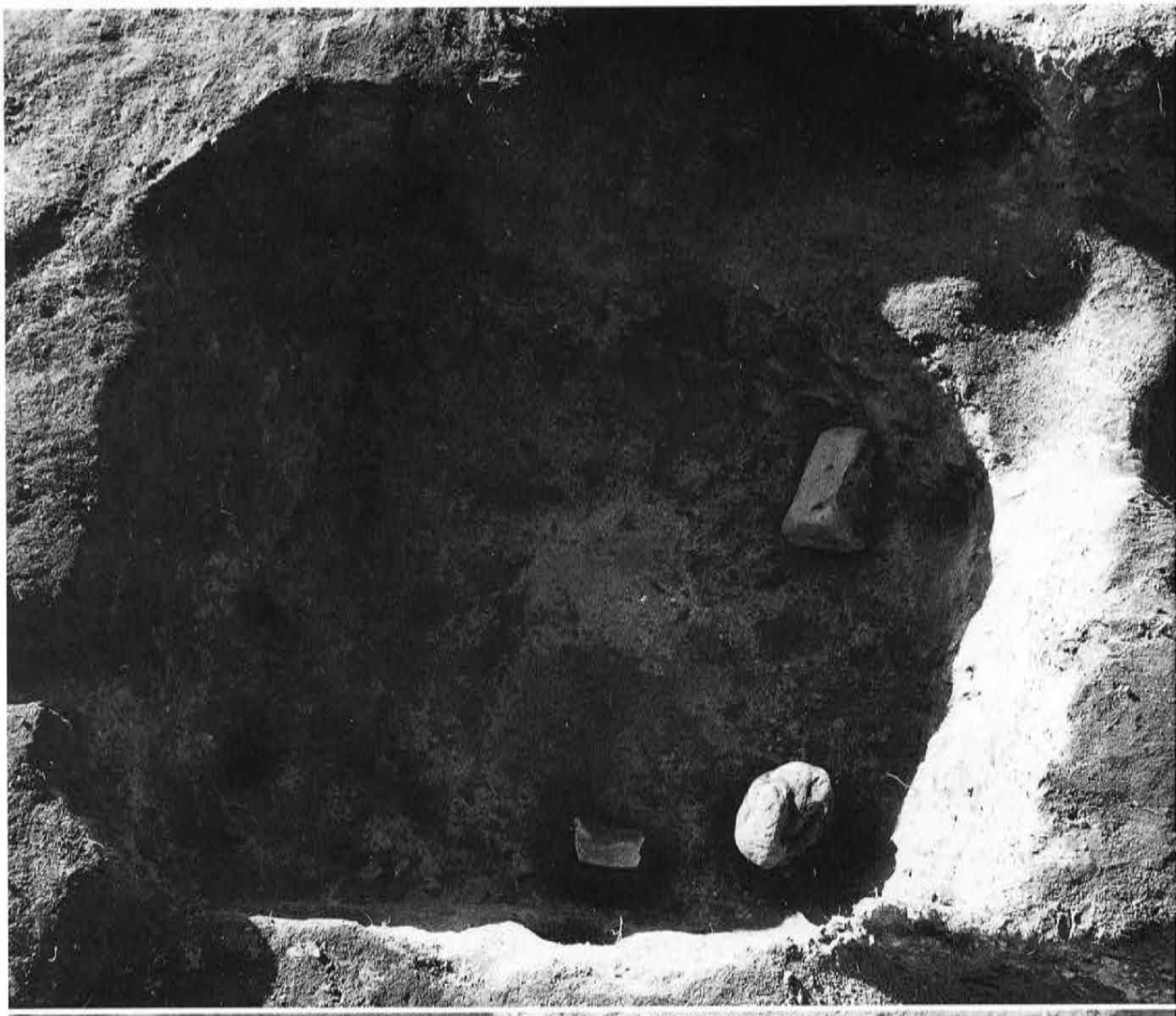
3　Ta13号竪穴遺構
（南より）

1　Tal3号竪穴遺構
（北より）

2　Tal6号竪穴遺構
（北より）

3　Tal6号竪穴遺構
遺物出土状況

1　Tal7号竪穴遺構
（東より）



2　Tal8号竪穴遺構
（東より）

1　Ta19・21号
竪穴遺構
（北より）

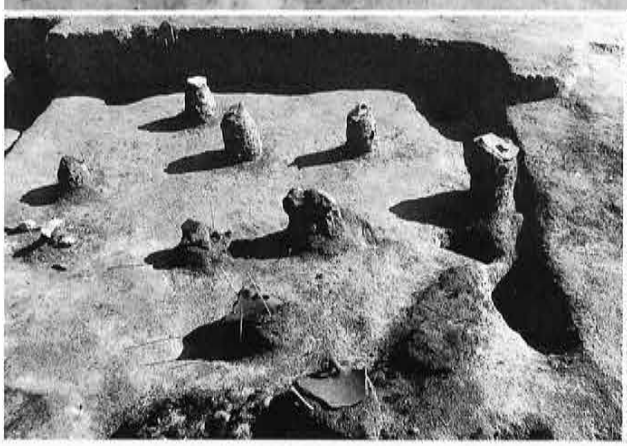
2　Ta20号竪穴遺構
（北より）

3　Ta20号竪穴遺構
遺物出土状況

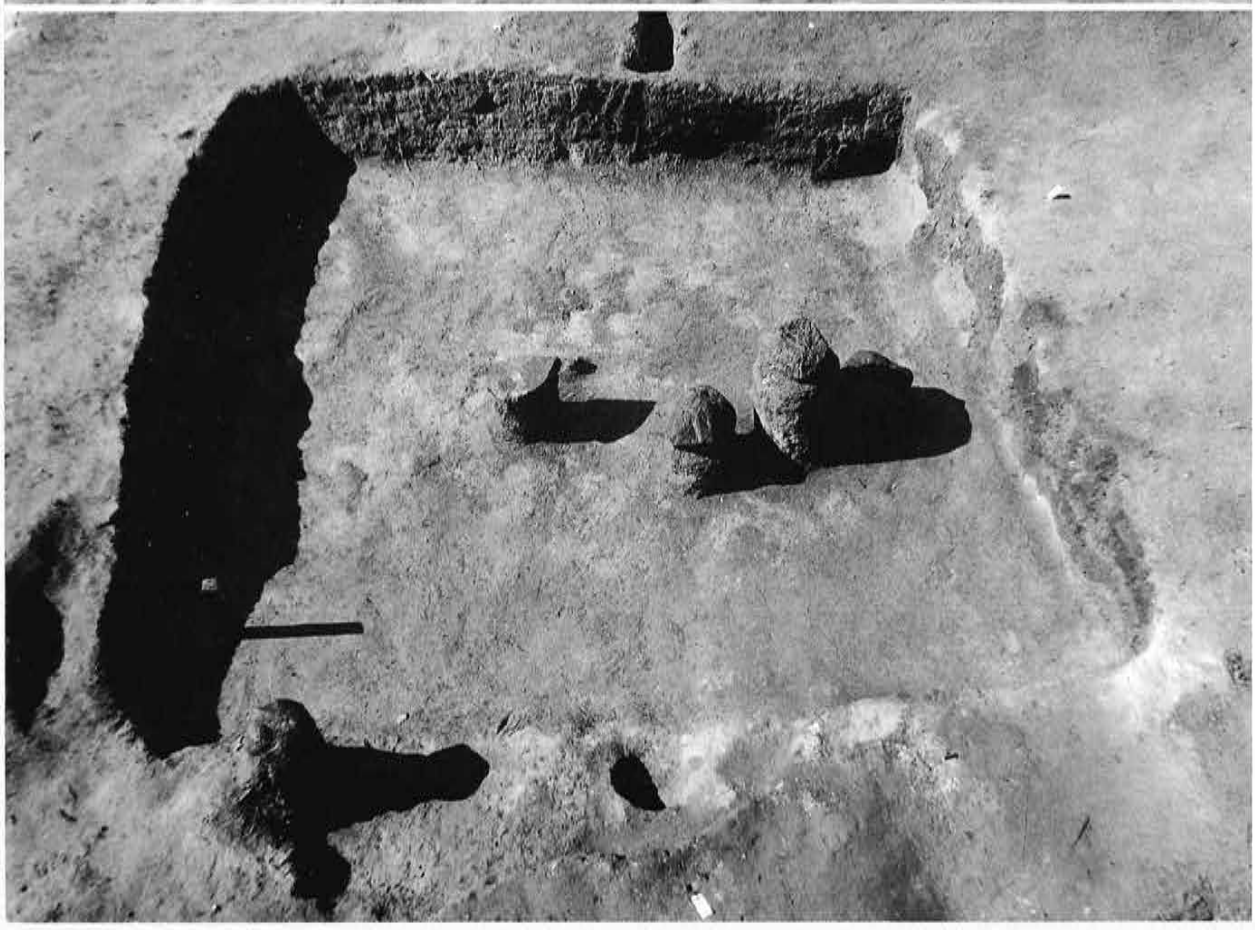
1　Ta22号竪穴遺構
（南より）

2　Ta23号竪穴遺構
（西より）

3・4
Ta23号竪穴遺構
遺物出土状況



1　Ta23号竪穴遺構
（北より）



2　Ta24号竪穴遺構
（東より）

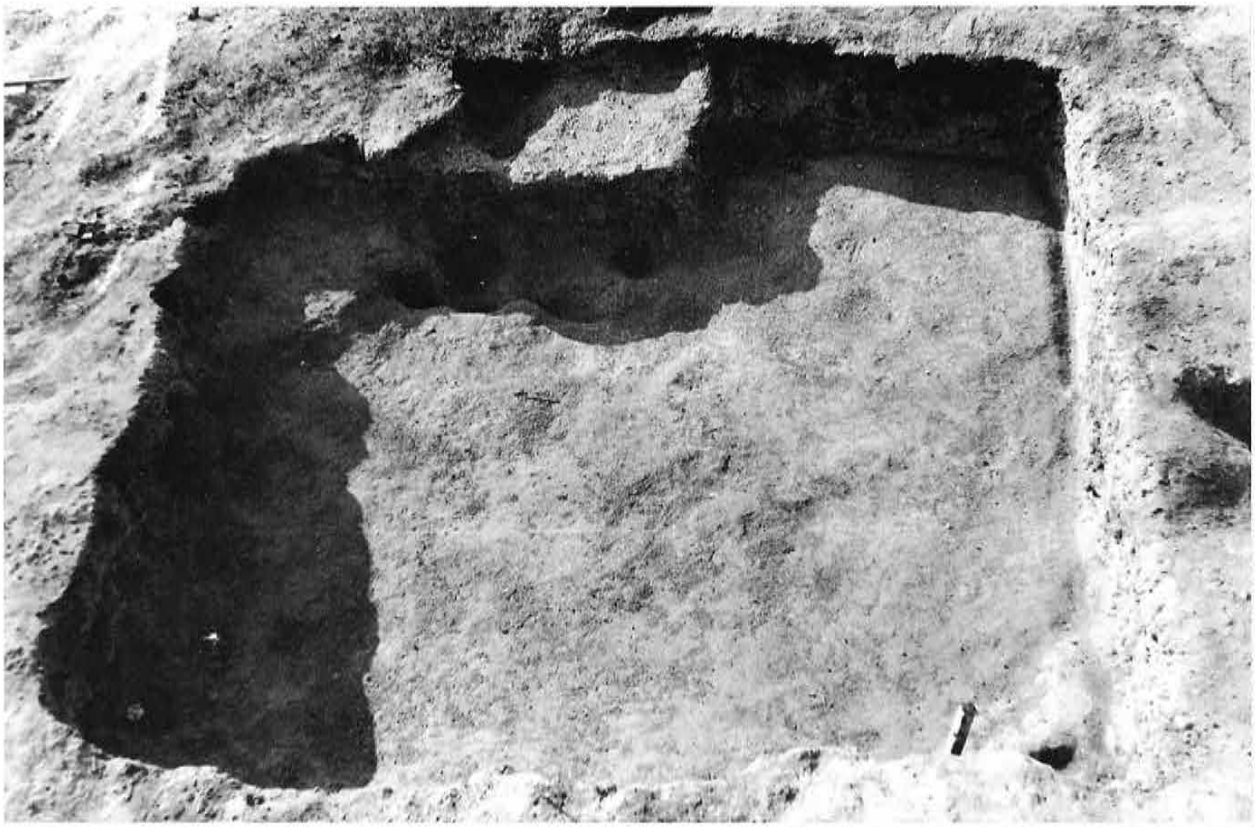
1　Ta25号竪穴遺構
（北より）

2　Ta25号竪穴遺構
（東より）

1　Ta26号竪穴遺構
（北より）

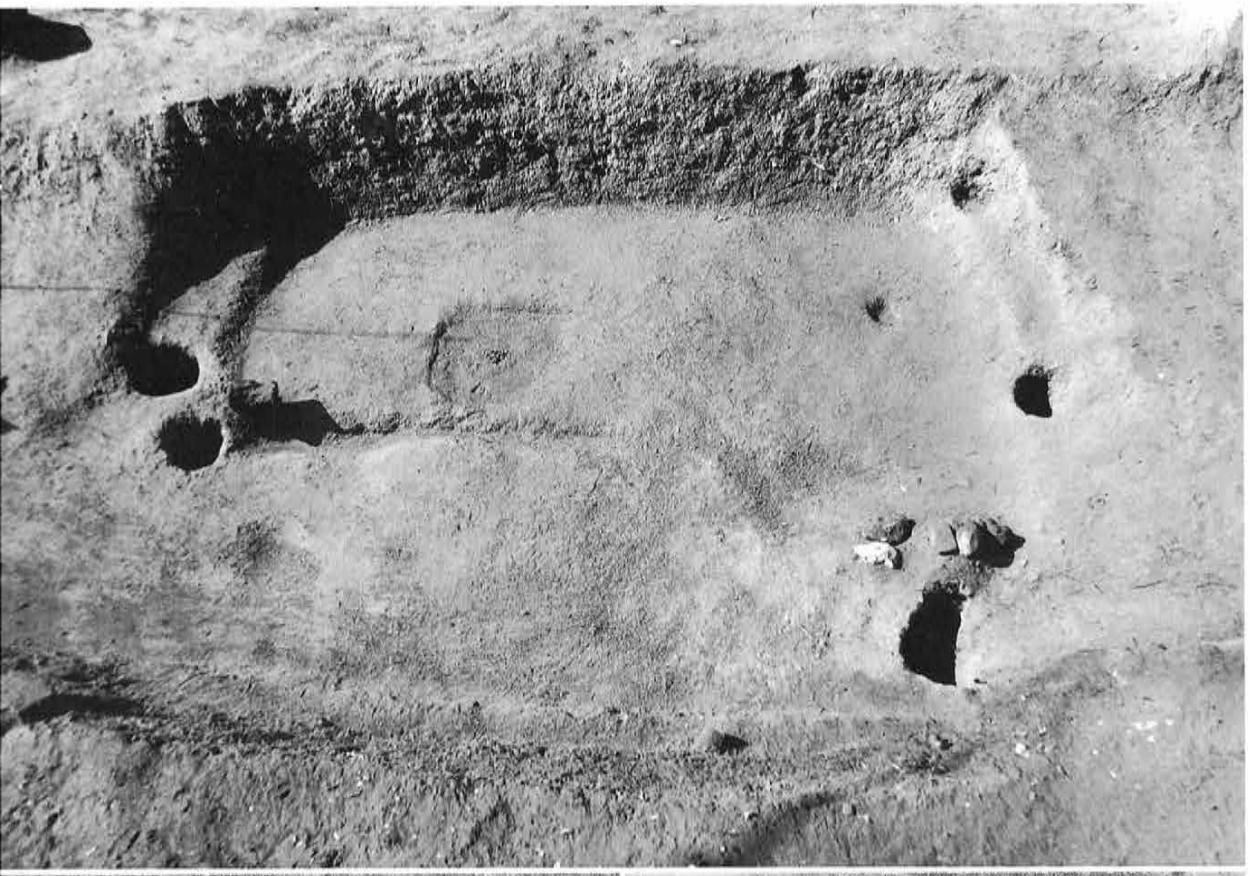
2　Ta27号竪穴遺構
（西より）

1 Ta28号竪穴遺構（東より）

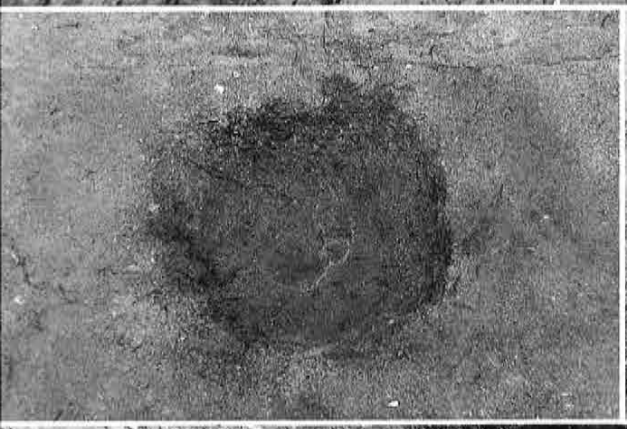


2 Ta29号竪穴遺構（北より）

3 Ta29号竪穴遺構土層



1 Ta30号竪穴遺構（東より）



2 Ta30号竪穴遺構 炉址

3 Ta30号竪穴遺構 炉址土層

4 Ta32号竪穴遺構（西より）

1 Ta34号竪穴遺構
（西より）

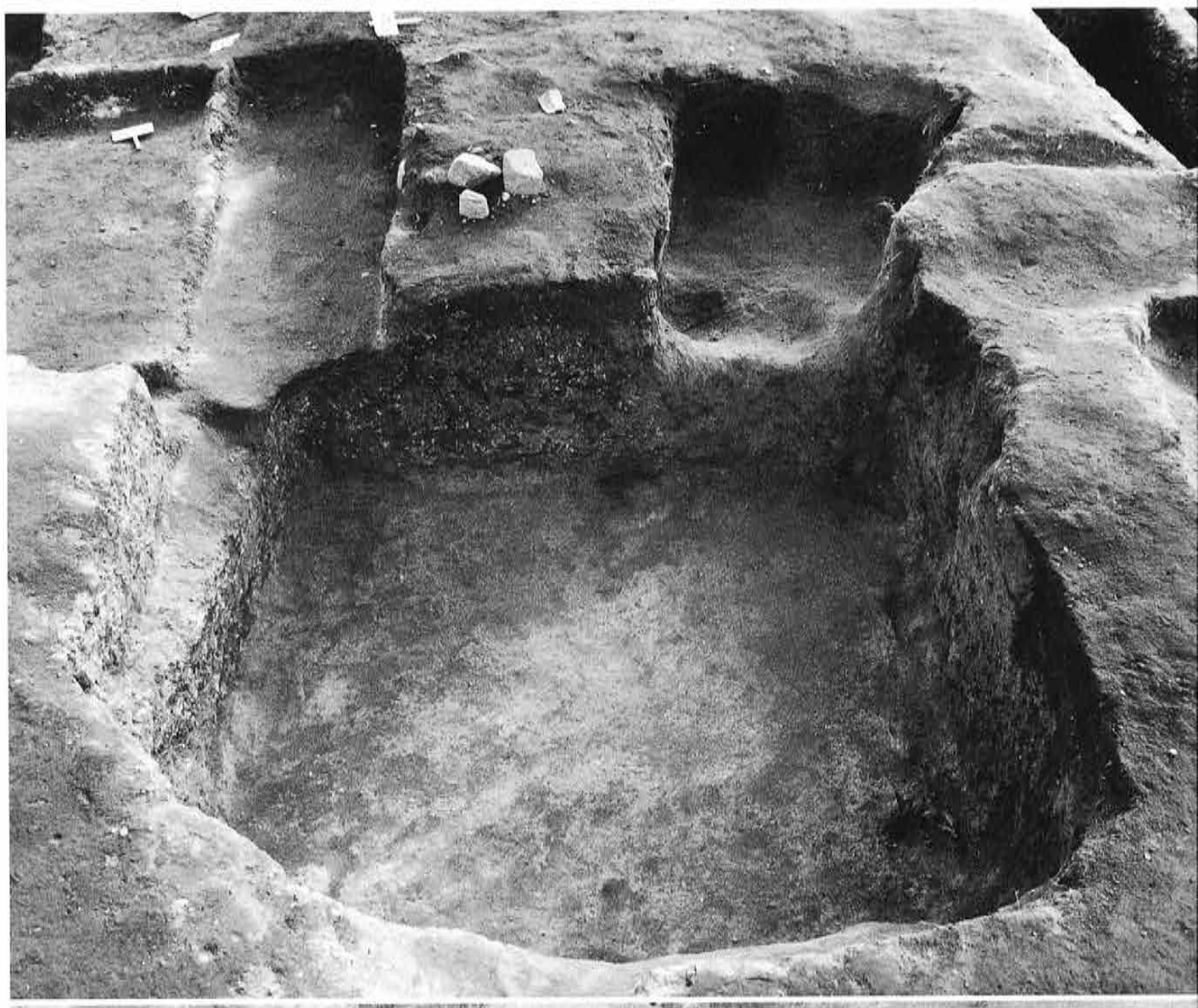
2 Ta35号竪穴遺構
（北より）

3 Ta35号竪穴遺構
遺物出土状況

1　Ta36号竪穴遺構
（東より）

2　Ta36号竪穴遺構
遺物出土状況

1　Ta36号竪穴遺構
（北より）



2　Ta36号竪穴遺構
（東より）

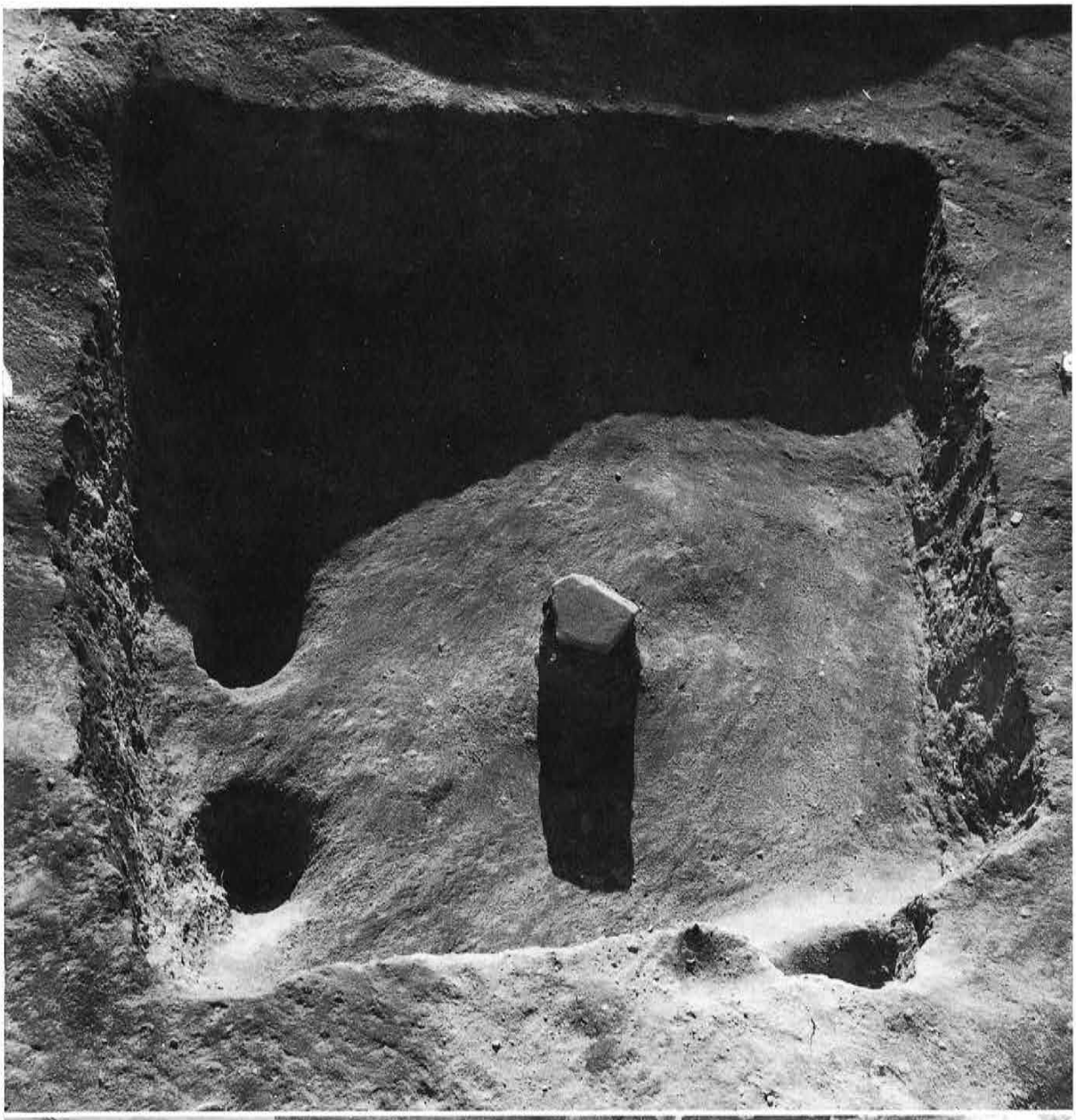
1　Ta38号竪穴遺構
（北より）

2　Ta38号竪穴遺構
遺物出土状況

3　Ta38・39
竪穴遺構
（北より）

1 Ta38・39
竪穴遺構
（北より）

2 Ta40号竪穴遺構
（西より）



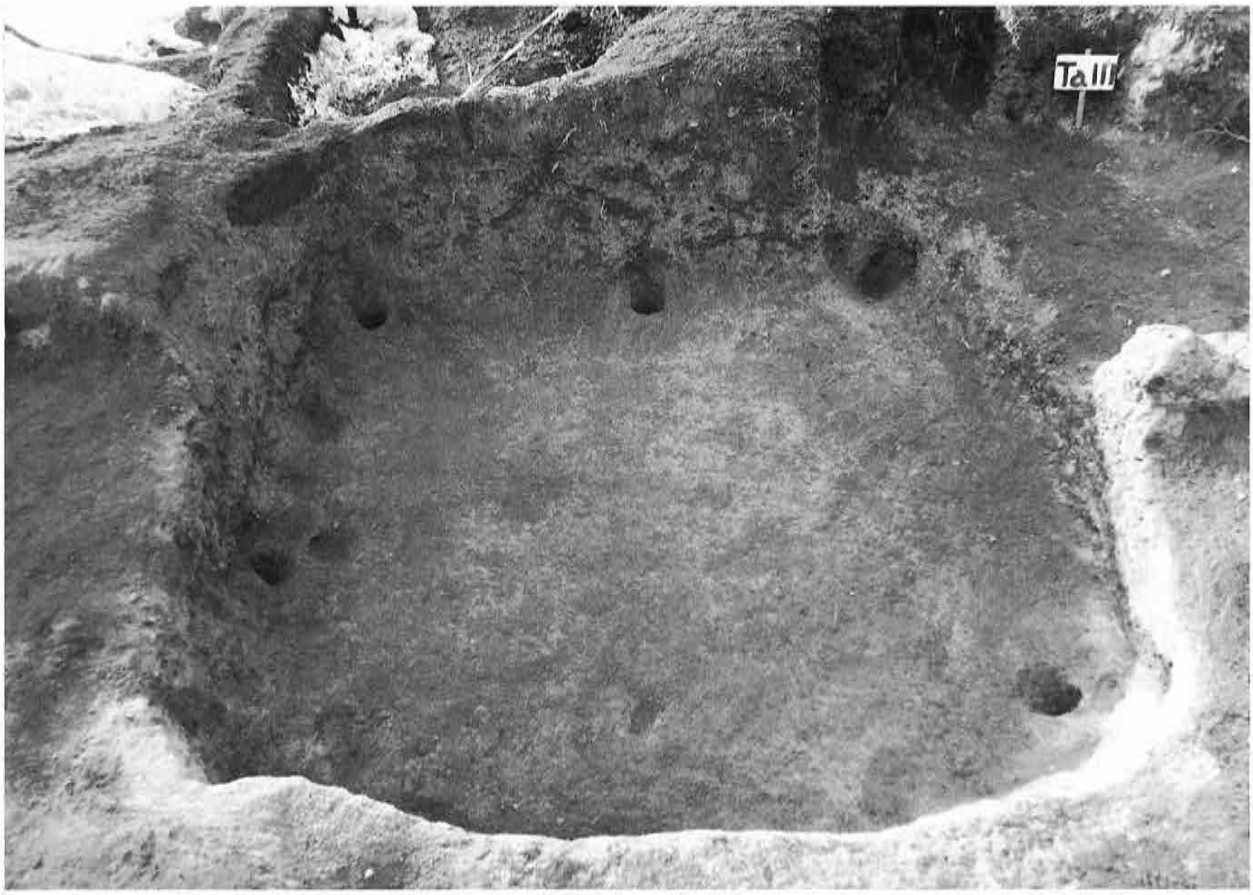
1　Ta41号竪穴遺構
（北より）

2　Ta42号竪穴遺構
（北より）

1　Ta42号竪穴遺構（東より）

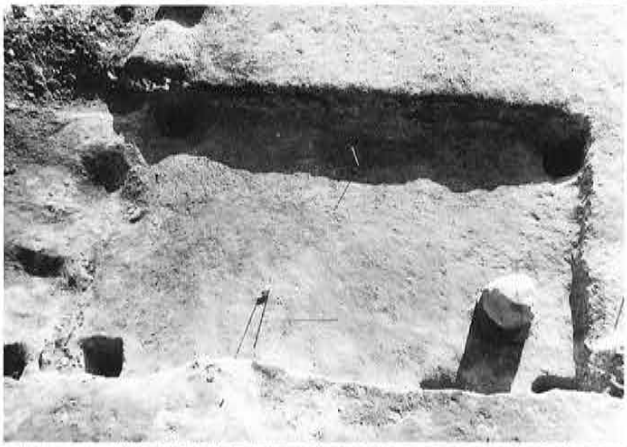
2　Ta43号竪穴遺構（西より）

3　Ta44号竪穴遺構（南より）



1　Ta49号竪穴遺構（東より）

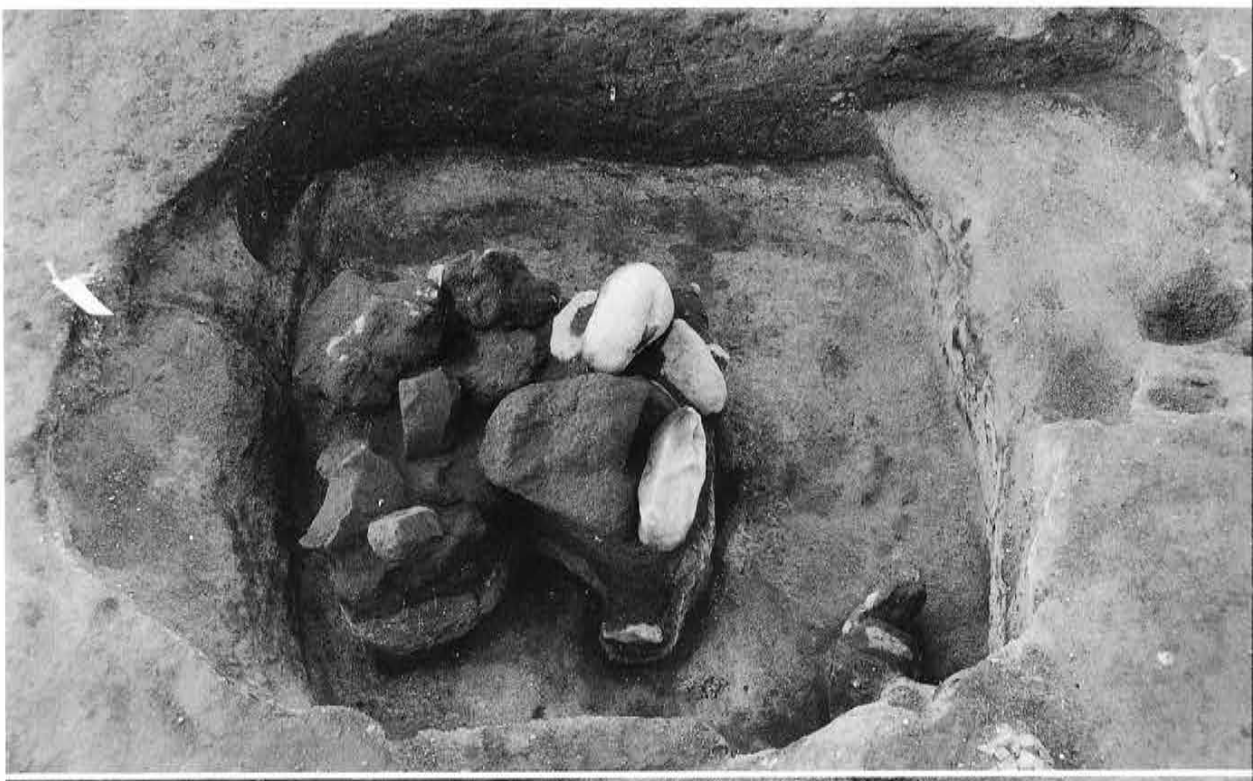
2　Ta46号竪穴遺構（東より）



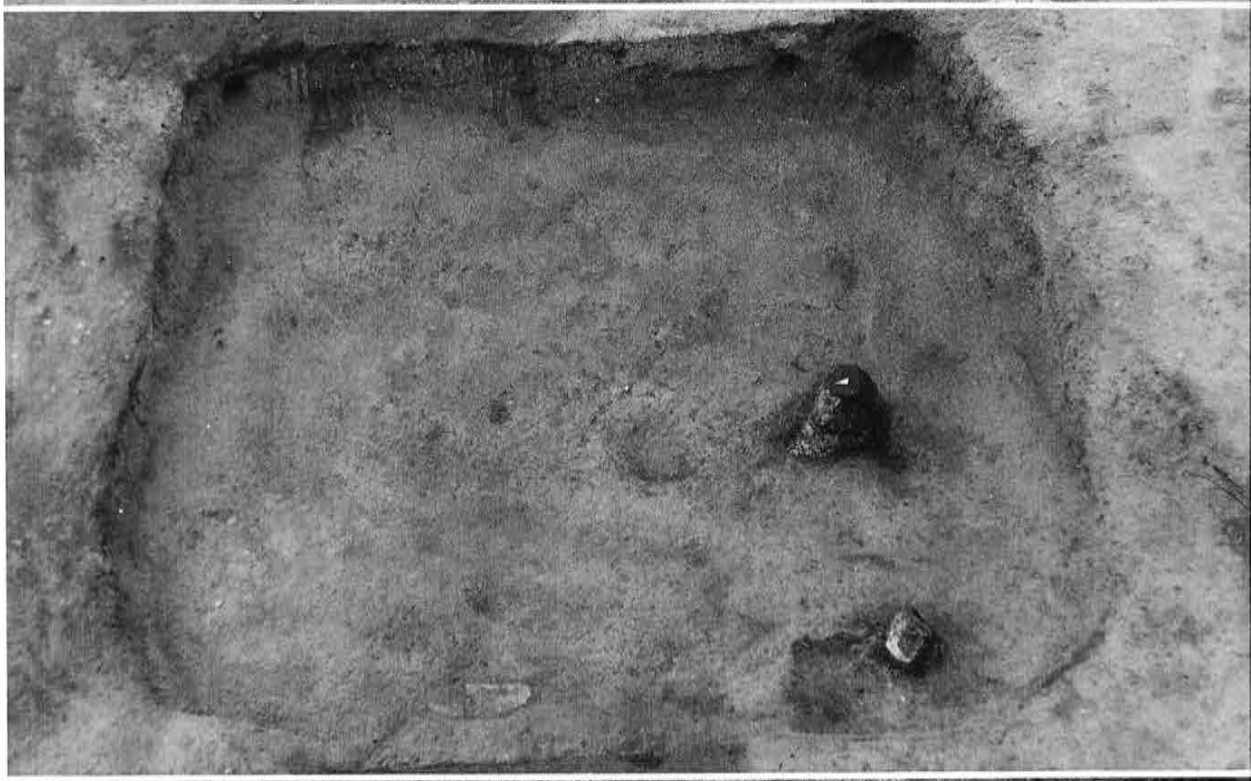
3　Ta50号竪穴遺構（北より）

4　Ta51号竪穴遺構（西より）

1　Ta52号竪穴遺構（東より）



2　D2号土坑

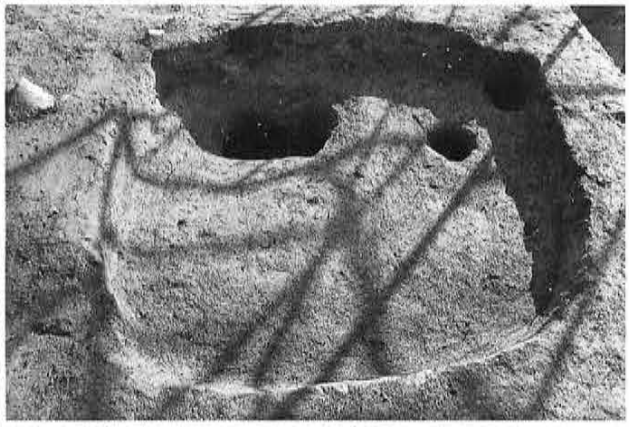


3　D4・6号土坑

1　D５号土坑

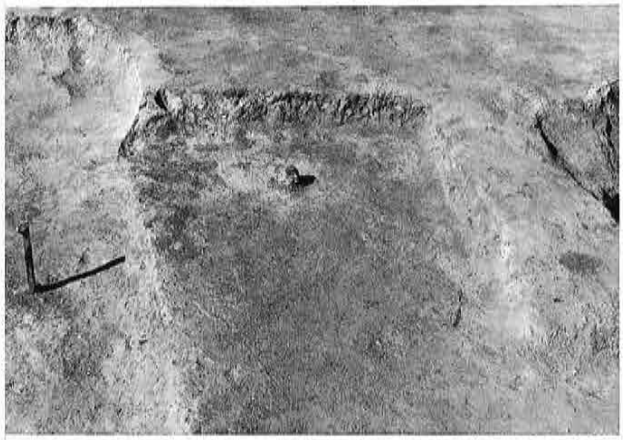
2　D７号土坑

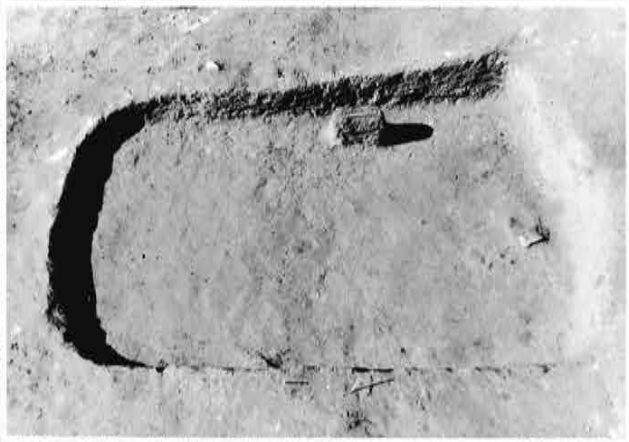
3　D18号土坑



4　D19号土坑

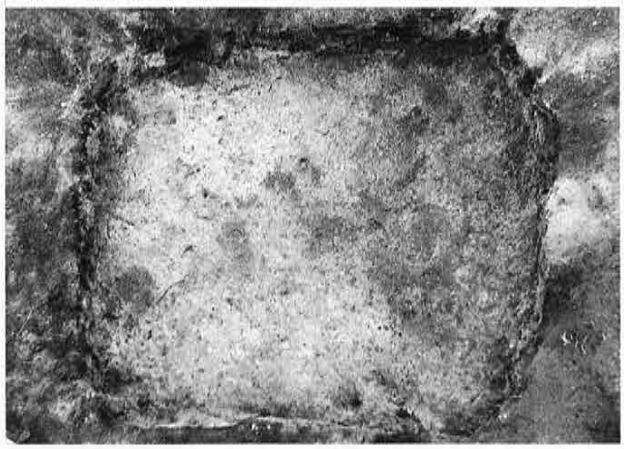
5　D22号土坑





6　D23号土坑

7　D24号土坑

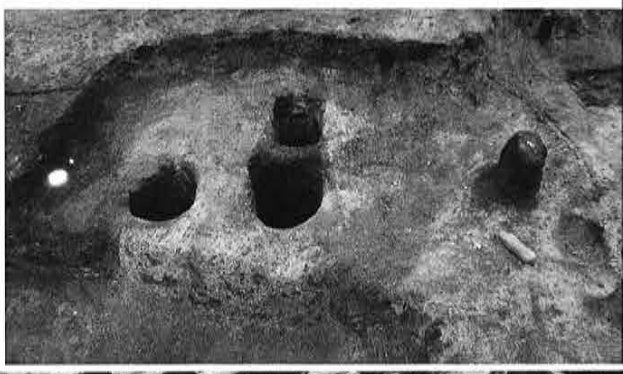


8　D26号土坑

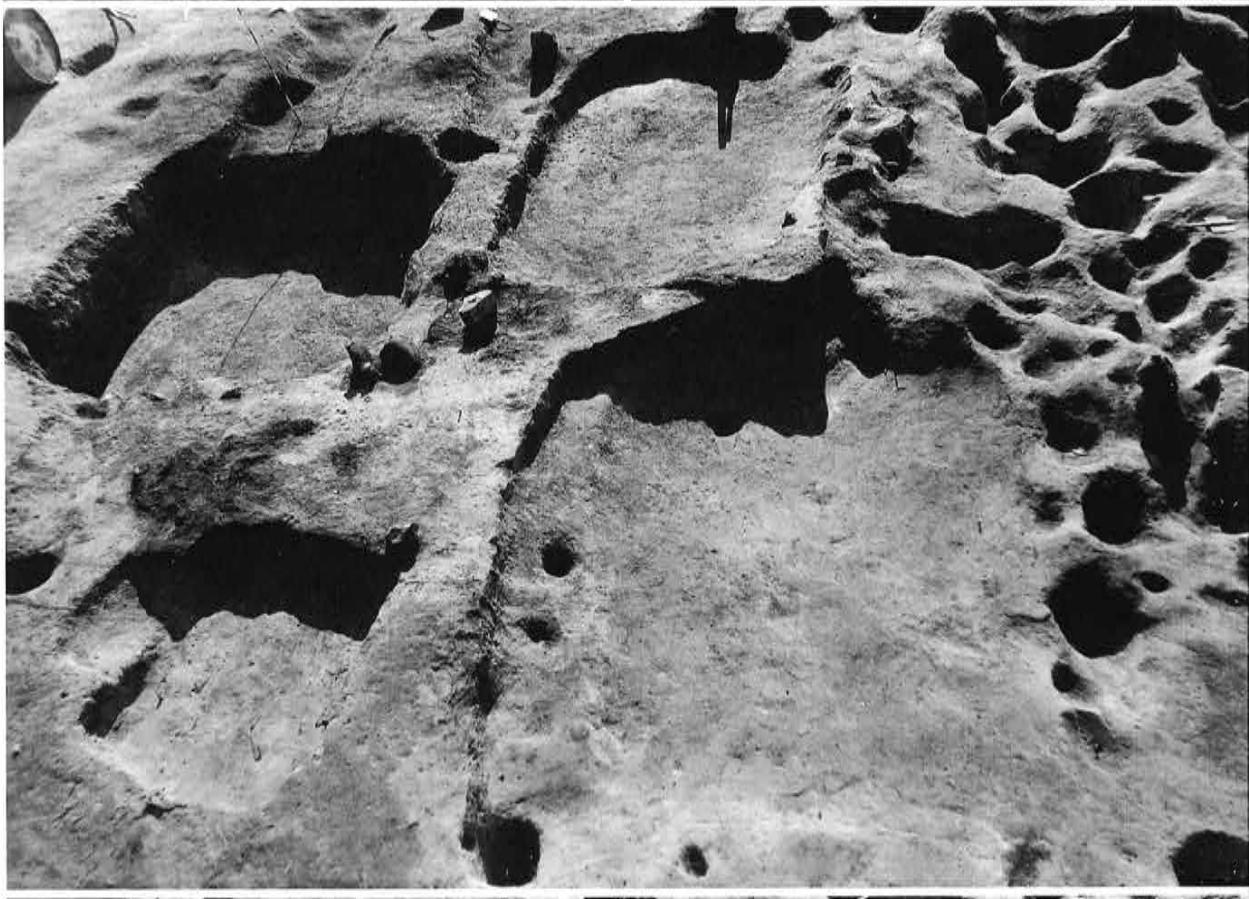
9　D27号土坑

1 D29号土坑

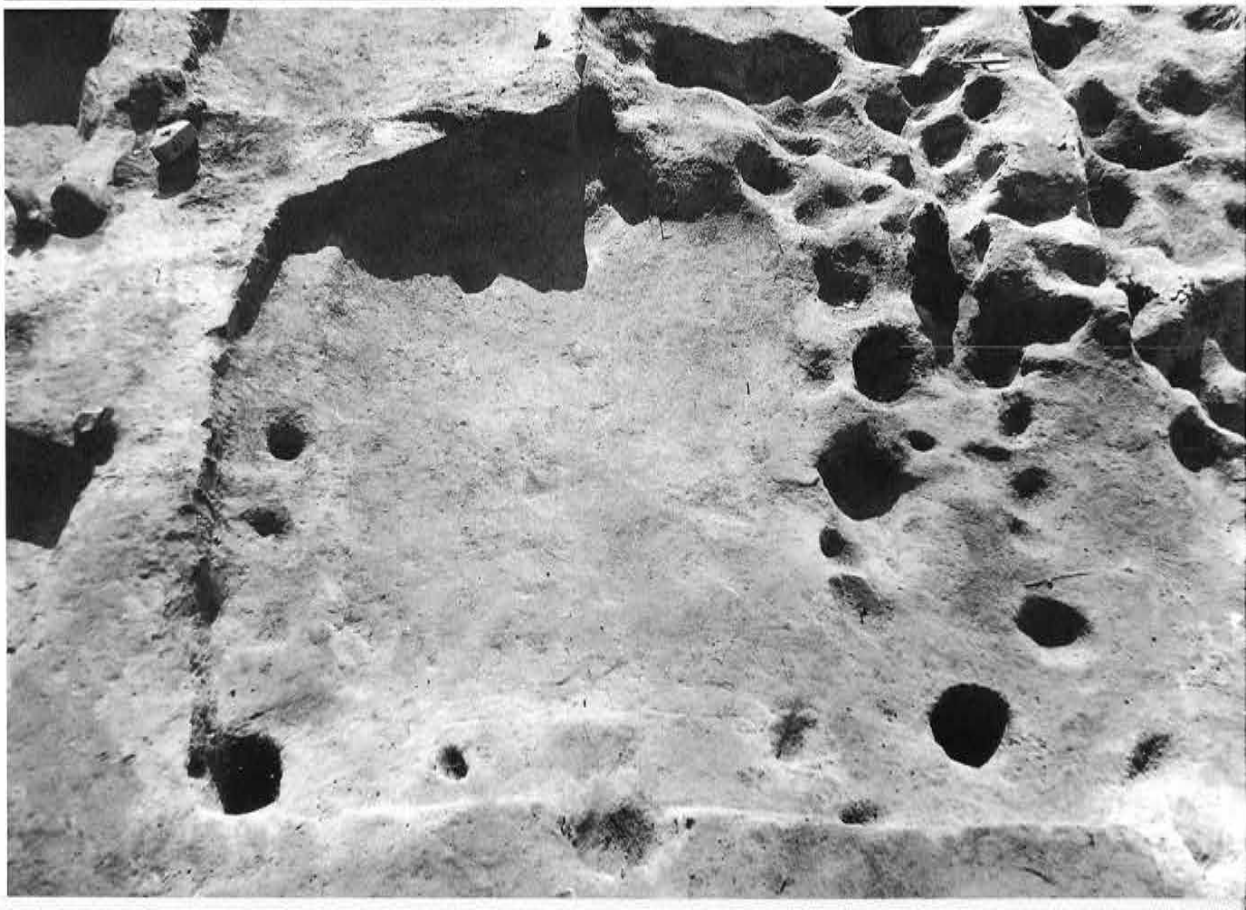
2 D30号土坑



3 D31号土坑
周辺



4 D31号土坑



1　D33号土坑

2　D37号土坑

3　D38号土坑

4　D53号土坑

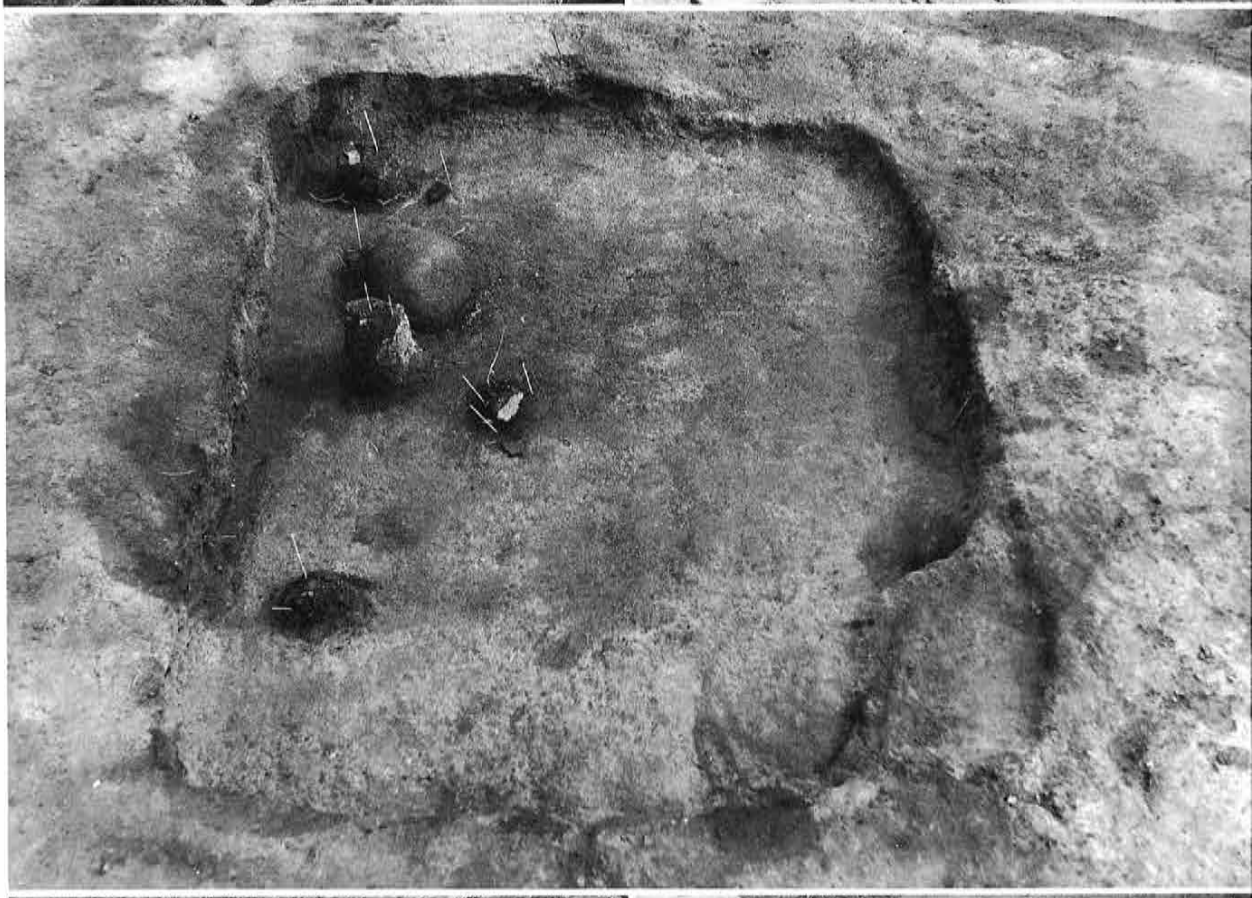
5　D54号土坑

6　D55号土坑

1 D55号土坑

2 D56号土坑

3 D56号土坑

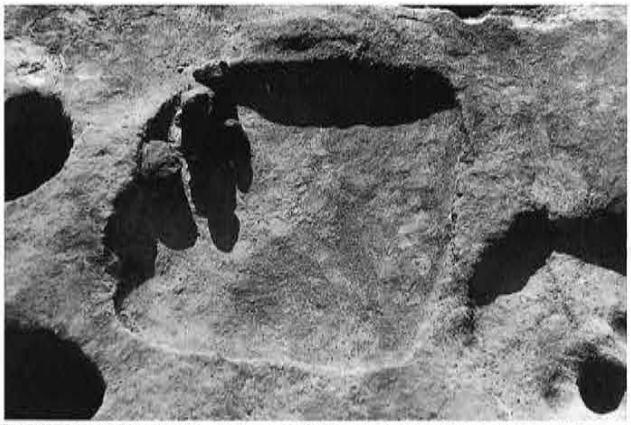


4 D59号土坑

5 D60号土坑

6 D65号土坑

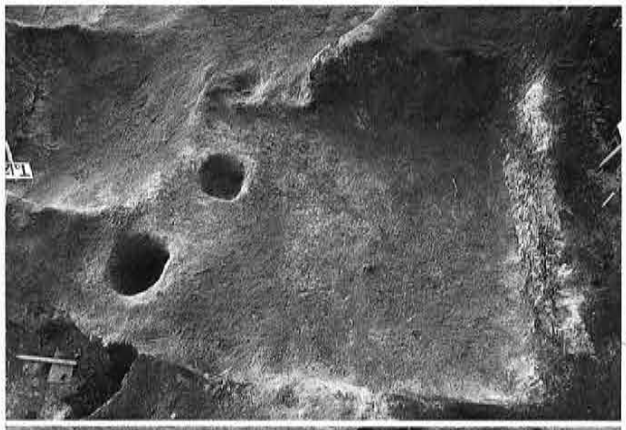
7 D68号土坑



1 D69号土坑

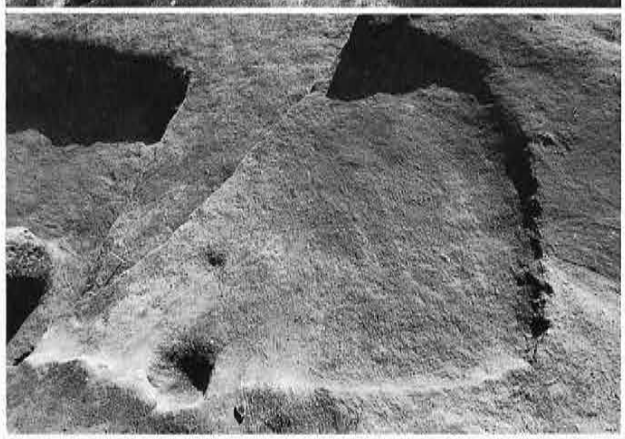
2 D70号土坑

3 D72号土坑



4 D77号土坑

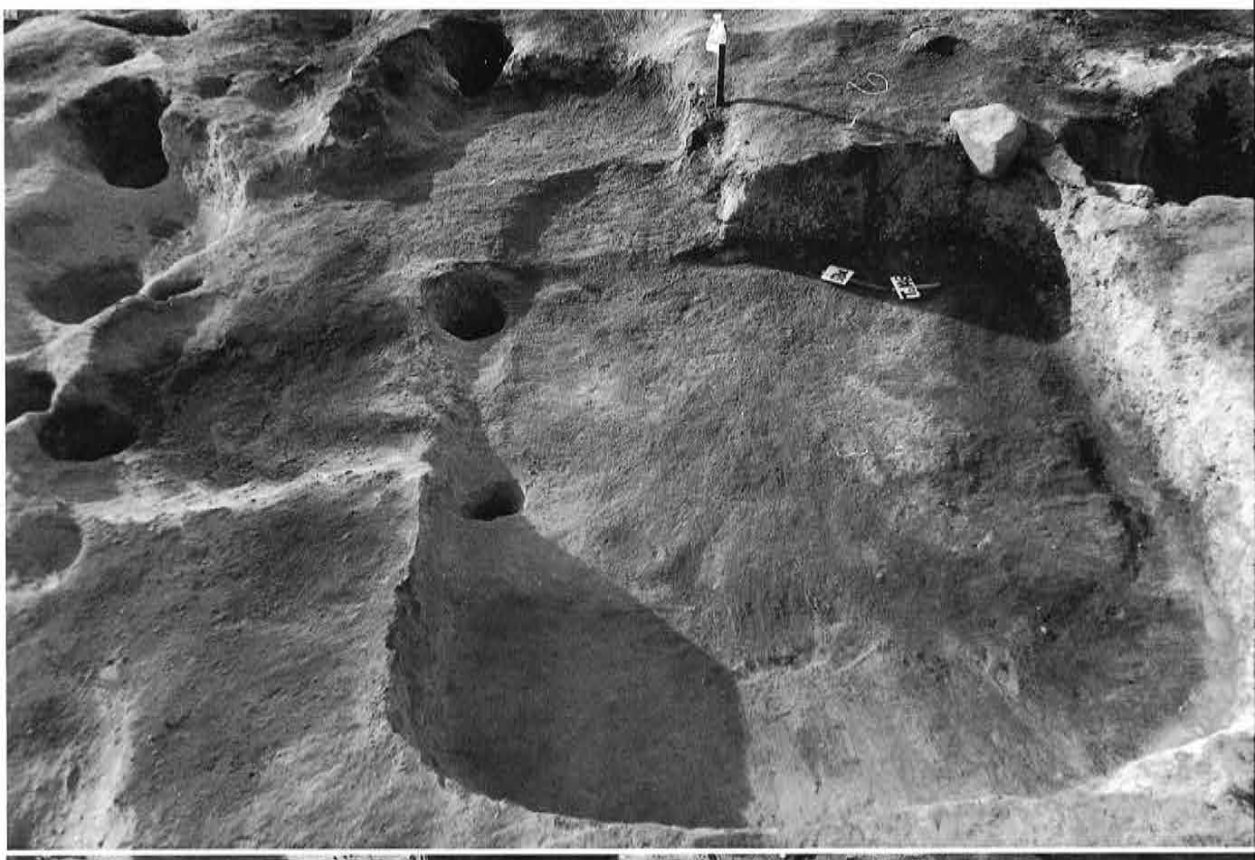
5 D79号土坑



6 D80号土坑

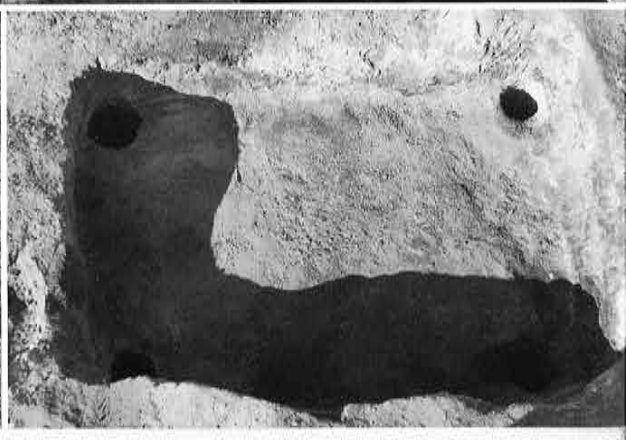
7 D82号土坑

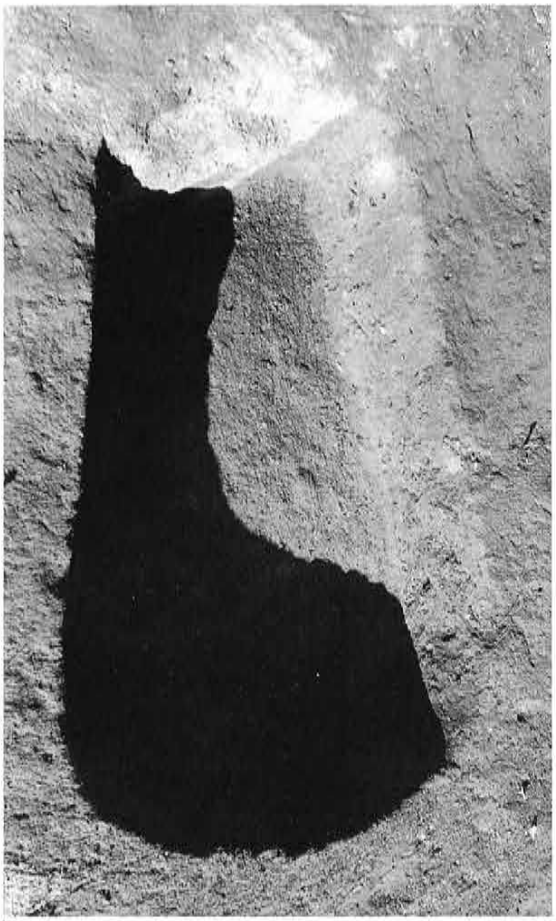
1　D82号土坑

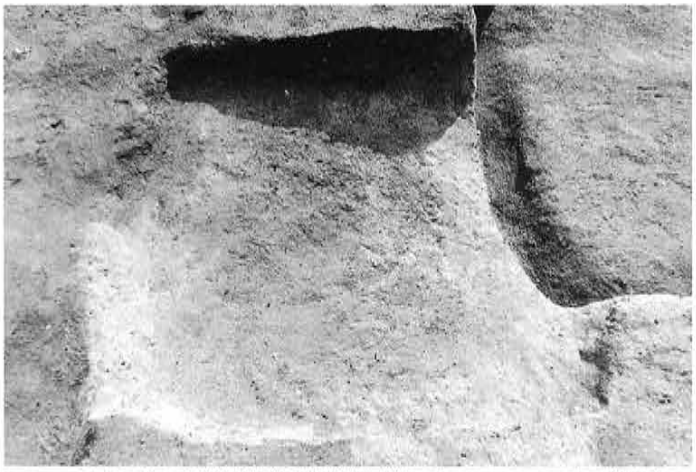


2　D84号土坑

3・4
D87号土坑

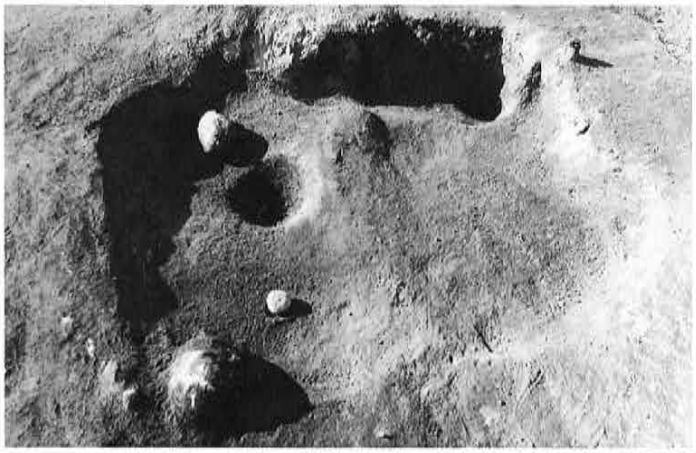






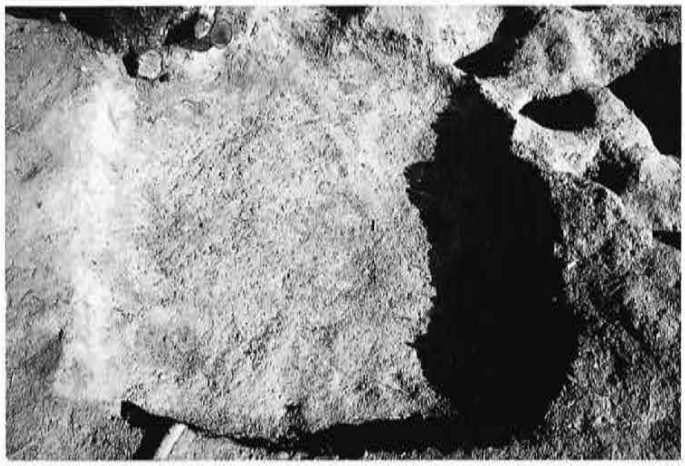
1 D99号土坑

2 D96号土坑



3 D105号土坑

4 D106号土坑

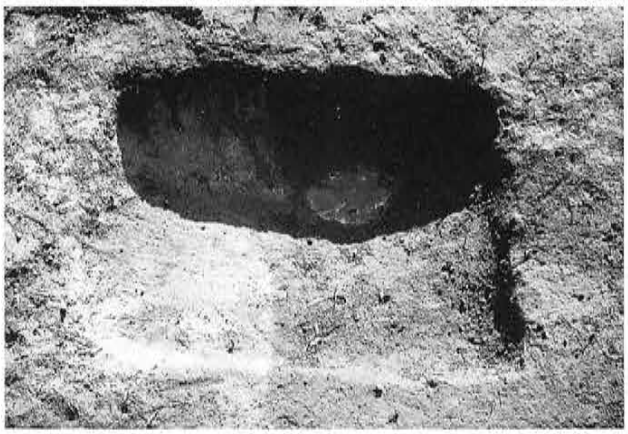


5 D109号土坑

6 D110号土坑

1 D111号土坑
2 D112号土坑

3 D113号土坑
4 D120号土坑



5 D133号土坑
6 D134号土坑

7 D136号土坑
8 D137号土坑

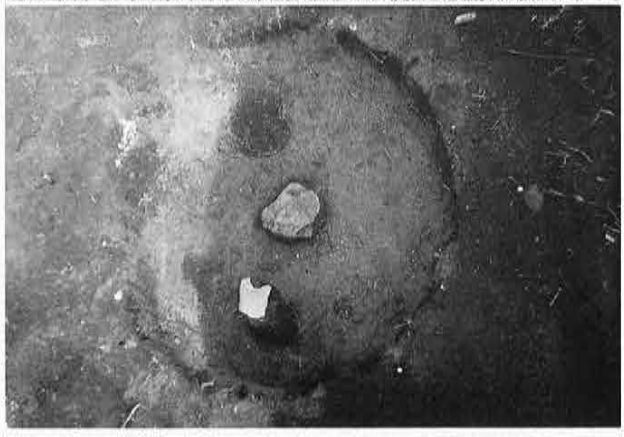
9 D138号土坑
10 D140号土坑

1　D142号土坑
2　D144号土坑

3　D145号土坑
4　D147号土坑

5　D150号土坑
6　D152号土坑

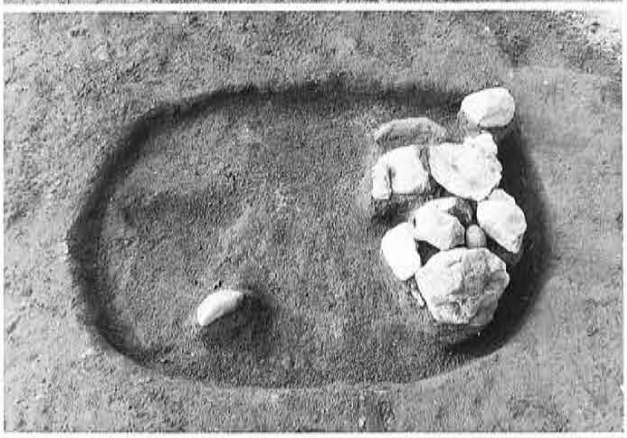
7　D153号土坑
8　D155号土坑

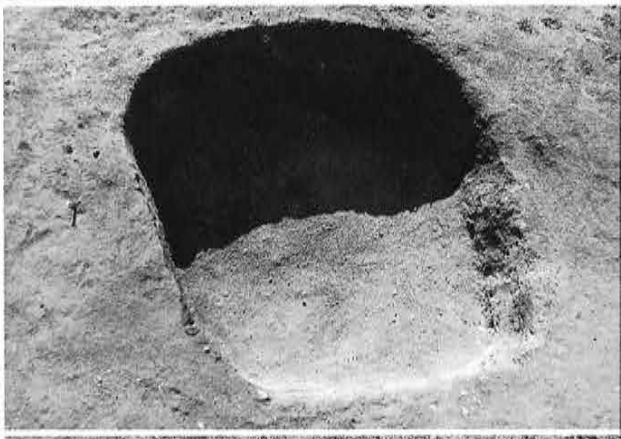


9　D160号土坑
10　D161号土坑

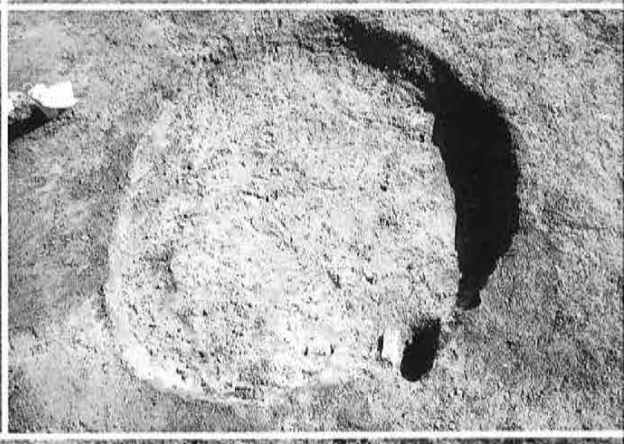
1　D162号土坑
2　D165号土坑

3　D166号土坑
4　D169号土坑





5　D175号土坑
6　D178号土坑

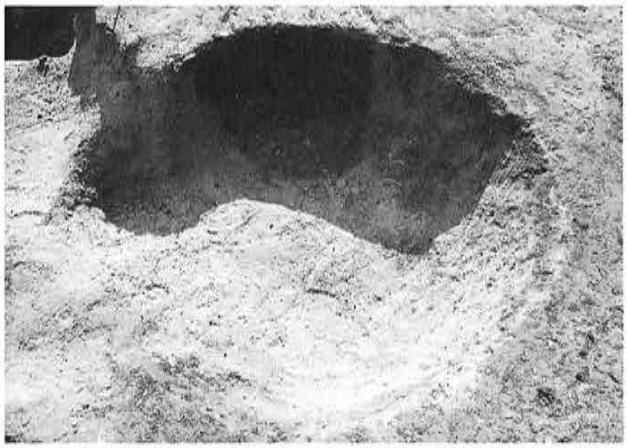


7　D180号土坑

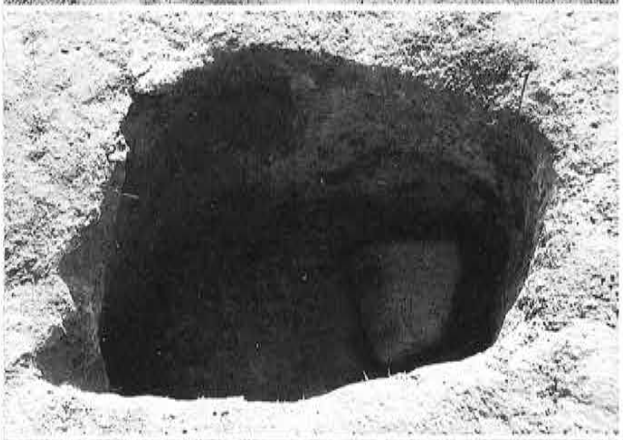
1 D180号土坑

2 D189号土坑

3 D190号土坑

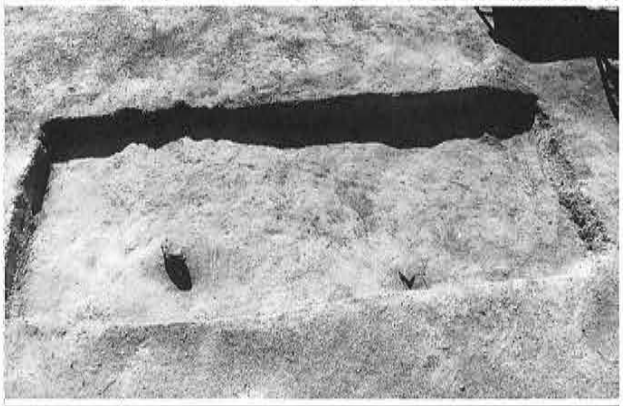


4 D193号土坑

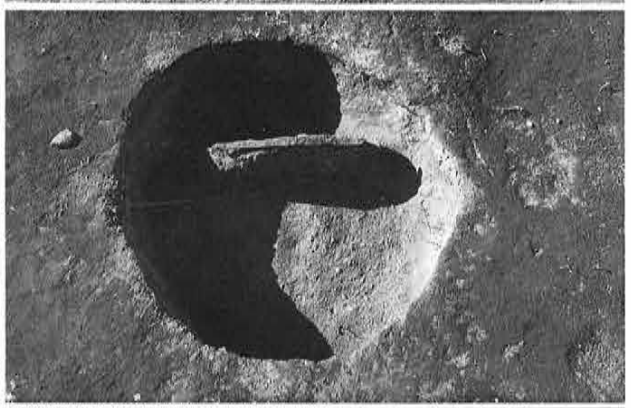


5 D199号土坑

6 D213号土坑

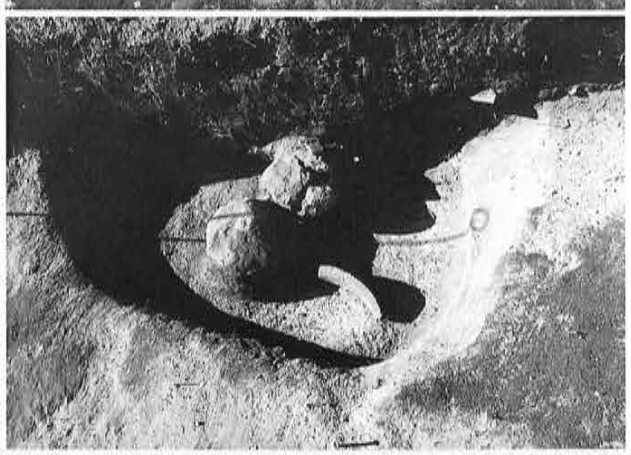


7 D216号土坑



8 D237号土坑

9 D238号土坑



10 D243号土坑

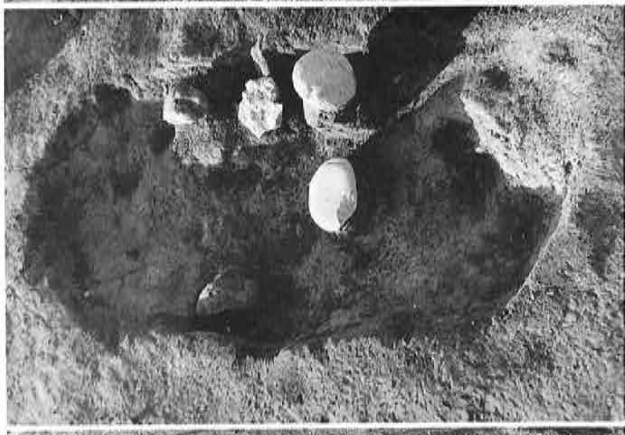
1 D250号土坑

2 D240号土坑

3 D253号土坑

4 D254号土坑

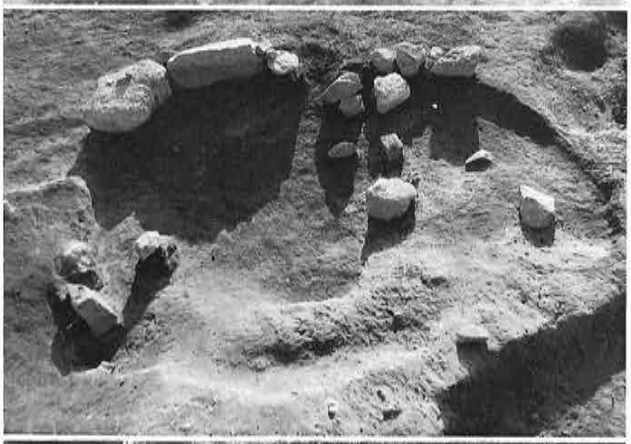
5 D255号土坑



6 D256号土坑

7 D257号土坑

1　D259号土坑
2　D260号土坑



3　D261号土坑
4　D262号土坑

5　D266号土坑
6　D268号土坑

7　D270号土坑
8　D271号土坑

9　D275号土坑
10　D280号土坑

1　ＭＩ号溝状遺構
（南より）

2　ＭＩ号溝状遺構
（北より）

1～14
大井城跡（黒岩城跡）
出土土師質土器

355-1

355-2

355-3

355-5

355-6

355-7

355-8

355-9

356-10

356-12

356-13

356-14

356-15

357-16

	挿図番号	出土遺構
1	355-1	Ta 4
2	355-2	Ta 4
3	355-3	Ta 8
4	355-5	Ta 12
5	355-6	Ta 18
6	355-7	Ta 19
7	355-8	Ta 21
8	355-9	Ta 23
9	356-10	Ta 23
10	356-12	Ta 26
11	356-13	Ta 28
12	356-14	Ta 32
13	356-15	Ta 32
14	357-16	Ta 35

1	2
3	4
5	6
7	8
9	10
11	12
13	14

以下各図版同順

1～14
大井城跡(黒岩城跡)
出土土師質土器

357-17

357-19

357-20

357-22

357-23

357-24

357-25

357-26

357-27

357-28

357-29

358-31

358-32

358-33

	挿図番号	出土遺構
1	357-17	Ta 36
2	357-19	Ta 39
3	357-20	Ta 39
4	357-22	Ta 40
5	357-23	Ta 17
6	357-24	Ta 42
7	357-25	Ta 44
8	357-26	Ta 43
9	357-27	Ta 49
10	357-28	(Ta 49)
11	357-29	H 13
12	358-31	D 11
13	358-32	D 11
14	358-33	D 13

1～14
大井城跡(黒岩城跡)
出土土師質土器

358-34

358-37

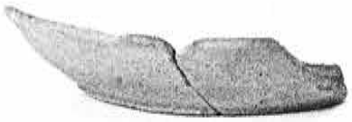
358-39

358-40

358-41

358-42

358-44


358-46

359-47

359-48

359-49

359-51

359-53

359-54

	挿図番号	出土遺構
1	358-34	D 13
2	358-37	D 36
3	358-39	D 51
4	358-40	D 61
5	358-41	D 61
6	358-42	D 68
7	358-44	D 74
8	358-46	D 84
9	359-47	D 136
10	359-48	D 140
11	359-49	D 115
12	359-51	D 125
13	359-53	D 185
14	359-54	D 186

1～14
大井城跡(黒岩城跡)
出土土師質土器

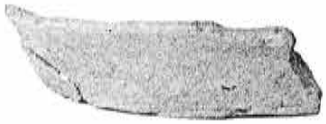
359-55

359-56

359-58

359-60

359-61


359-62

360-63

360-65

360-66

360-67

360-68

360-69

360-70

360-71

	挿図番号	出土遺構 出土地点
1	359-55	D188
2	359-56	D191
3	359-58	D232
4	359-60	D262
5	359-61	う-9G
6	359-62	う-13G
7	360-63	い-10G
8	360-65	え-7G
9	360-66	え-10G
10	360-67	え-11G
11	360-68	え-11G
12	360-69	お-10G
13	360-70	お-12G
14	360-71	き-6G

1～15
大井城跡（黒岩城跡）
出土土師質土器

360-73

360-74

360-75

360-76

360-77

360-78

360-79

360-80

360-81

361-84

361-85

361-87

361-86

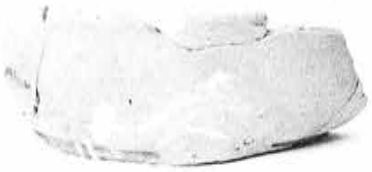
361-88

362-90

	挿図番号	出土遺構 出土地点
1	360-73	く-3 G
2	360-74	き-5G・く-5G
3	360-75	け-6 G
4	360-76	き-9 G
5	360-77	し-5 G
6	360-78	表採
7	360-79	表採
8	360-80	表採
9	360-81	表採
10	361-84	H 8
11	361-85	表採
12	361-87	え-10 G
13	361-86	き-2 G
14	361-88	し-8 G
15	362-90	表採

1～3
大井城跡(黒岩城跡)
出土土師質土器

362-89



362-91

362-92

4～6
大井城跡(黒岩城跡)
出土内耳土器

355-3

355-1

	挿図番号	出土遺構 出土地点
1	362-89	表採
2	362-91	う-11G
3	362-92	Ta 9
4	355-3	Ta 11
5	355-1	Ta 8
6	356-9	Ta 36

356-9

常滑甕 14C

Ta 13

（か-5）常滑甕 15C

（か-5）常滑甕 15C

常滑甕 14C

（Ta 26）

（Ta 23）常滑甕 16C

（か-6）常滑甕 15C

（Ta 23）常滑甕 16C

（け-3）常滑甕 16C

（け-3）常滑甕 16C

（お-3）常滑甕 16C

常 滑 系 陶 器

(Ta 11)
中津川褻 14C
(Ta 11)
中津川褻 14C
(Ta 11)
中津川褻 14C
(Ta 23)
中津川褻 14C
(Ta 14)
中津川褻 14C
(Ta 14)
中津川褻 14C
(D150)
中津川褻 14C
(Ta 14) 中津川褻
14C
(Ta 14)
中津川褻 14C
(え-15)
中津川片口鉢 14C
(お-7)
美濃鉄釉広口壺 16C
(Ta 12)
美濃鉄釉
天目茶碗 16C
(Ta 18)
美濃鉄釉
天目茶碗 16C
(Ta 20)
美濃鉄釉天目茶碗16C
(Ta 22)
美濃鉄釉天目茶碗16C
(Ta 47)
美濃鉄釉天目茶碗 16C
(D84)
美濃鉄釉天目茶碗16C
D86
美濃鉄釉
天目茶碗 16C
D105
美濃鉄釉
天目茶碗 16C
(え-13)
美濃鉄釉折縁皿 16C
(か-6)
美濃鉄釉瓶
16C
(か-6)
美濃鉄釉瓶
16C
(か-4)
美濃鉄釉瓶
16C
(Ta 27)
美濃鉄釉
茶入れ 16C
(く-8)
美濃鉄釉すり鉢 16C
(Ta 26)
美濃鉄釉徳利 16C
(Ta 20)
美濃鉄釉徳利
16C
(Ta 39)
美濃鉄釉徳利
16C
(き-4)
美濃鉄釉すり鉢 16C

中 津 川 ・ 美 濃 系 陶 器

(Ta 39)
美濃灰釉碗
16C前
(D 7)
美濃灰釉碗
16C前
(D74)
美濃灰釉碗 16C前
(D236)
美濃灰釉碗
16C前
(D 2)
美濃灰釉碗
16C前
(D234)
美濃灰釉碗 16C前
(か-11)
美濃灰釉碗
16C後
(お-5・6)
美濃灰釉碗 16C後
(お-9)
美濃灰釉碗
16C後
(Ta 6)
美濃灰釉
小皿 16C前
(Ta 18)
美濃灰釉小皿
16C前
(D60)
美濃灰釉小皿
16C前
(こ-8) 16C前
美濃灰釉小皿
(D262)
美濃灰釉小皿 16C前
(D74)
美濃灰釉
小皿 16C前
(D76)
美濃灰釉小皿
16C前
(D85)
美濃灰釉小皿
16C前
(し-4) 16C前
美濃灰釉小皿
(Ta 5)
15C後
瀬戸灰釉折縁鉢
(お-3) 15C
瀬戸灰釉片口壺
(き-5) 15C
瀬戸灰釉おろし皿
(お-3) 15C
瀬戸灰釉瓶子
(D41) 15C後
瀬戸灰釉折縁鉢
(D40)
15C後
瀬戸灰釉折縁鉢
(き-5)
瀬戸灰釉小鉢
15C
(お-11)
瀬戸灰釉小鉢 15C
(し-8) 15C
瀬戸灰釉小鉢
(表採) 15C
瀬戸灰釉三足盤
(い-12)
瀬戸灰釉
三足盤 15C
(お-7) 15C
瀬戸灰釉三足盤
(お-10)
15C
瀬戸灰釉三足盤
(く-6)
瀬戸灰釉三足盤 15C
(け-6) 15C
瀬戸灰釉三足盤
(D 7)
瀬戸灰釉片口鉢 14C前
(Ta 20) 16C
備前すり鉢
(け-6)
美濃山花碗
14C
(え-9)
美濃山花碗
14C
(え-11)
美濃山花碗
14C
(き-5)
美濃山花碗
14C
(き-6)
美濃山花碗
14C

瀬 戸 ・ 美 濃 系 陶 器

(Ta 34)
青磁碗 13C
(Ta 39)
青磁碗 13C
(D41)
青磁碗 14C
(D108)
青磁碗
14C
(D165)
青磁碗
14C
(D165)
青磁碗
14C
(D206)
青磁碗
14C
(D126)
青磁碗 14C
(え-9)
青磁碗 14C
(Ta 1)
青磁碗 15C
(D13)
青磁碗 15C
(D75)
青磁碗 15C
(D166)
青磁碗 15C
(D275)
青磁碗 15C
(Ta 1)
青磁碗 16C
(D84)
青磁碗 16C
(D253)
青磁碗 16C
(か-5)
青磁皿 15C
(Ta 43)
青白磁瓶子 13C
(Ta 28)
白磁皿 15C
(Ta 11)
白磁皿 16C
(Ta 11)
白磁皿 16C
(Ta 19)
白磁皿 16C
(Ta 36)
白磁皿 16C
(D14)
白磁皿 16C
(け-5)
白磁皿 16C
(Ta 39)
白磁壺 14C
(Ta 1)
白磁壺 14C
(く-5)
白磁壺 15C
(か-5)
白磁壺 15C
(け-5)
白磁壺 15C
(Ta 1)
白磁染付 15C

舶 載 磁 器

1～10
大井城跡（黒岩城跡）
出土石臼（粉挽臼）

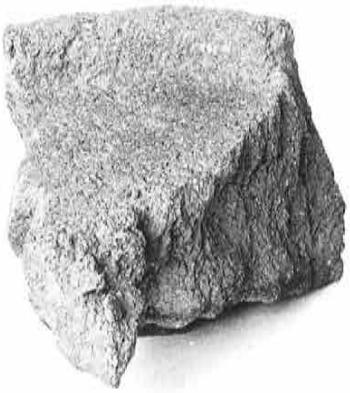
387-21

379-8

382-14

391-26

375-1



391-26

376-2

380-9

386-20

393-30

	挿図番号	出土遺構 出土地点
1	387-21	え-9 G
2	379-8	Ta 16
3	382-14	M 1
4	391-26	Ta 46
5	375-1	D 265
6	391-26	Ta 46
7	376-2	D 84
8	380-9	D 84
9	386-20	Ta 31
10	393-30	表採

1～10
大井城跡(黒岩城跡)
出土石臼(粉挽臼)

395-34

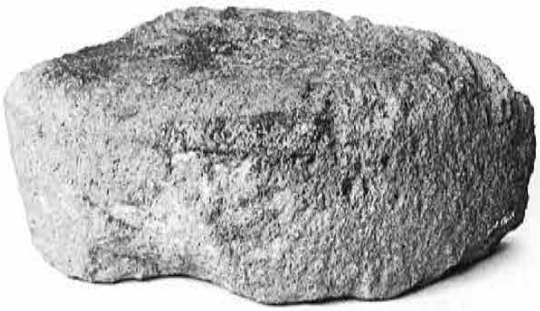
395-34

386-20

395-33

	挿図番号	出土遺構 出土地点
1	395-34	Ta 39
2	395-34	Ta 39
3	386-20	Ta 31
4	395-33	Ta 8
5	388-23	D 180
6	399-42	Ta 30
7	399-42	Ta 30
8	398-40	D 112
9	385-18	え-12G
10	400-46	Ta 42

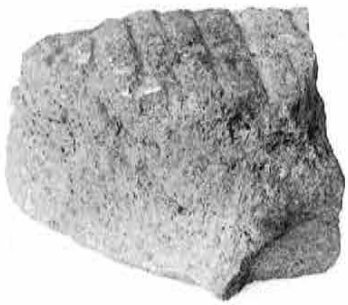
388-23


399-42

399-42

398-40

385-18

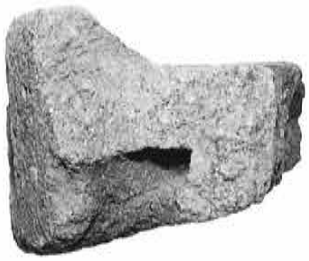

400-46

1～10
大井城跡(黒岩城跡)
出土石臼(粉挽臼)

405-57

400-45

401-47


395-34

403-51

392-27

397-38

400-45

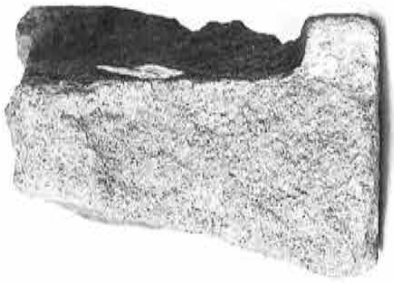
398-40

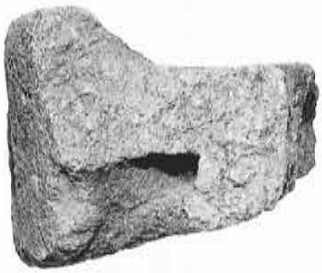
403-51

	挿図番号	出土遺構 出土地点
1	405-57	か-10G
2	400-45	D29
3	401-47	Ta25
4	395-34	Ta39
5	403-51	か・き-10・11G
6	392-27	D236
7	397-38	Ta18
8	400-45	D29
9	398-40	D112
10	403-51	か・き-10・11G

1～10
大井城跡(黒岩城跡)
出土石臼(粉挽臼)

384-17


382-13


395-34

377-5

	挿図番号	出土遺構 出土地点
1	384-17	き・く-10G
2	382-13	D 236
3	395-34	Ta 39
4	377-5	か・き-11G
5	380-9	D 84
6	379-8	Ta 16
7	379-8	Ta 16
8	379-8	Ta 16
9	396-35	か-3 G
10	378-7	D 84

380-9

379-8

379-8

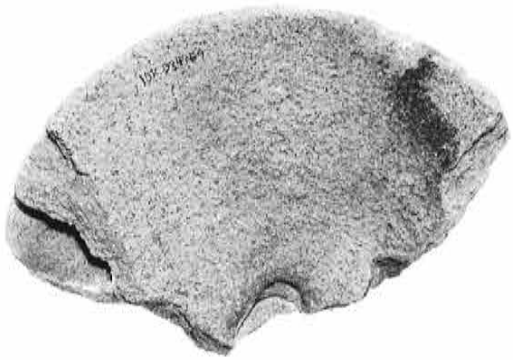
380-8

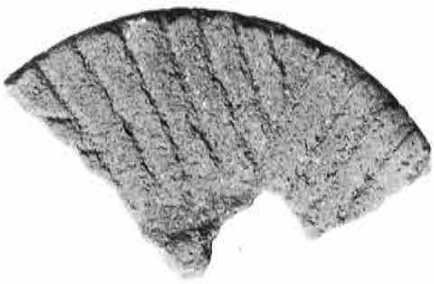
396-35

378-7

1～9
大井城跡(黒岩城跡)
出土石臼(粉挽臼)

377-4


407-61

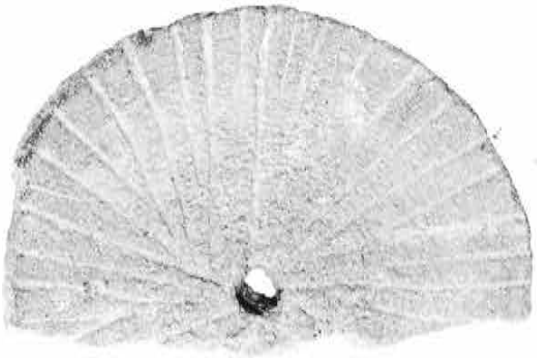

379-8

399-41

380-9

383-15

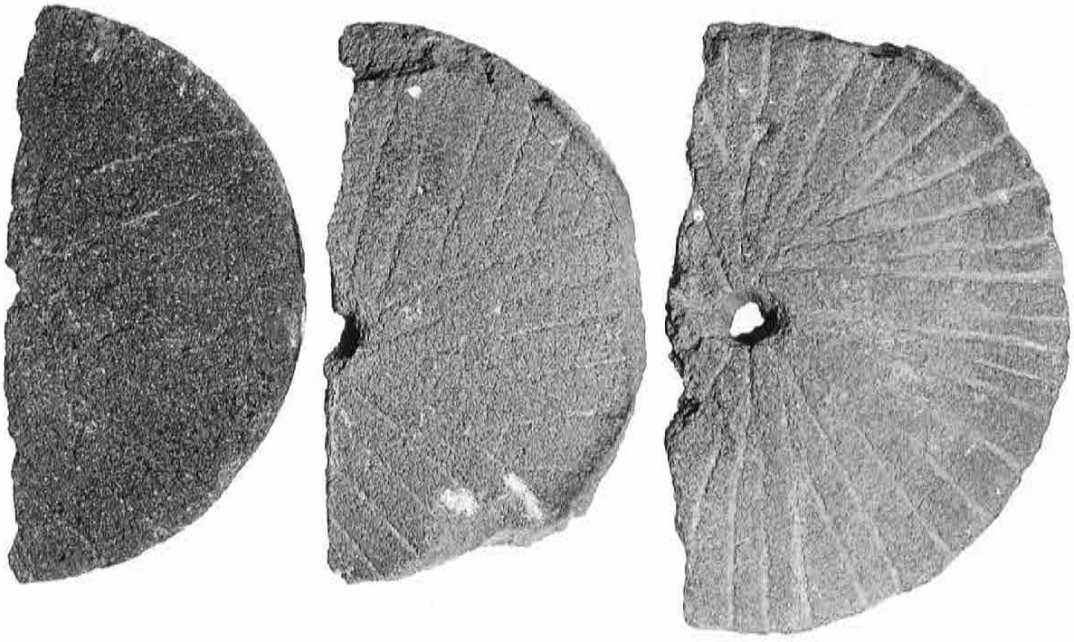
401-47


403-51

395-34

	挿図番号	出土遺構 出土地点
1	377-4	D29
2	407-61	D84
3	379-8	Ta16
4	399-41	D278
5	380-9	D84
6	383-15	D72
7	401-47	Ta25
8	403-51	か・き-10・11G
9	395-34	Ta39

1～6
大井城跡(黒岩城跡)
出土石臼(粉挽臼)



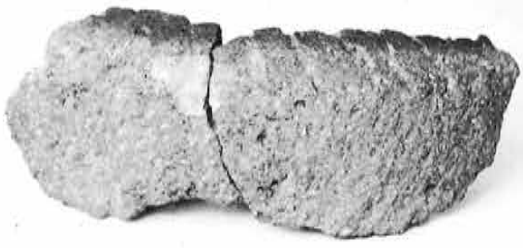
400-45　397-38　403-51

	挿図番号	出土遺構 出土地点
1	400-45	D 29
2	397-38	Ta 18
3	403-51	か・き-10・11 G
4	401-47	Ta 25
5	401-47	Ta 25
6	401-47	Ta 25
7	406-59	Ta 8
8	407-60	Ta 42
9	381-12	D 29
10	399-43	Ta 36

401-47

401-47

401-47



406-59

407-60

381-12

399-43

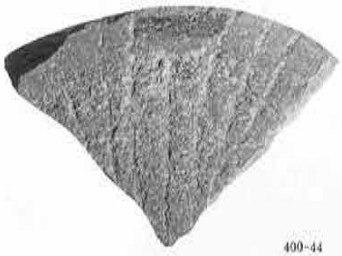
1～3
大井城跡(黒岩城跡)
出土石臼(粉挽臼)

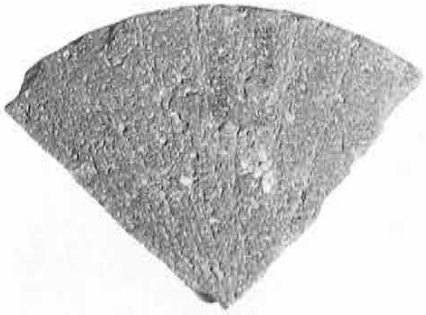
398-39

382-13

404-52

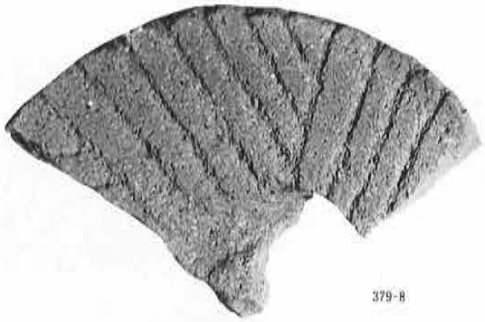
385-19


400-44

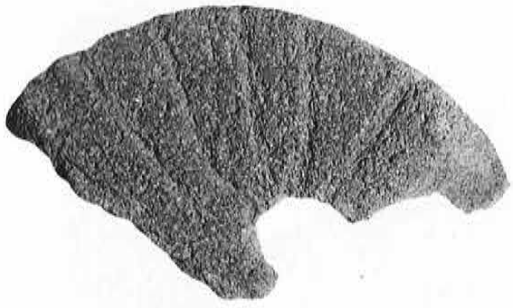

396-35

378-7

402-49


379-8

377-4


380-9

399-41

	挿図番号	出土遺構 出土地点
1	398-39	Ta 42
2	382-13	D236
3	404-52	か-8 G
4	385-19	D84
5	400-44	M 1
6	396-35	か-3 G
7	378-7	D84
8	402-49	D236
9	379-8	Ta 16
10	377-4	D29
11	380-9	D84
12	399-41	D278

1～10
大井城跡(黒岩城跡)
出土石臼(茶臼)

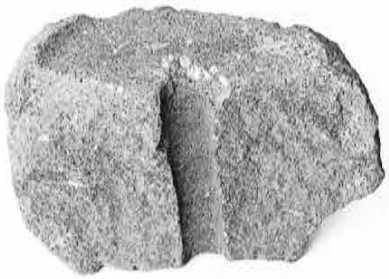
409-2

409-2

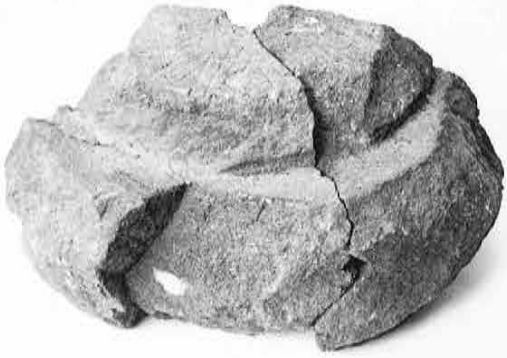
409-2

410-4

	挿図番号	出土遺構 出土地点
1	409-2	Ta 20
2	409-2	Ta 20
3	409-2	Ta 20
4	410-4	Ta 14
5	412-9	D 29
6	415-13	Ta 42
7	412-9	D 29
8	417-17	え-13G
9	416-15	か・き-11G
10	416-14	D 236



412-9



415-13

412-9

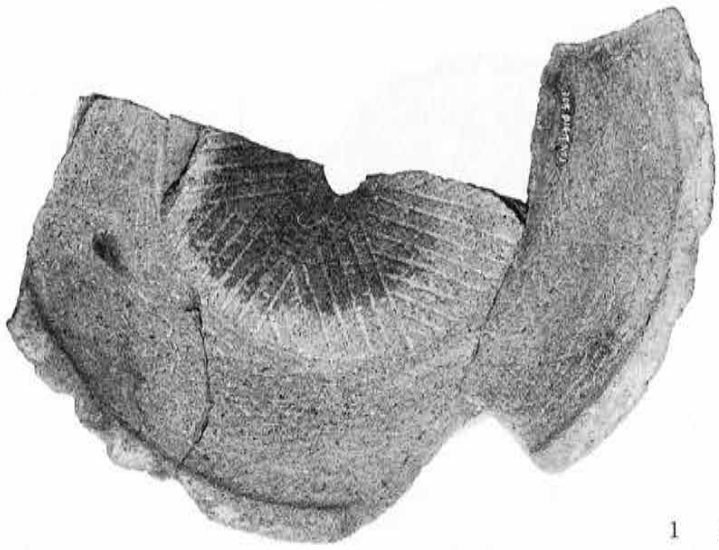
417-17

416-15

416-14

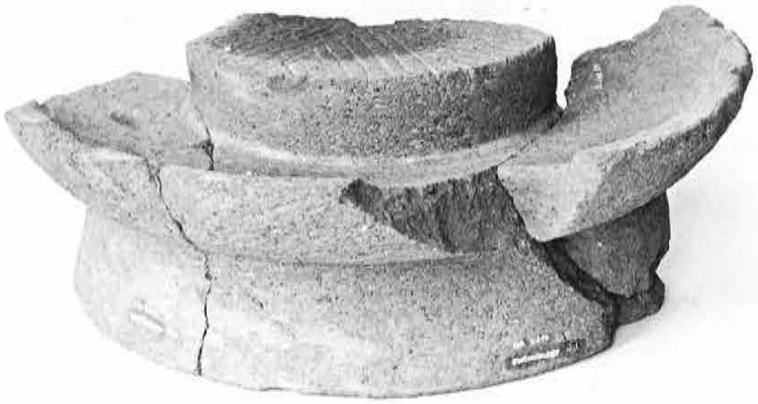
1～8
大井城跡（黒岩城跡）
出土石臼（茶臼）

5 420-21



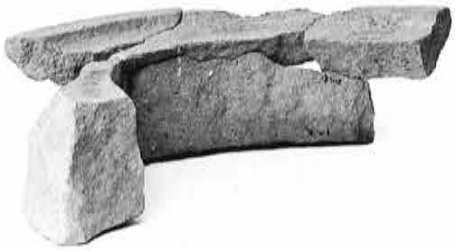
1 414-12

6 器形の重むもの



2 414-12

7 器形の重むもの



3 419-20

8 417-16

4 409-2

	挿図番号	出土遺構 出土地点
1	414-12	D240・D147
2	414-12	D240・D147
3	419-20	Ta16・D180 表採
4	409-2	Ta20
5	420-21	こ-2 G
6	器形の重むもの	
7	器形の重むもの	
8	417-16	D84

1～11
大井城跡(黒岩城跡)
出土石擂鉢

425-11

425-11

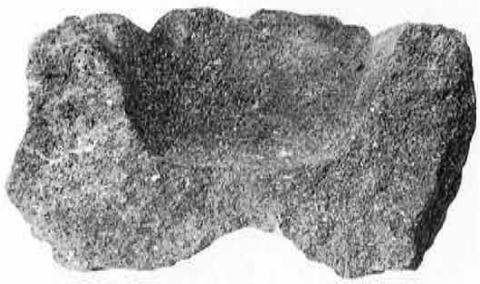
425-11

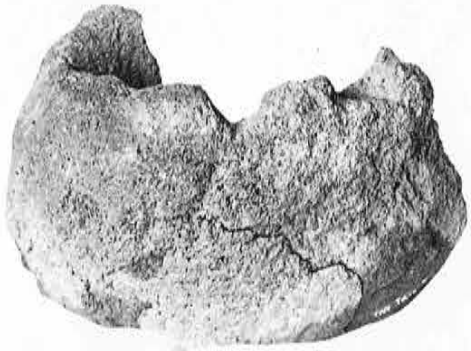
423-2

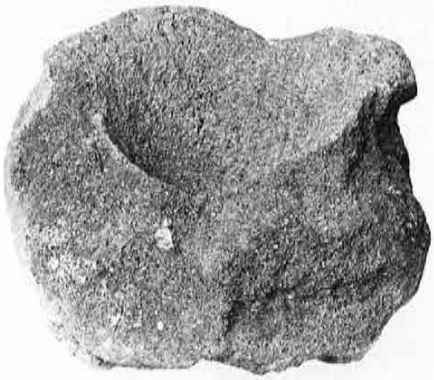
423-2

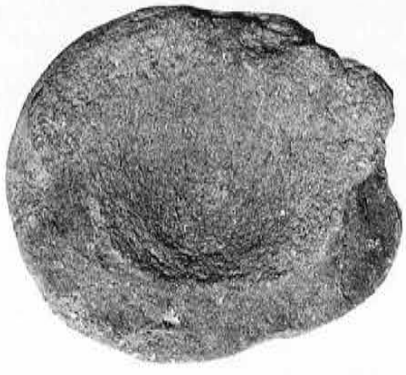
423-2

423-3


423-3


423-3


423-1

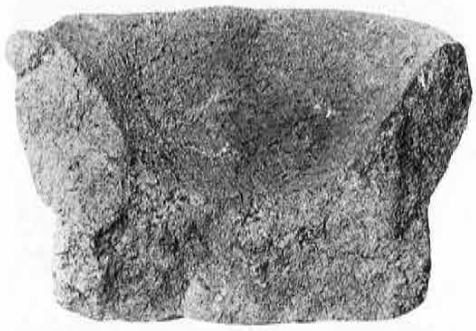

423-1

	挿図番号	出土遺構 出土地点
1	425-11	Ta 1
2	425-11	Ta 1
3	425-11	Ta 1
4	423-3	Ta 12
5	423-3	Ta 12
6	423-3	Ta 12
7	423-2	表採
8	423-2	表採
9	423-2	表採
10	423-1	Ta 42
11	423-1	Ta 42

1～9
大井城跡(黒岩城跡)
出土石擂鉢

427-16

429-23



427-16

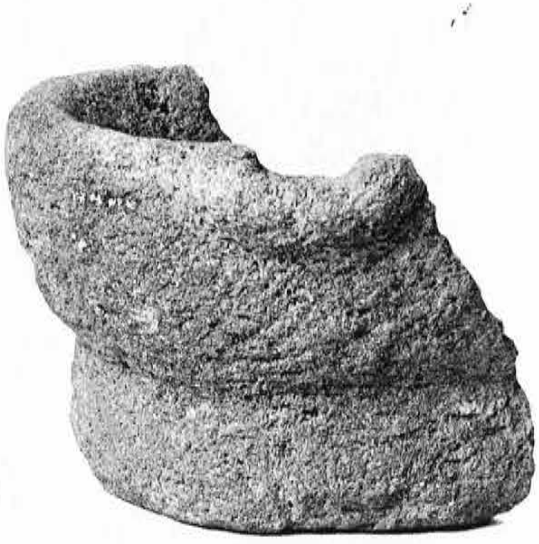
429-23

427-16

429-23

	挿図番号	出土遺構 出土地点
1	427-16	か・き・く-5・6G
2	427-16	か・き・く-5・6G
3	427-16	か・き・く-5・6G
4	429-23	き・く-10G
5	429-23	き・く-10G
6	429-23	き・く-10G
7	427-18	Ta 42
8	427-18	Ta 42
9	427-16	か・き・く-5・6G

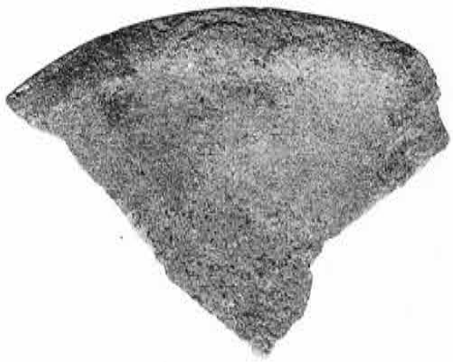
427-18



427-16

427-18

1～15
大井城跡(黒岩城跡)
出土石擂鉢


426-15

426-14

428-20

426-15

426-14

428-20

424-5

427-17

429-22

424-5

427-17

429-25

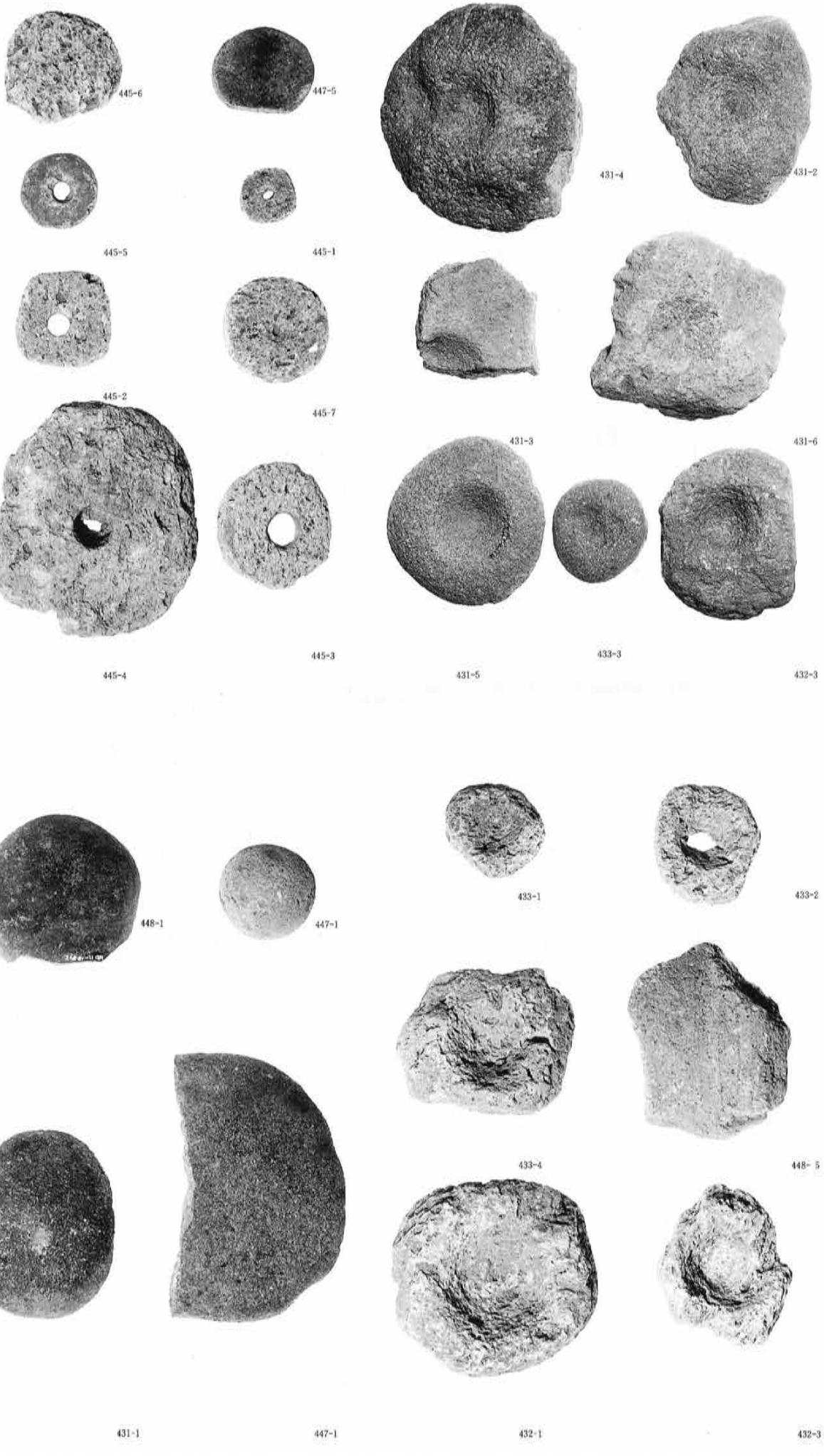
429-24

427-18

428-19

	挿図番号	出土遺構 出土地点
1	426-15	か・き・く-5・6G
2	426-15	か・き・く-5・6G
3	424-5	D124 覆土
4	424-5	D124 覆土
5	429-24	き・く-10G
6	426-14	Ta 42
7	426-14	Ta 42
8	427-17	D108
9	427-17	D108
10	427-18	Ta 42
11	428-20	Ta 52
12	428-20	Ta 52
13	429-22	D166
14	429-25	か・き-11G
15	428-19	D257

1～4
大井城跡(黒岩城跡)
出土石製品

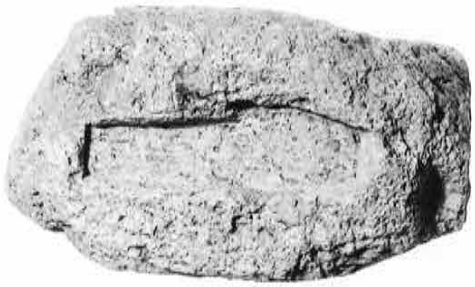


1～6
大井城跡(黒岩城跡)
出土石製品

425-4

425-5

441-4


448-6

447-4

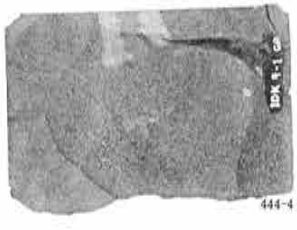
447-7

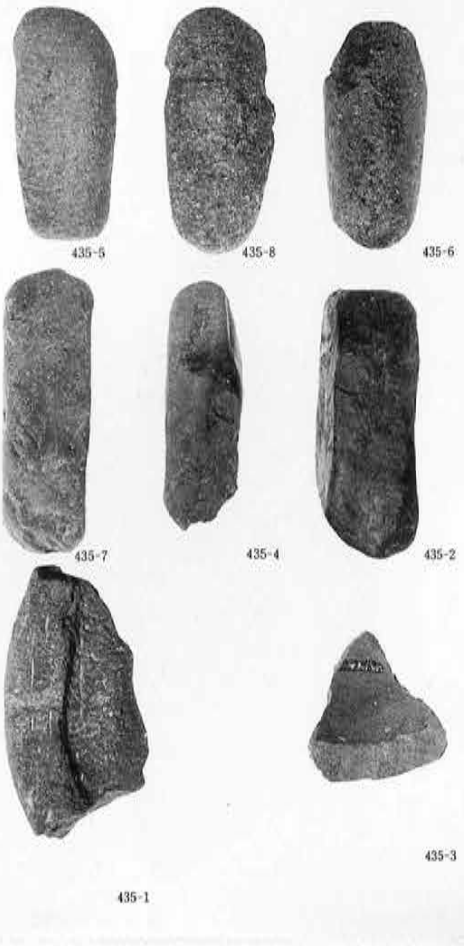
447-6

444-3

444-6

444-5


444-4


435-5
435-8
435-6
435-7
435-4
435-2
435-3
435-1

1・2
大井城跡(黒岩城跡)
出土石製品

439-4

440-2

437-8

440-5

437-4

439-5

439-1

437-6

440-4

438-1

437-2

433-3

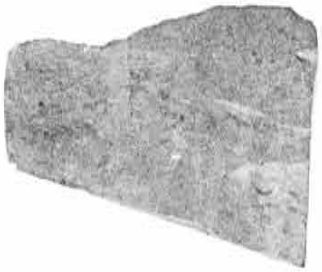
442-2

442-1

441-5

1

大井城跡(黒岩城址)
出土石製品



439-2

441-3

439-6

440-6

438-5

440-7

438-3

2

大井城跡(黒岩城跡)
出土金属製品

452-4

451-8

452-3

1・2
大井城跡(黒岩城跡)
出土金属製品

451-2

454-1

451-9

453-2

451-10

451-12

452-1

453-1

451-6

451-3

450-11

449-20

450-19

449-4

449-3

449-25

451-7

450-22

450-5

449-7

450-9

449-27

1・2
大井城跡(黒岩城跡)
出土金属製品

451-11

453-6

453-7

453-3

453-4

453-8

453-5

449-6 449-17 449-16 451-2

449-9 450-14 451-1 450-3

450-10 449-22 449-9 449-26

450-6 449-11 449-14 449-25

1～3
大井城跡(黒岩城跡)
出土金属製品

455-7

455-6

455-5

449-2

449-6

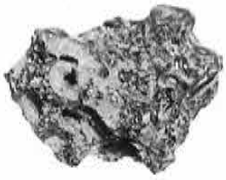
449-1

449-3

449-4

449-5

457-17


457-19

362表 105

457-6

457-9

362表 102

457-15

457-16

457-14

457-12

362表 103

362表 104

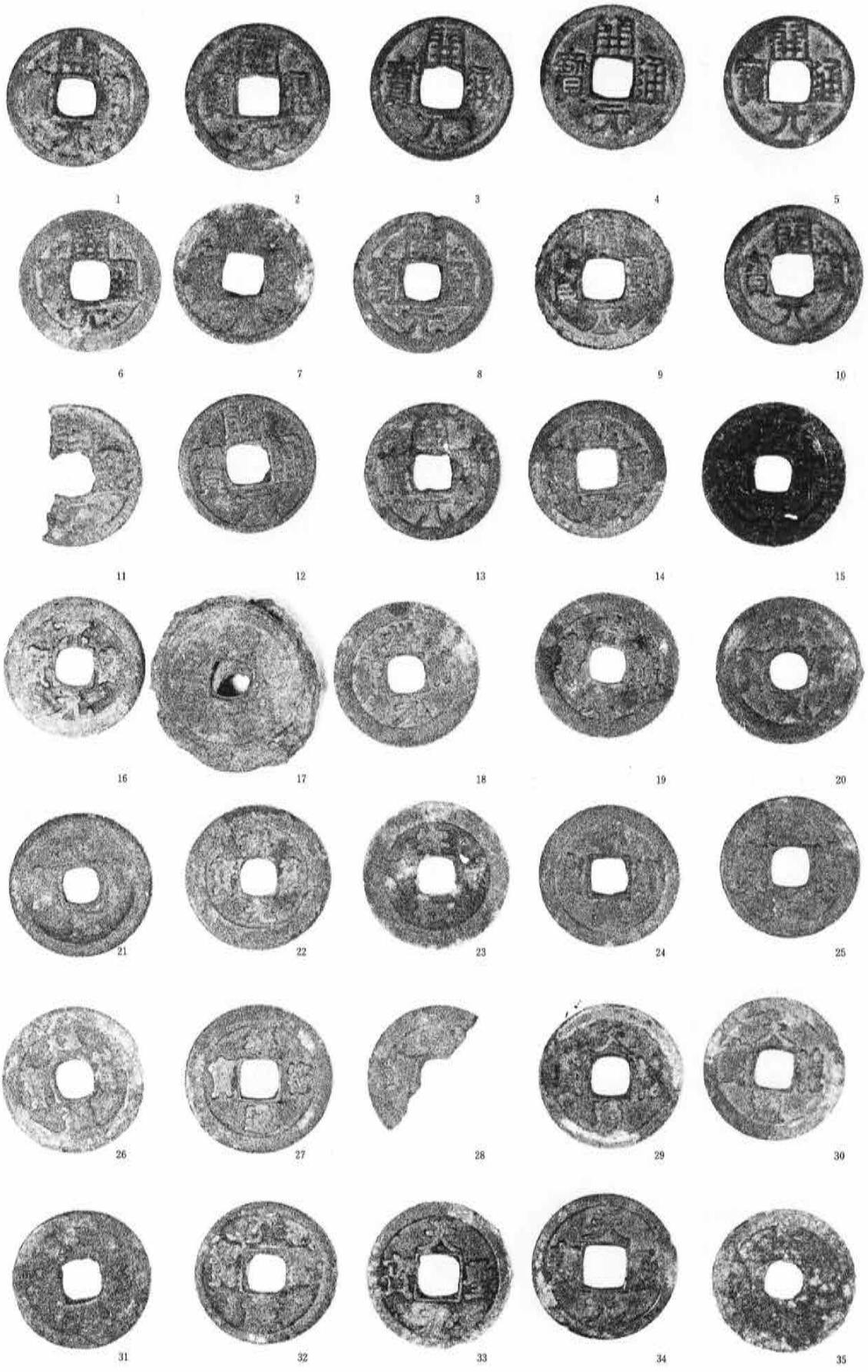
457-10

457-2

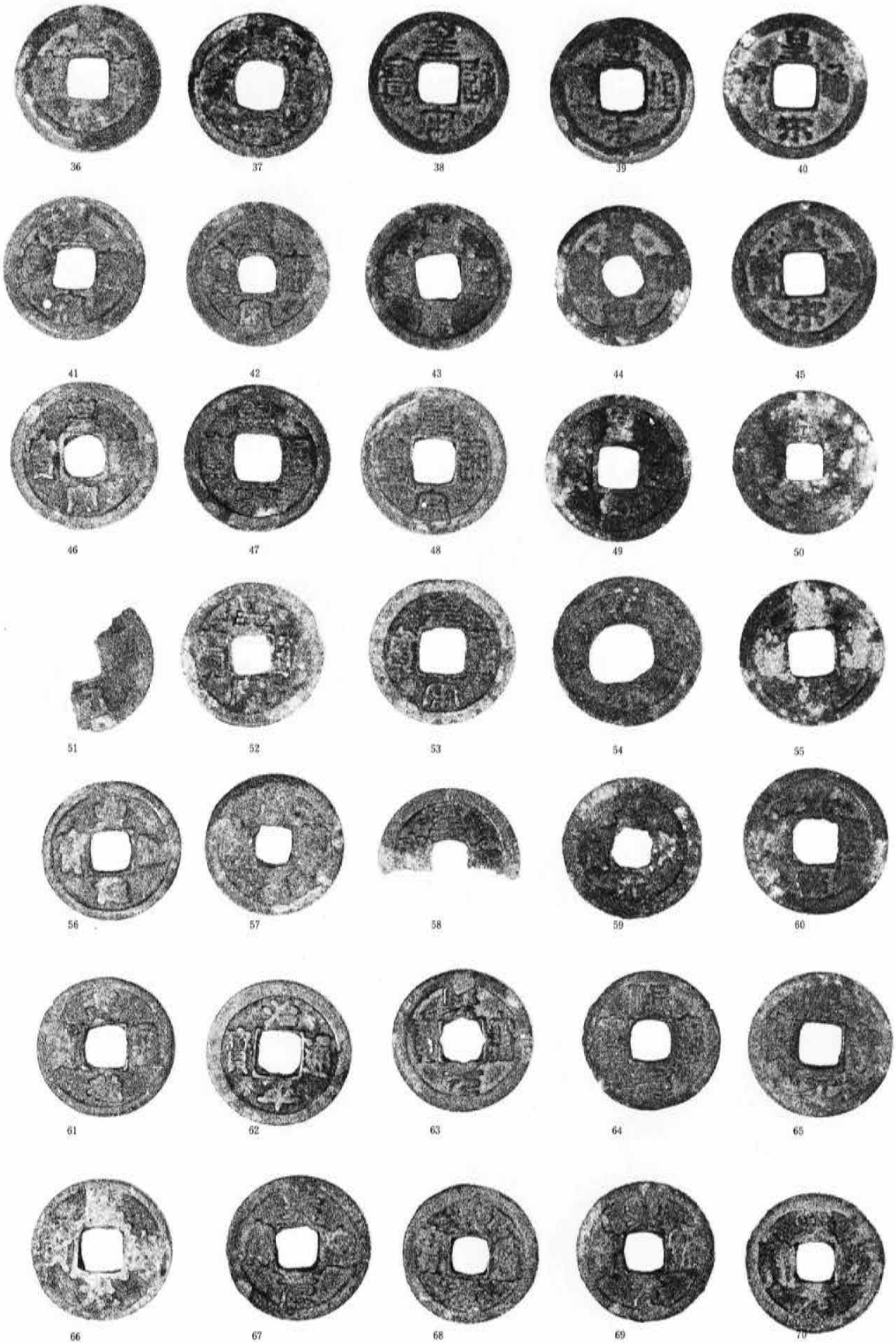
457-13

457-18

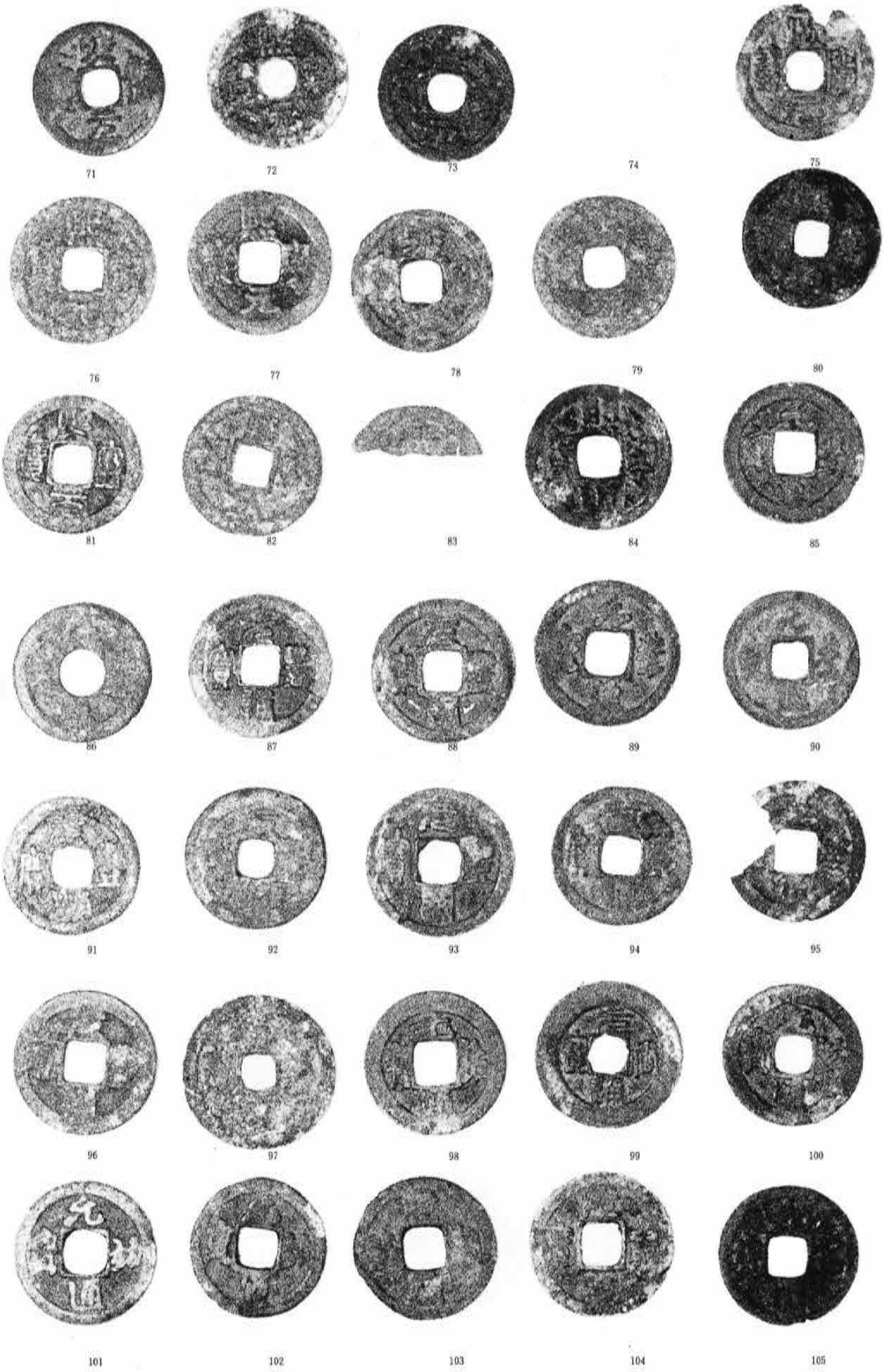
大井城跡（黒岩城跡）
出土古銭



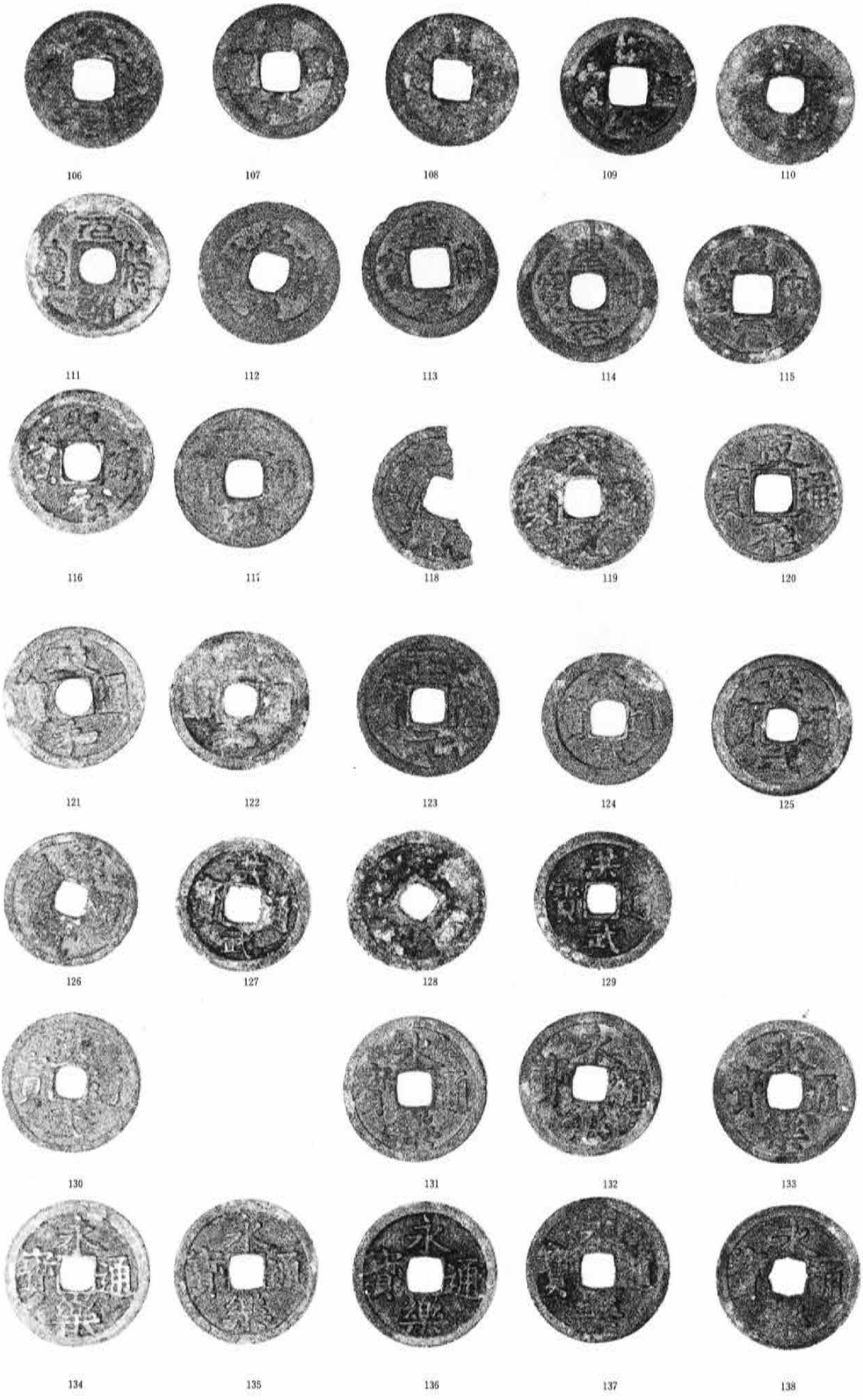
大井城跡（黒岩城跡）
出土古銭



大井城跡(黒岩城跡)
出土古銭

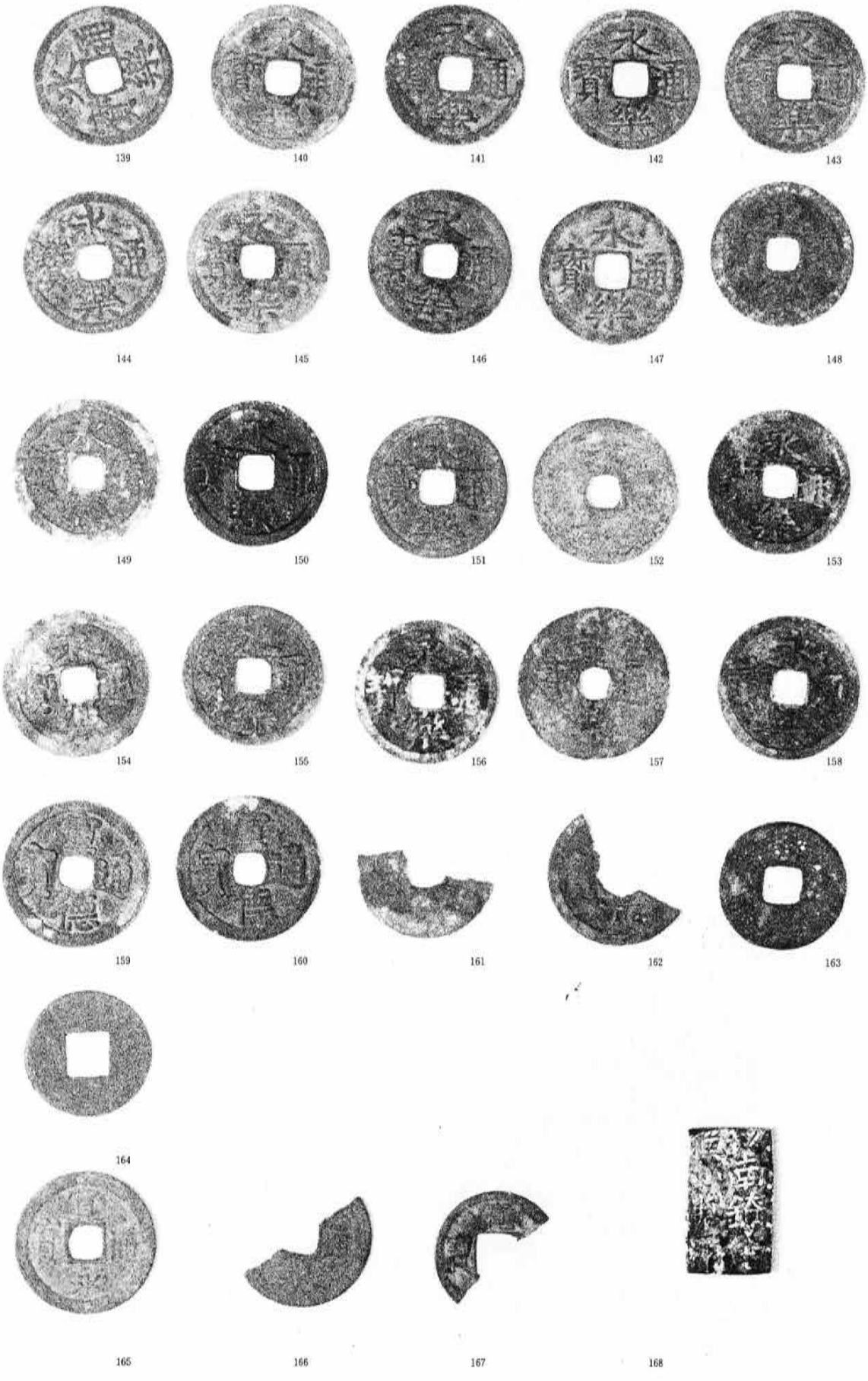


大井城跡(黒岩城跡)
出土古銭



106 107 108 109 110
111 112 113 114 115
116 117 118 119 120
121 122 123 124 125
126 127 128 129
130 131 132 133
134 135 136 137 138

大井城跡(黒岩城跡)
出土古銭



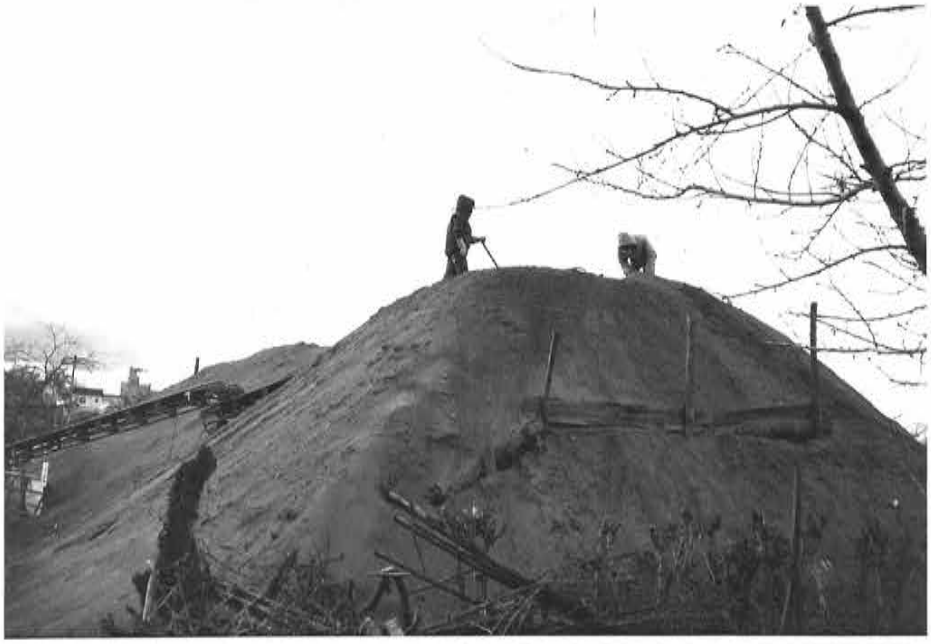
大井城跡（黒岩城跡）
Ta 4 出土古銭
（差97枚）

大井城跡（黒岩城跡）
スナップ

1　大井城跡(黒岩城跡)
おとし穴

2　大井城跡(黒岩城跡)
スナップ

3　大井城跡(黒岩城跡)
スナップ



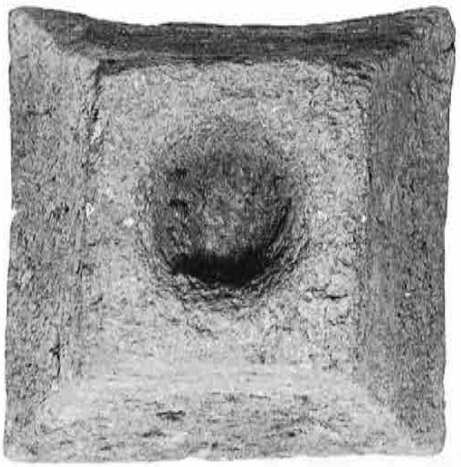
1　F_1 掘立柱建物址

2　F_2 掘立柱建物址

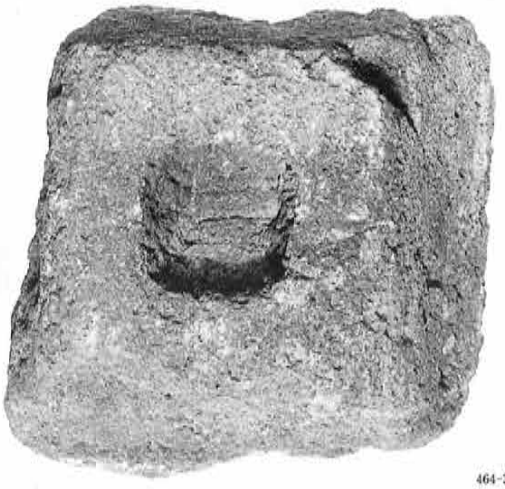
3　F_3 掘立柱建物址

1～6
大井城跡（黒岩城跡）
出土五輪塔

464-1



464-4

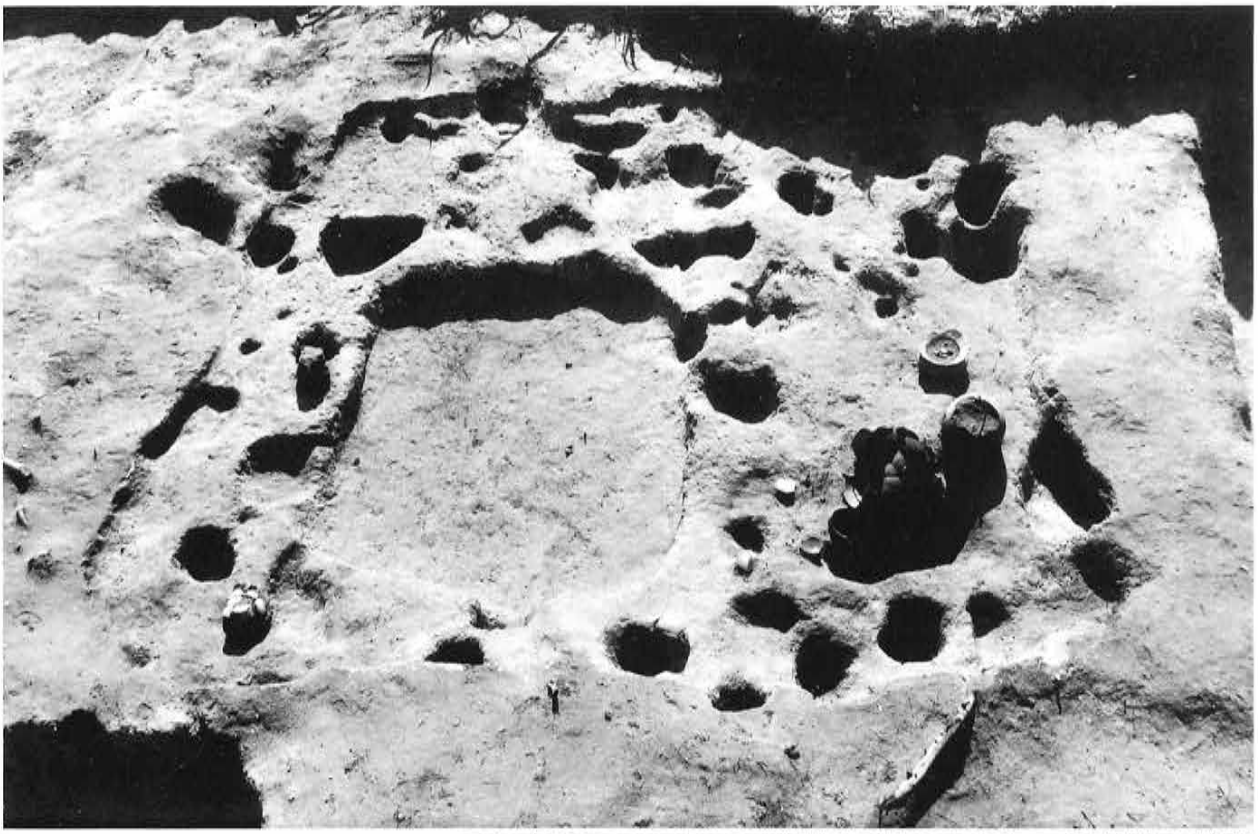


464-3

464-4

464-3

464-6



1　H１号住居址
（北方より）

2　H１号住居址
遺物出土状況

3・4
H１号住居址
出土土器

470-1

470-5

1～4
H１号住居址
出土土器

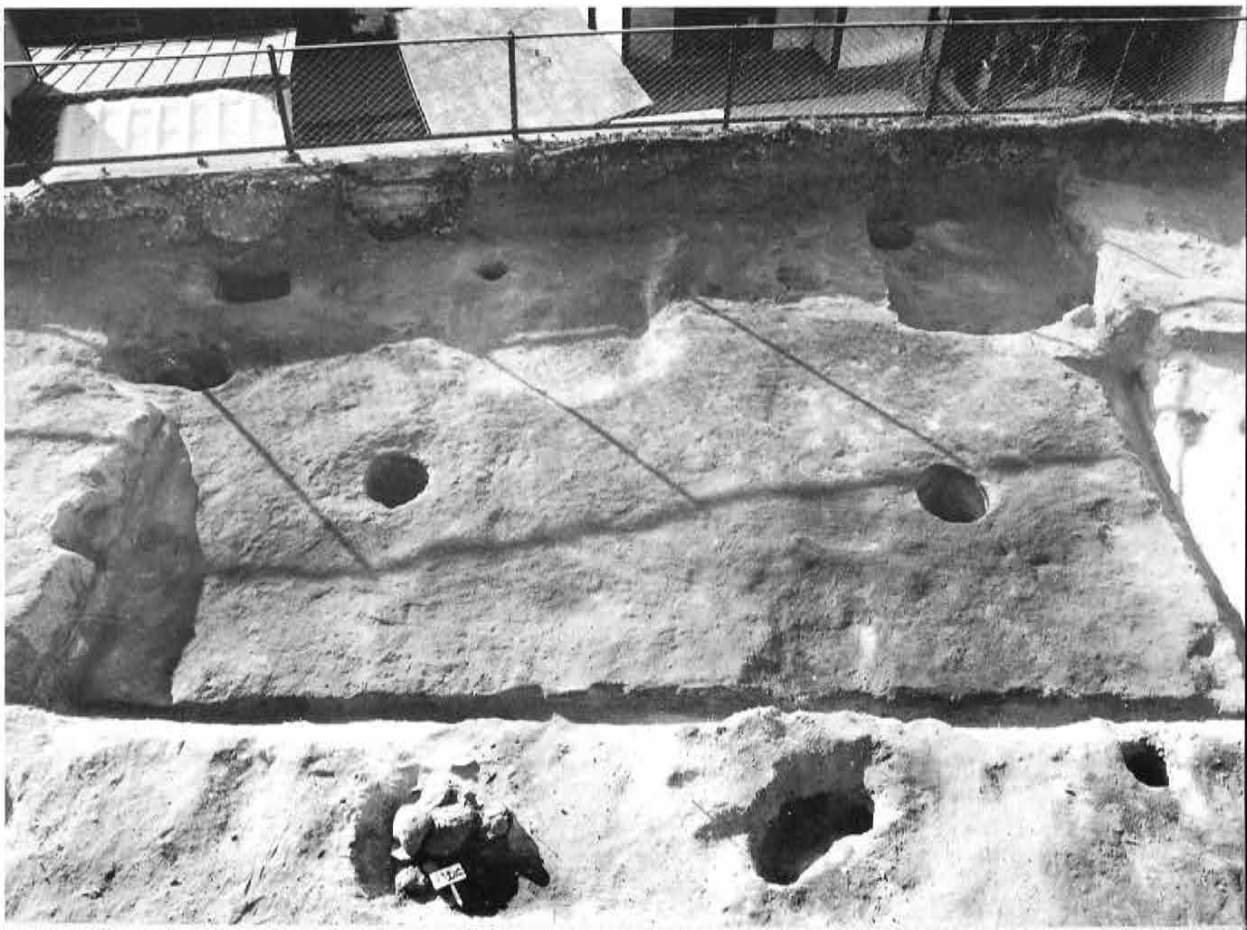
470-6

470-4

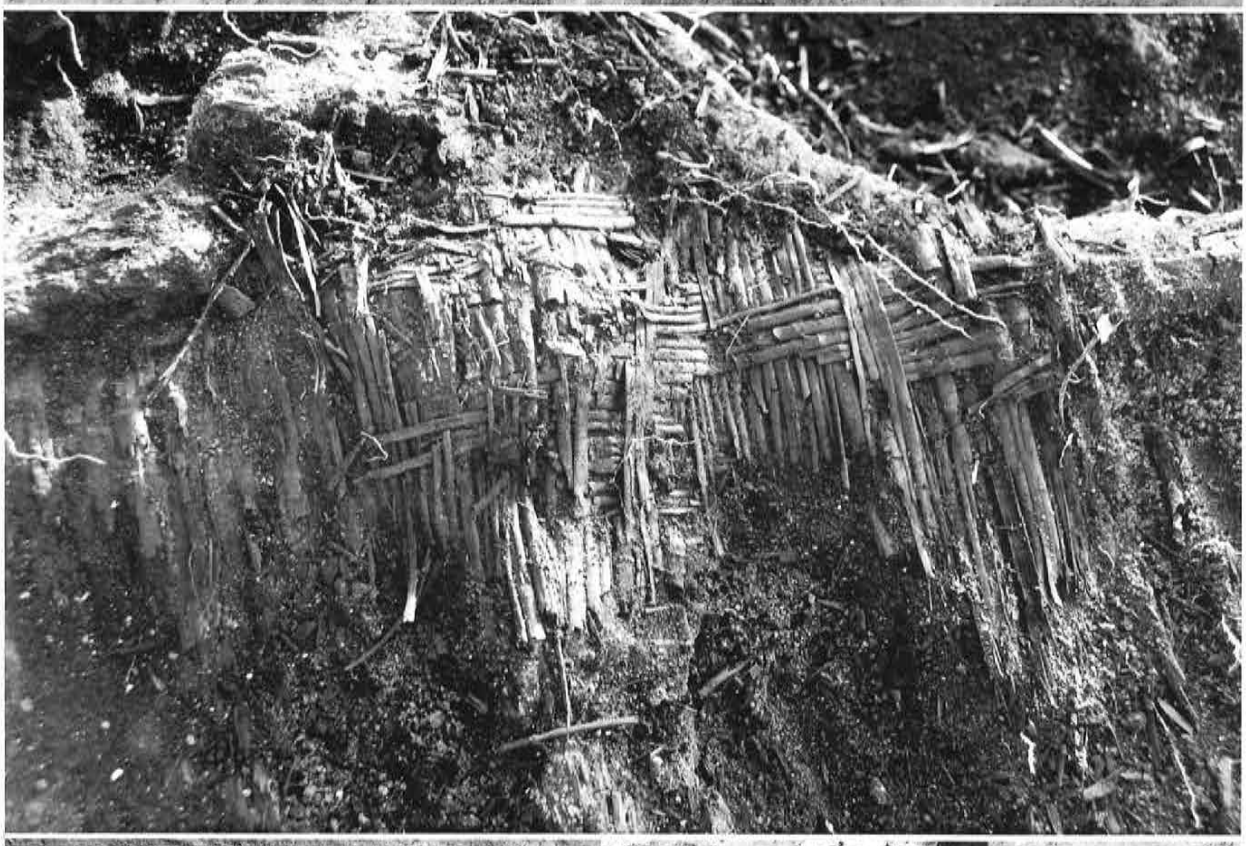
470-2

470-7

5　H２号住居址
（東方より）



1
H 2 号住居址
炭化材、遺物出土状況

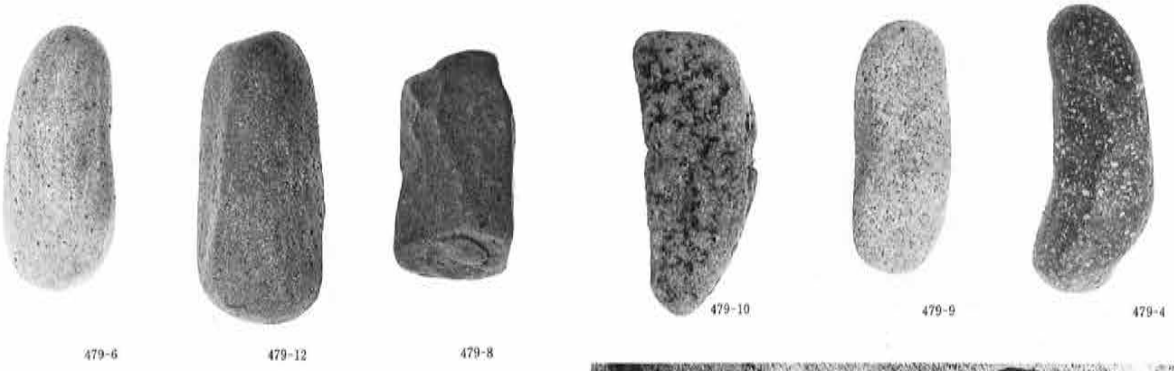


2
H 2 号住居址
炭化ヨシ出土状況

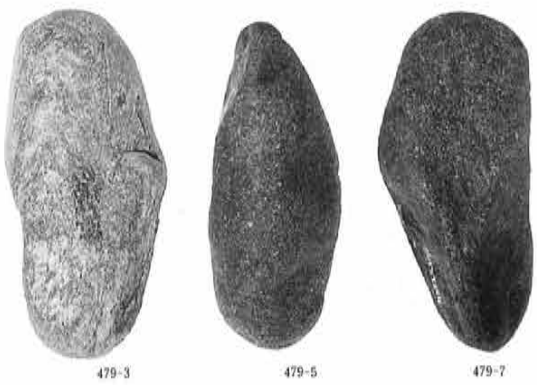
3・4
H 2 号住居址
遺物出土状況

1　H 2 号住居址
遺物出土状況

2　H 2 号住居址
出土編物石



3　H 2 号住居址
遺物出土状況

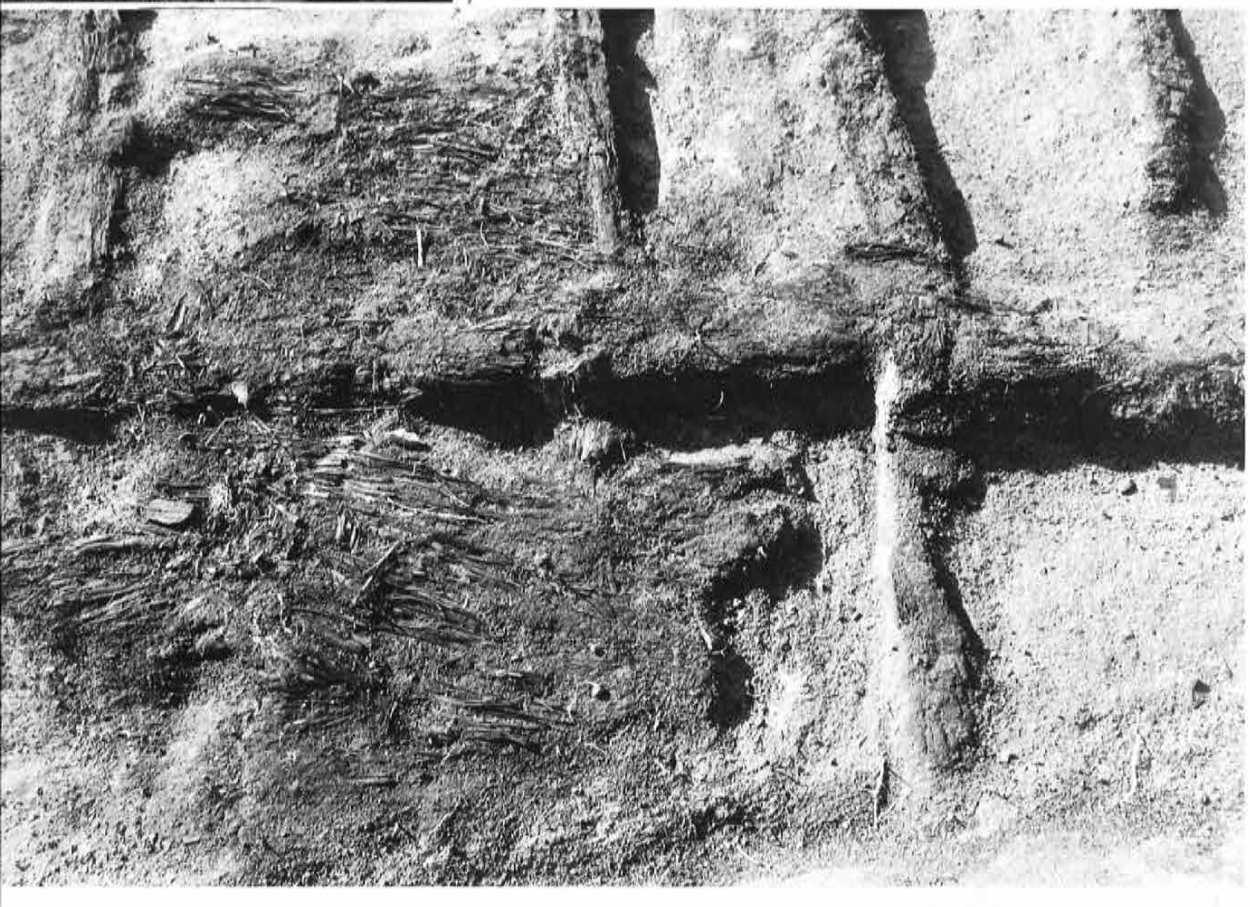


1　Ｈ２号住居址
編物石出土状況

478-2

478-3

2　Ｈ２号住居址
出土石製品



3　Ｈ２号住居址
（カヤ）出土状況

476-5

476-5

3・4
Ｈ２号住居址
出土遺物

1～8
H 2 号住居址
出土遺物

476-1

476-6

476-7

476-10

476-2

476-9

476-8

476-3

1～11
H 2号住居址
出土遺物

477-8

477-14

477-16

477-15

477-11

477-10

477-12

477-9

477-10

477-20

477-17

1～9
H 2号住居址
出土遺物

477-18

477-19

477-21

477-7

477-3

477-4

477-6

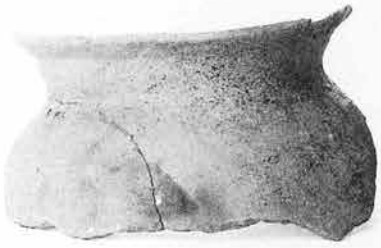
477-2

477-1

1　H３号住居址
（南方より）

2　H３号住居址
カマド

3～11
H３号住居址
出土土器



484-3

484-5

484-6

484-9

484-11

484-12

484-14

455

528-6

527-3

12　H３号住居址
出土石製品

484-13

484-10

527-1

478-4

527-2

1　Ｈ４号住居址
（東方より）

2　Ｈ５号住居址
（南方より）

3・4
Ｈ５号住居址
出土土器

492-1

492-3

492-3

492-5

492-6

492-4

1～4
H５号住居址
出土土器

5　H６号住居址
（北方より）

1　Ｈ７号住居址
（北方より）

2～4
Ｈ７号住居址
出土土器

496-2

496-3

496-4

1　Ｈ８号住居址
（東方より）

499-1

499-3

2・3
Ｈ８号住居址
出土土器

4　Ｈ９号住居址
（東方より）

1　H９号住居址
カマド

2　H９号住居址
遺物出土状況

3　H９号住居址
カマド

4～7
H９号住居址
出土土器

502-9

502-3

502-8

502-6

1　H10号住居址
（南方より）

505-2

505-1

2～7
H10号住居址
出土土器

505-3

505-4

505-6

505-5

1・2
H10号住居址
出土土器

3 H10号住居址
出土編物石

505-8

505-7

506-4

4 H11号住居址
（東方より）

5・6
H11号住居址
出土土器

509-1

509-2

1　H11号住居址
カマド

509-4

509-8

2～6
H11号住居址
出土土器

509-12

509-10

510-3

510-2

510-5

510-8

510-9

510-7

7　H11号住居址
出土石製品

1　H12号住居址
（北方より）

2　H12号住居址
出土遺物

513-2

3　H13号住居址
（東方より）

517-1

517-5

517-2

1～3
H13号住居址
出土土器

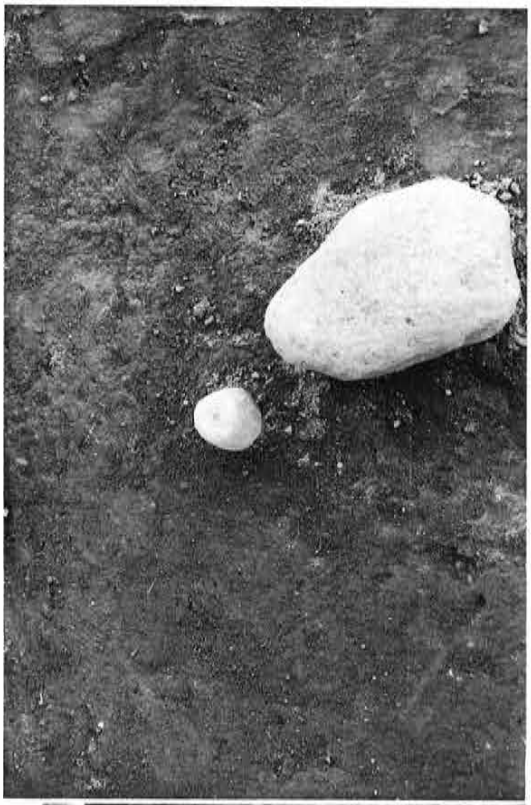
518-3

518-4

518-1

518-2

517-6



4　H13号住居址
出土石製品

5　H13号住居址
紡錘車出土状況

6　H13号住居址
出土土器

7　H13号住居址
管玉出土状況

1　H14号住居址
（北方より）

2　H15号住居址
（東方より）

3　H15号住居址
カマド
（南方より）

4　H15号住居址
カマド東側の
遺物出土状況
（東方より）

1　H15号住居址
カマド東側の
遺物出土状況
（東方より）

524-1

523-6

2～5
H15号住居址
出土土器

525-1

523-5

1・2
H15号住居址
出土土器

523-4

523-2

3　H15号住居址
遺物出土状況

4　H15号住居址
炭化材出土状況

523-3

5～7
H15号住居址
出土遺物

523-1

524-4

1～10
H15号住居址
出土遺物

525-2

524-2

524-3

524-15

524-10

524-8

524-12

524-14

524-11

524-7

大井城跡(黒岩城跡)
スナップ

大井城跡(黒岩城跡)発掘調査報告書

昭和61年３月31日発行

編集者　大井城跡発掘調査団

発行者　佐久市教育委員会

長野県佐久市大字中込3056
電話　0267－62－２１１１

印刷所　株式会社佐久印刷所